THE CENTRAL REVIEW

中央公論

六月號

第四十年　第六號　第四百四十八號

此廣告を見て御申込の方は中央公論愛讀者なる旨御申添を乞ふ

コレハ實よ 立派な目藥だ!!



理想的の眼病良藥

直治水

醫藥學の進歩に伴ひ、深遠なる學理と、數多の實驗から、絶對の偉効ありと信認せられたる直治水は、今や智識階級から盛んに實用せらるゝ、新時代の貴重なる眼科新藥である。

主効
- トラホーム
- やに目
- 雪目
- はやり目
- うみ目
- ち目
- かすみ目
- めくさ
- 星目

藥價 新式点眼器付 二十錢 三十錢 五十錢

●全國各藥店に取次販賣せり

本舗 大阪 東京 丹平商會藥房

猥褻なる廣告の申込みは謝絶す　中央公論社

村松梢風著

（平福百穂裝幀）

本朝畫人傳

中篇

四六判四百五十頁
繪畫六面入
定價貳圓八拾錢
書留送料拾八錢

大藝術家の全生涯を描破し些細な性格をも見逃さない鋭い觀察は繪を學ぶ人にも學ばざる人にも豐富な趣味と知識とを與へる。さきに出でたる上篇の世評は既に此大著の價値を決定したことと信じる。今回上梓の中篇には下記六大家をおさめ各々その傑作と稀覯の稿本とを掲出せり

中篇

製本出來

小形光琳　圓山應擧　長井雲坪

平福穗庵　河鍋曉齋　幸野楳嶺

上篇（三版出來）

價二圓五十錢　送料十八錢

渡邊崋山　田能村竹田　葛飾北齋

谷文晁　池大雅

以上五家の詳傳三百八十頁の長篇

東京長崎村外

中央美術社發行

振替東京四七六八二

▼説苑

坤輿


クラブ煉歯磨
便利で徳用で衛生的な押出式チューブ入の効力舶來品以上の煉歯磨であります
舶來品に優る優良煉歯磨
CLUB
DENTAL CREAM
クラブ煉歯磨
THEIMPER
TOILET CUB
耐久力三倍以上の
クラブ歯刷子



浮巣　　小川芋錢筆

大正十四年

中央公論

六月一日發行

六月號

第四十年　第六號

第四百四十八號

世事人事紛々擾々錄

○生死關門に立つて流轉の相を觀る

僕腎を病みて一室に籠居すること約半歳。――精確に云へば、大正十三年十一月廿四日より大正十四年四月卅日まで。此間の日數百五十八日。病ひは喘息を伴つて床上に横臥することが出來ず、一脚の椅子に腰かけて晝も夜も、苦悶し、呻吟し、少くも懊惱した。殊に晝比較的眠くしてウト〳〵するに反し、夜半より深更にかけて眼パッチリと冴えて、焦せれば焦る程眠りを就さず。足だるく、鳩尾苦しく、咳頻りに出で、妻を呼び起して、足を揉ませ、胸を撫でさせ、背を小擦らすこと、一夜幾回なるを知らず。連夜にして妻疲るれば長女之に代り、次女學校より歸れば専ら介抱の任に當つた。社員社務を以て會談し、二三の心友稀に室内に見舞ふことあるの外、一切の客を謝し、病閒あれば、或は讀書し、或は瞑想する。讀書は共鳴點多きを以て最も深く子規全集を愛讀し、樂々と讀める故を以て最も屢々默阿彌全集を手にした。「萬葉集古義」を繙いて、鹿持雅澄の如き篤學者あるに驚き、「近代劇大系」を讀んで、默阿彌との對照に興がる。而かも多くは頭腦ぼうとして氣分勝れず、根氣少しも續かざるには我ながら驚かされた。病勢時として急に昂進するや、俄かに醫師のA博士に報じて來診を求める。ヂキタリスを左腕に注射すること前後二回。前回に於ては、僕も到底恢復の見込なかるべきを思ひ、ノートの端し切れに鉛筆を以て遺言狀らしきものを認め、「見果てねど、また見厭きねど、わが夢は、四十三年意味多き夢」外二首の辭世の歌らしきものを書き添へる氣にさへなつた。

辭世の歌のことを書いた序に、僕の病中の歌を少し書き記して置きたい。大方の一粲を博するは、心中誠に忸怩たるものがあるが、當時の狀態を記念したい個人的の意味が半分と、最も眞實に當時の心情をいひあらはしてゐる意味が半分とから、歌詠みならぬ僕のぬたを陳列して見ることにする。蕪しぬたのぬたなく、手前味噌の最も鼻持ちならぬものであらうことは、當人最もよく先刻承知してゐる。

腎を病み喘息を病みて室の裡に閉ぢ籠り居れば人の世淋し

咳き入りていの寢らえぬに妻も寢ねず一間隔てし父も寢ず

病める我れを心にかけて年長なる女兒、早や引けにして家に歸りし

早や退けに歸りし我兒、肩を叩き、背をさすりつ、藥を飲ます
只一夜手足伸ばしてながながと寢床に寢なば樂しからまし

第一回の危機が去つた頃から、足に浮腫が來て、あの脛の太いのが最も眼に立つ東の大關太刀光（當時は西）の足のやうになつた。「足腫れの歌」數首を左に。

一日一日腫れのつのればわが足も見るの怖くて見ず過ぎにけり
足の腫れそつとさはればそとへこみ、ぐいとし押せばぐいと凹みぬ
脛太き西の大關太刀光、其脛の如くわが脛腫れぬ
足の腫れ日々に募れば足の皮の伸びる力にわれ驚きぬ
腫れ退きて押せど凹まぬやうにならば疊の上に足踏みをせむ

正月には梅の鉢植——紅梅と白梅とを一緒に植えた鉢を枕頭に置いて其寫生を試み、且つ例のぬた一二三。

白梅の花瓣は一重蕊は黃に、紅梅のそれは八重にして白
白梅は盛りとなれば花と花押し合ひて咲き枝見えずなり
白梅は盛りとなれば枝よりも雄蕊の數の目立ちぬるかも

二月に入つてからは棕梠竹の寫生に熱中し、約二週日の間、午前も午後もそれにばかりかゝつてゐた爲めに病勢を多少重らした程であつた。これにもぬた十首を題したが、其中の二三首。

腎を病みて二ヶ月餘り籠り居れば賓につくづくと倦んじ果てにけり
サツプ・グーリンに瀝青混ぜて描けども棕梠竹の葉の色の出難くき
繪を描きて歌詠み居れば春の日も暮れんとすらしかげろひにけり

三月に入つてから雛の繪を試みたが、ものにならなかつた。併しぬたは十五六首も出來た。其中の數首。

長女生れし初節句より十九年ひゝなの數は百に餘れり
七段の緋の毛氈の雛壇のひゝなの數は百まりむつ
遙ろけくも年經しものか妹等と雛遊びせしは三十年の昔
三十年の昔憶へばわけもなく、たゞわけもなく淚し流る

百燭の電氣ひねれば雛壇の雛々の顔輝きにけり

四月に入つてから僕の苦悶は絶頂に達した。腎臓病は寒い中は駄目な病氣たことは分つてゐた。それに今度のは從來のゝに比べて遙かに重かつたから、二月一ぱいは到底外出出來ぬだらうと云ふことは、床に就いてから間もなく自分でも諦めた。A博士は「まア三月一ぱいは駄目ぢやらう」と云ふので、「三月一杯！」と驚くと、「ぢきぢや。三月といふてもすぐ鼻の先ぢや。もうちつとの辛抱ぢや」とA博士は其得意のぢやを連發した。併し生れて初めて百日以上を一室に籠居する僕に取つては三月と云ふ月はなか〳〵鼻の先ぢやなかつた。隨分退屈な、永い〳〵月日だつた。十五年前輜重輸卒に取られて除隊の日を待ち兼ねた時と同んなじ「日の長さ」だつた。併し其長く〳〵待ち詫びた三月の末もたうとうやつて來た。病氣は捗々しく快い方に向つたとは思はれなかつたけれども、四月と云ふ聲が掛つたら、病氣も頓に癒り、陽氣も急に温かくなるだらう。さうすれば花も見らるゝだらう。社にも出られるだらう。逢ひたい人にも逢へるだらう。四ケ月以上も籠つてゐた、電氣ストーヴの熱氣に煮れ切つたやうな室を出て、ホカ〳〵した春の外氣に觸れた丈けでも救はれるだらう。——斯う思ふと　心は誰謨鞠の如くはづんだ。眼の先が明るくなつた。急に床屋を呼びにやつた。百廿日以上も延びるに任せた髮と鬚を刈つたり剃つたりしようと云ふのだ。一寸鏡を覗いて見た。髮は千日髮のやうに嚴しく延びずして、鬼界ケ島の俊寛の如くもぢや〳〵と長くなり、鬚は庵室の清玄の如く汚なく生えてゐた。第一林檎のやうだといはれた、紅く圓々と太つた頰の肉は、ゲツソリと疲せ落ちて脊くなり、眼の廻りの皮はたるんで、自分でも自分の顔と思はれぬやうに變つてゐた。正月の新聞に其訃を報ぜられた洋畫家の中村彜氏の肖像（遠山五郎氏筆）によく似てゐるやうに思はれた。記念の爲めに寫眞を撮つて置かうと思つて寫眞屋を呼びにやつたが　床屋が間もなくやつて來たので廢した。湯に入ることは最も禁物で、外出出來るやうになつてからにした方がいゝと云ふことをA博士から云はれてゐたので　熱い湯で、足を洗ひ、身體を一通り拭くことに止めて置いた。

髮を刈り、鬚を剃り、身體を拭くと、氣分はさつぱりした。翌くる日A博士に報告旁々その診斷を受け、「四月一日」から外出したき旨を申し出でた。A博士は眼をむいて、「ナニ、四月一日から。いかん。いかん。そんなことをしては大變ぢや。どうして、どうして。外出などまだ〳〵出來るものか。四月一ぱいは駄目ぢや。まア五月になつたら陽氣も定まるだらう。腎臓病ほど陽氣と關係ある病氣はない。寒かつたり、温かかつたり、此頃の

やうに毎日〱變化してゐる陽氣では、此病氣は最も警戒を要する。今度しくじつたらゐんたのは取り返しがつかんぢや。五月と云つても鼻の先ぢや。もうちつとの辛抱ぢや」と又しても「鼻の先」と「ぢや」が出たけれど、僕は可笑しくもなかつた。心が急に沈んで、眼の先が暗くなつた。そして激昂して、聲を震はしてA博士に喰つて掛つた。「四月から外出出來ると云つたのはアレは嘘か」「半歳近くも一室に閉ぢ籠つて、何にもし得ずに活きてゐる丈では人生は全くの無意味だ。」其他いろ〱の理屈を並べた上、たうとう「癒らなければ癒らなくてもよい」「死ぬなら死んでもよい」「斯うして生きてゐる位なら死んだも同んなじだ」とまで言ひ放つた。博士は「病氣が永くなると、自棄(やけ)になるのは、あんた丈けぢやないんぢや。みんな同んじことを云ふんぢや。アハ、、、、。さう云ふのは病人の心理狀態ぢや」と笑つてゐた。

此日より僕の心は從來(これまで)よりも更に沈んで暗くなつて行つた。「四月一日」と云ふ日は、暗い空に輝く一つの星であつた。暗い空の下の暗い途を辿(たど)る旅人にも似たやうな僕の心は、只此星を仰ぎ見ては、一日〱と其惱ましき日と夜とを辛じて送り迎へてゐた。然るに今や其只一つの星さへも光を消した。天も地も只眞暗闇になつた。十二年間見續けて來た國技館の春場所を見られぬことは、一つの大きな打擊であつたけれど、之は諦めるより外はないと思つて諦めた。併し今度は花も見られぬことになつた。四月になつたら逢へると信じてゐた人にも逢へなくなつた。それに其人は四月になつたら贔屓客の人々と共に關西の花見に出かけると云ふ知らせは一層僕の心の闇を濃くした。「どうでもなれ！」と僕は叫び續けた。物を讀む氣は全く無くなつた。歌を作る氣も繪を書く氣もなくなつた。物を考へることも厭だつた。考へれば厭なことの外は考へられなかつたから、考へることは最も厭だつた。「國譯大藏經」を出して讀んで見た。虚無的な心と共鳴するものがあるかも知れないと思つた爲めなのだ。けれど共鳴所が少しも分らなかつた。「譫言を云ふな」と怒鳴りつけたかつた ソレで人が死んだ時に坊主が讀み上げるお經の節を眞似(まね)て、聲高く讀んでやつた。「ア、厭だ！、およしなさい！」と妻は云ふ。僕はわざと意地になつて一時間も續けてお經の眞似をする。さうして「坊主になつてお經を上げようかな」、死んで坊主にお經を上げて貰はうかナ」と云つて妻をいやがらしてゐた。そして成るべく眠らうとした。朝から夕方にかけてはウト〱眠れた、其代り夜は眠れなくなつた。人の寢靜まる頃には最も眼が冴えて、ウン〱呻りながら二時を聞き、三時を聞き、一番雞を聞き、二番雞を聞き、そして朝飯後にはまたウト〱した。

僕は自分の病狀報告書を書く積りではなかつた。病中に感じた世相人事についての觀察を書く積りだつた。併し徹頭徹尾個人的の病狀報告書になつて了つた。勿論、人の人間の生活記錄は、全然無意味であり得ない。又ある雜誌の編輯者の自身について語つた言葉は、よしそれが個人的のものであつても其雜誌を讀む人にとつて多少の參考にはなる。と强辯して見やうと思つたが、要するに矢張り强辯には相違ない。僕は全く最初に此文を書かうとする目的から、橫路へ入つて、邪徑へ邪徑へと深入して了つたのである。今更ら本道へ復つて、書き出したら本誌の二三十頁は埋つて了ふかも知れない。それに生活記錄など云ふ勿體振つたことを云ふものの、勿論上つ面丈けの事で、もつと深い事は小說にでも書くべきであらう。少くも自叙傳の一節としてでも書くべきものであらう。併し此百五十八日間に感得した、若くは體驗した病氣と云ふもの——從つて健康と云ふものゝ意味、生と死との境ひ目　親と子との因緣、夫婦の愛と憎み——心と肉との相關——所と時とを隔てた異性との心の交錯、草木の榮枯、(枕頭のいろ／＼の植木鉢も幾度か花咲き、又枯れた)生物の生滅(池の鯉は寒さの爲めに半ば死に、父の飼つてゐる鷄も金糸雀も數羽の雛を孵した。)併し何よりも痛切に人間の孤獨と人生の寂寥。人事の變轉と萬物の流轉。——壯健にして馳けづり廻つてゐた時には却つて見逃し勝ちないろ／＼な隱れたる人心の神秘。最初に書かうとした此等の事に少しも觸れることなしに此文を終るのは僕自身でも全く意外であるけれど、此等のことは或は銘々の鍵を以て、銘々に開いて見るべき秘密の庫であつて、人に見すべきものでもなく、又見せられた他人も迷惑すべき性質の事柄であるかも知れない。

　五月一日は來た。僕は醫者に相談をせずに外へ出た。社へは一番に顏を出した。逢ひたいと思つた人をも訪ねて見た。二三日して鯉屋へ鯉を買ひにも出かけた。五六日して錦島部屋に角力の稽古も見に出かけた。僕の窶れて變り果てた容子を見て、泣いた妹もある。蒼くなつた上さんもある。眼を丸くして口を利けなかつた友もある。こちらから言葉をかけるまで、「悉皆見違へて了つて分らなかつた」と云つた人もあり、又言葉をかけても知らん顏をしてゐた人もある。逢ひたいと思つてゐた人なども、「驚いた！。丸で見違へて了つた。氣味がわるいやうだ」といつて顏を一旦紅くして、それから蒼くなつてゐた。「紅く太つた人が、蒼く細くなつたんだから、總てが反對な譯だ」と、僕は逢ふ人每に得然らしく云ひつゝある。(此項一般讀者には甚だ申譯ない個人的の記事にな

つて了つた。病中屢々見舞の手紙を寄せられた友人知己及び未見の讀者には此文を以て禮狀代りとする)。

○後藤子の焦り振りを憐れむ

近時の我政界の事、紛々擾々また云ふに忍びざるものがある。其出處進退理義に據るにあらず、其離合集散政見に因るにあらず。附熱隨炎只利のある所に趨き、時鳥候鳥只勢の可なる所に轉ず。餘りの馬鹿々々しさ餘りの情なさに、眞面目に批評したり、論難したりする氣にはなれない。政友會への合同騷ぎ。それに對する憲政會側の猜疑嫉視から出る皮肉。政友本黨の狼狽恐慌から出る負け惜み。どれもこれも眼も當てられない體たらくだ。そしてどれもこれも皆手前味噌を並べて、「我黨内閣は少くも次の議會通過まで安全」とか、「今秋までには我黨は第一黨に」とか「次の内閣は必らず我黨に」とか、實にいゝ氣なもので、丸で小兒の喧嘩のやうな事をいひ合つてゐる。自己欺瞞か、誇大忘想か、但しは低能か。我々には到底正氣の沙汰とは思はれない。だから僕は、近時の政界を批評論難するの興味は悉皆失つてゐるけれど、此間にあつて、些か僕の心を動かす二つの事件がある。一は後藤子の、政界の表面に躍り出したいと云ふ其焦り振りと、一は犬養翁の政友會身賣り事件である。共に人間味を少からず含んでゐるからである。

田中男が、陸軍大將の現役服を脱ぎ、サーベルを腰から取り除け、袴羽織の和服姿で、政友會總裁の椅子に据つたと云ふ報知に、最も深い衝擊を受けた一人は、恐らく當時露國訪問中の後藤子であつたらう。「後藤子急遽哈爾賓に引還す」「後藤子○日に敦賀に入港す」「後藤子○日入京に決す」など云ふ電報は、僕等には何の關係のない事柄だけれど、又當人も成ろべく平氣を裝うて「田中男の政友會入りは當然」などと、胸中閑日月あるもの ゝ如く見せかけようとしたらしいが、心を割つて見れば、彼れ及び彼の乾兒共の焦慮焦心は一方でなかつたらしい。「田中の奴出し拔いたナ」位の手緩るい氣持ではなかつたらしい。田中の投じた一石の波紋は、水上に泛々たる數多の木片に動搖を與へたが、最も之を大きく銳敏に感じたのは後藤子であつたに違ひない。

普選が通過した今日、普選によつて勞働黨の出て來るべきは、妊婦月滿つれば嬰兒を分娩すべきと同じ確かさを有つ。初めから相當の勢力を有つべきか、はた相當の勢力を有つには相當の年月を要すべきか。今の所ハツキりしないけれど、後藤子の如き、多年政界に活動した大頭株が其中心となれば、直ちに一大勢力となるに相違ない。——之が彼の乾兒共の考であり、最も彼の考へであるらしい。そこで、勞働黨の首領といふ考が電の如く彼

の頭腦に閃く。勞働黨の天下、勞働黨の首領即總理大臣！。

併し待てよ！コリヤなか〳〵の大仕事だぞ。第一勞働黨と國體の關係はどうだらう？、イヤコリヤ心配はあるまい。しだが、樞密院、貴族院のウケはどうだらう。イヤ〳〵。勞働黨の天下になれば、彼等は啞か聾になる外はあるまい。此方はいゝとして、肝腎な事は御本尊の無產階級の勞働黨議員先生の操縦方ダテ。俺も人を使ふとには十分自信はあるが、臺灣や滿鐵で金を呉れてやつた手合のやうには行くまい。矢張り金に動くだらうが、人數が多い丈け大分の金が要るだらう。併しさう大した金は今の俺には……。田中め、兒玉の拵へたあの金を……兒玉は俺の親分だぞ……。愚痴はよさう。兎に角之は危ない橋だ。渡り損じると取り返しがつかん。もつと安全な途はないかナア。オット、ある。ある。

床次は大分弱つてゐるらしいナア。正直な男だが、智惠がないから可哀さうに。こゝならば勞働黨の首領になる三分の一も金を出したら、これこそ全黨一致で俺を迎へるだらう。併し俺を總裁として床次を副總裁と云ふ譯にも行くまい。床次の下に副總裁となることは俺もイヤだ。昔は左大臣右大臣と云ふものがあつたナ。左總裁右總裁マサカ、アハヽヽヽ、あの時だつて、矢張り關白なり太政大臣なり上にあつての話だからナ。オヤ、伊東も此頃田中が百萬や二百萬出すなら俺だつて出すぞと云つたとか何かの新聞に出てゐたぞ。併しアリヤ例の新聞記事だけだらう。伊東は實際ケチだからナ。イザとなれば十萬だつてどうだか。俺に伊東の半分の金があつたらなア。……それよりも床次と形式上並び立つて、政友本黨を踏臺として政權の取れる途はないか。俺は實際國家の爲めに一仕事をしたいのだ。少くも外交方面丈けでも日露親交を基礎として、支那を抱き込んで、東洋永遠の平和、日本の大陸政策を確立したいのだ。勞働黨首領？政友本黨總裁？之は俺の力では出來ん。所謂運賦天賦だ！。

凡そ勞働黨の主張と、今の政友本黨の主張（？）ほど違つたものは世にあるまい。文字通り、極左と極右、北極と南極だ。それをどつちへでも早變り出來るものと思ひ する氣でゐるんだから、便利なものだ。

實を云ふと、後藤子は昔、僕の贔屓役者の一人だつた。同じ東北で、あの訛りにも一種の親しみを感じた。錦織の昔より多少の謀叛氣もあり俠氣もあつた。才氣は勿論あつて、いろ〳〵の劃策の出る人である。桂のやうなものがゐて、巧みに制御すれば普通以上に役に立つ男である。併し桂沒後の彼れは傀儡師に離れたる傀儡の如く、どうも活動出來ない。活動すれば、輕擧妄動で、筋が皆違ひだ。東京市長、復興院總裁、私的日露交渉

委員長何だか皆尻が結ばらない。

彼の少年團長とかの寫眞は、何時でも最も僕を笑はせ、又悲ましめる。頑丈な立派な體格ではあるが、髪も鬚も眞ッ白になつて、腰も少し曲りかけてゐるのに、銃や劍で武裝して、例の三島章道子や大勢の子供等と一所に撮つてゐる寫眞は、全く滑稽と悲慘の玉蟲色だ。

あれ丈け總理大臣になりたがりさうに見え、世間でも一度位はなるだらうと期待した人が、段々時勢から遠かつて、勞働黨でも、政友本黨でもどつちでもいゝから、兎に角首領になつて、天下を取りたいと焦りに焦る樣を見ては、人間の煩悶其物を見せつけられるやうな氣がして悲しくなる。而かも少年團長として遂に此の世を終るべきを思へば。……

犬養老の政友會身賣りに同情す

犬養老の政友會身賣程、世間の冷嘲熱罵の的となつてゐる事件は、今の日本の政界にも珍らしい。「憲政の神様の末路」とか「四十年の淸節とは之か」とか「政治道德頽落の標本」とかいろ〳〵の批難があるらしい。併し初めつから「神様」とも思はなつたし、所謂「淸節」をも信じなかつた僕には、今更ら意外でもなければ、勿論失望などはしない。却つてアベコベに、彼の人間らしくなつたのを認めて同情するものである。所謂鳥の將さに死せんとするや、其鳴や哀しく、人の將さに死せんとする、其言や善しで、四十年間、表裏多く、譎詐多き政界を巧みに表裏に出入し巧みに譎詐を弄用して、其旋毛曲りの性格を立て通して來た、隻眼瘦骨の此翁も、其七十年の長き生涯の大詰の幕に近いて、流石に斷末魔に類する悲痛なる告白をせざるを得ざるに至つたことを思へば、僕は却つて一掬同情の涙無きを得ざるものである。

僕は近來わが政界の記事を讀むを慵しとするもので、從つて犬養老の悲愴であつたらしい演說も讀まなかつた。併し自然に眼に觸れた記事から想像すると、「金が無ければ政黨首領の勤まらぬ事」「自らは今や老耄して其金を作る力なき事」「黨員を此上自らの麾下として、政界に浮ぶ瀨なきに至るを默視するに忍びぬ事」等を並べて、遂に政友會身賣りが自ら及び黨員を救ふ爲めに止むも得ざることを述べたらしい。何たる憐れな悲しむべき告白であらう。之を彼の小泉策太郎などが、「政黨首領問題 を今の問題などと結び附けるのは怪しからん」などシラを切つて居るのと比べれば勿論、同日の談でない。

若し文藝復興運動が、人間を、神性より人性に卸して、人生問題を解決する途を拓いたものとすれば、自然主義運動は、人間を、人性より獸性に卸して、人生問題を處理する事を教へたものといへる。古昔に於ける人間研究は、神學に初つたが、現代に於けるそれは生物學から初まらねばならぬ。ナニモ神性を卑しむのではない。獸性から出發して、人性に到り、人性を土臺として神性に到るにあらざれば、空疎にして一顧に値せずと云ふのだ。今の文壇人や思想家や、若い人達は、少くも此自然主義運動の洗禮を一度は受けてゐるが、我が政治界の人人は、お年の可減か不幸にして此洗禮を受けてゐない。だから、人間の行動の動機を、其根元に立ち復つて詮索し反省して見る能力がない。自己の名譽や利益にする事も、みな天下國家の名を冠らして恬として怪まない。勿論自然主義運動も、すべての運動の如く、其れに伴ふ中毒は殘した。人性の底には獸性がある。だから獸性が正しい。獸性で滿足してもよい。其他のことは僞善だといふやうな似而非論理を信じて、其害毒にかゝつたものも少からずある。併し愚かならざるものは、人間に於て、獸性の人性に發達したのを觀た。又神性に發達し得べき可能性をも觀た。之が自然主義の人生に對する一大貢獻であると僕は深く信じてゐる。犬養老は、其息子に小說家を有つてゐるから自然主義的の人性觀を聞いたことがあるかも知れないが、其頭腦は硬化してゐるので恐らくは何等の剌戟感化を受けなかつたらう。併し彼の今度の告白は自然主義的臭味を有つ。之れ一般政界から悪口をいはれても、自然主義の洗禮を受けた僕等からは、却つて同情を有たるゝ所以であらう。

（横綱栃木山の引退を惜む

大正十四年五月十二日即ち國技館に於ける夏場所の開始に先つこと二日、横綱栃木山は突如廢業届を相撲協會に出して引退した。

彼は體格强健にして力强く、肩上と兩腕の肉瘤は隆々として、遙かに運慶作る所の金剛力士像を凌ぎ、而も角力上手にして、序の口へ附け出されてより全勝又全勝、序二段、三段目、二段目、十兩と、駈け足で飛び越して、入幕する迄に、確か三番位しか負けなかつたらしい。大正四年一月場所に入幕してからも、負け越した事は一回もなく、最も不成績なりし同年五月場所に於ても負け四つ、あとは三度以上負けた事がなく、全勝十回、十附かず六回。殊に大正九年五月場所以來は一回以上負けた事なく、本年一月の春場所も清瀬川と分を取つた外十附かずである。大正十二年五月場所、協會に對する不平で三日目より休場せる外、一場所も休場せることなく二時

事新報」の優勝額を國技館の天井に掲ぐること實に九枚。近世の最强力士太刀山と同數である。太刀山は鐵砲を以て對手方を近けざるに對し、彼も亦左を淺くのぞかせ右筈一氣に敵を押し切るの戰術、正宗の銘刀の如く、殆んど十中七八討ち損じることとなし。若し萬一敵の右手自己の褌にかゝれば左手を以て絞り出し、右より强引に突き落しの力業。小禽を掴む猛鷲の如し。自己の勝手よきやうに角力を取つて、敵に角力を取らしめざる丈けの力と術とを兼ねたるは、角界稀に觀る傑物と云はざるを得ない。大錦が大力士らしき面魂の持主なるに反し、彼は角力取を以て滿足するが如きも心中毅然奪ふべからざるの操守を失はず。大錦が慈善社會事業等に寄附して、自ら誇る所あるに反し、彼は所謂「鍋をかけて」自分も飲み食ひ、仲間のものにも盛んに御馳走す。彼れは地方巡業中も所謂「端紙をいれる」（前借傳票を書くこと）の親玉と聞く。だから東西に一人の敵なきこと（土俵の上にあらず人物と交際の上で）古くは海山（今の年寄二所ノ關）近くは伊勢の濱（今の年寄中立）の外彼れだけださうだ。

彼は頭髮こそ禿げて五十近い老人と見ゆれ、年齡未だ三十四歲だ。峠こそ超したれ　まだ降り坂と云ふ程ではない。もう三場所四場所は十分に取れる。掲ける積りなら優勝額はもう三枚は掲けられよう（太刀山は十二枚掲ける希望であつたが出來なかつたと噂される）

併し散るを惜まるゝのは櫻だ。江の島からとれる櫻貝のやうな花瓣を地上にしッきりなしにハラ／＼と散らすあの哀れにも美しい風情はどうだ。死して惜まるゝのは武士だ。鐵漿黑々とつけ、兜の裏に名香を炷きしめた若武者のニッと笑つた死顏が、母や許婚の娘の手に抱へられる愁嘆場はどうだ。

「横綱は强い者だ！　弱くなつてから横綱を廢めたくない！」此一言はどうだ。櫻の散り際　若武者の死に際に勝るとも決して劣るものではない。彼の引退の決心は大震災前からださうだ。併し復興援助と云ふ協會の懇請に前場所まで土俵を勤めた。而かも今場所はどうしても引退すると云ふ決心は　協會も親方も枉げる力がなかつた。それにも拘らず、彼は場所の開ける二日前まで稽古場に下りて稽古を附けた。横綱は弱くあり得ないと云ふ彼の信念からださうである。彼は全く見上げた男だ。

彼の引退を見て、我政界其他の方面の事を考へれば　彼に對して慚死に値ひするもの多々あるべきを思はざるを得ない。（大正十四年五月十四日大角力初日より同十六日三日目まで角力見物に出掛ける前の朝の時間を繋ぎ合せてT　T生）



政黨軍閥に降服す

——普選と政治上の新勢力の組織——

法學博士　渡邊鐵藏

(一)　護憲運動の收穫

大正十三年五月の總選擧に際して、憲政會、政友會、革新俱樂部の三政黨は所謂護憲運動を標榜して之れに臨み、普通選擧、貴族院改革の二大政策を此運動の旗幟として奮鬪し、其旗幟の効能が何れ程顯著であつたかは明確には云ひ難いとしても、兎に角相當の影響を與へたものに相違ないことは認め得られるのであつて、結局憲政會が最大政黨となり

政友會もかなりの成功を以て總選擧を終つた。總選擧に際して、三派の協調が案外に鞏固に保持された爲めに、護憲運動の成功に重大な効果のあつたことは勿論であるが、此總選擧に於ける護憲三派の勝利は、當然政友本黨を支持者とする清浦内閣の倒潰を來す結果となつたが、新内閣の組織に當つては三派の協調が果して總選擧の際の如く維持されるや否やは疑問とされて居た。然るに政友會も護憲運動の言質と、自黨目前の勢力維持の關係等に左右されたものか、兎に角加藤高明氏に下された組閣の敕命に對して、憲政會と共に最近に主張した政策の實行に努力する責任を以て、高橋總裁其他の入閣を決定して、革新俱樂部と共に所謂三派聯立の護憲内閣を組織した次第である。護憲運動に關しては、一部に其動機の不純を非難する者があり、殊に政友會が從來普通選擧に對して居た態度を豹變した事、又貴族院、殊に研究會の勢力に迎合することは自ら其元を培つたものであるにも拘らず、一朝地位の變化すると共に、直ちに貴族院に對して鉾を向けた事に就いては、勢に乘じ、機を見るに敏なることを以て政治的勢力を獲得する最も悧巧なる手段でありとすれば、政友會の古武者の執つた此戰略は確かに成功と云ひ得るが、其早業に對しては、新主張の善惡如何に拘らず、政黨として節操なきものであるとの非難は全然之れを免れることは出來まい。憲政會としても、野に在る時には普通選擧に關して獨立生計說を主張しながら、護憲運動に際して一擧にして無制限選擧に飛躍し、從つて組閣後の政府案として此方針で進んだ動機に就いては世間に多少の疑惑もある。彼の歐洲大戰爭の好景氣時代に政友會が多年政權を占めて獨り天下の大得意の狀態に在つた際、利權を漁つて飽くことなしと國民から猛烈なる非難を被つて居た當時の政友會内閣を顚覆するために、便宜の手段として普通選擧を唱導したか、若くは純理上、又我國の政治の實情及び國民の政治的能力等より推して、當然普通選擧に猛進すべきものとの確信を以て進んだものであるかに就いては、固より一部に於て疑惑を以て見られる點であるかも知れぬが、此點に於ける動機の如何は政治道德より考へてもそれ程嚴格に批評すべきもので

もなからうが、當時獨立生計説を主張しながら、朝に立つて直ちに無制限選擧と云ひ得る程度の急進的な政策を主張した點に關しては、此主張の變化の間には僅かに數年の期間しかないことであるから、樞密院、貴族院等の方面に於ても相當道理と思はれる非難もあり、當局大臣も此點の説明に關しては、熱心な努力を拂ふに非れば十分の諒解を得ることが困難であつたやうに思はれる。併し憲政會の普通選擧案支持に關する弱點は此程度に止まつて、政友會の豹變的態度の如く嚴格な批判に逢ふべき程のものではないとも云ひ得る。最も勇敢に政府の普通選擧案を堂々と支持し得る立場に在つたものは云ふ迄もなく革新俱樂部丈けである。此樣に所謂護憲内閣の第一の重要政策に關する普通選擧に對する護憲三派の從來の行掛り、現在の立場に種々の相違のあつたことは、此問題の政治的解決に重大な困難を伴はしむべきことは固より豫想に難くない。所謂護憲内閣は三派の聯立であること、殊に其中の二大勢力が從來國民をして不倶戴天的の仇敵であるかの如く思はしめる程激烈な黨爭を續け來つたものであり、就中政友會の護憲運動に參加した眞意が、單に自黨の目前の不利益な地位を即座に轉回し、其勢力の維持を計ることにあつたものとなし得るならば、政策に關する主張の異同如何を問はず、單に黨の利害に關係ある事情の發生すると同時に直ちに内閣の結合は破壞され得る狀態に在るものと云はねばならぬ。此三派鼎立内閣の三本の足の中、其少くとも一本は協同の政策を盛つたる鼎を支持するに就いても、必しも此鼎と死生を共にする決意あるに非して、或る一本の足が足として獨立の歴史と利害を有する關係上、自ら獨歩する利益若くは必要を認めた場合には、何時でも鼎を見棄てゝ其顚覆を顧みざるものであることは、何人と雖も想像する處である。之加斯かる怪しげな足を具へた鼎に盛られたる共同の政策の中、最も重要な普通選擧に關して、前に述べた如き重大の立場の相違が三派の間に存在せりとせば、普通選擧案の上程に當つて反對黨及び貴族院よりかなり手痛き攻擊を受くべきことは固より豫想さるべきことである。然るにも拘はらず此重大な普通選擧法案が曲りなりにも

一擧にして第五十議會を通過して、我憲政史上の一大時期を劃するに至つたことは、一方貴族院改革に於ける政府の妥協的政略の成功と、都下大新聞の普通選擧に對する熱心な支持とが與つて力あつたとは云へ、普通選擧に對する國民の要求と是認が或程度迄に普遍的であつたことを證明するものと云ひ得るであらう。

政府は護憲運動の第一の旗幟である普通選擧に就いて、彼の程度の妥協を以て終了したりとせば、正に其最大政綱を實現したるものとして之れを誇ることを得るであらう。乍併貴族院改革の方に至つては營々無事今回の改革案成立したりと雖も、あの程度の改革を以て滿足するならば、貴族院に於て永田秀次郎氏の主張したる如く、寧ろ收穫に急にして未だ十分に實らざるものを得たる感があると云はねばならぬ。固より普通選擧といふ大果實を收穫する目的を達成する代償として、貴族院改革の果實の收穫の一部は之れを犧牲にせねばならぬ政治的の必要があつた。即ち大の蟲を生さんがためには小の蟲を殺さぬまでも傷ける必要があつたのであると云へばそれまでのやうであるが、貴族院改革の問題自體が既に政友會内閣時代に、民間の各方面に於て輿論として擡頭してゐた問題であり、殊に護憲運動の旗幟としても、三派内閣の政策としても普通選擧と相對立して車の兩輪の如く主張せられたるものでありとすれば、今回の程度の改革を以てしては固より十分なりと云ふことを得ない。殊に貴族互選の數の減少が少く、勅選の増加の少いことは、貴族院改革の政治的に呼號されるに至つた實際的な缺點を除去することに關して甚だ遺憾の點なきを得ざることゝ思ふ。又當然廢止さるべきものと思はれた多額納税議員が、被選擧權者の範圍は從來より擴大されたりとは云へ、政府最初の意志よりは遙かに狹隘なる範圍に於て選擧權を限定されたことは、貴族院の構成分子としての性質上理論的に大に疑問とすべき點があり、殊に將來議院政治の運用上、普通選擧實施後の衆議院と此新多額納税議員との間に、各種の政策に就いて正面より衝突すべき事情の生ずべきことは豫想に難くないことである。殊に租税政策に關しては將來或は重大な爭議

を生ずる機會のあるべきことは像想され得る所である。貴族院が穩健老巧なる經驗思想、優秀なる智識、公平なる意見等を網羅して、或程度の保守的氣風の含まれたる形式に於て、一の政治的機關として勢力を有することは、衆議院が一般民衆の利害を代表して寧ろ進歩的の氣風の優れたる形に於て、最も重大なる政治的機關として活動することゝ相俟つて、二院制度の存在の意義を深からしめるものである。貴族院は屢々輿論の攻擊の標語となつて居た如く、貴族若くは富豪等の特權階級の利益の擁護の機關となすべき性質のものではないやうに感ぜられる。貴族が社會的に受ける尊敬と有利な立場を直ちに政治的の勢力に扶植することは、富豪の有する物質上の利益と社會的の勢力を直ちに政治上に扶植せしめることゝ相共に、寧ろ一國の政治を混亂せしめる恐れがある。殊に從來と異なり、一般國民の生活困難の程度が増大し、政府の經濟政策、社會政策等が國民生活と益々密接な關係を有するに至る趨勢あるに於ては、所謂特權階級と稱せられる方面の者が、其階級に屬することのみに依つて政治上の勢力を有することは、益々一般民衆との衝突の機會を多からしめるものではあるまいか。政府は或は普通選擧の實施に依つて、選擧權の獲得に納稅資格を撤廢したる故に、其補完作用として貴族院に新に多額納稅議員を認めたと云ふかも知れぬが、それでは普通選擧實行の精神に悖りはしないか、特殊の財產狀態、若くは納稅資格を限定して衆議院の選擧權を與ふることは不合理なりとするならば、貴族院に於て多額の財產又は所得を有する者に之れを理由として特別の政治上の實權を與ふることは不合理ではあるまいか。若し又衆議院の急激なプロレタリアート化を恐れて之れを緩和するために、單に貴族院に保守的の分子を代表せしめるといふ意味で之れを認めたとするならば不徹底であつて、それ程納稅資格の撤廢、急激な選擧權者の增加、從つて政治的勢力の所在の激變を恐れるならば、今回の如く衆議院選擧權者を一躍從來の三倍まで激增せしめる方針に出でず、先づ從來の有權者の三分の一に相當する程度の選擧權の擴張を計り、更に一定の年限の後、又當時有權者の三分の

一程度迄の選擧權の擴張を行ふと云ふ如き漸進的の方法を執つたならば、國内の政治的勢力、政策等に大激動を生ぜしめず、國の政治を一時的混亂、紛爭に陷入らしめる如き危險を憂慮する必要はなからうと云ひ得る。然るに衆議院に於て斷乎として可なり徹底的に普通選擧を實行しながら、貴族院に財力の政治に影響する勢力の實現することを認めるのは、選擧法改正の趣旨の徹底せざると共に、衆議院と、貴族院に於ける此新多額納稅議員との衝突の變を作つたものであつて、或は將來政府政策の實行に際して現在以上に衆議院と貴族院の衝突する機會を多からしめるかも知れない。

第五十議會に於て多少の蹉跌若くは缺點がありと雖も、普通選擧、貴族院改革の通過したことは、固より現内閣の大なる成功と云ひ得ると共に、護憲運動の收穫を確實にし、從つて從來の選擧權者に對しては勿論、新選擧法に依つて選擧權を獲得すべき新有權者をして、自ら與黨三派に對して好意を抱かしめるに至つたことは疑ふべくもない。但し三派の孰れが此收獲の分前を最も多く得るかは將來の問題である。更に現内閣の他の政綱であつた財政整理、行政整理に於ても、種々の困難を排して或程度の成果を收めたことは固より之れを認むべく、殊に預金部の改造を斷行したことは頗る賞讚に價することゝ云はねばならぬ。十年政權を維持した政友會内閣に於て、黨利を超越して國民の利害を基礎とする眞面目な政策が勇敢に斷行されたことは、多く之れを思ひ起すことを得ないが、聯立内閣の弱點を有するに拘はらず、或は寧ろそれが興味であつたとも云ひ得るかも知れぬが、不取敢右の如き大政策を實現されたことに内閣として存立の意義があつたものと云ひ得るであらう。

大戰爭後の不景氣、大震災後の打撃を受けて、我國の經濟界が「整理」「立て直し」を要する如く、我國の政治も亦財政も「整理」「立て直し」を要する時期に在る。のみならず國民の生活も教育も亦立て直しを要する時期に在るのであるから、現内閣は、餘り運の好い廻り合せとは云ひ得ないが、其前途には實行を要求される新政策が尙多く存在するので

ある。

(二)軍閥の復活

五十議會は普通選擧と貴族院改革とを互に見合はして、散々貴族院で油を絞られ、遂には久し振りで兩院協議會といふ危ない處まで進んだが、斷末魔に急に一道の光明を見出して辛ふじて普選案が通過すると共に、紀念すべき第五十議會の幕は閉されて、解散總辭職の世間の風評を他處にして、政府は一先づホツと胸を撫で下ろした。解散もなく總辭職もなく、事あれかしと思ふ世間の野次的氣分を裏切つて、政界の暗雲が一時抹消したかと思つたも束の間、思ひがけなき變化が大政黨の内部に生じて、同時にそれが再び政局に陰翳を投げた感を抱かしめた。

高橋政友會總裁が其地位を辭して、陸軍大將田中義一男に之を讓つたことは、夕立後の晴天の霹靂として政界の事情を知らさるものゝを驚かした。世論は囂々として起つて、此變化を目して、政友會が既に憲政會との道伴れを止めて之れに反噬すべき時期なりとし、それには現總裁が護憲運動に參加し、又護憲内閣に列して居る關係上、轉向の機會を作ることが困難であるとなし、其機會に遭遇したる場合と雖も、總裁が内閣の一員として共に働くことは、將來の政權に接近する機會を擄るに不都合を生ずるものとして之等の事情を解決する爲めに總裁の取換を行つたものであるとし、今期議會に於ける現内閣の受けた多數の創痍の其一命に關する機會に準備する意味に於て、或は其機會を作ることを助成する意味に於て此芝居が演ぜられたものとして、政權を得るためには政黨としての節操なきものとして種々の非難が生じた。又或新聞紙の如きは單に高橋總裁に政黨費を調達する能力の減退したるため、軍閥關係の過去の特殊の事情に依つて、特に或金力を運用すべき力ありと目せらるゝ田中男を迎へて政黨費を豐富ならしめることが主眼であると傳ふる者

がある。又單純に政友會の內訌及び分裂の際に於ける高橋總裁の創痍ために、將來當然政友會の組閣すべき理由のある際に之れを逸する恐れありとし、總裁の取換を行つたものであるとするものがある。或は事の當否は別として、將來政友會と政友本黨の合同の機會が生じた場合に其實現を可能ならしめる意味に於て此更迭が行はれたものであるとする者もある。或は之等の數個の事情の合したものを以て此變化の原因であると解する者もあり、種々の取沙汰が行はれて居る。此際更迭の理由が右の中孰れにあつたかを論議立てすることは、或程度迄政黨の行動を批判する上に於て必要であり、又興味のあることであらうが、新總裁として迎へられた人が軍閥の殘壘と稱せらるる田中義一男であることに依つて別段の批判をなすべき事情が生ずる。政黨の總裁が更迭することは、其政黨の政策、沿革、現在の政局等に關係なき限りは、單に一政黨內部の事情として何等重大な問題ではない。乍然若し夫れが政黨の將來の政策、或は政治上の勢力、內閣の運命、若くは政治道德に關係のある場合には勿論政治的興味を以て觀察され、場合に依つては政治的批判の對象となるべきことである。政友會が政黨の幹部其他大多數の意見と、總裁個人の意見と重大なる政策上に於て相違するために、政策上合致し得べく、且つ政黨員全體を信賴を以て統率し得べき新首領を得る意味に於て此更迭が行はれたものとするものであるならば、理論に於て此更迭は是認すべきものである。又政黨費の調達、或は政黨の勢力の伸張に關して有力なる理由があるならば、或ひは止むを得ないとも言ひ得る。之れに反して政友會が何等新政策の樹立、新生命の注入に無關係に、單に如何なる機會に於ても一日も早く政權に接近せんとの黨派的利益のみを根據として此變化が企てられたものであるとするならば、護憲運動の場合と同じく、機を見るに敏なりといふ位の俗的な賞讃を博するかも知れぬが、護憲運動に際して其誠意を疑はれ、一日も政權に離れたくなきことが多年の仇敵たる憲政會と合同して此運動に參加した理由であるとして、其豹變的態度に一抹の陰翳を止めたと同じく、今回の黨首の交換も亦等しく露骨なる政

權慾の所産として、政黨としての確信も、行動の公明も、前總裁個人に對する徳義的立場も亦疑はれざるを得ない。現内閣加藤總理大臣が政友會新總裁田中男に入閣を强く勸說したことは當然の措置であつて其拒絕された場合には寧ろ之れを除外した内閣を組織することが當然の筋道であると思はれるが、いづれ覺悟はして居れど、强いて鬪爭の機會を速かにする必要もなければ、且又普通選擧、貴族院改革の根本法規が議會を通過して間もなく、其實行細目其他議會後の整頓に就いて多少の平穩なる時日を必要とする事であらうし、不取敢三派協調の言明を得た事に一應滿足して、農林、商工の政友大臣任命を以て此際穩和な收りをつけたのであらうが、護憲運動の一責任者たる高橋子の隱退は、政局の將來に一層の危險の情勢を增加した事は何人も認めることであらう。此點に就いては政友會は勿論政黨として公明な行動とは云へぬが、それ程の重大な非難を被る程の事でもないと云ひ得る。乍然問題は新總裁として迎へた人が軍閥の殘壘と目せられて居る人である事に於て、黨首の交換が最も强く政治的批評の題目となり得るのである。

我國の議會に於ける政黨の發達はそれ程古いものではなく、殊に政友會の如きは伊藤公以來長い沿革を有するものでもない。乍然議會政治殊に政黨政治の起源はデモクラシーの發達を目的とするものであつて、我國に於ても勿論此趣旨に依つて政黨が樹立され、發達して來たものである。勿論時勢に順應するために各種勢力を糾合する必要上、或は官僚と稱せられ、軍閥と稱せられる方面とも協同若くは妥協することを餘儀なくされた時期もあらう。乍併政黨の理想としては勿論デモクラシーの完成に努力することが當然の使命である。固より軍人と雖も政治に明るい者があらう。又政黨を引率する力量のある者もあらう。然し政黨には其使命の外に多年の沿革があり、又名譽もある。然るに組閣及び政策の圓滿たる遂行の必要上、一時軍閥と妥協することは止むを得ないこともあらうが、今日の如く從來とて政黨として出處進退の堂々たることを疑はれた點のある政友會が、突如として軍閥を黨首に戴くことは、政黨の使命より見ても、又其

沿革、名譽の上から見ても面白からぬ事である。人或は新總裁は軍役を退いて來つた者であつて、又黨首を代へた政友會は決して軍閥の傀儡となるものでなく、其獨自の主張に向つて進むものであるといふかも知れぬ。勿論一理あることであるが、さればとて政友會人無きに非ず、數十年政界に驅馳した立派な政治家も數あるに拘はらず、普通選擧の實施されんとする此時勢に於て、政黨の名譽を顧みず、忍耐持久の確乎たる精神もなく、おめ〱と一陸軍々人を黨首として戴いたことに就いては、政黨としての心理、行動に就いて疑惑と輕蔑の眼を以て迎へられることは自業自得の事であると云はざるを得ない。軍人が直接政治に參與することは固より好ましきことでなく、殊に歴史的に財力及び政治的勢力の强烈に扶植されて居る我陸軍々人が、政黨の黨首となることは假え形式に於てサーベルを棄てたりと雖も、將來の我國の政治、政策に軍閥的内容若くは遣り方を復活せしめる恐れのあることは當然豫期し得べく、又政黨の權威を傷くることも重大である。殊に普通選擧が實行されるが如きデモクラチックの機運の進展する時期に際しては、政黨は益々其使命を完成する責任が重大となり、又益々之れに依つて政黨に實力が與へられるものである。然るにも拘はらず此新機運に逆行した如き行動に出でたことは、道理上政友會のために惜まねばならぬと共に、黨としての利害の點より見ても將來此ために不利益を被るものではなからうか。人或は普通選擧を主張したものは一部の有識階級、新聞紙、學生等一定の見識を持つた者であるかも知れぬが、普通選擧權を獲得すべき數百萬の新有權者中には右の如き見識ある者は比較的少く、大多數は政治に無關心で、單純な宣傳や卑近な利害に動く者であり、且又我國民性として事大思想が猶盛んであるから、陸軍大將を黨首に持つことは反つて總選擧に際して有利であり、殊に在鄕軍人の勢力を政治的に利用することに於て重大な利益があり、又其勢力が有權者全體の中に於て重大な地位を占めるものであると觀察して、實際の黨派勢力の消長に關して寧ろ有利なりとする者があるかも知れぬが、一部に於て斯かる現象があり得るとして固より決定

的の勢力を政友會に與へる程のものでもあるまじく、況んや斯くの如き選擧民の心理狀態は現代の趨向に於ては寧ろ衰退する傾向のものである。のみならず軍閥と稱せられる人を政黨の首領に戴いたことは、普通選擧實施後の次の總選擧に於ては反對黨に攻擊の好題目を與へるものであつて、此點に於て政友會が次の總選擧に於て猛烈なる討論の攻擊を受けることは火を睹るよりも明かであると思ふ。從つて一黨としての利害の點より考へても、一時の機運に乘ぜんとした政友會の此再度の早業は、現代の國民の思潮に照らしても甚しき愚擧であると云はねばならぬ。假りに道途傳ふる如き政黨費調達の便宜は加はるとしても、政黨の名聲に關して被るべき損害の方が遙かに重大なる結果を惹起することであらう。政友會は寸時たりとも政權と離れ度くないために護憲運動に參加して憲政會に頭を下げ、今回は又金力を養はんがために軍閥の門に下りたりとすれば、從來常に政黨の行動の公明を傷けた「政權」「金力」の甘い好餌に對して餘り露骨な墮落の仕方であるとして非難される理由が存在することゝ思はれる。固より護憲運動に關する動機及び今回の黨首交換の眞意に關して誤解がありとすれば此種の批評は當らぬかも知れぬ。

最近獨逸大統領選擧に於て、歐洲戰爭に威名を轟かしたヒンデンブルグ將軍が、僅かな差ながら選擧に勝つて大統領に就任するに至つた事を見て、或は獨逸に於ける軍閥政治の復活と觀察する者があるかも知れぬが、ヒンデンブルグは大統領となつたのであつて、內閣總理大臣となつたのではない。國の內外に戰事の絕えないやうな時代には、共和政治の國でさへ軍人が大統領となつた事は古い時代からある。乍併一國の元首は必ずしも直接日常の政治に關與するものではない。皇帝も大統領も此點に於ては大差がない。元首は政治の實際に於ては單に形式的の監督を行ふものであつて、實質的政策は大體總理大臣を首班とする內閣が之れを司るものである。ヒンデンブルグ將軍が大統領となつたとは、獨逸に於て軍人の社會的、政治的勢力が多少復活したものと認め、又將來それが增長するものと認める者があるかも知れぬが、單に

ヒンデンブルグ將軍が大統領になつたといふ事實のみで、固より政治に對する、殊に獨逸の政策に對する軍人の勢力の影響が強大になつたものと認めることが出來ない。むしろヒルデンブルグを大統領に選擧したことは、獨逸の對外關係に於て不利益である如く觀察されて居る。又譬へ同將軍が大統領となつても、內閣總理大臣は固より國內の政治的勢力殊に政黨の勢力を基礎として、別の趣旨に依つて就任するに至るのであるから、之れを以て直ちに軍閥政治の行はれるものと解することは出來ない。反之、我國に於ては山縣公、桂公、寺內元帥、山本伯、加藤友三郎男等、我々の記憶に新な處でも數多の陸海軍人、殊に陸軍々人が內閣總理大臣の印綬を帶びて居る。又屢々噂に上る總理候補齋藤朝鮮總督も海軍々人である。而て今や又政友會は田中陸軍大將を突然其黨首に戴いて、軍閥の勢力復活に援助、助力せんとして居る。斯くの如きは政黨自ら政黨の使命に反逆するものと云はねばならぬ。如何なる立憲國の實例を見ても、一國の實際政治の政策を決定するに就いて、最も重大なる勢力を有すべき總理大臣に、主として軍人を選擇する如き例は殆んど之れを見ることが出來ない。我國の立憲政治が發達遲く、政治が屢々固陋偏見的であつて、時代の進行に伴はぬ恐れのあることは、政治上に於ける軍人の跋扈と政黨の無氣力に起因することが多いと言はねばならぬ。

(三) 政革の合同

第五十議會閉會直後、政友會總裁の首のつけかへがあつたので驚いて居ると、其驚き未だ納まらぬ中に、又々革新俱樂部員が大擧政友會に入黨、合同するといふ意外な事實が生じて、再び更に我々の驚愕を強からしめた。革新俱樂部の前身である國民黨の歷史、主張に就いては世人は能くこれを熟知して居る。又國民黨を解黨して新に革新俱樂部を創立した際の理由に就ても世人は之れを忘れないのに相違ない。私自身も革新俱樂部創立理由發表の大演說會が神田の青年會

館で開かれた際に出席して、非擧に發した演説をした一人として能く其沿革を覺えて居る。之れ等の歷史に顧みて、革新倶樂部が今更既成政黨殊に攻擊の目標とされて居る政友會に加入する如きは何としても大義名分の許す處ではない。殊に犬養氏が個人的に尾崎氏と共に憲政發展史上の功勞者として尊敬を受けて居たことは其態度の比較的公明であつたことに基く。今回の合同に依つて氏の末節が汚されたものであると觀察する者は單に一般世間のみならず、革新倶樂部の內部にもあるに相違ない。之れは勿論犬養氏のために惜むべきことではあるが、更に革新倶樂部の歷史のため、憲政前途のためにも惜むべきことである。革新倶樂部の生命は短かつた故其歷史は敢て回顧する程の價値もないかも知れぬ。

乍然普通選擧實施後の政界の革新運動に關しては遺憾を感ぜざるを得ぬ點がある。

普通選擧實施後の第一回選擧に於ては、先般の護憲運動に於て最も新有權者たるべき階級の人々の好意を獲得し得た者が勢力を增大する事は云ふまでもない事である。而て護憲三派の中政友會は他の二派と異り從來の主義を放棄して運動に參加したことであるから、新有權者の同情も比較的尠かるべき處へ今回更に軍閥の前に尾を垂れたゝめに、固より新有權者の好感を失つたのみならず、恐らく反感を以て見られること丶思ふ。憲政會が次の總選擧に於て最も有利なる立場に立つことは毫も疑ふ餘地はないが、革新倶樂部も勢力增加の割合に於て又有利たる立場に在り、殊に憲政會の如く多年の歷史なく、一人一黨的精神を有して新來の有爲誠意の士を迎へるに最も好都合の立場に在つたのであるから、其歷史と現狀は護憲運動の功績と伴つて、次の總選擧に於て多數選出すべき新な中立議員と結合する點に於て非常に有望であつたと云ひ得る。而も斯かる機運を作り、其進路を進むことは國民黨解散、革新倶樂部組織の當時の趣旨ではなかつたらうか。然るに今やむざ／＼と現在の政黨中最も將來ある倶樂部を解體して、相手もあらうに從來の歷史の芳しからぬ政友會に合體し、殊に政友會が軍閥を總裁に戴いた後に此事が行はれた事は重ねて遺憾の事と云はねばならぬ。

又殊に此合同が軍人の中でも過去の人に屬する三浦將軍を介して行はれ、足腰も立たぬ老將軍を東京に迎へて事の進行を計る如きは、政友會が田中男を迎へたのより一層不體裁な次第である。或は此政革合同は既に早くより三浦將軍、田中男と、政革兩黨の少數幹部の間に計畫された事であるかも知れぬ。恐らくさうであらう。それにしても二の政黨が合體するのに何故仲人も主腦者も軍人に之れを求めなければならぬのか。今更軍人の政治上に有する勢力の猶强大なることに驚くと共に政黨の無力を嘆かねばならぬ。

代議士とても固より一身上の利害關係はある故、數十年又は十數年も政黨政治に奔走し來つたものは切角政界に於て自己の作り上げた地位、勢力及び過去の努力を回顧すれば、或機會に於ては單に理想若くは大義名分のみに依つて行動する勇氣を缺くやうな狀況が生じ、自己の政治的地位、目的を到達するに九仭の功を一簣に缺く如き事は忍び難い事情も存在することであらうから、或は此機會を逸しては自己の政治的勢力若くは一身上の利害が泡沫に歸するやうな恐れでもあれば、遂に名分も顧みず臨機功利的の行動に出でることも有り得る。如何に憲政に忠なる代議士と雖も、聖人の如く行動せよといふことは固より無理な注文であらう。從つて政黨の公の行動が往々少數幹部の意志に依つて左右されることは想像し難くない。然しながら政治上の政策に關しては固より幹部の方寸に從ふことは政黨の統制上必要であらうが、政黨としての根本目的に關する行動及び其名譽に關する事に就いては幹部の指揮に盲從すべき性質のものでもあるまい。若し之れに盲從する者あれば其代議士の個人的打算より出づることである。固より今回の政友會の屈伏、革新倶樂部の變節は、之等の變革の直接計畫者である幹部の政治的地位の確保、それに伴ふ利益の增進を主眼としたものと忖度する事は當を無ないと言ひ得るかも知れぬが、さりながら此變動が孰れも世間を驚かしたものであり、又道理上世間の合點し難いものでありとすれば、此第五十議會閉會後の政界の大變動の經過、及び結末に對しては、何人かゞ世間の

批評を免かれぬことであらう。政友會、革新俱樂部の幹部であるか、それとも之等の黨全體であるか。

田中男を政友會總裁に戴いた事丈けでは直ちに想像出來難かつたことであるが、次いで革新俱樂部が政友會に合同し、犬養氏が其擧に參加し、殊に三浦將軍を仲人とした事等から綜合して想像すれば、陸軍閥色、支那色がかなり深いやうに思はれるから、或は現在の我國の國際的地位殊に最近の外交的立場に鑑みて、對支政策若くは大陸政策、其他外交上に關して新な積極的政策を實行するために其準備として內々强力なる新政黨の樹立を計つたものとすれば、之等の政治的大變動の「動機」に就いては眞面目なる政治的覺醒より出でたるものと考へ得るが、其ための「手段」としても、又國の前途に對する「利害」の點より見ても此事は必しも首肯し得べきものではない。但し此忖度は私の頗る善意の空想で恐らく事の眞相ではあるまい。

今回の合同が普通選擧に備へるためであるとすれば、——護憲運動の收穫を我物とし、而も憲政會から之を奪取するためには最も利巧な方法である——一應は此合同の實現した意味も解釋される。それにしても政友會が何故田中大將を總裁に迎へたか理屈が分らぬ。又革新俱樂部が何故獨力其將來の有利な情勢を利用して、俱樂部の擴張若くは新勢力との結合を計る擧に出でなかつたかと云ふことが分らぬ。

いろ〱考へても能く分らぬが、最も簡單に呑み込め易い事は 三派鼎立內閣は大體に於ては護憲運動の收穫を收めて、憲政會は一應得意の時代を經過したが、貴族院に於て被つた痛手のために足下幾分動搖の傾きがあり 又人或は總理大臣の將來の健康を云々する者もある。兎に角憲政會を首班とする三派內閣の運命に就いては固より長きを期し難いことであるから、適當な時期に於て手際よく護憲運動の收穫を折半する意味で、現內閣に代つて政權を握らんための準備をすることが、今回の世間を驚かす政黨の內面的大變動の原因であるとすることが最も單純で分り易いことであら

う。

（四）普選に對する準備

普通選擧は愈々次の總選擧から實行されることになつた。「數」に於て選擧權者が三倍にもなつたことは政治の民衆化として喜ぶべきことであらうが、單に數の增加のみで選擧權者が政治的に覺醒しなければ普通選擧は必しも立憲政治を改良し得るものでないことは、普通選擧の主唱者と雖も認める處である。選擧者の質の改良は固より國民の政治的教育の普及と　國民の立憲政治及び選擧權の精神に關する徹底的の理解に俟たねばならぬが、之れは一朝一夕にして實現し得べきことでない。普通選擧論者と尙早論者の論點は主として此政治教育の普及を先づ計つて、相當の實績の顯れたる後にすべきか否かにあつた事であるが、既に普通選擧の決定した今日に於ては斯かる議論を繰返す時期でなく、極力國民の政治教育の普及發達に努力せねばならぬ。或人は歐米先進國の實例に見て之れを云ひ又先般東京市政調査のため渡來した米國人ビアード博士も云つたことであるが、普通選擧は之れに依つて國民の總てに選擧權を與へる結果　將來の政治の善惡に關しては大多數の國民が選擧投票に依つて共同責任を負擔する故、國政に對する不平の勃發を防止する消極的の利益のある事は明確であるが、積極的に立憲政治の改良が出來るか否かは疑問であると云つて居るが、既に普通選擧の實施されんとする今日、國民一般は固より此重大な制度の改革に對して、單に右の如き消極的の利益を以て滿足すべきでない。歐米の例はどのやうであらうとも、又海外に於て普通選擧に依つて政治の實質の改良された實績もあることであらうから　我國民が擧つて次の第一回普通選擧を機會として極力立憲政治の運用と政策の實質的進步のために努力をせねばならぬこと勿論である。デモクラシーは其運用の形式を誤つた丈けでも其本來の目的に合致せず、所謂衆

愚政治に陷入らしめる恐れがあるのであるから、制限選擧の時期以上に選擧の方法に就いて嚴格なる規律を必要とする。選擧費の調達及び使用、個別訪問其他の運動法、選擧區等は立候補者の善惡、從つて議院の內容如何に重大な影響を與ふるものであつて、之等選擧の取締りが合理的でなければ選擧權の數の增加は場合に依つては反つて害を生ずるとも云ひ得るのである。幸ひにして今回の選擧法に於ては之等の點に就いても種々嚴格な規定が設けられたことであるから、其適用に際しての實効如何は別問題として、選擧の實行も從來よりは眞面目に行はれ得るものと推測し得る。

如何に國民教育、政治教育が普及しても、國民全體が士君子の如き思慮を具へ、公正な行動をすることは固より考へられない處であるから此種の外部的規律は必要であつて、絶えず其完成のために努力せねばならぬが、さりとてそれのみに依賴しては立憲政治の精華の發揮されることは百年河淸を待つ如きものであるから根本的又持久的の手段としては非とも國民の政治教育若くは「公民教育」を發達させねばならぬ。人或は「公正」に關する根本的の道義觀念を確立せしめれば、選擧に關する公正の觀念も自ら啓發されるものと論ずる人があるが、單に公正といふ一般的の道德觀念の普及のみでは選擧に當つての實際の行爲の判斷に誤解或は無理解の事情を生ずることもあり得る故、十分立憲政治の精神、制度、其運用に關する規律、心得等に關して詳細な知識、訓練を與へる必要がある。此種の政治教育は固より單に國の政治にのみ必要なことではない。自治體の政治にも必要なことであつて、單に學校教育のみに依つて實効を收め得るものでなく、或人に對してのみそれを行ふべきものでもない故、各種の團體、家庭に於ても總ゆる機會に留意して此種の教育を施す必要がある。最近文部省が「公民教育」を重要視して、先年來委員會を設けて其教授要目を定め、今や將に全國に向つて此趣旨を普及せしめんとして居るが、此種の公民教育は自治體に於ても、又民間總ゆる方面に於て國民として又市民としての義務として、些末の機會を捕へても其普及に從事すべきである。歐米殊に英國、等に於て寧ろ

小學校生徒を中心として公民としての教育を施すことに頗る力を致して居ることは大に學ぶべき事である。從來の我國の國民教育は忠孝を基礎として居た。固より之に代へると云ふ意味ではないが、公民教育の色彩を濃厚ならしめる必要は、普通選擧の實施されんとする今日、益々其緊要を加へて來た事である。此公民教育及び一般的政治教育が普及すれば、先づ學校と家庭に於て鞏固な政治的自覺が湧起し、公共生活に關する權利並びに義務觀念が明白になつて、立憲政治の運用、議會の内容も自ら反射を受けて改まることになる。如何に帝國議會に於ける代議士の行動が顰蹙すべきものであり、代議士の素質が劣つて居り、又市會議員の素質行動が下劣であつても、選擧民さへ覺醒すれば自ら肅正の時期は到來するものである。現在の議會、市會の良否は選擧民自體を表現するものであつて、代議院の缺點は即ち大部分選擧民の責任と云ひ得るのであるから、帝國議會、地方議會の現狀に對しては固より選擧民が共同責任を持たねばならぬ。從つて普通選擧に依つて有權者の一千萬人にも激增せんとする今日、立憲政治の運用に關する、殊に選擧の際に於ける選擧民の責任に關しては、今後第一回の普通選擧の實施される迄の間に於て徹底的に宣傳、普及せしめる必要がある。一度汚れたる者はそれを清くすることは困難である。一度利に誘はれ、因緣に繫がれたる者はそれを覺醒せしめることは至難である。從つて一旦時期遲れとなり、或は習慣性となつた時に聲を大にしても其效果は薄い。同一の方法を盡しても機會に依つて其結果に重大な差異があるのであるから、新選擧民の耳に覺醒の警鐘を亂打するとしても、今日より第一回の普通選擧に依る總選擧に至る迄の時期こそ最も重要であり、且つ有効であることを忘れる事は出來ぬ。

普通選擧に依る第一回の總選擧が行はれるに當つては、必ず新政策、新理想を標榜して多數の新候補者が出現するに相違ない。之等の新候補者は或者は既成政黨に籍を置いて立候補する者があらうが、又現在以上に多數の中立候補者の現れることは想像し難くないことである。此機會に於てこそ「新勢力の組織(オルゲニゼーション)」が必要となり、有意義となる。今回の政

革合同の如きは新勢力の出現を俟たずして行はれたるものであつて、個人的に如何なる候補者の現れるか、又大小に拘はらず如何なる新黨派の發生すべきかを見ずして無意義に政黨の合同といふ重大事を決行したのである。將來の議會の新分子が多數之れに合體すべきことは考へ難い。豫め雪摩磨を作つてころがせば、雪なれば之れに附着するかも知れぬが、土は容易に之れに附着しない。合同黨は恐らく手持無沙汰の感をするであらう。

併し將來新分子が多數代議士に立候補するにしても、恐らく最も困難を感ずるのは「選擧費の調達」の點であらう、選擧費の調達が從來立憲政治を蠱毒して居る。理想的の選擧を行はんとすれば直ちに選擧費に窮する。之れがデモクラシーの一の矛盾であつて、過去現在及び將來を通じて此殆んど不可解の難問は連續することゝ思はれる。舊政黨に屈すれば此點が割合に容易に解決出來る故、其傘下に集る新候補者もあることであらう。乍然それでは有權者を三倍にも增加せしめた普通選擧の意義が十分に徹底せぬ。勿論黨內に入つて內部より舊政黨の改革を計ることも不可能ではなからうが、傳統と、因緣と、古い勢力はデモクラシーの本家であるべき政黨にも古いものほど强く存在する。從つて新分子の新理想も舊勢力の舊政策に埋沒する恐れがある。此故に今回の普通選擧は眞に國民の要求若くは政策更新の止み難い必要があつて出來たのであり、政局の行掛りから成立したものでない限り、是非共政治上の新勢力が實現せねばならぬ筈であり、又普選實施の手前國民は之れを作らねばなるまい。勿論新分子として獨立に選擧場裡に戰ふ者は、選擧費用の調達、選擧運動の實行新勢力の組織に關して多々困難を感ずることであらうが、新有權者は宜しく之れを援助する責任がある。若し然らずして新有權者の眠れるために新分子の出現が座折する如き事あれば、今日の選擧權の大擴張は夫れ程重要な意義なくして行はれたとも云ひ得られ、又時期尚早であつたとも云ひ得られる。

扨て次の選擧に於て假りに多數の新分子が當選したとすれば、固より議會政治は團結なくしては其作用をして有効に

し得ないことであるから、新分子の間には一個又は數個の新黨樹立が計畫されることであらう。或は選擧後、選擧運動等に關する都合上、總選擧戰開始の際既に之れ等新黨派が成立し若くは選擧終了後に結黨すべき申合せが成立して共同動作をするといふことになるかも知れぬ。孰れにしても次回の總選擧又は其後の議會に於ては之れ等の新勢力の組織、新政黨の成立が豫想されることである。但し此の「新勢力の組織」は組織オルガナイザー者として適當なる人物を得るや否やによつて其の成否並に成立後の行動の良否に重大なる差異のあることは覺悟せねばならぬ。

「新勢力の組織」の必要の點から云つても、今回革新俱樂部が政友會に合同したことは甚だ遺憾なことであり、寧ろ新政治の發展を障害したものとも云ひ得る。他方革新俱樂部、中正會の殘留者と實業同志會が合同するといふ話もあるが、成否は別として總選擧が目睫の間に迫れるに非る以上は等しく時期尚早の感がある。或は今後一二三の議會の間交渉團體としての勢力もなきため便宜の團結を計らんとすることは强いて排斥すべきことでもなからうが、普通選擧後の議會に對する「新勢力の組織」といふ意味であるならば、猶時期尚早であつて、反つて將來の行動の自由の束縛を受ける嫌ひがありはしないかと思はれる。

要するに第五十議會終了後の政黨の變化は、其內容に於て、時期に於て、正當な意義を認めることは出來ないが、次の總選擧に於ては十分選擧民の自覺を計ると共に選擧法の公正なる適用を努めて、新分子を議會に送つて新勢力の實現に依り我國の政治に新な進步的な生命を與へることが必要である。

それについて考へられることは矢張り選擧費の用處の問題である。自分の狹い見聞の範圍に於ても、現在の投票の多數は日常其他の名義に於て買收されるものであるとの事である。斯くの如き狀態に於ては固より投票數の增加は政治の革正に何等の意義を爲さぬ。將來選擧民が覺醒して遂には各選擧權者が平素より每年一圓づつ、或は適當な金額を醵出

して、自己の適當と信ずる候補者若くは政黨に寄附するといふ狀態になつてこそ、初めてデモクラシーが眞の目的を達し得ることになるであらう。財産がなくとも、所得がなくとも、選擧權は與へられるやうになつた。乍然投票權を行使するに當つて自ら出資をしてまでも自己の正當と思ふ代表者を議會に送らんとする熱心があつてこそ初めて立憲政治の精華が現はれる。投票の好意、及び勞務に對する報酬を受け、若くは投票日の勤務休止に對する報償を受けることを當然の如く考へて投票の買收、賣附けが公行することは制限選擧の際に於ても最も罪惡視すべきことであるが、普通選擧に際しては買收の危險が增大し、且つ其政治的又道義的惡影響が一層廣汎なるものある故に、其絶滅を計ると共に更に一歩を進めて上述の如く選擧權者の覺醒を計つて、自ら喜んで其推擧する候補者のために選擧費を支出する程度に至らしめねばならぬ。富豪も貧者も等しく國民である。孰れも一票を與へられる權利ありと主張するはよし、同時に他方に於て一票の有效なる行使に就いては富家も貧者も均しく其責任を分ち、物質的負擔を等分するといふ程の意氣込あつて初めて立憲政治は普通選擧に依つて其精華を發揮し得るものと云ひ得る。

環境と文化との關係を論じて儒教の體系及び其革新に及ぶ

文學博士 市村瓚次郎

第一節 環境とは何ぞや

環境と文化との關係を論ぜんとするには先づ環境とは何ぞや文化とは何ぞやといふ問題を解釋しなければならぬ。

環境の語は從來日本に於ても支那に於ても使用せられなかつた、此の語が盛に使用せらるゝやうになつたのは全く近來のことである、何人が初めて此の語を使用したかは明でないが恐らくは佛語の「ミリウ」Milieu若くは英語の「エンバイロンメント」Environmentの譯語であらう、「ミリウ」は中心又は中央の義を有し現に中國の中に當つるに此の語を以てして居る、けれども更に包容するものを指し空氣は人畜の「ミリウ」であるとか水は魚類の生活する「ミリウ」であるとかいふ如き場合もある、英語の「エンバイロンメント」は包圍とか圍繞とか又は四圍の狀況などといふ譯字が當てはめられて居るが此の英語の「エンバイロンメント」を佛語の「ミリウ」と同じやうに使用し始めたのは英國の哲學家「スペンサー」氏であるといはれて居る、日本に於て環境の語を使用した始めは明でないが恐らくは十年以內の事で佛語若くは英語の譯語であらうと思はれる。近來支那に於ても盛に環境の語を使用するやうになつたがこれは更に日本より傳來したものと思ふ、

かくの如く環境の語が廣く使用されつゝあるに拘はらず日本や支那に於てその語の意義を明に解釋したものは少ない、これはその語を使用してからこのかた日を經ることが淺いから怪むに足らぬが、今環境と文化との關係を論ぜんとするには豫めこれを明にして置く必要があると思ふ。

さて環境の用語は新しいが環境そのものは太古より今日に至るまで存續して居る、これは東洋と言はず西洋と言はず古代もなく今代もない。故に余はこれを空間と時間と兼ねて解釋を試

みたいと思ふ。この解釋よりすれば或はこれを宇宙といひ或はこれを世界と稱するも差支ないかも知れない、何となればこの宇宙といひ世界といふ語には時間と空間との意味が具備せられて居るからである、けれども今日では已に原義を失つて單に空間の意味にのみ用ひられて居るからやはり環境の語を用ふることにした、但環境の原語である佛語や英語も空間を主として居るやうであるが余は更に時間を加へてその解釋を試みたい、即ち環境とは何ぞやといはゞ時代を經とし場處を緯として成り立つものとする。故に時代と場處とを離れては環境は成り立たない、時代とは時間の延長であつて場處とは空間の限定である、この時間と空間との關係は極めて微妙であつて時間の在る處に空間があり、空間の存する所に時間がある、故に時代と場處とは相即不離のものである、從つて實際上にはこれを引き離すことは出來ないが、論理上からは暫く別けて觀察することが出來やう、而してこの時代は變遷を主とし場處は固定を主とする、既に變遷を主とする時代と固定を主とする場處とが相待つて環境を組成するものとすれば、所謂環境には絶對の變遷なく絶對の固定なしといふことになる。今これを時代と場處とに分つて事實の上から證明してみやう、

（甲）時代の支配　春風駘蕩として鳥啼き花笑ひしも幾時ならずして新綠園に滿ち忽ちにして炎熱金を爍し忽にして木葉黄落して蟲啼き雁飛ぶ忽にして白雪紛々として寒氣人を襲ふ嗚呼これ何の爲であらうか、時代の支配といはずして何であらう、嬰兒が少年となり少年が壯者となり壯者が老人となり老人が遂に地下の白骨となる、唐人の詩に可憐半死白頭翁維昔紅顏美少年といふ句があるが誠にその通りである、嗚呼之何の爲めであらうか、時代の支配といはずして何であらう、我が前回北京へ來つたのは光緖二十七年であつた、當時清國皇帝は西安へ蒙塵中であつたが支那は猶滿洲朝廷の統治の下にあつた、然るに今日北京へ來ればその宮殿は依然として存すれども已に革命の後十餘年を經て中華民國政府の存在を認むるのみならず設令名のみであつても專制政府が共和政府となつて居る、前回には支那到る處に辮髮をなす者のみであつたが今日は大抵斷髮となつて辮髮を見ることは頗難い、これ等は眼前に時代の支配を受けた變遷の跡を證するものではないか、實に時代は一刻一刻と變遷して止まない、この講堂へ入り來つた時の諸君と今講演の半聽き居らるゝ諸君とは同一の人であつても已に相違を生じつゝあるのである、然るに古代に不老不死の神仙說を信じた秦皇漢武の如きがあつたのみならず今日でも猶若返り法の存在を信ぜんとするが如きはこの時代の支配を全く無視した妄想といはなければな

らぬ、要するに時代の支配が變遷を主とするものであることは何人と雖も直に解することが出來るであらう、故に更に進んで場處の支配は如何といふことを說明したいと思ふ。

（乙）場所の支配　場處は土地は勿論氣候等も含まれて居る、同一系統の「アリヤン」民族でも印度に住せるものは煤色となり、歐洲に住せるものは白色となつた、同一の獸類でも支那の雲南地方で獲た虎の皮は毛が薄く斑點も美麗ならざれども朝鮮や滿洲の北部にて獲た虎の皮は密毛にして斑點も頗美い、これ等は何の爲であるかといへば、やはり場處の支配に外ならない、南米の「アルゼンチン」にては「アルパカ」といふ動物を養つて居るが、その毛を刷落す毎にこれを「七〇〇〇」呎の「アンテス」山の頂に逐ひやつてその毛の密生するを待つてこれを牽き下してまたその毛を刷落すのであるといふ、これ等は場處の支配を利用したものである、この場處の支配に就いては既に二千餘年前に言ひ及んで居る、考工記に

天有時、地有氣、材有美、工有巧、合此四者、然後可以爲良、材美工巧、然而不良、則不時不得地氣也、橘踰淮而北爲枳、鸜鵒不踰濟、貉踰汶則死、此地氣然也、鄭之刀、宋之斤、魯之削、吳奧之劍、遷乎其地而弗能爲良也、地氣然也（以下略之）

といふて居る、日本の諺に、

江南の橘、江北に植えらるれば枳となる。

といふことがあるがこれは前の支那の書に基いたものでつまり場所の支配が如何に大なるかを語るものである。

獨逸の「ミユンヘン」Münhen 麥酒は「ミユンヘン」Münhen を離れば出來ないといはれて居る、日本にては兵庫縣の灘の酒を以て第一とするがこの灘の醸造法を以て他處に於て醸造して同一の風味を得ることは難いといはれる、朝鮮にても慶尙道の金線を以て酒の名産地とし他の土地にては同樣の酒が出來ない、支那に於ても山西省の汾縣杏花村は汾酒の産地で特別の香味を有して居ると聞く、紹興地方の紹興酒も恐らくは他所に於て學び得ぬところがあるであらう。これは何の爲めかといへばやはり場所の支配の結果であるといはなければなるまい、玆に更に適切なる一例を示さう。

赤銅及び四分一の合金は從來日本の特有の技術で外國ではこれを學び得ないといはれて居る、曾て佛國の巴里に大博覽會があつた時に日本の技師は佛國人の希望によつて赤銅の合金を試みたことがあつた。さて赤銅は出來たが日本の赤銅のやうな光澤は幾回試みても出來なかつたといはれる、これは何の爲めか水の爲めか氣候の爲めか又は原料の爲めかは暫く措きやはり場

所の支配を受けた結果であることは言ふまでもない。

かくの如くすべての物が場所の支配を免れないとすれば感情や意志を有する人類がこの場處の支配を受くるは怪むに足らない、彼の山地の人と平野の人との相違、都會の民と農村の民との不同は勿論、支那の廣東地方の人士と北方の人士との間に若幾分にしても性情氣質に相違があるとすれば單に民族的相違に淵源するといはんよりはその場處の支配の影響として說明することが出來やう、けれども時代の支配が變遷を主とするに異なり場處の支配は固定を主とするは何故なるかを明にしなければならぬ。

地球構成の來歷は姑く舍き已に國土の成立した以來は熱帶は常に熱帶で寒帶は常に寒帶であつた。陸地は常に陸地で海面は常に海面であつて、故に印度が俄に寒帶となり「ヒマラヤ」山地が忽ち平野となるが如きは斷じて無い、支那の黃河の下流は古來幾多の變遷があつたけれどもその奔流の大勢は變りないのみならずその流域の黃土の地層には根本的の變化はない。揚子江の流域に至つては猶一層變化の少ない方であらう、けれども支那に滄桑の變といふ語がある通り滄海が桑田となることもある。渤海灣の直隸沿岸が次第に埋りつゝあるは事實で兩漢の時代と大分の相違あるは疑ない。又西域の沙漠の流動の結果都市が埋沒せられたやうの事もある。漢代の且末が玄奘三藏の印度より歸來の時には已に沙中に埋まつて居つたことも事實である。故に場所にも變化がないとはいはれないやうに思はるゝけれども、この變化は時代の影響を受けた結果と見なければならぬ。要するに場處は固定を主とするけれどもこれに變化を主とする時代が加はれば幾分の變化を來すこともあるけれども場處が固定を主とし時代が變遷を主とするといふ原則には何等の動搖を與ふる譯ではない。

さて固定を主とする場處を緯とし變遷を主とする時代を經として人類の環境が組成せらるゝものとすれば環境そのものには絕對の變遷がないと同時に絕對の固定のある可き筈がない。而して人類はこの環境を離れて存立することが出來ないとすれば人類の文化もこの環境の支配を免るゝことは出來ない。從つて人類の文化も亦絕對の固定なく絕對の變遷なしといふことに歸着する論語の中に

子張問十世可レ知也、子曰殷因二於夏禮一、所二損益一可レ知也、周因二於殷禮一、所二損益一可レ知也、其或繼レ周者雖二百世一可レ知也、

とある。これはつまり殷代は夏代の禮に因つて取捨せる所あり周代は殷代の禮に因つて取捨ある所あつた。故に將來百代の

後と雖も大體の想像はたし得るといふのである、この禮は禮式法度を包括せる廣い意味のものである、孔子は勿論環境に就いて深い考慮をした譯ではなからうが、人類の文化に絶對の固定なく絶對の變遷ないことを前提としなければこの雖二百世二可知也の結論に到着することは難い、故に孔子の此の語は我が環境の原則の説明として取扱つても差支ないと思ふ。

この環境の大中小は古今によつて相違が認められる、支那に就いてこれをいへば古代に於て小環境は部落を主とし中環境は邦國を主とし大環境は天下を主としたともいはれる、今日に於て小環境は支那自體を主とすれば中環境は亞細亞を主とし、大環境は世界を主とすべきことになる、その小環境の中を更に大中小に分ち中環境をまた大中小に分ち、大環境の中をまた大中小に分つことも出來る、要するに大環境が小環境を壓服するもあるが小環境が大環境に抵抗し得る場合もある、中環境もまた然りといはなければならぬ、孰れにしても人類はこの環境の支配を離れて生存するものであり從つて人類の文化も亦環境の支配の外に超然たるを許さない。

第二節　文化とは何ぞや

環境とは何ぞや、といふことを已に明にした以上は更に文化とは何ぞやといふことを説かなければならぬ、環境の字面は今日新に造り出したのであるが文化の熟語は已に古くから使用せられて來つた、けれども今日の意義は古代と同じでないと思ふ、支那に於て文は常に武に對して使用せられ來つた、即ち昔の束皙の詩に文化內輯武功外悠とあるが如く、文化は武功に對して用ひられたのである。然るに今日盛に用ひらるゝ文化の意義につきては日本に於て明確なる解釋を與へたものが少くないと同時に支那に於てもその説明に十分盡したものがないやうである、唯東南大學より出す國學研究會講演錄に江亢虎氏の歐戰與中國文化との論文が載つて居つてその中に文化の解釋を試み英語の Civilization を文化とし Militalization を武化とし Materialization を物化となし文化を以て武化物化と鼎立せしめた、これが果して適當の説明であらうか、余は未だこれに首肯することが出來ないのである。

余竊今日盛に用ひらるゝ文化の語は獨逸語の「クルツール」の譯語であると思ふ、この「クルツール」は英語の「カルチュア」と同くその語源には耕作の意味が含まれて居る、即ち未開の原始的土地に人力を加へてその自然狀態を改良したのが耕作である、これが引伸せられて敎化とか文化とかいふ意味を有するやうになつたのであらう、何となれば人類の文化は自然狀態

よりは一歩進んだ所に存在するからである、故に東西の學者に於て設令幾多の説明があるとしても余は別に獨自の定義を立てて解釋を試みて居る、今之れを左に述べてみやう、即ち文化とは共同生活に於ける人類智能の組織的表現に過ぎないといふのである、これを説明すれば人類は孤立して生存し得るものではない。必ず共同生活をなさなければならぬ、家族もこれが爲めに出來し、國家もこれが爲めに成立し、社會もこれが爲めに存在する、而して、玆に政治が現はれ、經濟が生じ、道德や宗教が起り、哲學や藝術が芽えて來る、これは他の動物の間には見ることが出來ない所で全く人類智能の組織的表現に過ぎない、即ちこれが人類の文化と稱せらるべきものである。

予は已に文化は共同生活に於ける人類智能の組織的表現であるといつた、故にこの生活を離れては文化を理解することが出來ない、さて人類の生活は分割を許さないがその要素は多種多樣である、人類には物質的生活があると同時に精神的生活がある、この兩者は互に相關する所があつて如何に物質的生活を重するものでも尙精神的慰安を求めないものはない、又如何に精神的生活を尙ぶものでも物質を離れては生存することが出來ない。旣に人類の生活に物質的と精神的との兩面があるとすれば之を基本として表現せられた文化に物質的と精神的との兩面あるは當然である、これを物質的文化及び精神的文化といふ。

物資的文化は人類の物質的生活を基として發達したものである、物資の必要がある、玆に漁獵が起り農業が生れた、物資交換の必要がある、玆に商業が現はれた、衣服を要し、家屋を要しすべての物資の加工を要する、玆に工業が起つた、巍峨たる汽船の現はれたのも蜿蜒たる鐵路の通じたのも、無限の動力を有する電氣事業の起つたのも、亦均しく人類智能の組織的表現に外ならない、故にこれを物質的文化といふのであるが、この物質的文化を對象とする學問は暫くこれを物質的文化の方面に屬するものとして取扱つても差支ないと思ふ。

精神的文化は人類の精神的生活を基として發達したものである、人類は人力以外の靈力を認める、玆に宗教が現はれた、人類は一般の動物との相違を自覺し共同互助の生活をする、玆に道德が生れた、人類はその智識を擴めて宇宙の眞理を研究せんとする、玆に哲學が起つた、人類はその趣味感情を滿足せしめんとする、玆に藝術が生じた、之等は皆精神的生活を基とする人類智能の組織的表現に外ならない、故に之を精神的文化といふのである、すべてこの精神的文化を對象とする學問は暫く精神的文化の方面に屬するものとして取扱つて差支ないと思ふ。

かくの如く人類の文化をその生活の二方面から觀て精神的と物質的に分つたが、これを實際の生活に徴すれば猶この兩方面の何れにも屬し得ないものがある。即ち制度法律の如きはこれである、今日中華民國は統一を缺いて居るが從來中央に大總統を置き内閣總理以下各部總長を設け地方に督軍總長があり更に道員知縣などがあり又中央の議會もあれば地方の議會もある、これ等は皆人類智能の組織的表現であるが文化の何れの方面に屬すべきか、又民國に於ては未だ完成に至らぬが他の立憲國には憲法あり刑法あり民法あり商法あり各種の法例條規が備つて居る、これ等も人類智能の組織的表現であるがさて文化の何れの方面に屬す可きか、これ等を單に物質的文化といふことが出來ないことは勿論であるが、さりとて精神的文化といふことも出來ない、何となれば精神的生活を對象として居らぬからである、然らば人類生活の樣式には物質的と精神的との兩方面に屬することの出來ないものが存するのではないか、諸君が今日我が講演を聽かれるのは或は精神的生活の方面に屬するともいはれやう、然れども諸君の秩序正しく一齊に腰をかけて居らるゝは物質的生活でないことは勿論であるが、さりとて精神的生活といふことも難い、然らば精神的生活と物質的生活との外に於て別に一種の生活樣式を認めることが出來やう、予はこれを名づけて統制的生活といひたい。この統制的といふ語は精神的と物質的とに對しては妥當でないと思ふけれども別に適當の語を案出し得ないから暫く統制的生活といふ、この統制的生活は特に共同生活に於て最必要を感ずる、何となれば共同生活に於ては統制機關がなければ滿足に活動することが出來ないからである、この統制的生活に人類の智能が組織的に現はれたのが統制的文化に外ならぬ、この統制的文化は精神的文化にも物質的文化にも重要の關係を有して居るが、精神的文化に屬せしむることが出來ないと同時に物質的文化にも屬せない故に人類の生活をこの三方面より觀察すると共に文化の方面も大體三類に分つて觀察することが出來やう、但この三類に區別し得るとしても固より各自相依るもので相離れて獨立するものでないことは勿論である。統制的文化の中心は政治となり、物質的文化の中心は經濟となり、精神的文化の中心は道德となつて現はれる。この三者が調和して發達する時はその共同生活が最平和幸福の時である。これは人體の諸機關に故障がない時と同樣である、若し其機關の一部に缺陷を生じ疾患を來した時は共同生活の脅かされる時であつてやがて革命とか擾亂とかの勃發を免れない、猶人體機關の一部に故障を生じたと同く時によつては生命を奪はるゝこともある。

以上述べた所にて我が所謂文化とは如何なるものを指したかは略明になつたと思ふ、而してその文化が環境と如何なる關係あるかを述べんとするのが主眼である。但環境は時代と場所とを以て組織せらるゝものとすれば自然界と人事界との錯綜して居ることを認めなければならぬ、從つて環境と文化とを全く引き離して取扱ふことを許さない、即ち文化自身が已に環境の一要素の中に加つて居るのである、而してその文化が後の文化又は他の文化に影響を及ぼす場合はやはり環境の支配の中に包括して差支ない、予はこの見地よりして環境と文化との關係を論じたいのである、けれども文化の範圍は前述の如く人類の全生活に通ずるもので極めて廣汎であるから短期の講演にはその全體を述べ盡すことは出來ないのみならず、予の專門學術の上からもその全體に亘ることを許さない、故に暫くその例證として儒敎の體系に就きてこれを論證せんとするものである。

第三節　環境と文化との關係

環境は人類を支配し人類は文化を作成するものとすればその文化が環境と關係を有することは爭はれない、今暫く精神的文化の方面から時代思潮に就いて支那古代の思想と印度古代の思想とを比較して見やう。

この支那思想と印度思想とは東洋思想の二大系統として認められる、勿論支那思想の中にも各自の相違があり、印度思想の間にも各自の相違があるけれども大體に於て二大系統の特色が認められるであらう、それは即ち支那思想は現實的であつて印度思想は非現實的である傾向があることである、印度の文化は已に悠遠の太古より發達し來つた、吠陀の經典には未だ業とか輪廻とかの思想は明でないが婆羅門の時代から佛教興隆の時代に通じて玆に彼れ等の間に共通の思想が存在せるを認むるとが出來る、即羯磨(行)の法則を定め因果の關係を信じ輪廻の事實を認め現世を以て火宅となし苦界となし穢土となし一切の苦悶を解脱せんと努めざるものはない、その解脱の方法は各派の說く所一樣ならず、或は苦行により、或は三寶により、或は八正道によるといふが如き差異はあれども要するに現世を非認し未來を信仰するが如き厭世思想の漂へるは明であるといはなければならぬ、これは非現實的の思想ではないか、何が故にこの非現實的の思想が印度に發達したのであらうか。

支那の文化も同く悠久の太古より發達し來つた、特に春秋から戰國へかけては各派の學者が輩出し思想界の最隆盛の時であつた。然れども印度思想のやうなものは少い、例へば道家の如き虛無の思想を有するものでも猶現實的の行爲あるを說いた

い、まして儒家や墨家や法家が現實的に傾いて居ることは勿論である、かく印度と支那との思想の淵源に於て已に大なる相違を生ぜるは其民族の相違も幾分關係する所がないとはいはれない、然れども其環境の相違が思想の相違を來す重大の原因であることを認めなければならぬ、但環境を組織せる時代に就いては支那も印度も殆過去の二千五百年前後のことであるから大差はないとしても場處の方に就いては著しい相違があるからである、此相違を自然的相違と人事的相違とに分つことが出來る。

自然的相違とは土地や氣候の相違で支那の思想は北緯三十五度を中心として黄河の流域に發達し印度の思想は北緯二十五度を中心として恒河の流域に發達した、此黄河の流域と恒河の流域との相違が即ち自然的相違といふ可きである。人事的相違とは社會的狀況の相違であつて征服者被征服者の區別とか社會階級の有無とかいふものは即ち人事的相違に外ならない、今これ等の事實を詳に說明することは略するがその環境の相違が即ち彼れ等の思想の相違を來せる原因であることは疑ない、かくて支那思想は現實的に傾いた所からその結果として政治や歷史には觀るべきものが多いけれども宗教や哲學は貧弱を免れない、印度の思想は非現實的に傾いて居るからその結果として政治や歷史は貧弱であるが宗教や哲學は豐富である、之等は皆その環境の支配を受けたといふ可き結果である。

今これを支那のみに就きて考へんか、春秋戰國の時代に起つた各派の學者の間に思想の相違の存せるは何の爲めであるかといへばやはり環境相違の影響といはれよう、勿論この環境は諸侯の邦國を主とするから當時に於て大環境たる天下に對しては中環境と見做すことが出來やう、而してこの中環境がまた當時學派の思想に影響を及ぼしたことは疑ない、儒教の學說が魯の孔子によつて唱導せられ周公を尊び禮樂を重じた所以は魯が周公の子孫の國として幾分か周の文物の保存せられて居つた關係があらう、墨子の學說が宋に關係ある墨翟によつて主張せられ兼愛を唱ひ平和を尙び節儉を主とし鬼神を信ぜる所以は宋が殷の子孫に封ぜられた國であつて質素にして鬼神を尙ぶ風が猶存し且二回程その地に弭兵の會即ち列國の平和會議を開いたことなど頗關係があらう、道家の學說が陳の苦縣に生れたといはるる老子に依つて力說せられ虛無を尙び仁義禮樂を斥けたことなどは其生國が楚に滅され已に亡國の遺民となつて居つた關係もあらう、勿論それは老子の年代を戰國の初としての推斷である、法家の學說が鄭衞に緣故ある申不害や商鞅によつて開かれ、刑名法術を主とし仁義道德を輕し、極めて峻酷少恩の處ある所以は鄭や衞の風俗が淫靡で人情が浮薄であつた關係もあらう、かくの如

く觀來れば彼れ等の思想に共通の點即ち現實的傾向あるは當時の大環境の影響でありとすればその學說の間に各自の相違する點あるはその中環境の影響によるといふことが出來やう、而して就中儒家の學說即ち儒教が特に二千餘年支那の政教の中心となり思想の根幹となつて居つたのは何の爲めか、且將來儒教の生命は如何になるであらうか、更に進んで觀察して見やう。

第四節　儒教の體系

漢の武帝が儒教を尊崇せる以來、少なくとも二千年間儒教は支那政教の標準となつた、これは單に政府の奬勵や學者の唱道によるばかりではあるまい、儒教自らが他の學派と異なる所の特色がある爲めではあるまいか。

春秋戰國時代の學派學說の相違は中環境の相違と關係あることとは已に述べた通りであるが、特に儒教はその大環境と適合する所が多かつた、儒教の學說や組織は必しも他の學派に比して深遠精密のものでない、理想論としては道家に及はず、實際論としては法家に及ばないけれども、道家の理想論は老子や莊子の考案に過ぎない、法家の實際論は申商韓非の私見に過ぎない、彼れ等は中環境の影響を受けてその說を組織したれども未だ支那の大環境と關係ある經典を持たなかつた、儒家は孔子の時代は學說の組織として見るべき程のものは無かつたとしても彼れ等は他の學派の有せざる經典を有して居つた、この經典こそは支那の歷史に基き民俗を礎とする有力のものであつた、設令その經典の製作の年代等に就きては異說あるとしても時間の上から觀ても空間の上から觀ても支那の大環境の產物であつた、而して彼れ等の教義はこれ等の經典を背景として現はれたので必しも個人の理想や私見にのみ基いたものでない、茲に彼れ等の教義は理想に偏せず實際に流れず中庸を主としてその民族性を基礎としてその長を助け短を矯めんとする努力があつた。故に教義としては支那特有の現實的傾向を有したれど墨家や法家の如く、極端ならず極めて平凡の中に動かす可からざる所がある、從つて支那の大環境に適應する所が最多かつたといふて差支ない。これが支那に幾多の易姓革命があつたに拘はらず二千餘年その國家政教の標準となつた所以で支那文化の一大產物と稱してよからう。而してやがてこれが東亞の諸國に波及し彼の佛教基督教と並びて世界の三大教と稱せられ更に回教を加へて四大教とも稱せらるゝに至つたのである。

さてこの儒教の體系は果して如何なものであるか、これを論評するには先づ佛教や基督教を觀察しなければならぬ。

佛教は世界の宗教の中にて頗古く最高遠のものであらう、特

に大乘佛教の發達するに及びその教理の深遠にして精密なる點は到底他の宗教の企及す可き所でない，例へば華嚴宗の如き天台宗の如き法相宗の如き大乘佛教で說く所の教理の精密深遠のものであるとは今茲に申述ぶるまでもない，けれどもその教理を我が文化の解釋より觀察すれば精神的方面に偏傾して居ることは爭はれない。勿論物質的方面統制的方面が全然無いとは斷言し得ないかも知れないが頗閑却せられて居る，故に彼の浩瀚なる佛教の大藏經の中にも政治論や經濟論は何處にも求め得られぬであらう、これは別に怪む必要はない、即ち佛教其ものは精神的生活を主とし物質的生活及び統制的生活の方面を閑却して居るからである。佛教に於ても固より國家を認め家族を認めるが，然しながら法律制度等の議論に及んで居らぬ。彼の所謂戒律は個人の修養を主とするもので國家社會の上の戒律ではない、即ち佛典の中には政治的方面も經濟的方面も認むることが出來ない，故に物質的文化統制的文化の方面は頗閑却されて居るといふて差支ない，その代に精神的方面は特に開拓せられて高遠深密のものとなつて居る。

基督教は如何であるか。この方面は深く研究して居らぬがその經典を見れば舊約聖書も新約聖書も共に奇蹟に富んで今日の科學的知識から見れば信じ難い所が多い、けれども舊約聖書は儒教でいふと詩經や書經のやうな趣があるやうに思ふ，即ち歷史や政治のことがあり又詩の種類もある、新約聖書の方になると論語のやうな感じがある。即ち教訓となす可き格言が澤山含まれて居る。兎に角儒教の詩經や書經若くは論語などに比較することの出來る經典を有して居るけれどもやはり專ら精神的文化の方面に傾いて居るやうに認められる。新約聖書の中に『吾等の日用の糧を今日も與へ給へ』といふ語があるけれども、『財寶を手に積むな，財寶を天に積め』と言ふて居る、『彼の空を飛ぶ鳥を見よ、蒔かず刈らず藏に收めず然れども爾等の天の父は之を養ふて居るではないか』といはれて居る、これでは物質的文化の方面は閑却せられざるを得ない。彼の七つの「パン」を以て七千人を養はれたといふ話は全く奇蹟であつて事實とは認められないが、物質的方面から考へれば勿論七つの「パン」では七千人のものを生活せしむることの出來ないとは分り切つた話である。かゝる譯であるから基督教の經典には物質的文化の方面が薄待せられて居るのは怪むに足らない。然らば統制的文化の方面は如何といふに舊約聖書の方には法律制度に準ずべきものに言及して居る所もあるがその具體的の記載がない、從つてどんな法律に賴りどんな制度に依る可きかは明でない。從つて政治的方面の記載は頗稀薄である故に統制的文化の方面も物質

的文化の方面と同く基督教に於ても佛教と同樣に閑却せられて居ると思ふ、けれども精神的方面に重きを置いて居る點はこれを認めなければならない。

佛教も基督教もこれ等は皆宗教である。宗教は即ち精神的文化の領域に屬する。即ち精神的生活を對象として進んで來たものに向つてその統制的方面、物質的方面を責むるは或は過酷であらうと思ふ、但希臘などの學者には精神的文化も統制的文化もまとめて說明したものがなきにしもあらずだがこれは宗教ではない、且その學說や教義なりが後世まで綿々として他の宗教と同じやうに見られて今日まで繼續して居るものではない。

然るに支那に現はれた儒教は純粹の宗教ではない、一個の學說の樣にも見られる、けれども實際に於てはやはり佛教や基督教などと相並びて今日猶行はれて居るのであるが、これを他の宗教に比して如何なる所に特色があるかといふに儒教は精神的物質的及び統制的の三文化を綜合して教義を組成して居る。この儒教の特色はやがて支那文化の特色として第一に擧げねばならぬものである。

さて儒教が三文化の方面を綜合して居ると說明する、前に一應支那に現はれた學說教義を更らに觀察して置きたい、春秋から戰國へかけて殊に戰國時代に種々の學說が現はれたがその主なるものは皆國家社會を對象として論じて居る、けれども老莊の一派即ち道家の方は私の文化の定義から觀れば殆文化を否定するやうな說を述べて居る。彼等は國家や社會を認めて居るに拘はらず禮義や智識や學問を排斥して原始的狀態に立ち返らうといふのであるから、或る點から觀れば全く文化否定の說である、けれどもかくの如き樸朴な原始的狀態を理想とし煩瑣にして複雜なる當時の社會を改めんとするを以て精神の滿足を得んとする所から觀ればこれもやはり精神的文化の方面に屬するものといはれぬことはない、その後老莊を繼いで現はれた道教もどちらかといへばやはり精神的文化の方面に向つて進んだものであるが、その中に物質的方面も幾分見出される。所が道家に縁故を有しながら更らに全く異つた反對の說を述べて居る所の法家がある、これは申商韓非の系統に屬する。彼等の國家社會に對する說は法術萬能、物質萬能で農業を國本として生活の安定を得せしめ、その上にこれを法術で統轄して行かうといふのであるから統制的文化と物質的文化とに向つて重きを措いて居るが精神的文化には殆注意を缺いて居る、つまり人類は精神的文化に重きを措かずとも統制的文化と物質的文化とが完全に實現さへすれば茲に人類生活の目的を達することが出來ると見たのである、故に法家の學說は文化の二方面だけを見て居るに過

きない。墨家の學說はどうかといへば精神的文化の方面も注意しまた物質的文化統制的文化の方面にも及んで居るが、何れも徹底して居らぬやうである。即ち精神的文化の方面では兼愛を主として力說して居らるゝが人類の精神に美妙の關係を有する音樂を全然否定する議論を吐いて居る、節儉を主張して物質の尊重を考慮して居るが餘りに極端に流れ物質的生活を向上發展せしむるやうな意見は見當らない。

然るにその間に於て獨り儒家即ち儒教の學說に於ては固より精神的文化を中心とするけれども單にこれに止まらず物質的文化の方面も統制的文化の方面にも相當の注意を拂つて居る。全體春秋の時代は周の中央政府の權力が失墜した結果として地方の諸侯が跋扈するやうな傾向が現はれた。これは統制的機關に故障を生じた爲めである。そこでその統制的機關を新たなる方法を以て建設せんとしたのが覇者の事業である。覇者の事業は全く政治方面から來たので統制的機關の新建設運動である。故に覇者は政治的支配を主とし併せて經濟的施設も重じて居るが然しながら精神的文化を主とするものではなかつた。さて統制的文化や物質的文化のみではどうしても社會の混亂を治め民生の幸福を進めて行くことは出來ない、そこで春秋から戰國へかけて現はれた學派の中には精神的方面を高調する傾きもあつた、**孔子の如きは即ちその一人である。**

孔子は仁を力說して人類の親愛調和を圖つたのは精神的文化の方面に重きを置いたからであるが彼は更に物質的文化と統制的文化との方面も輕しては居らなかつた、論語には政治の方面を論じて居る所が少くない、或人の政を問ふに答へて

足レ食足レ兵民信レ之矣

といつて居る、食を充分にすることは物質文化に屬し兵を充分にすることは國土の擁護に供しやうといふのであるから統制的文化に屬するものである、而して人民がこれを信じなければ兵あつて食があつてもその國家社會を維持して行くことは出來ない、そこで信が必要であるといふことは即ち精神文化の方面に屬する故に足レ食足レ兵民信レ之矣といふことは人類の文化の三方面を言ひ現はしたに過ぎないと思ふ、その他孔子は

不義而富且貴、於レ我如二浮雲一、

といへるは不義の富貴を輕したまでゝ必しも富を卑んだのではない、されば孔子が衞に適きし時に冉有が僕として隨行した、當時衞の人口が非常に夥多なるを見て孔子は庶矣哉と嘆賞した、その時冉有はその上に更に何を加ふ可きかと問ふた所が孔子は富レ之と答へた、冉有は已に庶にして且富める以上は更に何を加ふ可きかと問ふた、所が孔子は敎レ之と答へられた、

これ等も人類の生活には富の必要即ち物質的文化の必要を認められたのである、而して更に教ふ之といつたのは更に精神的文化の必要を認めたのである、この精神的文化の方面に關する事柄は論語の中に到る處に現はれて居るから一々玆にこれを擧ぐる必要はない、統制文化については孔子は禮を重じこれを政治の樞要の機關と見做して居る、この禮は極めて廣汎のもので今日の禮儀法度等は皆その中に網羅せられて居る、故に孔子の教即ち儒教は三文化の綜合を主とし人類の共同生活の安寧幸福を圖つてたものといふて差支ない。

同く儒教の系統を受けた荀子と孟子とは人性の問題に關しては全く正反對の意見を有して居つたけれども、彼れ等は精神的文化を重じたと同時に物質的文化と統制的文化とに就ては頗注意されたもので、孟子七篇の初めの方を繙かば直にその政治論や經濟論に觸れるのである、即ち五畝の宅百畝の田を與へて生活の安定を得せしめやうといふのは極めて單純の議論ではあるが彼の如何に物質的文化の方面に注意したかゞ分る、又その政治論の中には王道を以て支那統一をなさんとするのであるから勿論統制的文化の方面も含まれて居る、荀子は精神的文化を重ぜるは勿論であるがその用を節し民を豐にすることを說いて居る、即ち人類の生活を物質の上から充分滿足せしめることに過ぎない、又彼は禮を力說して居るが禮は統制的機關である、孔子も勿論この禮を重じて居るが、荀子に至つては一層禮を重じた、孔子の時代は禮法一致であつたが、戰國の時代には禮法の分化が行はれて法は主として國家の制裁あるものとなり玆に法家の學說も現はるゝに至つた、荀子も既に禮と法とを分つて居るけれども共統制的機關と見做したとは明である。何となれば彼は人性を惡と見て居るから特に禮の必要を說いて居るのである。これを要するに孔子の後儒家の二大學者たる孟子と荀子とはその學說の相違に拘はらず精神的文化を主とし統制的文化と物質的文化を重じたことは同じである。即ちこの三文化の綜合を以て人類共同生活の安寧幸福を圖らんとしたのが儒教體系の主要の點といはなければならぬ、然るにその後この儒教體系は支那環境の變遷に伴ひて如何なる影響を受けたかを一瞥する必要があらう。

第五節　儒教に及ぼせる環境の影響

儒教の體系は既に前に述べた通りであるがこれが後世環境の變遷によつて如何の影響を受けたらうか、これを述べんには先づその環境の變遷を觀察しやう。

秦の始皇が久く分裂して居つた六國を統一したことは支那の

環境を擴大する機會になつた、而して法家の學説を以て政治の標準となし政權の統一を圖ると同時に思想界の統一を圖らんとした、焚書坑儒はその手段の一端に過ぎないけれどもこれは遂に失敗に歸しやがて漢の國家となつた、漢は楚の地方より起つた爲めに初めは道家の學説を重ずる傾向があつた、當時諸家の學説並び存して居つたが武帝の時に及び遂に儒教を以て國家政教の標準とすることになりこれが大に尊崇せられた所以は儒教が他の學説よりは支那の環境に適應した所が多い爲めといはなければならない、けれども漢の時代は已に春秋戰國の世とは同じではなかつた。儒教の經典は秦火の燼餘を經て蒐集せられたが完全でなかつたのみならず、その文字章句の解釋を必要とするやうになつた、これが訓詁の學風の由つて起れる所以である、西漢の時代には儒教の體系に通ぜる學者も稀にあつたが後漢に至つて學者は全く訓詁の末に全力を傾けその眞の體系を闡明するものもなかつた、且五行讖緯の影響を蒙つてその色彩にも幾分の變化が認められる、當時の儒教經典は教育や人物登用の標準となつたから後漢の士風に影響を及ぼした點が少くない、これが氣節の士の輩出となり黨錮の禍となつて終つた、而してその反動として清談の流行となり老莊思想の全盛となつた。

これに加ふるに兩漢境土の發展と伴ひて西域文化の傳來となり特に佛教の東漸は支那の社會に甚大の影響を及ぼした、即ち三國兩晉南北朝の時代へかけて燎原の勢を以て擴がつた、彼の印度の環境の中に發達した佛教が支那の環境の中に流行する樣になつたのは何の爲かといへば是は決して偶然でない、第一五胡の侵入民族の移動は社會の混亂を來し生命財産の安定を得なかつたこと第二は支那の環境を基礎とせる儒教は經典の訓詁に沒頭するか或は單純の形式に拘はれその體系を發揮するものがなかつたのみならず老莊清談の虚無を尙べる思想の流行はこれを受け容れるに都合の好かつたこと第三は當時佈教の内外俯仰の熱烈であつたことである、かくて佛教は支那の環境の中に入つてからその環境の支配を受けて支那化した所もあるけれども已に環境の一要素となつたが故に支那在來の文化に幾多の影響を及ぼした、而して就中道教の受けた影響は著しい、道教が稍宗教的形式を有するやうになつたのは後漢以來の事でこれが純然たる宗教となつたのは全く佛教の影響を受けてからである、彼れ等は常に佛教徒と抗爭して佛教は老子が西域に趣いて開いたものであると稱し老子化胡經を作つた、この化胡經の殘簡が敦煌石室の中より發見せられたがその初めに老子誕生の時のことを記して

天上天下唯我獨尊

といつたとある。これでは釋尊も老子も殆區別がなくなる、

特に彼れ等の製作した道教の經典の中には、

道士法輪經　靈寶法輪經　老子大權菩薩經

等の名があるが如何に佛教の影響を受けたかゞ分る、唐代に莊子や列子に南華眞經沖虛眞經等の名稱を附したのも佛教の影響で有が日本に傳つて居る唐代の古寫本莊子の斷卷知北遊篇に知北遊品とある篇といはずして品といつた所などは最佛教の影響を現はして居る、之等は單に形式や名義に止まるが唐の司馬承禎の坐忘論の如き吳筠の玄綱論の如きは大乘佛教の教理を應用して居る、これ皆當時の環境支配の作用と見ることが出來やう。

この時に方つて儒教は果して佛教の影響の外に超然たることが出來たか、儒教は已に述べた通り單に精神的方面の開拓を主とする宗教と異り物質的方面も統制的方面も閑却して居らない、これは儒教の現實的にして佛教の如き非現實的のものや道教の如き現實非現實の中間に位するものと異なる所以である、然れども合すれば力強く分るれば力弱し、儒教の體系が三文化の各方面に亘つて居るのはその長所であると同時に短所であるを免れなかつた。故に或る文化の一方面へ深入することが出來なかつたのである、特に兩漢以來儒教の學者はその經典の訓詁註釋に傾倒し更に南北朝の時代に及んでは訓詁に訓詁を重ねるやうになつた、而して物質的方面や統制的方面が閑却せられたのみならず精神的方面も依然として開拓を試みられなかつた、これ儒教の經典が猶在り學者が猶存し幾多の註釋や義疏の現はれたるに拘はらず、依然として氣息喘喘たる有樣の如きであつた譯である。然れどもこの儒教は支那の環境を背景として現れ來つたものであるから猶道教よりは根柢が深かつた、故に佛教徒は道教徒の道佛一致の說を排斥して極端の抗爭を試みたが儒教に向つては彼れ等親ら步み寄らんとし五戒と五常との同きを說き儒佛一致の說を唱ふるものもあつた、かゝる譯であるから兩晉南北朝時代に儒教の經典たる論語を解するに老莊の思想を以てするものもあつたが未だ佛教の思想を以てするものは見當らない、但梁の皇侃の論語義疏の序に

義文兩立理事双該圓通之教如或應示

とあるを見れば全く論語を佛教の圓通の教としたのであるけれども其本文の解釋は佛教の思想を加へて居らぬ、但周易には佛教家の解釋もあつて幾分佛教思想の影響が及んだかと解せられるがその書の存せるものが少い、僅に日本に於て發見せられた講周易疏論家義記第十卷の斷簡位のものである、唐の時代に及んで孔門十哲の稱呼が現はれた、これは論語に

德行顏淵閔子騫冉伯牛仲弓、言語宰我子貢、政治冉有季路、文學子游子夏、

とある、その十人を稱したのである、之を初めて十哲といつたのは佛教に於て釋尊の十大弟子があるのに學んだに過ぎない、此も佛教の影響であらうが儒教經典の解釋には未だ十分の影響は及んで居らぬ、當時五經正義が欽定の書として取扱はれ學校の教科も科擧の試驗も共範圍の外に出づるを許されなかつた、故に正義と異なる說を立つる者は極めて少く且經典の新解釋を試むる者もなかつた、故に儒教は精神的方面に於ても何等の新味を加ふる所なく依然たる殘骸の橫たはる樣の狀況にあつた。

然るに當時佛教は全力を精神的方面に傾け特に大乘佛教の傳來發達は著しく精神的文化の方面を開拓するやうになつた。南北朝から隋唐へかけて三論天台華嚴法相の現はれ精博深遠の教理を研究組成した。世間には隋唐時代に支那に哲學が無いといふ人があるけれどもそれは儒教の哲學がなかつたまでで佛教の哲學は最盛であつたのみならず兩晉南北朝以來流行し來つた佛教の勢力は唐代に至つて最高潮に達したといふても差支ない、故に唐代の士人の儒教の經典にて教育せられ又その科目にて試驗を經て社會に地位を占めて居るものでも佛教思想の影響を蒙らないものはない位であつた、道教は宗教の教理を取り入れたのみならず唐の政府の保護を受けたから尙佛教と對抗して居つたが儒教に至つては已にその體系を開明するもの少く萎微不振の狀態にあつた。

この時に當つて毅然として佛教道教を斥け儒教の復活を疾呼したのは諫迎佛骨表を上つて廣東の潮州へ謫せられた韓愈であつた、彼れは佛教の教典には一瞥しなかつた、故にその原道の一篇は原始的儒教の說明としては或は可ならんも當時既に佛教道教の高遠精密の說に接したものには餘りに粗笨簡略に聞かれたであらう、故にその大聲疾呼したに拘はらずその反響は割合に少かつた、その門下の李翺の復性篇は稍佛教思想の影響を認められるも猶未だ當時の反響を蒙るに至らなかつた。

然れども儒教復活の氣運は已に漸く開かれんとする傾向になりつゝあつた、夫は佛教の發達が已に漸く行き詰らんとするに至つたからである。何んとなれば天台や華嚴法相などの教理は餘りに細密に過ぎ餘りに繁瑣に流れた故に一般民衆に適せざるのみならず士大夫にも飽かれた。そこで唐末より宋代へかけて不立文字、教外別傳の禪宗が盛行するやうになつた、彼の本來無一物何處惹塵埃といつた唐代の六祖慧能禪師は韶州の曹溪に居つて禪宗南派の法脈を開いた人であるがこの禪宗の流行は寧ろ佛教が已に行く所まで往き詰めたと見做すとも出來やう。又道教に於ても已に佛教の模す可きは模し做ふ可きは做ひ最早發展すべき餘地を留めないといつて宜い、故に之等の反動が何れか

の方面に現はれ來るべきは當然である、況や唐は已に滅び五代から宋の初めに及び五經正義は最早何等人心を拘束する力がなかつた、故に宋代に及んでは五經正義に拘はれずして說を立つる者が少くなかつた、故に唐末から宋初へかけて政治的革命と共に玆に精神的方面にも何等かの面目を一新すべき反動の來る可き環境狀態であつた。而してこれが遂に宋代の道學即ち儒教哲學となつて現はれ玆に儒教復活の曙光を見るに至つた。が、儒教本來の體系は如何になつたであらう。

韓愈が儒教復活の聲はその大なるに似ずその反響が割合に少なかつたのは彼れが環境に順應せざるに因る、環境順應とは必しも環境に屈服するのではない、その環境に順應するを圖るのである、故に單に時代のみに順應するのではない、場所にも順應するのである、これが即ち環境順應である、韓愈の時代は已に佛教や道教の思想が一般に普及された時であるから彼が如き單純な議論ではその環境に順應することは出來ない、故に率先唱道の力はあつても遂に反響の少なかつたのは怪むに足らない、然るに宋の濂(周茂叔)洛(程明道程伊川)關(張橫渠)閩(朱子)の諸家に至つては佛教の經典も知り道家の諸書も窺ひ然る後に儒教經典の解釋を試みた、故にその用語に多少佛教の熟語や道教の熟語はあつても其宇宙觀や人生觀等につきて從來の面目を改めたのみならず仁義禮智等の說明もその解釋を新にし茲に儒教に新しき生命を附與するに至つた。これは全く環境に順應したからでその後元明の時代までその流行の勢力を維持した所以は偶然でないと思ふ、然れども儒教の體系たる三文化の綜合を主としたものが精神的方面に偏傾するやうになつて來たことは爭はれない。

勿論宋代の儒者にて政治經濟即ち統制的物質的の方面に力を盡した王安石の如きものもあるけれども彼れ等は精神的方面の開拓にまでは及んで居らぬ、朱子の如きは政治にも經濟にも相當の意見を有つて居つた人であるけれども道義の方面の開拓に全力を注いだ傾がある、故にその末流たる元明の儒者が益精神的方面に偏傾したのは怪むに足らない。明の政府は宋の程朱の學を尊び四書五經及び性理の大全を編輯せしめて教育科學の標準となしてより益その傾向を助長した、彼れ等は朱學を敷衍紹述するに過ぎずその弊は繁瑣と空粗とを免れなかつた、茲にその反動として現はれたのが王陽明の學說であつた、彼の學說は宋の陸象山に淵源する所あるが良知を悟道の要樞となし單刀直入、一切の枝葉末節を斬斷するの概があつた、而して一時その學風は頗盛であつた、これは殆佛教にて華嚴天台法相の餘流が繁瑣空粗に陷つた時代に直指人心見性成佛の禪宗が隆盛を極む

るやうになつたのと相似て居る、けれどもその末流に至つては儒か禪か殆ど區別し難いものすらあつた、空粗の弊は益甚しきに至つた、王陽明の如きは近代の偉人であつて政治經濟の才能識見を有して居つたがその學風は專ら精神的方面の開拓に偏したことは爭はれぬけれども復活した儒教の生命を延長したことは明である。

然るに儒教經典の説明が空理空論に流れた結果その反動として玆に考據の學風が現れた、これは已に明の末世に淵源し清朝に至つて隆盛を極むるに至つた、この考據の學風は一切の空理空論を離れて實事求是であつて學術としては頗價値あるを認めなければならぬ、又經典その他の解釋に寄與する所の多かつたとは爭はれない、けれども彼の浩瀚なる正續皇清經解も儒教の體系たる精神的文化、物質的文化、統制的文化の何れの方面に如何なる寄與をなしたかを疑はざるを得ない。支那の社會には猶儒教の要素の存在するを認むるけれども多くは形式の末に流れて居りはしないだらうか、清朝の時代に於ては學者として儒教の精神的方面の開拓を試みたものが少ないのみならず政治に關係するものは精神的方面を顧みず經濟に從事するものは精神的方面も統制的方面も顧みないやうな所はないだらうか、此の如くにては儒教體系の三文化の綜合實現は容易でない、これは、現在の儒教が環境順應の法則に合はない爲めでないか。

第六節　儒教の革新

支那の環境は元明を經て頗變遷し來つた所がある、特に明の中世以後西歐航海術の發達に伴ひ米大陸や濠洲の發見となり西人東漸の勢漸く盛になり宗教や科學の傳來を見るに至つた、基督教は明末頗盛に入り來つた、けれども佛教傳來の時程の流行傳播を見ないのは基督教の本質が佛教と異なるのみならず支那の環境が佛教流行の時と異なる所がある爲めである、科學に於ては明末已に天文暦法數學地理等の影響を蒙りこれが清朝に及んで居る、特に近代に至つて交通の便利になつたのみならず國際關係の密接になつたことは支那を以て天下とし一大環境となした時と異なり最早世界を以て一大環境としなければならぬやうになつた、故に精神的文化に於ても物質的文化に於ても統制的文化に於ても西洋文化の影響を蒙らなければならぬやうになつた、これが爲めに經濟的方面政治的方面に一大革新を見んとするのみでなく道徳的方面にも影響を受けつゝある、女子の解放を唱へ家族の解放を叫び甚しきは個人の所有權を否認せんとするのみならず國家をも否認せんとするものもあり儒教の如きは舊式文化の遺物として排斥し去らんとするものもある、け

ども西洋文化が果してその儘に移植せらるるであらうか、環境の支配は已に前に述べた通りである、大環境の支配は固より免れないが中環境や小環境の支配も並びに認めなければならぬ、而してその環境に絶對の固定なきと同時に絶對の變遷がないとすれば支那自身の環境に特に順應する必要があらう。

彼の「ルーテル」が宗教改革に成功した所以はやはり彼れがその環境に順應した爲めといはなければならぬ、若し彼にして全く基督教を排斥し新に回教や佛教を輸入せんとしたならば必ず失敗に歸したであらう、何となれば此の如くにては環境順應の法則を無視することになるからである、今や支那は各方面に改革をなすべきものが少くない、而して儒教の革新を試み支那今日の環境に順應するやうにするは急務中の最急務であるまいか。

熟ら按ずるに支那の文化は三大流域と關係がある、三大流域とは黄河流域揚子江流域及び珠江流域である、支那の文化が先づ黄河流域に發達したことは言ふまでもないがその中心は一時山東(齊魯)であつた、これが河南(洛陽)陝西(長安)に移るやうになつたのはその後のことである、揚子江流域は周秦の時代には猶未開の地方が少くなかつた、然るにこれが支那文化の中心となつたのは三國の時呉が今の南京を國都としてから五胡十六國の亂により民族の大移動を來し漢族が中原の文化を携へて南遷しこれを揚子江上に移植してから後のことである、而してその文化の中心は江蘇(南京)浙江(杭州)であつた、黄河流域の文化の觀るべき時代は千五百年に亘る、然るにこれが揚子江流域に移つてからまた今日に至るまで殆一千五百年に近く今猶支那文化の中心たるが如き觀があるけれども余は將來更に珠江流域の文化の前途に多大の望を屬せざるを得ないのである。

珠江の流域は南方に僻在して居つたけれども廣州の番禺は已に漢代から中原との交通のあつた上に海路南洋や印度方面との交通が有た、故に割合に早く中原の文化の影響を受けたのみならず、海外の文化にも接觸したやうである、佛教の支那傳來は陸路と海路との兩筋あるが海路は即ち廣州を入口とした、彼の南朝の佛馱跋托羅の如き菩提達磨の如きは最有名であるが皆廣州より陸路北上して建康(南京)へ赴いたといはれる、回教の傳來も海陸の兩路に分れるが廣府即ち廣州は大食人(アラビヤ人)の貿易場として唐宋の時代に知られて居つた、彼の廣州の清眞寺の尖塔や「ワッカス」の墓の來歷に就きては猶考證を待たなければならぬが唐末に大食人の來住者の多數であつたことは彼れ等の遺した記行の書にても徴す可く從つて同教のこの地に傳來せられたことも疑ない、基督教の傳來にも海陸の兩路あるが陸路より

來つた唐や蒙古の時代は未だ支那文化に大なる影響を與ふるに至らなかつた、然るに明代に廣州へ來つた天主教の教士には利瑪竇があり湯若望があつた、彼れ等は陸路北上して北京へ入り明清の時代を通じて基督の教義を傳へたのみならず特に天文暦法數學地理等に關する西洋科學の智識を輸入して支那文化の上に影響を及ぼしたことが少くない、且澳門は古く葡人の據る所となり廣州は西人貿易の市場となれると猶我が長崎の如き位置にあつたから常に西洋文化の入口となつたのも怪むに足らない、かくの如く廣州は常に海外の文化に接觸したのみならず其民風人情の俊敏輕快なる所から今日に於ても往々新しき文化の謳歌者宣傳者の現はれるのも偶然でない、然らば珠江流域文化の中心は勿論廣州であつてこれが將來支那文化の上に重要の地位を占むべきことも勿論であらう、從つて儒教の革新を特に珠江流域の人士に向つて期待する所以も偶然でないであらう。

宋代の儒教の革新には張橫渠や程明道程伊川も與つて居るから黃河の流域にも關係がない譯はないけれどもこれが創開者たる周茂叔や大成者たる朱文公及朱文公に對抗せる陸象山の生地若くはその居住した地方からいへばその最揚子江の流域に關係の深いとはいふまでもない、故に宋代儒教の革新は揚子江流域に於て完成せられたといふて差支ない、而して朱文公は福建（閩）の地方に緣故が多かつたからこの學統を繼承したものに福建地方の人が少くなかつたのは怪むに足らぬ、この福建は揚子江の流域と珠江の流域の中間に位するけれども地理的には寧ろ後者の流域に屬すべきであらう。故に儒教革新の餘波は當然珠江の流域にまで及ばなければならない、明代に朱子學派に對して一派の旗幟を飜した王陽明は浙江の出身で江西に最緣故を有するが雲南にも居り貴州にも謫せられて居つたから多少珠江流域にも觸れて居る、特に王陽明の前驅と稱せられた陳白沙は廣東の新會縣の生れであつた。また其門下の湛甘泉は廣東の增城縣の人で陽明とは學說を異にして居つたが頡相頏じ當時の學界に並び稱せられた、これ等は儒教革命の餘波が珠江流域に及んだ證據ではないか。然るに清朝に及んでは考據の學の流行の結果この餘波は微々として殆視るべきもののなきに至つた、けれども前に述べた如く明末より近代に及ぶまで珠江流域は常に西洋文化の波に洗はれつゝあつた、この影響は何れの方面にか現はれなければならぬ、即ち前には基督教徒たる洪秀全の（長髮賊）清朝反抗となつて現はれ後には共和主義の孫中山の革命運動となつて現はれた、これ等は皆政治的革新を主とするものであるが未だ儒教革新を標榜するもの現はれなかつた。

廣東の康南海が春秋公羊の學說を奉じ禮記の禮運に見えた大

同の理想を抱き新學僞經考や孔子改制考などを著はし光緒帝に說いて變法自强の策を實行せんとしたのは幾分儒教革新の意義に觸れて居る、けれども彼は一敗して其志を行ふことが出來ず今は上海の郊外に雌伏して居る、香港には中華聖教總會といふものがあつて樂天報を發刊し、又樹棠文集を出板して居る、これは廣東の梁樹棠の儒教に關する論文を集めたもので或は孔子の社會主義を論ずとか或は孔子の富强政策を論ずとか、或は孔子の學說と「マルクス」や「スペンサー」等の學說とを比較したりして居る、これを見ると儒教の面目を一新せんとする革新思想が現はれて居るけれども未だ十分讀者をして首肯せしむるまでには至らない、兎に角現在支那には一方に儒教を以て共和政體の障害物としこれを攻擊する吳虞の文錄の如きものがあるに拘はらず、これを革新して環境に順應せしめんとするものゝあることが認められる、而してこの革新論者に廣東地方の人があるのは將來儒教革新の議論や事業が珠江流域より現れんとする兆候ではなからうか、

儒教を如何に革新すべきかは重大なる問題で今玆に自分の意見を述べやうとは思はない、但曾て漢唐の訓詁が宋代の義理となり儒教經典の解釋を一新してその回復の氣運を助け得たのは當時の學者がその環境に順應するに足るべき學問識見をもつて居つたからであらう、今日儒教の體系が精神文化物質文化及び統制文化の綜合にあることを明にしこれを組織的に說明するには道德政治經濟に關する新しき學問の智識を必要とする、これは朱文公の如き頭腦の明敏にして精力の絕倫のものでなくては難しいが自分は此の如き人物が特に朱江の流域より現はれ出でんことを期待するものである。

環境と文化との關係より觀て儒教の革新は極めて必要なることであるから早晚この期待を滿足せしむる時代が來るであらう、若し果してこの時代が來たならばやがて支那の國土民族に一道の光明を投げ與へる時であらうと思ふ。（完）

（附記）右は大正十三年十二月の四日五日六日に亘り廣東大學に於て講演した大綱である、當時聽講志望者は十餘の專門學校以上の男女學生二千餘人であつたが講堂の狹溢である爲めに千餘名を收容するに止まつた、蓋廣東に於ける日本學者の講演はこれが嚆矢であるといふことである。

經濟時事五題

法學博士 堀江歸一

何を以つて、當面に於ける經濟上の重要問題とするやは、見る人に依つて、自ら異ならざるを得ないであらう。私は其重要問題として、(一)貿易均衡、(二)爲替(三)金輸出解禁(四)銀行(五)失業の五件を取り、順次其一斑を論じた。失業から續いて、勞働立法問題に入る考へもあつたが、紙數の都合上、之を省略し、他日に讓ることゝしたのである。

一 貿易均衡問題

一國の貿易が輸出超過の地位に居るを有利であるとするか、其れとも輸入超過の狀態に居るを順調であるとするかは其れ其れの國情に依つて、定まる問題であつて、一概に斷定を下すを得ないのであるが、我國に於ては、不思議にも輸入超過の行はれて可なる時代には輸出超過であり輸出超過の行れざる可からざる時代に於て、却つて輸入超過に接するが如く、總て經濟上の働きが世人の期待する所と反對に爲つて居り、其れだけ經濟社會を攪亂したり、又は之を混沌たるものたらしめる、此、事は吾人の甚だしく遺憾とする所である。

何を以つて斯かる反對の事相とするか。歐洲戰爭の際我國は貿易關係以外の受取勘定に於て、運賃、傭船料、保險料等の收入の増加した結果として著しく有利と爲つたのであるから、斯る場合には幾何の輸入超過に接したとした所で、毫も其決濟に苦む道理はなく、寧ろ輸入超過の生ずる程に、多額の物資が外國から輸入されて、國民に對する供給を豐富ならしめることを以つて、有利であるとした筈であるのに、當時海外諸國に於て、戰爭に關聯して、我國物資に對する需要の頗る强盛であつた結果、年々多額の輸出超過を生じて、已まなかつた。一方に貿易外の受取勘定の有利である他の一方に、輸出超過の巨額なるものあるに於ては、正貨の吸收されるは甚だしきを加へ、其

調節宜しきを失して、我國經濟社會を惑亂する原因と爲つたことは、今日尙ほ吾人の記憶に新なる所である。

歐洲戰爭の終熄は我國經濟の國際間に於ける狀勢に急變を齎し、往時の輸出超過は忽にして消滅して、連年巨額の輸入超過を生ずるに至つた。斯る際に於てこそ、貿易外の收入超過が豐富であつて、輸入超過を決濟するを得たならば、以つて我國經濟社會の安定に資する所少なからざる道理であるのに、輸入超過と貿易外の受取勘定に於ける減少とは並び行はれ、爲めに正貨取付の勢を甚だしからしめて、以つて經濟社會に壓迫を加へて已まないのである。即ち我國に於ては、輸入超過と貿易外の收入增加と相伴はずして、却つて今日の如く輸入超過の際に、貿易外の收入減少し又往年の如く輸出超過の際に、貿易外の收入減少し、又往年の如く輸出超過の大なる際に、貿易外の收入亦加重すると云ふ事相の生ずる爲めに、時に經濟社會を窮迫せしめたり、又時に經濟社會を混亂せしめたり、其孰れを以つてしても經濟上に不利の趨勢を誘致するに至るのである。斯の如き變態的事實は時に外國にも起ることがなしとしない。合衆國に於て、輸出超過と對外受取勘定の增加とが歐洲戰時から今日に至るまで繼續して居るが如き、英國に於て歐洲戰時數年間、貿易外の受取勘定よりも、遙に大なる輸入超過に接したことの如き、何れも此適例を以つて見るべきものであるが、前者に於ては常に外國に對する資本の放下を試みて、以つて反動的趨勢の到來する危險を回避することに勉めて居るし、後者に於ては、今や右の如き變態から遠ざかり、輸入超過の減少する一方に、對外受取勘定の增加を以つてし、後者を以つて前者を決濟して、斯くて若干の餘裕を生ずると云ふ極めて有利なる狀態を見るに至つたのである。

之を經濟哲學上若しくは經濟政策上の道理に徵して、輸入超過を觀察すると、輸入超過と云ふ事だけでは、必ずしも恐れるに値しない。蓋し之に對して貿易關係以外に於ける受取勘定の伴ふものあり、又其受取勘定の方が入超額よりも、金額に於て大なる場合があるからである。然るに我國に於ては受取勘定の豐なる場合には、却つて輸出超過であつて、受取勘定の乏しき場合に、輸入超過に接すると云ふ狀態を見る。斯くては國民が輸入超過に對して、恐怖の念を懷き、其勢の增進を耳にすれば直に金融市場を警戒せしめ、株式市場を動搖せしめるが如き、對外收入の確實なるものゝ備へられた外國の觀察眼からすれば誠に奇怪なる事相には相違ないが、日本人としては無理ならぬ所と云はざるを得ない。

故に我國にして經濟社界の安全を謀り、又經濟的狀勢の確實

を求めようとする以上は、

第一、輸入超過を抑制し、進んで歐洲戰時に於けるが如き輸入超過の現出することに至らしめるか、輸入超過の或る程度までは止むを得ないとしても、其れを現在の對外受取勘定の超過額に止めしめるか。

第二、積極的に對外受取勘定の增加を期圖し、輸入超過はあつても、右の收入に依つて、之を決濟して、尙ほ餘りあるに至らしめるか

二策の一なり、又は双方なりを實行する覺悟を持たなければならない。第一策に就て考へるに、歐洲戰時我國に現はれた輸出超過の如き、固より戰爭に伴ふ偶然の出來事であつて、今後其再現の望み難きものであることは、論を俟たざる所であるが、本來我國の貿易に於ては、輸出入關係に就て、不安と認めなければならない點がある。其れは外でもない。第一は我國の輸出品が生絲の如き、絹織物の如き、國民生活に於て、需要の緊切ならず、隨つて輸出の數量なり、價格なりの變動し易きものであるに對して　我國は外國から棉花の如き、鐵鑛の如き、將た又食料品の如き必要品を輸入して居ることであり、第二は我國輸出品の販路が殆ど支那と北米合衆國とに限られ、廣く他に及ばざることとである。固より第一の點に就ては、支那に綿絲綿布と云ふが如き、支那人の生活に於て、必要と目される物資を輸出するが如き、除外的事實を見るのであるが、全體の大勢は有用品若しくは奢侈品を輸出して、一方に必要品を輸入すると云ふ有樣である。而して輸出の行はれる對手國の重なるものは、北米合衆國と支那との兩國であつて、他に幾多の市場ありとしても、特に我國輸出品の市場として、重要視するに値しないのである。既に、我國の輸出品が奢侈品であり、有用品である一方に我國の輸入品が食料品であり、原料品であるとすれば、輸出を增進して、輸入を抑制することの困難は貿易の本質に於て、存在して居るのではあるまいか。現に從來輸出奬勵、輸入抑制の目的を以つてする諸種の施設は政府に依つて、試みられた。最近の事實のみに就て見ても彼の奢侈品關稅增率の如きは、輸入抑制の目的から出たものに相違ないが、奢侈品其ものゝ輸入が輸入貿易中の重要なる部分を占めて居らない限り、如何に其輸入を束縛し、制限しようとした所で、何等効果の見る可きものを得ないのである。更に輸入貿易の全體を抑制する全般的政策として、行はれたものは、彼の爲替政策であつて、政府は常に輸出奬勵、輸入防遏の目的を以つて、爲替相場を或る程度まで低廉なる程度に置いたのである。然し斯くすることに依つて、輸入爲替を不利にすることは輸入貿易を妨害するに在る

の、輸入品の內には、多くの原料品が網羅されて居り、其輸入の制限されたり、不利と爲つたりすることは、自ら我國に於て各種製造品の生産費を高からしめて、其輸出を妨害する結果を生ずる。棉花の輸入が割高に付く爲めに、內地に於て綿絲綿布の價格が上進し、其支那に對する輸出を困難ならしめるが如き、明白の事實であつて、斯くして其輸入抑制の目的を以つて、行はれる政策は迂回的に輸出を妨害し、恰も天に向つて、唾すると、同樣の愚に陷らざるを得ないのである。

右の如き事情であるとすると、我國に於て常に輸入を抑制しようとしても、著しき效果はなく、強いて之を行つたならば、他に大なる支障なきを得ない。然らば輸入は從來の儘として、輸出は之を振興せしめる見込はあるかと云へば、合衆國に對して、生絲、絹布を、支那に對して綿絲綿布を輸出するだけであつて、果して其見込ありとするを得るであらうか。合衆國にせよ、支那にせよ、經濟上の狀況は常に變動し、殊に生絲の市價の如きは、其變動に依つて、高低の甚だしきを見る其上に、今や人造絹絲の競爭の恐る可きもの、ある一方に、綿絲綿布は如何に支那四億の民生に取つて、必要品であるとしても、支那人の物資消費力は本來大なるものではなく、之を大ならしめる方便は外國が支那に許すに巨額の借款を以つてし、其借款の收入が諸多の方面に消費されて、支那の人民に廣く撒布するに至る一事の外に、求め可きもの、あるを知らない。殊に內國の物價政策に大なる間違ひがあつて、常に物價騰貴に依つて、工業品の生産費を增高せしめて已まないとしたならば、此點に於ても、輸出振興に對する大なる妨碍の存することが認められる。斯る場合に輸入の抑制、輸出の振興に依つて、貿易の均衡を維持しようとするのは、至難の業とす可きである。

然らば我國の對外受取勘定の金額まで、輸入超過を減縮することが出來るであらうか。我國對外受取勘定の超過額が最も多かつたのは、實に大正七年であつて、五億七千五百萬圓と稱されたのである。然も翌八年以來右の金額は次第に減少し、大正十二年度に於ては、實に一億一千二百萬圓の少額に過ぎざるに至つた。若しも、我國の輸入超過にして、一億一千二百萬圓の程度又は其以內に止まつて居つたならば、對外支拂の點に於ては、先づ以つて安全であると云へる。然しながら實際問題として、輸入超過を一億一千萬圓の程度まで、減縮することが、我國の現狀に於て、果して可能であるかどうか、假に輸入管理制度を布き、又之を勵行したならば、其目的は達し得られるかも知れないが、單に對外支拂に於ける勘定が合つたと云ふだけの話であつて、一方に其國民生活を脅迫し、又國民産業を束縛す

ることの弊害の如何に大なるかを顧慮しなければならない。

玆に於てか貿易均衡問題に關する最後の斷案は輸入超過殊に國民生活並に國民産業の維持に必要なるだけの輸入を許容して、其結果として行はれる超過に對しては、之を決濟して、餘りあるだけの對外受取勘定の超過を作り出さなければならないこと﹅爲るのである。大正十二年に於ける右超過高の一億一千二百萬圓に過ぎざることは、前段に述べた通りである。而して其超過の生ずるのは、對外支出の三億二千二百萬圓に對して、對外收入の四億三千四百萬圓あることの結果であるが、試に對外受取勘定の重なる項目を列記すれば、左の如くである。

	百萬圓
運賃傭船料	一六九
海外事業益金及出稼人送金	八二
保險金及保險料	七四
外國人內地消費	三七
海外放資利益及公債利子	三五

以上の項目を一瞥したゞけで、我國に於ける對外受取勘定が行詰つたものであるかは、明に窺はれるではないか。運賃傭船料の收入は一時海運業全盛の時代には、四億九千五百萬圓に上つたが、今日は其三分の一に過ぎないし、優秀船建造問題が何時までも解決されずして、我國の海運業が外國に比較して、著しき遜色ある今日に於ては、將來に於ける增加も亦容易に望まれない。海外移住民の送還金も、外國人內地消費金も、前者に於ては我國移民の海外到る所に排斥されることを考へ、後者に於ては、漫遊客の渡來其ものに制限のなすことを知つたならば、共に其大なるを期し得られない。唯將來に望みを屬するを得るもの、否我國經濟的運命を打開する爲めに、重きを置かなければならないものは、對外放資に依る利子利益の回收を增加して、國際貸借に於ける我國の地位を有利に展開する一事のみであるが、是れとても第一我國に於ける金利步合が今日頗る不廉であつて、今後低廉と爲る見込みに乏しく、第二我國民に對外的企業の精神に缺けて居り、第三加ふるに既往に於ける對外放資に就て、失敗の事實の歷々たる場合に、幾許の發展を望み得るであらうか。我國經濟的立國の困難は實に貿易均衡の實現せられざること、貿易の不均衡に對抗するだけの對外收入の備はらさる點に存するのである。然も此困難を除却するだけの用意は今日に至るまで、殆ど政府に依つて、講じられて居らない。過般の議會に於て、輸出業者の組合に對して、金融上の便宜を與へる爲めに、資金融通の方法を付けたのは、其一を以つて見る可きものであるが、果して斯の如き小策を以つて、能く之に當るを得るや否やは、大なる疑問の存する所である。

二　爲替問題
三　金輸出解禁問題

右に掲げた二個の問題は互に相關聯して居る案件であるから、一括して此項の下に論述する。上記の如く我國に於ては、貿易上に輸入超過の相次ぐ勢に居る一方に、對外受取勘定の不振であるとすれば、對外決濟の困難が我國の爲替相場に不利の影響を及ぼし、其下落を促すことを以つて、當然の成行としなければならない。固より我國對外支拂の斯く逆勢に居るに當り、其逆であるに隨つて、我國が正貨の拂出を許すなり、又は外債を募集し、其收入に依つて、爲替資金を豐富にするなり、孰れかの政策に出でたならば、爲替相場は決して平準點以下に下落する道理はないのであるが、我國に於ては、內外に有する正貨に限りあつて、一方に對外支拂の逆勢甚だしきを告げる結果、正貨の拂出を容易に行はない。而して外債の募集に就ては、既に大正十三年春之を行つて、我國財政の海外に於て、如何に不信用であるかの事實を暴露した爲め、爾來再び之を行うに就て、躊躇せざる可からざる事情があり、隨つて昨今に於ては、纔に民間會社の外國に於て、社債發行を通じて、調達した資金を利用するに止まる。斯くては對外支拂の加重し來る場合に、爲替相場の低落するのは、當然の事實であつて、一時對相場の三十八弗の底價を示すこと丶爲つたのも、亦怪むに足らない。其後相場に多少の恢復を告げ、最近に於ては、四十一二弗を唱へて居るもの丶、果して此勢を以つて漸次上進して、平準點に達し得るものであるかどうか、私は此點に就て大なる疑を挾まざるを得ないのである。

昨年爲替相場が低落を重ねて、遂に三十八弗に低落し、其我國の不信用を中外に表白するの故を以つて、世間の物議を惹起すや、政府は一方に正貨の拂下を寬大にすると共に、他の一方に必要あれば、內地の正貨を現送しても、三十八弗の相場を嚴守し、是れ以下に低落せしめざることを以つて、政府の方針とする旨を公表したことがある。而して世間亦爲替相場は或る點に定着し、世人をして據る可き所を知らしめれば、宜しいのであつて、其以上の騰貴は必ずしも問題ではないと考へる者もあつた。然しながら爲替政策の目的とする所は平準點に爲替相場を恢復し、金の輸出禁止を解除して、而して貨幣價値を對內的にも對外的にも確實にすることの諸點に置かなければならない。現在政府の爲替問題に處する政策は果して此要求に應ずるものであらうか。其爲す所は單に相場を三十八弗に維持し、是れ以下に低落せしめないと云ふだけであつて、更に一歩を進め

て相場を平準點に近づかしめる工風に至つては、一として試みられたものあるを知らない。幸に最近爲替相場は一時に比較して、上進の勢に居るもの丶、斯の如きは總て、民間諸會社に於て、計畫して居つた外資輸入が有利に行はれたとか、又は行はれようとするとか、輸出入爲替の喰合ひが有利に爲つたと云ふが如き一時的事情に左右されたものであつて、何人と雖も今後此儘に放任された狀態に於て、相場の平準點に達することを想像することはあるまい。即ち根本的に輸出入貿易の均衡を得る一方に、貿易外受取勘定の増加する見込みの存せざる限り、爲替相場は一に政府の方針に依つて、左右されるのであつて、而して政府にして三十八弗維持を唯一の目標として、爲替政策を律すること、從來の如くであり、此の政策の下に、萬一相場が三十八弗以下に下落した場合には、政府は正貨の拂下げに依つて、其下落を防ぐを得るとして、果して之を以つて爲替相場の眞實の安定と稱するを得るかどうか、私は此點に就て、二個の疑點を持つのである。

第一、假に政府の期圖する如く、爲替相場を或る點例へば三十八弗と云ふ如き所に定め、是れ以下に下落せしめざると共に、是れ以上にも騰貴せしめなければ、一見爲替相場の安定と云へるかも知れないが、他の一面から見れば、此事たる政府一個の裁量を以つて、我國貨幣價値の引下げ即ちデヴァリユエーションを行つたと同一視す可きものがあつて、斯る政府の專斷的所置に對しては、議論の起ることを以つて、當然としなければならない。本來一國に於て、貨幣價値の決定される原則を考へると、對內的價値は兌換制度の確實に運用されることに依つて、對外的價値は金輸出の自由であることに依つて、其れ〲維持され、地金に對し、將た又外國貨幣に對して、價値の確定を期するを得るのである。我國に於て兌換制度の運用の不完全であることは、貨幣の對內的價値を低落せしめる所以であるのに、更に近年の如く金輸出の禁止に依つて、貨幣の對外的價値を低落せしめるに於ては、如何なる結果を生ずるであらうか。對內的價値の低落が一般物價を騰貴せしめる原因と爲るのは、爭ふ可からざる所である。而して對外的價値の低落する影響は或は獨り輸入品のみに止まり、他に之を及ぼすこと、對內的價値の低落に於けるが如くならざるやに考へられるが、我國の如く國內主要の製造工業が外國から原料品の供給を受けて、全製品を製造し、更に其全製品が他の諸事業に對して、補助品に充てられる現狀を顧みるときは、對外的價値低落の影響は存外一般に及ぶ道理であつて、之を輕視するが如き、許す可からざる所である。然るに今、政府が其爲替政策として、爲替相場は之を三

十八弗に維持し、其れより低落することは、之を防ぐか、其れより引上げることに就ては、何等の計畫を持たない、又之を行はない、斯くて我國貨幣の對外的價値を低きに置いて、顧みないと云ふのは、恰も貨幣法に於て、金二分を以つて、一圓とするとある規定を改正して、金の純量を一分五六に引下げたのと、結果に於て異なる所はない。政府の手加減一つに依つて、貨幣の減價が自由勝手に行はれ、而して政府自ら減價された儘に、貨幣の對外的價値を据置くことを聲明して、憚らざるが如き專斷の甚だしきものであつて、斯くては契約の履行も、債權債務の決濟も、定期支拂の授受も總て其安全を脅かされるの弊ありと云はざるを得ない。假に爲替相場の維持に就て、政府の聲明した所が將來確實に實現するものとすれば、貨幣の對外的價値低落に依つて、內國の物價は騰貴し、其騰貴したゞけ、一般債權者の如き、俸給賃銀收得者の如き、當然損失を蒙らざるを得ざる道理であつて、前者は利子の引上を、後者は俸給賃銀の增加を計畫しなければ、之に當る能はざるのみならず、政府としても爲替相場を三十八弗に据置いて、其引上を企てず、公然貨幣減價政策を行ふことを表明したからには、之と同時に其雇傭する官吏に對して、減價に相當する增俸を行はざる限り、政府自ら經濟上の關係を不公正ならしめるの非難を免かれないのである。

第二、然し政府に取つては、其豫期に反したかも知れないが、前記の如く最近に至つて、爲替相場は徐々騰貴して、四十二弗邊を上下するに至つた。三十八弗を境界として、相場を其れ以上にも、其れ以下にも變動せしめないでこそ、始めて爲替相場の安定と稱するを得るが、政府の所謂安定なるものは、單に將來の低落に對して、保障を設けたのに止まり、騰貴に對しては、何等の工風を運らして居らない。爲替相場が下落する一方であつて、騰貴することの絕無なる場合には、右の如き方針を以つて、安定を期するとするを得るかも知れない、或は當局者は斯る豫想の下に、如上の方針を決定したものであるかも測り知るを得ないが、斯の如きは、何人と雖も、保證し難しとする所であらう。現に最近爲替相場が四十二弗邊に騰貴し來つた如き、明に政府の爲替相場安定方針を裏切る事實を示したものであつて、政府の爲替對策に何等の價値を認めるを得ざるに至つたのである。

之を經濟上の道理から云へば、爲替相場の低落の不可なるが如く、其上進も亦變動の一種として、到底可なりとするを得ない。現に昨年三十八弗邊に居つた爲替相場が相次いで騰貴した爲めに、市場に幾多の波瀾を及ぼしたのは、明白の事實であり、

又其三十八弗邊に居つた場合に於ても、將來に於ける變動の不定であるの故を以つて、常に當業者をして不安を感ぜしめることを免かれなかつたのである。然るに今や其不安が實際に現はれて、爲替相場の變動、昨今の如くであるとすれば、平準點以外の或る點に於て、相場を安定せしめようとすることの如何に効果なきものであるかを明瞭に爲ると共に、爲替相場の安定なるものは平準點を標準として、相場の高低を律せしめる一事を除いて、他に求められざることが理解されなければならない。或は最近に於ける爲替相場の騰貴にして、眞實の根據の動かす可からざるものがあり、今後次第に其勢を續けて、或る時期の後に、平準點に恢復する道程と爲るものであれば、一時の變動に依つて、當業者に及ぼす打撃は兎に角として、終局の効果の期待される道理であつて、寧ろ斯る期待を促進せしめなければならない筈であるが、現今の狀態に於て、果して其然るを望み得るであらうか。我國の如く、爲替相場の下落甚だしきに至つた場合に、其れが堅實なる歩調を以つて恢復するには、我國の貿易が順調に爲るか、貿易外の收入が増加し、之を入超額に充てゝ、尚ほ餘りあるに至つたか、外國市場に於て、低廉なる利率の下に、我國の募債に應ずる餘裕を生じ、我國亦之に乘じて、募債を行う機會を捉へるに至つたか、三個の事情の總てなり、又其總てゞないとしても、或るものなりの備はれることを必要とする。然るに今、事實に徵して、之を考へると、是等の事情は一として、我國に備はれるを見ない。貿易上の逆調は本年に入つても、必ずしも前年と異ならず、貿易外の受取勘定も亦海運業を始めとして、不振を極めるの有様であり、外資輸入に至つては、英米兩國の狀勢に徵して、其容易ならざること、少なくとも、低廉なる利率を以つて、行はれる望みの薄きことは、動かす可からざる所であつて、何れの方面から見ても、爲替相場の上進に資する確乎たる力の存することが認められない。果して然らば最近對米爲替相場に多少の騰貴を告げるに至つたと云ふが如き、決して上記正當の原因に基づけるものではなく、寧ろ投機業者の懸け引きの之を然らしめる所、多きに依るのである。隨つて今後市場の狀況に依つて、反動的下落を來し、再び世間を騷がすに至るのは勿論であつて、私が昨今の相場騰貴を樂觀したり、又は相場の下落に比較して、相場の騰貴を可なりとしたりする者を愚なりとするに憚らざる所以である。

故に爲替相場の安定を期し、對外取引は勿論內國の取引をも確實なる基礎の上に立たしめるには、爲替相場の律される根本の原則に據り、金の輸出禁止を解くの外に、策の出づ可きものなき道理である。固より昨今の如く爲替相場の四十二弗邊に居

る際に、金輸出解禁を即時に斷行したならば、爲替相場に急激の變動を惹起し、輸入品を現にストックとして所有する者や、輸入品の注文を爲したる者を窮地に陷らしめる恐れあるを以て、即時解禁は之を避けなければならないとしても、爲替相場を引上げて、解禁を行つて、何等の差支を生ぜざるだけの準備を講ずるのが今日の急務であるのに、此般の點に就て、政府として從來何事の爲したものを認めない。私の考へる所を以つてすれば、爲替相場の上進する勢を促進することは、政府の方針如何に依つて、行うに難しとせざる所である。如何にして之を行うかと云へば、（一）政府は金の拂下價格を時々公表する、（二）其價格は必ず時の爲替相場よりも、幾何か之を高い程度に置くことゝするのである。斯の如くすれば爲替相場が金の拂下價格に達せず、其れよりも低き場合には、金の拂下に依つて、金に對する取付は行はれるが、其取付の行はれることは、軈て爲替相場の上進を促すであらうし、相場が斯く上進した場合には、政府は金の拂下價格に再度の引上を行ひ、其引上を行う時期は豫め之を公表し、今後如何なる時期に、如何なる程度を以つて、爲替相場が上進するかを民間當業者に示して、其據る所を知らしめるのも、亦一策であると考へられる。斯る方針にして確定し、政府に於て爲替相場の金拂下價格に到達せざる間、之に到達せしめる一の方便として、金の拂下、之に伴う取付を許す決心さへあれば、幾何かの金の取付に接する外、他に大なる故障なくして、金の輸出解禁の行はれる時機を迎へ得るの道理であり、又右の如き一定せる方針の下に、秩序的に爲替相場に上進を來して、結局平準點に達することの明瞭なる場合には、當業者に於ても、自ら之に應じて、準備を爲すに苦まない。隨つて昨今の如き投機取引に依つて、若干の騰貴を告げたかと思へば、反動來に依つて、下落を來すと云ふが如き亂高下に接するものとは、自ら趣きの異なることが認められるであらう。

論じて茲に至れば、私は英國の金輸出解禁問題に觸れざるを得ない。英國は本年末まで金輸出解禁を實行する豫定であつたが、豫定の時より早く解禁の擧に出ではしないであらうか、其れとも豫定の期限が來れば、更に禁輸を續行するに至りはしないであらうかと云ふことが問題となつて居つたが、最近の電報に據れば、政府は愈々解禁を決行する方針に就き、之に關する法律案は既に下院に提出された。英國の對米爲替相場は近來略平準點に近づいて居つたのであるから、今金輸出の禁止が解かれたならば、直に平準點に恢復す可きは勿論であり、又近年の如く國際貸借の關係が英吉利に順であつて、其受取超過額を以つて、輸入超過を決濟して、尚ほ若干の剩餘の存する以上

は、金輸出解禁の後に於ても、金の取付に對して、自ら安ずる所あるを得る道理である。是等の點から考へれば、英國の金輸出解禁たる、單にその爲し得る所を爲したまでゝあつて、事頗る平凡であるやに考へられるかも知れないが事の玆に至るまでに英國が如何にして戰爭並に戰後の疲弊に依つて、混沌たる狀態に陷つて居つた經濟社會に起死回生の道を與へたかを見るときに、私は英國官民の苦心の大なるものゝあつたことを認めざるを得ないのである。何を以つて其苦心の著しきものとするか。財政に整理緊縮を施して、國民經濟を壓迫する弊を除いたのは其一であり、物價政策を確立して、貿易上の不權衡を匡正し、輸入超過の勢を抑制したのは、其二であり、對外收入の增加を謀ると共に、其れから對外債務を決濟して、尙ほ餘れるものを對外放資に利用することに勉めたのは其三であり、國家の經費緊縮と共に、國民にも亦節約の重んず可きことを敎へて、資本の蓄積に力を致さしめたのは、其四である。是等の事たる、其行はれた今日から、之を見れば、頗る平凡なるものゝみであつて、殆ど奇とす可きに値しないかも知れないが、當時英國が之を爲すや、非常の決心の下に、大なる犧牲を拂つた結果であつて、今回金輸解禁の行はれるが如き、要するに此犧牲と苦心との報ひられたものと云へる。果して然らば單に金の輸出を禁止したのみであつて、此禁を解く可き何等の準備を行つて居らない日本に於て、解禁の機會に接しないのも、亦已むを得ざる所である。然も政府は何時までも我國を金輸禁止の儘に置いて、晏如たるを得るものとするのであるか、私の敢て問はんとする所である。

四　銀行問題

我國の銀行に對しては、私は種々の點に於て、不滿の念を持つことを禁ずるを得ない。殊に最近の狀勢に於て、私の最も不可なりとする所は第一、政府直轄の下に居る特殊銀行が續々不始末を演出し、政府の救援に依つて、一時を彌縫すること、第二市中諸銀行中破綻を暴露するもの多く、銀行に對して、容易に信用を置き難きこと、第三銀行の資金融通能力微弱であつて、銀行自ら金利上進の勢を形ち作りつゝあることの諸點である。

第一の缺點は政府が政略上又は形式體裁上の考へから、適當なる理由の備はらざるに拘はらず、濫に保護特典を賦與して、特殊銀行を設立し、創立開業の曉に、特殊銀行をして然る可き營業の存せざる爲めに、自然無謀なる計畫に趨らしめたり、特殊銀行に對する政府の監督權を利用し、特殊銀行をして強ひて不良の貸付を行はしめ、其回收不能の結果として、銀行を窮地

に陥るの已むを得ざるに至らしめたり。特殊銀行が右の如き事情の下に、破綻を暴露せんとするに至れば、政府の方で、何等か之を彌縫する工風を講じることの略ぼ明瞭である爲めに、自然銀行をして警戒自制の念を薄からしめたりするが如き種々の原因に基くものであつて、特殊銀行の當局者のみを咎責するを得ないかも知れない。然しながら破綻暴露の原因の如何なる邊に在るかを問はず。政府直轄の下に在る特殊銀行に破綻を暴露するもの丶續出するのは、私の遺憾とする所であつて、宜しく事の根元に遡つて、處置せざる可からざる次第である。

更に此際吾人に不快の感を與へるものは、日本銀行最近の金利引下である。金利引下の可否、其時機の當否は今、之を論じない。唯道途の傳へる所に據れば、彼の金利引下たる、必ずしも日本銀行自發の意志に出でたものでなくして、他に強要された結果であるとされる。何ものが如何なる手段を以つて、日本銀行を強要したであらうか。固より世間の風聞であるから、幾何の信を置く可きものであるかは、之を明にするを得ないが、高田商會の破綻以來經濟社會の一部に恐怖心に驅られる者を生じたことは、實際の事實であつて、自他互に相疑うの結果、信用の梗塞、甚だしきに至つた。玆に於てか斯る輩は政府に向つて、今日の儘で推移するときは、如何なる不祥事を經濟社會に誘致して、啻に經濟上のみならず、政治上にも由々しき事態を醸成するやも、測り知るを得ない、當面の困難を糊塗するには、日本銀行の金利引下に依つて、一時なりとも人心を安んせしめる外なき旨を以つて、政府に迫り、遂に日本銀行をして金利を引下げるに至らしめた次第であつて、隨つて過般の金利引下たる今後引續いて金利の引下げられる前提と見るを得るまでに、纏まつた考案の下に行はれたのでなく、一時の急場を凌ぎ、以て目先を變へる爲めの處置に過ぎなかつたと云はれる。然らば此事たる經濟社會の安全と云ふよりも、政權維持の方便として、一國の金利政策の利用された證據であつて、吾人は何としても其可なるを認めるを得ない。高田商會の外に、如何なる商會や、會社が近き將來に破綻を暴露す可き運命に居つたか、之を明にするを得ないが、何れも高田商會と同様に、從來營業上に戒愼す可き所を知らずして、放漫を事とし、以つて、今日に至つたものであつて、隨つて現在の窮地に陥ることを以つて因果應報の然らしむる所とす可き輩ではなからうか。斯る輩を救濟する爲めに、又更に政權の維持に資する爲めに、金利政策を左右するが如き、中央銀行をして政權の下に屈從せしめるものであつて、斯る弊風の存する限り、特殊銀行に幾多弊害の續出するのも、亦怪むに足らない。吾人は彼のゼノア會議に於て一中

央銀行をして政權の外に獨立せしめるの必要」と云ふ一個條の決議されたことの我國に取つて、深き意義ある趣きを認めざるを得ないのである。

第二の普通銀行中に破綻の續出するに就ては、或は（イ）我國に於て好景氣から不景氣に至る過渡的變動の餘りに劇烈であること（ロ）不景氣の繼續する期間の永く、且不景氣の勢の次第に濃厚と爲ること、云ふが如き、銀行業者一個の力に依つては如何ともするを得ない事實に引摺られて、斯る不祥事を出現するに至るとも見られるが、然らば總ての銀行が一樣に破綻を暴露するなり、暴露しないまでも、少なくとも同樣の窮境に陷つて居るかと云へば、必ずしもさうではなく、或るものは頗る安全なる地位に居り、破綻銀行を救助整理する任に當つたり、一二の銀行の失態に依つて、從來自己の關係して居る銀行に不信の念を懷くに至つた取引先を收容したりして、却つて有利なる趣きを示すが如くである。果して然らば破綻銀行には一般經濟社會の變動と云ふが如き廣汎なる原因を外にして、銀行一個に關する特殊の原因の存することが認められなければならない。何を以つて其特殊の原因とするかと云へば、最も顯著なるものは、一の銀行が其出資者の爲めに、金融上の機關と爲り、所謂機關銀行として働くとである。蓋し事業家なり、富豪なりが事業を經營するに就て、必要なる資金を銀行に就て借入れると云ふのは、一般普通の方法ではあるが、銀行に依つて、相當の高利を徵收される苦痛ある上に、資金融通の程度に就ても、亦制限を蒙る。故に富豪事業家にして相當の資金を醵出して、一の銀行を設立し、此銀行が預金利子を拂つて吸收した資金を預金利子よりも聊か高い利子の下に融通するとしたならば、第一殆ど無限に融通を受けるを得るは勿論、利子の低廉であることに依つても、亦利益するを得ると考へられる。斯る考案の下に、設立された銀行は即ち機關銀行であつて、右の如き目的を有するものであるから、勢設立出資者である少數の事業家又は富豪の爲めに、過大の貸付を爲し、隨つて銀行の取引する相手方を少數の人々に限らざるを得ざるに至らしめる。而して斯る少數の取引先が各自の事業に繁昌を告げて居れば、銀行亦彼等に對する貸出に依つて、利益を收め、兩者共に順調に赴くを得るのであるが、若しも事業家の經營する事業に蹉跌を來したならば、其影響は直接に銀行に及び、銀行も事業と共に潰れの悲境に陷ることは、彼の高田商會の沒落と共に、永樂銀行が支拂停止の已むを得ざるに至つた一事を以つて、之を證明するに難しとしたいのである。

第三に我國銀行業界に於ける一の病弊は同業者間の競爭の劇

烈なる一事である。此勢を緩和する爲めに工風されたものは、即ち預金利子の協定であつて、或る程度まで、其行はれることに依つて、銀行の競爭の過度と爲るの趣きを防禦するを得るやに見へるけれども、本來預金利子の如き專ら銀行の取引先に對する信用程度の高低に依つて、定まる可きものである。然るに漠然一の市内に於ける銀行を甲乙二種に區別し、甲種銀行は斯る程度の利子を、乙種銀行は此程度の利子を預金に付す可く、之に違うものには、加へるに嚴重なる制裁を以つてすることゝしたならば、同一種類に配屬された銀行中、比較的信用程度の高き銀行は其程度の低き銀行を壓迫するのは勿論であり、後者にして此壓迫を免かれるには、種々の手段を講じて、以つて協定の精神を蹂躙しようとするに至るのである。隨つて預金利子協定の如き、偶々金融市場に於ける大銀行專制の效果を奏すか、然らずんば徒に銀行業界を攪亂するに止まるのである。

即ち銀行は種々の方法を設けて、預金の吸收に勉める、斯くて預金吸收に就て、銀行の蒙る負擔の大なるや、之を免かれる爲に、第一には高利の獲得を目的として、危險の伴う貸付を敢てし、第二には預金に對する支拂準備金の割合を薄弱にする。二者孰れも經濟社會に變動の生ずると共に、銀行を危險の地位に陷らしめる原因たらざれば、已まざる次第であつて、我國の銀行業に破綻の續出する所以、偶然なりとしたいのである。

右に述べる如く我國の銀行業界に於ては、銀行の數の多きことは、驚くばかりであつて、而して彼等の間に於ける競爭は營業上に幾多の無理を生ぜしめざれば、已まざるに至るのである。然らば斯る競爭の結果として、金利歩合は低落し、此點に於て取引先に利益を與へるかと云へば、必ずしも其然るを斷定するを得ない。小銀行の競爭の劇烈なることは、事實である。然も彼等は資力の小なるを以つて、特色として居るのであつて、隨つて取引先が多少金額の纒まつた融通を求める場合には、小銀行が如何に並立して居つた所で、彼等の力を以つてしは、到底之に應ずるを得ない。斯くて稍や大なる金額の融通を受けんとする者は數に限りある大銀行に之を求めなければならず、大銀行は此點に於て殆ど獨占の地位に居る結果、勢其利子を高くして、以つて獨占的利益を貪らうとし、斯る利子の高きことが一般の金利を右左して、爾が上にも之を高からしめ、小銀行の並立することの如き、金利歩合に競爭的效果を及ぼすに就て、何等資する所なきに至らしめるのである。

然らば我國に於て、銀行の合同を行うと云ふことは、銀行の基礎を鞏固にすると云ふ點から見て、必要であるとしなければならないのみならず、其合同にして、今日社會に發生しつゝある

る群小の銀行を併合して、稍や實力の豐なるものとし、今日の大銀行に對する競爭者を作る結果を生ずるものとすれば、自ら金融に於ける獨占的勢力を打破して、金利の低落を促す力ありと認めざるを得ない。故に銀行の合同にして、單に當局者の勸誘、當業者の之を必要とする自覺のみに依つて、容易に行はれざること、從來の如くであるとすれば、立法の力に依り、例へば或る期限を定め、其以後に於ては、資本金幾百萬圓若くは一千萬圓以下の銀行は存續することを許さず、其時までに合併增資の方法に依つて、所要金額までに、資本金を達せしめることとするのが自ら、我國當今の要務であると考へられるが此點に於ける政府の施設の緩漫であるのは、何としたものであらうか、私の了解に苦む所である。

五　國民生活と失業

不景氣の勢の加はると共に、國民生活の窮迫し來つたことは、爭う可からざる事實であつて、日々の新聞紙を通讀しても、如何に人心の不穩であり、生活の悩々たるかの一斑が現はれる。就中國民生活に及ぼす壓迫の甚だしきものは失業であつて、今や職を離れて、路頭に迷ふ者の群を成す有樣であり、何等か之に對して斷乎たる處置に出でざれば、社會の治安は遂に維持され難きに至る恐れなしとしないのである。平時に於ても失業に處するの道は多々あるであらう。然も今日の如き非常時に於て平時に行はれる失業救濟策が果して幾何の用を爲すを得るであらうか。例へば職業紹介所の活動を促すが如き、平時の失業對策としては、頗る妙であらうが、今日の如く數年に亘る不景氣の結果として、職業其もの丶供給が著しく缺乏し、求職者多くして、求人者の遙に之に及ばざる場合に、如何に職業紹介所を督勵した所で、大なる効果の求めらる可き道理はない。失業保險制度の如きも、現に其制度が既往幾年かに亘つて、實行されて居る國であれば、失業の甚だしき際に、國家の力を以つて、失業保險の基金を豐富にし、制度の運用に遺漏なからしめるを得るのであるが、我國の如く保險制度其もの丶缺けて居る國に於ては、眼前に失業者の簇生を眺め、失業保險の制度があつたならば、如何樣にも之に處するを得ることを知りながら、如何ともするを得ない。然らば我國に於ては、失業問題に當るに就て、非常の手段のなからざる可からざる道理であるが、如何なる方法があるであらうか。其最も簡單なもの、又効果の直接なるものは、景氣の恢復、好景氣の誘導であるが、實際問題に入つて、如何にして其目的を達するかと云ふことに爲れば、幾多の困難が伴う。最近日本銀行が金利引下を行つたとの

き、見方に依つては景氣恢復の一方法であるやに解されるかも知れないが、日銀利下げをして眞實然るものあらしめんとするには、第一日本銀行が僅々一回の利下げに止めず、今後二回三回に亘つて、之を繰返すこと、第二斯る利下に伴つて、市中諸銀行亦相次いで預金利子の引下げを行ひ、第三是等諸種の働きが金融緩漫の大勢を確實ならしめることを必要とするのであるが、日本銀行が僅に一回の利下げを行ひ、然も之を行ふことの可否すら、疑問の裡に在る程の次第であつて、今後の處置、遂に測り知る能はざるに於ては、近き將來に於ける景氣恢復の如き、對內的關係に於て、遂に之を望むを得ない。殊に景氣恢復を促す對外的關係は一として之を見る能はずとすれば、景氣の恢復を通じて、失業問題の解決を期することは、至難の業であると認められる。

玆に於てか失業に對する當面の救濟策としては官公營に係る事業を豫定以上に促進し以つて職業に對する需要を惹起すと云ふことが考へられる。此事たる、一面から見れば、其中央財政たると地方財政たるを問はず、總て經費を緊縮せざる可からざる必要に會して居ることゝ矛盾するものゝ如くであるが、尙ほ經費の內には、財政上の狀態の如何に拘はらず、或る年限內に於て、支辨を必要とするものがある。帝都復興に要する經費の如き、即ち之に當るものであつて、失業の甚だしき今日に於て、此種の事業を豫定以上に促進したならば、或る程度まで勞働に對する需要を盛にして、失業の弊を緩和するを得るに至るであらう。

要するに、我國に於て失業問題の解決に非常の困難を告げて居る一部の原因は、平生の不用意の然らしめる所に歸さなければならない。失業保險制度のなきこと、職業紹介制度の不完全なること、否失業に關する調査すら、統計的に其正確を期する道の備はつて居らないとの如き不用意の甚だしきものであるが、是等の外に更に不用意の一として、勞働組合の幼稚なることが擧げられる。勞働組合の發達が我國に於て之を諸外國に比較して、特に不振の趣に居るのは、必ずしも組織に從ふ勞働者の責任とす可きものではなく、寧ろ法律を以つて、勞働者に與ふべきものを與へず、奪ふ可からざるものを奪つた立法上の缺陷の然らしめる所である。若しも我國に於て勞働組合が平生相當に發達して居つたならば、失業中の組合員に對しては、組合から失業惠與金を交付して、其生活の安定を期するを得べく、失業者の數甚だ多くして、爲めに組合の會計の脅かされる場合には、國家に於て組合に補助金を交付して、組合の行はんとする失業者救助を完成せしめることが失業對策として、最も有効

であると考へられるが、平生勞働組合の發達を妨碍して居つた我國に於ては、斯る簡單にして、有効なる政策は遂に行はれるに道なき次第である。隨つて私は失業對策を採用し、之を實行するの困難に對する責任の多く政府の負う可きものであることを認め、政府が從來の勞働政策に於て、如何に多くの過怠を爲して居つたかを知り、之を機會として、態度所信を共に一新することを、希望して已まないのである。

ヒンデンブルグ大統領の起立事情と今後の獨逸政局

法學博士　米田實

一

四月二十六日獨逸に行はれた大統領選擧の結果、ポール・フオン・ヒンデンブルグ元帥は獨逸共和國第二代元首の榮冠を戴いたのである。これは歐洲政局通の心を驚倒しなかつたとしても、衆庶の耳目を聳動するに足る事件であつた。翌二十七日發表せられた得票數の公式計算によると、保守派非共和聯合候補ヒンデンブルグ元帥の得票は千四百六十二萬票、共和派聯合候補前宰相マルクス氏の得票は千三百七十四萬票、即ち前者は約八十八萬票の差を以て後者を仆し得たのであつた。尤も第三位としては別に露西亜勞農系とその流を同うする共產黨候補テールマン氏が百九十二萬票を占め、自餘の候補に投ぜられたる票數亦た一萬五千票を數へたことを忘れてはならない。

顧みると獨逸が帝政廢止の革命を見てより六年六箇月、新憲法制定を見てより五年九箇月、共和政治の確立さに七を算するの今日その大統領の椅子に、平素帝政恢復を理想とし、廢帝ウ

イルヘルム二世の最も忠實なる臣僕を以て自ら居る老陸軍元帥を迎へたこと、誰か之に對して異様なる皮肉の感じを催さぬものがあらう、又た前海軍大臣チルピッツの如く軍人にして政治家を兼ぬる辣腕家と異り、純粋の軍人に過ぎないハノーヴァーの老將軍を、突如政治の要路に立たしめたことを思ふと、誰か彼に對して滿腔の「氣の毒さ」を覺え無いものがあらう。

然りヒンデンブルグ元帥は純軍人であつた　少しく彼の過去を見んに彼は一八四七年ポーゼンに生れ本年正に七十八歳　日本流に云へば七十九歳である　少年時代陸軍學校において教育せられ　十九歳にして普魯西軍隊に入つたが　爾來その注意は軍事に注中せられ、その事業も軍事に制限せられてゐたのである　彼が陸軍に入つた翌年普魯西墺地利間に有名なる七週間戰爭起るや　當時ダンチツヒ歩兵第三聯隊に屬したる彼はその隊と共にシレジアよりボヘミヤに向つて進入し、一八六六年七月雨中突進サドア戰役に參加し、奮戰猛闘して拔群の功績を擧げたのである　次で一八七〇年普魯西佛蘭西間の戰爭起るや、彼又之れに參加し前回に劣らざる功績を現はし、その結果一八七一年ヴエルサイユに於て獨逸帝國創設、普魯西國王の獨逸皇帝戴冠式行はるゝや、彼又年少ながら軍隊代表者の一人として、この盛大なる式典に列するの光榮をも擔ふを得た。その後彼は漸次昇進し軍團參謀長たること四年の後、一九〇〇年陸軍少將となりカールスルーヘ第二十八師團長に擧げられ、一九〇三年において中將に昇進し、一九〇五年我日露戰爭終了後において更に第四軍團長に擧げらるゝに至つた。而して六年後の一九一一年には彼は引退の時期來れりと看て骸骨を乞ひ　ハノーヴァーの地に閑居したのであつた。實に一九一一年より一九一四年に至る滿三年間は彼にとりての退隱生活であつたのである、ところが世界大戰開始せらるゝや彼又突如召集の命に接し東普魯西における獨逸軍司令官として、露將レンネカンプ及びサムソノフの軍隊を向ふに廻しサムソノフ將軍を戰沒せしめ、九萬の捕虜を得、敵に三萬の死傷を出さしめ、驚くべき戰功を博したのである、これ即ちタンネンベルヒの戰勝としてよく世間に喧傳せらるゝ所である。その後彼は敗北露軍の跡を追ひ、露領波蘭に前進し、一九一五年夏見事ワルソウを陷落せしめ露軍の基礎を破碎したが、ファルケンハイン將軍が獨逸陸軍總司令官の職を去るや　今まで東方戰線に活躍せる彼はその後を襲ふて西方戰線にも重き責任を有たねばならぬことゝなつた、彼の名を帶べる西方獨逸陣線　所謂ヒンデンブルグ線と稱する獨逸ラインが如何に强固だつたかは、何人の記憶にも殘れる所であらう。然かも時非にして　一九一八年十一月遂に獨逸の屈服を見

ると、彼も去つて一九一九年夏以來再びハノーヴァーの故山に隱居し閑雲野鶴を友にして居たことは世人熟知の事實である。而して以上の履歴の内、彼が政治家たる半面が證據立てられた例は、先づ無いと言つても善い、否なそれ許りでは無い、彼の聲名が獨逸國内に最も隆々たる所以を檢しても、それが軍人としての成功に集中せられたことを思はねばならぬ、次きに彼の勢名を殊更らに高からしめ、民心の崇敬を深からしめたのは、又た彼は軍事に專心し何等政治に關與しなかつた爲であつた、若し彼がチルピッツ提督の如く策略縱横の士であり、政治に關與したならば、一方に彼を崇拜し賞揚するものあると同時に他方において彼を非難し排斥するもの續生したことも疑い無き所であつた、然り、彼が純軍人として終始しその言行また彼のルーデンドルフ將軍の如くコセ〳〵し無かつた美點は亦た實に、彼をして所謂獨逸の西郷たらしめ、グランド將軍たらしめたるに外ならなかつたのである

然り彼や本來純軍人である、政治家ではない、然るに、斯の如く政治家にあらざる彼を驅つて今や突如紛爭せる獨逸の政局面に立ち、遂に大統領の榮冠を戴かしめたるは、抑も如何なる理由と事情とに基いたのであらう乎。尤も是れまでも彼を獨逸大統領たらしむべしと說くもの皆無では無かつた一九二〇年時代にもヒンデンブルグ大統領說は伯林において行はれたが、彼自身何等の關係も有しなかつた。今回の大統領選擧においては如何と云ふに彼は矢張り自ら候補たるの意思は毛頭有せず、主に保守系候補たりし前内務卿ヤーレス氏を支持してゐたのである、(序でたが、世界大戰中彼の參謀長として彼と密接の關係あるルーデンドルフ將軍が大統領候補として出馬せるに拘らず、彼は同將軍を推さなかつたのである)、此事實に徴しても彼自から出馬せんとするが如き考へは更に念頭になかつた。現に去る三月二十九日における第一回大統領選擧投票の後所謂國權黨系(保守系)軍人系などが、彼に向つて急に大統領候補たらんことを求むると、彼は二回に亘つて之を峻拒したのである。海軍提督チルピッツを始め彼を擁立せんとする人々の熱心なる運動繼續に對しても、尚彼は動くべくも見えなかつた。最後に至つて周圍の勸誘餘りに繁き爲め彼は遂に和蘭隱退中の廢帝ウイルヘルム二世に書面を致し、その意嚮を徴することゝした。然るにウイルヘルム二世又彼の立候補を贊成し來るに及び、四月八日始めて候補承諾を決定するに至つたのである。尚廢帝は彼の運動費に百萬馬克を出したと傳へられて居る、一九一四年世界大戰の際國家が彼を起用し、東普魯西戰場に立たしめんとしたる場合、彼は二つ返事で應諾したのであつた。即ち八月二十二日午後三

昨大本營より「直ちに現役に服するの用意ありや」との質問來るや、彼は直ちに「用意あり」と返電を發した、而して彼はこの返電が大本營に着くに先ち出發の準備に着手し、同夜三時彼は完全なる用意を整へ停車場に馳せ付けたのである。之に比すると今回の大統領立候補問題には、彼はコウ言ふ果斷が無く、勇氣が無かつた、最初より躊躇低徊容易に決せず、漸く保守系を始め帝政派の熱烈なる運動と、獨逸廢帝の慫慂を見るに及び始めて選擧を争ふべく決心したものに過ぎ無かつた。

然らば彼は如何にして斯く起たざるを得なかつたのであるか、又獨逸の帝政派保守系軍人連は如何なれば、彼の下に走らざるを得なかつたのであるか、予は先づ之を御度いと思ふ。然る後當選後における彼の政治と彼の下における今後の獨逸外交政策に言及して見たいと思ふ。

二

然らば獨逸帝政派保守派がヒンデンブルグ元師をして起たしめる所以は果して何處にありや、と問ふと云ふまでもなく三月二十九日第一大統領選擧に際し、各別々に候補を立て互に競爭し居たる共和黨及共和政贊成諸政黨がその選擧教訓に踏み殆ど全部一致中央黨所屬前宰相マルクス氏を候補たらしむるに決定した爲めに外ならなかつた。蓋し斯く共和黨及び共和贊成諸黨が一候補を後援しその勢力を集中することとなれば、第一回選擧の教訓に照し帝政派保守派の勝利は困難の狀勢に陷るは火を睹るよりも明かで、此場合執らる可き手段として特に人心を收め得べき聲望ある新候補を持ち來り、局面を轉回するにあらざれば成功不可能なりと看取せられた結果に外ならなかつた。予は少しく之を闡明して置き度い。

然らば順序上、先づ今次の大統領選擧は如何にして行はれたかと云ふと何れは遠からず行はれねばならなかつたに相違ないが、大統領エーベルト氏の死去により更にその期日が早められたのであつた、一九一九年七月制定、同八月發布獨逸憲法においては大統領任期は七ケ年と定められて居る。ところが獨逸革命の行はれたるは一九一八年十一月であり、エーベルト氏始めて大統領に選擧せられたは一九一九年二月であり、即ちエーベルト大統領は未だ任期七年に達して居無かつたのである、ところがエーベルト氏に限り本年六月三十日を以てその職を退くこととなつて居た。何故かと言ふと獨逸憲法は大統領が人民に依りて直接に選擧せらる可きものたるを規定して居たのである、顧みると一九一九年春獨逸憲法制定の際、先づ大統領を置くべきや否やについて大いに問題が起り、所謂獨立社會黨の如きは

大統領無用論をさへ説いたが、遂に多數の容るゝ所とならず、愈大統領を置くに決定したのであつたが、同時に、如何なる機關によつて之を選擧せしむべきかゞ又復問題となつた。佛蘭西の如く之を議會において選擧すべしとの意見も現はれたが、是又多數の賛同を得るに至らず、結局米國の如く人民の選擧によるの案採用せらるゝに至つた、同時にその任期につきて議會同樣人民によつて選擧せらるゝ大統領に對し之をして有力ならしむる意味において、その任期を長くするを至當なりと認むる議論多數を占め、遂に任期七年の決定を見たのであつた。ところがエーベルト大統領においては革命以後至急を要する場合でもあり、人民の選擧の規定を含む憲法の制定以前、議會により選擧せられたもので、事情が異りその任期の如き五ケ年と決定されたのであつた、而して五年の任期とすれば既に昨一九二四年を以て期限終了のはずであつたが、國內の政情紛々として不安の狀去らぬ折柄大統領の更迭を不利なりとする議論多く昨年八月に至り、更に向ふ一ケ年間その任期を延長すべく議會において決定しその結果本年六月三十日任期終了のことに變更せられたのであつた、ソコデ本年は是非とも大統領選擧を見なければならぬ狀態にあつたのである。併しこれならば選擧は猶遲く行はれ得可きであつた、その更に選擧の期を早めた所以は何であつたかと言ふと、本年二月二十八日フリードリッヒ・エーベルト大統領が從來の盲腸炎に腹膜炎を併發し、遂に五十四歲（日本流に言ふと五十五歲）を以て白玉樓中の人となれる爲めに外ならなかつた。

エーベルト大統領が死去すると獨逸にては愈憲法及法律の規定に基き大統領選擧を行はざるを得なくなつたのである、獨逸憲法四十一條は大統領候補を三十五才以上の獨逸人たることとし、その選擧を人民直接選擧と定めたのみで、他を一切法律に讓つた。そこで法律を見ると、その選擧に第一回及び第二回選擧の兩關門を造つて居る、第一回選擧は人民の直接投票で、各政黨之に對し候補を立て相爭ふことを得るが、同選擧において當選せんとせば少くとも「全人民投票の過半數」を得なければならない、各候補者中で比較的に第一位の多數を占め得たのみでは當選とはならない、ところが此全投票の過半數を占むることは困難なる場合が多いのである、そこで第一回選擧において當選者なき場合を想像せねばならず、茲において第二回選擧の必要が生ずるのである、然らば第二回選擧は如何と言ふと、この場合においては候補者は全投票數の過半數を獲得するを要せず、該選擧において爭へる候補者中最大多數票を得たるものを、大統領當選者と爲すと言ふのであり、又は第二回選擧に爭

ふ候補者は第一回選擧の候補者たるを要せず、諸政黨が局面に顧みて、新候補者を立つるの自由が認めて居るのである、茲に於て乎三月三日ルーター內閣は諸政黨と協議の末、三月二十九日第一回選擧を行ひ、若し之において當選者なき場合には四月二十六日第二回選擧を行ふことに決定したのであつた。斯く決定すると此第一回選擧に對し、各政黨は獨立的に盛んに候補者を立てたのである、先づ議會において最も多數を占むる社會民主黨よりは、本年五十一歳で目下同黨政治家中最も強き人物として知られ且過去五年間普魯西首相たりしオットーブラウン氏が擧げられた、中央黨は一昨年夏より本年一月にかけ一年有餘に亘り獨逸宰相の地位にあり、又最近一時普魯西宰相の地位に擧げられたる本年六十二歳のマルクス博士を推したのである。國權黨及びその他保守系は曾てマルクス內閣の內務卿として知られ、副宰相でもあり、目下に於てはツイスブルグ市長の地位に在る本年五十歳のヤーレス博士を擧げて來た、ヤーレス博士は疑ひもなく手腕ある人物にして、そのツイスブルグ市長として同地を占領せる佛蘭西官憲に抵抗し、遂に佛國の嫌惡を買ひてツイスブルグより放逐せられたる硬骨漢として、最も保守派の同情と崇拜を受けてゐる人である。次ぎに民主黨はさきにカールスルツヘー大學心理學教授であり、博識にして敏捷なる人物として近來急に政界に頭出し來れる四十五歳のヘルパツハ博士を以て候補とした。共産黨は曾て水夫でありその後運送人夫ともなり種々の勞働種々の職業を經て、各種の體驗を有する年齡僅かに三十九歳、第一選擧における競爭者中最年少者たるエルネスト・テールスマンを候補に立てた。又た巴威人民黨は如何と見ると現巴威首相にして本年五十六歳なるヘルド博士を候補とした、彼は新聞の持主であり元記者たりし經歷をも有し巴威國內において名聲高き人物であるが、一般獨逸においては未ださしたる勢力なきことを忘れてはならぬ。次には近頃急に擡頭し來り昨年五月總選擧においては突如議會に三十二の議席を占め、同年十二月に十四の議席に落ちたるも、尙其活動振りファシストに類すると言ふ國粹黨(獨逸人民自由黨)は如何と云ふに、世界大戰中ヒンデルブルグ元帥の下において參謀長たり大戰後極端に獨逸政界に帝政恢復を策する急進組と目せらるゝ。本年五十九歳のルーデンドルフ將軍を擧げたのである。斯くの如くにして都合七名の候補者、競爭場裡に角逐したが、三月二十九日に於ける各候補者の得票數は如何であつたかと言ふと、全體の人民投票數二千七百萬票のうちで保守黨系ヤーレス博士は一千三十八萬七千票を以て第一位を占め、社會黨候補ブラウン氏七百七十八萬五千票を以て第二位に居り、中央黨マルクス博士に三百八

十八萬三千票を以て第三位を占めた、共産黨のテールスマン氏は百八十六萬九千票を以て第四位を得、民主黨候補ヘルパッハ博士は百五十六萬五千票を以て第五位を占め、巴威人民黨候補ヘルド博士は百二十八萬四千票を以て第六位を收め、而して國粹黨たるルーデンドルフ將軍は僅か二十一萬一千票を以て最低位に墮ちたのである、かくて結局第一選擧においては何人も當選するものなかつたのである、何となれば全投票數の過半數を得たる候補者一人もなかりしが爲めである。

而して四月二十六日第二回選擧は愈行はるゝこととなつたのである。

ところが共和政支持の諸黨即ち、社會、民主、中央、諸黨はその失敗の原因が彼等の分離狀態にあることを知り、茲に協同一致以て單一の候補を推し必勝を期せんと考ふるに至つた。彼等は三月三十一日、その第一回選擧の失敗の判明するや、直ちに中央黨のウイルヘルム、マルクス氏を以つて協同候補とし、第二回選擧を爭ふことを決したのである。而して是等諸派の結束は頗る堅固なるべく思はれた、打明けて之を云へば社會、民主、中央、諸黨の政治家中には、最初より唯一の協同候補を作るを可とする論少からざりし一方、各黨内には他黨候補を擧ぐることに嫌焉たらざるものがあり、又た一部には第一回選擧においては何人も當選する可能性なきを想像し、所謂一の試驗的意味において各候補を別立したる如き事情がないでもなかつた。殊に社會黨方面にては一種の策戰上より若し最初において自黨以外の人物にして仲間派であり然も微温的なりと稱せらるるマルクス博士の如きを候補に擧げたる場合、一部勞働者の投票が或は共産黨に走り、或は棄權するなどの事件招來を憂慮し、ともかく一應自黨候補を擧げ以て味方の投票を集中結合せしめ、一旦その結合を堅固にせしむるを以て便宜なりと考へたものであつた。此等の人々は一旦社會黨味方の結合力堅固となれる後において妥協策を講じ、微温的ながら他黨の人物を協同候補として立つるならば、既に一旦結合堅くなれる社會黨系は一致、當然その首領株の選定せる候補に投票するものと豫測したのであつた。そこで第一回選擧の結果社會黨候補ブラウン氏が大なる得票を獲得し難きを見ると、社會黨は一の妥協策を試み中央黨との間に交換的約束を成作したる後、茲に中央黨のマルクス氏を推すに決定したのである、妥協條件とは如何なるものであつたか、それは既に決定せるマルクス氏の普魯西首相の地位を社會黨首領ブラウン氏に讓らしむることであつた。ブラウン氏は從來普魯西に勢力を有し最近までその首相たる地位に在つたが、帝政派及び共産黨の狹撃に惱まされ一時失勢して

居た、而してマルクス氏は本年二月より三月にかけ大體普魯西首相に擧げられたが、未だ議會に於ける紛議及び反對派の活動に妨げられその地位確立せりとは云はれなかつた。併しともかく普魯西首相たるべき地位に在りしマルクス氏をしてその椅子をブラウン氏に譲らしめ、且つマルクス系は飽くまでブラウン氏を普魯西議會内外において支持することを約束するに至り之と同時に、社會黨系は大統領選擧に際し熱心にマルクス氏を支持することに協定したのである。因に言ふが四月三日社會黨のブラウン氏は普魯西議會で中央派の支持に依り百七十對二百二十の多數で帝政派のペテルス博士を破り普魯西首相の地位を回復したのである。次に民主黨は本來として中央黨のマルクス氏に迎合し傾倒するものでは無い。同黨は帝政時代における進歩黨の後身で、所謂急進系にして新進の智識階級を含み マルクス氏等の中央黨に比して遙かに自由なる思想を懐く分子である。同時にこの分子は自己の主張を持すると同く理想も亦高い、あまり他と妥協するを欲せず、それだけ黨の勢力も發展せず 現在議會においては僅か三十一の頭數しか有しない境遇に立つてゐる。併し大體熱心なる共和政治維持派であるので（尤も黨内には極めて僅少ながら從來の國民自由黨系（現人民黨系）の議員もあるが）、結局共和政治維持の見地からマルクス氏支持に協定するに至つたのである。

社會、民主兩黨が斯の如く妥協し來るとマルクス氏を自己の黨員とせる中央黨において何等議論のあるべき道理がない、既に中央黨は第一回選擧においてもマルクス氏を擧げて居る。無論第一回選擧に先ち保守黨系帝國派系が中央黨を分裂せしめんと企て、中央黨の全部を動かし能はざるまでも、その半を動かし以て玆に社會黨と中央黨との接近狀態を一掃し、所謂「中産階級聯合の大統領候補」なるものを作らんと企てたことがあつた。即ち彼等は之に依つて社會黨系が考へて居る中央民主兩黨と手を携へ「共和政治維持派聯合における大統領候補」を擧ぐるの策を打破せんとしたもので、彼等にとりては確かに賢明なる策であつた、蓋し保守黨系即ち國權黨系は帝政支持派の勢力のみを以てしては大統領選擧に勝利を得ること困難なるべきを考へ、出來得べくんば中産階級の支持を標榜し、この意味に於て社會黨より中央黨を分離し之を帝政諸派と聯絡せしむると、始めて選擧に於ける必勝的團結を實現し得る譯であつた、而して國權黨保守派系が此中央黨を動かすの手段としては、前普魯西宰相ステゲルワルド氏を大統領候補とするの案を立てた。併し之は既に第一回選擧戰において失敗に歸し、第一回選擧後に於ては國權黨系の中央黨分裂並若くに社會黨及び中央黨間の離

難義はもはや行はれざる狀態となつて居た、斯の如くにして共和黨諸派のマルクス氏協同候補策は一瀉千里的に實現を見るに至つたのである、斯うなると大統領選擧における共和諸黨の勝利即ちマルクス氏勝利の見込み十分となり來れるは疑ふべくもなかつたのである。先づ第一回の選擧投票を解剖するに帝政諸派の獲得せる投票數は全體の四割三分にしか當ら無かつた、昨年五月の選擧には帝政諸派は全投票の四割六分を占め、更に同年十二月選擧においては前回より幾分減少して四割五分を收めて居た此の前二回に對比して今回の四割三分は明かに多少の減退なりと云ふも決して妄評ではなからう斯くの如く帝政派の得票が四割三分の成績を收め得たるに對し、共和諸黨の得票はよしや一時的現象なるや否やは別とするも、前回より增加し即ち昨年五月選擧にては全體得票數の四割なりしものが、今回第一選擧においては全體得票の五割に達した、即ち之を昨年五月の數字と比較すれば、得票數において共和黨諸派は四千八十萬票を增加せることゝなる。玆において四割三分對五割の第一回選擧形成に照らし、共和諸黨が協同により第二回選擧に臨めば必ず勝利を得べしと考へたのも、誰かまた不思議とするものがあらう。殊に注意すべき點は第一回選擧に際し、共和諸黨候補の多くが選擧場裡において活躍も運動も試みざりしことである、即ち社會黨候補ブラウン氏の如き、中央黨候補マルクス博士の如き、共に逐鹿場裡に活躍する所なかつたと云ふも過言ではない。之に反して盛に演說を行ひ公衆の前に現はれ運動を試みたるものは實に保守黨系即ち國權黨系人民黨系候補たりしヤーレス博士及び、共產黨候補テールスマン其人であつた、之を外にしては民主黨の弱き候補ヘルパッハ氏が多少活躍せる位であつた、マルクス、ブラウン兩氏が公開演說を試みたる如きは、唯第一選擧に先ち僅一回位に過ぎなかつたと言はれて居る、共和政支持派の運動として選擧場裡に共和政の功績について多少演說せるものありとすれば、それは民主黨候補ヘルパッハ氏であつたのである。何故に斯く活動しなかつたか、その一は中央社會の兩黨が互にその候補をして演說せしむる時は、兩黨の友誼的關係において相争ふが如く見ゆる心配ありし爲めでもあつた、而して第二回選擧に際し大に多少活躍を試みるにおいては一層良好なる成績を收め得べしと、中央社會兩黨にて考へられたのも何の意外とす可きところがあらう、

斯くの如く共和諸黨の陣立漸く成るに及びて、玆に狼狽せざるを得ざりしものが保守黨系であつたのは、自然の理と言はねばならぬ、同系は現在獨逸議會において百四名の議員を有する所謂國權黨及び、五十名の議席を有し例の政界の怪腕家ストレ

ーゼマン氏を首領とすることにより、特別の活躍振を示しつゝある獨逸人民黨、並に議席としては僅か十四名を占め得ざるもその運動振の熱烈なる點において、最も中外の注意を惹きつゝあるルーデンドルフ系の所謂國粹黨（獨逸人民自由黨）之に加ふるに、十九名の議員を占むる巴威人民黨の如きから成つて居る。その中において最も有力なる地位に在り帝政系の運命を背負うと思はるゝ國權黨は、共和諸黨の聯合候補問題に對する善後策につき大いに腐心する所があつた、蓋し第一回の候補ヤーレス博士は手腕においてこそ有力の候補なれども、その名聲と信用とは未だ全獨的ならず、寧ろ局部的であつた、殊に第一回選擧に當り共和諸派が全得票の五割を占めたるに對し、帝政派四割三分に過ぎざりし教訓は、彼等の側をして何等か新作戰方法を採り、若くは一層獨逸人民の尊敬を得、所謂國内の散票をも集め得る程の人物を持出すにあらざれば、勝利困難なることを考へしめた。玆において從來帝政派の中心にして然も有力なる策士と目せらるゝチルピッツ海軍大將は、最もこの間において活躍し自から二回もヒンデンブルグ元帥の説得に努め、他方和蘭に在る獨逸廢帝に對し盛に所見を述べて之を動かし、遂に廢帝をして選擧費の寄附をも爲さしむるまでに漕付け、ヒ元帥をも起たしむるに至つた。ヒ元帥はその戰爭中における偉大なる功績に對しても亦、戰後における中正を失はざりし進退振によりても、國民崇拜の的としてその地位聲望を繼續して居た、そこで最初ヤーレス氏放棄を欲し無かつた人民黨も中途ヒ元帥推戴策に共鳴するに至つたことを忘れてはならない。

ヒ元帥出馬の結果は果してチリピッツ大將の想像せしが如く普通の場合多く棄權する幾多選擧人の參加を見て、同元帥の當選を助けたのである、又た平素帝政派中の穩健派に慊らず急進派として擡頭せし、ルーデンドルフ將軍系も、先輩ヒンデンブルク將軍の出馬と共に飜然態度を改め之を援助するに至つた、斯くして四月二十六日保守系ヒンデンブルグの得票は實に一千四百萬の多きに達したのである。尤も之を以て獨逸全體の選擧票數三千三十萬に對比すると帝政派が所謂五割以上の過半數を占め得たとはどうしても云はれない。帝政賛否の一點のみを以て全投票數を檢する時は、寧ろ反對派稍多しと見るが至當ではなからうか。然らば玆に共和系候補マルクス氏に對し異を爲せるものは何であつたかと言ふに、從來の獨逸共產黨の主張並に共產黨と社會黨との歷史的關係が是れである。獨逸現在の共產黨は一九二〇年總選擧にて議會に十五の議席を占め、昨年五月選擧にては急に増加し六十二の議席を得たものである。同年十二においては減少して四十四名に低下したけれども、尙現在國

逸政界においては一勢力たるを失はない、而して今度の第二回選擧においても、その候補テールスマン氏は百九十萬票を得たのである。若しこの共産黨にして大局に鑑み帝政恢復反對の共通的立場を基にし、共和聯合諸派候補マルクス氏を援助したならば、如何にヒンデンブルグ元帥の聲名を以てしても亦如何に保守人民諸派聯合の勢力を以てしても、やはり勝利の榮冠はマルクス氏の手に收められたに違ひなかつた。何となればヒンデンブルグ元帥は約八十八萬票の差において行はれたのであるから、若し共産黨候補テールスマン氏の得票百九十萬票が全部マルクス氏に投ぜられしならば、彼は百萬票の差を以て優にヒンデンブルグを破りしに相違なかつたからである。併しながら共産黨が社會黨中央黨と協力することは不可能なる所以は、識者が最初より想像せる所であつた。それは獨逸社會黨が妥協政治を行ひ、所謂デモクラシーの發達を以て滿足し、中産階級の政黨とも共和政維持の大主張の下において提携を敢てせるに反し、共産黨はデモクラシーに反對し、露西亞流の無産階級獨裁政治を主張して、極端なる階級闘爭を希望して居るからである、從つて革命當時においても社會黨と共産黨とは全然立場を異にし、極端なる爭ひを續けた、否な本來として社會黨は自己の味方を勞働者に求め、共産黨又同じく味方を勞働者に求むるの立場から見ても、所謂競爭關係にあるので、兩者惡感の强きこと他の政黨間の關係以上に甚だしきものがあつた。而して共産黨は先きに索遜において一叛亂を企て、社會黨政府に壓迫されしのみならず、最近に於ては本年二月十日ライプチツヒに行はれた獨逸チエツカ裁判事件などに現れしが如く、常に國内において政府顚覆の密謀を畫策し、社會黨は之が壓服に努力せねばならぬ關係より兩黨の提携は極端に困難となつて居た。斯の如くして左黨共和聯合派はヒンデンブルグ推戴の當政諸派に破られ、軍人としての試驗に成功せる同元帥は、今や大統領の地位に立ち、政治家としての試驗を獨逸國民の前に又世界民衆の前に受けねばならぬ境遇に置かれたのである。

三

以上は今度選擧においてヒンデンブルグ元帥を獨逸共和國元首たらしむるに至れる經路を述べたものだが、玆において問題となるべきは、ヒ元帥が大統領となれる結果、同國の内政外政上に如何なる影響を生ずべきや是れであらねばならぬ。先づ帝政派より見れば、ヒ元帥の政權掌握の結果、内政に在つては、獨逸帝政の恢復を促進せしむると思惟せらるゝのも、何の不思議もない、何故なれば第一少くとも獨逸國民の半數は既に帝政

の味方たるを明かにせりと見らるゝからである。第二に、ヒンデンブルク元帥その人が極端なるホーヘンツオルレン帝家崇敬者であり、チルピツク、ルーデンドルフ兩將軍と相並んで帝政主義者の中心たると同時に、獨逸大統領の地位が佛蘭西と異り政治上極て有力なるものであるので、同元帥の大統領就任は帝政恢復促進に必ず大効果あるべしと信ぜらるゝからである。併しながら以上の事情の結果、獨逸内政問題としての帝政恢復がしかく急激に行はるゝと見るべきかと言ふと、予は遺憾ながら然りと明答を與ふる勇氣を有た無い。乞ふ少しく之を述べやう。

蓋し吾人とても獨逸國民の思想的傾向及び調子が決して、帝政恢復不贊成なりと云ふのでは無い、寧ろ先づ帝政を翹望する分子少からざることは如何にしても否認し能はざる所である、即ち第一彼の一九一八年十一月の革命の如き、獨逸の國民的思想が共和政治謳歌に變化した結果では無かつた。この革命は寧ろ外國方面より壓迫されし結果、外國に對する政策上の必要から行はれたと見る可きものが多かつた。蓋し當時の獨逸革命は、デルブリユーク博士の口吻を眞似る譯ではないが、全く軍隊中に勃發せる一の暴動程度のものに過ぎなかつた。此さまで有力ならざる一種の叛亂に對しウイルヘルム二世皇帝、バイエルン、サクセン、ウルテンブルクの三王を始め二十二の聯邦君主連が、これを征服する力が無い譯では無かつた、然るに叛亂が起り暴動勃發するや獨逸皇帝を始めとし大小君主連は、何等の抵抗をも爲さず、或は逃亡し或は屈伏し去り、あれ程の革命が血を流さずして成功したのは抑も何故であつたか、云ふまでもなく獨逸が政體を革むるにおいては苛酷なるべき講和條件は寛大となるべきを想像せられたからであつた。それは實に一九一八年米國大統領ウイルソンの諸對獨通牒にも徵して明かな點である、即ち同年十月八日ウイルソン氏は第一對獨通牒に對する回答において、時の獨逸宰相バーデンのマークス親王に對し獨逸政府の意嚮のみを以て足れりとせず是非人民の聲を聽かんことを求め、獨逸政府に對する不信任を聲明したが、第二回對獨逸通牒に對する十月十二日附ウイルソン氏の回答は一層明確に革命を求めてゐると云つても宜い。彼は同年七月四日マウントヴアノンにてその爲せる演説を、同通牒公文中に引用して專制的權力の破壞の必要なることを主張し、進んでこれまで獨逸國民の支配した權力は右マウントヴアノンの演説に云ふ所の「專制的權力である」これを變更するや否やは特に獨逸國民の選擇裡にあるではないかと說き平和に對する先決條件として獨逸政治の變革の必要なる所以を力說したのである。之は獨りウイルソンばかりでなく佛蘭西のクレマンソウも亦獨逸の專制的政治

大臣と雖も之に干渉すること能はなかつた。而して一般の廢帝なる講和條件を得ん爲めに、この革命を默許することが必要だとは、幾多獨逸人の考へであつた、即ち一九一八年、一九一九年の共和政實現は依然として帝政思想に囚はれつゝある獨逸國民の一大部分の術策的默許に助けられたものであり、決して國民多數が共和政治を理解し、完全なる自由意思的選擇の結果になつたものでは無かつた。次ぎにその後共和政治下に於ける成績如何と云ふに、之も人心をして共和政治を謳歌せしむる所以とはならなかつた。這は決して政府の罪のみにあらで、周圍の事情もあらうが、共和政府の遣口が、或は右を顧み或は左を睥み、遲疑躊躇振りを示したことも、與つて力があつた。尤も社會黨は自黨のみを以ては議會に多數を占むると能はず。最初から中央黨及び人民黨の如き異れる分子との提携により、始めて議會に多數を得政府を維持し得たので、彼等の立場としては誠に已むを得ざる所もあつた。併し事情は孰れにせよ、共和政府の内治外交は不振であつたと言つて善い、共內、先づ外政から言ふと、一般獨逸人は共和政治實現の曉には、必ず講和條件寛大となるべきを信じて居たが、一九〇九年六月二十八日のヴェルサイユ講和條約は豫期に反して國民を失望せしめたものであつた。彼のアルサスローレンを佛國に奉還せられたのは已むなしとするも、上シレジアの石炭産地を獨逸より奪ひ、民族主義により當然獨逸領土たり得べしと見られたダンチッヒをも獨逸より引離せるのみならず、世界に過ぎ獨逸植民地は悉く奪ひ去られ　陸軍力は十萬に減少せられたのであつた。斯の如く各種の條件は聯合國の意嚮に從ひ共和政治を採用せるだけの緩和的効果を齎さず一般國民に失望の念を懐かしめたるは疑ふべくもなかつた。之は國民の眼には著しく社會黨共和黨系の新らしき共和政府の政治上における一失敗と映じたのである。尙之に續いて一九二〇年、一九二一年並びに其後賠償問題について爭ひあり、延いて一九二三年一月佛蘭西のルール占領を來したること、及び本年一月當然コロンを退却すべき聯合國軍隊が今以て同地退却を實行せさることなど、又共和政府外交の一失敗と目せられて居るのである。

以上は外交的方面である。然らば一轉内政においても如何と言ふと、之も甚だ芳しからざるものがある。先づ獨逸國民の生活狀態は帝政時代に比して惡化し、低下して居る。成程共和政治行はれて以來勞働者の賃金は名義上增加し、勞働時間又短縮されしは事實であるが、其生活費は却つて驚くべく高まつたことを忘れてはならない。此生活費の極端に膨脹せる結果に對比すれば、今日の獨逸勞働者の受取りつゝある實質的賃金は、僅

前に比し恐しく低下せりとしか見られない。否な之のみでは無い、社會黨系の執政共和系の執政中、資本家系の不當なる活動は依然として盛に行はれ、暴利の手は遠慮もなく伸された、一方に生活の困難あれば他方には恐しき贅澤が各方面に行はれ、貧窮階級の不平は彌が上に募る有様となつた。かくて外交において何等見るべき効果なく内政においても誇るべき事蹟を擧げ得ざりしことは、必ずしも全部、政府そのものゝ責任にあらざるも、人民には政府の責任最も強きかの如く映ずるのは 洵に是非も無い所と言はねばならぬ。

その外、舊帝政時代には一の中心があり、そこに強き權力があつた、強き權力あるが故に國内の安定を得たが、之に反し共和國成立以來は紛擾相踵ぐの狀態を呈せるは、世人周知の事實である、保守黨系ウエスタルプ伯の如き、盛んにカイゼル無き獨逸の不幸を說き、強き政治の恢復を絕叫しつゝあるが、斯の如き聲が獨逸人の間に少からざる共鳴者を有することを否認することが出來ない、その他社會階級としては舊宮廷の壯嚴とその特權とに參與せし從來の貴族分子やら大富豪等は、依然過去の記憶に囚はれてそれ丈けからでも帝政の復活を希望して居る、又軍人連になると、共和政治以來その勢力次第に失墜し、軍縮の結果彼等の地位の益弱められつゝあるを悲み、此點からも帝政の昔を慕ひつゝある有樣である、斯くの如くにして、政治界に於ける帝政派の活動も年と共に加はつて來た、之は過去に於ける選擧の數字にも反映して居る、即ち一九一九年一月の選擧に於ては社會黨全投票の四割四分を占め、中央黨二割一分、民主黨一割八分を占め、共和聯合派の得票、總投票の八割四分を占めたが、一九二〇年六月の選擧になると、社會黨四割二分、中央黨二割、民主黨九分、即ち共和諸派聯合の得票、總投票の七割一分强に減少し、昨年十二月の選擧になると、總投票三千萬票の内共和諸黨の得票（共產黨を算せず）一千四百萬を數へ、全投票の四割六分に減退したのであつた。之れ選擧に現はれた部分であるが、更らに社會的に最近共和政治の不人望的傾向を暴露せるもの、昨年八月十日共和政治樹立第五年即ちワイマール憲法發布紀念祭の光景であつた、當日伯林に於ては何等熱烈の運動もなく罵詈嘲笑の聲が聞かれたのであつた。約五千人ばかりの行列が行はれたが、共和國旗を掲げし家さへ極めて少なく、當日却つて古き帝國旗を掲げ共和政治に對し抵抗的氣勢を示せる人家尠からざりしは、旅人の最も注意を惹ける事件であつた。之に引かへ本年一月行はれし廢帝ウイルヘルム二世の誕生祭は割合に熱心なものであつた。陸軍にても廢帝誕生祭は一九一九年及び一九二〇年各軍隊において行はれたが、陸軍

機關の破壞を求めたのである。斯の如き空氣の中において寛大誕生祭は是れまで思ひ切つて行はれ得なかつたが、本年一月二十七日においては何等の遠慮もなく伯林その他において執行された（廢帝は誰も知る如く一八五九年一月二十七日伯林において誕生す）。新聞紙等も從來聲を潜め居たるものが、本年一月には保守黨機關紙クロイツ、ツアイツングの如き堂々國民に對し「皇帝旗が伯林のホーヘンツオルレン宮殿より再び飜飜とはためく時期到來までは決して業を休んではならぬ」と述べ立て更に憚る所がなかつた。否なこればかりにあらず廢帝誕祭日より約九日前に行はるゝ、獨逸帝國建國祭は本年一月十八日伯林において頗る盛大に擧行されたが、其際伯林に行はれた種々の演説その他の催において、舊帝政時代の國威隆々たりしことを回顧したるもの多く、シール提督の如きはハノーベーリーシエー、クーリーエに寄稿し、國威隆々たりし獨逸の昔を回顧し今日と比較して感慨の聲を發するなど、今日漸次帝政運動が其勢を增大しつゝあるは否定すべからざる所である。斯る際にヒンデンブルグ元帥が大統領たりしことは、帝政派に取り大なる有利に相違ない。何となれば獨逸における大統領の地位は恰も米國のそれの如く極めて有力であり、議會と對立し、決して議會に支配せらるゝことなく、殊に獨逸が小黨分立の國柄なるが故に、内閣組織等の場合には大統領は之を選擇し之を左右し易き點に於て極めて有利なる地位に立つるのである。又た陸海軍、戒嚴令、人民直接投票制度其他各種の點に於て、彼の權力を使ひ得る機會が多い。强き大統領の地位に帝政に熱心なるヒンデンブルグ元帥を擧げしことが現帝政派の發展に有利なるや言を俟たぬ所である。

併し乍ら今日帝政恢復が急に行はるべきやと云ふに、吾々は左樣に容易く進展すべしとは思はぬのである、今回ヒ元帥を支持せる諸黨は根本に於て共和政治に不贊成であるとしても、帝政實現の實際問題につきては、他の帝政派と立場を異にする人民黨あるを忘れてはならぬ。人民黨は舊帝政時代の國民自由黨系に屬し、今日ストレーゼマンを中心として活躍しつゝある所謂資本家事業家系の政黨で、問題の故フーゴー、スチンネス等も此黨に關係が深かつた位である。然るに此等事業家資本家は主義として帝政を可とするもの多く將來その恢復を理想とし居るも、同時に彼等は平和を希望すること最も大なるものがあることを忘れてはならない。何故ならば彼等は自己商業上の關係において、一度戰爭と成り或は内亂勃發せば彼等の商賣は全く上つたりとなる、理想はともかくも現實問題としては平和を愛好し血を見る革命の如きを欲しないのである。然るに獨逸の現

狀は共和派帝政派相半せる狀態だから、帝政恢復の革命相當の紛爭なくして成功し得べへもないのである。殊に彼等に教訓を與ふるは一九二〇年三月伯林において、カツプの帝政恢復革命が失敗せる點である、この革命に對しては社會黨を支持せる全國勞働組合は反對を表し、同盟罷業を行ふて帝政恢復派を沒落せしめたのであつた。そこで本年一月獨逸內閣はルーター氏總理となりその內閣員に熱心なる帝政派の人物シーレー氏を迎へて內務に入れ、同じくシュリーベン氏を拔いて藏相に据ゑ、即ち帝政派はルーター內閣において有力な地位に立てるが、ルークー氏は他方に於て勞働階級に對する心配より、自から國民の前に帝政恢復の意思毛頭なきことを辯護しなければならなかつた。形勢斯の如くなれば到底紛爭なくしては帝政の實現覺束なく、紛爭必ずありとすれば先づ第一にヒンデンブルグ元帥を支持しつゝある帝政派中の人民黨が、內政上の立場より急激なる變革に贊成せざること自然である、第二には外交方面の原因が之を阻害するであらう。蓋し聯合諸國は獨逸が共和政治である以上、危險少しと見るも、一度帝政恢復に向はんか、軍國主義に對する惡感未だ除却せられざる今日必ず各國の警戒を招くべく、佛蘭西の如きは極端に獨逸を蔑視し、之が爲めには英佛間の保障條約をさへ要求せる現狀なれば、反獨的態度を取ることと疑ひを容れぬのである、之れ亦た獨逸政治家遲疑の一因となるであらう、併し上述の如くヒンデンブルグ執政の結果、帝政運動が一層盛となり、その施政が種々の點において帝政派に便利となり得る可能性あることだけは認めなければならぬのである。

四

然らば一轉軍に內政問題たる帝政問題を離れて、外政問題についてヒンデンブルグ新大統領の就任の影響を見ば如何であらう。之につき吾々が第一に問題とすべきはドウズ案に對するそれである、ドウズ案は一方において獨逸の佛國及英國などに對する賠償金支拂の方策も立て、他方に於いて獨逸の財政安定策を確立する獨逸難局解決の一妙案であつたが、同時に之に伴ひ獨逸國內に對する外國勢力の扶植を誘致し來れるものたるは事實である。何となればドウズ案や四億馬克の資本を以て中央發券銀行を設立し、一億馬克は帝國銀行にて出資し殘餘三億馬克は獨逸國民及び外國より各半額宛負擔し、同時に管理者として外人をその重役中に參加せしむるものであつた。又獨逸國有鐵道その他工業機關は擧げて新會社に移され、賠償金支拂並に借金元利支拂の抵當に充當さるゝと共に、外國人をその重役中に迎ふるのであつたからである。斯くて一方賠償問題をも或程度

において解決するが、少くとも外國人の勢力參加と、賠償金支拂の義務を或程度において認むることに關聯し、獨逸國權黨側において異論が起り、それは昨年五月の選擧の機にも現はれたと世上熟知の如くである。併し當時はルールその他ライン地帶のドウズ案賛成主張などもあり、爲めに國權黨側の一半は思ひ切つてドウズ案に反對し得なかつたが、昨年十二月選擧に當りて國權黨員等は大いに是が反對を呼號して止まなかつた。さればヒンデンブルグ執政下に於てドウズ案反對策がとられ、獨逸對聯合國間の償金及び借金問題などに影響を及ぼしはせぬかを憂慮するものあるも一理ありと見ねばならぬ、併し吾々の觀る所を以てすればヒ元帥は必ずしもドウズ案を否認するが如き態度は取らざるべく、假令衷心欲すると否とに拘らず恐らくそこまでは進み得ぬであらう。何となれば之にはヒ元帥支持の諸派中、純國權黨及び、ルーデンドルフ將軍の如き國粹派あれど、やはり獨逸の經濟財政に最も關係深き事業家系の代表者たる人民黨があるからである。即ち人民黨の首領にして長く外交當局者であり現に外交の局に當りつゝあるストレーゼマン氏がドウズ案支持の立場にあり、又支持せざるを得ぬ立場に在ることを忘れてはならぬ。思ふに今日獨逸に必要なるは外資輸入である、外資の援助を借るにあらざれば國内産業の恢復は頗る困難である、だからよしや償金問題等につき異論を有するものありとするも、又外人勢力の國内各種機關に入るに假令異存を挾むものでありとするも、思ひ切つてこの案を放棄することには賛成し得無いであらう。併しながらヒンデンブルグのその他國權黨系擡頭の一影響として見なければならぬものはその對外關係に於ける活動であらう、蓋し獨逸においては何れの政黨もヴエルサイユ講和條約には滿足して居無いが、就中國權黨系は最も之に不滿足を表し、之が修正を希望して居る、次ぎにヒンデンブルグその他の國權黨系は他の政派に比して平素一般に對外硬を主張しせるものである故に必ずや何等かの形式において此等の主張の現れを見なければなるまい。その例として二三のものを擧ぐると、今後獨逸が國際聯盟加入に關聯し普通諸國と同樣の待遇に滿足せず、必ず日本・佛國・伊國・英國の如き大國と均等なる立場において聯盟參加を希望し、所謂國際聯盟理事會における常任理事の一員を獨逸よりも出さんとする如き主張は强硬化するに相違ない。之れは曾て獨逸各内閣も希望せし所だが、保守的勢力增加せる今日においては、必ずこの主張を强めるに相違ない。又獨逸コロンその他における聯合國の撤兵問題等に關しても、聯合國は獨逸の準備制限等に關する義務履行完全ならざりし理由として、本年一月十日に行ふ筈のコロン撤兵を肯ぜざり

しが、ヒ元帥下の政治機關は必らず右撤兵の實現を期すべく、一層强硬なる主張を敢てするであらう。

この外にては例の獨逸領土問題などについても、今後機會ある毎に强硬なる立場を取ることを豫期せねばならぬ。尤も西部國境即ち佛獨間國境問題については、大體それ程强硬論を爲さぬかも知れぬが石炭產地たるザール地帶の將來の運命に關しては、多少、强硬なる主張を試むるであらう。即ち將來人民投票によりて決定さるべきザール領有問題及び、國際聯盟監督下に在るザール政治に關しても相當强き主張を見るに違ひない。併し吾々が殊に獨逸領土問題につきヒンデンブルグ元帥政權掌握の結果當然現はるゝと思ふものは獨逸東國境の修正それである。即ち戰爭前年額三千六百萬トンの石炭を產出する上シレジア地帶は、人民投票の結果を本とし、國際聯盟委員の適當なる解釋判斷に基き、主として波蘭側に附與せられた。之に對しては獨逸は依然として不平を有し、その更正を希望して居る。次ぎにバルチック海沿岸ダンチッヒに對してはダンチッヒ市が人口二十萬、その内六割が獨逸人であり波蘭人は一割に過ぎず、ダンチッヒ總人口七十餘萬、その內獨逸人五十三萬、波蘭人十萬であり、即ち獨逸人多數の故を以て民族主義的に基き當然獨逸に歸屬すべきものとなるに拘らずヴェルサイユ講和會議は他の理由から之を獨逸より引離して自治たらしめた。殊にダンチッヒの外交關係は波蘭によつて行はるゝこととなつたのである。是亦獨逸人が不滿を唱へて措かざる所である。本年二月獨逸が所謂保障條約提案を英佛間に致せる時に當つても、彼は西部國境については飽くまで現狀贊成の立場にあり敢て强き變更を主張するものにあらざるも、波蘭方面即ち上シレジア及びダンチッヒの問題については、將來平和手段により正當なる方法に愬へ、之が變更を希望し得る可能性だけは保留するに力めたのであつた。其他是迄獨逸國內の民論殊に學者その他の議論に見るも東部國境における獨逸の地步を恢復することは、その經濟上においても交通上においても必要だと主張してゐたのである。左ればヒンデンブルグ元帥の執政下において上シレジア問題を始めダンチッヒ、東部國境問題等について一層此主張が硬化するのは、自然の勢であらねばならぬ。予はそこに獨逸の外交上の將來の問題があるを思ひ又延いて之が歐羅巴の政治上に種々なる波紋を生ずる可能性あることをも思はなければならぬ。それを外にしては賠償問題がある、之はドウズ案と關係あり倫敦協約との關係もあるが、やはりヒンデンブルグ元帥その他保守系にては、何とかして機會あれば獨逸に有利なるやう之を變更せんと企つるに相違ない。

ドウズ案その他に太いした累を及ぼさず、殊に同案を支持せる諸國との關係を惡化せしめざる程度において、多少の變更策を講ぜんとすることは正さにあり得べき所と見なければならぬ。

是等がヒンデンブルグ新大統領の執政下に起り得る外交政策上の影響であらうと思ふ、從つて獨逸の外交は活躍の氣味を加ふるであらう、然しそれが果して成功するや否やは未知數である。何となれば共和政治維持のマルクス氏敗北し、帝政派のヒンデンブルグ氏勝利を得た結果、一層佛蘭西側の嫉視を買ふたと言ふ危險があるからである。のみならず英、米等においてもやはり未だ獨逸の舊帝政に關する惡感の消滅せざる以上、それだけ獨逸に對する同情は減殺された筈である。從つて獨逸の外交的活動に對する列強の狀態、換言すれば獨逸の外交的環境なるものを惡化するものと見なければならぬ。獨逸の政治が活躍的となり易き傾向あることは、獨逸人として誠に喜ぶべきが如きも、同時に周圍の惡化することは獨逸の活動策の成功に對して不利なる點ではあるまい乎、併しそれが如何に動くかは無論今後の運用經過に見るの外はない、吾々は江湖諸賢と共に之を今後發展の事實に徴せんとするものである。(完)

生活安定と產業立國

生活不安と產業との關係

杉森孝次郎

一　生活不安の分析

生活不安が成り立つ環境的二事情がある。その一は制度に原因する限りの貧乏だ。そして、他の一は、制度及び慣習によつて必要とされ、聰明な人性によつては害悪とされる種類の卑屈だ。自覺のかたちに於て意識された卑屈だ。

制度が原因で自分または自分たちが貧乏だと意識され、また制度が原因で自分または自分たちが卑屈してゐると意識された時に、その個人または衆人が、その制度を否定しまたは破壊する興味をもつことは自然だ。かれまたはかれらが、さうする實力に自信を持つにしたがつて、さうする實行に移ることも自然だ。

生活不安が貧乏に專ら、常に、必ず、唯一的に原因を有すると考へるならばまちがひだ。その假說によつては、水平社運動でも、弱小民族及び被征服民族の國民主義運動でも、「小作權確立」運動でも、「勞働立法」運動でも、したがつて生產者自治運動は無論のこと、また婦人解放運動でも、およそ現代の生活不安または社會不安に屬する現象は、決して遺憾なく說明されることは出來ない。

貧乏は、たしかに、生活不安の一環境因たりうるが、いな、それ自身が一つの生活不安を意味する事柄にほかならないが、それが制度によつてでなく、自然によつて原因づけられてゐる場合には、その限りに於ては、最も特徴的に生活不安と呼ばれる現象をば、それは構成しない。

ただ、その貧乏の原因が制度にあると意識された場合には、制度はそもく人爲だから、その貧者の側から、その制度に對する不滿足または憤激が自然に發生する。そして、その不滿足または憤激の的が、その制度の擁護者、それによつて個人的または階級的に恵まれる人々に、多少集中的に、されることも自然だ。

ところで、現代または現存の生活不安は、概しては、また主としては、制度に原因する貧乏を、その貧者自身が意識し始めたかたちの生活不安だ。しかし、それに導かれて、現代または現存の生活不安は、次第に、制度に原因する道徳的、精神的、人性的卑屈を意識したかたちの生活不安に移り進みつゝある。そして、貧乏自身が、もつと全體的な卑屈の一外部的特徴にほかならないといふ事實が、段々と理解されて來つゝある。

二　生活不安と産業

産業に於て發達してゐない社會が、産業に於て發達してゐる社會に比して、貧乏さに於ては無論のこと、卑屈さに於ても、全體の結論的計算としては、ひどいことは、つひに疑はれない。かくして、生活不安を救除するすくなくとも一方法は、その社會に産業を發達させるにあるといふ意見は、大要論としては正しい。

けれども、一つの社會が、産業を發達させるためには、相當の方法が必要だ。歴史的には、それは資本主義であつた。産業は、勿論近代式即ち科學利用的産業は、先づ資本主義のかたちを取つて出發した。しかし、この出發期の形式が、その後の發達期の必然的形式たり得ない理は、社會主義の發生及び發達によつてすでに歴史的に證據立てられた。

産業に於て發達してゐないならば、その社會は、産業に於て發達してゐる社會よりも、貧乏さと卑屈さとの兩者を甚だしく持つほかないことは、封建時代とデモクラシ時代とをくらべて見ても顯著だし、現代に於ける産業發達國と産業未發達國とをくらべて見ても顯著だ。そして、これは偶然の現象ではなく、さうあるほかない理がそこに明白に看取される。産業は、實に、社會をデモクラタイズする一大必然力であるのだ。

けれども、産業が資本主義の形式を取つて始まり、また存續し、發達するあひだ、貧乏と卑屈は、徹底的に救除されることは出來ない。資本主義自身に、貧乏と卑屈を必然的、必要的に肯定する組織が固有されてゐるからだ。

第一に、資本主義に於ける私的所有權が、分配の方法、したがつて結果を、比較的に多數者を貧乏づけるかたちに於て作用

する。第二に、資本主義に於ける實質的生産者の大部分が、所有權、したがつて經營權を所有しないことが、その産業の所有主、經營權行使者に對するかれらの卑屈を構成する。

貧乏と卑屈が生活不安の主要因だと確認され、産業はそれを救除する一大方法だと確認され、しかも、資本主義形式に於ける産業は、それ自身のしかたに於て、貧乏と卑屈を保留し且つ創造する性質を、それの部分的性質として、固有してゐることが確認されるならば、生活不安を救除する方法は、資本主義以外の或形式に於て産業を發達させる、或ひは保存するにあると、すくなくともその方法の一要件としては、確認される。

その或形式が、産業の公有したがつてまた公營と、産業の自治有したがつてまた自治營とによつて、比較的に最も好望であることはたしかだ。

この二方法のうちでも、自治的形式が、それが出來さへすれば、公營的形式よりも一層有効な生活不安救除方法であることは明白だ。けれども、産業自治は、その自治者に於ける相當の頭腦と品性と技術とを必要とする。それが準備されないあひだ、産業自治は、實質的生産者の多數によつて、充分にまじめな、そして強いかれら自身間の輿論を形成するまでには要求されない、かりに、一時それがそれまでに要求され、そして着手されても、早く失敗する。産業公營ですらもが、すくなくとも過去の事實が示す限りは、いきなり要求され、いきなり着手され、そして成功した純粹の例はなかつた。

よその事はしばらく別として、日本は、資本主義形式に於て産業を始め、そしてすでに或程度まで發達させた。産業がこの程度にまで發達した社會に於ては、産業が、公營と自治とに手わけして變形し行き、次第に、或ひは出來るだけ、自治の一途に集中的努力を拂ふことは、生活不安救除の方法としても、最も賢明な方法だと考へられる。

資本主義に於ける純粹産業的部分を保留し、他の要素を排除することが、現在の日本の生活不安を救除するための第一的方法だと考へられる。或ひは、資本主義に於ける純粹産業的部分を、資本主義制下に於けるよりも有能に保存することが出來る範圍内に於て、日本は、資本主義に於ける所有權制と經營權制を改廢することによつて、最も有効に現在の生活不安を救除することが出來ると考へる。

農業は、日本に於ては、産業化してはゐないが、それだけに、農業勞働者の熟練は、かれらの自治を可能にするに充分だ。最近、小作權乃至一層進んだ形式としての「耕作權」がかれらの間から要求され、主張され、輿論化されて來たことは、

日本の場合に於ては、かへつて、工業勞働者に對して、かれらの行くべき途を一歩さきに踏みだした一側面的光景がある。

現代に於ては、社會は、國内的であると同時に國際的及び人類的だから、生活不安と産業との關係も、同樣にさうだ。されば、國内的生活不安を救除する方法としての産業も、それが單に國内的産業にとどまるならば、それの組織はどんなに進んだかたちのものであつてさへも、充分に有効であることは出來ない。

この關係は、現在のどの一國にも例外を見いださないが、原料即ち自然資源に於て、及び生活場殊に廣義勞働場に於て、自治力なき國の場合に於て殊に著大だ。日本は、この關係に於て、いの一番に注意される位置にある。

日本が、なかんづく殊に、或ひは、すくなくとも第一焦點的に、支那及びシベリヤとの間に一層充分なる社會關係を造らないならば、日本の國内的生活不安は、救除されるための一大要件を缺く。

純粹産業は、資本主義が批判的に分析された結果の或ものに、聰明なる綜合的、創造的構想が働きかけることによつてのみ可能であると同時に、國民主義が批判的に分析された結果のあるものに、聰明なる綜合的、創造的構想が働きかけることによつてのみ可能だ。現代に於ける生活不安は、すくなくともわが國のそれは、このかたちの純粹産業の發達に、したがつて先づそれの着手に、最も多く救除の手を期待すべき性質のものだ。

稅制、物價、失業その他の生活不安的諸問題は、純粹産業に對する綜合的構想を可能にする或材料ではあるが、より多く、その構想によつて發見され、確認され、解決される位置にあるものにほかならない。

最後に、産業の發達には、組織力、技術力、科學力等は勿論必要だが、性格力が、現代によつて一般に注意或ひは「理解」即ち完全に忘れ切つたほど「百も承知」されてゐる以上に、すくなくとも一事として、最も根本的に必要だと考へる。どうしてかといふに、産業らしい産業が目的とされる日には、それにしたがつていよ〳〵ます〳〵、企業の時間的内容が増す。今年投資して、もしくは着手して、明年利益を回收する。もしくは結果を享樂することを必要として期待する如き性格は、産業の適者ではない。産業は、空間的に社會的であるが如くに、時間的に社會的だ。いはゆる遠い將來を、意味に於て近い現實及びそのすぐ次ぎの瞬間として知り、考へ、信じ、經營する性格もしくはそのかたちの聰明がないならば、そこからは、その人々によつては、産業らしい産業は、社會主義的形式に於てのみそれのみな

らず、資本主義的形式に於てのそれすらも、發生及び發達の機會をえない。

いひ陳るされたことではあるが、國際市場に於ける日本品の粗製濫造の定評、國内市場に於ける和製品の獨、英、米製品との比較に於ての一般的劣質、また支那、シベリア等に曾つて多少の企業または投資を試みた多くの人々の間に於ける、僅からなかつたといふ絶望的、斷念的告白、これらは、わが國民の性格、聰明、知識、訓練が、高級産業の不適者であることを、たとひ部分的意義としてながらも、たしかに意味する。

他のすべての事業または文化に於ての如くに、産業に於ても、識見と目的が淺く、短かく、狭いといふ反省は、われら日本國民として極めて必要なものではなからうか。この反省にもとづく性格改造が企てられないならば、常に忙がしく、しかもつひに最も有意義な閑と富とを持ちえない狀態を、われらは、最も運よく行けたところで、續けるほかなからうと想像される。即ち、そのあひだは、たとひ生活不安は激烈的に活潑であつても、いなそれであるがゆゑに、これを救除する力ある産業は興こらない。

資本主義や國民主義との關係に於て、どんなに純粋の産業形式が造られても、根本の識見と目的と性格に於ける淺、短、狭がすくなくとも反省されないならば、いな實際に改廢されないならば、日本は、すくなくとも國際的に、依然貧しく、依然卑屈せざるをえまいのみならず、國内的にも、紛爭、騒亂、焦躁、不安は、無意義、不聰明に近いかたちに於てのそれらは、絶えまいと想像される。

近西大陸との社會關係を、交通的、移住的形式に於ても、飽くまで充分化することの賢と善と益は、この關係からしても深く考へられる。

國民性格の大陸化、大社會化が、生活不安の問題、産業の發達及び殊に純化されたそれの問題を解く、また聰明に持つためにも、外觀に於て餘りに間接的方面であるに似ず、實力に於ては直接の一要件だと考へるほかない。

社會經濟の見地から考へて、浪費を省き、功用を增す努力が、金融組織や、分配方法の上にも大きく拂はれる、そして、それによつて生活不安が緩減される關係の如きは、産業の公營化的及び自治化的發達の價値の世界内の或關係にほかならない。

生活安定と產業立國

文學博士 三宅雪嶺

產業立國といふ語はやゝ古めかしいが、意義を失つて居らぬ。舊幕時代にも多少の注意を拂ひ、藩によつて隨分力を用ひ、それが維新の際に影響した。上杉家の如き、大藩が小藩になり、何とかして舊臣を維持せねばならず、そこで米澤は土地の割合に窮せず、平田伯が產業組合に骨折つたのも偶然ではない。日本全體として鎖港し、國内に產出する所で維持しようとしたけれど、人口に比して地域が狹く、農夫が米食し難い狀態になつて居り、それを當然とせねばならなかつた。出來るだけ詰めてさへ、幕府を初め多くの藩が財政困難に陷り、富源を求めるを餘儀なくされ、沼地を埋め立てるとか、荒地に灌漑するとか、新工業を起すとか、さまざまな事をした。

明治になつて世界の形勢を察し、國力を增進する必要を感じ、殖產興業といふに重きを置き、不忍池を埋め、上野にかけて茶畑にしようとする意見が出た。政府で設ける博覽會は內國勸業博覽會と稱した。殖產興業が何よりも大切となり、もはや素町人などと云はず、實業家として優遇するものの、如何にするが最もよいかが難問題たるを失はない。農業を捨てる譯に行かず、それと云ふて限りある土地で之を盛んにしても知れたもの、工業を起さねばならず、それよりも商業を急務とするのがあり、漸くして前を農業立國とし、將來に商工立國とすべきを唱へる聲が高まつた。或ひは商業を最も重んじ、士農工商を顚倒し、商工農士とすべしと稱した。農工商か工農商か、之も決定するに難い。何でも產業を盛んにせねばならぬといふに異議あるべくもない。唯一口に產業といふても、範圍が廣きに過ぎ、政府でも各政黨でも之を重んじつゝ、着手に臨んで形式だけの事にならうとする。商工を獎勵しようとすれば農村問題が出で、農村を重んずれば商工問題が出で、何れをも重んぜねばならず、政府で農商務省を商工省と農林省とに二分した。前に工部省といふのがあり、後に工の字が消滅し、此處で再び現はれ出でた。大臣の數を增すの意もあつたにせよ、商工業を標榜

し、その發展に適當なる方法を施すの必要を認めただけは確かである。

犬養氏は革新倶樂部で產業立國を口にし、政友會に入つても之を熄めまい。政友會でも異存あるべきでなく、積極政策として當然とも考へやう。產業立國といひ、立國に語弊を伴ふも、要するに產業を重んずべしと云ふに過ぎない。國家第一の事かどうか。第一となつては種々の問題が起らう。敎化に重きを置くものは默つて居るまい。或ひは神隨がらの道を第一にせねばならぬとするのがあらう。第一第二など云はず、大いに力を產業に攟がねばならぬといふ位の所にして置いてよい。殖產興業から引續いて此處に來つて居るが何の方面を見ても國が貧乏しては行き立たず、國家としても、衣食足つて禮節を知るの形がある。其處で產業革命といふ語に首を傾けながら、之を否定せず、賛成を表するが、產業立國の解釋に關し、殆ど人毎に違ふとし、政府及び各政黨に於て是認するは、多くの資本家と同じく、トヰンビーの所謂產業革命を認め、それでなくてならず、其の外に爲すべき事がないと知つて居らう。實に英國は農業國より商工國に移り、大發展を遂げ、發展を念とする者は、同樣の道を踏まずに居れない。小さな手仕事をして居るのは、新規の機械で大仕懸けに產出するに越した事がない。良い物品を安く製り出し、各地の市場に出し、惡くて高い物品を驅逐すれば、双方の利益になる。米國は一層大規模に之を實現しようとし、動もすれば英國を凌ぎ、世界第一の國力を見せびらかすの勢がある。日本で家庭工業を以つて遂つ付かず、一歩海外に出れば良い物品を安く賣らねばならぬ。內地でさへよくて安い物品が擯まり、何としても大仕懸けにせねばならぬ。勞銀が他國より廉ければ、高價な器械を据へつけるより、多く人を使ふ方が利益あつても、勞銀が高くなつてはさう行かず、人よりも器械と云ふことになる。現在の日本の勞銀では、外國品と競爭するに難く、外國と同じく器械の力を借るの外ない。日本品は高くて惡いとなつては、到る處で驅逐せられるを免かれぬ。それで何としても國の富を計る事が出來よう。其處で產業立國は器械を以て大仕懸けに製造するを意味するか、それで何程か國の富を增すを得やう、或ひは大いに之れを增すを得やう。日本人は器械の使用に於て歐米人に讓らず、讓る所も早晩匹敵するに苦しまない。今日まで國力の發展し來つたのは大部分之に依つて居る。今こそ海運が不景氣なれ、造船術に於いて何國にも劣らず、軍艦で種々邪推せられる所がある。邪推は買ひ被られであり、有難迷惑の次第ながら、器械を使用する能力を認められた所がある。兎も角も東洋で重きをなし、世界の交に發言權を

得たのは、文明の利器を活用するに堪へるからであつて、其點でいよいよ發展するを得るとし、國民が之に比例して幸福を感ずるかと云ふに、其處は斷定を保留せねばならぬ。産業立國で國が富むに相違なく、國が富めば國民の生活程度が高まる筈であつて、生活の程度の高まるのは、いくらか生活の安定を期しても、十分に安定を來すと云へない。

生活の安定は種々の事情を必要とする。國が富んでも、或る階級が富の大部分を占め、他の階級が富と沒交渉な事がないとせぬ。産業革命で國富が增進した結果、新たに國民間に不平を生じ、何とか改革せねばならぬとし、紛擾の絶える事がない。英國や、米國や、領土も廣けれど、國民各自の活動すべき餘地が比較的得易く、未だ得なくても得るの希望があり。頭から蓋で押へられるやうに感じる事が少い。それでも相應に不平があり、制度を變革せねばならぬとし、只不平が險しくなく、一般に現狀を以つて安んじて居る。歐大陸では英米程に活動の機會に接せず、國は如何にあつても、民は不平に驅られる所がある。壓迫もされるけれど、反抗する事も出來る。壓迫されれば、さう云ふものと覺え、諦めて居るやうであつて、苟くも反抗し得ると見るや、何處までも火の手を揚げて已まない。歐大陸とても因によつて事情を異にし、一樣に云へぬが、壓迫對反抗の形跡を認めずに措けない。歐大陸ではトインビーの所謂産業革命に後れ、英國の眞似するを免かれなかつたが、産業革命の革命を企て、其點で英國の敢てしない所に出て居る。英國でも相應に社會主義の熱するもの丶、シンヂカリズムが盛んでない。議は否認の熱が甚だ早い。歐大陸でも其熱が高いと云へぬにせよ、可なりに人の注意を惹き、隨分世間を騷がすことがある。産業革命後更らに革命に導かうとして居る。それが何の程度に進行するか、動反動の繰返されるのが常であつて、近來手酷しい反動もあり、伊國の如き、反動全盛とも云へる。一時起つた勢が永續すると云へず。反動で壓され、それが又常に壓されるものであるが。露國に至つて所謂産業革命を蹂躪して居る。眞に蹂躪したものでなく、機械の力を重んじ、富源を開發する事、英米に讓らぬやうにし、只或る階級で資本を壟斷するを防がうとするのであるとも云ふが、何にしても英米で當然とする制度を破壞して顧みない。これが後に何の狀態になるか。現に疑問眞最中ながら、國家社會の軌道が英米と同一にせねばならぬと限つて居らぬ事を示す。露國革命の原因は、複雜であり、決して一事に歸すべきでないが、帝室財産百億圓と見積られ、貴族が之に準じ、百姓が豚の如き生活をして居つたのが、國民多數の生活を不安にした所ないとせぬ。豚の如くにして生きて居れぬでな

く、宴會もすれば喧嘩もする。面白可笑しく語り合ひもする。豚と何の選む所ないと思ふと共に、ムラムラと疑ひが起り、何故に斯くして日を過さねばならぬのかと疑ふ。勢が許さねば忘れたやうになつて居り、一度び勢が來れば兵卒が寄つて聚つて將校を逐拂つてしまふ。上下の秩序の嚴然として備つて居つたのも勢、上下の秩序の亂れて顚倒するのも勢である。

日本では特殊の國情があり、他國の例を以て推し難いが、他國が樣々な例を示すのを見ない譯に行かぬ。其處で判斷し、前途を過まらないやうにする事も出來る。亞細亞大陸に先じて機械を活用し、立派に超弩級の戰艦を造るを得、寧ろ弩級案を他に暗示した所ある程であつて、産業立國に成功するの可能性を具へ、相應の位置を世界に占め得るも、國民が不安を感ずる事、歐大陸に於けるやうにならずに居られるだらう。日本の貴族富豪は可なりに彈力性があり、一寸見て頑强なやうで、必要に應じて讓步するを厭はない。嘗て貴族院で普選案が國體と相容れぬとし、絶對に反對したが、後に僅かな修正で通過した。珍品五つで噂を撒いた富豪は、普選案反對の條件に於てしながら、本年之に反對しなかつた。階級の軋轢とか鬪爭とか、日本で劇しくならない。今は國民多數の活動すべき機會が各方面に開けて居ると云へず、なかなか窮屈であつても、頭から壓迫せられる事も少い。失業者四十萬人が何とも救ふべき道ないと云ひ、憂ふべき事であつても、此邊に氣付いた所は、其の甚だしきを極めるに至らないのを示して居るでないか。租稅に累進法を適用するの多くなるのも、悟るに遲くない事を證する。産業立國の聲の聞えるに比して、産業が發達せず、尚ほいよいよ力を加へねばならぬが、口ばかりでもなく、十年二十年を通じて見れば、明かに發達し來つた。それで社會主義に氣着かぬ程遲鈍でなく、有産階級と無産階級との關係に注意を拂ふ所があり、國民生活の安定を念とするは産業革命の利を得て其の弊を少くするに與つて居らう。産業革命の再革命を必要とするに至るまい。産業革命も十分でなく、生活安定も十分でなく、微温いやうでも、或る程度まで成功し、他の若干國で羨むやうな事ないではない。それで滿足すべきでなく、自ら是認する所を何處までも實現するに努めねばならぬが、事實を事實として餘り悲觀すべきでない。

生活安定と産業立國

水野廣德

議會が終つて花が散り、武藏野の原が若葉に燃ゆる頃となると、毎年の年中行事として樣々の會議の名の下に官費旅行で田舍役者の東京見物が始まる。浮草稼業とか云はるゝ地方長官會議も亦其の一である。良二千石や不良二千石が御家來の屬官二三名も引具し、縣用自働車までも持込んでの大名旅行。連日連夜二次會三次會の御馳走責めに眠むい眼をこすつて扨て何を會議することやら。今年も鯉幟さつき風に飜へる五月の節句から會議の幕が開かれた。地方に歸へれば百姓達をして土下座させんばかりの權威隆々たる御前閣下の地方長官四十幾人が、小學校生徒の如く御行儀良くキチント据つて首相以下各大臣の朗讀訓示を拜聽する殊勝さ、作法見習の爲め威張るが商賣の田舍の役人共に見せてやりたい。

恒例に依つて會議のイの一番に首相の訓示があつた。普選の實施、貴族院の改革、財政行政の整理など現內閣の手前味噌を並べた末、稅制整理、勞働立法、行政刷新、生活安定、産業振興などの必要を述べて居る。何時もながら底の上つた「菓子折」同樣盛りは澤山だが內容は案外空疎である。巨額の旅費を使つて態々呼び出すまでもなく、活版摺で配れば澤山だとは、何時も新聞で見る蔭口である。地方費激增の今日、財政整理も、行政刷新も、先づ此邊から始める必要は無いのであらうか。

政友、革新、中正の三派合同とか併合とかの聲書の冒頭に『政治の要は國民生活を充實し、個人としては生を樂み、國家としては富强を爲すにありと信ず』と云つて居る。政治は生活なりなどゝ舊い詞は扨て置き、『個人としては生を樂み』の文句は頗る氣に入つた。權勢利慾の前には餓虎の如き政治家なる者の冷血の體中にも、尙ほ此の暖かな人間味があつたかと思へば幾分頼もしい氣がする。併し彼等自身のみの生を樂まれたのでは殘りの國民は助からない。元來「生を樂む」ことは死を厭ふことである。今後、國民に向つて「死ね〳〵」と教育した

り、國民をして生を呪はしむる如き政治は一切遠慮して貰ひたい。

◎

「生を樂む」爲めには生活の安定が第一である。此の問題に關して加藤首相は地方長官に對し左の如く訓示して居る。

近時產業の異常なる發達と共に社會組織に多少の缺陷を生じたと認めらるゝ點がないではないのであります。若し之が甚しきに至るに於ては生活の不安を生じ人心に安定を缺ぐの虞なしと致しません。是に於て一面には大に民間の產業を興し生產を旺盛ならしめると共に、他面に於ては分配を公正ならしめ以て社會不安の源を塞ぐの必要があると信じます。

近時我國の產業が果して「異常」なる發達を來したか否かは疑問であるが、社會組織に「多少」でなく、大なる缺陷の生ぜることは、「認めらるゝ點がないでもない」などの生優しいことではなく、大に、明かに而かも深烈に認められると信ずる。「若し之が甚だしきに至るに於ては」でなく、既に已に甚だしきに至つて居るのである。今日生活の不安を感ぜざる者が六千萬國民中果して幾何人あるであらうか。現代人心の安定を缺けることは殺伐悲哀なる社會の實相に目を注げば、「虞なしとせず」などゝ悠長なる文句で體裁振つて居ることを許さない。此まゝ進めば十八世紀末の佛國の轍を踏むであらうとは、心ある者の常に憂ふるところである。之が對策として「民間產業の振興」と「分配の公正」とを舉げたる首相の言には同感である。尤も首相の所謂『分配』とは何の分配を意味するものか、文意甚だ茫漠ではあるが、富の分配にせよ、利益の分配にせよ、何れにしても分配の公正なることは、啻に人心安定、人心緩和の手段方便としてのみでなく、政治の根本的思想でなければならぬと信ずる。

「分配の公正」誠に結構である。唯併し徒に言辭の上に於て公正と稱するのみでは意義を爲さない。事實に即して何が公正であるやの規準を示して貰はねばならぬ。資本家は今日の利潤分配を以て公正と云ふであらうが、勞働者は之を不公正と云つて居る。勞働爭議の源は常に此處に存在する。從來頻々として勞資間に發生したる分配爭議に對し、政府者は常に資本家の肩を持ち權力に依つて勞働者の要求を阻止壓迫せる實例より察すれば、政府は現在の分配を以て或は公正と認めて居るのではあるまいかと疑はれる。政治は力であるか、道理であるかは別問題とするも、少くも政治は實際であつて空言ではない。若し新聞の活字のみの『分配の公正』訓示の辭のみの『分配の公正』

であるならば、國民は活動の看板繪を見、ラヂオの安來節を聞く方を悅ぶであらう。

◎

首相は又言つて居る。

是が爲めには稅制の改正に此意義を加ふるの必要があるは勿論、其他此種の政策中急要と認めらるゝものを實行するの要があります。

までは先づ宜しい。現在の如く國民の大多數が生を樂しむどころか、生を呪ふ如く生活難生活苦に陷ゐれる際、苛斂誅求殆んど假藉するところなく、而かも財源の大部分を無產者の負擔たる消費稅に托するのみならず、國產奬勵の名の下に國民必需品に高關稅を付し、間接に資本家を擁護する如き稅制は根本的に改正するの必要あるは首相の言ふが如く「勿論」である。統計不完全なる我國に於ける具體的數字を知らざるも、英國の統計に依れば全人口の僅に二歩の富有階級が總國富の六割四分を占め、全人口の八割八分の無產階級が總國富の僅に一割二歩を有し、殘りの國富二割四分が人口の一割なる中產階級に屬して居る。而かも國費の過半は無產階級の負擔せる處である。無產者の負擔が富有階級に比して如何に重きかを覗ふことが出來る。

我國に於ける貧富の懸隔は今日尙ほ英國程に甚だしからざるも、財產と負擔との比率は略ぼ之に似たるものがあるであらう。斯かる不合理不公正なる國民の負擔を改正せずして何處に無產者の生活の安定が得られるであらう。現政府が此點に着眼したるは我等の大に多とする處で、速に其の徹底的實施を望まざるを得ない。經驗顯著。之も普選の生みたる產物である。元來負擔の公平は分配の公正と同一程度に必要である。「所有には義務を伴ふ」とは戰後財產に對する新原則である。而して負擔の公平は循環的に自ら分配の公正を意味するものである。此の問題に關しては他に詳論する人があらう。

生活安定問題に關し首相は最後に・

此事は成るべく速に案を立て決定を期せんとする次第であります。

と云つて居るのを見て我等は失望せざるを得ない。今からボツ〳〵案を立てゝ決定するのだそうな。「盜を捕へて繩を綯ひ」、「魚を見て網をすく」と云ふ諺は間拔けの代表語となつて居る。今から調査して案を立て、判子の三十、五十を取つて廻はる間には內閣も變はるであらう。そこで責任解除と來られては國民は折角チン〳〵をして待つて居た甲斐がない。內閣の變はる每に調査の遣り直し、計案の立て直しをやるのが日本の政治

慣則である。「小供が將に溺れんとして居ります。成るべく速に案を立てゝ救助を期せんとする次第であります」呑氣なる沙汰、寧ろ棺桶屋に走る方が氣が利いて居る。在野十年何をして居たのであらうと問ひたくなる。

『其他此種の政策中急要と認めらるゝものを實行するの要があります』は遠慮に過ぎた言葉である。縦令急要でなくとも、苟くも政治の正道と認めらるゝことは遠慮なくドシ／＼實行することが政治家の責任であり徳義である。小供が溺れるのを待つて居る必要は無い。小供を川に近づけぬことが親たるものゝ心懸くべき點である。國民の苦しむのを待つて「要求せよ然らば與へん」は惡しき官僚政治である。世情民心を像察して「與へて共に樂まん」が正しき民主政治である。生活安定、人心安定に必要なる「此種政策」は急要を待つ迄もなく、ケチ／＼せずに實行して貰ひたい。

◎

生活安定の策として「大に民間產業を興し生產を旺盛ならしむ」ることは誠に結構である。啻に資本家の懐を肥やす民間產業のみでなく、民衆の福利本位の國營產業も大に興して貰ひたい。產業の振興や生產は今日に突發したる問題でなく何時の世にも必要である。殊に現在に於けるが如き國民の生活苦を緩和して生活の安定と人心の安堵とを圖り、以て其の生を樂ましむる爲めには、先づ國家及國民の經濟を豐かにすることが第一義の必要事である。國家國民の經濟を豐かにするには、生產を旺盛にして廉良の品を國民に供給せねばならぬ。生產を旺盛にするには其の母體とも云ふべき產業を振興せねばならぬ。こゝ迄は首相の言を待つ迄もなく事理明白である。扨て然らば產業を振興する爲めにはと云ふ問題となれば、元に戻つて國家國民の經濟が豐かでなければならぬこととなる。黄金が天より降るか、地より湧くか、するにあらざれば此の循環は破れない。之が問題である。水銀還金の發明ぐらゐでは解決しさうにもない。

我等は產業振興、產業立國などの言葉は、御符式の御題目ほど聞き飽きた。併しながら如何なる方策に依つて產業を振興するか、如何なる基礎の上に產業立國策を對立するかの具體案に至つては遺憾ながら多くを聞くを得ない。大工場を建て新式機械を据へ付けたばかりで直に產業が振興するもので はあるまい。政黨の看板に產業立國の札をぶら下げたとて俄に實現するものでもあるまい。之に關して偶名士とかの講演を拜聽すれば、獨逸の例などを引きて生產增加の爲めに勞働者に愛國的服從を說く御說教ぐらゐに過ぎない。工業家や事業家に策を立つ

るも資本家に金が無い、金が有つても雅量がない。但ノ雅量はあつても國土に原料がない、原料はあつても技術が足らない。一體抑も日本の如き國土と國勢と國情とを有する國に於て、たとひ外國を凌駕し得るとも、少くも外國と比肩し得る程度に産業を振興し、産業立國策を確立し得るの可能性があるのであらうか。今になつても飛行機、自動車の機械さへ完全に出來ない此の日本に！

我國の如き土地狹小にして而かも人口多き國に於て、農業生産に依つて、國家經濟を維持することは不可能である　唯一の農産物とも云ふべき米すらも、國民の食料として毎年數百萬石の缺乏を告げて居る。外國輸出などは思ひも寄らない。左れば我國經濟を支配する産業の基礎は是非とも工業に置かねばならぬと信ずる。經濟學の深き原理は知らぬが、凡そ工業生産は勞働と資本と原料との混成産物たるは言ふ迄もない。故に勞銀の高下と、技術の巧拙と、資本の豐乏と、資本家の賢愚と、原料の多少と、其品質の良否とに依つて、生産品の價格と質と量とに種々の變化を生ずる　或は廉價にして良質なるものあり、高價にして惡質なるものあり、或は良質なるも高價なるものあり、惡質なるも廉價なるものあり、其他粗製濫造もあれば精製捏造もある。

生産の理想は廉價にして良質のものを多産するにある。そこで價格の廉なる爲めには勞銀と原料と資本の利潤とが低廉でなければならぬ。品質の精良なる爲めには勞技が熟練で資本家が賢明で原料が精選されねばならぬ。多量を産出する爲めには勞力と原料と資本とが豐富潤澤でなければならぬ。故に勞働、資本、原料の三者其の一にして不充分なれば産業の振興發達は非常に困難である。素より是等の三者は經濟上並に技術上に於て複雜機微の關係を有し、一の短は他の長に依つて或程度まで之を補償し得るも、既に一の短ある以上不良品となるか、高價品となるか生産少量となるか何れにしても總てに長を有せるものと對抗競爭することは理に於て不可能である。惡貨は良貨を驅逐すると云ふが、價格同じければ良品は惡品を驅逐し、品質同じければ廉は不廉を驅逐する。

◎

日本の産業界に於ける是等生産の三要素を顧みれば如何であらう。勞銀は個人としては或は歐米より幾分廉なるが如きも、體力、技倆、設備等の關係により生産品に對する勞働價は恐らく歐米と大差は無いであらう。勞働技術の彼に劣れることは店頭の萬年筆一本を較べても容易に知ることが出來る。資本はと

云へば金利の高きこと五大國中恐らく第一であらう。金利の高きは資本の豐かならざる明證である。高き金利を拂つて廉き生産を求むることは、事業が營利である限り出來ない相談である。殊に我國の資本家なるもの丶多くは、「個人として生を樂む」には頗る忠實なるも、「國家として富强を爲す」には極めて臆病である。後は野となれ山となれ、取れる間にフンだくれ、國家百年の長計などは先祖に對して相濟まぬとでも思つて居るのであらう。日本の貨物が粗製濫造の世界的名聲を博せるのも全く此の爲である。

若し夫れ原料に至つては現代人類の生活に要する産業に利用供用せらるべき何物があるであらう。人間生活上與ろ潤澤品に屬する生絲絹以外に、産業立國の基礎ともなるべき産業原料があるであらうか。現代産業の主宰たる鐵も、日本産業の大宗たる棉花も外國よりの輸入である。自ら其の價の高からざるを得ない。原料を外國の供給に待つことは所謂糧を敵に求むるもので、産業競爭上に於ける主大の弱點である。殊に勞銀は高く、技術は拙く、資本は乏しく、資本家は頑愚、其上原料まで高價と來ては何處に日本産業の長所利點があるであらうか。指尖が器用で紐結ひが上手ぐらいでは追つ付かない。斯く考へ來る時我等は日本産業の將來に對して悲觀せざるを得ない。

我國に生産原料の乏しきは政治家の罪でもなく、國民の科でもなく、國家自然の宿命である。富士山を鑄潰して鐵を造ることも出來ねば、瀬戸内海を埋め立て丶棉花を栽ゆることも出來ない。併しながら既に産業の興振を圖り、産業立國を志する以上、否な國家として世界の經濟競爭場裡に立つ以上、何等かの方法手段に依つて此の缺陷を塡めなければ、個人として生を樂むことも、國家として富强を爲すことも出來ない。而して此の原料の缺陷を塡むるものは勞働と資本との外にない。即ち勞働に於ては、一には勞銀を低廉にして生産價を輕減せねばならぬ。二には技術に熟練して生産品を優良にせねばならぬ。そこで勞銀を低下するには勞働者の生活を脅やかさぬ爲め先づ物價を下げねばならぬ。物價を下ぐる爲めには通貨を縮少するか、生産を多くせねばならぬ。通貨を縮小すれば資本家が困まると云ふことである。生産を多くするには販路を外國に求めねばならぬ。販路を外國に求むるには生産品の價格が廉きか、品質が優良でなければならぬ。品質の優良は明日の問題である。價格を廉くする爲めには勞銀を下ぐるか、資本家の利潤を低くせねばならぬ。其日の生活にも窮する勞働者を犧牲にするか、奢姿榮華の資本家(株主を含む)を犧牲とするか、こ丶資本家と政府の腹の決め處である。

生產技術の進步を圖る爲めには技術者と勞働者の教育訓練に依るの外はない。之が爲めには技術者を優遇して自由なる研究を爲さしむると共に、勞働者の生活を安定して專心業に勵ましめねばならぬ。搾取と暴利との爲めに薄遇酷待而かも粗製濫造を奬勵しながら生產技術の進步は望まれない。政府は軍事教育や治安維持法などの惡擧に時と頭とを費やす代りに、勞働教育や資本家取締法でも考へる方が、ヨリ多く國家の爲めである。

◎

原料不足の缺陷を補ふ他の要素は資本である。外國原料を買ひ込む爲めには多額の資本を要する。原料の高價を償ふ爲めには利潤若くは金利の低きを要する。原料補缺に對しては政治に依つて如何ともすることが出來ない。勞働增進に對しては政治に依つて支配することが困難である。獨り資本に至りては國家經濟と密接の關係を有し直接政治の圈内に屬する。爲政者の手心と決心とに依つて如何樣にも解決出來る問題であると信ずる。

原料と勞働とを除けば、產業の振否興廢は一に資本の多寡と其の運用の適否に依つて決する。多額の資本を適良に運用するものに與り、否らざるものは振はない。苟くも產業立國を目的として產業の振興を圖る以上、勤儉宣傳に依りて女房細君の手內職を奬勵する如き消極姑息なる手段でなく、大資本に依つて大產業施設を爲すにあらざれば其の目的を達成することは出來ない。民間に資本が乏しければ國家は之を援助し、保護し、奬勵し、而して强欲なる資本家と陰險なる政治家の喰物とならぬ樣監督すべきである。國家に其の餘裕が無ければ不要不急の經費を省いて之を有用に轉用すべきである。軍事教育に何百萬とかの國費を支出しながら、僅に十幾萬圓の海外商務官の經費を削る如きを見ては、產業振興など、眞地目で言つて居るのかさへ疑はれる。店の仕入の爲めには役にも立たぬ傳家の名刀ぐらい賣り飛ばすの決心と覺悟とが無ければ決して商賣は繁昌するものではない。

我國の如く原料に於ても、勞働に於ても、大缺陷と大弱點とを有する國が、原料に富み、勞働優れたる外國と產業上に競爭するには、せめて資本なりと潤澤有利でなければ到底對抗することすら出來ない。正かの時に役に立つか立たぬかさへ疑はれる海陸の軍備に國費の三割を投げ出し、農工商の產業費には僅に三步余を支出しながら、產業振興も、產業立國もあつたものではないと思ふ。殊に資本家の肩を持ちて勞働者を成るべく廉く使役し、成るべく多く搾取することが產業振興の道であるか

の如く心得、勞働者の正當なる權利を保護すべき勞働立法の制定をすら逡巡躊躇する如き頑陋なる思想を以て、産業振興を說くなどは寧ろ滑稽である。産業振興の第一步は勞働尊重より踏み出さねばならぬのである。既に産業立國と云ふ以上、産業を以て國策の中心、國是の基本と爲し、國費に對する優先權ぐらい持たさねばならぬ筈である。今の日本は、食はんが爲めに店は出したし、意張らんが爲めに兩刀は棄てたくなしで、玄關に鎧櫃と大小とを飾り立て、庭の隅つこに駄菓子を並べた形である。奥には小供が空腹に泣いて居る。産業立國は國策の立て直しである。國家も、國民も、丸腰になつて店頭に据はるだけの大決心と大覺悟とが無ければならぬ。此の決心と覺悟と無くして徒に産業立國を唱ふる如きは、政黨の人氣取り宣言なら兎も角、否らざれば己を僞き世を詐るものである。日本の如き國情と國勢の下に在る國が、一方に軍備立國を持し、他方に産業立國を策する如きは、結局虻蜂取らずの兩損に陷ゐるや必せりである。

◎

如何に資本が豐富で且つ有利であるとも、之のみを以ては未だ俄に産業の振興を期することは出來ない。我國の如く産業上に宿命的大缺陷を有せる國は、國情と國勢とを考慮して特種の産業政策を立つるにあらざれば、有利なる事情の下にある外國産業と對抗競爭することは不可能である。産業の振興を圖る爲めには勞働事情、原料關係、生産及消化能力等に就きて充分なる調査研究を行ふことが必要である。我國の産業が何時までも歐米の尻を追ふて及ぶに之れ吸々たる所以は、一は是等の機關を缺ける爲めである。中にも我産業界に缺くる處は研究機關である。何々試驗所、何々研究所の看版は多きも、何れも其の規模の小なる、其の經費の乏しき、一種の失業者救濟機關に過ぎざるの觀がある。世界の市場を獨占したる獨逸の染料は、一青年技師が二十五年に亘る苦心慘澹たる研究の結晶であると云ふことである。其他現代文明を飾る總ての發明發見は何れも不斷の努力と自由なる研究の結果でないものはない。日本人の頭腦が歐米人に劣らぬならば、日本人と雖ど人力車以上の大發明、天上の星以外の大發見を爲し得ぬことはあるまい。其の之を爲し得ざるをは唯適當なる研究機關が無い爲めであると信ずる。一二個師團を廢止するか、一隻の軍艦を減ずれば、大規模の産業的研究機關を設置することが出來る。我國民も何時までも空腹抱いて觀兵式を見て居る譯には行かぬのであらう。

最近聞くところに依れば、我陸軍は國家總動員に關する準備

の爲め、大調査機關を陸軍大臣の統轄下に設くるの計畫があると云ふことである。必ずしも無用の擧とは云はない。併しながら今日の軍事的國家總動員は其の實質に於ては産業總動員である。斯くの如き調査機關を設置するならば、之を軍事本位として陸軍の管下に置くよりも、寧ろ産業本位として總理大臣の直轄下に置くことが、平戰兩用の需に適ひヨリ多く有利で有意義である。そこに産業立國の基礎が据へられる。軍事大調査機關が出來て、産業大調査機關が設けられぬ如きは時代錯誤の冠履轉倒であるのみならず、日本産業界の恥辱と云はねばならぬ。

兎角我國民は「國防の爲め」と云へば盲目的に聽從する缺點がある。軍國主義者は之を美點と云ふかも知れぬ。軍人は竈の底の灰までも軍用に供せんとする。其の戰爭本位の軍國主義的思想に對しては感心せざるも、彼等が其の職責に對する熱心と精勵とに對しては賞讃せざるを得ない。軍人が銃砲の殺人戰爭に對するが如く、産業關係者が平時の戰爭たる産業に對して熱心であり、一般國民が軍事に對して神經銳敏であるが如く、産業に對して神經銳敏であるならば、我が産業何んぞ興起せざるを憂へんやである。

國民生活安定の三方策

安部磯雄

普選が愈々實施されるやうになつた結果、既成政黨は孰れも新政綱を掲げて新らしい選擧民の歡心を買ふべく努力し初めた。其處に掲げられた政綱の中で最も注意を牽くものは、國民生活の安定といふ事柄である。之れは甚だ重要な問題で、從來生活の安定其事が政治の眞目的と考へられた位であるが、既成政黨の中で此問題に對して眞劍に研究をする者はなかつた。何故ならば既成政黨は勿論ブルジョアの代表であるが故に、斯くの如き問題に觸れる必要を認めなかつたからである。然るに此度は新有權者の大多數が無產者であるが爲めに、彼等を牽き付けるには政黨は此重大なる生活問題を其新政綱の中に掲げなければな

らなくなつた。併し斯くの如き重要なる問題が果して既成政黨に依つて解決されるか何うかといふとは自ら又別問題である。云ふは易く、行ふは難いのであつて、既成政黨が斯くの如き問題を其政綱の中に掲げるべく餘儀なくされて來た事は事實であるが、實際問題として之れが實行されるか否かは大なる疑問でなければならぬ。現在の政黨の狀態、又は其從來の歷史に鑑みても寧ろそれは實行不可能であると推測される理由がある。國民生活の安定を計る道は生半可な政策では不可である。病氣を治療するのに昔の葛根湯や今日の萬病膏を以てする應急手當であつてはならない。生活安定の手段としては少くとも三の方法がある。此三者が同時に實行出來れば一層都合が好いが、同時にやれなくともそれは少くとも其一つを實行しなくては生活の安定を得ることが出來ないといふ程の重要なる事柄である。其第一は思ひ切つて日本の軍備を縮少することであつて、此精神に於ては四個師團の廢止を猶手緩しとするものである、其第二は思ひ切つて稅制整理をやることであつて、これは現内閣が現に着手しつゝある仕事であるが、それも藪醫者の投藥のやうな中途半端なものでなく、更に根本的な實行を目的とするものである。第三は人口問題の解決であつて、具體的に云へば國家が公然と產兒制限を唱へ、之れを國民に奬勵することである。以上舉げた處を見ても、其中の一つでも既成政黨に實行出來るものがないやうに思はれるが、之れを行ふことを得ずして生活安定を云ふは寧ろ無責任であり、滑稽でもある。

先づ第一の問題は軍備縮少であるが、それを云ふ前に、日本國家の生活狀態を我々の家庭生活の問題として取扱つて見ると、此處に一の家庭があり、其年收一年千五百圓位と假定して、主人が政治道樂のために、種々政治上の事に手を出し、屢々會合などに出席して會費を取られたりする結果、交際費として千五百圓の收入中七百圓位を費消するとする。然るに一家の經濟狀態が困難に陷入つた爲めに、彼は交際費を節約して四五百圓位にまで切詰めて見たが其結果は更にどうであつたか。千五百圓の收入中、七百圓乃至四五百圓を生活費の中から持つて行かれるために一家は生活難から依然として脫しることが出來ないで、衣食住は勿論、小供の教育費にすら差支へる狀態となつた。それにも拘はらず彼は自分の行爲は國家の爲めにするものであるとして妻子を顧みなかつたならば、其處に家庭生活の安定はあり得る筈がない。此場合生活の安定を得るためには、主人の政治道樂を止めて、交際費なども百圓乃至二百圓位の支出に止めることが此問題の解決方法でなければならぬ。日本國家の財政は、政治道樂の主人を持つ家庭の財政狀態と似て居る

が、此切詰めた財政の下に於て莫大なる軍備費を要することが國民生活の安定に對して非常な禍をなす大なる原因となつて居るのである。産業立國の趣旨に對しては固より異存のない處であつて、國民生活の安定を得るためには富を餘計に作り、又同時に一方に於て國民が無駄使をしないといふことに誰も反對する者はない。乍然今日の如く國家が必要以上に尨大なる陸海軍を擁して居る時期に於ては、産業立國を唱ふるもそれは名ばかりであつて其實行は不可能である。事實資本のない處に産業の興り得る筈がない。我國の如く高い利息を拂ふことなしに金を借りられぬ國は世界中に於て稀である。米國の四分、英國の五分に對して、日本は年八分であるが、斯くの如き高利を拂つて居ては産業立國も問題ではない。外國貿易も當然行詰る時代が來るであらうし、利子が高くては企業家も立行かぬ結果となることは明かであるが、それは皆資本の不足に起因して居るのであつて、國家の財政中軍備に莫大な費用を要することが更に其重大なる原因となつて居るのである。統計表に依ると大正十年中央政府の財政中、約半分を陸海軍費に注ぎ込んで居る。大正十一年には陸海軍費に約四割二分、十二年には約三割三分、十三年には約三割を支出して居る。これに依つて見ると陸海軍費は毎年減少する傾向があつて、三割位の數字は些かのやうであるが、實際之れを金額にすれば大正十年は七億三千萬圓、十一年は六億圓、(但し此數字は決算前のものであるから多少の相違があるかも知れぬ)十二年は約五億圓、十三年は四億五千萬圓となつて、斯かる莫大なる軍事費を負擔する我國民が其爲めに生活を脅威されるに至ることは當然の歸結である。それは政治道樂の主人が、年收千五百圓の中七百圓乃至四五百圓を交際費に支出しては一家の生活が安定を得ないのと同樣であつて、此場合思ひ切つて費用を削減することが生活安定の必要條件でなければならぬ。人或は軍備がなければ國家が亡ぶと云ふ者があるかも知れぬ。併し軍備がなければ國が亡びたのは昔のことで、今日では寧ろ貧乏のために國が亡ぶといふことはあり得る。事實獨逸は戰爭に負けても國は亡びないのである。獨逸はベルサイユ條約に依つて一切軍備をすることが出來ぬが、獨逸國内には常に所々に義勇兵があるかの如く見せかけ、軍人を養成して居るやうに外國に思はせて居るが、佛蘭西、英吉利、白耳義、伊太利などはそれを恐れて軍備を盛にして居るのであつて、實は自分は軍備をすることなしに先方に軍備をさせて金を費はせる獨逸の賢い政策であると或人は云つて居るが、其事實の當否は別として、軍備に多額の金を費すは國家のために利益であるか否かは問題である。日本が米國と軍備競爭をやるのは

馬鹿氣た話であつて、若し米國に獨逸のやうな腹があつたならば、自國の軍備を擴張することに依つて日本に負けずに軍備競爭をさせて、財政上に日本がくたばつて了ふ時期を待つために、日本に金を浪費させる政策をとるとしたならば、日本は米國の軍備擴張の見せかけに依つて軍備に莫大な金を使ふのは甚だ賢くない遣り方であると云はねばならぬ。此軍備のために費消する多額の金を產業方面に振り向けたならば、我國に於ける產業立國の實は著るしく擧げることが出來るに相違ない。乍併產業立國策の樹立のみに依つて國民生活が果して安定を得るか否かは自ら又別問題である。何故ならば米國は物質的には世界中の富裕國であるが、而も猶其產業の盛大なる一方に國民生活は必しも安定を得て居ない事實を語るものがあるのであつて、事實米國にも多くの貧乏人があり、經濟界に變動があれば一時に何百萬の失業者を出すこともあるのであつて、一人々々の人間に就いて云へば生活の安定を得て居ない者が澤山にあるのである。玆に於て第二策を考へる必要がある。國が富んで來れば同時に富の分配が不均されることが必要であつて、換言すれば國內に於ける貧富の懸隔が甚しくないやうにする政策をとることが重要なる問題となるのであるが、此問題を解決することなしには國民生活の安定は望み得ないのである。生活安定といふ

以上、甚しい貧乏人の居ないやうに社會を作らねばならぬが、それには金持が社會的精神に富んで居て、自分の有つて居る物は社會の幸福のために使ふといふ習慣のつくことも必要であるが、事實に於てブルジョア階級は社會的良心少く、利己的であるならば、玆に於て國家は止むを得ず國家の力に依つて貧乏人と金持との間の調節を計らねばならぬ。其一方法として稅制整理がある。既成政黨は無力であつて、國民生活の安定といふことに對しては其實行力が甚だ覺束ないのであるが、現內閣の企てつゝある稅制整理は、其遣り方は毒にも藥にもならない性質のものであつて、これに依つて國民生活の安定を齎すことは出來ぬ。稅制整理の中心問題は、國稅は所得稅を中心として、配するに地租、營業稅を以てするものであるが、これは稅制調查委員會の說であつて、略々、現在の政黨內閣の意見と大差のない處であらう。眞に政黨に國民生活の安定を計る熱心があるならば、先づ稅制整理にそれが現れねばならぬ筈であるが、今回の稅制整理に依つては到底國民生活の安定を期することは出來ない。現在の稅制に就いて社會政策的見地よりすれば、其第一の條件は租稅は有產者に重くして無產者に輕いことを、若くは或場合には無產者には全然租稅を賦果しないことを理想とするものであるが、此目的を達するためには先づ直接稅を多くし、間

接税を少くすることを其方針としなければならぬ。何故ならば直接税は多く有産者にかゝるものであるが、間接税、譬えば酒、醤油、織物税等は無産者の重い負擔ともなつて居るからである。此意味に於て間接税は出來る丈け少く、若くは廢止する方針を執ることが最も當を得たる策であると信ずる。又租税は其體系として所得税を中央に置くことは間違ひである。寧ろ地租を中央に置き、其兩翼に所得税と、營業税は廢止してこれに代ふるに遺産相續税を配することが眞の社會政策的税制整理である。而も之等の租税の中、地租の如きは百坪、二百坪位の住宅を持つ者、若くは農村地ならばやうやく一家の生活を支へて行くに足る一町歩位の土地の所有者に對しては廉い税を課し、それ以上、上になる程高い累進税を課する方針を執ることが必要であつて、さうなれば一人で莫大なる土地を所有する者などはなくなるに相違ない。又所得税も五千圓以下に對しては全然課税しない方針をとり、遺産相續税の如きも一二萬圓位のものに對しては比較的寛大に、それが十萬、百萬となるに從つて高率の税を徴發すれば宜しい。斯くの如くして富の不平等は救はれ、玆に初めて國民生活の安定は確立されるのである。何故に無産者に租税を輕くする方針をとらねばならぬかといふのに、無産階級は常に國家に直接納める税よりも、資本家や地主に對して納めて居る税の方が遙かに高いのであつて、換言すれば無産階級は資本家階級に依つて搾取されて居るのであるから、斯かる階級に對して國家が又租税を課することは甚だ慘酷であるからである。私は現在二百坪の土地を借りて居るが、私の所得税として一年に納める約二百圓に對して、二百坪の地代は一年三百圓以上となる。斯くの如き例は他に幾らもあらう。勞働階級は資本家に依つて、搾取されるが、借地人は地主に依つて又絞られて居るのであつて、それは國家に納める税金よりも遙かに高いものについて居るのである。元來天から附與された土地を人間が勝手に個人の所有として居るのが間違なのであるが、併し今日土地の私有が許されて居る限りに於ては、止むを得ず地租を高くすることに依つて、個人が土地に依つて儲けることを不可能ならしめるより外に仕方はない。此意味に於て地租を租税の中心とすることは最も適當なる策であると云はねばならぬ。小作人の納める小作料も一種の地租であるが、これを地主が取るからいけないのであつて、政府がとる分には異存はないのである。現在では一段歩平均一石九升の小作料を納めることになつて居るが、之れを八斗として計算しても、米一石代金四十五圓とすると隨分澤山の小作料を取られることになる。之れに劑を加へて計算すると全國に於て一年間の小作料十九億圓に

見積ることが出來る。若し國家が土地を所有することになればそれ丈けの收入がある譯であつて、中央政府の費用は全部拂へることになる。乍併前に云つた如く一町歩位の土地に對しては地租を廢くすることにすればそれ丈けの收入はない譯である。

以上述べた第一、第二の方法が實行され得ない場合には、第三として消極的ではあるが產兒制限の方法を執るより外に仕方がない。但し第一、第二の方法が實行されたならば、此消極的方法は必要がないかと云ふに決してさうではない。寧ろ國が裕かになつても人口が增えるばかりであると、結局何時までたつても國民生活の安定を得ることが出來ないが故に產兒制限の消極的方法が必要となつて來るのである。我國に於ては今日此問題に就いては、政府の態度の煮え切らないために國民も迷つて居るやうであるが、和蘭の如き人口の多い國に於ては國家が率先して產兒制限の必要を說き、相談處を設けて其實行方法を敎へて居る位である。日本に於ても人口問題に就いて論ずる者は多いが、將來此問題に對して當然我國の立場が窮するに至ることは豫想に難くない處である。我國の人口は每年六十萬、七十萬の割合を以て增加して居るが、之れに對して植民政策を唱へる者があるけれども、實際臺灣や、朝鮮、滿洲等に何れだけの日本人が行つて居るかといふに其數は僅かに七十二萬人に過ぎないのである。而も其植民に要した年數は、臺灣が日本のものになつてから三十年、滿洲に日本の勢力が扶植されてから二十年、朝鮮が併合されてから十五年を經過して居るのであるが、其間に十二萬人の日本人を內地から送つたのみでは植民は成功したのとは云へない。植民は自分の居る土地よりも高い賃金を得られる處でなければ成功しないものであるが、役人などは給料が好いから國外に出かけるものゝ、勞働者が行かない理由は、假りに日本人の勞働者が支那の勞働者と滿洲で競爭をしても勝つ見込がないからである。從つて此原則に依つて朝鮮の勞働者が賃金の高い日本內地に入り込んで來るのであるが、此驚くべき數に上る鮮人の內地移住の傾向は我國の人口問題及び勞働問題の上から云つて由々しき問題である。新聞、雜誌も、又は政治家も之れに就いて論ずる者はないが、日本人勞働者の中でも殊に自由勞働者の間に於て失業者の多い今日、此問題は等閑に附さるべき性質のものではない。之れを云はないのは我國が朝鮮人に對して痛し痒しの苦しい立場に在るからであつて、其理由は支那勞働者に對して我國は之れを內地に入れぬ方針を取つて居るが、朝鮮人も亦日本國民であるが故に其入國を拒絕する譯には行かないからである。乍併眞に日本の爲めを思ふならば、將來鮮人の入國を拒絕することが最も必要なる策である。そ

には先づ朝鮮の顔を立てねばならぬ。今日露西亞を恐れる必要はないのであるから、朝鮮を我國のものとする必要も同時にない譯である。從つて將來朝鮮に對して自治を許し、之れを獨立國とすることを約し、其交換問題として朝鮮の勞働者を日本の國内に入れないやうにすることが日本のためには得策である。日本は其國内に於て産兒制限を必要とする程人口の過剩を來して居る際であるから、現在の如く鮮人が續々内地に入り込んで來ることは國家の大問題であつて、延いては國民生活の安定を害ふ所以であるから、政治家は之れに對して沈默を守つて居る時ではない。

以上述べた三つの方法に依るならば或程度まで國民生活の安定を計ることが可能であると信ぜられるが、若し不可能であるとしても確かに他に別個の案がある。それはもう一歩を進めて現在の經濟組織を改造することである。そこまで行けば國民生活の安定は立派に得られるが、以上の三つの方策でさへ既に荒療治であつて臆病者のやうな現在の政黨政治家に其實行を望むことが出來ない位であるから、經濟組織の改造に至つては之れを期待する方が無理であるかも知れぬ。乍然前の三つの方策すら實行困難であるならば、既成政黨は寧ろ生活安定などゝいふ柄にもなき政綱を掲げぬ方が餘程正直で好いと考へられる。

生活安定と産業立國

石川半山

普選が行はれて、有權者が千二百萬人以上になつたので、各政黨が爭うて、新政策を標榜し始めた。これ迄の如く、單に閥族元老に阿諛して居るばかりでは、政界に存立する能はざる形勢となつた。樞密院や貴族院の事も顧慮しなくてはならぬが、何しろ一千二百萬人の大潮流を、前に見ては、これ迄の如く民衆を馬鹿にして居るわけに往かなくなつた。そこで何れの政黨も、新政策を掲げて、以て、民衆に賣り込まんとして居るが、そのモツトーは、曰く生活の安定、曰く産業立國で有る。この

二個の者は、必ずしも新政策と云ふ程に、新らしい者ではないが、これ迄は政界の實際問題として、餘り顧みられなかつた。然かし普選實施の今日となつては、いよ〳〵眞劍味を以て、この二個のモツトーを聲高く叫ばざるを得なくなつたのだ。

各政黨の政綱

加藤首相は先日憲政會近畿大會に於て、第五十議會の成績に付て演説したる後、今後は新らしい政策に向つて、進まなくてはならぬと云つた、而してその席上の決議には、産業政策の確立と、國民生活の安定の二項が、稅制整理、國民教育の改善と共に、高く揭げられて、これが新政策なりとの意味を明らかにした。政友本黨の總會に於て、決定したる新政策の綱目に於ても、國民生活の安定と、農村漁村の振興は、東洋政策の確立、稅制整理、文官任用令の制限、勞働問題と共に、最も重要なるものとせられ、床次總裁の演説中にも、産業の振興、社會政策の遂行を、力強く主張して居る、政友會では高橋是清氏が議會閉會後の同會の重要なる集會に於ける演説中に、産業政策や社會政策に論及して居たが、新總裁田中義一氏は加藤首相と懇談したる後、一つの覺書を發表し、その中に加藤首相が內閣の採るべき新政策として、生活の安定、社會政策等を述べたるに、田中氏が全然これに同意したと記して有る、今や生活の安定と、産業政策の確立は、國民の要求で有て總べての政黨政派は、之が實現に努力せんことを高唱し、以て民衆の歡心を買はんとして居る。

國民生活の安定

然らば國民生活の安定とは、果して如何なることを意味する乎。

第一は失業者問題で有る、官吏がポン〳〵首を刎ねられて、一時賜金や恩給では、生活が出來ない、不景氣のために、會社や銀行や工場が倒産して、失業者が澤山に出來し、何れも生活困難で有る、之を救濟するの方法如何、獨逸の如くに、失業者に政府から給與する法律を作るも一策である、然る時に或は失業奬勵の結果を生ずるかも知れない、少壯者はとに角、老人の失業者は、國家が養ふ義務の有ることだ、六十歲以上になつて尙働かねば食へない境遇に立ち、然かもそれが失業と來ては、見るに忍びないことだ、露國が老人を給養する制度を定めたのは、學ぶべきことで有る。

東洋諸國に於ては、失業者救濟の方法として、大土木を起すことが有る、支那に於て、秦の運河の如き、明の北京城修築の

如き、皆その目的は、失業者救濟に在つた、然るに政府が政を失ひ、民心が去て、失業者の多くなつた時は、大土木を起した位で、その地位を保つことは出來ない者と見えて、政府が大土木を起す時は、その國は亡ぶと傳へられて居る、今や朝野の間に、失業者救濟のために、各府縣の治水や土木工事を盛にすべしとの説が有るが、政府は財政緊縮方針から、却て各地方の治水、港灣、鐵道等の繼續事業の中止又は繰延べを決行し、この方面からも失業者を出して居る、先づこんな風で押して往ける間は、未だ良いとしなくてはならぬ、失業者のために、土木工事を起さねばならぬ様に迫つて來ては、世の中は危ふいと見なくてはならぬ。

第二は物價の騰貴だ、物價が下落する時は商工業者は不景氣に陷るを免かれない。各自の貨物が、倉庫に在る間に、その價格を減少するので、それだけは損失となるからだ、而して物價の騰貴する際は、商工業者は好景氣となるが、サラリーメンや職工は、忽ち生活の安定を失ふことになる、物價騰貴は貨幣の購買力を減じ、收入の減少と同じ結果を來すから、生活は脅威されるのだ、故に政府當局者は成るべく物價の平衡を保ち、そのフラクチュエーションを少くすることに心がけなくてはならぬ、物價が忽ちにして暴騰し、忽ちにして下落するのは、社會を害するの甚しい者だ、貴族院の公正會では、先日の政務調査會に於て、國民生活の安定を期するために、物價の引下げを重要とすることを決議して居るが、今日の如く物價が高くては、國民生活の脅威で有る、これを引下げることは、生活安定の一要件に違ひない。

國民生活の安定と云ふことは、單に物價問題と失業者問題に止まらない、近頃の如く人心が荒らくなつて、將さに暴力時代を出現せんとして居るのは、生活の脅威で有る、盜賊横行して、警察が之を防止する力に乏しきは、生活の脅威で有る、要するに古るい言草だが天下泰平、萬民鼓腹の天地を來さんと欲せば、先づ政治が良くなくてはならぬ、それには第一が産業の發達で、國富を増進する工夫が必要だ、而してその結果を、公平に分配することだ、國民生活の安定は、生産を多くする事と、分配を公平にすることに依て來るのだ。

産業立國

今日でもその論者が有るかも知れぬが、商工立國論と云ふのが有つた、日本の如き土地の狹小な國土に於て、農業は駄目だ、商業と工業で進むの外はないと云ふのだ、然るに農民黨はそれを承知したい、帝國議會は久しい間、農民議會で有つた、

故に増税となると、消費税ばかりを増して、地租には容易に手を觸れしめなかつた、山縣内閣が星亨を買收して、漸く三分三厘に引上げ、桂内閣が日露戰爭の騷動の時に、又少しく引上げたけれど、戰後第一に引下げたのは地租で有つた、今日でも農村振興の聲は高くて、地租を徴收することは、僅かに七千萬圓に過ぎない、かゝる勢で有るから、商工立國論で農業はどうでも良いと云ふ論では、とても農民黨は治まらない、農學博士の間には、重農學者と見らるべき人も多い、彼れ是れ相待つて、農業國本論の氣焔は高い、そこで近來は產業立國と云ふことになつた、誠に結構なことだ、各政黨は勿論、多くの論客が、產業立國ならば爭ひはない。

農產物の増加

產業立國と云へば、先づ農產物を多くすることだ、これは一番必要な事だ、日本は土地が狹小で、此上に農產物を増加する見込は立たないと云ふ者も有るが、それは實地の調査をしない者の云ふことだ、今から五十年前、日本の人口三千萬人の頃には、米の收獲も三千萬石で有つたが、人口が四千萬人に増加した頃、米の收獲も四千萬石になり、人口が五千萬人になつたら、矢張り米も五千萬石から六千萬石に増加した、日本の米は、一人一年一石あれば澤山だから、食糧はこれ迄の五十年間は、人口の増加に比例して、必要なるだけ増加したわけで有る、今後も尚一億の人口になる頃迄には、米の收獲も、一億石位になる餘地は有る、その上に麥も粟も、甘藷も豆も出來る、又北海道に於て米作が年々増加し、朝鮮に於ても、日本米に劣らぬ良米を產し、台灣に於ても、米の收獲は、大した者だ、滿洲の米作も、頗る有望で有る、若し國民が農事を冷淡に取扱ふの風習さへ起らずんば、日本國民は將來百年、食物に事を缺く心配はない、然かしながら苟くも產業立國として、大に產物を盛ならしめんと思ふならば、單に國民が飢餓に瀕しないと云ふ程度の收獲に滿足すべきではないぞ、それには農事改良の方法を講じなくてはならぬ、田畑へ科學を應用するも一法で有る、英國あたりでは電氣を農事に用ひて、好成績を擧げて居るが、あれも日本に於て試むべきことだ。

紡績業の盛大なるは喜ぶべきことだが、原料の棉花を、米國や印度から買ふて居るのは殘念で有る、氣候風土の關係から、日本の内地で、良い棉花が出來ないならば、せめて朝鮮の棉花栽培を、大に奬勵して、日本に於て必要なる棉花の半分だけでも、朝鮮から供給させる樣にしたい者だ、麥酒製造業は盛大で結構で有るが、機械は外國製を用ひ、原料も外國から輸入して

居るのでは面白くない。或る獨逸人は、日本のビール製造業を評して、『日本人が此のビールに供給して居るのは、水とレッテルばかりだ』と言つたさうだが、この原料も亦朝鮮で作る様にしたい者で有る。

工業的農業

先日或る宴席で、後藤子爵にお目にかゝつた時、子爵は『日本の農業には、科學の應用がない、彼等はイザナギ尊イザナミ尊の神代から打ち續いた農業法に依つて、依然としてやつて居る』と言ひ、『見給へ、インダストリアル、アグリカルチュアと言ふ者は、日本の內地には無いではない乎、その之れ有るは臺灣と滿洲ばかりではない乎』と申された、臺灣の砂糖業は、工業的農業で有る、科學を應用したる農業で有る、滿洲の大豆亦然りで、之れは共に後藤子爵が自ら其の基礎を定めた結果で有る、子爵は臺灣の民政長官の時代に、砂糖業の改良進步に、力を入れ又南滿洲鐵道總裁時代に、大豆の改良進步を敎へたので有る、日本の農園にも、製造工業にも科學の應用を盛ならしむるに於ては、將來の成績、必ず見るべき者が有るに違ひない、此點に於て、我等は大に獨逸に學ばなくてはならぬ。

製品の改良

獨逸の製品は、二十年前は粗惡で有つた。その價格は、低廉なれども、その品質が英國品の如く、堅實精巧でないと云ふ評判で有つた、それが獨逸に於ける科學の進步は、獨逸品の素質を改良して、歐洲戰爭前に於て、獨逸製品は價格低廉にして、品質も相應に良好で有るとの聲價を博收し、世界の各地に於て、英國品と競爭し、或る市場に於ては、英國品を凌駕する樣になつた、これ英國が歐洲戰爭に參加して、武力を以て、獨逸を擊つに至つた一原因で有るが、獨逸が粗製品時代から科學を應用して、精巧堅實の物品を作り出すに至る迄の努力は、吾人の學ぶべき所で有る、日本品も現今では世界に於て評判が良くない、歐洲戰役の間、歐洲から何の品物も輸出し得なかつたので、東洋南洋の各市場は、止むを得ず、日本品を用ひたが、價格は低廉だけれど、品質が良くないので、平和克復後は歐洲品のために驅逐され、各市場は大槪彼等の手に恢復された、然かし日本の製造業者が、今に於て、品質の改良を行ふて、安價にして精巧堅實なる物品を供給せんには、支那、印度、南洋の顧客が、日本品を歡迎するに至ることは、期して待つ可き者だ、如何に英米諸國が、排日熱を鼓吹し、日貨排斥の聲を高めて

も、品質が良くて、低價なる物品が、經濟市場の優勝者となることは、經濟上の自然の原則で、何者も之を防止することは困難で有る、新任の商工大臣野田卯太郎氏が、地方長官會議に於ける訓示に於ても、我が工業の前途、決して悲觀するを要せずと言つて居る、『生産組織を改善し、能率の増進を謀り、品質の向上、生産費の低下に努むれば、我邦工業の進展を期するは難事に非ず、而して商工業振興の基礎は、信用第一に在り』と野田氏は説いて居る、又新任の農林大臣岡崎邦輔氏は、同じ地方官會議の訓示中、『農業に關する技術方面の進歩は、見るべき者あるも、生産費の節約、生産後に於ける農産物の處理、加工、管理、販賣、又は金融、餘剩勞力の利用、經營及び取引方面の發達に於て、遺憾とする所多し』と言つて居る、我が農業も工業も、その前途は、決して失望すべきではない、改良を加へ、大に努力を費やせば、産業立國の方針を定めて、我が生産品を海外市場に雄飛せしむることも、決して難事ではない。

海外の領土

國民生活の安定と云ふことは、第一は國産の豐饒から來ることだ、農産物が多く收穫さへすれば、百姓は豐年滿作を喜んで、食ふ物を腹一杯に食ふて、滿足の腹皷を打つのだ、第二はこの産物が、海外の市場へ賣れ行き、國富が増加すれば、民心は自然に落ち着く、毎日衣食の計に汲々として居る男の懐中が乏しくなると、自然に顔色が陰惡になり、眼附きが鋭どくなり、從て思想も不穩になるを免かれないが、國富が増進して、その分配が公平に行渡れば、社會に不平はなくなるわけだ。第三に考慮すべきは、海外の領土問題だ、領土擴張を必要とすると云ふと、直ぐに侵略主義で頭腦が舊式だと云ふが、英米佛獨、何れか侵略主義でない者はない。若し英米諸國が侵略主義が非なりと云ふならば、彼等は過去に於て、侵略したる所を、それ〲舊主に返還してから云ふべきではない乎、日本の如く多くの血と金とを費やして、その勢力範圍となしたる山東省を輕卒に支那に還附する樣な、愚劣にして低級なる國は、徒らに世界の輕侮を招くばかりだ。同じ樣に華府會議で、還附を聲明したる英國が、威海衛を今日迄決して還附しないではない乎、而して貿易は國旗に從ふことは、今も昔も變らぬ原則だ、英國の領土は廣大にして、日の沒する時なし、若しも他國が英國の貨物を排斥したなら、その領土だけとの貿易で十分だ、これ彼れが悠然として驚かざる所以で有る。日本もこれからは注意して、その勢力範圍の擴張され得るだけは、どこ迄も擴張し、一且之を手に入れたら、容易に之を拋棄してはならぬ。海外に外

くの領土がなくては、國產を賣り捌くに不便で有る。一旦他國から日貨排斥を受くると、忽ち商工業の衰微を來すが如きは、強國の恥づべき所だ、現代の如き世界の急湍激潮に棹す所の日本は、昔の鎖國時代の如き、消極的意見では決して國民生活の安定は得られない。國產奬勵、國富增進、海外發展、その戰ひの勝利に依て、始めて生活の安定を得られるのだ、食物が足らなくて、空腹で居る民衆に、無理に腹鼓を打てと云ふのは、殘酷で不自然だ、政黨政派が爭ふて、生活の安定を、その政綱に揭起するのは結構だが、生活の安定は、產業立國より來り、それも積極的に、我が生產物が、海外に進展しなくてはならぬことだ

產業と『生活』とのコペルニクス的轉回

澤田謙

產業立國と生活安定は、同一事の兩面であると、常識的には考へられる。現時日本の社會が、產業の不振と、生活の不安とに、脅かされてゐることは、なに人も否定しえざる顯るしい事象であるが、この國民生活の不安は、產業界の不振に原因するものであるといふ思想である。すなはち、產業がもつと振興して、日本の社會の『富』が、もすこし增加すれば、國民生活はそれだけ賑ひ、したがつて、われらの現在沈淪してゐる生活苦や、社會的疾患たる失業問題なども、それだけ除き去られるであらうといふ、考へ方である。

この常識的な考へ方は、相當に廣く行はれてゐる。意識的にこれを主張するものもあるし、また無意識的にこれを信じてゐるものもあるが、とにかくこの思想は、一種の國民的信仰を形作つてゐると言つてもよい。そして、この『國民的信仰』を貫く標語として、『不景氣』といふ言葉がある。不景氣とは、或る場合においては、產業の不振を喞つ怨言であり、或る場合においては、生活の不安を愬ふる喚聲でもある。

この產業と生活との一元的思想を、學的に樹立したものが、有名な『賃銀基金說』である。賃銀基金說は、いふまでもなく、近世の資本主義經濟學の發明したる學理であるが――わたくしが、『發明』といふのは、かれらは、社會經濟の事實を、如實に發見したのではなくて、その資本主義學說を說明するに都合のよい原理を、發見したといふ意味である――それは、勞働者の賃銀は、商品の價格と同樣に、需要供給の原則によつて、決定されるといふ學理の延長である。この思想は、經濟學の祖先たるアダム・スミスのうちにも見出されるが、この賃銀の需要供給決定說を完成したのは、おそらくリカアドであらう。かれは、價格を自然價格と市場價格とにわかち、賃銀の市場價格は、勞働の需要（すなはち資本）と、勞働の供給（すなはち人口）との比率によつて、決定すると說いた。ジエームス・ミルは、これを祖述して、『資本が人口との割合において、より強く增加する時は、賃銀は騰貴する。人口數が資本に比較して、より強く增加するときは、賃銀は下落する』したがつて『人民が貧乏にして悲慘なる境遇に生活するときに、これを改善するには、二つの方法のうちの一が必要である。すなはち、資本の增加を急速に計るか、或ひは人口の增加を緩慢にするかである』となした。『賃銀は、主として、人口と資本との比率に、依立するものである』と言つた。ジョン・ステュアート・ミルは、全然、父のこの學說を承繼したものである。そして、かれが後に、「勞働階級の數」と、「流通資本のうち、直接に勞働雇傭のために費さるべき部分をなすところの『賃銀基金』とも稱すべきもの總額」との間の比率によつて、賃銀は決定される（『原論』、第二卷、第十一章、第一項）となして、いはゆる『賃銀基金說』を建立したのも、アダム・スミスより、父ジエームス・ミルにいたる、資本主義經濟學の精神を體得して、これを彫琢したのにすぎない。

賃銀基金說の說くところによれば、一定の時、一定の國には、一定した『賃銀基金』といふものがある。これは、勞働者を雇つてこれに賃銀を與へるところの『產業』に投ぜられる、國の資本の總額であるから、他の條件にして不變なる限り、その賃銀基金の額は不變である。すべて賃銀は、この決定的なる『基金』のうちから支拂はれるものであるから、同盟罷業などの方法で、賃銀の値上を迫るのは、かへつてこの『基金』を減少せしめるのみで、したがつて、勞働者の自縄自縛となる。一時的にはその目的を達しても、そのために、他の勞働者を『基金』の雇傭可能範圍から追ひ出して、いはゆる失業者を增加せしめ、或ひは他の勞働者の賃銀を下落せしめるの餘儀なきに立

ち到らしめ、結局勞働階級が、自らを傷くるにすぎぬのであるから、もし失業者を救濟し、また賃銀を向上せしめんと欲するならば、産業を振興して、この『賃銀基金』を増殖するよりほかない、すなはち、『産業立國』の基礎さへ確立すれば、賃銀基金は増殖して賃銀額は増加し、自働的に『生活安定』がはかられる。なぜなら、賃銀は、勞働者數と賃銀基金との比率によつて決定されるから、といふのである。

『不景氣』といふ言葉で、産業不振と生活不安の兩面を代表させてゐるところの現代人は、意識的なるにせよ無意識的なるにせよ、みなこの『賃銀基金説』を、その論理的根據となしてゐるものである。ところが、この學説には、重大な學的缺陷がある。第一に、それが立論の基礎をなすところの、『賃銀基金』そのものが、全然、假想的なものであつて、いづれの時、いづれの國においても、さういふ基金は存在したことはない。たとへそれが實在的であると、想像しうるとしても、それは決して決定的なものではありえない。思ふに、リカアドが、賃銀は資本と人口との比率で支配されると説いたのはマルサスの有名な『人口原理』から使嗾されたものであつて、マルサスが人間生活の幸不幸を、社會の人口數と、その人口を養ふべき自然力——主として土地——との關係に求めたのを、換骨脱胎して、人口と資本との關係に及ぼしたものであらうが、それは非常に無理な推論である。すなはち『人口原理』にあらはれたる、土地と人口との關係が、資本と人口との關係に轉化し、つぎに賃銀基金と勞働者數との關係となつて、『賃銀基金説』を完成したのであるが、『人口原理』の場合においては、或る意味で、土地の生産力は社會的に決定的だとはいへるとしても『賃銀基金説』の場合において、賃銀基金を決定的だといふのは、どうしても獨斷だとしか思はれない、すなはち、賃銀基金説は第一に賃銀基金の存在そのものを獨斷し、第二に賃銀基金の決定性を獨斷しかくして『二重の獨斷』の上に建立されたる學説である。

第二に、賃銀——すなはち勞働の市場價格——が、需要供給の關係に依つて支配されてゐるといふことが、『賃銀基金説』の根定思想をなすものであるが、その根底思想そのもののうちに一つの大きな誤謬が横つてゐる。この賃銀の需要供給説は、勞働を一個の商品と觀察するものであつて、ある意味においては、勞働者はその勞働力を販賣してゐるにはちがひないが、一般の商品が賣買される場合と、勞働力が賣買される場合とでは、本質的な點で、大きな差異がある。それは、一般の商品には生命がないけれども、勞働力は勞働者の生命と、直接に關連してゐるといふことである。すなはち、商品そのものには、生

活問題が附着してはゐないが、勞働力には生活問題が糊着してゐる。元來、需要供給の原理は、自由競爭の社會を假定して成立するものである。しかるに、勞働力の賣買には、自由競爭といふことは、行はれない。行はるべく、あまりに勞働者の生活そのものと密着してゐる。近來、『賃銀協定』といふことが主張され、また實行されて、賃銀を、從來の如くに、個々の資本家と個々の勞働者との名義上の『契約』によらず、勞働組合と資本家との集合取引——『協約』による方法が案出されたのは、この『組合』といふ大きな、人格の設立によつて、個々の勞働力に内在する『生活制約』を減少せしめやうといふ考へであつて、かくして、『賃銀契約』が『賃銀協定』に轉化したために、『賃銀』は、需要供給の數量的な機械的關係以外のファクターによつて、異常の向上を觀たのである。この事實は、直接に、賃銀基金説の根柢たる、賃銀の需要供給説を、覆へすに足るのである。(尤も、眞正に意味せられたる需要供給の原理は、純粹に數量的な機械論ではなくて、その背後に心意的な勢力論を有することは、需要を定義して「購買力を伴ふ欲求」と言つてゐるによつても明らかであるが、賃銀基金説の根柢となつてゐる需要供給説は、かゝる眞正な意味の價格決定論ではなくて、全く數量的、機械的な考察であるから、之れが打破されゝば賃銀基金説は、成立しえざることとなる。)

かくの如く、『賃銀基金説』は、假想的獨斷の上に立てるのみならず、反實的誤謬の上に建てたる學理である。したがつて、これを學的根據とするところの『産業立國即生活安定』といふ思想も、それが國民的信仰をなせるにかゝはらず、もはや支持し難きものである。しかしながら、産業振興して『産業立國』の基礎なり、賃銀向上して『生活安定』の道が講ぜられることは、國民の齊しく瞻仰するところである。しからば、兩者はついに兩立しえないか?これを兩立せしむるの途は如何?曰く。『社會政策』これあるのみ。

この場合、社會政策といふのは、失業救濟とか、勞働保險とか、八時間勞働制とか、勞働所得減税とかいふやうな、いはゆる『勞働保護』の政策をいふのではない。もつと、國民經濟の根本に觸れた問題である。それは、經濟原論のうちでは、『生産』と『消費』との關係から發足するものである。

『産業立國』とは、おもふに、『生産』を興すといふことであらう。しかしながら、生産は何を目標として、『振興』さるべきものであらうか?生産は、資本家の私經濟からいふならば、もとより『金もうけ』のために、興さるゝものである。しかしながら、問題は『私經濟』ではなくて、『國民經濟』である。國民經

濟の問題としては、『生産』はつねに『消費』を目標として營まるゝものである。私經濟から觀ても、需要なきに徒らに貨物を生産しても、決してもうかるものではない。況んや國民經濟の問題としては、消費の振興なくしては、決して生産の振興はありえない。『生産』の背後には、かならず『消費』がある。消費の途を講ぜずして、徒らに生産の振興を絶叫するのは、壓力なしにポンプの水を天上に飛躍せしめんとするごときものである。

この理は、最も簡明なる道理である。なに人も、これを理解しえざるものはあるまい。しかも、おほくの人が、この理を忘れがちである。それは、産業革命の餘勢に馳られて、資本増殖の循環行程にのみ、眩目されたる當時の遺風が、今日において果をなし、いまやその行詰りに逢着せるにもかゝはらず、依然として舊時代の夢に耽れる結果である。したがつて、この『行詰り』から形勢を打開するには、『生産』は『消費』を目標として營まれるといふ、最も簡單なる――どんな經濟學書にも、かならず記してある――原理を、まづ記憶に蘇らさなくてはならぬ。

再び言ふならば、『生産』は『消費』を目標とする。而して『消費』を振興するとは、『消費者』の『生活』を振興するといふことにほかならない。いふまでもなく、消費が生産の動力となるためには、消費者に購買力が伴はなくてはならぬ。いはゆる『需要とは購買力を伴ふ欲望なり』とは、この謂である。一般の消費者の『生活』が安定して、これに購買力が發生したとき、はじめて『生活』はこれに應じて、振興し來るものである。

しからば、國民の生活は、いかにして安定し、一般消費者の購買力は、いかにして振興するか？おもふに、國民の大部分を占むるものが、勞働者またはこれに準ずべきものであるごとく、一般の消費者とは、主として生産の主宰者たる『資本家』以外のものである。すなはち、一般消費者の生活を振興するの途は、その國民所得の配分行程において、資本の餘剩價値の幾分をば、無産階級に均霑することよりほかにない。そして、わたくしのいはゆる『社會政策』とは、この國民所得配分の原理、端的にいふならば、資本の搾取を可能ならしめゐたる諸政策を廢止し、無産階級に正當の經濟權を賦與することにほかならない。

勞働組合の成立を阻碍し、その活動を萎縮せしめんとする法規や、農業勞働者、小作人の主張を有耶無耶に葬り去らんとする政策は、當然廢止さるべきものである。

現内閣の新政策

内ヶ崎作三郎

一

現内閣はその組閣の當初に於て宣言した三大政綱即ち綱紀肅正、行政財政の整理緊縮、普選の斷行はとにかく實現しえたのである。綱紀肅正も之を徹底的に實行するは容易の事ではないが、とにかく苦節十年淸貧に甘じてゐた憲政會が中心となつてゐる内閣丈に之を勵行するに有利にして且つ尤らしく思はれた。大藏省が預金部の内容を公表し、且つその部資金運用委員會を新に設けた、ことなどはその最も顯著なるものである。有識階級をして往々にして疑惑の府とならしめた預金部の改造は從つて現内閣の綱紀肅正に對しての一大貢獻である。植民地に於ける特殊會社や銀行も整理を行ひつゝあるから次第に面目を一新するであらう。

行政整理もその統一の方面には今後爲すべきことが多いが、整理は一先づその功を奏したのである。財政の整理も大鉈を振つたので、經費節約と事業繰り延べをやつて、一億五千萬圓程の支出を減少したことは現内閣の大手柄とせねばなるまい。

普選案の成立については色々議論もあるが、多年の懸案を解放して大正維新の大業の基礎を作り上げたことは如何なる反對者といへどもその貢獻を承認せねばなるまい。從來の三百三四十萬の有權者が一躍して千二三百萬となるのであるから、誠に目まぐるしい進歩といはざるをえない。

その他貴族院改革の問題は龍頭蛇尾とか泰山鳴動鼠一匹とかいうて皮肉つたり冷かしたりする人々が少くない。吾々もその批評と論難に萬更理屈がないとは認めない。さりとて有爵議員と勅任議員との間に三十九名の差があつたのを、伯子男互選議員より十六名を減じ、地方公選議員に於て十九名を增すと共に、その互選規則を改正して、從來の一府縣の有權者十五名を百名乃至二百名に激增したこと、ならびに帝國學士院より四名を互選せしむることは一種の改革である。これまでは梃でも動かな

そうであつた貴族院が自ら人災であり、俎上の魚であると絶叫してこの改革案に贊成したことは我が國の憲政史上の一大事件である。如何なる内閣もさはらぬものに祟りなしといふ態度であつたのだが、三派協調の勢力で推していつて、これ丈でもやつてのけたことは一つの手柄であるに違ひない。貴族院改革の可能なることが明白となつたからには普選によりて改造せらるべき將來の内閣が第二第三の改革を計劃するに違ひない。

二

さて現内閣は組閣後一年間に可なり大きな仕事をした。議會は五十回も重ねたが、第五十議會ほど大物喰ひの議會は稀であつたばかりか、絶無であつたらふ。それ丈多忙なる議會であつたが、現内閣を協贊して上記の政綱や政策を實現せしめたのであるから我々新米も此議會に列したことを以て光榮と感じたのである。然るに將來の政綱と政策は何かとなると、現内閣はよく〳〵の大綱を示した丈である。何故にその發表に躊躇するのか、これ迄十分に調査して準備してないかといき立つた質問の生ずるのも當然である。しかしこれにも相當の理由はなくてはならぬ。第五十議會は多事多難の議會であつた。その冒頭から雲霧が地平線上に現出して、難航海を暗示した。内閣は三派の協調と對樞府對貴院策とのために非常に骨を折つた。豫算案さへ貴族院で、最後の瞬間までこづき廻された普選案は兩院協議會に移され、恐れ多くも三度までも議會延長の詔書を辱うしたほどである。運惡ければ總辭職とも解散ともなりかねまじき形勢であつた。そこで政府も政黨も全力を擧げて狂瀾怒濤と戰つた。少からざる負傷はしたものゝとにかく政府の勝利に歸結した。しかし惡戰苦闘の疲勞もある、決定議案の實施に伴ふ緊急事務もある。政黨は政黨で普選區に對する報告演説會をやらなければならない。普選祝賀演説會も催さなければならない、そのうちに三派合同問題が發生して、大きな渦を卷く。之に汲い込まれてゆくもある。形勢を觀望してゐるもある。三派以外の政黨は之に甚大の注意と監視とを拂はざるを得ない。如上の理由で、普選成立後の政綱と政策は極めてぼんやりした輪廓しか出來て居ないやうである。之を以て政府と政黨とを責むるはやゝ酷である。しかし國民が兩者を鞭韃して、第五十一議會以前に政府及び與黨をして劃時代的法典即ち普選法實施の時代に處する政綱と政策とを發表せしめねばならない。否、大體は既に發表してゐるからその内容について詳細の説明や一般施設のあらましを發表して貰ひたいのである。

三

五月一日、地方長官會議に於てなされた加藤首相の訓示によれば、現内閣の新三大政綱は税制整理、行政統一、社會政策である。

税制整理について、濱口藏相は五月五日の同會議に於て次の如く述べてゐる。

『税制整理は極めて重大なる問題なるが故に、目下大藏省に於て、委員を設け、愼重調査中に屬す。その目的とする所は主として國民負擔の公正を圖るにあり。其範圍は固より國税地方税の全般に渉る税制整理の問題は實に我國多年の懸案なるを以て今回之が實行準備の調査に着手したり云々』

恐くは政府は國庫の收入減少せざる範圍内に於て租税の改廢を斷行し、有産階級の税率を幾分か高め、無産階級のそれを低めることを行ふことゝ思ふ。

社會政策については若槻内相は同會議に於て左の如く言明した。

『社會政策の實行は夙に現内閣の一使命とする所にして、各種勞働法制を整備するは極めて必要なるべきを以て、目下之が調査を進めつゝあり、健康保險制度に關しては既に法律の存するあり、之が施行如何は一に財政に顧みるの要あるも、是れが一日も速に實施の運びに至らしむるを期しつゝあり。失業問題に至りては社會不安の根本問題とも言ふべく、之が根本の解決策は一に完全なる失業保險の制度に依るの外なしと信ずるも、之れが實行には巨額の國費を必要とし、今直ちに之を望み難き事情あり。然れども一日も之が解決を忽諸に付すべからざるを思ひ、取敢へず職業の開拓と職業紹介制度の完備とに全力を傾注すると共に失業保險制度の實施に關する根本の調査を遂げ、將來必ず到來すべき實施の時期に備へんとす云々』

勞働立法の急務は若槻内相の夙に理解する所であるが、或事情の下に、第五十議會に勞働組合法を提出しかねたといふことである。苟くも普選法通過後の内政問題としては、この法案が最も重大なるものであるから、第五十一議會には必ず提案せらるゝものと考ふる。失業問題も之に次ぐ問題であるから、願くば調査倒れとならず、具體的方法を以て解決せられたいものである。

行政統一に關しては加藤首相の聲明を知ることが必要である。

『行政整理に關しては人員の淘汰と經費の減少に關するものは既に一段落を告げた次第でありますが、行政刷新の方法に至

りましては、今後努めて速に實行の方法を立てたいと期する次第であります。此行政調査の事に關しましては内閣に委員會を設け、調査審議を遂げ成るに隨つて實行に着手する考であります。しかして試に該調査會に於いて調査すべき事項の概目を掲げて見ますれば、

一、文官任用及文官試驗に關する規定の改正、
二、各官廳權限、官職名、官等待遇、官規の整理、
三、行政廳の爲す許可、認可等、行政處分事項の整理、
四、能率增進、事務簡省の方法、
五、地方行政組織の整備、
六、官業の整理、
七、其の他臨時附議すべき重要事項、

等であります云々。』

文官任用令中、陸海軍大臣を文官にすることは是非斷行が望ましい。既に陸海軍に政務官を設けてある以上、更に百尺竿頭一歩を進むる必要のあるはいふ迄もない。また是れ國民要望の一つである。高等試驗委員を現任高等官中よりのみ選任せず、民間の學者法律家、實業家等よりも少くとも臨時試驗委員中に任命せられたき旨は私が第五十議會に於て建議案を提出し、特別委員會にては全會一致を以て通過し、本會議も通過してゐる。これは是非實現あつてほしい。英國では現任大學教授を試驗委員に任命せぬといふ說を聞いたが、もし本當ならば面白い。我國に於ては殆んど臨時委員が現任の帝國大學しかも東京及京都帝國大學教授に限られてある觀がある。是非改正ありてほしい。又中央集權の弊がまだ甚だしい。內務省の權能を幾分か道、府、縣、に移したやうだが、更に英斷ありてほしい。今日地方分權が振はざる爲に、一切のものが中央にのみ集りて地方はその餘慶に浴する割合は少ないやうである。とにかく局課の配合の如きも行ふ餘地は十分にあると思ふ。

四

以上の三大新政策の外に、國際問題としては幣原外相の聲明した如く、『今後の國際關係並に對外交問題の根本基調は主として、通商貿易の促進と相待つて、海外移民の奬勵にある』は言ふを須ゐない。一年に人口六七十萬人を加ふる我が國としては人口問題は最も重大なる問題の一つである。內にありては集約農業、荒蕪地の開墾を奬勵すると共に、商工業を殊に激勵して、輸出の增加を計ると共に、平和的方法を以て海外に移民を送り出す方法を講じたければならない。政府は多分拓殖省を獨立せしむるかと思はるゝから、新政策が隨つて確立せらるゝで

あらう。商工業に關しては岡崎商工相の聲明せられた如く商業會議所をして十分にその、機能を發揮せしめなければならない。會議所議員の選擧の猛烈なるに比して、その機能はあまり發揮せられてゐないといふ見方もある。發明の獎勵は殊に行ふべきであつて、發明者を表彰する道を講ずることが大切である。

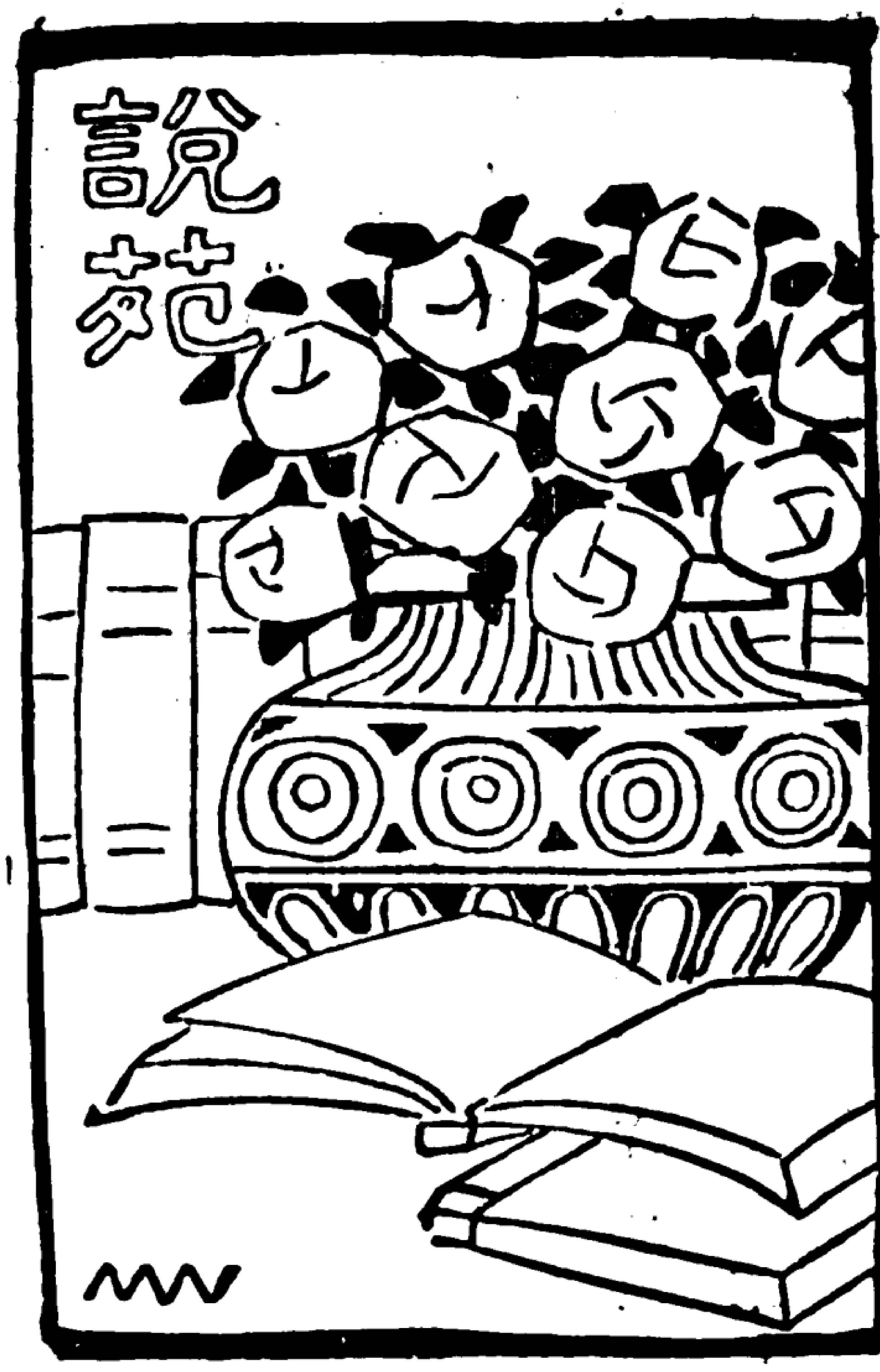
小作爭議については野田農林大臣は次の如く聲明してゐる。

『政府は小作爭議調停法を制定し昨年十二月一日より之が施行を見るに至れり。而して實施後日尚淺きに拘らず、既に相當效果の見るべきものありと雖も、今後一層其活用に遺憾なきを期し、公正なる解決を圖ると共に地主小作人の自省を促し、協調の精神を鼓吹して爭議を未然に防止するに最善の努力を致さゞるべからず、云々。』

最後に文政問題について文部省の方針は實業補習教育と社會教育に主力を盡すといふことを耳にした。師範教育の改善は既に着手せられたのであるから、前者の充實は最も必要である。特に公民教育は行ふことであるが、これは獨り實業補習教育のみならず、中學校、師範學校、高等女學校、その他の實業學校に於て勵行されたい。遠からず陪審制度が實施せられる、普選も行はれるのであるから、公民教育の普及は急務中の急務である。育方面に於ては多分成人教育に主力を向くることゝ思ふ。これも社會教化機關のことであるが、これをして機械的に働かしめず、人情味を加ふることが必要と思ふ。英國に於ける成人教育は矢張、各教會の日曜學校に於ける子供の宗教教育の精神が發露して一層自由な哲學的方面に向つたものと考ふる。一九二〇年度の英國成人教育協會發行の教科書は「人生の理想」といふ小冊子で、眞、善、美、を哲學的、倫理的、宗教的、藝術的に取り扱つてゐる。いはゞ超宗派的廣義の人生觀を鼓吹することが目的であるらしい。私は自らかゝる學校の一二を訪問して、文化教育の普及を羨んだ。どうか我國の成人教育もこの精神の貫徹を希望する。

猶女子の高等教育機關及び既設機關の解放は殊に望ましい。この建議案も第五十議會に於て衆議院を通過して、輿論を動かしてゐる。聞くが如くんば文部省は第五十一議會に官立女子專門學校一校の新設費を要求するとの事である。私はこの實現を最も熱心に希望する一人である。

私は一つの立場を守らねばならぬ必要上、單に理想や空想に陷り易き政策を述ぶることを遠慮して、現內閣が近き將來に於て實行しそうな政策の眼目について述べたに過ぎない。之を終りに一言して置く。



坤輿放歌行

志賀矧川

△亂濤捲レ氷迸入レ雲。英獄連レ雪天日兀。關河五十度以外。猶レ棄ニ敝屣一附ニ突厥一。欲レ討ニ唐室舊版圖一。直北海黑飛鵬沒。

君は『創世記』を讀みたるならめ、『元始に神、天地を創造し玉へり、地は定形なく、曠空にして暗黑、淵の面にあり、神の靈、水の面を覆ひたりき』と、君よ思ひ召せ、『創世紀』の句中に入り、句中の淵に丸太舟を泛べ、句中の水の面に原人を水手とし、濛昧混沌の間を流に任せ、行衞も知らず識らずして彼岸の秘密を發かんとす、さなきだに天地蕭瑟なる處、一年の秋暮れて、萬籟死し盡くし、三千世界の寂寥を破るものは、我が漕ぐ櫂の音か、鮭の跳ねる響か、但しは白梟(Syrnium uralense)の一二聲のみなるを、アヽ此の如き境界、大才ミルトンを待たずんば克く詩すべからず。丸木舟はツィム川を下り〱てオホーツク海に出づるや亂濤は氷を捲いて遠く雲に入り、エングイス・パーラ(パーラはギリヤーク語「山」にして清儒の英額中山)の雪被ふ峯尖は雲を抉て突と露はれた、此の刹那に予はホット人間に返へり、此處に此く石油を搜索し得、此く二瓶までも汲み來りながら此處も亦た露西亞に還附するのかと思ふと、感慨窮り無く、此の惡詩を行く〱朗吟すれば、聲々オホーツク海の亂濤と相和し、氣象自から悲壯なるを覺へた、時に明治三十八年九月二十五日、月曜、晴。

△珈琲背不ニ向レ非詩一。萬里巴西莫レ憶レ家。少女水晶簾外立。慧心留レ客薦ニ唐茶一。

伯剌西爾(支那人は巴西と書す)は世界に於ける珈琲の總産額の八割を産する、何處へ行つても珈琲の御播待で、おしまひには飽き〳〵して來る。それと少女は察してうい〳〵敷支那茶を點める、一入の味がする。

△南杏北杏一齊紅。巴東巴西春正中。客飽二珈琲一覺還永。銀盤依レ例進二香檬一。

伯剌西爾(支那人の巴西)のホテルで春の永い晝に又々珈琲と思ふと物うくなる、然しボーイが午後には青い香ばしい蜜柑を持つて來て呉れるからソレで助かる樣な思ひがする。

△善女善男成レ隊回。伽藍處處散レ花堆。五三六里中天路。象背春風馱レ夢來。

中天竺の路上、象に騎りノソリ〳〵五六哩も行くと、折柄の春風、象の背に懸けたる鈴はチリン〳〵と鳴り、得も云はれぬ心地となつてツト〳〵と睡りたる際に獲たる途中の實際實境である。

△休レ道東西自異レ文。會心何必在二云々一。寫來方對二天眞處一。鳥跡蟠行兀不レ分。

時の南阿弗利加聯邦首相スマッツ將軍へ宛、日本人排斥の不法に關する長文の書面を送つた、蟠行の長文を草し了りたる骨休に此の鳥跡の絕句を賦して自ら慰めた。

△遺蹤不レ問似二當時一。七百年來存二口碑一。習習春風越中路。落花飛絮將二巴姫一。

富山縣西礪波郡福光の田間に低き岡がヒョコリと立ち、岡の上には櫻の花が雲なす松の間より白く咲き亂れて居る、夫の粟津の敗戰に主人たり又竹馬の友たる旭將軍義仲を庇はん爲め自から刀を銜みて馬よりドッと地に投じて死したる『日本無雙の勇者』今井四郎兼平の城趾なりと傳へ、其妹巴御前も亦た此處に人と爲りたりと傳ふる。三十年前の春、予は此處を探り一惡詩を得たが、今復た三十年後に此處を探りたるに、料らざりき三十年前の惡詩を記憶せる人數多ありしのみか、其後に生れたる人も朗誦し居たるにぞメッタに詩も弄ぶ可らずと、深く恐縮の餘、原作の幾分を改訂したのである。因に云ふ『巴姫』は左思の蜀都賦『巴姫彈レ琴、漢女擊レ節』より巴御前に活用したまでゝある。

△慚卿細細飛レ絃哦。塞外重聽上國歌。命海況還風土異。瘦從二前度一二分多。

哈爾賓、其他所在に日本の娘子軍が居る、紅涙を白粉に紛らす生涯も坐ろに憐れを催すのである。

△呼嗟百里之水不レ可レ不レ治。三十萬鋪亦鉅哉。一死惟耐耶捕罪。五十三人齊同レ志。發憤革レ工工乃成。從容居レ服制二十字一。

双凄レ于レ氷血漲レ紅。薩南男子眞意氣』我今來過長良川。揖斐川南去傚レ船。二川溶溶通二蘇水一。灌漑三百萬石田。是時中秋已過レ半。穠桃黃雲遠レ天。無下乃當年紅血沃入上地。工事氣節兩堪レ傳。誰揮二淋漓如レ椽筆一。爲紀遺澤一百六十年。

日本一の沃野と稱へられたる濃尾平原を灌漑する長良、揖斐、木曾三大川の修築工事は『薩摩工事』と呼び、美濃、伊勢、尾張一百九十三ケ村、約二十八里に渉り、徳川幕府三百年間の大工事であつた。當時薩摩藩は幕府の强要的命令に屈從して此の大工事に當つたのであるが故に、當局の薩摩士人は悶々の情に堪へなかつた…………外に巨額の費用を支出せしめ以て薩摩の力を弱めんとする幕府の政略も歴々と見へた故に……かくて工事は二十萬兩即ち時價一千餘萬圓を費して立派に出來上つた。薩摩の士人は此の如く巨大の額を費せしは相濟まずと稱へ、一區の工事落成し幕吏の檢分終る毎に割腹し、四區の悉皆落成し幕吏の總檢分終るや、薩藩總奉行平田靱負は割腹した、薩人の意氣を而り見たる内藤十左衛門（美濃旗本高木家々來）も割腹した、死者合計五十三人、工事氣節兩つながら傳ふに足るものである。平田の死は西暦一七五五年で、本年五月は正百七十同忌に當る。然れば十餘年前鹿兒島縣教育會の招聘に赴く途次、『薩摩工事』を採りて此の惡詩を賦し、次で此處の稚松二三株と此詩とを携へて鹿兒島に行きたることを想ひ起し、旁々惡詩を再び想ひ起したのである。

△當日阿撒霜滿レ頭。濃尒却覺俗レ於レ秋。生憎喜望峯邊月。更照南阿舊酒樓。

十二年振にて南阿弗利加の喜望峯に行くと、我が髮も眞白だが、昔馴染の人の頭にも霜が滿ちて居る、それを月の光に照さるゝも心憎い、折柄の春の彌生も秋の央の心地がする。

△鴻爪雪泥何往還。安南之海瑞西山。半生詩句聊成レ集。多獲風衫雨笠間。

△搜來二舊稿一汗拂レ顏。雖二汗拂一レ顏詎忍レ刪。眞境寧存二惡文字一。會心何必一船山。

安南の海、瑞西の山、半生の詩句は聊か集と成るまでとなつた、然なきだに惡文字が行旅匆卒の作とて一層の惡文字となつた、然し眞境は寧ろ此處に存すと思へばこそ故と改刪せぬ故、先づ以て此段御斷り申上げて置く。

△無レ限碧雲湖上堆。大仙縹緲白衣開。松江偏爲二鱸魚膾一。二十年間四度來。

山陰第一の名山大仙は流石に『出雲富士』の名あるが如く松江市の碧雲湖よりの眺望を隨一なりと稱ふ、白妙の雪は[illegible]

鄕として青疊の上に來り、湖より捕立ての鱸の刺身にビールを酌む、亦た本邦に於ける夕涼の隨一である。因に云ふ、李白の松江行の詩『此行不レ爲ニ鱸魚膾一』と云ふ字を使つたのであるが、予も實は『此行不レ爲ニ鱸魚膾一』で、講演の爲め四回行つたのである。

△天姿隱レ乳憶ニ難陀一。清痩レ于レ梅悉達多。三丸山旬春水滑。隨レ湖落レ鬚下ニ恒河一。

悉達多太子は苦行六年疲れ果てたる際、牧女の難陀なる者乳糜を薦め、太子は始めて生氣づいた。美少年の太子、美少婦の牧女。『春水滑』とは際どいことである。然し後四十九日太子は成佛して釋迦如來となり、無慾の人と成り濟まされたるには流石の牧女も失望したるならめと。予も同情(?)の餘、其の故蹟を探りたる後二日、恒河を小舟にて下つた。恒河は古天竺の聖河にして大涅槃經にも散見し、本邦の二聖牟に當る。

△大艦小艇如ニ怒雷一。日末北浮一齊來。多艘脚色隨ニ川水一。逝者如レ斯猶齋晝。

『中央公論』に眞山青果氏の戲曲『平將門』連載せらる、將門北大を捌りに見るが如く、まてとれ天才の作なりと思ふ。將門一生の活劇は脚色多きた、曲調が頗ぶで、大江小江怒濤の如く、日末北浮一齊に來つた様である。茨城縣北相馬郡守谷町に在る平臺と云ふは小貝川の孤地より崛起し、高僅十米以上、正しく將門の僞宮跡である。『逝者如レ斯夫』は孔子の川上の歎で論語に見ゆる。

△湖須捲レ地從レ北來。衣冠南渡遂不レ回。海鳴風雨護ニ神器一。永夜湖高幼主哀。是時獨揮臣子淚。約語ニ諸將ニ勸ニ將帥一。孤城如斗鼓敢降。一劍聊守趙天地。守レ之者誰陳文龍。畢生遇レ身元慷慨。做餘寧食醜俘粟。不レ負平生學ニ大義一。我今來過閩中路。夕陽影落冬青樹。樹下貞石刻ニ六言一。日陳水相訣別處。馬下爾拜讀ニ碑陰一。若氣猶冷識ニ云穀一。回レ頭崖山海色紫。帝子英魂在ニ此裏一。長吟吊ニ古夜風波。十字星低天連レ水。

支那福建省の合沙驛は我が櫻井驛である、櫻井驛が楠公父子の訣別處として有名なるが如く、合沙驛は南宋の名臣陳文龍父子の訣別處として知られて居る。宋の元に攻められ、閩ふ毎に撤れ、遂に幼主を奉じて南遷するや、七率多くは元に降つた。文龍は學文の出身なるを以て大義を說いて降を拒み、合沙驛に其子と訣別して後事を謀へ、去つて孤城を守り、食竭きて囚へられ、而も敵の粟を食はずと叫んで死んだ。予が此處に來りたるは歳の暮であつた。即ち南天十字星は此邊より初めて見ゆる。(三二三〔コ五

△東南決レ眥望汪洋。萬丈長鯨超二森茫一。倒蘸二扶桑美人酒一。長生浦上作二端陽一。

長生浦は朝鮮東海岸の捕鯨の根據地である、此處の一料理屋に上つた、鯨の膀胱を張つた大鼓をドンドコドンと敲く、奇拔だ、痛快だ、主人には鯨の大なる鬚を展べて一筆をと請ふた、すべつこくて墨がのらぬ、オイ別品サンあなたの白粉に臙脂を雜ぜて茶碗一杯に持つておいでと云ふと持つて來た、それで此詩を書いた、予は覺えず云つた、今日は五月五日で端午だ、男の節句だ、長生浦だ、御蔭で長生きが出來る喔と。此詩は第八流どころか第十流以下の惡拙ではあるが、賣笑婦の白粉と臙脂ともて鯨の鬚に書いたと云ふので、爾來此樓の呼び物となつて居つたそうであるが、數年前或る客が醉拂つて手拭で消して了つた。主人は殘念がつて再び書いて與れよと東京に書送し來つた、書き送つたが、今掲げてあるのは原物では無い。

△千里江陵一日還。萊因夕照絕二人間一。東人漫誦西人句。咫尺無上佗說中犬山一。

『話半分、景色五分』とは世の云ふ所である、是は必ずしも道理ないとは云はれない。然し獨逸ライン河の風景に至ては世評の五分一以上である、寧ろ世評通りである。ラインの風景何が故に美なるや、大河洪渺、平野を貫流し來り、兩岸崿に千仭、葉樹彩りて滴らんとし、丘上は葉樹より拔きて、一片の孤城、其の頂上に立ち、白帆斜陽を浴びて江水に遡り、夕陽は城樓の半面を淡く抹し去る處に存する。ラインの風景を一賞せし後、其の匹儔を我が國土の內に需めんとし、探ぐること二年餘、髣髴として之を犬山城下の木曾川に得た。犬山は名古屋市の北七里、岐阜市の東五里、木曾川東より平野の間を流れ來り、懸崖嶄然として水より起り、孤丘百尺、犬山城の高閣其の頂に兀立して影を淸流に蘸し、夕陽倒斜、森林蒼然として來り、城頭の粉壁を紫に染むる處、朝々暮々此處を上下する舟人をしてすら棹を停めて坐ろに恍惚たらしむる、誠に是れ一幅ラインの縮圖である。

△又開吳下舊阿蒙。一蹴風雲志竟空。唐叟呵呵開レ口笑。不レ如仙島學二仙翁一。

マウイ島のカマオレに行つた、孫逸仙の故宅がある、孫は十歲まで此處に居り、遂に世界の風雲兒となつた。唐前なる者が孫の實兄亞米より此家を買つて住つて居る、山楊子の枝を折り、贈つて曰く孫が支那より移植したるもので、此のマウイには絕えて無いものであると。唐は孫の近狀を問ふた、予は之を說明した、すると唐は呵々として笑つた、予は唐の

齡を問ふた。七十九歳なりと、卽ち鉛筆を把りて彼に示した る惡詩が是である。

△馬頭聲歇巷西東。製鐵場頭月似ㇾ弓。三月濠州秋色冷。滿天 風露聽ニ吟虫一。

南半球は北半球と季節は正反對で、三月は秋である。

△艶色歸ㇾ空倘有ㇾ情。刳ㇾ心十字太分明。埋香塚上花猶在。茉 莉生憐別樣淸。

秋田城趾の土中を掘りたる時、陶器製の女神像が見付つた 胸に十字を刻み、正しくマリア（茉莉）の像である。本邦人 の記錄には何の據る所なしと雖も、エスイタの記錄に依れ ば、秋田舊藩主佐竹氏第二世の姬人は天主敎に歸依し信仰を 守りて動かず、侍女亦た信仰を守りて再嫁を肯んぜず、其父 之を殺したり云々、此のマリア像蓋し此の悲劇の記念。

△隔岸樓臺倚一層。南天三月水雲蒸。驟來椰樹凉蕭颯。數點流 螢大似ㇾ燈。

柔佛は亞細亞大陸の最南端に在る回敎國である、赤道線よ り少しく北に在るを以て未だ北半球に在る、然し熱帶なれば 三月より全くの夏景色となり、一日に少くも一回は驟雨が降 り、凉味は椰樹の葉に深ひて來る。

△惠那(Jena)山下森雪融。融入ニ蘇水一水初豐。雲擎十八瞼ニ波 紋。何來神女蹈ㇾ紋至。抱ㇾ琴上ㇾ石彈ニ四絃一。洞淵蟄龍亦垂ㇾ涙 (「rachenfels)』兩涯杜鵑花如ㇾ烘。生憐顏紅別樣紅。眞成傾ㇾ城 又傾ㇾ國。如今初悟色卽空。

木曾川(蘇水)卽ち日本ラインを上り、岐阜縣惠那郡中津川 附近に行くと、激流が花崗岩を浸蝕し、奇岩なる雄壯なる景 象を呈する、惠那峽が是である。峽中に流水が更に浸蝕して 洞門を穿つ所がある、蟄龍洞と名づく、獨逸ラインのドラッ ヘンフェルス(龍溪)と同じである、川の下流犬山附近に乙女岩 と云ふが立つ、獨逸ラインのロレライと同じである。予が此 間の水を日本ラインと命名するや、一漢學的文士はバタ臭い と嘲つた、更に此詩を讀んだら一入バタ臭いと罵るならん。 然し予の詩は自ら平生より第八流と稱へて居るが、此の漢學 的文士の詩といつたら最屓目から見ても第十三流である。是 は平生よりバタを食べぬ故、榮養不良で、齡が五十六十とな ると頭が化石化する故である。予はバタが大好物で、何にで も附けて食べる、何の長所も無いが、雪中露領オホーツク海 岸に野宿しても、又地球上第一の熱地オーマン國のマスカット に行つても暢氣千萬で、第八流の惡詩ではあるが最も氣樂に 賦し得らるのゝは、平生バタを愛用する御蔭なりと思ふ、バ タは僅か一斤(百二十匁)にて雞卵なれば四十一個、鯛なれば

一貫三百八十匁の榮養價値を有つ故である。

△硬語盤レ空憶二素毛一。火輪如レ裂暑焦熬。阿彪當日膽何小。才度二利根一仍自豪。

素毛は飛彈の俳人である、西暦一八六〇年……予の生れたより三年前……早く既に巴奈馬を超え、『裂くる程車の音も暑さ哉』の句がある、日本の俳人にして巴奈馬を超えたる最初の人である、否共後六十五年、今に日本の所謂俳人にして巴奈馬運河を見た者すら無い。素毛の巴奈馬行の先十五年、水戸の藤田東湖（字彪）『二十五回渡二刀水一』の句がある、如何に當時とは云へ、水戸より江戸まで三十里、此間才かに利根川を二十五回渡りたりとて仍ほ自ら豪がるなどとは如何と思ふ。予は飛彈の益田川畔なる下原の里に素毛の故郷を尋ね、次で巴奈馬に行き、ゆくりなく素毛の東湖を抜く數等なることを思つた。因に云ふ『度二利根一』は法華經又は唐の經藏飜文の語であるが、こゝでは『利根を度る』に活用したまゝである。

△輕衫却不レ怕二風塵一。九月南阿柳色新。勸レ君更盡二三鞭酒一。西出二陽關一逢二故人一。

渭城朝雨浥二輕塵一。客舍青青柳色新。勸レ君更盡一杯酒。西出二陽關一無二故人一は、苟くも唐詩を解する者は誰れ知らぬもの無き王摩詰の傑作である。陽關三疊と稱へ、人の別を送る席上にて歌ふもので、我々の書生時代には必ず歌つたものだ、此の氣分は今日にても失せず、一寸人が米國そん所に旅行するにも、ヤレ送別會だヤレ留別と稱へ、出發の際などには見送人が鐵道驛にドヤ〱と群がる。予は常に思ふ、此點が實に日本人の所謂海外發展を妨害する眞の髓であると、依て此の陽關三疊の詩を引つくり返し與れんずと是も常々より思つて居つた。會々南阿弗利加に再游すると昔馴染の人に逢ふた、南半球は北半球と氣候は正反對で、九月は恰も柳の糸が青々と染なす春である、そこで久シ振に三鞭酒の杯を酌み交した。予の此詩は固より惡拙の極である、然し『無からん〱故人無からん、西のかた陽關を出づれば故人無からん』と三たび悲しき調もて嘆みかけるよりは、此の『君に勸む更に盡せ三鞭酒、西のかた陽關を出でて故人に逢ふ』の方が閑心である、海外發展的であると自ら思ふ。

△黏レ天大野望將レ迷。一鶴掠レ空雲脚低。不レ屑游蹤落二人後一。宂餘自レ是入二巴圭一。

巴拉圭は『南米の心臓』と稱へられ、南亞米利加大陸の眞の中心に位する。國の面積は日本全帝國よりも朝鮮の半分丈ケ小さいが、流行に世界第一の山無シ國のことゝて、地味は

肥え水利の便は良い、日下西洋各國よりの移住民は蟻の甘キに就くが如くに群れ來るのである。大正十年十月、日本ト通商條約を締結し、他の亞細亞人種の移住を禁止すれども獨り日本人の移住を許可することゝなりたれば、疾く彼此の親交を期せざる可らずと此處に行かんとした。さて大陸の眞の中心に行くなんと思ふと、何となく悲壯な心地がする、是は島國人に於て特に然りである、予も御多分に洩れず巴拉圭に行かんとせし際は實にソンナ氣がした、故にコンナ詩を作つた。ラ・プラタ河を溯ること一千一百浬、巴拉圭國都アスンシオン市に着くと、國人は日本人なるものを珍しがり、國立博物館、圖書館は水曜日は閉館するに拘らず特に開館し、博物館は國立大學長の令息が特に來りて案內する、圖書館長は『陸軍大將伯爵乃木希典』と日本字にて印刷せる名刺を携へて來り示す、大學總長バーエス博士よりは其の著述を贈り來る政府は各種の圖書、統計表の類を贈る、大統領エウセビオ・アジャーラ氏には謁見する、大統領よりは答禮使が來る、予がホテルに內閣大臣一同を晩餐會に招くと、外務大臣アルセ氏夫妻大藏大臣エリヒオ・アジャーラ氏（現大統領）其他一同喜んで來會せらるゝと云ふ様な事實で、予が幾回の外國旅行中に巴拉圭ほど開心の處とては無かつた。それを當初悲壯な心地で出發したかと思ふと、ヤレ／＼島國人の根性の小ッポケサよと自から顧みて恥しさに堪へぬ。

△甲陽美酒綠葡萄。霜露三更濕ニ客袍一。欲レ訂徠翁詩一句。芙蓉萬仞月中高。

甲陽美酒綠葡萄。霜露三更濕ニ客袍一。須レ識良霄天下少。芙蓉峰上一輪高は物徂徠が甲府客中の傑作として人口に膾炙する所のものである、然し可惜徂徠をして『島夷』たらしめず一たび大陸を見せしめたる後なりしかば、此詩の結句は此くも小ッポケならず、芙蓉萬仞月中高となせしことならんか。

△新羅王好啖ニ臀肉一。頸血濺レ空仍嚮レ東。往事千年春似レ夢。李花吹盡馬蹄風。

馬上ゆたかに慶州即ち新羅の故都に行くと、一千數百年前の王陵には春草茫々として、石馬聲無く、李花咲き亂れたる處、我が王朝の帥が新羅に破られし、壯士伊企儺が群がる新羅に向ひ『新羅王吾が臀を啖へ』と罵りて斬られたる當年の事を思ひ詫びた。內地人の歡迎會に臨み、此酒はと問ふと、朝鮮米にて內地流に醸造し『新羅王』と名づくと答へた、良し新羅王を呑み干すべしと且つ此の腥詩を放吟した。然し何んと云つたとて朝鮮の京都は平壤である。況んや官妓の淵叢で、官妓學校の設ケすらあるをや。

△一角秋山候二暮湖一。大同江上暫停レ橈。青鰻黄柄宮姫酒。隔レ水雲煙似二六朝一。

然し江水の汪々として流れ、水より岡陵の起り、樓閣人家或は高く或は低く花樹の間に隠見する處は、平壌は京都よりも寧ろプラーグ（チェッコ・スロヴァキア國都）に似て居る。予は大正十三年プラーグより歸りて平壌に行き、大同江の彼岸より市街を眺めたる際は、又々プラーグに來たかと思つた位である。

△佳人如レ玉嬌倚レ欄。香鎖南海花怯レ寒。紅箋寫上相思字。待レ郎爲結二龍舌蘭一。月白蘭香郎不レ至。金釵敲斷夜向レ闌。記至二此處一砲聲轟。亂下榴霰彈七珊。知是大敵渡二河水一。投レ筆顧眄郎攘レ鞍。急編二一隊一自爲レ長。報國忠厚一寸丹。喑啞叱咤先二士卒一。中レ肩中レ胸兩銃丸。平生文章灑二熱血一。遂以二身命一擲二國難一。墨西八月水如レ湯。敵軍徒渉誰能防。想君七十怒二銀髯一。腰間長劍鳴鏘鏘。行人憑吊來下レ馬。墓畔老猿啼二楮椰一。當時遺稿不レ可レ續。千秋英靈哀二五郎一。酹レ酒招レ魂哭者誰。日本詩人志重昂。

墨西哥のゴロースチサ（五郎翁）は戯曲家である、筆硯幾十年、身體最と衰へ、足腰も立たぬ様になつた、然し矻々として或る戯曲を起草して居つた、男女の情事得意の處に來る

折しも砲聲殷々、米軍が河を渡り來るとの報に接した、すると筆を投じて軍に從ひ、遂に銃丸に中つて戰死した。是は當年の米墨戰役の一壯烈譚となつて居るが、亦た以て墨西哥人は愛國的矜恃と云へば痛烈で、又米國嫌と云へば痛烈なることを察すべきである。然は云へ日本が亦た利權々々と呼びて墨西哥に臨み、米人の曾て爲す所を學ばんとすれば、墨西哥人の愛國的矜恃を傷け、亦た嫌はるるは火を睹るより明かである、此間の消息に通ぜず、米人の所爲を我に於て試みんとすることあれば、我は全く米人の二ノ舞を演出するもので ある。

△綠滋垂楊萬萬條。逝春曛日馬蕭蕭。可レ堪聊酹二中原酒一。不レ祀孤墳魂欲レ招。

世に凄慘なるものは墓、墓の最も凄慘なるものは不祀の孤墳である、況んや撤兵の後これを他人の境土に留むるをや、露領樺太アレキサンドロフスクの岡上に立てる明治三十八年日本上陸軍將士の墓が實に是である。

△倒レ影龍堆地作レ文。一行駝馬望中分。張レ眉大漠連二西北一。月割二平沙一不レ看レ雲。

阿弗利加の月の夜、沙丘の影は倒に映りて地は文を作り、平沙遠く地平線を劃る處、一行の駝馬隊は馳せて行く、予は

半生に見得たる快觀の一であつた。

△抜レ釵憐汝已無レ多。風雲長安夜若何。更憶挑レ燈重細綴。綿袍定到レ自二三河一。

ケープ・タウンより予の老妻に送つたものだ、起句は淸の張船山夫妻の故事、承句は唐人の故事、結句は史記の范叔の故事を用ひ、『三河』も史記の字を用ひ、一切故事に據り、御ノロケ丈ケにソンジヨお安くない品なりと自慢申上げる。三河は予の郷里なれば三河木綿のドテラに流用したのだ、某唐詩家の元老には何處かで此詩を見て『志賀も一生に此の一詩だけ作つて置いたらヨカッタローに』と云はれたと傳へ聞く、とは云へ予の老妻が果して留守宅にて三河木綿のドテラを補綴して居つたや否や。

△風孕二三帆一助二晩凉一。濠蘭南去望二蒼茫一。不レ知今夜何邊泊。月白波高赤道洋。

△目斷蒼溟萬里秋。天邊彷彿是濠州。何來孤鶴拂レ雲起。晚月影高南半球。

風は四十五度ぐらゐの角度にて斜より一定の方向、一定の速力にてソヨ〳〵と吹いて來る、果して貿易風である、かくて三本の檣の帆は何れも風を同一に受ける、然れば船は一時間に十一二三浬も走りながら動搖せぬ、空中の水蒸氣は四方に吹き散らさるゝ、晴雨計は高度を示す、我髮はサラ〳〵と拂はる、涼氣は颯々として衣帶の間に生ずる。濠蘭島（二三三）を南に過ぐれば赤道の南北には島影だに認められぬ、海は蒼茫として濠太利は抑も何處に在るぞ。仰げば空は冴え渡り、眞綿の如き雲がフワリ〳〵と浮び出づる折柄、一隻の大なるアルバトロス鳥が双の翼を張りて雲を拂ふかと見紛ふ刹那、皎氷の如き月輪は高く南半球の天に懸る。

△曾聞丹國出二蛾媛一。寂寞香泥跡不レ存。十里春山船井郡。落花何處吊二芳魂一。

丹波船井郡の玖賀媛は上代の美人であつた、仁德天皇の慕はせられたる事は仁德紀に詳なり。

△日本天皇萬萬年。一齊和唱四邦賢。擧レ杯相酹櫻花酒。十有六人無二後先一。

汽車はヅン〳〵と北智利よりボリヴィアとの國境めがけて北東行する、砂、砂、砂、砂、砂のみである、謂ふ勿れ、沙漠の景色は單調なりと、谿が穿たれてある、平地が連なる、高臺が聳いて居る、圓き岡が立つ、稜線の鋭い山が峭起する一路一山苟くも雷同せず、一々それ〳〵の趣を具ふるのみかは、其の太陽に對する光線と影とに云ふ可からざる趣がある、十餘年に埃及の沙漠を渉りたることありしが、其の面には何

等の感興だに催さなかつたが、今日は汽車が進行すれば進行するほど愈々益々面白味を增し、今更となりヴァン・ダイク氏(米國ニュー・ジャーシー州ラッドガース大學)の千歳不磨の美文『沙漠』を想ひ起したのである。車中食堂にて南米刻下の大問題たるＡＢＣ三雄國(Ａ亞爾然丁、Ｂ伯剌西爾、Ｃ智利)の軍備縮小問題に花が咲いた。予は隣席の西班牙人に向ひ、君は外國人として公平なる觀察を下さるべきが、智利の如き硝石と武とを以て立てる國が果して軍備を縮小し得るものなりやと問ふた、すると西班牙人の云ふには、智利は今や財政困難の極に達して居る、最近に外國債を募集したるも、前々度よりの外國債の元利に差引せられて手に入りたるものは少額に止り、紙幣は下がる一方である、何んとか局面を轉回せざる可らざる秋に當り、今回其の歷史的友邦たる伯剌西爾より軍備縮小の内議を提出し、のみならず約四十年來紛糾の濫床たりしタクナ・アリカ問題も本年七月(大正十一年)米國の仲裁に依りタナクは秘露に歸しアリカは智利領と確定せられ、智利としては今や北顧の患は無くなつた、然れば智利は到底軍備を縮小すべきものであると。聞き了りて予には、南米随一の武國たる智利すら軍備を縮小すべき氣運に頻せりとあれば、南米の平和は依て期し得べく、世界の人道の爲めに慶して賀せざる得ずと、カバンより櫻正宗の瓶を取り出し、是れ一萬五千粁米の先より來りたるものである、希くば諸君子には此酒を飲み杯を擧げて世界の平和を祝せられたしと、皆云ふ、余等は生來未だ曾て日本酒なるものゝ味を知らず、快く御馳走に預らんと、依て予には車中の十六人に一々注ぎ廻はり、さて智利の諸紳士及び隣席の西班牙紳士の外に付其他の國人在らせらるゝやと問ふた、後方に座を占め居たる二人が余等はダルマチア人なりと答へた、即ち予は杯を擧げて智利大統領閣下、西班牙皇帝陛下、セルボ・クロアト・スローヴェネス皇帝陛下の萬歳を祝すと唱へた、すると一人のダルマチア人が余はクロアト種なり、日本皇帝陛下萬歳と唱ふるや、堂内の十六人は一齊に之に和した。ア丶我が叡聖々武なる　天皇陛下の萬歳を祝し奉りたる者世界に於て億千萬人あらん、然し智利ボリヴィアの境上、大沙漠の中央、日本酒の杯を擧げて祝し奉りたる者は恐らくは此の十六人を以て空前たらんかと思ひ、覺えず此詩を口吟した、惡々何も茲に至つて極れりと云ふべきも、字々悉く事實にして、漢詩一流の浮辭一だに交へない。

△浦領醉虜是吾郷。幾箇中華兩不レ妨。六十年來無二此樂一。大呼前號賴山陽。

予が施行先より日本の知人に送りたる書に曰く、

謹啓少生事伯剌西爾、烏爾圭兩國の境上に漂泊致居候、烏爾圭に入國せん欲すれども汽車の連絡無きが爲めに Rivera と申す日本に存在する地圖などにては顯微鏡にて探らずんば發見し得ざる底の一寒驛に二晝夜半一人にて待ち詫び申居候。近頃入國の困難なる事『身落荒陬蠻語中』なる事、逆旅に寄泊せる人々の『麑洲逆旅歌』を今日前に見るが如き事などより、ゆくなく賴山陽先生の肥薩境上に於る當年を追懷致候（中略）先生には當時九州地方の酒の赤くして甜タルキを嫌はれ、途中にて偶々伊丹釀の劍菱を得られたる節は鬼の首にても獲られたるが如くに打ち喜ばれたる事は其の幾多の詩にても判り候へ共、伯剌西爾の極南のリオ・グランデ・ド・スール州は最も葡萄に適し、此州に移住せる處に獨逸人及び伊太利人には各々葡萄酒を釀造し、其の芳醇なるは伊太利ミラノ萬國大博覽會に出品して優等賞を得たるにても之を知るべく、此の生粹の醇酒が大瓶一本五十錢以內（日本貨幣算）にて容易に購はれ、且つ先生が赤味噌を好かれたるは夫の鴨川畔の嘗見が『さて翁サンの好物は』とて赤味噌を献へたるにても相判り候へ共、南伯剌西爾のパラーナ州も聖カタリーナ州もリオ・グランデ・ド・スール州も何れも牧畜盛んにして、此處に移住せる獨逸人は盛んにチーズを製造し、數日前ポンタ・グロッサ驛にて紙幣一ミル札（日本二十五錢弱）一枚を出したるに、東京銀座龜屋にて賣る一函二圓五十錢のものよりも多量に有之候、ナント五十錢にて生粹の葡萄酒を數大杯傾け、二十五錢のチーズの大片を下物とすれば、夫の劍菱や赤味噌やなど何んのその、小生には六十年來無二此樂一、大呼前輩山陽……張船山なりしか郭頻伽なりしか記憶より逸したるが十二萬年無二此樂一、大呼前輩李靑蓮と云ふ醉中の句あり……と放吟せざるを得ず候（下略）。

又亞剌比亞オーマン國都マスカット（世界第一の熱地）より送りたる書に曰く、

パルチスタン、波斯、亞剌比亞に獨り旅しつゝあるなど申せば知人中には老生がショボ〳〵と成り果て氣ノ毒千萬なることとならんと御同情下さるやも知れず候へ共、ドーして〳〵ソンナ不景氣なる次第には無之、賴山陽先生は西游の節九州の酒が甜たるくて飲めぬとて途中偶々伊丹酒を獲られたる時は鬼の首でも取つた樣に喜ばれたる事は其の試作中にも往々相見候へ共、老生は如何に亞剌比亞三界に漂泊せりとて日本の灘の生一本は未だ六瓶丈々缺し居り、

右の内二瓶はユウフラト河を溯りバビロンの故城に上りたる際、一瓶は來る三月十九日（大正十三年）即ち陰暦十五夜の明月をチグリス河畔に賞づる際、一瓶は沙漠を横斷して地中海に出で得たる刹那心私に自祝自慶せんとする際に飲まんすべき豫定にて、當年の山陽先生の境涯よりは一入痛快なりと自惚れ居り候に付、老生一身上に就ては何等の御懸念無之樣奉願上候。

と日本に書送はしたが、其の前後の事實は下の如くである。

如何に百年前なりとは云へ、島國に生れたる者は何んと云つても度胸が小ッポケだ、我は學者では無い、又學者と呼ぶ者があれば常に之も叱咤するが、度胸丈ヶは山陽先生見た樣に小ッポケでは無いと、オツに力味出し、山陽否學者に對するデモンストレーションを一ッ遣るべしと、日本酒を携へて亞剌比亞沙漠横斷の行に上つた。亞剌比亞沙漠は今日駱駝隊即ちカラヴァンにて横斷するには四十五日を要する、然るに予は自動車を驅し二十六時間にて突破し、地中海系に出づることを得た。三月二十日夜は恰も陰暦十六夜の滿月であつた。大沙漠の眞ン中、乾き切つた空とて水晶よりも白き皎々たる光の下にて日本酒の瓶を開き、會々同乘せし一英人一パーシー人と共に相酌み交はし、爲めに二時間を費した。然らば自動車を驅りたるは二十四時間即ち正一晝夜である。カラヴァンなれば四十五日間かゝるのを自動車もて一晝夜にて突破し得たのである、人類が陸地なるものを全く征伏し得たる適切の一實例である。然し此の自動車もガソリン油即ち石油が無ければ一寸も動かぬ、豈に一の陸のみならんや、此の地球と云ふ行星は空氣、陸、水の三より成つて居るが、空氣は飛行機、陸は自動車、海は内燃機關の汽船に依らずんば征伏し得られぬ、而して飛行機も自動車も内燃汽船も何れもガソリン油即ち石油に依らされば行ることが出來ぬ[illegible]かつせば空氣にも陸にも水にも劣敗して國家として此の地球の上に存在することを容るされなくなるのである。將來の世界は一言にて盡く、曰く油の供給多き國家は尤り榮へ、油の無き國家は自ら消滅すと。誰が云ひ初めけん、「油斷大敵」と大敵どころか、油が斷ゆれば國が斷ゆるのである、「油斷國斷」である、宜べなり歐米列國にはヒステリーの如くに發作して石油を捜索しつゝあるとを、而して此秋に當り日本の石油政策を如何せんとする、感一たび玆に到れば是れ詩など作り居るべき秋にあらず、請ふ我れ君と共に筆を投じ否筆を燒き讃くして列國石油々田爭奪の間戰場たる波斯に行かん哉。

今ハ隣ノ油喫於內。虎狼前後迫脇邊。誰哉一喝驅逐去。大食

豪傑里沙汗。起レ身大馬長槍卒。作レ億十有七創瘢。乃揮二十年所レ磨劍一。叱咤玉殿伐二綺紈一。黄袍天子絶レ跡去。笑受諸將上二玄冠一。白虹貫レ日非二異瑞一。宗社却見磐石安。漠北射レ鵰好下物。一杯欲レ壽獨裁官。

波斯は今より二千四百五十年前早くも其の領土が亞細亞、阿弗利加・歐羅巴の三大洲に跨りたる古帝國である。近世に至り其の領土が北は（露西亞）、南は英吉利（印度系）の間に介立するのみならず、石油の多量なるは、米國に次で世界第一たること明かとなるや、英露兩國は波斯油田の獲得に腐心し、兩國競つて賄賂政策を行ひ、兩國の賄賂は湯水の如くに使はれ、宮廷を腐らし、大臣を腐らし、議會を腐らし、折柄皇帝は未だうら若く歐洲に遊んでは巴里邊の花柳界にて『シァー樣〳〵』と持て囃され、是れ亦た金を湯水の如くに使ひ、波斯の事復た收拾す可らざる秋に現はれたのが里沙汗である。里沙汗は素と太食種（Tajiks）の土人で、露國士官の訓練したる波斯哥薩克騎兵の一卒であつた、祖國の形勢累卵よりも危きを坐視するに忍びず、慨然として身を挺で、明年の間に要路の人となり、波斯百年の大患たるバクテリア各種族を平定し、更にモハメラ國は世界石油界の覇者たる英國波斯石油會社營業本部の所在地として固より英国系なるに拘らず、其の國主をして波斯に歸順せしめたるなど、僅々四年間に赫々の功蹟を擧げ、陸相よりして首相兼陸相兼内相兼大元帥となり、國人も亦た帝國を廢し共和國となし、里沙汗を戴かざれば到底國脈を保全す可らずとなし、大正十三年三月、予が南波斯の田舍廻りをなせる時、識者は何れも此説を主張して居つたが、此の如き事に反對するは何れの國にても坊主であるが、此種の運動は果して坊主連の大反對に依り愚かにも中止せられた。然し同年秋の頃より流石頑冥の坊主達も、里沙汗を擁立せざれば虎狼の如き西洋人に當り難しと目が覺め來り、本年二月十四日皇帝は廢立せられ、里沙汗は獨裁的大統領となつた、其の玆に至りたるは豫定の行動で、寧ろ遲かつたのである。里沙汗の外交政策は英露兩勢力を驅逐し、る財力は米國に依ること、内政は土耳其のケマル・パシャに習ふこと、國是は日本に學ぶことを云ふのである。

△仙女舞衣懸二月尾一。嫦娥新妬與レ潮來。此秋初識男兒樂。短褐憑レ欄歠二大杯一。

仁川に海水浴場が出來た、規模東洋第一と思ふ、仙女島、舞衣島、月尾島は一望の内にある。

△試脫日東犢鼻褌。擬下究二天井一覓中河源上。閑人千載誰如レ我。大漠夜深遂二沙芥一。

天涯を究めて黄河の源を覓めんとせしは一千七百載前の張騫の事である、我れ老いたり矣、何をか覓むべきぞ、此詩こそ眞の唐人の寢言なりと思召あれ。

△太陽流レ影日半晴。惟見狭樓縹緲生。伏仰乾坤誰管束。無邊大漠放歌行。

亞剌比亞沙漠を横斷すると Mirage が時々現はれる、即ち陸上の蜃氣樓である。此の蜃氣樓が地平線の上に現はるゝの外に天は晴れ切つて一片の雲だに無く、俯仰何物の管束無き處、大きな聲を放ち揚げて唐詩を歌ひつゝ行く、まことに予が一生の大開心事であつた。

△平田陌町土如レ膏。七十年前是不毛。誰倩二祭酒名手一畫。銅人丈六突レ花高。

日本にては沙漠とては無い、然し茨城縣鹿島郡に行くと、沙が遠く連りて平線を限り、一樹一草の生えるもの無く、坐ろに沙漠を渉るの氣分が生ずる。此郡の『日川沙漠』と云ふは七十年前まで名の如く不毛地であつた、然るに柳川宗左衛門なる人これを開拓して二百町の美田となし、小作人と共同して理想的の一新郷を興した、有名なる柳川新田である。柳川氏の死後、小作人等は相謀りて氏の銅像を立てた。此邊は今は桃の花の名所となり、一丈六尺の銅像は花を突いて高く仰がれて居る。

△渡レ恒超レ石又過レ康。行脚去來天一方。抵レ掌平生長嘯否。倡揮二大漠一十番長。

唐書の恒河は(Ganges、石國は Tashkent、康國は Samarkaミ、天方は Arabia である。予のオーマン國王チムール殿下に謁すや、王先づ口を開きて亞剌比亞と日本と親交せざる可らざることを說かる、予も亦聊か奉答にする所があつた。王宮を辭し、城外に開展せる大沙漠を望み、頓に意氣の昂然たるものあるを覺えた、即ち此の惡詩を放吟した。

△海豚吹レ浪作レ群堆。莽莽蒼蒼氣未レ開。倏忽雲蒸地平線。線邊飛雨剪レ風來。

暑い／＼、デット・カーム（死せる如き無風）である、此程船は北東南東兩貿易風の交叉せる邊に來た、寒暖計をと見ると甲板上にて一百二十二度を示して居る、鯨の肝油に似たる脂汗は總身より流れ出で、衣を滲透く染むる、人も我も雨一滴たり 恩惠に預からんとする折柄、海豚が群を作して浪を吹く、海豚は水蒸氣に最も鋭敏に感ずる動物である。すると半空に拳の如き黑雲が現はれる、雲は見る／＼下る、下る毎に愈々大きく益々擴がる、遂に地平線まで下りて一面に線の上を蔽ひ、漸々して線と海との境界線が無くなる刹那、風は

ピューピューと梢を剪らんばかりに鳴り來り、アハヤと云ふ間に篠衝く雨はドット洪河の決する如と降りしきる、甲板上は河となる、我も人も争つて雨に浴びる、否瀧に浴びる、石鹼を頭より足まで塗つて瀧に浴びる、かくて爽氣身に浸み渡りて心の襞と垢までも拭ひ去りたる心地がする。

△征馬不レ前人不レ語。金州城外立二斜陽一。太郎聊了公家事。不レ負阿爺教二義方一。太郎灑レ血血未レ乾。浩然如レ此斃二次郎一。太郎次郎逐二鶺鴒一。相將應レ喜共二同殤一。惟望阿爺疾攬レ轡。澄清二房兵一答二天皇一。兄弟行。

明治三十七年十一月三十日、水曜、曇、夜、乃木少尉（保典、乃木大將次男）には海鼠山の攻路頭にて胸墻に倚り敵狀を偵察せる刹那、銃丸に中つて戰死した。電話が第三軍司令部に至るや、參謀の白井中佐（現中將）には父の大將に向ひ何にか埋葬に就き御希望ありやと問ひたるに、否とよ、攻路頭に斃れたるからには攻路頭に埋めよ、長男（大尉勝典、二十六歲）も南山に討死せし處に埋めたり、二人共に此くてそ滿足なるべけれど、一滴の涙だに灑がず答へられた。然れども親として誰か子を思はざらん、大將の胸中察するに餘りあらずや。父子三人東京を出陣しける際、門出に臨み、皇軍凱旋の後、親子三人の葬式を一度に營むべしと家人に命ぜられしとは、世の傳ふる所とはすなれ、然りとて兄の大尉は、地に上陸し、最も短き手紙の内に二箇三箇の草花を挿みて母人に寄せたる儘、南山に奮鬪し、銃丸腹部に貫通して斃れ、今又弟の少尉が二十四歲を一期として花の如く散つたりと聞きては、親心たる如何ばかりぞ、征馬不レ前人不レ語、金州城外立二斜陽一と詠み、武人として又軍司令官として陽に涙を人に示さず、而も人知れずに忍び詫び居れる處、正に親心を現はし、且つは大將の大將たる眞面目を示すものにあらずや折柄『然レトモ陸海軍ノ狀況ハ旅順攻略ノ機ヲ緩フスルヲ得サルモノアリ』との詔は乃木大將に下る、バルチック艦隊の東航に關し東郷聯合艦隊司令官の熱血を濺ぎたる如き上申書は回送し來る、予は此狀を察し、此の悪詩一篇を賦して渡邊第三軍管理部長に示すと、部長は覺えず涙を落した、傍に來合せたる川北砲兵中佐（現少將）には此詩を與へられたと撫へ行きつ、ア、阿爺の心事察すべしと叫んだ。

△墟花任汝舞婆娑。竹裏黃陵又可レ樂。莫二是菩提樹陰哭一。新塡無レ主惑情多。

△駐二馬沙場一感若何。寒湖嗚咽作二悲歌一。一年又過龍頭渡。破柳西風新塚多。

又もや馬にて龍頭を渡つた、行くも飲むべき水のある處に

は兵士が天幕を張つて居る、『劍氣橫二天地一』とや云ふべき。鷓鴣が群を作つて啼いて居る、敵味方の新なる墓標の林立する處で其の啼き聲を聞くと、如何にも凄凉を感ずる、古き荒れたる墓地にて聞くよりは一入斷腸の思がする。予の宿舍せし支那屋舍の後（乃木大將宿舍の傍）に一株の太やかな菩提樹（印度の Ficus religiosa とは全く別物）がある、毎日午前九時と午後四時頃には鷓鴣が來り啼くのを常例とした。

△軍無二私掠一足二雞豚一。釀レ黍酒旗高掛レ門。黃粱滿レ畝家八九。劍南夫子讀書村。

筑紫砲兵中佐（現中將）等四騎にて彈藥縱列の宿營地を過ぐること、小き渓水が涓々として流れ、六七株の楊柳が程好く黃葉して其間に支那人の村がある、劉家屯である、今秋は戰亂の時に拘らず、高粱は例年になき豐作にて、村民はいづれも高粱酒を釀し居るより、古句の『遠愛柳林霜後色、一如二春至欲レ黃時一』と杜詩の『豐年催レ釀レ黍』の眞境を悟らしむる。此處は米國文豪ケンナン氏が從軍記者として滯在する村なるより、予は此の惡詩を馬上より朗吟すると、中佐は格調が佳いと云つた。

△亂雲捲レ雪夜銜レ枚。松樹山外斫レ營來。裘上血痕凍不レ解。鐵蹄裂レ氷飲レ馬回。倏忽雲霽天如レ拭。斗酒恰好月中開。不レ恨裘煖缺二銀燭一。愛看清光照二金罍一。增二君豪興一好下物。大塊牛肉紅成レ堆。青葱白菜和二紅肉一。鼎上沸來有レ味哉。退却兵家最所レ忌。笑視白玉山將レ頹。請君拔レ劍斫レ地舞。我且爲レ君歌二莫哀一。

明治三十七年十二月三十一日、旅順の大要害なる松樹山の敵砲臺が我が工兵の爆藥に依て爆發せられ、正面が物の見事に崩れ落ちると、第一師團の步兵は鬨の聲を揚げて突入した、すると敵は地雷火を爆發した、味方の爆發と敵の爆發とは五分間しか隔たず白黃き煙と黑黃き煙とは土砂を捲きて空に逆上した、敵は三個の地雷を續けさまに爆發したるが爲め却つて自分の方が百四十人ほど土砂に埋められ、砲臺の出入口まで閉された、味方は機なりと銃劍を振かざし獅子奮迅の勢もて突入した、敵は埋められたる土砂の下より白旗を立てた、全く降服した。さしもに金城鐵壁の稱ありし松樹山敵砲臺も味方に占領せられた。戰には勝つ、大晦日ではある、夕より天は霽れ出す、ます〳〵霽れ來りて月は中天に冴え渡る。大切の牛肉は堆く盛つてある、恰も白菜も積むが如くに大皿に滿ちて居る、大コップにて熱燗の酒を飮む、志賀君一詩無かる可らずデスナーと呼びたるは渡邊砲兵少佐（現中將）である、出來た、書くものは無いか、こゝに大きな板がある、ソレではと書いたのが此の惡詩である。これが板に書かれてアン

ペラ小屋に掲げらるゝと、居合はしたる中少尉には、退却兵家最所ゝ忌だ、これから管理部長の迷惑をも構はず大に牛飲馬食するぞと云ひ囃すと、河北砲兵中佐には、笑視白玉山將ゝ頽とは白玉山の敵砲壘を『玉山將ゝ頽』(酒に醉ひ頽れる故事)に活用した、面白い、コレから玉山を頽すぞと叫び、勝野副官は『大塊牛肉紅成ゝ堆』とは如何かと問ふた、予は水滸傳の『大碗飲ゝ酒、大塊喫ゝ肉』より『大塊』の字を用ひ『飾盤已見雪成ゝ堆』の古句より『紅成ゝ堆』の三字を用ひたのであると說明すると、副官には典故を聞いて卑俗でないことを了解しましたと答へた。冴え切つた月の光を踏み醉っぱらひつゝ齋舍に歸ると、伊集院海軍參謀には東郷聯合艦隊より贈り來つたるものを御裾分するとて正宗酒ゝ餅とを贈られ、乃木大將よりは屠蘇一袋を贈られた。屠蘇の袋をと見ると、麗はしき紅の絹もて優しく縫ひあるに、これを大將に問ふと、横濱市小學校の女生徒より贈り來しゝものなりと。同宿せる筑紫砲兵中佐には顏見合せ、御互に貰物ばかりして今年の大晦日は過ごされるではないかと云つて打ち笑つた。

△一碧水天呼ゝ快哉。將軍橋上望宏儀。黑風颷忽奔ゝ千北。白雨定從ゝ南極ゝ來。

アグリアス岬上(阿弗利加大陸の極南)の悪時で、『[illegible]』は

大桅即ち Main mast の故字。

△大宛天馬拂ゝ轡來。綠眼胡姬笑侑ゝ杯。生怕酒金香一灶。誰知駱乳撥ゝ新醅。

大宛(中央亞細亞)は漢代より天馬を出すと稱へられ、更に亞剌比亞系の國々は所謂汗血千里駒の產地である。此の天馬を驅り鞭を拂つて來れば、小女が濃黃色の液をナミ〳〵と杯に盛りしなやかに侑むる。色は鬱金香の樣でオツな香がプンと來る、薄氣味惡く思つたが、駱駝の乳にて釀した酒が新に醱酵したもので、味は一入なるのみか、其の少女はと見ると、アリアン種で、色は白く、膚も細かで、眼は綠にパッチリと澄み渡つて居る。

△曾見龍舟拂ゝ柳過。隋堤烟雨漲ゝ春波。青衫暗灑傷時淚。偏惜前朝遺山ゝ多。

維納の春雨の夕、徃にしハプスブルヒ皇家の繁華を偲び訪びた。亡國の廢帝は阿弗利加のカナリア島に客死された。

△金穴銅山嘯ゝ別枝。忽逢ゝ詩境ゝ首光廻。遣ゝ煩東海ゝ浮ゝ槎去。不ゝ用新成ゝ鐵路來。

トランスヴァールに行き世界第一のジョハネスバーグに黃金鑛山を見物し、それよりキンバレーに世界第一の金剛石鑛山を見物し、途に[illegible]に下りて南大西洋の海路に就し、郵船

にて大正十二年の歳晩即ち大晦日も借金に催促せらるゝ煩累も無く過ごせさうに思ひたれば。

△鷓鴣斷續隔レ江聞。西望二雲州一日欲レ曛。滿院落花僧不レ掃。香苔深鎖女郎墳。

尼子十勇士の隨一山中鹿之助幸盛と云へば、怒る時は其鬚が立ちて紙を刺すこと針の如くなりしてふ剛の者である、然し表情は其心の如く優しき好漢であつた。出雲の豪族龜井重貞の一人女が之を慕つた。幸盛の京都より潜かに歸り、義を山陰に擧ぐと聞くや、姫は逢はんと因州に到り途上にて死んだ。後幸盛の毛利氏の爲めに備中に斬らるゝや、時人は憐みて其墓を備中より因州に移し、姫の墓と駢び立てた 今の鳥取縣鹿野町幸盛寺に在るものが是である。龜井氏は神代の美人と稱へられたる御炊屋姫(天照大神の孫饒速日命の配)に出で、其の七世の孫に夫の日本武尊をして『吾嬬や』追慕せしめたる橘姫(夫の尊の爲めに上總の海に投じたる)を出し、中世には似タ者夫婦の代表とも云ふべき山中鹿之助の妻女を出し、其子が龜井氏を嗣ぎ、子孫美人の産出を以て聞え、今の龜井伯爵家(舊石州津和野藩主)に至つたのである。予が幸盛寺に比翼塚を吊つた時、折柄行く春の夕とて落花地に滿ち、苔すら香ばしげに見えた。

△少年曾羨執金吾。回二首青雲一行路殊。還暦先期自新法。六道二赤道一暫工夫。

ア、我も六十一歳となつた、所謂六道ノ辻を過ぎて新に生れ還ると云ふ齡と云ふのだ、イデ一工夫せざる可からずと、即ち家を出でて赤道線を六回目に經過したる際の惡詩である。

△敵五千我百五十。彈盡況又絕二糧粒一。三十二人聞レ急馳。飛レ刀亂斫冒レ圍入。入見二將軍一血被レ面。兵皆踏レ刄裂レ眥立。「誰哉南加一男子。見レ義不レ爲固所レ恥。疾馳二白馬一又入レ圍。握レ手笑曰與レ君死」衆レ憤復戰氣益振。不レ說睢陽有二張巡一。百八十二人駢レ屍。生而降者無二一人一。二十四郡與感レ義。初知人和勝二地利一。天塹百里何保障。河北遂歸唐天地」「我今海外經二九譯一。萬里下レ馬安敦驛。爛漫夾竹桃滿レ地。恍疑當年劍血赤」君不レ見張巡許遠南霽雲。貞風千レ今吹二芳芬一。西俗未下必忌中降服上。斷頭將軍所レ不レ聞。寧期阿墨洲盡處。忽見二斷頭勇將軍一。意氣豈有二東西別一。莫レ怪衛荷酹哭レ君。且磨二日本所レ截石一。淋漓爲勒旌烈文。

東洋に於ては許遠、張巡の大將振、南霽雲の使命と殉難とに彩れる唐の睢陽の圍、又奧平、兩松平の大將振、鳥居强右衛門の使命と殉難とに彩れる長篠の圍、これを相對照して和漢の雙美と稱へ來つた。テクサス獨立の戰にアラモ寺に立籠

りたる義徒百八十二人が墨西哥勢二十七倍の敵に圍まれたるは、恰も長篠城に立籠りたる奥平勢が武田勝頼二十七倍の敵に圍まれたると同じく、而も長篠の守將奥平九八郎貞昌は年甫めて二十二歳、アラモの守將トレイヴィスは二十五歳であつた。アラモ寺が敵より十重二十重に圍まるゝや、圍を冒して外に援兵を乞ひに出で而して茲に殉じたるは南カロライナ州のボナムである。南霽雲の殉節にして男子の花とすれば、鳥居強右衛門の殉節も亦た男子の花なり、強右衛門の殉節にして男子の花なれば、ボナムの殉節も亦男子の花ならざる可らず。然れば睢陽の故事を引用してアラモを詠ひ、これを鳥居強右衛門の遺跡近くに獲たる石に刻み、サン・アントニオ市（紐育將た桑港より各ゝ約二千哩）アラモ寺の庭に建立した。歌ふ所は東西義氣の別なきを詠むものであるが、最近に**伊太利首相ムッソリニ氏が同じ意味もて我が會津飯盛山に白虎隊の記念碑を建立する旨を聞知し、**ゆくりなく十餘年前にアラモ寺に建碑せしことを想ひ起し旁々此の舊詩を想ひ出したのである。サン・アントニオに『安敦』の字を用ひたるは、後漢書に『桓帝延熹七年。大秦王安敦遣レ使』とあり、『大秦』は羅馬、『安敦』は Antonius である故である。……餘事ながら米國勞働同盟會長ゴンパース氏は此碑に直ちに對する稱

院にて息を引取つたのである。

△颶風蹴レ雨五千程。耳熟狂濤怒浪聲。船入二海門一多二勝事一。珊瑚礁上白鷗鳴。

サモアよりホノルルまで帆走で行つた、北東貿易風帶で、風が逆で、六十餘日かゝつた、飲水が殆ど盡きた。折柄珊瑚礁がほの〲と波の上に現はれ、雪なす鷗が一ツ礁上にて鳴いて居る、アヽモー陸も近づいたと喜ぶまゝに此詩を得た。

鳥兎匆々四十年。

△雙眸一碧水中央。數曲高歌意氣揚。壯志半酬人未レ老。舵樓睨視大南洋。

△報國丹生意氣豪。自誇貌似二少年時一。寧知貿易風濤裏。掠去二白頭一吹二鬢絲一。

一は四十年前、初めて遠航したる時の作、一は四十年後、二十六萬哩を經由せし際の作、予も亦た老いたる哉。

△興レ郎和唱定風波。眉樣遙山秋瘦多。織女看來應二妬死一。幾回雙レ槳渡二銀河一。

△十年重也渡二銀河一。吹送大風神女歌。生怕南球春爛熳。橫沙徵レ面哲人多。

Rio de La Plata は直譯『銀河』で、南米大陸の大河である、南岸は亞爾然丁で、北岸はウルグアイである。兩國共に

見渡す限りは平原で、唯遙かに山が點々するのみである。兩國共に美人鄕で、倫敦タイムスはウルグアイは世界第一の美人國なりと云つた……然し予は玖馬が第一、ウルグアイは第二と思ふが……前詩は明治四十三年初めて銀河を渡りたる時の作、時は五月で恰も秋の最中に當り、後詩は大正十一年に再び渡りたる時の作、時は十一月で恰も春の全盛の折柄であつた。銀河は東洋にては天ノ川で、織女星は七月七日の夕、あはれ一年に一回丈ケ夫の牽牛星に川邊にて媾曳することとなるに、此處の銀河にては毎日毎夕若き男と女がボートの内に相並んで渡つて行く、織女は妬けて〳〵耐るまい。此詩はローマンチックだと云ふので亞爾然丁の新聞紙が翻譯して掲載した。

△君不見閩江滔滔九百里。水脈遠州白雲裏。我行應下穿白雲去。欲下入中原游中央市上。中原蒼茫無盟主。山河破碎任人取。吁嗟時事畢竟有二耳。退則爲鼠進則虎。番鷄亂號水口關。曉出閩門飛雲斑。高歌一曲跨大馬。揚鞭笑指天邊山。

獨逸が先づ膠州灣を占領するや、露西亞は旅順口を占領し、英吉利は北には威海衛を南には大鵬灣、深州灣を占領し、佛蘭西は廣州灣を占領し、次で伊太利は三門灣を、英國は揚子江谷を、佛國は廣西雲南を、露國は滿洲を其の勢力範圍に收めんとした、果して然らば日本たる者は臺灣海峽の西岸を我が勢力範圍に收めざる可らず、然せずんば到底臺灣さへも保つ能はざるべしとは、予が臺灣巡遊中に感起したるものである。之を現實にするのには臺灣の彼岸即ち支那の福建江西兩省を貫き揚子江系までに出づる鐵道の敷設權を取得するに在る、疾く實地を踏査せざる可らずと、閩江を溯り南昌を訪えて中原に出でんものと思ひ立ち、而も東京の家に歸りて旅裝を整へるのも徒らに暇潰しと考へ、恰も冬の來襲せしことゝて、洋服の上に琉球紬の日本服と羽織とを穿ち、其上にインバネスを穿ち、ポンチ轎中の人となつて福建省の水口關まで來ると、關を守る支那の官吏及び兵士は『儞何國人乎』と嚴かに誰何した。折柄の曉の空には鷄が亂れ號ぶ、大粒の雪はインバネスの上に降りかゝりて斑となる、天を仰げば南昌は白雲に封じられて居る、この白雲を穿ちて中原に出づるのかと思ふと精神は頓に緊張し來り、ポンチ轎中の人は一向上して古の詩中の人となつた。

△詞人從古太疎疎。典去春衫一半無。一半留來買何物。葡萄美酒水晶魚。

倫敦に滯在中、春雨が降り詩思を催ほすとストランドのウルフ・ルームにエール酒を飲みに行く、ケーン愛飲の安酒店で

ある故である。ケーンは悲劇家として英文學史にも知られて居るが、大の貧乏で、着物を質入レしてはテームス河の朞の好下物たるホワイト・ベイト(水晶魚)を嗜んだのである。

△萬馬中原鬧二戰埃一。登レ高莫レ望將軍塞。遷謫怯レ聽秋風客。況又斜陽帶レ雁來。

凡そ世界に於て秋と云へば米國々都華盛頓ほど賞でたき國とては無い、紅葉これ少けれ、天地は宛がら黄金を敷きつめたる如くである。然しながら前年米國に行くと、歐洲大戰亂が勃發し、間も無く日本艦隊が獨逸領南洋諸島を占領した、中に海底電線の中繼所と知られたるヤップ島がある。すると米國にては『ジャップ、ヤップ取つた、油斷ならぬぞ〳〵』の謠が流行つた。折柄一夕黄葉を踏別けて將軍華盛頓の記念碑塔に登ると、空飛ぶ雁のゆくりなく秋風が「ジャップ、ヤップ」の謠を吹いて來た。

△博二此幽清一登不レ能。千松堂外夕陽前。白練一幅誰堪レ畫。倂立紅于花裡陵。

西洋人は元來槭即ちモミヂと云ふものを知らず、楓即ちカヘデすらも英國には少い、文豪スコットは秋の木葉の色彩を賞美し好んで之を書いた者であるが、獨り紅楓の美を殺らない、スコットの如き鋭心細膩で紅楓を知つて居つたなれば、錦繡の如き秋を稱へたに相違ない、然し一字一句の之に及ばないのも其筈である。英國にては楓は極めて少く、槭の如きは德川時代に和蘭人が西洋に持歸つた種より移植し、今日にても盆栽にするのみで、偶々上流の邸宅にて生垣とするのを稀に見る位である。然れば英人は我々日本人の如く紅葉で林間に酒を溫むるなど云ふ風趣を解せぬ、秋の休日には倫敦人は遠郊のバーナム・ビーチなどに遊び黄金色の葉の黄葉の下にエール酒(英國釀造麥酒)を飲むに過ぎぬ。英國に限らず中部歐羅巴の一部を除ては楓すら少い、況んや槭の天然性は絕對的に無い。亞細亞に來ると楓は多くなり、殊にヒマラヤ山中に行くと楓の種類は日本よりも多いが槭は少い、況んや**槭の群團を成す處は日本の外に無い、而して日本に於ける槭の大群團は大阪の郊外の箕面である。**英國の一文章家が箕面の紅葉を"Glow with an almost incredible blaze of colour"と書いたが、是は漢文にすれば「丹楓如レ燃」の四字に詰めらるゝ、而して此の四字の方が却て簡勁である、更に簡勁ならんことを期すれば『紅于』の二字で盡くせる、是は杜樊川の『霜葉紅二於二月花一』より來たので、Much more crimson であるが、英語なれば此の如くダラ〳〵と書かさるを得ぬ、然し此く長々書いても未だ弱い。總じて紅葉は乾燥せ

る地質だと殊に佳い、花崗岩(くわかうがん)や砂岩(サンドストーン)などが是である。淡路(アハヂ)には這般の地質が揃つて居る、其の南部なる淳仁天皇(淡路廢帝)の陵の邊は這般の岩の分解である、陵の附近に賀集新九郎氏(淡路第一の地主)の邸がある、長松千株軒(のき)を覆(おほ)ひ、園は皆な紅葉である、堂に上れば森田節齋の『千松堂』の題額がある、室に入れば頼山陽の『紅于園』の題額、篠崎小竹の『紅于園記』が掲げてある、蓋し東洋趣味の一代表所なりと思ふ、而して予の悪詩が是である。悪詩も悪々詩であるが、這般の幽清なる風趣はビールのコップ呑(のみ)では解せられない、ペンでは書けぬ。要するに紅葉の風趣と共に西洋には無い、況んや江州永源等の夜宿、寺は愛知川(エチ)を隔てゝ紅葉の畫圖の中に立つて居る、老僧が紅葉を燃して酒を温め來るを待ち、佛燈の下に禪味を嘗めつゝ對酌して御覽ぜよ、此間の風趣などは西洋人に解る譯はありませぬ。

△神仙無ㇾ乃落₂人間₁。朝吸₂露華₁先破ㇾ顏。那辛韓中誰第一。公餘許ㇾ水又論ㇾ山。

元來酒なるものゝ風味は何處に在りや、主として Bouquet にある、殊に日本酒は然りである。Bouquet は何處より來るや、酸化適度の乾燥、防腐等の合成より來るのである。然らば醸造用の(一)米の質、(二)水、(三)醸造後の保存を主とせざる可らず。(一)米の質は清淨にして、脂肪多からざることを要す、即ち空氣及び地質は寧ろ乾燥し、地味は然までに肥膄ならず、花崗岩(みかげいし)の處が適當である。加之花崗岩の在る處は、水は清淨で、水の中に鹽酸(乾燥性)、酸硫(防腐性)を含有すれば、(二)及び(三)にも適當するのである。是れあるが故に古來攝州の灘地方、今來は廣島縣の備後地方、朝鮮忠清南道の一部に最上等の酒が出來るのである。さて又理想的の日本酒は、色は無色透明で而も少しく黄色を帶び、味は品格の微妙なる Bouquet に少しく地酒(新酒)の風味を添へたるものと思ふ。是れあるが故に朝鮮忠清南道論山にて醸造する銘酒『朝の花』を愛飲するのである。大正十二年夏、予は歐米より歸るや、直ちに朝鮮の論山に行き『朝の花』を命じた、偶と論山郡守が訪はれて書畫帖に何か書いて與れよと差出された、依て此の悪詩を贈つたのであるが、實際は此處の水と山とが各種の Ester を成し、依て以て此の佳醸を成したので、一言にて盡くせば天才である。人に在つても我々如き天才を缺いで居る者が如程努力したりとてイノモルタルと成れざるが如く東京方面將た關東地方……茨城縣志筑(シヅク)地方より石岡町にて比較的佳醸の出來るのは花崗岩と云ふ天才が少し許り其處に在存する故である、關東にも此の如き少許の除外例はあるが……

にて最上等の酒の出來ざるは、造酒上の天才も缺いて居る故である。さて論山にて『朝の花』の最上出來のもの六瓶を獲た。東京の誰かに贈らんと思つて、ゆくり無く中村魏氏を想ひ起した、是は氏が曾て米に公使と爲り居られたる故である、依て罫端に左の文を書して件の六瓶を同地より中村氏に贈つた、

朝鮮なりとて馬鹿になりませんよ、コンナ酒が出來ます、恰も亞爾然丁のメンドーサや智利のサンタ・リータ葡萄酒が世界の本場ミラノ（伊太利）の萬國酒造共進會にて優等賞を得た樣ですよ。

總じて花崗岩地にて釀造する日本酒の芳烈なることは前にも述べたる通りであるが、さて花崗岩地の水は淸淨で、水苔も容易には岩に生せず、而も生ずるものは香氣がある、鮎は淸水を是れ喜び、香氣ある水苔を是れ好む。是れ花崗岩地の鮎は風味がこまやかで、又一種の Aroma ありて眞に香魚の名に背かざる所因である。又花崗岩地は概して林相が貧弱で、韮の如き女松（赤松）が亭々として生へ、其下に松茸が多く生へる、又乾燥して居る故に紅葉が麗はしい、花崗岩＝酒＝香魚＝松茸＝紅葉、これが日本殊に關西地方の秋の趣味である。

△居不レ易邀成二假山一。風流唯レ迹市郊間。仍藏智利七年酒。一任隣人縱飲還。

葡萄酒は古いのを是れ尙ぶと云ふのは、未だ素人オドシである。現にライン酒の如きは新しくても古くても變り無い、而も年齡が古いと價は高い、價は高く味を同じものを飮まされて、それで年齡三十とか四十とかの酒を飮んだと云つて、歸朝後得々する洋行先生などはチャンチャラ可笑しい。シェリーやポルト酒こそ年齡の古きを尙ぶと云ふが、これですら二十五年以上の古酒は却て味が無い。總じて人間の男女にも其の花の時がある如く、葡萄酒も餘り古いのは却て佳くない。智利のサンタ・リータ酒などは六年七年が理想である。日本にて西洋酒の味に精通する人は、故人にては風戶鋼太郎氏（和洋酒新聞社長）、現在にては櫻井省三氏である。曾て予はカリフォルニア島（阿弗利加）の本場より大文豪シェークスピア愛飮の酒を購ひて歸り、壜のレベルを剝いで風戶氏に侑めた、すると氏は一口飮むや、これは日本に今まで輸入されたことの無い酒であると絕叫した、予は一瓶大枚五十錢ですよと云ふと、價は知らん、酒は實に結構であると氏は折返へし云つた。又智利のサンタ・リータ酒の七年のをレベルを剝いで櫻井氏に侑めると、氏は何處の酒だ、此處にある佛蘭西のものより佳

いと云つた、而して此のシェークスピア愛飲のカナリア酒は北の土地にては一打日本價換等六圓で、智利のサンタ・リータ七年酒は同十圓である。此の如く廉價なれば予は數年間智利酒を常用として居る、是れ此の惡詩ある所因である。カナリア酒も智利酒も、いづれも地味の膏腴ならず、土地の乾燥せる方面に成熟せる葡萄より絞るを以て、締氣が存在すればこそ酒味が芳烈なのである。

△日送亞洲將レ了詩。阻レ風今夜暫淹停。何時同酌拂林酒。一味春聚話ニ地經一。

バグダードより亞剌比亞沙漠を横斷しダマスクに達し得、それよりハイファに出で初めて地中海の煙波を望んだ、亞細亞大陸を横斷し得たのである。亞細亞の山も是が見納めかと、神酒即ちカルメル山の葡萄酒（ハイファより十二哩、耶蘇基督前世より「神の山」と傳へ、ソロモン王の頌歌にも見え、今に山僧は世界有名の葡萄酒を醸造す）を酌みつゝ此の惡詩を書して遙かに日本なる白鳥文學博士に寄せた。カルメル山はシリアに在る、漢書、魏書、唐書の拂林又は拂林に就ては歐洲の學者の間にも多様の議論あるが、我が白鳥博士がシリアなりと斷定せられた故である。

△無邊大漠倦游還。却入ニ歐洲一心自閑。茉莉水西春萬里。一杯買レ醉過ニ巴爾幹一。

ボタリ〳〵と雨滴の落ちる音がする、國際寢臺列車内の枕邊にて聞くと得も云はれぬ心地がする。想へば印度のアグラにて狹雨を聞きたる夕より亞剌比亞、阿弗利加の沙漠の間に漂泊して雨に會はざること正七十日である。マリツァ河（茉莉沙）は煙ぶる青柳の間より流れ來る、幾回の歐洲國際會議の議題に上りたる音に名高き「國際河」である、然し水は背もせで我れ人事に關せず焉と云ふ風にて雨上りの朝靄の内に流れ去る。雪なす李の花の裡に汽車が停まる、驛はと見るとスラヴ字にてハルマンリ（春萬里）とある、バルカン（巴兒幹）に入つたナと思つた。限り無き春興の催ほすまゝに列車内のガルソンに酒を持ち來れと命じた、深紅の液をナミ〳〵と大コップに盛つて來た「葡萄酒は必らず小コップに盛つて來るものであるからヘンだとは思つたが、グッと飲むとキャンテー（伊太利にて女中の飲む安葡萄酒）である、君は伊太利人かと問ふと、ウィ、モシュー、ヴェネーチアン（ハイ、ヴェニス人で御座います）と答へた。

△膩娃氷消碧漲レ川。天街如レ酥潤ニ小雨一。克城烜響自都雲。士民凱歌萬歲譜。上苑和氣勝ニ盛春一。新移南邦紫棕樹。此日恰開鎖夏宮。至尊親頒鋪與臨。次第將帥都尉班。劍光追レ人紫霓吐。兜鍪燕

揷二月桂枝一。斗大金章將堪レ誚。咸道去歲巴兒幹。狹堅不レ拔月累レ五。雪封二大澤一渡未レ央。馬尾凝氷碎似レ穫。一聲凍角振二劍飛一。赤手生擒八千族。巴兒斡破無二敵爭一。南下孔子坦丁府。一蹴黑海掬二飛跲一。府城塔尖可二指數一。說學喜色天顏湛。特詔今宵醉瓦レ買。宮娃新佾大酒杯。將軍滿引都尉舞。紅衣少年顏若レ花。羽商高奏帝伐武。歌曰彼得皇聖孫。天護二寶祚一萬世主。君不見亞爾泰之山銷掠擴深。昭代未レ浴雨露普。十萬逐臣皆吞レ寃。徒嘆苛政猛レ於レ虎。天高地厚訟向レ誰。蒸鋼総生巨二安堵一。嘯レ指叱咤署二同盟一。殷血代レ遐革仔簿。

露國の軍人共が得意滿志となりてアハヤ爆發すべきを(常人共は不明にして其時まで露だに氣着かざりしも)噴火山の上に醉舞せる情態を寫せるもの、四十年前、札幌の校舍にてものしたる舊稿である。賦娃は Neva 河、丸球は Cronstadt の直譯、綠樹は Palm、銷夏宮は Summer Palace、塔尖は Minaret、火酒は露西亞の Vodka、帝伐武は Te-Deum の樂譜、逐臣は Exiles.

△絕壁劈レ藩阿武隈。壓レ隈安達太郎開。十年九過磐城路。艶水模山若レ夢來。

△拚レ公嚴手嶽巍開。嘯レ嶽長河北上來。駿馬美人南部酒。男兒作節舉二深杯一。尚午。相變へ盛岡へ來り。

阿武隈川、北上川、安達太郎山、巖手山、本邦東北地方の代表的山水である。南部美人、南部駒は東北地方の代表的名物である。

△街鋪二大理一淨無レ泥。綠蓋紅幢萬戶齊。綵傘如レ花人似レ玉。珈琲香裏入二巴西一。

伯剌西爾(支那人は巴西と書す)の首府リオ・デ・ジァネーロ所在は、山水の秀麗たる所謂『世界三景』の一である。市街の大通は模細工の大理石を鋪きつめ、清淨にして泥なく、又羅甸國の特色として紅綠のオーニングで蔽ひ、其下を萌黃將た紫のパラソル翳せる少女の往來するなど眞に五彩奇麗とや云はん、況んや其間に芳ばしき珈琲のかをりの鼻を撲ち來るをや、現世の極樂淨土である。

△鷲鳥低迷大野開。長江不レ盡向レ天回。平林小聚家三五。定自二前邊一移住來。

奧伯剌西爾のピントと云ふ處に行つた、福岡縣朝倉郡夜須村の人桑野延吉氏(今年五十八歲)が二男、一女、六孫と共に耕作し居り、今朝打止めた大鹿の肉を炙り、甘蔗を打ち、甘蔗のラム酒を出し、眞心こめた饗待をして呉れた。桑野氏曰く「ヴェニアド(鹿肉の葡萄牙語)も澤山居りますし、甘蔗も出來ますし、税も無いし、威張る役人も居りませんし、荷物は四季

變りはありませんし、コンナ極樂淨土はありません云々。予も聽いて愉快に堪へず、勸めらるゝまゝにラム酒をあふりて醉ひ倒れてしまつた。

△竹外好詩誰唱和。寧期海外剩將過。西風吹白木綿國。一道衝レ花下ニ密河一。

西風吹白木綿國、一路衝レ花入ニ紀州一とは藤井竹外（西暦一八〇七—六六年）の好句である。然し今や綿は紀州即ち和歌山縣より地を拂つた。ミシシッピ（密河）の下游を汽船にて下ると、君は全く竹外の句中の人となる。

△十二年前一曲琴。不レ堪重也聽ニ淸音一。東風九月南阿夕。寄與ニ春寒一共海樹。

十二年目で南阿弗利加に行つた、復た『セイン』（"Le Seine"）を歌ふヴァイオリンの淸音を聽いた、セインは巴里の若葉青葉の下を流るゝ水である、これを巴里にあらで南阿弗利加に復たも聽くとは何たる緣であろう、東風も吹く、春もうら寒い、久振でスパークリング・ワインでも一所に酌まうでは無いか。因に云ふ、南半球の東風は北半球の西風と同意義で、又九月は春である。

△梅落笛吹彎又彎。梅樹春水繞ニ啼山一。花無レ語人何在。不レ耐ニ離情說ニ玉顏一。

武田勝賴の夫人は北條氏政の妹である、勝賴の天目山に敗らるゝや、小田原に歸らんことを勸むるも聽かず、時正に仲春、山花亂れ開いた、夫人は花を髮に簪し双に伏して死んだ。隨行の理慶尼時に記すらく『見たてまつるに御年の頃はたちの內と見えさせ玉いて色々の裝束めされ容顏美麗の有樣は昔の楊貴妃衣通姬吉祥天女と申すともかほどなまめいたる形はましなさじ』と。忌日は陽曆四月中旬である、碑畔には梅花落ちて地に滿ち、碑下の溪水は當年の悲曲を奏でる如く、溪水流れて笛吹川に落ち、泣山（夫人新府を顧望して泣きたるを以て此名あり）を繞り來れる釜無川と相合しての富士川となるである。『笛吹梅落』は古樂府の譜である。

△氣傾ニ市俠一堤レ劍起。四州年少齊レ聲死。巨礮一吼脅ニ風雲一。雄ニ千萬人一吾往矣。恤レ民誰敢犯ニ秋毫一。遵ニ守國法一有ニ終始一。從レ玆大運歸ニ將軍一。一誠貫レ日天可レ指。百年英斷策ニ治安一。玉帛講レ盟鄰邦喜。吁嗟憶昨雁來紅血痕。獨驅ニ羸馬一任レ顛回。俯仰今日春水上。桃花錦浪載レ酒來。

墨西哥の建國一百年祭は大正九年に擧行せられたるが、建國後夫の豪雄ヂアスの治世三十一年間を除けば七十三年間で、主權者を代ふること七十三、即ち一人の平均任期は數學的一個年で、中には大統領の任期一時間だにも達せず四十

六分間の者もある。オブレゴンはソノラ州の豆商人である、祖國の時事收拾すべからざるを視、劍を提げて起つや、北部四州の年少は死を誓つて呼應し、革命に捷ちて大統領に擧げられ、大正十三年十一月末日を以て滿四年の任期を完了し、今や其の同志が新に大統領に擧げられた。然らば同國も今よりは漸く平和に歸すべく、日本人が事業を興すべき時機も到來した。予は大正三年秋同國に遊ぶと、恰も第五回の革命起り、今度の汽車に遲れると復た日本に歸り得じと聞き俄かにチワワ驛まで馬車を急がして行つた、後よりハロー〳〵と呼ぶ者がある、見知らぬ一米人である、米國領土內に入つた時に米國郵便局に投じて吳れよと一個の厚き書翰を手渡した、米國聖ルイ市なる某大鐵山會社に宛たるもので、墨西哥郵便局は米人の此の如き信書を發き又は沒收する故である。予は其の依賴を承諾し、遽しく汽車に飛び乘つた。然るに大正十二年一月初、再び同國に遊ぶと、流石にオブレゴン大統領の治世なりとて人心も自から長閑に、日本酒をチァパーラ湖の舟中に載せて行けば、兩岸の桃花は水に映りて浪は宛ら錦を織り、霞の關さへ鎖さぬ代となつて居つた。

△川落殘雲鎖二海門一。荒村風物易二黃昏一。秋深蠻樹花如レ雪。埋却英雄未レ死魂。

甲比丹クックは新カレドニアを發見し、濠洲大陸の東部を發見し、布哇を發見し、後遂に布哇の土蕃に殺さる、實に曠世の大航海者である。布哇のケアラケクア(ホノルルより一五七浬)に其の記念碑が立つて居る。

△芭蕉細雨易二蕭蕭一。廿載重過舊板橋。先帝女官年六十。手燒齊木一說二前朝一。

△擲下向二土人一尋二卓劍上。廿年興廢幾魂傷。生州電氣燈千燭。前度劉郎髩似レ霜。

頃は明治十四年三月十日東京赤坂の離宮、明治大皇陛下に對し奉り密々謁見を賜りたしと內請する者あり、誰あらん時の布哇國王カラカウワなりける。やゝありて布哇國王は語を改めて申しける樣、弊國固有の人民は年々減少し、西洋人は益と增加し來り、此勢にて推せば弊國の命脈は今より測り知るべし、憐れ日本陛下には弊國の滅亡を未前に救はれたし、然るに我には王子無く、王姪カイウラニ存するのみなるに、此のカイウラニは婉かなる性質なれば、何卒とも英國に修業せしめ、品格學問兼ね具はりたる上は王嗣と定め、軈ては布哇に君臨にしむべし、就ては卒爾がましき申分ながら、これに配たるべき者を日本の皇族中より申し請けられ間敷候哉、願はくは某親王(現在の〇〇宮)をと熱心溢れて懇に話し

つゝ願つた。かくて布哇國王には此事は隨行の大臣アームストロング(米人)、侍從ジァッド(同)にも物語りせざるべければ、陛下にも外務卿井上(故馨侯)の外には仰せられず、何卒糾願ふと述べて去つた。烏兎匆々三十餘年、カラカウワ王逝き、布哇王國亡び、カイウラニ内親王は花と共に散り(明治三十二年三月六日死)、明治四十五年予は布哇に再遊し、布哇亡國の女王リリオカラニに謁し、談會々此事に及ぶや、女王は莞爾として當時此事ありしを洩れ聞けりと答へられた。當時女官は香檀木を燒きつゝ往にし獨立國の頃の榮華くさぐ\を物語つたが、其後予が三たび布哇に遊びたる節には此女王も此世に在らせられなかつた(大正六年十一月十一日朝死)。

△于レ今父老説二天儀一。想見規模冠二一時一。爲二三千年古廟在一。下レ船何拜大山祇。

弘安四年(西暦一二八一年)、『無敵艦隊』たる元の師十萬は亞細亞、歐羅巴、阿弗利加に跨れる大威力を提げて我が西陲に冠するや、伊豫の河野通有は、夫のドレーク提督がエリザベス女皇に謁して『此役僕は西班牙王の髯まで燒かずんば再び拜謁せじ』と意氣込して發向したるが如く、其の祖神たる大三島(愛媛縣越智郡の瀬戸)の大山祇命の社殿に參籠し、蒙古退治の起請文十枚を書き、灰に燒きて自から呑み、イザとて三島水軍を率ゐて發向し、元寇殲滅の殊勳者となつた。此の前後よりして河野氏は瀬戸内海の制海權を掌握するのみならず、日本の世界に於ける英國海軍の地位を占め、母陸にありて陸軍のみ擁する者は此の小英國の力を借るにあらずんば西日本を控制する能はざるを以て、如何なる强大なる陸軍を擁したる者とても河野氏に向ひて同盟を求めた。即ち源平時代、南北朝時代、戰國時代を通じて母陸の群雄は相競ひて河野氏の歡心を買はんとし、其の祖神たる大三島の大山祇神社に向ひ其の時代に於て盡くせる丈々の技巧を盡したる甲冑、刀劍、弓矢等を奉納した。加之、朝鮮支那よりマラッカ地方まで劫掠して夫のジョン・デーヴィス(英國、『無敵艦隊』殲滅の一勇將)を屠りたる船々は、此邊の島々を根據地となし、三島大明神、八幡大菩薩の御旗を檣頭に揭げ所謂八幡船は大三島の大山祇神社を海上呵護の鎭守となし、くさぐ\の武器は固より、異しき國々の珍品をも奉納した。かくて一は河野氏の勢力に依り、二は海上の呵護、水軍の鎭守として奉納の物品は大山祇神社に山積した。是れ即ち大三島神社に國寶一百十餘點、國寶豫定十餘點、寶物一千數百點を保藏し、特に兵器類の國寶に至ては日本全國の國寶の八割

强を占め、更に甲冑の國寶に至ては日本全國の其他に所在せる悉皆國寶の二倍半を占め居れる所因で、大三島其物こそ日本第一の古物館と稱ふるも、事實上からしく其の妥當なるを認むる。さて寶物は大三島に山積したるも、其の今日まで能く保存せられたるは理由無かる可らず。元來島なるものは水中に孤懸し、母陸の變化將た治亂興敗に多く關與せず、全く別寰區を成すを以て、母陸に絶滅したる動植物將た文物、典節、風俗、歌謠、古器物は自から内に保存せらるゝものである。然れば島自からは一種の古物館となり、否古物館中のガラス函となり、此の函中に千百の珍品寶物を遺存し保藏するのである、即ち大三島が是れなのである。河野氏亡びてより三百三十年、血族支流は四散したるも、長へに我が帝國に重を成し、伊藤公爵(越智氏、長門、故博文)、來島子爵(舊豐後森藩主)、河野子爵(土佐、故敎鎌)、三島子爵(薩摩、故通庸)、故河野廣中(奥州三春)、即ち是である。特に祖先の心血を克く三百餘年の後に揮ひたるは日露戰役の最初仁川沖に露艦を殲滅したる村上格一(佐賀、海軍大將、前海軍大臣)である。更に血族以外にして三島流水軍の陣法を習ひ、三百餘年の後に之を日本海々戰に應用したるは秋山眞之(松山、故海軍中將、日本海々戰の際東郷聯合艦隊の首腦的參謀)である。既に此の如し、河野氏は日本歷史にこそ亡びたれ、其の遺韵は精神的には如上の諸氏に傳はり、有形的には大三島とふ日本第一の古物館となつたのである。

△大馬長銜彼一時。百年仰見颯風姿。英雄回レ頭神仙處。月應日東梅一枝。

△長劍斬レ仇耿倚レ天。英雄此處不二神仙一。神仙豈負英雄後。黃[illegible]白雲籠二墓田一。

羅甸民族の英雄はサクスン民族と異り、英雄回レ首即神仙の趣がある。夫の九千の義徒を率ゐて世界第二の高嶺たるアンデスを越え……昔のハニバル、近世のナポレオンのアルプス越の以上……山西の智利に下り、本國西班牙の大軍と戰ひて勝つや、南米所在の義徒は一齊に起り、健戰四年の後、亞爾然丁、智利、秘露、ウルグアイ等の獨立悉く成就すると、飄然として國を去り、平生の希望の如く佛蘭西の海岸に隱して讀書三昧に耽り、遂に此處に客死したるは亞爾然丁のサン・マルチン將軍である。又夫の富豪の家に生れ、年少游俠自から喜び、遂に長劍を提げて義を擧げ、本國西班牙の軍と初めて戰ひ、更に健戰二十五年、自國の獨立を成就するや、飄然として巴拉圭の山林に入り、日夕花に水を灌ぎて八十六歲の高齡を享け、茲に大往生を遂げたるはウルグアイ建國の

英雄アルチーガスである。夫の戰鬪は吾事にあらず、事成就ちれば隱者とならんと呼びて獨立運動を首倡し、途に戰死したるは玖馬のマルチーである。いづれも東洋史にありそうなる人物である。前者はサン・マルチン將軍の肖像を日本に採り得、三井吳服店に注文して純日本流に滿裝し、將軍の淸操を欽して梅花(西洋に絕無なる)を彩らしめ、これを携へて亜爾然丁のサン・マルチン祭に行きたる際の惡詩で、又後者は玖馬にマルチーの墓を吊ひたる際の惡詩である。

△一劍回レ天誰首倡。將ニ他日月一欲レ爭レ光。半庭松柏靑霄下。蹈破ニ春苔一酹ニ八郎一。

富豪の家に生れ一劍に依りて革命を首倡せし者ウルグアイのアルチーガスのみならんや、我が王政維新の首倡淸河八郎も亦是である。八郎、本姓齋藤、出羽東田川郡淸川村の素封家に生る、大義を四方に唱ふや、其の鄕貫に因み淸河と變名す、勤王の徒仰ぎて盟主となした、江戸にて刺客に斬られ、其の薩長出身に非ざるを以て後れて正四位を追贈せられた。最上川を下り、月山近くに來れば、一溪水が流れ落ちて川に入り、二水合流の處に松杉鬱葱、一簇の人家を圍むのが淸川村である。八郎の生宅には一抱もある松樹が庭に半ばして居る。

△日本大正十二年。正當釋尊滅後二千四百載。過去未來再所レ無。千載一遇逢ニ一倍一。東海法孫志更切。渴仰此時到ニ西方一。萬里尋覓菩提樹。樹下跏趺座ニ金剛一。離レ奈煩惱百八至。未下成ニ正覺一誓中無常上昂也從レ是遠巡錫。行脚將レ入大食國。誓願賴ニ佛德無邊一。九譯應難究ニ西域一。仰望ニ靈鷲岐高峯。廓然光明長百尺。

天竺行脚行。

大正十二年は釋迦入滅後正二千四百載となる、入滅の年代に就ては天竺、錫蘭、西藏等の文書に依り五十二說もあるが、予の拜崇せる英國マクス・ミュレル先生には、阿育王即位の年代より積等して基督紀元前四七七年と斷定せられた、然らば西曆一九二三年即ち大正十二年は正しく二千四百載となるので、『千載一遇』と云ふ語があるが、實に其の一倍である。然らば佛敎信者にはあらざれ、平生釋迦傳を愛誦し居れる予には此際印度に遊び、釋迦の遺跡を巡詣せんものと思ひ立つた。先づ緬甸に上り、ペグの臥如來に參つた、長サ三十一間、世界第一の佛像と稱ふる、緬甸人は朝夕參詣に來る、然し其國は西洋人に亡ぼされた。佛蹟なればと此の地方のチーク材十二本を購ひて鄕里岡崎に送つた。それより印度を巡遊した、菩提樹は到る處に繁つて居る、釋迦は此樹の下に跏趺して正覺を成したと云ふ、然れば世界の佛敎徒は佛陀伽耶に行

き、釋伽の蹈跌したるてふ金剛座を伏し拜み、座上の菩提樹を仰ぎ拜み、其の二三葉を拾ひ、珍重がりて歸國するのである。然し道般の葉を珍重がりて歸國するも、其の國々、否苟くも佛なるものを信仰する國は、我が日本を除きては悉く西洋人に亡ぼされて了つたのである。日本の佛教家は云ふ、彼等は小乘教を信ずる、故に亡びた、我々は大乘教を奉ずる、是れ亡びざる所以であると。予は大乘も小乘も知らない、然し日本の何故に亡びず否益〻發展する所因を聊か知つて居る、島國海國に在つて日本人が數千年來魚肉を食ひ、其の豐富なる燐酸に依て『遣ッつけろ』と云ふ意氣を發揮し得ると、且つ西洋より理學を輸入したのが其の主因なりと信ずる、殺生戒だの精進だの御念佛だのに依るものに非ずと信ずる、『遣ッつけろ』と云ふ意氣と理學を理解すると、是が西洋人の世界に雄張する所以で、又日本の發展する所以である。然し予は釋伽の大聖たることは知つて居る、然れば前正覺山に登り、其の苦行したりてふ窟より大なる石三個、其の沐浴したりてふ尼連禪河より砂七俵、其の最初の轉法輪地たる鹿野苑より瓦一俵、別に菩提樹五株、象島の石、其他佛具等、宛も一堂宇の建立に充つべきものを岡崎に送つた。かくて心に殘る所なければと、メソポタミア即ち唐書の大食受經由西域即ち波斯亞剌比亞系の國々に向つた。

△馬臨二岐路一痛二亡羊一。唐突破レ雲星彩長。席地幕天先睡去。今無下一夢到中家鄕上。

印度バルチスタン境上のラス・マウリ岬を廻つた時、是より西は西洋系統の國に行くまでは復た燈臺を見るべからずと聞き、アゝこれが所謂『文明』の見納か、今から闇黑境に入るのかと思つた刹那、何だか心細い氣持もした、然し又爛熟し盡したる『文明』に在るよりも却て面白かるべしと幾度か此詩を放吟した。

△帝子塵レ魂邊若何。回レ頭關嶺點二青螺一。平生闇誦文山集。酹レ酒零丁洋裏過。

閩（福建）粤（廣東）の洋上より零丁洋を過ぎた。文天祥（文山）が宋室を恢復せんとし節に仗りて來往せし方面で、其の『惶恐灘邊說二惶恐一、零丁洋裏嘆二零丁一、人生自レ古誰無レ死、留取二丹心一照二汗青一』と賦せし處である。

△擬下裹二淚珠一貽中異姬上。當初寧悔向レ君嫁。海門潮咽月低迷。思殺孤鴻啼二永夜一。

西曆一六〇〇年（慶長五年）ウィル・アダムスなる者今の大分縣臨の後の濱邊に漂着した、家康將軍これを江戸に召し、邸を江戸安針町に、采邑を相州三浦郡（横須賀市內）に賜つた、依

て三浦安針なる日本名を稱へた。彼れ三浦安針としては騎臣馬込勘解由の女（法號海華院王妙嚴化尼）を娶り、ウィル・アダムスとしては故鄕に妻子があつた。故鄕は英蘭ケント郡ギリンガムで、予は其の遺妻を埋めたりてふ古寺ギリンガムに探り、孤鴻の永夜に啼きたる當時を追想し、徘徊すること多時であつた。

△絕海荒陵土一杯。蟲聲雨黑咽二餘哀一。尋常蕭拜堪レ揮レ淚。況又先皇喪後來。

佐渡の眞野山陵に謁した、順德院佐渡ヶ島に遷幸二十二年間、遂に絕食して崩御し玉ひ、此處に火葬し了はんぬ。予の山陵に謁するや、夜色恰も迫り、雨亦た來り、蟲聲は海風に吹かれて秋草に咽び、坐ろ哀レを催ふせし折も折とて、明治天皇崩御の御大喪中であり、誠に腸を斷つの感があつた。

△倫義辭レ婚心尙忡。避レ郎還向亂離中。桃花九月南阿夕。想見嬌羞上レ頰紅。

△王孫消息轉綿綿。九月萋萋望レ接レ天。別樣憐他不忘草。花開花[illegible]冊餘年。

△姊後妹前芳草肥。娉婷相伴女郎歸。冶紅妖翠亦狼藉。憐殺背レ花貞燕飛。

英國現代文壇の耆宿ライダー・ハッガードは一代の鬼才である、明治十二年小說『カテワヨ』を發行し、大正元年ナイト爵を授けられたるまで創作をノベツ幕無に發行した。一轉して農政學者となり、丁抹の農業制度を英國に紹介したるは氏の力である。文藻湧くが如く、特に男女の戀を描くに至ては情緒纏綿、微より細に入り遂に刻み盡すにあらずんば已まず、是れ普通一般の英人は道義的觀念より氏を屑しとせず、隨て其の作品の多く日本に傳はらざる所因なりと思ふ。就中傑作中の傑作はジェッス（"Jess"）である。ジェッスは姊の名で、妹のベッシーと相共にニール大尉と戀に落ち、而もジェッスは亡き母の遺命と一人の姊への義理に絡り、婚約を妹のベッシーに讓り、再び情郞のニールの顏を見まじと、避けてトランスヴァール首府プレトリアに向け去つた。折柄プレトリアの英人はトランスヴァールの獨立を謀るボール人（和蘭種）の軍兵に圍まれ、ジェッスも亦長圍の中に陷れりと聞くや、ニール大尉は萬死を冒して圍を突き入りジェッスを救ひ出した。ジェッスの舊情は復た燃えて火を煽つたが、亡き母と妹とに對して忍ぶ可らざるを忍ぶ處、まこと讀む者をして熱殺し冷殺せしむる。予のプレトリアに行くや、ジェッスの故宅を探らんものと百方搜索して探り當てた、鐵道停車驛の前より右に折れ左側十四軒目の角に蔦纏へるさゝやかな下宿屋が是であつた。時

に九月の末のことりて芳草萋々、桃花亂開、折柄の花曇り、飛ぶ燕さへ色づいて見えければ、當時を思ひ詫び去るに忍びず、記念とまでに其所の不忘草を憐れ一本持ち歸つた。

△六國相謂秦可レ伐。機變心私期二蘇張一。北天中天驅レ渠去。西渉二大漠一謁二三王一。奈何豪俠乏二科學一。雖レ當二秦之富而強一。況還食少缺二意氣一。博浪聲椎無二張良一。吁嗟六國不レ可レ與。海島容蹲一田横。我今欲レ歸恥レ見レ嫂。且聽徒唱短歌行。短歌行。將レ歸レ國。書レ于二舍路(Seattle)旅亭一。

米國の所謂排日に對抗せん爲め大亞細亞主義とか亞細亞聯盟など云ふが頻りに流行し居れるが、元來日本は支那を除けば何の亞細亞國と聯盟せんと云ふのであるか。予はオーマン國王にも謁見した、ケラク國王にも謁見した、又印度系、波斯系、亞比剌亞系の各國、小さいのを合すれば無慮二十個國**を最近に經歷した、而も這般の國は武器は無く、財力は無く**科學は無く、而して外國人とさへ見れば、手を擧げバクシーシ、バクシーシと唱へて金錢を乞ふのである。此等の國々の道徳は、聖者なるものは働かぬものである、働かさる者が高尚であると云ふので、此の根本的道徳は宗教より由來し、施與に依て衣食することを社會の定義となして居る。然れば一言にて蔽くせば悉く乞食國である。目下日本にて亞細亞聯盟を主張せらるゝ人士は、多くは數年前まで軍國的高壓手段を背景として支那人をいぢめ、又は支那をいぢめんことを主張せし連中である。此等の連中達がスハ米國の排日と見て昨日までの言動にケロリとして支那と聯盟せんなどとは現金も程こそあれ、否御目出度サの極である。然し支那との聯盟なれば可である、然りながら他の亞細亞諸國との聯盟を呼號するに至ては、マカリ間違へば日本の社稷の存亡に關するまでの破目に陥りはせぬかと、一念玆に至ると予は寢ても覺めても居られぬ感がする。濠洲の前首相ヒューズ氏(世界大戰役後ヴェルサイユ會議の際、日本の提議に主となつて反對せし人)は、日本に對して米濠連衡を頻りに宣傳して居つた。さ**て日本が此際米國の排日に對し一旦の憤怒に驅られ、**大亞細**亞主義**だの亞細亞聯盟などと呼號すれば、米國を驅りて加奈陀及び濠洲、新西蘭と連衡せしめ、かくて日本の海軍は太平洋の東と北と南との三方より夾擊せらるゝのみか、縱し戰爭が起らずとするとても、**世界大戰役後は英吉利本國**は其の植民地の鼻息を窺ふことに是れ腐心するを以て、シンガポールの要塞を益々規模雄大となさしめ、かくて日本は乞食との聯盟の呼號の爲めに世界に於ける兩大アングロ・サクソン民族の向フに廻はして遂に干戈を交ふるの已む無きに至らしめ

んとするに至ては、是れ日本に自殺を觀念せしむると同樣である。殊に此の戰爭は海軍と飛行機とに依て裁決せらるゝのであるが、之を行るにはガソリン油即ち石油を以てせざれば一寸の動キも取れぬのである。さて日本には天然の石油は大缺乏して居る、然し石油を獲る方法はイクラもある、但し其の方法の出來ざる間に亞細亞聯盟などゝ呼號せられては出來るものも出來ぬ樣になる。要するに日本は亞細亞啓發の運動には盡くすべし、否亞細亞啓發は日本の自から任ぜざる可らざる職責であり任務である、然し米國の排日に對しての亞細亞聯盟は大に非である、此の如くして日本が亞細亞聯盟を首倡するは自殺である。予は米國旅行中に此種の時代を解せざる亞細亞聯盟論の日本に喧傳せられつゝあることを知り、而も此種の首倡者は大局の明なく、多くは亞細亞式、漢學的傳統……その癖漢文など綴りだも得ないが……の頭腦の人々なることを知り、此種の人々を折伏するには所謂毒を以て毒を制すで、漢文漢詩を以て伐つに限ると心得居るを以て……予は在米も頑冥なる消極的教育家に對しては常に漢文にて背湓し、之を倔強の戰術と心得て居る……シアトルの客中此詩を賦し、日本に歸るや、之を各方面に配布したのである。

△硬論盤レ容欲レ俺レ情。著論堪レ吐氣縱橫。文章放レ膽書生事。大漠風雲減レ筆行。

是はケラク國（亞細亞大陸の極西に在る沙漠中の國）に入る際の惡詩である、而して同國に入り得、國王アブデュラー殿下に謁見した。

△飄二客天外一歲華流。行李匆匆不二暫休一。東海風濤歸二昨夢一。南洋鯨鰐入二新愁一。紅輪直下三經レ月。黃道圈中再會レ秋。最是銷魂難レ耐處。慘雲妖霧撒謨洲。

世界近代期の第一大變遷は歐羅巴の勢力が極東へ〳〵と切迫し來つたことである。露西亞の勢力の東漸と共に英吉利は對抗者となり、露國が中央亞細亞のメルヴ沃地を占領し、ツン〳〵と阿富汗まで切迫し來るや、英吉利は之を防止せんとした。さて露國の極東根據地（浦潮斯德方面）を袋の内の鼠同樣にするには、今も昔も相變らず朝鮮海峽（對馬水道）を扼するにある。然れば英國艦隊は朝鮮海峽中の要害即ちポート・ハミルトン即ち巨文島を占領した。是は露國の陸軍が南下し南下せんとすれば、英國の海軍は北上し北上し露領亞細亞を衛かんとする將棊の飛車對大手の戰略である。日本の近海は波立つて來た、時に予は札幌農學校を卒業した、然らばと對馬に渡航した、而も其時這般の問題に留意する者無かりしは恰も今日の日本社會が亞剌比亞系の問題（最々新の世界外交

紛糾の温床に包藏する者無きと 様なりしかば、當時二十二歳の青年、感情の激越したるまゝ、『君不レ見方今五洲紛二濁煥一、東洋風氣亦不レ好、無下乃前車戒中後車上、海山咫尺巨文島』と長々しき悪詩一篇を賦した。其後英露兩國は阿富汗を『緩衝國』として事を結了し、干戈を交へずして濟んだ。其後間も無く歐米列強の南洋分割なるものが起つた。然らば、と日本を出發し、濠洲シドニー市に到着せし其晩がニュー・ヘブライツ諸島を英佛兩國にて分割せんとし、恰も英の植民が大示威運動を催ふせし當の夜であつた。それより新西蘭に行くと、英國女皇ヴィクトリアの天長節の當日、記念の爲めに英國軍艦は赤道直下のギルバート諸島（其後占領）に投錨した。それよりサモアに行くと、米國軍艦モヒカン、英國軍艦ダイアモンド、獨逸軍艦アルバトロスの三隻が相並びて國都所在のアピア港に錨泊し居り、翌年獨逸軍艦にはサモア國第二十二代の國王マリエトア……身體の丸々して居つた人であつた……を西阿弗利加に掠へ去つた。此の如く眞ッ晝間に國家的大泥棒を敢てするものなることを知り、且つ米國が太平洋に指を染め初めたことを悟つた。其後サモア三島の内、兩大島（國都アピア所在）は獨逸が占領し、殘る一島（米國海軍根據地パンゴパンゴ港所在）は米國が占領し、英國は來るべき阿弗利加分割の際に代償（ザンジバルを英領となすべしとの）を得んとの諒解にて獨逸と內和が出來て、玆にサモア分割は完了し、サモア國は亡びた。

△主無二三省一見多偶。昔與二使君一名可レ逃。地下理齋應二苦笑一。偶雖レ同レ姓不レ同レ緣。

茨賀理齋（西暦一七六二—一八四〇年）なる人あり、『三省錄』（當時の人々に知られたる著書）たるものを著はし、衣食住の『三省』を以て治國の要となし、其の見識たる『三省』の以外に及ばず、即ち『埒喝加』に及ばず、予は札幌在學の青年時代に此書を讀み偶々姓を同じくすることを心に屑しとせず、其の傳記を調査し、自己と一滴の血緣なきことを知り、私かに釋然たるものであつた。理齋翁は天保年間の人で、鎖國時代の學徒なれば、其の『三省』を以て治國の要となしうは稍々恕すべし、而も之を大正十四年の今日に主張し、一も『埒喝加』に說き及ぼさゞるは其の見識理齋翁に下ること一段、否二段、三段、五段、十段。

△晒花書生感激長。右文偏善法二先王一。經筵五進心何異。身與二丈山一同二故鄉一。

△玉殿南薰吹二布衣一。經筵進レ講拜レ恩歸。亂世長照山人影。不下對二先生一論中是非上。

△彤庭玉露潤二山衣一。五向二谷前一進講歸、寧對二先生一論二出處一。未レ知風格似而非。歩二前韻一

六六山人石川丈山は同鄉である、予は其の手澤の硯を愛藏し、唐詩を揮毫する時には常に之を用ふる。丈山は進講の御召が再びあつても再びともに御辭退申上げた、予は五度御召になり五度ともに進講した、然らば此硯に對し一言の辯なき能はぬ、此の三絕句がそれである。

△役五十年誰替人(かはるひと)。醋斤馬骨直二千鈞一。扶搖九萬鵬程外。或就江湖一逸民。

玖馬(キウーメ)よりの歸舟にて身體を量りたるに一百八十三斤あつた

(以上一百首　完)。

能樂の觀賞

野口米次郎

一

情景兼ね備はる詩劇の逸品は松風の一番に止めを刺す。これぞ正に日本文學中比類のない。柔かな月影が野分の海岸を照し海人の呼聲が物凄い須磨の浦の一場面である。恐らく世界の文學へ持ち出しても、この一篇に優る艶麗と悲痛の詩劇はあるまい。これを舞臺で見て、誰も阿片でも飲んだやうに麻醉させられ、夢心地に追憶的戀の惱みを感ずるであらう『妄執の夢に見ゆるなり我跡弔ひて給びたまへ』と憐れな二人の女性が合掌して心に響く波の聲を聞いて拍子を踏み『吹くや後の山おろし關路の鳥も聲々に』とあつて明け始める東の空を眺め、『村雨と聞きしも今朝見れば松風ばかりや殘るらん』と終つた時、誰もほつと一息ついて痛ましい詩の恍惚境から目覺めたの感があるであらう。ツレもシテも幕の内に入つて仕舞つても觀客の耳には永劫に吹く風と波の聲が殘るであらう。橋掛を獨り歸つてゆく旅僧を見て、誰もその寂しい姿に驚れるであらう。

『痛はしや其身は土中に埋もれぬれど名は殘る世のしるしとて變はらぬ色の松一木、緑の秋を殘す事のあはれさよ』と諸國一見の旅僧が歌ふ時、諸君は薄暮が須磨の海岸を包み始めると想像せねばならない。想像は不思議な魔法使だ。私共はその枝に觸れて靜かな青白い寂しい月が天に上つてゐると想像する……

……『松風』の一番はいよ〳〵始まる。眼前に見る二人の女性は松風と村雨である。彼等は鬘、鬘帶、箔、腰卷腰帶白水衣の裝をして橋掛で向き合ひ、『汐汲車わづかなる』と同音で歌ひ出す。正面を向ひて村雨が『波こゝもとや須磨の浦』と歌ふと、松風も一緒になつて『月さへぬらす袂かな』と歌ひ終り兩人が向き合ふ……あゝ、このたつぷり溢れる情趣は到底言葉で語られない。詩的なこの一番は最も麗はしく始まる一篇である。私はこゝでいつて置く……能樂（能劇といつてもよい）の眞生命はこの橋掛にある。橋掛で藝術的效果を納めない曲目は不成功な

作品であるといつても過言でない。舞臺に比較して素敵に長いこの橋掛位暗示的なものは、世界の舞臺藝術いづれを尋ねても見當るまい。女性に扮する能役者が白い足袋をはいて、靜かだが音律的にこの橋掛を歩む工合を見て私は、いつも『なんといふ女性的香氣のある歩み工合であらう。小股の内氣な運び工合は實に天下一品だ……この歩み工合丈けでも藝術として世界に誇ることが出來る』と思はないことが無い。遠方から足だけを眺めて居ると（實際に私は喜多六平太君が女性に扮する時その足だけを見て居ることがある）まるで白い二つの魚が泳いでゆくやうだ。かういふ天下一品の足をした松風村雨が今橋掛から舞臺に入るのである……『里離れなる通路の月より外は友もなし』と歌つて彼等の心と環境とを貫く寂しさを語り『汐汲車よるべなき身は海士人の袖ともに思ひを乾さぬ心かな』と自分達の心細い生活を嘆きかこつ。

天には寂しく光る秋の月が懸つてゐる。彼等は『淺ましくも汲む月の出汐をいざや汲まうよ』と渚に近寄る。彼等は自分等の淺ましい姿が月夜の水に映るのを見て恥ぢる。然し眼前の麗はしい景色から彼等は喜ばしい慰藉を感ずるであらう。松風は『いざ〳〵汐を汲まんとて汀に滿干の汐衣の』と歌つて村雨に向ひ合ふ。『袖を結んで肩に掛け』と村雨は歌ふ『汐汲む爲めとは思へども、』『よしそれとても、』『女車』と兩女性が互に歌ふと地謡が『寄せては歸る潟をなみ、蘆邊の田鶴こそは立ちさわげ』と歌ひ始める。今松風は舞臺の所謂目附柱の方に置いてある作物の車の前へ進む。車の上には小さい水桶が二つ載せてある。松風は下にゐて扇を開き、『松島や雄島の海人の月にだに影を汲むこそ心あれ』と地謡につれて、右の方を渚と思つて汐を汲む様子をする。汲んだ汐を彼女は車上の桶へすくひ入れる。又同じ事を繰返すと桶は半分ほど汐で滿ちる。直きに一杯になる。……見よや。靜かな月は影を桶のなかに浮べて居る。あゝ、諸君は想像の眼で月の姿を見ねばならない。この能樂藝術は『想像の王國』である、想像の力で無から有を産みださねばならない。この能樂藝術は『空虚の王國』である。諸君にして眞實この王國の住者であるならば、諸君は現實の痛みと喜びとが幻像となつて空間を滿たしてゐることを知るであらう。能樂藝術は虚僞の藝術でない……詩の魂が祈禱を捧げる聖殿である。こゝへ顯はれる女性でも男性でも其一擧一動は、香氣を吐きだし終る一の息だ。今松風と村雨が月の滴に濡れる花のやうに、幽麗な恍惚境で彷徨ふ有様を見よ。彼等は汲み入れた汐を車に載せて波音近い海人の家へ運び歸らうとするのである。諸君は彼等がさうしようとするのだと想像せねばならない。

『さしくる汐を汲み分けて見れば月こそ桶にあれ』と地謡は歌ふ。村雨は車の前に進み車の長柄についてゐる綱を松風に持たせる。松風は『是にも月の入りたるや』と一つの桶に月の映れるを見る。『うれしや是も月あり』と地謡の言葉でもう一つの桶にも月があることが知れる。天の月は一つだが、『影は二つ滿つ汐の夜の車に月を載せて憂しとおもはぬ汐路かなや』とあつて二個の桶に月を入れて鹽屋へ歸るのである。私がこの一番が最も詩的な暗示に富む一篇であることを語るには、此處までで十分である。私自身の目的からいふと、これからの事は蛇足の一種に過ぎない。この一番の詩劇としての生命は橋掛から舞臺に入つて、『あら心すごの夜』の月影を汲んで家へ歸る所で盡きて居る。

鹽屋では諸國一見の僧が一夜の宿を借りようとして待つて居る。鹽屋の女主人は最初は斷つたが、仕舞に『月の夜影に見奉れば世を捨人、よしよしかゝる海人の家、松の木柱に竹の垣、夜寒さこそと思へども蘆火にあたりて御泊りあれ』と僧を家の中へ迎へる。僧は磯邊に立つてゐる一本の松が松風村雨の舊跡だと聞いて逆緣ではあるが弔らつたと語る。二人の女性はそれを聞いて涙を拭ひ、『あまりになつかしう候ひて猶執心の閻浮の涙再び袖をぬらしさぶらう』といつてなほも泣く。僧は不思議な言葉を聞くものだと問ひつめる。二人の女性は自分等こそ松風村雨の幽靈だと白狀する、さうして僧に一遍の回向を賴む。『あはれ古を思ひ出づればなつかしや行平の中納言、三年はこゝに須磨の浦、都へ上り給ひしが此程の形見とて御立烏帽子狩衣を』とクセの謠が進むと、後見役のものが烏帽子と長絹とを舞臺へ持出して松風に持たせる。松風は『これを見る度にいやましの思草』と持たせられた烏帽子と長絹を高く上げて見る。それから『よひよひに脫ぎて我寢る狩衣』と歌ひ、立つて『忘れがたみもよしなし』といふ。長絹を見て『取れば面影に立ちまさり』と云ひ、長絹をかゝへるやうに持つて、『起き伏し分かで枕より跡より戀の攻め來れば』とあつて橋掛の方を振返り、長絹を顏に推しあてゝ悲歎の涙にくれる。

「裝束着せ」のものが切戶から出て來て、松風に水衣を脫がせ長絹に小烏帽子を着せる。松風は今作物の松を見上げて『三瀬河絕えぬ涙の憂き瀨にも亂るゝ戀の淵はありけり』と歌ひ始める。松風、……いな松風の痛はしい幽靈は狂してゐるのである。彼女は『あら嬉しやこれに行平の御立あるが、松風と召されさぶらふぞやいで參らう』と立ちあがつて松を目掛けて行からうとする。村雨はさうでないと諭す。松風は『うたてこの人の言葉や、あの松こそは行平よ、たとひ暫しは別るゝとも松とし聞かば歸

りこんと連ね給ひし言の葉は如何に』といふ。村雨も『げにながふ忘れてさぶらふぞや』といつて心が亂れて來る。これよりイロエ掛り中の舞となつて、『いなばの山の峯に生ふる松とし聞かば今歸り來ん、それは因幡の遠山松』と松風村雨は遠く橋掛の方を眺める『これはなつかし君こゝに』と作物の松に胸ざしする。『須磨の浦回の松の行平』と右の方を向いて須磨の浦を見渡す樣子をする。立ち歸りこは我も木陰に』と右へ廻り『いざ立ちより磯馴松』と作物の松の側に寄り添ひ、松に兩袖かけて『なつかしや』と涙を流す。

こゝで所謂彼の舞が始まつて、地謠は『松に吹き來る風も狂じて』と歌ふのであるが、私共の想像は眼前に、波の高い須磨の浦で終夜妄執に取りつかれてゐる二人の幽靈が戀の狂亂を演じ終るのを見るのである。秋の月下で狂ふ戀の幽靈……これ位詩の題材として感傷をそゝるものは無い。さうしてこの一篇『松風』位詩劇として情景の點で成功してゐるものは何處の文學にも有るまい。實に永劫の價値がある。戀は人間自然の發露である、絕對的に原始的に人間に與へられた感情の節奏である。このこんがらかつた絲のやうに纏綿として盡きない戀の夢幻曲を秋の夜陰に聞くのだから、この一篇が人を動かすのである。

あゝ、何たる精緻でしかも力强い生命の表現がこの『松風』にあるであらう。どんなものでも人間性の根原を暗示する藝術は尊い。私共はそれから一つの不思議な力が强制的に迫つて來るやうに感ずる。私共は『松風』を讀み、それを幾層倍も增して舞臺で見る時、悲んでも傷まない感情の恍惚世界に入るのである……この世界は現實と想像との境目にある世界で悲哀と歡喜とが互に反照し合つて濃霧のやうな光澤を放つて居る。この世界では自然も人間も共に幻像化して觀念の靜寂を味つて居る。こゝに流れる感情は變幻自在でも、抽象的な單純を忘れない。この神秘的な世界に詩といふ靈祠があつて、すべての現象はそれを中心として顯はれて居る。この靈祠に寂しい戀愛といふ女性が住んでゐて、樹間を洩れて來る月の影を眺めて魂の痛みを歌にうたつて居る、さうして其聲がこの世界を取捲く憂愁の水へ波動するやうに感ぜられる。實にこの世界は痛ましいが麗はしい。

私共は觀阿彌が『松風』の一篇でこの詩の世界を與へて吳れたことを喜ばねばならない。私は二度も三度も眼をつぶつて、松風村雨といふ憐れな二人の女性が今『我跡弔ひて給ひたまへ』と言葉を殘して橋掛へ消えてゆく姿を想像する……彼等の小さい魂は見る間に朽ち、何の音も發せずに永劫の海へ沈んで

ゆくやうに感ずる……永劫の海は恐ろしい靜寂である……今しも二女性の魂をのんで仕舞つた海に鈍重で灰色の波を靜かに蜿らせる……さうしてこの永劫の海は眠つてゆく……

二

秋の須磨を語つた私は次に春の東山が語りたい、月を語つた私は櫻を語らねばならない、『松風』を語つた私は『熊野』を語るであらう。遠州は池田の長者の娘熊野は平宗盛の愛妾である。今舞臺へ顯はれる熊野は鬘鬘帯唐織着流して手に扇子を持ち・顏に小面を被つて居る。小面には細長い目の上にずつと離れて一對の眉が附き割に太い低いどつしりと坐つた鼻だ……この平たい鼻に輕快で理智的な現代を離れた土臭い昔の暗示がある。下唇が一寸上の方へしやくり上つた小さな口から白い齒並が見える。これはまた不思議な藝術品で、彫刻家は女性の感情を蒸溜し盡して最後に殘る尊い氣分をそれに封じこんだものであらう……特殊な想像の世界をじつと見詰めてゐる顏である。この面位人間の感情を保留して愼しやかな表現を持つ假面は何處にも有るまい。實際、世界に類のない面である。感情の驚くべき節約が面の上に行はれてゐるのであるから、見る人の想像で涙の面ともなり又微笑の面ともなる……さうして眼前の熊野は心の中で泣いて居るのである。それでも彼女は顏の表面で笑つて居る。表で微笑して心で泣く……其處が昔の女性の麗はしい點でなくて何であらう。この麗はしい女性美の幽艶が熊野となつて、現實の世界へ顯はれてゐるのである。何故に熊野は心の中で泣いてゐるのか。彼女は今國元にある大病の老母から手紙を使者から受取つて讀んだのである。手紙の中の言葉に、『年ふりまさる朽木櫻今年ばかりの花をだに待ちもやせじと心よはき、老の鶯逢ふ事も涙に咽ぶばかりなり』といふ文字もあつて、彼女は一時も早く主人宗盛から歸國の許可を得やうと悶えるのである。能の場面に手紙を讀上げる箇所がいくつもあるが、この『甘泉殿の春の夜の夢』で始まる手紙は、恐らく人を動かす感情で滿ちる點で隨一の文章であらう。熊野の嘆願を宗盛はきかない。彼は『牛飼車よせよ』と急いで車の用意をさせ熊野に花見隨行の嚴命を下す。熊野は止むを得ないので車に乘る、彼女に對しては『心は先にゆきかぬる足弱車の力なき花見』である。

この一番から私の感ずる興味はこゝで始まる。牛飼車といつても後見が舞臺へ持出し見附柱の側に置く作物の車に過ぎない、又車の作物としても變な恰好でたゞ車といふことを暗示するのみだ。ツレの朝顏はこの作物の後にワキの宗盛はその左に

立つが、これも彼等が車中にあるものと思はなければならない、牛飼車は動き始めて東山へ向ふのであるが後見がその車を動かすのでも無い……觀客は想像の力で、東山の春を飾る爛熳たる櫻花を心に描かねばならない。然しだ、眼に三人の役者を見耳に朗々と響く音吐の底力ある地謡の聲を聞いてゐると、知らぬ間に私共の想像世界は展開し展開しゆく……不思議や、『四條五條の橋の上〱、老若男女貴賤都鄙色めく花衣、袖を連ねて行末の雲かと見えて八重一重さく九重の花ざかり』といふ長閑な東山の景が顯はれ、自分共も春の群集を眺め又群集から眺められたりしてゐるやうな心持がして來る。實際を見ると、三間四方の舞臺は檜で造られてゐる。正面に囃子方が並んで小鼓と大鼓は床几にかゝり笛と太鼓は下座してゐる。その後の鏡板には黒青い繪の具で松の木が一本描いてあるのみだが、この背景（若し背景といふことが出來るならば）位邪魔にならず又多くの曲目とよく調和するものは無い。少くも私共日本人がさう思ふに至つたといふ心理狀態はどうして養はれたであらうか。この點に關する心理的考案は他日にゆづるが、今は私はたゞ、歳月を知らない永遠の表象としての松の木は現實を超絶するこの夢幻詩劇の模樣化を助けるものだといふに止める。舞臺の右側一列に並び、手に持つ扇子を右の膝頭にあてゝ端座してゐる人々は即ち地謡である。眼をつぶつて男性的音律の正しい彼等の合唱を聞く時の私の快感は何に譬へることが出來ない。森林を吹き拂ふ風の聲か海岸へ打込んで來る波の音とでもいふことが出來よう。地謡と囃子方の前で、私の親愛なる能役者は愼深い態度で女性となり幽靈となり戰場の勇者となり諸國一見の旅僧となつて、觀客の想像に訴へて一枚の緞帳も用ひずに現實世界と幽靈界との二つの舞臺を變化してゆく。これは最も完全に近い舞臺の綜合藝術で、こゝに關係するもの何一つを失つても破綻を來すに相違がない。この舞臺藝術は歐米の世界へ國寶として持出す價がある、さうして歐米の舞臺藝術はきつとそれから粗雜な凡俗主義を打破する暗示を受けるであらう。私はこれが日本に發達して今日も盛んであることを喜ぶものである。あゝ、何たる完全な舞臺の綜合藝術であるだらう。この特種な藝術が放散する高調抒情詩的氣分に觸れると、私共は直に現實の詳細から逃れて想像の世界へ入るのである。多くの場合に於ける想像は無理な努力の仕事であるが、この殿堂では想像すること位容易で樂なことは無い。私共は想像を追掛けるのでなく、想像が向ふから遣つて來る……私共は自由にそれを掴む丈けだ。故にこの能樂堂に入るものは誰でも詩人たるであらう。此處こそ人生といふ沙漠中の沃地（オアシス）である。私共はこの沃地に湧

く詩の源泉を汲んで、もつと廣く深い想像の世界へ踏込まねばならない。

私は再び「熊野」へ歸るとする……ロンギ地は「河原おもてを過ぎゆけば急ぐ心の程もなく車大路や六波羅の地藏堂よと伏し拜む」と歌ふ。私は熊野の一行と共に愛宕の寺や六道の辻を過ぎ、今右の方に鳥部山を見るであらう。間も無く清水坂にさしかゝりて山門に近くであらう。熊野は「經書堂は是かとよ」と左を眺め、「車やどり馬とゞめ」と左右を見「こゝより花車」とあとしさりして車を出る。母の心配で胸一杯になつて心慄いてゐる熊野は清水の本堂を合掌禮拜して病母の加護を祈る。彼女の姿は哀れである。

宗盛は面白く咲きほこる櫻の木の下で宴を張る。御堂で祈誓をこめてゐる熊野は呼びたてられて花見の酒宴につらなる。彼女は、「あら面白の花や候今をさかりと見えて候、何とて御當座などをも遊ばされ候はぬぞ」と人々から怪まれる。彼女は花見どころで無いが、心を引立て思ひなほし、立つて「花前に蝶舞ふ紛々たる雪」の歌をうたふ。それから「清水寺の鐘の聲祇園精舍をあらはし」で始まるクセ地謠になるが、このクセ即ち曲は昔の曲舞の名殘りで謠曲文中の花だと云はれてゐる。然し多くの場合に意味をなさない修辭的文字の不規則な行列であるに止つて、精神的に全篇の有機體的情調を破壞してゐる。得て伎工上から見ようとする專門的見地に禍されない私共に取つてこのクセ(曲)は寧ろ迷惑である。もとより能樂の舞臺效果からいふと舞の關係上無くてはならないものであらうが、舞そのものゝ價値でさへ今日上演されてゐる曲目を通じてあるとは思はない。然し私でも能樂の理解が進むに從つて、多くの人のやうに舞の歎美者となるかも知れないが……まだ〱さうなるには年數がかゝる。或は私は到底舞の歎美者となれないかも知れない、クセの妙趣がいつまで過ぎても分らないかも知れない……それでいゝ、私の能樂に對する觀賞は私の觀賞である、他人からかれこれ云はれる答が無い。今「熊野」のこのクセに歸るが、これは私も滿足しなければならない名文章といふべきもので、實際今日存在する二百番の中で最も成功してゐる特殊な一例であるかも知れない。清水から見渡す風景も想像されてなか〱に面白い。熊野はクセにつれて遙か南を眺め上扇して大左右し、「稻荷の山の薄紅葉の」で伏見の稻荷山を花の雲間に見渡す……熊野の姿は優美の二字で盡る。それから熊野は橋掛まで行き笛のイロへで舞臺へ歸り中の舞を舞ふのであるが、これを「イロへ掛り中の舞」といふさうだが、さういふ專門的名稱はどうでもいゝことだ。

熊野は舞つてゐる時に村雨が降つて來るのを感ずる、『なふなふ俄に村雨のして花の散り候は如何に』といふ。舞に見とれてゐた平宗盛は、『げにく村雨の降り來つて花を散らし候よ』といふ。熊野は『あら心なの村雨やな春雨の』と歌ひ、地謠の『ふるは涙か降るは涙か櫻花』の言葉につれて、扇子をかざして空を見上げ、散りくる花をそれで受けとめ過ぎゆく春を惜しむ心で、受けた花を扇を伏せて捨てる……あゝ、この瞬間に熊野は作歌する、落花を見るにつけて故鄕の病母をはるかに思ふのである。扇子を疊み要の所を筆の穗先にして逆に持つのは作つた歌を短冊にしたゝめる心持である。彼女は『いかにせん都の春も惜しけれどなれし東の花や散るらん』の歌を宗盛に見せる。宗盛は感動させられる、彼は彼女に暇を許す。熊野は『あら嬉しや尊やな是れ觀音の御利生なり』と伏し拜んでいそく、退くのである。『明け行く跡の山見えて花を見すつる雁金のそれは越路我はまた東に歸る名殘かなく』と地謠は歌ひ終つて、この艷麗哀愁を極める能樂の一番は終るのである。

いな終つてゐない……私共は頭をあげて橋掛を眺める。そこに能を終つて橋掛から樂屋へ向ふ熊野がゐる……熊野はまだ劇中の女主人公である、私共の頭にはまだ謠の音律が響いてゐる。橋掛を歩む熊野の歩みは遲い……劇を終つてもまだ劇中の熊野である、喜多六平太君でもだれでも無い。私共は彼女が東路に病む母を思ひ乍ら北へ歸る雁金の後を追つて行くやうに感ずる、私共は子供の恐ろしい親指を離れた蝶々のやうな熊野の自由を眺めて、自分共の心も晴れ渡つたやうに感ずる………私共は熊野が上幕の後へかくれて見えなくなつた時、始めて緊張して強張つた兩方の肩が急に樂になるやうに感ずるのである。さうして其處でこの能『熊野』は始めて終結を告げるのである。

私はこの橋掛を拔きにして能樂を考へることが出來ない。私は考證に趣味を持つ專門家でないから、この橋掛が能樂の最初からあつたものか又幾變化を經て今日のやうな形式になつたものかは知らない。私はたゞ長いものになると十間以上もある橋掛の藝術的價値を歎美して喜ぶものである。實際舞臺藝術として能樂の價値の少くも半分はこの橋掛にあるやうな氣がする。橋掛に欄干が附いて、一の松二の松三の松と三本の小さい松が其前に植えてあるのも單に面白いばかりで無く、これには深い意味があらう。伎工的には其等の松は役者の動作をする目標であらうけれども、この簡單な裝置がどんなに表象的に見え、どんな暗示的效果をあげるか知れない。又能が昔松林の間で行はれた事のある名殘だとのみいつて濟まされるものでない。

三

能樂堂の詩的雰圍氣は舞臺だけで作るので無い。地謠と囃子方と能役者だけで作るのでなく、彼等と觀客との共同努力が生みたすのである。惡い觀客のある所に善良な能樂の雰圍氣がある筈は無い。私は近頃この能樂堂を普通の娯樂場と心得て、詩的であるべき完全な雰圍氣を散文的に破壞しようとする惡傾向があることを遺憾としてゐる。觀客は眼前の舞臺を祭壇と眺める、祭壇で謠ひ斷し處作をする色々の藝術家は觀客の直率な熱心な禮讃に反應して自己精進の道を喜んで辿るであらう……そこに暗示的な概念が音律から音律へと動き、人間性の追憶と感激が永劫の空間に見えたり隱れたりするのである。私共は詩の爲めに、この雰圍氣の保全を計りたい。この雰圍氣を亂したくない。この雰圍氣の中で嚴肅な人間の悲劇が調子の高い抒情詩となつて響き渡る、現實が恐怖や悲哀や乃至は歡樂の表象となつて浮動する。さうしてこの雰圍氣は精神的な深い影から生れる。能樂堂は即ち薄暮の家である。

朦朧とした黄昏の中で始めて詩が安心して生きる。詩は柔かだが力強い音律が一滴〳〵白い雨のやうに落ちるのを聞くであらう。詩の家の窓は閉められ、無責任な明るい空氣を流れ込まさない。詩の家である能樂堂は薄暗くなければならない。私はどんなに、小規模ではあつたが薄暗い喜多の舞臺を喜んだであらう。私は新築前の寶生の舞臺を喜んだ、さうして大規模に出來た明るい寶生の能樂堂を嫌つた……そこには詩の心を整理し統一させる雰圍氣が無かつた。周圍の窓から流れ込んだ明るい空氣は舞臺へ顯はれ幽靈を驚かして其姿を消せさせたであらう。然しこの不愉快であつた能樂堂も震災で燒けて今は無い。今立派に存在してゐるものは九段の能樂堂だけだが、詩の殿堂としては不滿足である…家の天井が高かすぎる。光るすぎる、詩的雰圍氣が集中し無い。私は曾てある日の午後に太い芥ぽい光線が無遠慮に高い所から流れこんでゐることを見たことがある。この日の能樂位不愉快なものは無かつたことを今に忘れない。今日私は雨の降る日か曇つた日に於てのみ能を見ることにして居る。東京には一つ二つは理想的な能樂堂が有つてもよい、又有るべき筈だ。だれかそれを造りさうなものだと思つてゐる。九段の能樂堂がまだ芝の公園内にあつた時のことを私は思ひ出す……もう二十年も以前の事だ。其頃私は長い外國生活から始めて歸つて來たばかりで、能樂堂の入口を飾つて立つてゐる松林の間を洩れる笛の震へる音を聞いた時、どんなに私は喜びの感激に動かされたであらう。能樂堂も家だけでは仕方が無い。靑々し

た古い松林の間に建築されないと理想的でない。實際、私が始めてこの芝の能樂堂へ近寄つた時、私はどんなに喜びの涙を流したであらう。

　廐橋近くの梅若の舞臺も私の愉快な追憶の種である……第一私はその時代の附いた薄黑かつた舞臺が氣に入つた。音樂堂といふ獨立的な冷い態度が無く、柔和で落付いた家庭的氣分とでもいふやうな雰圍氣が溢れて居つたことも喜ばしいものと感ぜさるを得無かつた。特に私の忘れないことは外でない。私が始めて梅若萬三郎君を見た時の印象である。彼の聲は何時何處へ持ち出しても驚くべきものと云へる。盤上玉をころがすといふ言葉があるが、それで形容し盡されない。彼の大きい圓い深く震動する聲は自然である。さうしてこの自然の天賦が精練された計畫で整理され支配されてゐる。私は近頃彼を見彼を聞く機會をとんと持たないが、恐らく今日でも彼の藝術は私の第一印象を裏切らないであらうと思つてゐる。

　能役者は謠曲中の抒情詩的章句を、一種の引用句のやうに歌つて他の語る場所と關係の無いものとしていけないのは勿論の事であらう。彼等はこれは詩であると同時に、登場人物の直接に關係する表現の言葉であることを忘れぬであらう。然し語らない役者になると、この抒情詩的場所を音律的にのみ力説するといふ危險に落ち、音聲を誇る不注意な言葉として仕舞ふ。又語るといふ場所を取扱ふにしても、その意味を力説し過ぎる結果、他の抒情詩的場所との統一的關係を無視して仕舞ふ。それではいけない……語る場所と歌ふ場所とを不即不離に取扱つて、全篇の音律的氣分を破壞しないやうにしなければなるまい、さうして私は、殆んど完全に近い能役者を萬三郎君に發見したことを喜んだ。私は今彼に對する第一印象の跡を辿り、進んで私の能樂の觀賞を更に語りたい。

　其日の能は『山姥』であつた……過去七八年間に種々な場所で數回の山姥を見て居るが、最初梅若の舞臺で見た時のやうな好印象はない。梅若の山姥の日は秋も末の極めて陰鬱な薄暗い午後であつた。『髮におどろの雪を戴き星の如く眼光を輝せ乍ら烏羽玉のくらまきれから顯はれる』山姥を舞臺で見るには、至極適當な日であつた。番數も進んで能樂氣分が高潮に達した時、一層薄暗くなつた午後の空氣は眞黑に見える舞臺に氣味の惡い雰圍氣を與へた。この時山姥は始まり『なふなふ旅人お宿參らせうなふ』と呼ぶ聲が橋掛の上げ幕から聞えた……この陰にこもつて陽に響く里の老婆とばけた鬼女の聲が陰鬱な堂中の空氣を震はした。この呼び聲一つでこの一番の能が成功か不成功かの運命が定るであらうと私は思つた。實にこの一言葉にこの詩

劇の生命が懸つて居る……『なふなふ旅人お宿參らせうなう、是はあげろの山とて人里遠き所なり、日の暮れて候へばわらはが庵に一夜を明かさせ給ひたまへ』と鬼女は呼ぶ。この登場は數多い能樂中でも一番緊張した心持を觀客に與へるものゝ一つであらう。

女面に唐織着流に麗はしい都の女『百萬山姥』といふ遊女が從者をつれて信濃の善光寺へ參詣しようとする。途中あげろの山といふ所で急に日が暮れ道に踏み迷ふ。これ鬼女の紡ぐ魔法の綱にかゝつたのである。鬼女は老婆と化けて彼等に宿を貸せ、深夜になつて『山めぐりする山姥』の正體を顯さうといふ。山廻りする山姥は即ち輪廻に迷ふ人間の魂で、山とは人生の表象に外ならない『松風共に吹く笛の〳〵、聲澄み渡る谷川に手まづさへぎる曲水の月に聲澄む深山かな』の所謂待謡がすむと、いよいよ太い鹿背杖を突いた白頭物凄い鬼女が上げ幕から出て來る……橋掛の一の松で正面を向き、『あら物凄の深谷やなあら物凄の深谷やな』と深い寂しい深夜の谷を見渡す振りをして、『寒林に骨を打つ靈鬼泣く〳〵前生の業を恨む、深夜に花を供する天人返す〳〵も歸生の善を歎ぶ』と歌ふ。鬼女は『いや』と悟つた心で右を向く、鬼女は『善惡不二、何をか恨み何をか歎ばんや』とまた正面を向く、鬼女は駒杖して、『萬箇目前の境界懸河渺々として巖峨々たり山また山』と歌ひ乍ら山を見上げる。鬼女は『いづれの工か青巖の影を削りなせる』と左右を見渡して自然を歎美する、『水また水、誰が家にか碧潭の色を染め出だせる』と歌つて、どしんどしんと足音立てゝ舞臺へ入つて來る。

『夫れ山といつぱ塵泥より起つて天雲かゝる千丈の峯』と所謂クリを歌ひながら、鬼女は舞臺の眞中へゆきどつかと床几にかゝる。『海は苔の露よりしたゞりて波濤を疊む萬水たり。』『一洞空しき谷の聲梢に響く山彥の、』『無聲音を聞くたよりとなり聲にひゞかぬ谷もがなと、望みしもげにかくやらん、』『ことに我住む山家の景色山高うして海近く、谷深うして水遠し、』『前には海水瀼々として月眞如の光をかゝげ、後には嶺松巍々として風常樂の夢を破る、』『刑鞭蒲朽ちて螢むなしく去る、』『諫鼓苔深うして鳥鳴かずといひつべし』と、地謡と鬼女はかけ合で歌ふ。それからクセ謡が『法性峯そびえては上求菩提をあらはし』谷深きよそほひは下化衆生を表はして』といふ所で鬼女は拍子を踏む。さうして鬼女は逆手に扇を取て『金輪際に及べり』ですつと下を低く指す……觀客は舞臺の下に幾千尺といふ深い谷が横たはつてゐるかの感に打たれるであらう。文章で讀んでは左

程でも無いが、舞臺の上でこれを見ると如何にも其壯嚴の靈氣に動かされざるを得ない。再びいふが私がこの山姥を始めて見た日は物寂しい陰鬱な秋の末であつたのである。

　これから鬼女は床几を離れ、遊女に約束したので山めぐりの有様を地謡につれ、或は拍子を踏み或は扇子を開き或は橋掛の方を眺め或は抱扇して柳櫻を眺め或は扇を右の肩に上げて薪を荷ふ振りして舞ふのである。原文にかう書いてある。「地」…………そもそも山姥は生所も知らず宿もなし、たゞ雲水を便りにて至らぬ山の奥もなし、シテ「然れば人間にあらずとて、地「隔つる雲の身をかへ假に自性を變化して一念化生の鬼女となつて目前に來れども、邪正一如と見る時は色即是空そのまゝに佛法あれば世法あり、煩惱あれば菩提あり、佛あれば衆生あり衆生あれば山姥もあり、柳は綠花は紅の色々、さては人間に遊ぶ事ある時は山賤の樵路に通ふ花の蔭、やすむ重荷の肩を貸し月もろもに山を出て里まで送るをりもあり、又ある時は織姫の五百機立つる窓に入つて枝の鶯糸くり紡績の宿に身を置き、人を助くるわざをのみ賤の目に見えぬ鬼とや人や人のいふらん、シテ「世を空蟬の唐衣、地「拂はぬ袖に置く霜は夜寒の月に埋もれ、打ちすさぶ人の絲間にも千聲萬聲の砧の聲のしでうつは、たゞ山姥がわざなれや、都に歸りて世語にせさせ給へと思ふは猶も妄執か、唯うち捨てよ何事もよしあし引の山姥が山廻りするぞ苦しき。』

　鬼女は今都の遊女にさらばを云はうとするのである。『花を尋ねて山めぐり、秋はさやけき影を尋ねて月見る方にと山めぐり、冬はさえ行く時雨の雲の雪をさそひて山めぐり、めぐりめぐりて輪廻を離れぬ妄執の雲の塵つもつて』山姥となつたのであるといふ。即ちこれ輪廻に迷ふ苦しい人間の姿であるといふのである。さうして鬼女は『山又山に山廻り、山又山に山廻りして行方も知らずなりにけり』でこの詩趣ゆたかな能は終結する。然し鬼女が舞臺へ入つてからは人に迫る物凄い妖氣が漂らいでゐる。この一番の戰慄すべき光景は橋掛の獨白で既に最高潮に達してゐると私は思はざるを得ない。

四

　私は沿革史に興味が無い、又それは本文の目的でない。私の興味は今日私共が見る能樂に對する觀賞にある。さうしてそれは藝術的見解に終始するものであることはいふまでも無い。藝術的觀賞には自由がある束縛が無い……専門的智識の無い私でも無遠慮に語る發言權を得ることが出來る。私はこの藝術的觀賞が許す我儘な行爲を喜びそれを祝ふのである。私は本文に

舞臺上の效果から始めて、一班的に能樂が舞臺で表現する綜合藝術としての特殊な價殊を暗示して來たが、今私はそれを『讀みもの』として讀む場合の意見を簡單に語りたい。又それを簡單に語つて見ると……失望の二字あるのみだ、悲觀の二字あるのみだ、今日の文學觀から見ると大部分は讀むに堪へない文字のみだ。愚かな模倣的修辭の文字のみだ、所謂補綴切貼で前後の關係を無視する文字のみだ、譬へば古金襴を四角に切つて無秩序に結付けて座蒲團を作つたやうなものだ。謠曲として讀むと如何にも融合統一を缺く夢幻的文字の行列ではあるが、讀んでゐる中に裏面に流れる情調に觸れ、三稜硝子から出る幽かな光線に魅せられるやうに感じて來るのはどういふ理由か。私共日本人の藝術心は由來夢を愛して理智的整理を超絕してゐるので、かういふ文章が成立して來たのであらうか。顧みて他をいふといふ言葉がある……即ち謠曲の作家は顧みて他をいつてゐる場合が多いが詩から離れて居らない、顧みて他をいひ乍ら目的とする情調の發散を忘れない………其處がこの文章の價値だ。かういふ文章を愛して作つた昔の日本人は確に心理研究の一問題たるを失はない。哲學的考察に價するに相違無い。昔の日本人の藝術心は、今日の私共から見ると不思議で了解されない所が多いが一種の快感をそれから感ずることが出來る。それ故に讀物として謠曲の文章が今日でも立派に『存在の理由』を持つて居る。然し能樂となつて舞臺で表現される場合の藝術的效果が、讀物としての場合より十層倍も優つてゐることを見ると、私共はこの卓越した演出法に驚き歎美の叫を發せざるを得無い。實に能樂の演出法は偉大である驚歎に價する。讀んで一向詰らない曲目でも舞臺で一段の光彩を發揮するものも少くない。能樂堂で不思議に引きつけられたものを、家で讀みたはしてその詰らないのに驚く場合も多い。この歎美すべき能樂の演出法は、どういふ經路を辿つて發達したものであるか。演出法がまづ完成して文字が從つて來たものと想像すると、謠曲の文章の大部分が不自然であるといふことは容易に了解され得る。

勿論文章（今日の言葉でいふと脚本だ）が出來て演出法が從つたものも多いであらう。讀物として統一されてゐる曲目も少くない。一體たれが謠曲の作者であるか。觀阿彌清次と世阿彌は今日の能樂の開祖としての名譽を擔つてゐる。彼等は父子の關係だが、後者の子の方が親より遙かに偉い天才であつた。彼は足利將軍義滿の保護と獎勵とを得て在來の猿樂を改革して今日見るやうな藝術を舞臺の上に創造するに至つたのである。然し彼（觀阿彌も同樣に）は役者或は節附け形附けする舞臺監督

であつたばかりでなく、所謂臺本の作者であつたことが彼の遺著十六部集の發見で確定されるに至つた。さうして見ると、私の好きな前記の『熊野』『山姥』を始め『善知鳥』『錦木』『八島』『大原御行』『葵上』等善良な作品は悉く彼の書いたものとなる。『松風』『自然居士』の二名作は觀阿彌の作となつてゐるが、禪竹氏信小次郎信光其他十五六人の役者兼作者の名前はあつても賞讃に價するやうな作が無い。謠曲の數今日概して二百番と云はれてゐるが、能樂として舞臺で演ぜられるものは少數に制限されてゐる。しからば讀書子の書齋に於ても又能樂堂の舞臺の上でも藝術的價値のある作品は幾つあるであらうか。これは容易に答へられない問題ではあるが……私自身の意見では、いさゝか嚴選すぎるかは知らないが、二十篇以上はあるまいと思ふ。

私は二番物とも或は男物とも云はれる種類を好まない。多くは修羅道の矢叫びや鬨の聲で苦しむ戰場の勇者が幽靈となつて物語をする作品である。中に讀物としても舞臺で見ても申分のない愉快な『八島』の如きもあるが、概して五月人形以上の興味をひかない。この『八島』は伸やかな詩趣が戰爭談をぼかしたもので不自然な修辭の亂用も無く秩序も整然として居る。私は餘程以前にこれを梅若の舞臺で見たことがあるが、その時の快感が今でも忘れられない。判官義經が所謂弓流しの一條を物語つて朝の光で消て行くのだが、『春の夜の浪より明けて敵と見えしは群れ居る鷗、鬨の聲と聞えしは浦風なりけり高松の浦風なりけり高松の朝嵐とぞなりにける』の最後の地謠が今に私の耳に殘つて居る。

能樂が古い足利時代から德川氏の時に渡つて將軍家の式樂となつて來たといふ事實に私は興味を持つ。この事自身が世界に類のないばかりで無く、日本人の藝術的國民性を考察する上に大きな暗示を投げると思ふ。將軍家の式樂といふ點から神能即ち脇能が神聖視されたことは自然であらう。この範圍に屬して祝言の心持を出す作品も少くないが、『高砂』の一篇の如きは神祕劇の一種として私の近代藝術觀を滿足させる。私は『高砂』を高く買つて居るものだ。『曉かけて霜はおけども松が枝の葉色は同じ深みどり、立ちよる陰の朝夕にかけども落葉の盡きせぬはまことなりけり松の葉の、散りうせずして色はなほ正木のかづら長き世のたとへなりけり常磐木』の文字には、表象主義として取扱ふことさへ出來る精神的暗示がある。私はいつぞや九段の能樂堂で『翁』を見たことがあるが、これも忘れられない追憶の一つだ。この古雅な一曲は昔では、役者が別火潔齋して勤めたものであるさうな。第一『翁』の文章を讀むと飛行機や勞働問題の世界とは一萬哩も離れて、雨を拂ふ作風平和

の樂園へ來たかの心持がする。一貫した意味は無いが面白い味が掬されるから其一節を書きつけよう。

『翁「とう〳〵たらり〳〵ら、たらりあがりらゝりとう、地「ちりやたらりたらりら、たらりあがりらゝりとう、翁「處千代までおはしませ、地「我等も千秋さぶらはう、翁「鶴と龜との齢にて、地「幸心に任せたり、翁「とう〳〵たらり〳〵ら、地「ちりやたらりたらりら、たらりあがりらゝりとう、千歳「鳴るは瀧の水、〳〵、日は照るとも、地「絶えずとうたり、ありうとうとうとう、千歳「絶えずとうたう常にとうたう（千歳舞）千歳「處千代までおはしませ、舞「我等も千秋さぶらはう、千歳鶴と龜との齢にて、處は久しく榮え給ふべしや、鶴は千代經る君は如何經る、地「萬代こそ經れ、ありうとうとうとう。」

私はもう一つの作品を語りたい。それは善知鳥だ。三才圖繪の語る所に依ると、陸奥卒土の濱に善知鳥安方といふ鳥があつて、同じ鳥だが親と子で其名が違つてゐるのだ。親鳥の善知鳥が外から餌を運んで、『うとふ〳〵』と呼ぶと『やすかた〳〵』と鳴いて親鳥のそばへ遣つて來る。その鳥を捕へる獵師は子鳥の聲を眞似て親鳥を捕へ、親鳥の聲を眞似ては子鳥を捕へる。所でこの善知鳥安方を殺して生活して居つた一人の獵師が、生前の罪業の報で冥途の苦みに遇ひ旅僧の供養を頼むといふのがこの篇の筋である。例に依つて諸國一見の僧が出て來て[illegible]は幽靈）に出會ひ、卒土の濱の者を尋ねて蓑笠の手向をするやう自分の妻に傳言して呉れと頼まれる。僧はたゞさういつたばかりでは信用すまいといふ『思ひ出でたり在りし世の今はの時まで此尉が木曾の麻衣の袖をときて』とあつて、水衣の左の袖を引きちぎつて『これを證據に持つてゆけ』といふ。僧は承諾して獵師と分れる。

場面は變つて旅の僧は卒土の濱へ遣つて來る。つひ近頃死別れて悲歎の泣にくれてゐる獵師の妻に會ひ、事の次第を語つて托された麻衣の片袖を見せる。妻は片袖のない水衣を持出して一つに重ねて、『疑も夏立つ今日の薄衣〳〵、・重なれども合はすれば袖ありけるぞあら懐しかしの形見や』と打ちしをれる。僧は『南無幽靈出離生死頓證菩提』と合掌回向する。獵師の亡者は何故に蓑と笠の手向を希望したか……殺された善知鳥安方が冥途で降らす血の涙をこれで防がんが爲めである。

舞臺へ現はれる亡者は白い水衣で狩裝の裝束して杖を手に持ち、『奥に海ある松原の下枝に交じる汐薦の末引きしをる浦里の籬が島の苫屋形。圍ふとすれどまばらにて月の爲めには卒土の濱』の家へ遣つて來る。彼は『[illegible]の日に晒らし給

へ『御僧』と僧を見て合掌をする。彼は悲哀に惱む妻と子を見て悲む。彼は何故に無慈悲にも善知鳥安方を殺したであらうかと生前の罪惡を歎く。彼は子供の髮の毛を撫でて愛の言葉をかけようとする。『横障の雲の隔てか悲しやな』で雲に邪魔されて近寄れない。彼は悲歎にもがく。彼の着物は涙の雨吹で濡れる。彼はなつかしい家の内へ入ることが出來ない……彼は『卒土の濱千鳥音に立てゝ泣くより外の事ぞなき』で、籬の外をたゞ彷徨ふのみである。

私の本劇に對する興味はこゝにある。僧侶にも無ければ又彼の回向にも無い。あゝ、何たる傷心の場面であらう。これは失はれた人間靈の悲劇である。絶望と恐怖の惱みである。此處に避けることの出來ない運命が斷定的に表現されて居る。私は喜多六平太君の『善知鳥』を兩三回見て奇怪な深かい感激に觸れたことを喜ぶものである。今でも眼をつぶると、喜多君の亡者が舞臺で苦惱する姿が浮んで來る。

五

私は今本文の終結へ急ぐであらう……終結へといつても人を驚かす結論があるのでない。私は本文の最初から私の結論を語つて居る。結論としてゞ無くとも私の能樂に對する最後の態度は、本文の最初から語つた讃美の言葉で知れる。日本に國劇に近いものがあるとすると能樂以外に無い。正にこれ國寶的日本の舞臺藝術である。若し其保存維續に援助が無くてならないならば、誰かれといはず國家がその保護者とならねばならない。舞臺藝術を國家が助けるといふ例は外國にある。現にこの能樂は昔將軍家を後援者に持つて今日の状態にまで發達したのである。今日の日本政府（政府といふより國家といひたい）は藝術に眼を開いて、一つ能樂保護策を建てゝはどうだ。國家の力でするならば、五つや六つの理想的能樂堂位直ぐにも造ることが出來るといふものだ。若し今日の政府に文化政策の一つでもあるならば、須くこの途から着手すべきであらうと思ふが、どうだ。

私は能樂の讃美者である。私は批評する。けれども私の批評は決して私の讃美を傷付けるもので無い。私は能樂乃至謡曲を批評するけれども、それを他の舞臺藝術と比較研究するもので無い。如何なる藝術の形式に對しても比較論は愚かである。讀んで面白くても實際價値があるもので無い。特に能樂は既にすでに最後の發達に到達してゐる藝術であつてみれば、それを他の外國の舞臺藝術と比較した所で何にもならない。最後の發達期に立つ藝術は……結語にして結論にしても又間にしても、

現狀維持の完成を目的とするかさも無くば自個破壞があるのみだ。能樂に對しても取るべき道はこの二つ以外に無い。能樂はこの上どうともすることが出來ないほど發達して居る。能樂は能樂として完全である……丁度月が月として、薔薇が薔薇として完全であるやうに。若し能樂に新鮮味を入れるとすると、それは舞臺に立つ役者の新鮮な心理狀態に依らねばならない。日月星辰は萬古不易で永久に古いが、永久に新しい。古い形式の能樂もいつも新しい氣分で流動的藝術たることが出來ない理由は無い。永久の新鮮味は外形からで無く精神から來る。能樂もこの信念に立つて始めて將來に生きることが出來るといふものだ。

能樂が主として取扱ふ古い時代の傳說に對して新了解もへつたくれも有るものかといふ人があらう……さうで無い、それは愚論であらう。勿論曲目の中には喜んで磨滅に入るものもある。前にいつた如く今日の藝術觀を滿足させる作は澤山無いことも事實である。然し人間に新古は無い、人間の思想感情は時代によつて變化はあるが其根元を忘れるもので無い。詰らないものは自然に亡びる、又將來に生きるものは其理由があつて生きる……それが天地の大法だ。實際能樂の曲目中には諸國一見の僧がのぺつに出る、又僧侶の呪文が恐ろしく尊い價値があるやうに取扱はれて居る。私自身もそれにはうんざりして居るが、然しだ、善良優秀な作品を見ると其僧侶が又その呪文がさう邪魔をしない點を注意せねばならない。さういふ立派な作品になると、全篇を貫いて流れる悲劇的情調が主であつて僧侶並に佛教との關係は單に背景となつてゐるに止る。西洋では能樂に餘り澤山幽靈乃至は亡者が出て來るので、能樂を幽靈劇といふものもある。然しこれも、幽靈が出てるといふ事實に興味の中心はあるのでないことを知らねばならない。幽靈が出て如何に情調を漂はせるかゞ重大な問題で、其點から能樂を見ないと能樂は迷惑するであらう。

能樂の情調は憧憬思慕の感情から起る……何を慕ひ何をあこがれるか。美に向つてゞあるが其美は人間が夢見る所の美であつて、假令現實美を取扱つてゐる場合でも美の抽象的意味から決して離れない。能樂の取扱ふ美は一時的な皮相の美でなく、人を夢の恍惚境に誘つてゆく絕對美である……故に能樂の美は千古に亡びない。こゝに人間の感情を元として創造した想像の世界がある、これは能樂が私共日本人に與へる特殊の世界である。この世界の作者は時代の偶然に編みだす倫理に煩はされない、形而上學の規則に捕はれない。能樂中のあるものは眞理を取扱ひ又人情を取扱つてはゐるが、其眞理を其人情を詩の雰圍

氣で淨化して居る、さうして其眞理や人情を特殊の藝術品と仕立なほして居る。あゝ、この能樂の世界位ラプチュアの世界は外にあるまい。私共はこの世界に入つて永遠無終の眞實の意味を了解するであらう。

私共は能樂堂へ入つて靜寂を劈く笛の音を聞く、掛聲そのものも音樂の一音符たるを失はない太鼓小鼓の聲を聞く、強弱綾急氣合心持が整つて一絲亂れない地謠を聞く、泣くが如く笑ふが如き面を着たシテの踏納めの足拍子を聞く……この舞臺を打つトンこそ千金の重みあるトンの足拍子であらう。さうして私共は理論と現實に對するすべての義務的關係を忘れる。其時に私共は私共人間を支配し混亂させる雜多な規約から離れ、眼前に美の世界が擴がつて永劫に結付き、直にその一部分であるといふ認識に目覺める。能樂の藝術は私共の人生を整理する詩化する理想化する。それに依つて一層麗はしい一層明るい宇宙の聖約の道を知ることが出來る。

能樂の世界は幽界と現實界を打つて一つとした世界である、これ位廣い藝術界は無い。如何なる舞臺の藝術をたづねても、能樂の藝術位廣い領土を持つものはあるまい。さうして能樂は前記の兩世界を感情の二字で連鎖して居る、既に感情の藝術であるから、能樂の最善である場合には有らゆるものゝ含む美の藝術たることが出來るのである。能樂の取扱ふ題材は制限されて居らう……其制限は賢明な制限である。制限を知らない藝術に何處に滿足な藝術が存在しよう。能樂が制限を守つてしかも廣大な藝術の世界を創造したといふことは驚歎に價すると云はねばならない。今その取扱ふ題材即ち傳說を考へてみるに……觀阿彌にしても、世阿彌にしても最初は傳說其物を重要視してそれを力說したものかも知らないが、今日の藝術觀から見ると、取扱はれてゐる物語其物には第二次的意味があるのみと云はねばならない。美の情調といふ最後の目的へ到達する方法として其意味があるばかりだ。私共は能樂の表現する永遠的宇宙の法則に觸れて精神は感動し向上する……それで十分だ、私共はその物語が何であらうと問ふ所で無い。詩的効果を表現するといふことの外に能樂に對する第一の問題も第二の問題も無い。故に能役者は現實のペーソス（修辭學でいふ漸降法）に落ちない用意が必要である。ペーソスへ落ちると美の音律的創造から離れることになる。これを實際の上でいふと、能役者が素面で舞臺へ上る場合は詩的効果があげにくい、面を被るシテなどに比較すると九分の損がある。面を着けると第一音聲が籠つて響き自然に現實離れする、現實の人間として扱はれても詩的雰圍氣が愉快に漂つて來る。如何に實生活者がソ[illegible]の名人であつて

も、面の役者が容易に表現するやうな詩的効果が得にくい。眞實な詩的雰圍氣は調諧の力だけが作ることが出來る、さうしてこの調諧は藝術的敏感性のみが其秘密を握つてゐる。能樂の敏感性は實に世界無比である……能役者の舞臺の上での一擧一動を見よ、彼は一寸した藝術的破綻でも全體の調諧を傷付けることを恐れるであらう。彼の音聲は體全體から出る、詩的効果を破らない範圍に於てのみ個人格である。彼の藝術は感激的情調で彫像的靜寂の雰圍氣を音律的にほごしてゆく破つてゆく。彼の藝術が餘りに精緻を極める爲め、觀客はそれに相應しい注意を要求され却て心が緊張し過ぎる。能樂を見ることは一種の苦痛であるやうに感じもする。

能樂の藝術は感激的情調の藝術である……これに相違ない。然も外部に展開する藝術で無く、内面に凝縮する藝術である……いな、内面にかくしてしかも積極的表現の結果を暗示する藝術である。これは實に世界に類の無い不思議な舞臺藝術だ。

私はこの特殊な藝術が日本にあることを且つ喜び且つ誇るものである。

巴里通信

柳澤健

○

自分が、ジャン・ジョレスに關する紹介の言葉を祖國日本への置土産のつもりで本誌へ寄せ（本誌大正十二年五月號所載『全人道の戰士ジャン・ジョレスの生涯及び思想』）、この巴里指して遠い旅に上つたのは、春も半ば頃であつた。新綠の巴里は、一年振りでこの土地を踏むだ自分の眼に、如何に深々と映つたことであらう。自分は、その新綠の明るさのなかで、書肆の店頭へ出て未だ間もないレヴイ・ブリュール教授の近著『ジャン・ジョレス』を、先づ何よりも先に繙いたのであつた。教授自身も、

この書が單なる草稿(エスキース)に過ぎないと言明してゐるやうに、ジョレスに關する極めて周到なる研究といふのでも、また極めて獨創的なる見解といふのでもなかつた。然し教授の平明靜和なる叙述は、能くこの小篇のなかにジョレスの愛と信とに充ちたその生活を浮彫のやうに浮び上らせて剩す所がないと言つてよかつた。旅の荷物の散らばつてゐる宿屋住居のいとゞさへ落付かぬなかで慌しく讀むだこの書は、その落付かぬ心を、どんなにか靜めて呉れたことであらう。自分は、今更に彼を生みまた彼を殺しもした土地に自分の足が著いてゐることを、強く感じない譯には行かなかつた。

ポール・デザンジュとリック・メリガとの兩氏の共著の『ジョレスの一生』を書肆の店頭に見出して、自分の宿へ買つて歸つたのもその前後のことであつた。この書も、現はれて未だ間もなかつた。ブリュール教授の著書に較べて見ると、遙かに綿密にまた遙かに組織立てられて書かれてゐた。異常な熱と愛とをもつて書かれてゐることも、容易に感ぜられた。が、それだけにレヴィ・ブリュール教授の著書と較べて見ると何處か強いて事件を性格を強調し、率いてはジョレス自身のあの寛大で人間的だつた心をも勢ひ一方に片附けねば措かぬといふ個所が、所所ないでもなかつた。が、かゝることに係らず、ジョレスの評傳としては、確かに秀れたものゝ一つであることは、疑ひを容るゝ餘地はなかつた。自分は、巴里を踏むと早々からした二著書を手にすることが出來たのを、ひそかに喜ばしく思はない譯には行かなかつた。

それから間もなく、ある日散策の序に立ち寄つた『リューマニテ』の書店で、自分は、珍らしいパンフレットが店頭に並んでゐるのを見出した。それは、あの露西亞のトロツキイの書いた『ジャン・ジョレス』といふ文章であつた。共産主義者としての、ボルシェヴィックとしてのトロツキイは、ジョレスとは可成りに相違せる立場に立つ。それだけに、このパンフレットは何よりも自分の興味をそゝつた。その書肆を出た自分は、近くのカッフェに腰を卸して、この短篇の上を大いそぎに眼を通して見た。

このパンフレットは、今年に這入つて右の書肆の手で刊行されたものであるが、トロツキイ自身がこれを書いたのは(原文は露西亞語)、今から六年以前である。

トロツキイは先づ、現在の大戰爭が幾多の個人のみならず實に時代其物をも後方に押遣つたものであることから說き初めてゐる。普佛戰爭並びに巴里コムミュヌ以後今次の大戰開始に到るまでの武裝的平和、政治的反動の時代に於いては、プロレタ

リアの闘爭なるものには專ら社會改良主義（レフォルミズム）の精神、國民的工業の制度並びに國民的國家に對する順應の精神が滲み込んでゐた。彼等は曾て一度も、政治的權力の征服といふが如き問題を實際的に攻究しやうとしたことは無かつたのである。從つて、各國に於けるプロレタリアの闘將は當時何れも、集團の直接革命的闘爭に對しては、極度の侮蔑の念慮を抱きつゝあつた。今次の大戰爭が勃發し、國民的國家なるものが夫々全力を擧げてその渦中に投ずるや、所謂社會主義の首領たるものは、殆ど無くその膝を折つてこれに從ふに到つた所以である。かくして、第二インターナショナルは、この大戰爭の開始に連れて、遺憾なくその無氣力無能力を、世界に暴露することとなつた。トロツキイは、今や第二インターナショナルの思想も人も、大戰を劃紀として『紀念碑（モニューマン）』としてより以外には、最早存在せぬものであるとさへ述べてゐるのである。

然も、この第二インターナショナルの最も大いなる代表者はと言へば、一はベーベルであり、他の一はジョレスではなかつたか。たゞベーベルは、言ふべき總ての事は言ひ盡し、その高齡の頂上に於いて死したるも、ジョレスは、その創造的精力の開花期の眞中にあつて凶手の爲めに倒れたといふことは、彼の爲めにまた世界の爲めにも遺憾とせざるを得ないとは、トロツキイの觀察である。

かくして、トロツキイは、大戰を劃紀として最早ジョレスの思想は明かに過去に屬するものに他ならぬことを先づその緒論に於いて試み、次いで、ジョレスの生涯を略記し、その育ちに於いてその性格に於いてその教養に於いて、彼が如何に社會改良主義者としての色彩が濃くあつたかを語つてゐる。同時に、過度とも言へるまでの、理想主義者――といふよりも寧ろ一の空想家（イデオローグ）でさへあつたことを、語つてゐる。後年彼の創立にかゝる新聞『リューマニテ』の題名（人道、若くは人類と譯す）は、彼の思想を如實に示してゐたと言へる。社會主義なるものは、ジョレスにとつては、決してプロレタリア階級闘爭の學理的表現ではなかつたのである。反對に、プロレタリアなるものは、權利と自由と人道とに奉仕すべき歴史的勢力として、彼の眼に映つてゐたのであつた。彼にとつては、そのプロレタリアの上部には、人道（リューマニテ）の思想と稱するものが、大いなる場所を占めてゐなければならないのであつた。この點から見ても、彼の思想の基調は、社會主義にあるといふよりも寧ろ民主思想（デモクラシイ）にあるとも見られると、トロツキイは斷定してゐる。がジョレスは、所謂理想主義者であり、はたまた一の空想家であつたとしても、その理想その空

想は、誠實に充ち活力に溢れてゐたものであつて、決して空虚なる抽象ではなかつたことは、トロツキイ自身も明かに認めてゐる。しかも、一方彼には、現實に對する强力なる直感が存してゐた。第二義的なものとさへ見らるる些末なる現實をも、彼は能くその考慮のなかに置くのを忘れなかつたのを見る。彼の天性が樂天主義に傾いてゐたのにも係はらず、彼は駭くべきほどによく數々の狀態と數々の人間とを理解してゐた。この明識(ボン、サンス)こそは、彼の思想を常に抽象から救ひ單なる空想から放たしめてゐたのである。

が、何と言つてもジョレスを先づ動かすものは、現實それ自體ではなくて、その空想から生れ出づる思想に他ならなかつた。しかも、その思想の奔馳するや、彼はその途中に於いてそを引き止めるが如きことなく、實に最後の場所まで行き着かしむるを常としてゐた。ドレフュース事件の際に於いて、彼が左傾せるブールジョアとの協力の思想を最後まで押し進めて行つたのも、實にこれに他ならなかつた。またミルラン入閣の際に於て、彼のごとき理想なく、彼のごとき勇氣なく、また彼のごとき心の飛躍なきミルランを、最後まで支持したといふのも、亦これに他ならなかつた。かゝる性向は、時にジョレスをして素振らしき成功を贏ち得せしむることがあるとともに、時にまた、異常なるカタストロフに直面せしむることとなるものでもあつた。トロツキイは、『ジョレスは、恰もナポレオンのやうに、その政策のなかにオーステルリツツとワーテルローとを持つてゐた』と言つてゐる。

こゝまで述べて來たトロツキイは、大戰勃發に際してのジョレスの態度にその筆を向け、彼は、大戰とともに社會主義を二個の仇敵の立場に分裂せしむべき問題に直面して、遂に、愛國的立場に加擔せることに言及し、しかも其にも係らず彼に凶變なかりせば、佛國社會黨は、大戰中ゲード、ルノーデル、ザムバ、トーマ等の指揮の下にありしが如き醜狀は見るを得なかつたであらうと追憶し、更に筆を進めて『未來に於ける革命の際に於いて、この偉大なる論客は、必ずや誤ることなくその地位を選擇決定し、その勢力を最後まで展開して行つたことであらう』と、斷定してゐる。

最後にトロツキイは、ジョレスに現はれたる心と肉體との强健の美を讃頌して、彼こそは、佛蘭西民族の最も高潔にある一人であつたと述べてゐる。彼に從へば、佛蘭西民族の秀れたる型は二つに分けられる。透澄にして形式のよく整美せるものはその一つの型である。文學に於けるヴォルテール、ボァロー、アナトール・フランス、政治に於けるジロンド黨の諸勇士、ヴィヴ

イアニ、デシャネル等は、實にこの型に屬する。強力にして熱情的なる心と肉體との健康を有し、鐵の如く鍛錬せられたる意志の統一を有する型は、その二である。ジョレスは、文學に於けるラブレー、バルザック、ゾラ、政治に於けるミラボー、ダントン等とともに、實にこの力士のごとき型に屬する。『ジョレスの雷のごとく鳴り響く聲を聞き、内心の反映に輝くその大いなる顏と、その傲然たる鼻と、殆の近寄り難きその鬪牛の頸とを見ては、何人も、『こゝに一箇の人間がある』『Voila un Homme!』と獨語するを禁じ得ないであらう』と、トロツキイは讃嘆の語氣を洩してゐる。……

○

自分は、こゝに長々トロツキイのジョレス論を解説して來た。ジョレスに對してかゝる見方も存するといふことを、讀者に告げやうが爲めでもある。然しながら、自分の眞意は、別にかゝるジョレス觀を態々この機會に讀者に紹介しやうとしたのにあるのではない。況んや、彼の觀察批評の當否をこゝで討檢して見やうとしたのにあるのではないことは勿論である。自分の眞意は寧ろ他に存する。それは、巴里へ來て間もなく、自分の親しく見聞した出來事を語るのに、偶然讀んだこのトロツキイのジョレス論と結び付けることを、至極便宜と考へたからである。新しく見聞した出來事のその一つは何か？文豪エミール・ゾラの銅像除幕式のことである。その二つは何か？共産主義者の示威運動のことである。なほ、これに續いて話は更に多岐に亘るつもりであるけれど、それは追々と述べることとしたい。

エミール・ゾラの銅像除幕式をこれから語り出さうとするまへに、前記のトロツキイのジョレス觀の末尾の、ジョレスがゾラ等と竝んで力士型に屬するとなした章句を、もうすこし讀み續けて行くことが必要である、そこで、トロツキイは、ジョレスが文豪ゾラとは、特に類似せる型なることを、說いてゐるからである、

トロツキイは言ふ。ジョレスの雄辯が現代、否恐らく古今を通じての最も強力なるものであつたといふ理由は、何處にあるのか？それは、彼が、所謂演說家ではなかつたことにある、彼は、雄辯術なるものを内質的價値のないものであるとし、單にそれを手段視してゐた。彼は、雄辯術を立ち超えてゐた。工匠がその道具以上に構へてゐるやうに、彼は常にその演說以上に位してゐた。今、ゾラを見る。彼は、元來は自然主義の人生不即不離（アムパシビリテ・モラル）的態度から出立した一藝術家であつたが、ドレファース事件に際會するや忽ちかゝる態度から

覺醒して、霹靂にも比すべき『我告發す（ジャキューズ）』の激語を公にするに到つた。彼の性質には、强大なる道德的勢力が藏匿せられてゐた。彼はそれを、かの巨大なる著作のなかで、吐露しはじめたのである。しかも、、この力こそは、技術（アール）よりは更に廣大なるものであつた。それこそは、破壞し且建設する『人間的』勢力に他ならなかつた。この點で、ゾラは、ジョレスと全くその類を等しうする。………から見て來たトロツキイは、ジョレスの雄辯の底をなしてゐるものを、ゾラの小說の底をもなしてゐると感ずる。『行爲の意志（ラ・ヴォロンテ・ダクシオン）』こそ、實にそれである。――

　このエミール・ゾラの銅像除幕式といふのが、巴里はアヴェニュ・エミール・ゾラといふこの文豪の名に因んだ町のある廣場で行はれたのは、六月の末近い、自分がこの都へ着いて程ない頃のことであつた。恰度それは、長い間の佛國政界の紛擾も漸く型が付き、現首相エリオ氏を主班とする左黨內閣が成立した日の翠くる日の朝のことであつた。

　會場は群集の山をなしてゐた。ドレフュース事件で世界の端までその名が知れ亘つたと言つていいドレフュース大尉の年老いた姿までが、そこに見られた。『予告發す（ジャキューズ）』の著者に對する厚い感恩の心持からであることは、言ふまでもなかつた。生きた歷史がそこにある！　皆は同樣の思ひで銅像を仰いだ眼でこの老人の姿をも眺めた。

　やがて、豫報されたやうに、新首相エリオ氏の恰幅のいい精力に充ちた姿と、精悍な素朴な然し愛嬌をたゝえた容貌とが現はれて來た。

　氏は、總理大臣の印綬を帶びて、先づ第一次にかゝる集合のなかに姿を現はしたのが、この一文豪の除幕式だつたのだ。それだけでも、遠く日本から來た遊子には、この國の政治家の、昔ほど異樣なる行動が、驚駭の種ともなる。が、それ計りではなかつた。エリオ首相は、この式典の開催者側の懇請に依つて、遂に銅像に面して豫ねて設けられてゐた演壇の上に立上り、わが『ナナ』の著者の文學的功績に關する彼一個の觀察を、滔々と說き初めたのではないか！

　自分は、今こゝにその演說の內容を紹介しやうとはしない。たゞ、一國の總理大臣ともあらう人が、しかもその就任の日の翠朝早々、かくのごとき青天井の下で行はれたる一文人の銅像除幕式に臨んで、一場の講演、――それも純然たる文藝講演を試みたといふことの、我等日本人にとつては、尠なからず『突飛さ』の極みであつたといふことだけを、記錄して置くに止めやう。

　かゝることを書いた序に、これと恰好の對照をたすも一つの

『突飛さ』の事實を、こゝに語ることを自分に許して貰ひたい。

エリオ内閣は人も知る如くボアンカレー内閣顛覆後に於いてといふよりも、顛覆する爲めに現はれた内閣である。而してこの一方エリオ内閣が急進社會主義的内閣であるに反して、他方ボアンカレー内閣が保守國家主義的内閣であることも、今更言ふまでもなく人の周く知る通りである。而して、現首相エリオ氏が前記のエミール・ゾラの銅像のまへで文豪に對する讚頌の言葉を喋つてゐるとき、一方前首相ボアンカレー氏は、何をしてゐたか？　多少時日は後になつてゐる。が彼も亦、ローレンは首都メッツに赴いて、これも滔々一場の文藝講演を遣つたものである。昨年物故したこの國の小説家でモーリス・バレスといふ人がゐることは、人々の知る通りだ。この人の作品に『コレット・ボードッシュ』といふ、可憐なるローレンの少女を題材にした秀れた作品があることも、これ亦知る人は知つてゐやう。(確か、新城和一氏の譯で、日本でも出版されてゐたやうに記憶する。)この作品を抑々バレスが構想したのは、このメッツの町のある古風な宿屋の窓側でであつたのだ。彼は、この宿屋の窓から、やがて作品にあらはるべき可憐なるメッツ娘が、向ひの家に起居してゐるのを親しく眺めたのであつた。この文豪を偲び、この不朽の傑作を記念しやうとして、メッツの市民は、この由緒ある宿屋のまへにバレス自身の銅像を立てることゝとしたのである。ボアンカレー氏の臨んだのは、實にこの銅像の除幕式に他ならなかつた。氏は、この講演を遣るに、一々『コレット・ボードッシュ』の章句を援用しながら、或はバレスの文藝的天禀を今更に追慕し、彼の愛國的至情を回想し、さてはこの小説の傑作なる所以を特に力說して行つたのであつた。おゝ、それが、前首相、前大統領の經歷を持つた人の講演であつたのだ！　保守主義の政治家と言はれ、軍國主義の鼓吹者と非難されてゐた人の遣つた講演であつたのだ！　今を去る十年餘り、時の『風流宰相』西園寺公爵が文學者を一夕會食せしめたことをもつて、未だに文學者の光榮であつたかのやうに追記してゐる遠い日本から來てゐる自分たちにとつて、かのエリオ氏と言ひ、このボアンカレー氏と言ひ、何といふ『突飛』なることを敢てする政治家であることであらう。

話を横道から、最初のゾラの銅像除幕式の方に戻さう。

エリオ氏の演說に次いで、二三の人の演說があつた。そうした演說を聽いてゐると、何れも擧つてゾラを人道主義の爲めの勇敢なる鬪士とし、さては自由と平等との爲めの熱烈なる使徒として、讚頌の言葉を惜むことなく與へるのであつた。『世に眞

實にも優して美しきものなし』と言つた彼の言葉が、『世に正義と人道との爲めの事業にも優して高き事業あることなし』と言つた彼の言葉が、屢々人々の口から出た。人々は、ゾラを小說家、藝術家としてではなしに——否、それをば立ち超えた一個の宏大なる人道主義者として、見やうとした。それは、トロツキイのゾラを語る言葉通りであつたのだ。全く人々はゾラの『行動の意志（ラ・ヴォロンテ・ダクシオン）』を語り、讃へ、激勵し合つてゐたのであつた。

が、トロツキイがジョレスを語つてゾラを持ち出して來たとは逆に、こゝでは、人々はゾラを語つて何時かジョレスを持ち出して來たものであつた。ゾラが小說で『行動』した所を、ジョレスは演說で『行動』したといふのであつた。二人の社會正義に對する解釋と社會理想とに對する確信とは、些かも軒輊するものではないといふのであつた。ドレフユース事件を劃紀として、この二つの名は佛蘭西第三共和國の最も正當にして熱烈なる代辯者の名に他ならないといふのであつた。……

自分は、この邊でゾラの銅像除幕式に關する筆を止め、共產主義者の示威運動のことを書き出さねばならぬ。

○

今から數へるともう四年餘りにならうか。初めて自分が倫敦の土地に足を踏み入れた時、あの人出の多いトラファルガル・スクェアで、圖らずも共產主義者の團體が赤旗を翳して堂々大道演說を試みてゐるのに逢著し、すぐ近くにこ〳〵顏で拱手してこの光景を見物してゐる巡査の姿と眺め合して、日本を出て來て間もなかつた胸の中に一種異樣の感想を抱かせられたものであつた。が、それから四年も經つた今日、假令眞晝巴里の眞中で、共產主義者が幾許多く示威運動して步かうと、今の自分にとつては、さして異樣の感想を抱く種とはならぬ。それを、態々その示威運動を見物する爲めにそこに足を運び、又た、今日からして態々當日の記事まで書き出さうとしてゐるのは、特別の理由がなければならぬ譯である。勿論、特別の理由がある。その理由がまた、トロキイの前記のジョレス觀と關係したものであると言ひ得る。

佛蘭西の共產主義者は、英吉利の、はた日本の共產主義者も同樣、第三インターナショナル本部に屬して、言はゞ莫斯科の支配の下にあるものであることは、言ふまでもない。そして、第二インターナショナルの連中（各國で社會主義者を名告り若くは社會黨に屬する殆んど全部の者）を眼下に見下し、前記トロツキイの所謂『モニユーマン』視して冷罵嘲笑些かも憚る所

がないのを見るのである。

然も、この第三インターナシ・ナルの領袖トロツキイが稱んで『第二インターナシ・ナルの最も大いなる代表者』となし、更に『社會改良主義者』となし、社會主義者と言ふよりも蓋ろ『民主主義者』であるとなし、理想主義者といふよりも蓋ろ『空想家』であるとさへなしたジ・レスその人の爲めに、巴里の第三インターナシ・ナルの諸君は、盛大なる示威運動を催して、その遺業を慕ひ、兼ねてその黨派の威勢を附けやうといふのである。

この一見矛盾とも感ぜられる現象は、よく究めて見れば實は矛盾ではないのであるか？ それとも、矛盾の有無には一向頓着することなく、ひたすらジ・レスの人格事業に憧憬し、さては、單にジ・レスの盛名を藉りて自己の黨派の大を圖らんとするに出でたのに過ぎないのであるか？ 自分がわざわざ當日その示威運動を見るべくトロカデロの廣場まで足を運んだといふ理由は、この不審を解く一助ともしやうが爲めに他ならなかつたのである。

七月の下旬、晴れ渡つた日曜日の午後である。トロカデロのあの巨大な建物を前にした廣場を中心として車軸のごとく放射する大通りには、夫々胸のボタン・ホールに赤章を飾つた數千を以て數へ得る人々が群れ集つてゐた。革命を意味する赤色の旆旗が、所在に飜つてゐた。『戰爭に對する戰爭！』『ブールジ・アを葬れ！』『プロレタリア獨裁萬歲！』『一般大赦！』『ソヴイツト政府即時承認！』——かうした文字を大きく墨書した張紙を高く掲げてゐるなかで、ジ・レスの言葉として『戰爭より蓋ろ革命を！』といふ標語の張紙が一段と眼に付く。『社會謀反！』と書いてあるのは、言ふまでもなく、現在の左黨內閣がブールジ・ア階級と苟合し、眞のプロレタリア階級に對し裏切りをせるものなることを宣言したものに他ならない。……

……

廣場の中央にある音樂堂の附近からこの物々しい光景を眺めてゐた自分に、一枚のチラシを渡して行つたものがある。見ると、それはこの示威運動の爲めに作られた、威勢のいい宣言書樣のものだ。眼を通して行くと、果然、ジ・レスが如何に共產主義者たる『我々』のものであるかが、次のやうな言葉で述べられてゐるのを見出した。

ジ・レスには幾種もある。最初の出發點は共和民主主義にあつた。が、最後には全的革命の觀念にまで到着した。世の滔滔たるジ・レシストの連中は、この最初の段階にゐるジ・レスを眞のジ・レスたりと見做して渴仰する。然し、一九一四のジ

ョレスの思想は、か丶る連中の思想を全く裏切つてゐる。『共產主義者及び革命論者こそ、彼等のみこそ、眞のジョレスが我等に屬すると公言し得る權利を持つものである。』

一九一四年のジョレスの思想が、如何なるものであつたかの實例として、いくつかのジョレス自身の言葉が援用せられてゐるその一つを次に書かう。——

『……歐羅巴の現時の狀態では、社會主義の平和的實現を無條件で希望することは、許されぬことである。社會主義のなかに先づ最初に這入つた民衆は、狂亂じみた諸々の反動が己れに向つて襲來することを見るであらう。從つて、若し彼にして、他國の勞働階級が各自組織を固め蹶起し得るの餘裕を與へんが爲めに、自身に銃を握るの用意なからんには、砲彈に對しては己れも砲彈をもて應ふるの用意なからんには、彼等は容赦なく失はるるに到るであらう……。』

こゝに『完成せる』ジョレスの思想がある。こゝに、瞑目の前日に於けるジョレスの思想がある。こゝに、社會改良主義者たる『誤謬』民主主義者たる『錯覺』とを惜げもなく拋棄して憚らなかつた勇氣あるジョレスの思想がある。——から、文章を結んでゐるのであつた。

かうした言葉が、將して共產主義者諸君の解釋するやうに、ジョレスの『共產主義改宗』を證據立てるに足るものであるか否かの問題は、暫らく措く。たゞ、このチラシを讀み終へた刹那に、ゆくりなく自分の腦裡に浮んだ一つの記憶があつた。それは、——共產主義者の示威運動とは大分方面違ひの話になるが、——樂聖ベートーヴェンが『佛蘭西人』であるといふある佛蘭西人の說である。

自分が初めて佛蘭西の土地を踏んだ年、——正確に言へば、一九二〇年といふ年は、ベートーヴェンが獨逸はライン河畔の小都會ボンに產聲を擧げてから、恰度二百五十年目に當つてゐた。何日もならば、巴里中のありとあらゆる音樂會は、前振れ賑はしく先を爭つてこの紀念演奏會を盛大に催したに違いはない。所が、一九二〇年と言へば、かの未曾有の慘虐戰が濟むだ計りで、それこそ未だ血潮も乾き切らぬ頃のことだ。獨逸のものと言へば、袈裟まで憎いと、千人が千人思つてゐた頃のことだ。ベートーヴェンが獨逸人種だつたといふことは、當時の樂壇及音樂愛好者にとつては、言はゞ致命傷も同樣であつた。彼等は右顧左眄徒らに焦燥しながら、この二〇年といふ年の過ぎ去らんとするのを拱手傍觀してゐるのみであつた。

この時に當り、突如と火花を切つてこの異樣なる緘默を破つたのは、實にエトワルの凱旋門に近いサル・ワグラムで催され

たセエス州の社會主義同盟の有志者から成る『ベートーヴェン祭』の大音樂會であつた。彼等は『國家』に執着する偏狹さを遺憾なく物語つてゐるこの錢獸を嘲笑した。『國家は常に諸君等に屬する。而して、人道は常に我等に屬する！』かくして彼等は、恰かも革命の凱歌を奏するが如くに、あの『第九シムフオニー』を大サルも破れん計り高らかに演奏したものであつた。

社會主義者のこの勇敢なる鬨の聲に明らかに引ずられた形で、ぽつぽつとこの樂聖の生誕記念音樂會が（遠慮がちながら）各所で開かれはじめたのは、その年もずつと暮れに押し迫つた頃であつた。その頃だ、ベートーヴェンは、決して『獨逸人』ではない、あれは擬ふ方なく『佛蘭西人』である、といふ驚くべき説が現はれたのは。『佛蘭西人』たるベートーヴェンの、その生誕記念演奏をこの巴里で遣るのは、一向不思議はないではないか？獨逸憎しとするこの佛蘭西人上下を通じての熱烈なる愛國心に對し、『獨逸人』に非ざるこの樂聖を記念することとは何等牴觸齟齬する所はないではないか？――といふ結論が、自然そこから引出される所のものなることは、更めて言ふまでもあるまい。

その説に言ふ。ベートーヴェンはその肉體こそ獨逸に享けたれ、（然もそれは純粹に獨逸ではない。彼の血は多くのフラマンの血を交へてゐる。）その精神、その思想、その憧憬は、見よ！悉く佛蘭西である。彼の『英雄シムフオニー』は、佛蘭西の天才ナポレオンに對する渴仰から生れ出てたものであることだけでも、彼の思想の傾向を推測し得る。彼が生地ボンを去つて南方墺國、ウインに赴いたのは、軍國獨逸に對する無上の憎惡の念からであつた。墺都にあつても、機會のある都度彼はここに滯在する佛蘭西人と交歡するのを憚らなかつた。彼の作品『レオノラ』（だつたと自分は記憶する。或は『フイデリオ』だつたかも知れない。）がそこで初めて上演された折、彼は誰よりも先に先づこの都に滯在する佛蘭西士官たちを招いて、その忌憚ない批評を聽いたものだといふ。それ計りではない。彼が老と貧と病とのなかに淋しくその最後の息を引き取らうとした刹那に、彼の口から洩れ出た言葉は、『あゝ、南部佛蘭西へ！』といふ數語だつたといふではないか？ベートーヴェンを目するに『佛蘭西人』であるとなすことは、この點に於いて決して無理ではあるまい。――と、論者は言葉を結んでゐるのである。

かゝる論者の説を目して、直ちに、徒らに時勢に阿る奇矯なる僻說であるに過ぎないとなす者は、或はこの共産主義者たちのジョレス讃仰の所說を目しても、同樣の觀察を下すかも知れ

ない。然し、自分は、ベートーヴェンのなかに確かに佛蘭西的なるあるもののあるのを感じてゐるとともに、ジョレスの思想のなかに革命主義を以て稱ばれ共產主義を以て名付けらるるあるものが決して存在しないとは到底斷言するを得ない者である。一面の、――否半面の眞理は、そのいづれの論者にも正しく存する。――

自分がぼんやりと上の如き考に耽るともなく耽つてゐる間に、行列は徐々に動き出した。方々の列から湧き上る歌聲は、かゝる集合には附き物の革命歌『インターナショナル』の合唱である。赤旗は、夏の風に翩翻とひるがへつてゐる。蓋し、一種の壯觀たるを失はない。

行列は、あの宏壯美麗なアンリ・マルタンの通りをボアの公園の方角さして下つて行くのである。この通りは、巴里を見た誰でもが知つてゐるやうに、巴里の中でも最も美くしい通りの一つで通りの兩側はいづれも所謂ブールジョア階級の富裕なる人々の住宅から成つてゐる。しかも、今は夏の眞中のことゝて、これ等の通りに住む人々は擧つて海や山へ暑を避け、現在そこに居る者は、留守居の門番を除いては殆んど無いと言つてよい程である。それだけにこの兩側に立ちならぶ宏壯なる無人の邸宅と、街路を埋めて行進する民衆運動とは、一種異樣なる對照を形作つて、ある強い感銘を、傍人に與へずにはをかぬものがあつた。たまに、これ等の住宅に居殘つた人々が、窓やヴェランダやに姿を現はしてゐると、行列から忽ち強い口笛の音や敵意に充ちた叱聲やが湧き上つた。『これだぞ、これだぞ』といふやうな言葉を口にしながら、首を切る眞似をして、高い窓の方を睨む者なぞもあつた。

アンリ・マルタンの通りがボアの公園に突き當る手前にある小さな廣場が、ジョレスの銅像を持ち出して、夫々人々の敬禮を集め、續いて行列が自然に散解する場所になつてゐた。ジョレスの生前住つてゐたリュ・ド・ラ・トゥールといふ狹い通りは、すぐその廣場の近くにあつたのである。銅像の側には、共產黨の代議士のカシャン氏やマルチー氏が、一味の領袖連と一緒に行列を點檢でもするやうな顏附をして佇立してゐた。莫斯科の共產第三インターナショナルの本部から態々送つて來たといふ眞紅の帛地に金字を美くしく縫ひ附けた旌旗が、一段と眼立つやうにその銅像の頭の上に擴げられてゐた。

幾千といふ人が、一々帽子を脫ぎ、襟に附けた赤章を捥ぎとつては、銅像の前に投げながら暫く瞑目して行くのだから、容易のことではない。自分は、行列が解散するといふても、餘りに無雜な示威運動なので、若しかしたらあとで何か起るかも

知れぬといふやうな心構へから、暫くの間立つてこの長い長い禮拜の連續を眺めてゐたが、一向にそれらしい出來事の起りさうな氣配はなかつたので、諦めて歸路に著くことにした。

不圖見ると、行列から解放された連中は思ひ思ひに三々五々仲間を作つてはボアの公園のなかを吞氣さうに歩いて行く。氣が附いて見ると、さうだ、あの示威運動の際に、一人だつて嚴めしい巡査の姿を見受けることはなかつた。何といふ無事で、靜穏で、秩序立つて、ひどく溫和な共產主義の示威運動であつたことか！日本ならば、中學や高等學校やの遠足か行軍でさへ、これよりはもつと『勇敢』であり『元氣』があり『活氣』があるー

○

共產主義者の示威運動があつて三四日經つと、七月卅一日だ。ジョレスがカフェ・ドュ・クロアッサンで暗殺された日がそれだ。今年はそれから恰度まる十年目に當る。共產主義者の所謂『ブールジョアと苟合せる』『社會謀反』者たる現政府は、この紀念すべき日を特に選んで、ジョレスの遺骨をパンテオンに改葬し、國家の偉人としてこれを祀らうといふ趣旨の法律案を、上下の兩院に提出した。兩院とも最大多數を以てこれを可決した。かくして、ジョレスは、ルッソー、ユーゴー、ゾラと相並んで、この山上の壯麗なる殿堂に神と祀られることとなつたのである。

自分は、不幸にして、この紀念すべき日の議場を親しく目擊することはできなかつたが、政府黨の機關紙『ル・コーティディアン』紙に依つて、その當日の光景を見るが如くに知ることが能きた。一つには、如何に今日の佛蘭西がジョレスに對して深い渴仰の念を有するかを今更に知り得るとともに、一つには、共產主義者諸君の揚言に對して社會民主義者諸君も負けてはゐずにジョレスが已れに屬することを高調するその『奪ひ合ひ』の興味深き現象をも知り得るが爲めに、こゝに當日の下院の光景を簡單に書き記すことにしやう。

所管廳たる文部大臣フランソワ・アルベール氏よりジョレスの遺骨をパンテオンに埋葬したき旨の議案を提出しこれに關し即時討論せられたしと申出づるや、先づ演壇に立ち上つたのはロカン氏である。氏は、ジョレスの偉大を、その『國家に對する愛を人道に對する愛から分離しなかつた』といふ點に見た。從つて、ジョレスの遺骨か、かの人道の闘將ヴィクトル・ユーゴーと、かの祖國の愛の爲めに命を賭した大カルノーとの間に埋められるといふことは、實に『正しい』ことであると、結論

した。

　次に立つたのは、モーリス・ヴィオレット氏だ。氏は、ジョレスの抱いてゐた深い思想を說明してから言ふ。――『分裂を阻止し、矛盾を消滅せしむる高き調和をば發見すること、人間を壓抑し遂に之を戰爭のなかに投入する運命より人間を引き取ること、德性を、――否『神』自身をば創造すること、これこそ、この驚嘆すべき天才、この偉大なる魂の、不斷の念慮に他ならなかつたのである。』續いて氏は、ジョレスを『耶蘇傳』の著者ルナンに比較して、ジョレスが如何にルナンを愛したかを說いた。『蓋しこの二人は何れも、人間の生存は偉大にして持續せる義務なることを觀念してゐたからである。』

　ラディカルの黨派を代表してカザール氏が立ち上つた。『今や、戰前にあつた彼に對する論難批評は恰かも塵埃の渦卷同樣に四散してしまつた。ジョレスは今は最も偉大なる者のなかの偉大なるものとして現はれてゐる。……哲學者として、辯舌の士として、詩人として、彼は實に、デモステネス及びシセロの雄辯よりも立ち勝つてゐる！』人は屢々ジョレスを非難するに夢想家でありユートピストであると言ふ。然し、夢想家及びユートピストこそ、人類の思想の偉大なる潮流を決定するものである！』カザール氏のこの言葉は、滿場の拍手を惹き起した。最後に氏は、ジョレスの私生活が如何に簡素であつたかを說いて、世の多數が滔々快樂と富とに向つて狂奔する今日、一の勝れたるモデルに他ならないと結んだ。

　次に演壇に立ち上つたのは、當の文部大臣だ。フランソワ・アルベール氏は、ジョレスを讃嘆するに『デモステネスの氣息と、ミシュレーの博大と、ヴィクトル・ユーゴーの想像』を併せ有するものとなした。續けて氏は言ふ。――『ジョレスは、社會主義が人々に幸福を與ふる最も確かなる方法なることを見て、佛蘭西共和國に融け合はせるにこの社會主義を以てした。……彼にとつては、善良と知識と眞理とは、精神と心臟との同一なる渇望のなかに融け合つてゐたのである。』

　社會黨の名士レオン・ブラム氏が立ち上つた。彼の聲は、顫へ勝ちだつた。淚がその聲のなかに明かに感ぜられた。『……ジョレスは、我々の首領であつた、我々の先生であつた。……』感動の爲めに阻められ勝ちの彼の言葉は、却つて肺腑からそのまま湧き上つたやうに、人々の耳にひゞいた。『我々は彼に屬した。彼は我々に屬した。然し、今や我々社會黨員は、その彼を、國民及び歷史へ向つて解放する！』

　やがて討論終結となり、政府の提案に對する投票が行はれた。可とするもの、實に五百四十餘名に達したるに對し、こ

を否とするもの漸く百名を算するのみであつた。

續いてこの法律案は上院に廻附せられ、こゝでは僅に四五名の反對ありたるのみで、殆んど全會一致も同樣の有様で可決せられ、こゝでジョレスの遺骨のパンテオン改葬は、滯りなく確定したのであつた。

○

ジョレスのパンテオン改葬！自分にはその當日の來るのを待ち設ける理由が、單にジョレスの生涯と事業とに對する日頃からの深い興味から計りではなしに、別にあつた。それは、今から十何年かまへ、かのエミール・ゾラの遺骨がパンテオンに埋葬せられた折の騷ぎの話が、自分の古い記憶のなかにあつたからに他ならない。

その折の騷ぎの話といふのは、當時洋行して歸られた故上田敏博士の口から聽いた所のものであつた。折よく巴里滯在中にこの埋葬の盛典が擧げられたので、博士は親しくこれを目擊することができたのであつた。博士の話に依れば、この祭典に際して、尙ゾラ反對の者頗る多く、遂にこれ等の者は（主として大學生を中心として）寄り寄りに行列を作り、パンテオンを中心とせる羅甸區（カルチエ・ラタン）の通り通りを、『ゾラをやつゝけろ（コンスピュエ・ゾラ）！』"Conspuez Zola" といふ言葉を口々に唱ひながら、練り歩いたといふ。このゾラ反對者の示威運動に對抗して、ゾラ贔負の者も（等しく大學生を中心として）夫々に團體を作り、『ゾラ萬歲（ヴィヴ・ゾラ）！』"Vive Zola" の言葉を合唱しながら、通りから通りへと練り歩いたといふ。講壇の上でこの光景を話してゐらるゝ故博士のあの若々しい容貌と音聲とは、その話の内容とゝもに、十數年を經た今日でも尙ありありと自分には思ひ浮べられるのである。……

ゾラのパンテオン埋葬は、全佛蘭西を二つに分裂さしたと言つてもいいあのドレフュース事件の後間もない頃のことゝて、上田博士の話のごとく、ゾラ黨とゾラ反對黨とが兩々相對峙して威勢を張りながら町中を練り歩いたといふやうな騷ぎを惹起したことは、別に不思議ではなかつたと言つていい。

そのゾラのあとに、今度久し振りでジョレスがパンテオンに祀らるることとなつたわけだ。ジョレスは、共産主義者諸君の言ふがごとくよし共産主義者ではなかつたとしても、また社會黨諸君の言ふがごとく『我々の首領、我々の先生』であつたといふ計りではなくして、實は國家それ自身、さては人道それ自身の偉大なる使徒であり代辯者であることが確かであるとしても、押並べて保守的の色彩の強い、且つ所謂ブールジョア氣質の橫溢してゐるこの國に於いて、この都に於いて、何等の騷ぎ

もなくこの祭典が遂行されるであらうとは、自分にも考へられなかつた。ゾラの時ほどのことはないにしろ、何等かジョレス反對の意味の示威運動は、屹度起るに相違ないやうに思はれた。ゾラの時の騷ぎも、考へて見れば實に立派な歷史的の縮圖である。當時の佛蘭西の思想史がそのまゝに一の模型となつてそこで展開してゐる。自分にとつて、騷ぎ自身が毛頭面白いものとは感じられないが、かゝる意味では、その騷ぎを見ることも一つの大いなる觀察である、と考へざるを得なかつた。旁々自分は、初冬にはいつて學校が始まりまた議會も再開せられた上、できるだけ賑やかに行はうといふそのパンテオン埋葬式の當日を、ひそかに待ちのぞんでゐたのであつた。

そのパンテオン埋葬式が、愈々十一月の廿三日を以て行はれるといふことが、官報で發表せられたのは十月の初旬のことであつた。この折、思い設けぬ凶報は、人々の耳朶を打つた。それは、他ならぬアナトール、フランスの訃報である。『佛蘭西の庭園』とまで稱ばれるトウーレエーヌは、わけても風光の明眉なるトウールの町に程近い靜かな別墅で、『燭の火の消ゆるがごとく』苦しみもなく、その最後の息を引き取つたといふのである。

自分は、この訃報を新聞の上で知つた日の夜、折柄買つて來て間もなかつたシャルル、モラス氏の新著『アナトール・フランス。政治家及び詩人』と題した冊子を書棚から取出して、眼を通して見た。シャルル・モラス氏は、恐らく數年前島崎藤村氏の佛蘭西紀行の文章に依つて始めて日本にもその名を傳へられた才氣に富める詩人である。(但し、島崎氏は王黨機關紙『アクシォン・フランセーズ』の主筆としての、政論家としてのモラス氏を書いて、詩人としての、さては文藝批評家としての氏には全く及ばなかつたやうに記憶する。)同時に、政治の方面に於いては極右黨の思想を代表する最も保守的なる論客である。その氏が社會主義者を以て自ら任じて憚らないフランス氏を論ずるのは、嘗て氏がフランス氏に師事したことがあるばかりではなく今も尙深き友情と理解とを彼に對して有するといふだけに、讀者には特に興味がある。フランス氏を小說家としてにはあらでその壯時の作たる詩集『黃金の詩（ポエム・ドレ）』や『牧歌と傳說（イディル・エ・レジャンド）』に現はれたる詩人として、その特質を論じてゐるモラス氏の議論は、文藝を談ずるものには極めて興味ある讀物ではあるが、こゝにはそれは割愛して、たゞこの冊子の後半を埋めてゐるフランスの政治思想に關するモラス氏の考察だけをこゝに紹介するに止めることとしやう。

フランスが約廿五年以來(即ち、ドレフユース事件以來)社會

主義者を以て自ら任じてゐることは周知の事實である。否、最近はその社會主義者たるにも飽き足らずして、遂に革命主義者若くは共産主義者を以て自ら處するの有様であつた。レニンの事業を、留保なしに讃頌したのも、實に氏であつた。佛蘭西共産黨の成立に際して、即座に協力申出での電報を送つたのも、實に氏であつた。

この社會思想の極左黨の役割をつとめてゐる氏に對して、論者は實にこれ王政復古を力説する極右黨の思想を代辯するモラス氏であるから、この論文は一にフランスの非を誡むる底のものかとの推測が、先づ開卷に當つて何人の頭にも浮び上るであらう。自分も、その心構へでモラス氏の言葉を讀みはしめた。處が、それはまるで的外れだつた。モラス氏は、フランスを目して、依然『我々に屬する』と言ひ、『我々の先生』だといふ！『最右黨の思想家』だと斷言する！

モラス氏の説にいふ。その性情その趣味その教養に於いて、到底左傾思想と共鳴する筈はなかるべしと思はれるフランスのこの社會主義（若くは共産主義）改宗は、世人をして其動機眞意に付いて種々揣摩憶測せしめる。ある人は言ふ。彼の弱き性格が、外部の影響を拒み得なかつた爲めであると。然し、フランスは決して弱い性格の所有者ではなく、その愛するものと愛せざるものと、その欲するものと欲せざるものとを、常に明確に區別してゐた人である。例へば、ドレフュース事件以來引續いて彼は、ジョレス竝びに數多の社會主義者たちと密接な交渉を續けて來たのであるが、かゝる際にあつてなほ『神々は渴く』（レ・ディユ・オン・ソワフ）（佛蘭西革命を舞台にしたる小説で、革命に對して多量の皮肉を用ゐてゐる。）のごとき作品を書くのを憚からなかつたのを見ても、容易に氏の性格が窺知できやう。然らば、氏の社會主義改宗の眞の動機は何か？ 自分は、氏の想像（ファンタェジン）に對する愛、絶對（ロトリック）に對する愛が、結局氏をそこに追ひ遣つたものと確信する。恐らく、この十九世紀の人間は（フランスを指す）、社會主義者及び無政府主義者の連中を、『右方』にあるブールジョアよりももつと親しみ易く且つもつと面白いと感じたに違ひはない。世人は、氏が詩人として己れを現はしてゐる場合に、屢々哲學者としてこれを判斷してゐることが多いが、それは明かに誤謬で、この場合なども、氏は單に詩人として氣儘に動いたものに過ぎないものと見るべきである。それに氏は、一切の上にそれぞれの見解を有してゐる。しかも、氏のこの見解から常に最も多く教訓を享くるものは、革命主義者の連中ではなくて、むしろ秩序を重んずる黨派に屬する者等なのだ。……從つて、彼が革命主義者の黨派（思想といふよりはむしろ黨派）に同感を有しそれ

に加入する旨を宣言した所で、吾人を大して驚かしはしない。彼の最も美くしい章句は、常に、守舊的なる章句にあるのは一向變りはないのであるから。……彼の大いなる愉悅は、捉はれずに諸事物を考察する所にある。……フランスこそは、反(コントル)革命(レヴオリユーシオン)のメートルと稱することができるではないか？

かう論斷して來たモラス氏は、以下のごとき警句を以て、その文章を結んでゐる。

『……予は確信する。フランス氏は、確かにカルル・マルクスよりは、モンテーギュを、ラ・ブリュエールを、さてはロンサールを繙く場合の方が、遙かに多いに違いあるまい！』

モラス氏のこのフランス論は、ある點に於いては可成りに眞相を穿つたものであると言はれぬでもあるまい。自分は前に共產主義者のジョレス論を紹介し、また、ある佛蘭西人のベートーヴェン觀をも附言して置いた。このモラス氏の議論も、その行き方に置いて全くその軌を一つにしてゐることが感ぜられる。何とはなしにかうした偶然の符合に對して、自分は不覺微笑した。（なほ、モラス氏とは稍その理由を異にしながら、最後に到つて均しくフランスを眞の社會主義者さては革命主義者ではないと斷じたものに、今月（十一月）發行の『世界評論(ラ・ルヴィユ・ユニヴェルセル)』誌上のジャック・ルージョン氏の長稿『アナトール・フランスと革命』といふのがある。同好の士に一讀をすゝめる。）

が、フランス氏がその自然の性癖さては趣味教養から見てほんとうの社會主義者（若くは革命主義者）であつたかなかつたかの微妙なる問題をこゝで討檢することは暫く措く。彼自身の口から、己れは立派な社會主義者なることを幾度か直截に告白してゐるし、社會主義的の幾多の著書文章を頻りに公にしてゐるし、社會主義者の會合でも幾度か講演なぞをしてゐるし、加へて、街頭に於ける社會主義者の示威運動の先頭に立つたとさへもあるのだから、尠くも一般世人の眼から見て彼がれつきたる社會主義者であるとは、一點の疑がないと言はねばならない。

この社會主義の信徒が、一方に於いては近代を通じ且つ世界各國を通じての最も盛名ある文豪である。文學美術の保護獎勵といふことを不斷の政綱にでもしてゐるやうなのが佛蘭西歷代の政府だ。それへ加へて、今日は左傾黨を基礎としてゐるエリオ政府である。このフランスの訃報を、閑却する筈はない。折柄議會は閉會中だつたので、氏を國葬とする法律を制定發布するわけには行かなかつたが、その代り國帑を以てこの葬儀を盛大に擧ぐることに、文句なく極つた。十月十八日午后二時、氏の生家の存したセエヌの河畔ケー・マラケーはアカデミー・フランセーズのあの圓いクーポールの建物のあるまへの廣場に於

いて、大統領ドゥーメルグ氏、首相エリオ氏はじめ閣僚・將軍・議員其他朝野の名士綺羅を競ふて列席の上、その葬儀は美々しく擧げられた。

この日自分は、幸ひにして官の資格を以て大臣席と相隣りせる外交團席に身を置き、永く紀念せらるべきこの盛儀を親しく見ることが出來た。

香煙の立ち上る四個の香爐にかこまれた靈柩をまへに、未亡人となつたフランス夫人の黑衣姿を中心にして左右に居流れた數百の朝野の諸名士を、稍斜めに見下す邊に小高く演壇が設けられてゐた。ショパンやサン・サンスやドビュシイやの哀曲が、次々と或ひは管弦樂で或ひは男女の合唱の聲で美くしく奏せらるる間々に、數々の人々の哀悼の言葉が、この演壇の上から述べられた。先づ最初に演壇に立つたのは、青色の綾をもて美くしく飾られたアカデミー・フランセーズの制服を身に纒ふてゐる史家ガブリエル・アノトー氏であつた。續いて、文人協會(ラ・ソシエテ・デ・ジャン・ド・レットル)を代表して、同協會會頭ジョルジュ・ルコムト氏が、これもアノトー氏同樣白髮白髯の顏貌を、演壇に現はした。次には、人權同盟(ラ・リーグ・デ・ドロア・ド・ロンム)を代表して、同同盟の副會長をつとむるソルボンヌの教授ヴィクトール・バッシュ氏が、そこに立ち上つた。社會黨を代表して、政界の名士レオン・ブラム氏が、バッシュ氏に續いた。勞働總同盟(セー・ジェ・テイ)を代表して、同同盟副會長ジュオー氏が、あの巨軀を演壇に運び、雄常な然し沈痛な聲音で、故人の功績を說いた。ジュオー氏に續いて、下院議長パンルヴェ氏が立ち上り、故人の正義と祖國とに對する愛の强さを讃頌した。最後に、文部大臣フランソワ・アルベール氏が政府を代表して、約廿分にも亘る最も長き追悼の言葉をば、述べたてた。

かくして式は、二時間にして漸く終りを告げた。灰色に沈つた風の冷たい日の暮れを、偉人の遺骸を納めた柩は、セエヌ河畔からはるかヌイユの墓地さして、二三時間もまへから立ち續けて待つてゐる町並の夥しい人出の間を、靜かに通り行くのであつた。……

自分は儀場からの歸途、今聽いた數々の秀れた哀悼の言葉を胸に喚び起して見た。それは、僅かに一二の人の言葉を除き、殆んど總てはフランス氏の社會思想に對する讃詞であつたことに、今更らしく氣が附いた。まつたく、彼の文藝的功績だけを純粹に述べ上げたのは、アノトー氏とルコムト氏との二人だけであると言つてよかつた。わけてもジュオー氏やブラム氏やバッシュ氏やの言葉は、彼の社會主義的思想に對する最も明晰な同感と讃頌との言葉であつた。それは、文藝のためといふよりも、ある政治家のための葬儀と言つた方が、むしろ適はしい感

じまでされて來るのであつた。(さう言へば、この日から兩三日あとの『フイガロ』紙に、フェルナン・ヴァンデラム氏が『何故(プールコア)か?』と題して、別の點から、この葬儀を非難してゐる一文を公にしてゐる。その要旨は、一代の文豪の葬儀であるといふのに、當日肝腎の文學者は殆んど招待せられなかつたといふのである。そこに招かれたのは、政治家と實業家と軍人とアカデミシアンと外交官と……其麼のもので、文學者はほんの何人位しか出席できなかつた。といふのである。ヴィクトル・ユーゴーの葬儀の時だつて、ヴェルレーヌの葬儀の時だつて、アルフォンス・ドーデーの葬儀の時だつて、つい最近のモーリス・バレスの葬儀の時だつて、政治家や軍人や實業家やも數多く顔を出してはゐたが、それでも常に文學者の群がその中心をなしてゐた。今回のごとき、文學者の葬儀に肝腎の文學者を除外したやうな遣り方は、初めてである。といふのである。)

今、更にその社會思想に關する讚詞を回想して見る。そのなかに最も屢々繰返へされた言葉は、他ではない。フランスとジョレスとの間の交渉であつた。

ジュオー氏は、フランスがジョレスのごとく勞働者を愛する人であり、勞働者もこの二つの名――ジョレス。フランス。――を、常に等しき無限の愛情のなかに結び付けてゐると、說いた。ブラム氏は、また等しくフランスの名にジョレスの名を結び付け、更にゾラの名をも追想して、思ふにこの三つの名こそは、人道のため、正義のための、新らしき社會のための最も偉大なる燈明臺であるとなした。バッシュ氏は、フランスが社會主義を目ざしてその歩みを運ぶに到つたのは、實にジョレスの友情に充ちたる手の導きに依つてに他ならなかつたと、述べた。

ジョレスとフランス!そうだ。この二つの名は、これ等の人々が言つたやうに、確かに一つの連鎖を形作つてゐると言へやう。尠くとも、フランスが一九一九年の春『リューマニテ』紙に寄せた『ジョレス』の一文(其後パンフレットとして刊行されてゐる)を讀んだ人々には、これ等の人々の言葉が決して誇張ではなかつたと感ぜられるに違いあるまい。シャルル・モーラス氏のフランス觀を解說する勞を採つた自分は、こゝでフランス自身のジョレス觀を紹介して、この文章からフランスの心事を間接に討檢して見るのも、强ちこの際無駄な勞力ではあるまい。

フランスは、先づジョレスとは極めて親近のなかで、彼の素純と熱情とについて常に敬服したことから、その筆を起してゐる。彼は、柔和にして善良そのものだつた、と追憶してゐる。

彼の大いなる聲は、凄まじく鳴り亘るその響きをもつて世界をつゝんでゐたけれども、友人に對するや、誠に謙遜で温柔しかつたと、述べてゐる。

次に、フランスは、ジョレスの有する知識が、實に社會問題の廣汎なる區域を更に越えて、精神の行き亘る一切の事物のうへに及んでゐたことを、驚嘆してゐる。(あの博識博學を以て鳴つてゐるフランスが、かゝる讃辭を惜まなかつたジョレスの博大なる知識を、人は今更に想ひ遣るがいい！）大戰の始まる數週間前、フランスは、ジョレスをパッシイにある彼の自宅に訪ねたことがあつた。その時ジョレスは、古希臘の悲劇詩人ユーリピデスの作品を、原本のまゝ讀んでゐた所だつたといふ。——

續いてフランスは、ジョレスの熾烈なる愛國心に付いて說いてゐる。そしてフランス自身も亦ジョレスと均しく、祖國の愛と人類の愛とは、同一の心臟のなかに燃ゆるものであり、人類を愛し得ざる限りは、決して祖國をも眞に愛し得るものではないことを、明かにしてゐる。續いて彼は、ジョレスについて言ふ。——『ジョレスは、佛蘭西を愛した。彼は、彼女が正しくあり、平和であり、且つ強くあることを望んだ。祖國の安全といふことは、彼の偉大なる精神の最も不斷なる且つ最も強力なる憂慮に他ならなかつた。』彼が三年兵役法案に反對して、自己の創意に基く『武裝せる國民』(ナシオン・アルメ)を提唱したことは、何よりもよく彼のこの憂慮を現はしたものであつた。然も、見よ、過般の大戰に於いて佛蘭西を救つたものは、三年兵役制ではなくて、實に事實上の『武裝せる國民』(ナシオン・アルメ)ではなかつたか！ 天才は、豫言者であることは、常に不易の事實であると、フランスは述べてゐる。

續いてフランスは、戰爭の結果に對するジョレスの豫見の如何に正しかつたかを、半ば驚嘆とともに語つてゐる。ジョレスは、戰爭となれば結局佛蘭西は勝つであらうといふことを、明かに豫見してゐた。然も來るべき戰爭は、決して路易十四世若くはフレデリック時代のごとき諸王侯間の賭博でもなく、また奈翁時代のごとき大なるアヴァンチュールでもなくして、實に今日の工業的對峙より生ずる、全國民をその渦中に投ずべき大動亂であることを、豫見してゐた。而して、この結果は、國民の大部分を占むる勞働者階級の自覺となり、蹶起となり、遂に鮮血の道を經て、『平和インターナショナル』の境に達すべきことをも、知悉してゐた。然も、かゝる火の手は先づ戰敗諸國のなかに擧がるべきも、結局は戰勝諸國の上にも燃燒し來ることは疑ふの餘地がないことを、說いてゐた。

ジ・レスの豫見は、悉く的中した。然し、フランスの最も敬服する所は、ジ・レスがその豫見にも拘はらず、――換言すれば、彼が、戰爭が實に己れの黨派の爲めに利益なる役割を演ずべきことを明かに豫見し居りたるにも拘はらず、彼が遂にその生命を失ふに到るまで戰爭の防止に努めたといふ點であつた。社會主義は彼の中心思想であり、社會主義の傳播・實現は彼の最大なる希求であつたにも拘はらず、戰爭といふ人間相互の殺戮に依り、その目的を達するといふことは、彼の些かも忍び得る所でなかつたといふ點であつた。

かくしてフランスは『平和の如く美くしき』彼の魂が、その平和とともに失はれたることを嘆き、この上は願はくは、『その魂が、無上の燿きをもて我々のなかに再生の平和とともに再生し、彼の燦ゆき思想が我々の辿り行くべき途を示す』に到らんことを望み、最後に全文を結ぶに、以下の如き感動に充ちたる言葉をもつてしてゐる。――『生涯の終りに當り、彼より更に命長らうことを惱ましく思ふ予は、彼の例に倣ひ、わが最後の言葉の、正義と愛との言葉たらんことこそ、ひたすらの願ひである！』

○

越へて十一月廿三日豫定のごとく、ジ・レスのパンテオン改葬の盛儀は擧げられた。

前日の長閑な小春日和とは打つて變つて、この日は寒さの厳しい霧の深い、如何にも冬の眞中を思はせるやうな日であつた。折柄日曜日に當つてゐたので、自分は家族を連れて朝のうちにオートイユの家を出た。

コンコルドで電車を下りると、最早あちらこちらに人々は集つてゐた。正午頃から始まる葬式の行列に加はらうといふ人々である。廣場に續くポン・ド・ラ・コンコルドの橋の方へと眼を遣ると、コリント風の圓柱の立ち並んでゐる古風なパレー・ブールボン、――下院の建物のまへ、廣大に築かれた數段の白色の臺場の上に、眞黑な布で蔽はれたジ・レスの棺が安置されてゐるのが、直ちに眼に這入る。三色旗を型どつた大きな幔幕が棺の背後に擴がり、棺側からは、香煙が豐かに立ちのぼつてゐる。パレー・ブールボンの内部で奏せられてゐる管絃樂が、高聲器で、コンコルド一圓にひゞき渡つてゐる。

ポン・ド・ラ・コンコルドは、通り拔けられぬほどの人出である。セーヌの河を渡つて來る冷たい風にめげもせず、橋の上に人は伸び上り伸び上りしては、棺前の模様を能く眺めやうとしてゐる。自分たちも、人々に揉まれながら、漸く橋の半ばま

進んで見ることが出來た。

ジョレスの遺骸を納めてゐる棺、それは、遠く故人の郷里カストルの墓地から前夜こゝに運ばれて來た所のものであつた。親しくこの棺を眺めることのできた者の胸には、言ひ合はしたやうに、あの七月卅一日の夜のことが、浮び出したに違ひない。不圖振返へると、すぐ背後に立つてゐた恰幅のいい相當年配の紳士の顏と行合つた。頰まで落ちてゐる涙の線を、自分は咄嗟に見た。――棺を安置してある眞白な齋場の下には、堆高く菊の花が積まれてあつた。數百といふほどの夥しい花束が。

……行列はこのパレー・ブールボンからブールヴアール・サン・ジエルマンへ出て、それからサン・ジエルマン・デ・プレ、プラス・ダントンを經て、ブールヴアール・サン・ミシエルの通りを、ずつとパンテオン指して行くことになつてゐる。この行列を眺めることも、勿論自分の望みではあつた。然し、パンテオン内の嚴かな儀式に參列するために、自分は、特に外交團員へと交附せられた一枚の入場卷を持つてゐた。どちらかを捨てなければならなかつた。止むなく自分は、行列を眺めることを斷念した。サン・ミシエルに近いレストランで午餐を濟した自分は、家族と別れてパンテオンの建物へと急いだ。沿道は、既に黑山のやうな人であつた。兵士と巡査とが、帶のやうにその群集の喰み出すのを支へてゐた。わけても、パンテオンの廣場のまへは、身動きも出來ぬほどの夥しい人出であつた。自分はやつとの思ひで、この人の山をくぐつて、パンテオンの建物の側に近付くことができた。不圖見ると、鐵柵の側には、石膏で作られたジョレスの像が――群集に向つて己れの確信を語るが如く、兩手を引き締めてゐる彼の姿が、立つてゐた。人々は、この無言の像のまへに、宛もかの大雄辯を聽きゐるがごとき面持で、仰望凝視してゐるのだつた。

場内にはいる。正面――いつもは、『自由に生くるか、然らされば死』といふ銘語の刻み付けられてゐるあの革命議會の女神の像の立つてゐる場所に、ジョレスの棺を安置し得るやう、簡素ながらも美々しく數々の設備と裝飾とが施されてゐる。その最上部には、巨大なる白色の額面に、Jaurès の六字が黃金の光り燦として輝いてゐた。外交團の席といふのは、通に前面で、最も形勝の位置であつた。

大統領ドゥーメルグ氏が、各員總起立のなかに到着して、自分たちから程近い椅子に著かれる。最早棺の到着するのも間もないことと思つてゐるうちに、薄暗い場内は急に仄明くなつた。振り返ると、今まで閉されてゐた入口の扉が一杯に開か

れたのである。やがて軍樂隊の奏樂に連れて、棺が場内に運び込まれて來た。再び、皆は起立した。先づエリオ首相が、各閣僚を從へ、棺の先頭となつて這入つて來る。首相は初め各閣僚は、徒歩棺に伍して、パレー・ブールボンからこの式場まで遣つて來たのである。

棺は、鑛山服を着た八十何名かの鑛夫（それはジョレスの故郷から態々この爲めに出て來たのである）の手によつて、持ち運ばれた。かくて、棺は、豫定の場所に安置せられる。鑛夫はそれぞれこの棺を安置した階段の兩測に列を作る。その貧しげな服裝と、その手に下げてゐるカンテラと鐵鎚と、その純朴で且つ世の悩みに窶れてゐる容貌とは、かゝる場所にあつて、最も異樣なる感動を人々に與へるのであつた。佛蘭西の國旗につゝまれた棺の直ぐまへに、社會主義聯合（フエデラシオン・ソシアトリスト）のあの赤色の旗旄が四本ほど立ち並んでゐるのも、一種の印象を人々に與へるのであつた。

式は、管弦樂の高らかに奏する『人民の進行（マルシユ・デユ・ププル）』に依つて、始められた。豫定のごとく、先づエリオ首相が立ち上り、階段を上り棺前に佇立して、約三十分に亘る壯麗なる長演說を試みたのであつた。それは、一にジョレスに對する熱き讃頌の言葉であつたことは言ふまでもなかつた。

自分はいま、でき得ればこの演說を全譯して、遠く祖國の讀者に傳へたい誘惑を、可成りに持つ。それは　ジョレスの偉大がこの演說に依つて今更に吾人の胸を打つものがあるのを、感じ得るから計りではない。またエリオ首相が、如何なる思想の所有者であるかを、これに依つて明瞭に知り得るから計りでもない。寧ろそれよりも自分は、佛蘭西邊に於ける大臣等の演說の内容・措辭（それは取りも直さず、彼等の思想・感情の教養を現はしてゐる）が、如何に甚しく我々祖國に於ける、政治家の夫れと類を異にしてゐるかを、これを好機會に讀者に篤と諒解して貰ひたい念慮からである。全くそれは、話の種としても興味あるものである計りではなく、我々を深く反省せしむる何物かも確かにある筈である。が、この通信がこの上長くなることを自分は怖れる。誘惑を抑へて、他日更に適當なる機會を俟つこととしやう。

この日、エリオ首相は、實際的の政治家、若くは社會黨の首領としてのジョレスを云爲することを故らに避け、主として彼の哲學的根本思想を語り、さては、その幼時の影響を、母の感化を、宏大なるその教育論を、その共和制論を、その人間創造の熱情を強調したのであつた。氏の豐饒にしてしかも極めて精確なる表現は、ジョレスの博大にしてしかも現實的なる姿相を的確に刻み出すに、此の悩みのないことを思はしめた。自分は、こ

の『壯觀』に、覺えず心を打たれた。

首相の演說が終るや、代つて棺前に現はれたのは、白衣にてつゝまれたる美しき女性である。この女性こそ國立劇場コメディー・フランセーズの門を潛つた者には忘れ難い印象を殘すに違いない名女優マドレーヌ・ロック孃である。(讀者よ。この國では首相のあとに、女優が現はれても、何人も不齊とする者はないといふのだ!)やがて孃は、あの一味のさびを含む强く美しき聲を張り上げながら、ヴィクトル・ユーゴーが『友愛(フラテルニテ)』の詩章を朗讀しはじめた。この詩章の意は憎惡と爭鬪とにて渦卷ける世界を嘆き悲しむ詩人が、その高き塔の上より協同を說き、愛を訓へ、己れの內心の聖らかにして永遠なる想ひ――『友愛』の歌を、高らかに唱へるといふのである。この詩章に現はれたる人道主義者としてのユーゴーの惱みと希望と確信とがそのまゝにわがジョレスの惱みでもあり希望でもあり確信でもあつたのだ。『……此等の憐れなる心より、此等の呪はれたる日々より、此等の淚の中より、此等の無限の惡より、此等の憤怒のなかより、人々は聽くならむ、この暗冥なる歌聲の立ち上るをば。――我々愛し合はむ(エーモンヌ)!』から歌ひ終つた折の孃の兩手は、天へと立ちのぼる感情の焰をそのまゝに現はす一本の松明のやうに、高く突き上げられた。滿場は、聲もなく、ジョレスの棺を前にしたこの壯嚴なる光景に見惚れた。――

孃が、鈍色の棕櫚の葉を棺のうへに捧げて退壇するや、奉祀の歌は夥しい合唱團に依つて歌ひ出された。

これが濟むと、大統領、首相以下夫々席から立ち上る。『マルセーエーズ』の國歌が奏樂せられる。これで式は滯りなく終つたのであつた。

人波に押されながらパンテオンを出ると、霧の霽れやらぬ空に薄暮の氣さへ押し寄せたこととて、最早あちこちの瓦斯燈の光も懷しく煌きそめてゐる。おゝ、それにしても、その廣い廣場を埋めてゐる人の洪水は! 自分はどの道を通つて歸路についていゝか、その見當さへ付かなかつた。

到々思ひも寄らず、自分は法科大學の側からサン・ジャックの通りへと拔ける狹い通りへ押込められてしまつて、暫らくの間は進むことも退くことも出來なくなつてしまつた。學生の行列の中に卷き込まれてしまつたのである。

二十米突もあるまいと思はれるその路次を漸くのことで切り拔けるには、十分以上もかゝつてしまつた。サン・ジャックの通りへ出ると、こゝは通りが廣いだけに、大した苦勞もなく步くことができた。自分はそれからクリュニーの博物館の側を通つて、サン・ミシェルの大通りへと拔けた。

、すると、こゝには、未だ前後とも容易に果の知れない行列が續いてゐた。見るとそれは、共産主義者の行列であつた！、例の『インタナシヨナル』の歌を高らかに唱へてゐた。

共産主義者のジョレス觀は、既に前にも書いた。今日のこの行列も、ジョレスのパンテイオン改葬を祝ふ意味から來たのではなくて、ジョレスが我々のみに屬すること（それを彼等は人民のみに屬する、といふ言葉で現はしてゐた。）を主張する換言すれば、ブールジョア苟合の徒輩の催しにかゝる今日のパンテオン祭儀に對してはプロテストする意味合から來てゐるのであつた。かうして彼等は、態とパンテオンの附近には近寄らずに、この大通りに蟠居して、赤旗を飜し革命歌を高唱して、飽迄氣勢を添へてゐるのであつた。

自分は前に、ゾラのパンテオン埋葬の當日に於けるゾラ黨と反ゾラ黨との對峙の事實を語つて、今日のこのジョレスの改葬當日の騷ぎを豫想して置いた。然るに、自分の豫想は、殆んど當らなかつた。ジョレスに對する反對的の示威運動のごときものは、全然見るを得なかつた計りではなく、行列を目睹する沿道數十萬の觀衆からも格別、冷嘲罵聲のごときものは、全く聽くを得なかつたと、後から聽いて知つた。（この日の夜、トロカデロで催されたジョレス追悼講演會の席上で、レオン・ブラム氏は、當日の盛儀が實にヴイクトル・ユーゴーの葬儀以來の盛んなる出來事であつて、あれほどの人出のあつたことはこゝ四十年以來巴里に例のないことであつたと、語つてゐる。然も、この夥しい人出にも拘はらず、ジョレスの遺骨は何等『非友誼的』なる聲も聽くことなくして、パンテオンまで辿り着いたのであつた！）

然し、その代りに、こゝに思ひ設けなかつた共産主義者の、社會主義者一派の――彼等の所謂、ブールジョア階級と苟合せる社會謀反者の――催しにかゝるジョレス祭に反對するといふ、言はゞ、ジョレス爭奪の爲めの示威運動を見ることができた。

社會主義者と共産主義者と！、自分は、種々の機會で、この兩者間の激しい反目、葛藤をば、幾度か親しく見ることができた。社會主義といふ母の胎内から生れ出でたこの共産主義といふ子は、實にその肉身の母に對して他の何物にも增して深い憎惡と輕蔑とを、抱いてゐるのを見るのであつた。共産主義の徒は、時に右黨の徒と（わけて極右黨の徒とは、）往々交歡するを憚らないことがある。然し、その隣席の社會主義の徒とは、徹頭徹尾敵視の關係を持續するのを辭さないのである。

自分は、或月の初めトロカデロの大きなサルのなかに催され

た社會黨各派の聯合演説會を偶々傍聽に行つたことがあつたが、その折も、共産主義者の群は諸方の席に散在して、ジュオー氏、ブラム氏、其他の人々の演説に對し、絶えまなき罵詈と冷嘲との聲を送り座を騒がしてゐたばかりではなく、その結果遂に相互格闘の爲め流血沙汰にまで立ち到つたのを、目撃したものであつた。また、會場の外は外で、共産主義の徒は頻りに行人に社會黨内閣の無能無力且つ無恥背徳なることを完膚なく攻撃したビラを、振りまいてゐたものであつた。

かゝる敵對・反目が、ジョレス改葬のこの日にも偶々街頭に現れたに過ぎぬのである。ジョレスの改葬に公然と抗言しやうとしてゐる徒輩が當日殆んど見當らなかつたといふことを目して、直ちに、今日の佛蘭西に於いて所謂右黨的思想傾向が影さへひそめたものと推斷することは、もとより早計である。然し、よしこの日だけの現象だつたにしろ、所謂右黨と左黨との對峙といふことから、こゝに社會主義者對共産主義者の抗爭といふ處にまで移つて來てゐるといふことは今後に於ける佛蘭西の(はた世界の)提供する最も興味ある姿相の一つであると言はなければならない。——

……何時しか日は全く暮れた。ソルボンヌの鐘の音が、霧と燈火との町のうへを擴がつて行く。通りは依然として人の山であつた。

○

レヴイ・ブリュール教授の近著『ジヤン・ジョレス』から筆を起して、遂にこゝにジョレスのパンテオン改葬の記事に筆を擱くこととなつた自分のこの『巴里通信』は、宛然『ジョレス通信』といふべきものとなつてしまつた。讀者の倦怠と、編輯者の困惑とに對する掛念は、筆を採る自分の心を、幾度か動かさないではなかつた。然し兎もすればジョレスへジョレスへと向つて行く自分の心が彼を充分に語らうとする熱い欲望が、——否心のなかのある責務までが、自分を驅つて、遂にこゝまで筆を運ばしてしまつたのである。ひたすらに大方の諒解を乞ふのほかはない。がいま自分の周圍には、藝術の巴里が、演劇の、音樂の、舞踊の、詩の、小説の巴里が、歌と踊りと化粧の巴里が、燈火の渦卷のなかに燿き動いてゐる。恐らく自分の次の『巴里通信』は今回の通信とは異つて、この燿ゆい光の世界を語る華やかな記事であるかも知れない。自分は、いま、そうした豫告じみたことまで言つて、懷かしい祖國のわが友の寛恕を俟たうとする。——一九二三、一二、六——

幕末の暴力團

田中貢太郎

一　近藤勇の生家

首相加藤高明君の暗殺を計劃したと云ふ壯士の暴擧に關聯して、黒龍會の首領として知られてゐる内田良平君が收監せられたことは、すくなからず世人を驚かすとともに、世人も今更のやうに數多い暴力團隊の行動に注意するやうになつた。私は例によつてこれに對する私見を挾むことをさけて、幕末に於ける暴力團の話をすることにしたが、それには第一の暴力團であつた新撰組の近藤勇を中心に譚をすすめて、その周圍をめぐる暴力團に觸れてゆくことにする。

勇は多摩川畔上石原宿の人であつた。新宿の追分と府中との間を通ふてゐる電車に乘つて、調布驛の一つ先の飛田給（ひたきふ）驛におり、甲州街道を横ぎつて新道を往き、それに交叉した舊道を入つて左に折れて往くと、すぐ道の右側に引込んだ本堂の前に二本の大銀杏の眼に著く寺があつて、そこに勇夫婦の墓があつた。寺は龍源寺と云ふ寺であつた。勇は土佐藩の手で板橋で所刑せられ、遺骸は同地に埋められたことになつて、大きな石碑の建つてゐるのを私も見たことがあるが、龍源寺の住職の話では、その遺骸は秘にこの墓域に移されたとのことであつた。

そのあたりは三鷹村の大澤であつた。龍源寺の前から三丁ばかり往つて、その道路が往きつまりのやうになつて左にうねつた所に、板塀を引めぐらし、庭内に防風林の樫や欅の老木を植ゑた何か由緒のありさうに見える草屋根の農家がある。それが勇の生家の宮川家であつた。そこはもう三鷹村大澤でなしに調布町上石原の辻と云ふ所であつた。それがために調布の人でも大澤の辻と云つて譲るものがある。勇はその辻の貧しい農家の三男として生れたものであつた。父は久次と云つてゐた。それは天保六年で、和蘭人が海外の風說書を幕府に奉つた、これから海外問題が紛糾しようとする際であつた。勇の幼名は勝太

であつた。總領の兄は音五郎で、中の兄は惣兵衛と云つてゐた。今の宮川家は音五郎の孫の半助君の代となり、その正面になつた左側の農家は、音五郎の二男の助五郎が伯父勇の一人女即ち從妹と結婚して近藤家を相續してゐる所であるが、その助五郎は七十餘歳の白い長い髯を生した翁の面のやうな顔をした老翁であつた。本年の四月十七日の午后、私は調布へ往つてその助五郎翁に逢つた。私はその日、やはり調布のうちになつた國領へも往つた。そこには勇の兄弟子があつた原田忠司の道場であつたと云ふ廢屋があつた。そこは甲州街道に沿うた『塚善』と云ふ料亭の隣になつて居つた。そこの廢屋を圍んだ防風林の中には辛夷の白い花が見えてゐた。

二　近藤勇の養家

上石原宿の貧しい農家の子として生れた少年は、毎日五六里も離れた八王子へ往つて馬糞を拾つてゐた。私が國領の原田の道場へ往つた際、原田忠司の孫にあたると云ふその西隣に住んでゐた中年の農夫は、『勇さんは、八王子へ出て、馬の糞かきをしてゐたと云ひます、』と云つて話した。これがその逸話に殘る少年の日を說明する傳說であつた。

この馬の糞かきの少年は、その比、八王子の薮の内と云ふ所で劍法を教へてゐた近藤周助の許へ出入するやうになり、他のやうにすどい眼つきで、門人達の竹刀を揮ふさまを羨しさうに見てゐたが、いつか道場の上にあげられるやうになつた。國領の近藤君は、『百姓の子に珍らしいと云ふので、私の祖父が、三助先生の弟子にしたさうです、私の家は、もと多摩村の下染谷と云ふ所にをりました、』と云つた。とにかく劍を揮はすことが好きであつた少年は、かうして近藤家の門下となり、それから養子となつたのであつた。

近藤家はもと肥後から出たもので、內藏助長裕と云ふのが八王子へ移つて來て、道場を開いたが小供が無いので養子をした。これが三助方正で、その方正も小供が無いのでまた養子をしたが、それが勇の養父で周助とも周齋とも云つた。國領の近藤君は勇が近藤家の養子になつたことに就いて、『近藤家には、女が一人あつて、養子をするなら、私の祖父か、も一人兄弟があつて、その二人のうち何人かがなることになつてたが、一人は病氣になり、祖父は逃げだして、一二年して歸つてみると、勇が養子になつてたと云ひます、』と劇的な一挿話を話した。

三　清川八郎と新徵組

勇が養父周助をたすけて武藏野の一角で壯士に劍法を授けてゐるうちに、世は安政の外艦渡來の紛擾となり、橋本左內、賴三樹などの有志の所刑となり、萬延に入つて水戶の壯士の井伊大老の刺殺となり、文久に入つて高輪東禪寺に於ける英人の襲擊となり、翌二年の老中安藤信正の坂下門外の襲擊となるなど、壯士の暴擧が所在に續出したうへに、將軍家茂亦强要せられて上洛することになつたので、幕府では盡忠報國の士を募ると云ふ名目で、その爪牙に甘んずる壯士を募つて、過激な諸藩の浮浪に當らすことにした。

この壯士を募ることは淸川八郞の獻策であつた。八郞は出羽の庄內の產で、策士肌の人で文字があつた。人を殺したがために亡命して京都へ出、京都から九州に往き、九州では平野次郞はじめ肥筑豐の人士と交はり、再び京都の人となつて薩長土肥の浮浪と攘夷の氣勢を煽り、島津久光が東下の期日を覗つて播州に迎へ、これを擁して九條關白尙忠を襲ひ、所司代酒井若狹守忠義を屠つて、大阪、二條、彥根の三城を拔いて根據とし、それによつて天下に號令して、倒幕攘夷を決行すべしといふやうな壯士にありがちな過激な要請をした。久光は陽にその言葉を容れて、壯士を大阪の藩の倉屋敷に留め、それを鎭撫しようとした。一行は憤慨して長州人と謀つて事を擧げやうとした。八郞が愛宕山に登つて誓いたと云ふ手前には、「四月十二日和泉は千餘人も壯士を率ゐ、蒸氣船にて大阪へ着、談判に及、義旗を無相違相建可申故、今暫く相控與候樣、和泉より賴に付、諸方有志の者、暫時在阪、和泉の人數計有之、勿論春來關東へ眩されし矢先なれば、猶更因循致、一向天使下り不申、宸襟は知れたる事ながら、左右の奸人共に掩ひ隱され、素より叡慮は一向顯れ不申事故、此方共は不及申、何れも有志の者堪兼、七八人引連、追々大阪より上京の面々、凡三十餘人、外に薩州の者二十人計、和泉の樣子永引に堪兼ね、伏見迄忍びに罷出、九條殿下相除き可申との工夫の處、薩の和泉より差止の者、凡十人計伏見へ遣し、及議論、夫より直に切合に相成り大阪よりの人數凡七八人、即座にて相切殺、差留の者一人相果大騷動無申計、尤差留に遣候人數は何れも鬪士、被切殺候者も是迄大周旋致候者にて、何れも學士多く、是迄力を盡し、薩藩中の大切の人物にて、皆此方懇意の者計、夫より彼是切腹の者兩三人有之、此騷動にて薩州十一人相果、殘念無此上」としてあつて、當時の實情を推知することが出來る。これが所謂寺田屋騷動で、久光から鎭撫に遣はした差止の者は奈良原繁などで、斬られたのは有馬新七以下八人であつた。八郞はその場にゐあはさなかつたので逃れることができ、水戶仙臺の間に潛伏してゐたが、攘夷

を口にする浮浪の眼に兇光を帶びて來たのを見ると、江戸に出て、政事總裁職松平春嶽に上書して事務三策を述べた。それは文久二年十一月のことであつた。八郎の事務策と云ふのは、攘夷と大赦と天下の英才を教育するの三箇條であつた。英才教育の方法としては『則ち幕下豪傑卓犖不群の士兩三輩を擧げて、以て之が總宰を爲し、更に之が一館舍を設け、其材に因つて之が俸祿を給し、一切簡約に從ふ。而して先づ天下馳名の傑士兩三輩を擧げ、此延廣く忠義節烈、英偉倜儻の士を募り、文有る者之が顧問に備へ、武有る者之が稽鈴に充つ。其れ此の如くなれば、天下の士翕然として至り、皆精神を幕府に注ぎ、上下一心、以て敵愾の士を勵ます。則ち何の虜か攘ふべからざらんや、何の功か樹つべからざらんや。』と云ふやうなことを云つてゐるが、こんな浪人處士の一稿の論策では權威のないことは判つてゐるので、その一方で、講武所で劍法の師をしてゐた松平主税介忠敏と結んで、過激な浪人を操縱すると云ふことを口實にして、主税をして老中に說かしたところが、採用になつて主税に浪人募集の命令がくだつた。八郎はもう隱れ歩く必要もなくなつた。彼は石坂周造、池田德太郎など云ふ同志と浪人の募集に着手した。結城禮一郎君の『舊幕新撰組の結城無二三』は『清川ではどうも信用が足りないので本當の浪士は集りません。そこで致し方なく近國へ出張して百姓や博徒を集めて來ました。甲州の博徒で甲斐の祐天と云つた有名な男も子分を連れて加入しました』と云ひ、そして『私も無論勸められましたが、清川と云ふ男はすかなかつたのでことはりました』と云つて、淸川との關係を語つてゐる。

浪人組への應募者は二百三四十であつたが、その中で土地の關係上武甲兩野の人が多かつた。應募者の中にはすぐ旗本にでもなれると思つてゐた者があつてそれが不平を起したり、主税や八郎を侮る者があつたりして、威令が行はれないので、幕府では主膳を鵜殿鳩翁に變へ、山岡鐵太郎、松岡萬、佐佐木只三郎、高久龍之助、速見又四郎などを屬僚にしてこれに當らした。高橋伊勢守、中條金之助、杉浦正一郎、池田修理も前後にこれに關係した。

主税の失脚によつて八郎も勢力を失墜したが、それでも依然として鐵中の錚錚たる者であつた。壯士では八郎の他に石坂周造、村上俊五郎、德永大和、芹澤鴨、新見錦、岡田盟、池田德太郎、大館謙三郎、齊藤源十郎、大內志津馬、松澤良作、山本仙之助、常見一郎、村上常衛門などが知られてゐた。近藤勇も養父の門下、土方歳三、山南敬助、沖田總司、永倉新八、藤堂平助、齊藤一、井上源三郎、大月銀藏、沖田林太郎の同志十三

人と相率ゐてこれに投じた。『新撰組の結城無二三』には、『近藤勇も土方歳三と一緒に馳せ參じましたが未だ伍長にもなれず、平の一兵卒として新見錦と云ふ人の下に附いて居りました』としてあるが、その間の消息を語つてゐるものではあるまいか。

この壯士團は鵜殿鳩翁に宰領せられ、將軍家上洛につき洛中の警護に當ると云ふ名目で、文久三年の二月に江戸を出發したが、全員を二十組に分ちて、石坂周造、德永大和、村上俊五郎、芹澤鴨の徒がおのおのそれを率ゐてゐた。そして中山道を經て京都に往き、壬生（みぶ）の地藏寺を宿舍にして、收容しきれない人員は、その附近の民家の前川、南部、八木など云ふ家に別れて止宿することになつた。

京都の人となつてまもなく壯士團の間に物議が起つた。それは八郎が首となつて學習院に獻白書を送つたがためであつた。その獻白書は、『於大將軍家も斷然攘夷の大命御尊戴奉輔佐朝廷候勿論の事萬一因循姑息皇武離隔の姿にも相成候はば私共幾重にも挽回の周旋可仕猶其上とも御取用無之は不及是非銘銘靖獻の心得に御座候』と云ふやうに忠誠を盟つたものであつたが、結末に往くと『右に付幕府御召には相應じ候得共祿位等は更に相受不申只只尊攘の大義而已奉相期候間萬一皇命を妨げ私意を企候輩於有之は假令有司の人たり共聊無容赦譴責仕度一統の決心に御座候』と云ふやうな文句を挾んで、吾吾は幕府の召に應じたものであるが、祿位ももらつてゐないから、幕府に頓着する必要がない、もし幕府が攘夷に反對するやうなことがあるなら、容赦なく誅戮を加へると云ふやうな意をほのめかしてゐつたので、老中板倉周防守などは非常にこれを憤つた。そのうへ八郎は長士をはじめ諸藩の勤王派の浮浪と往來して、眼中に幕府がなかつたので、佐佐木只三郎、速見又四郎などが板倉周防守の旨を含んで芹澤鴨の一派を誘ふた。芹澤の部伍に屬してゐた勇は、ある夜芹澤とともに、八郎が山岡鐵太郎と打ち伴れて外出した歸路を要したことがあつたが、その時は山岡がいつも天鵞絨の袋に入れて頸にかけてゐる幕府朱印の浪士募状に血を濺ぐ恐れがあつたので、手をくだすことができなかつた。

八郎と山岡とは死生相ゆるす仲であつた。幕府の方では八郎の所置に困つた。その時將軍家茂は上洛して二條城にゐたが、京都に雲集してゐる諸藩士及び浮浪の有志は、朝廷に攘夷の期日を逼つて紛擾をきはめた。それにその前年島津久光が勅使大原右衛門督を警護して江戸から西歸するに際し、生麥で英人を斬つたところで、その時數隻の英艦が横濱に來て償金を逼つた

ので、東西の人心が極度に緊張した。幕府ではこれをきつかけにして壯士團を江戸に返すことにした。

江戸に送り返されることは八郎一派の望むところであつた。一朝英艦と戰端を開くあかつきには、期せずして攘夷の先鋒となることができるうへに、將軍の留守と云ふ事をあげるにしても復とない好機會が來てゐるがためであつた。それはたいした陰謀の成算があつたやうにも思はれないが、何かしてゐなければゐられないやうな人人の心を滿足さするに充分なものがあつた。盡忠報國の壯士團はかくして在京二旬にして東へ歸つて往つたが、八郎一派と議の合はない芹澤鴨はじめ勇の一派十四人は京都に留まることになつた。

八郎一派が腕を揮ふ時が來た。しかし八郎一派がそれをよろこんだ時には、もう破滅がその脚下に迫つてゐた。四月十三日の夜になつて八郎は赤羽根橋で刺客のために暗殺せられた。八郎の遺稿『潜中紀略』に添へた高橋泥舟の序文には、八郎が斃れた日のことが精しく書いてある。『文久三とせといふ年の四月十あまり三日の朝、己が許近く見えて物思はしげにすわりし程に、何心なく今日はおももちよろしからず、ここ地惡しく待らずやと問ひしかば、昨日より頭痛み、折折眼くらみてここ地常ならず、されど契りしこととありて金子某に招かれたれば、今より行かんと思ふなり、然れども歩行こと難ければ乗物に乗らんなど言へり。おのれ聊か心に掛ることのなきにしもあらねば、ひとりふたり人伴ひてよ、左なくば病に煩ひ行き難きよしいひつかはして、けふはおもひ止まられよと言ひしかば、正明もやや考へて言ふらく、病ながらも否み難き事あればとて、やがて立出でんとす、その折昨夜一首の歌を詠みたり、扇子あらばたまはれよ書きのこさんと言へるままに、片邊にありしを取り出し遺しけるに、その歌をなむしるしける。そはおのれ心もとなく思はるれば、後の事など戒め置きて大城へまう登りけるに、其夕何者の仕業にかありけむ、刃にかかりてはかなくぞなりにける。よはひ三十あまり四とせなむある。あはれかなしきかも斯る人の世にながらざりしことよと、おのれ折折思ひ出て今も忘れざりき。』八郎の歌といふのは『魁てまたさきがけん死出の山まよひはせまじ皇の道』と云ふので、刺客の手に斃れることを豫期してゐたやうな歌であつた。この八郎を斃した者は、『舊幕新撰組の結城無二三』には三河藩士今井信郎と云ふことになつてゐる。この今井は江戸で劍法を敎えてゐて、見廻組の佐佐木只三郎に見出され、その十月京都にのぼつて見廻組の頭並に拔擢されたが、これが後に土佐の坂本龍馬、中岡愼太郎を斬つたと云ふことを發表したので、谷干城の駁論などがあつて問題に

なつたことがある。今井はまた佐々木只三郎も暗殺したと云つてゐる。

八郎が刺客の手に斃れた時、同志の石坂周造は、八郎の懐にある同志の連名簿を幕吏に收められるのを恐れ、『直に馳せて赤羽根に至る。此時幕吏既に其屍を戒嚴せり。余其の面貌を熟視するに果して正明せり。思はず血涙潸然たり。直に其屍を奪はんと欲するも警吏の禁制嚴にして近づくを得ず。是に於て紿きて語て曰く、聞く此屍は淸川正明なりと、果して然るや。吏曰く然りと。因て大聲を放て曰く、淸川は余が不倶戴天の仇なり。請ふ余をして此屍に加ふるに一刀を以てし、積年の怨を報ぜしめよ。若し之を許さずんば予等も亦共に余が敵なり。恐く屠戮して止まん耳と、目を瞋らし刀を拔て進む。警吏畏縮して拒むの色なし。速に正明の所持の書類を收め、且つ首級を奪ひ、窃に之を山岡に送る。鐵太郎之を其の邸內に埋め、後ち小石川所靜院の境內に假葬せり。』とは彼が『潛中紀略』の跋文の云ふところである。

八郎の人物に就ては毀譽相半してゐるが、とにかく、山岡鐵舟高橋泥舟の如き達人に知己を以てゐたことは、彼が凡庸の徒でなかつたことを證するに足るものがある。八郎の横死と共に、彼の一派の村上俊五郎、石坂周造など、幕吏の手に執へられた。それは横濱の外人襲撃の陰謀を企ててゐたと云ふ罪名であつた。かくして彼等は土方智千代、大關肥後守の諸邸に拘禁せられた。鵜殿鳩翁は壯士團を改革してはじめて新徵組と命名した。

四　新撰組生る

芹澤鴨近藤勇一派が京都に殘るやうになつたのは、芹澤と勇の二人が鵜殿鳩翁に往つて、東歸の不可を論じ京洛の警衞のゆるがせにすべからざることを説いたがためであつた。二人の建策は後世勤王家から幕奸とまで云はれたほどの幕府思ひの鵜殿を動かした。そこで鵜殿はこれを京都守護職松平肥後守に云ひ、肥後守から將軍に請ふて、守護職の下で京坊を警備さすことになつたが、僅に十四五人の小人數では何もできないので、新に四方の浮浪を募つて浪人組をつくり、それを新撰組と命名した。そして芹澤と勇が隊長となり、新見錦、山南敬助、土方歲三の三人が隊長副となり、沖田總司、永倉新八、藤堂平助、原田左之助、齋藤一、平山五郎、野口、井上源三郎の八人が伍長となり、平間重助が勘定方となつて、團隊の制規も作つた。松村巖君の『近藤勇』にはその制規が掲げてある。

軍中法度

一役所を固く相守り式法不可亂進退組頭之下知に可隨事
一敵味方强弱之批判停止の事
　附奇瑞妖恠不思議の說不可申事
一食物一切美味堅く禁制の事
一晝夜不限急變有之候共決而騷動不可致心靜に身を堅め下知を可待事
　但夜討込の節勿論の事
一私之遺恨有りと雖も於陣中喧嘩口論仕間敷之事
一出勢前に兵粮を食ひ鎧一締し帯太刀の目釘可心付事
　附陣前に於て猥に虛言申間敷事
一敵間の利害見受於有之は不及遠慮可申出不答過失事
一組頭及討死候刻其組衆於其場可遂死戰若し構臆病其の虎口北來の族於有之は斬罪刑罪隨其品可申付之條兼而致覺悟未練の働無之樣可被相嗜之事
一於烈敷虎口組頭之外屍骸引退事可爲無用始終不渉其場可抽忠義事
一合戰勝利後亂取禁制也其御下知於有之は如定式可守御法事
右之條條堅固に可相守此旨執達依而如件

嚴格な制規を建てた新選組では、その制規を犯した者には容赦なく白刃を命じた。新見錦もしばしば制規を犯したがために自刃を命ぜられた。新に同志に參加して來た者には、その介手に起たして勇怯を試みて採否を決した。新選組は引續いて壬生の地藏寺を宿舍にしてゐたので、世人はこれを壬生浪人と云つた。しかし、その宿舍は不便であるから、慶[illegible]西本願寺に徙り、慶應の末年になつて堀川七條へ移つた。

その年の七月のことであつた。新選組の頭だつた者が大阪へ往つて、八軒屋の京屋と云ふ旅館に止宿してゐたが、ある夜芹澤山南永倉沖田平山などで淀川に舟を浮べ、陸へあがつて北の新地の住吉樓へ往つてゐると、二人の力士が來て道を讓らうとしない。血氣の多い一行は大に憤つて二人を亂打した。二人は一行が住吉樓へあがつたのを見とどけて、多數の仲間を催し、手に手に鐵棒の角棒を揮つて住吉樓へ亂入した。

新選組の方でもそれを見て刀を揮つて斬つて出た。力士の方では數個の屍を殘して血を浴びて逃げ走つた。京屋に殘つてゐてその事を聞いた勇は、その夜直に町奉行所へ訴へ出た。それは無賴の徒に喧嘩をしかけられ、やむを得ず數人を殺傷したと云ふのであつた。當時大阪の町奉行所には與力の内山彥次郎と云ふのがゐた。内山は新選組の訴告によつて喧嘩の模樣を調査しようとしてゐると、力士の方からも訴が出た。そこで内山は双方を呼んで調査することにして、京屋の勇を呼んだ。勇は、

『吾吾は守護職に屬してゐる者で、職命を帶びて來てゐる、兇漢を斬つてすてるに何の不都合がある。』と云つて傲然として出頭しなかつた。

力士の方では人殺しをした浪人の罪にならないのを見て憤り、復讐をしようとして浪人の素狀を探つてみると、壬生浪人であるから縮みあがつた。そこへ力士界の元老として水戸烈公にまで愛せられてゐた小野秀川五郎が出て、双方の間に周旋したので事件はことなく治まつたが、それ以來新選組と力士の間が非常に親しくなり、そのあげく新選組の方で力士を呼んで祇園と壬生に角力を興行さした。そして壬生で開場した際には、地藏寺の池をかへほして鯉を獲つて力士に酒を飲ました。一方與力の內山は、それがために新選組の怨みを買つて、元治元年五月二十日の夜、勇一派の刺客のために天神橋上で暗殺せられた。

壬生浪人が京洛を橫行して勤王攘夷を叫んでゐる浮浪を戰慄さすの日は刻刻に迫つて來た。將軍家茂の入洛によつていよいよ高まつた攘夷熱は、孝明天皇の男山行幸となり、攘夷實行の詔勅となつて時局は紛糾した。それには公武合體を唱へた薩藩と攘夷を唱へた長藩とが聲望を爭ふて互に傾排しあつたのも時局をしてますます紛糾せしむる原因となつた。さうした紛糾の中で、五月二十日の夜、姉小路公知が退朝の途中、朔平門外で暗殺せられた。その時賊の殊更に捨てて往つた刀と下駄があつて、その刀の鞘が大きく、頭に藤原、緣に鎭英と刻つて金の象眼をしてあつたが、それは薩州鍛冶の手になつたもので、薩藩の田中雄平と云ふ者の佩刀であると云ふことが判つた。それは雄平が一夕祇園新地に遊んで盜まれたものであつたが、彼は體面を重んじて、事實を明にせずして町奉行所で自裁した。これがために薩藩は乾門の警衞を解かれたので、非常に長藩を怨んだ。京都の守護職にゐた會藩も、長藩が幕府の不利益を謀るのを見て憤懣にたへず、中川宮に結び、薩藩を味方にして、八月十八日の昧爽、中川宮を奉じて參內したので、廟議忽ち一變して、親征の延期となり、長藩の堺町門の警衞を免じて會藩の兵に代へ、國事掛三條實美以下の參朝を停めることになつた。それがために三條以下七卿は長州に走り、吉村寅太郎藤本鐵石の徒は、侍從中山忠光を奉じて十津川に據り、平野國臣は生野の銀山に據ると云ふやうに時局は紛糾の極に達した。その十八日の政變の日、新選組は南門を守つてゐたが、遂に京坊を巡檢して亂徒を捕斬することを命ぜられた。

五　新撰組の內訌

後藤象二郎が後に木屋町の松力で、勇と杯をともにして時事を談じ、勇が歸つた後でその人となりを襃めたと云ふ逸話があるが、それは勇の機略のある、そして膽氣用ゆべきところのあるのを襃めたもののやうに思はれる。眞箇に勇は機略と膽氣からなつたやうな男であつたが、魂に深いところはなかつた。それは普通の劍俠の型であつた。それ故に彼はその時代にあつても、佐幕とか勤王とか、さうした主義主張と云ふやうたものは持たなかつた。なるほど彼は最後まで、幕府のために盡して幕府に殉じてゐるが、それは長い間幕府の爪牙となつてゐたがために所謂習ひ性となつたものである。五月十日の攘夷の期限が過ぎた際には、彼は芹澤はじめ同志十餘人と麻上下を着けて老中板倉周防守をその旅館に訪ひ、幕府の不敬をせめてゐるに徴しても、最初から確たる信念のなかつたことが伺はれる。要するに彼はただ嫌惡する者、勤王を口にして強盜にひとしき所業をなす者、さうした己の神經にもやもやとまつはつて來る者を拂ひのけるに過ぎなかつた。それはたんに己の神經にまつはる者を除くにあるから、敵手の如何は問ふところでなかつた。

その勇の神經にその時まつはつて來た者は芹澤鴨であつた。芹澤は水戶の落武者で木村繼次の變名であつた。暴戾粗野、よく芝居に出て來る惡侍そのままの男で、四條堀川の菱屋と云ふ商家の妻女を奪ふて妾にしたり、島原の妓樓に遊んで亂暴狼藉をはたらいたりするので、勇はじめ勇と親しい土方歲三の徒はこれを憤つたが、苟も一黨の主領のことであるから、ひら黨員に制裁を加へるやうなことはできなかつた。それに新見錦などは同藩と云ふところから芹澤と結んで小黨派を樹ててゐたので、うくわつなことをすると反噬せられる恐れがあつた。そこで勇は土方と謀つて、新見錦が放縱でしばしば制規を犯すのを問題にして自刃せしめ、先づその一臂を斷つてから機の熟するのを待つてゐると、その年の九月十八日になつて、島原の角屋で新撰組が會合して打ち合せをすることができた。そして會合して宴會になり、皆で酒を飲んでゐるうちに、芹澤鴨、平山五郎、平間重助の三人は、その席をはづして歸り、三人一座になつて新しく酒をはじめたが、その芹澤の傍には彼の妾のお梅が坐り、平間の傍には輪違屋の絲里が坐り、平山の傍には桔梗屋の小榮が坐つてゐた。そこへ土方がいいきげんになつて入つて來たので、一座は非常ににぎやかになつた。土方は皆に酒をすすめた。芹澤達はぐでぐでになるほどに醉つて、それぞれ別室へ入つて寢た。土方も同時に歸つて往つたが、それが勇一派の手段であつた。土方は時を移さず沖田總司、藤堂平助などを伴れて、夜盜のやうに家に引返して來て寢所へ入り、先づ立つてゐる

る平山を斃した。平山に傍にゐた妓は厠に入つてゐたのでその毒手を免れることができた。次に芹澤の室へ入つた一行は、枕頭の屏風を倒しかけてその上から刺した。芹澤は負傷に屈せず刀を執つた起つたが遂に斃れた。芹澤の傍にゐたお梅も同じく斃れた。平間は夜具の上から刺したが、平間にも傍にゐた妓にも中らなかつた。そのうちに人人が起きて騒ぎだしたので一行は逃げた。勇は翌日守護職へ往つて芹澤平山が盗賊のために暗殺せられたと云つて葬式をすませた。

土方の毒刃を免がれた平間は新撰組を脱してしまつた。それ以來新撰組は勇の手中のものとなつて、土方がその副となつた。土方は勇の故郷上石原の前岸、神奈川縣都築郡三澤村石田、即ち當時の石田村の人で、土方善諄の四男であつた。この多摩川の清流を中にして相望んで呱々の聲をあげた二人の壯士は、影の形にそふが如く京洛の間を横行した。この土方は精悍敏捷で、劍を舞はして劍が見えなかつたと云はれ、勇は竹刀を持つは下手であつたが、眞劍勝負には一回たりとも不覺をとつたことがないと云はれてゐる。

六　三條小橋の變

八月十八日の政變によつて長藩の禁門の警衛を解き、長藩士の入京を禁じてからは、會桑兩藩の兵、見廻組、及び新選隊で京坊の警備を嚴にして、浮浪を取締り、浪人狩と稱して怪しい者は容赦なく捕斬した。元治元年六月五日の朝になつて、新選組では密偵の報告によつて三條小橋繩手の升屋喜右衛門と云ふのを捕へた。それは長藩の古高俊太郎と云ふ者であつた。新選組では古高の手足を執へて押し伏せ、兩足の蹠に蠟燭を燃やして拷問したが、その結果、古高はじめ西南諸藩の浮浪で、壬生を焼打ちして新選組を鏖殺し、京中の騒擾に乘じて傳奏議奏に強請し、長兵を入れて攘夷を決行しようとしてゐる陰謀のあることが判つた。住居を捜索してみると兵器彈藥があり、同志間の往復の手簡があり、一味の浮浪の居る所も判つたので、六日の夜勇は新選組の隊員を二分して、一を土方に授け一を自ら引率して三條小橋の池田屋と云ふ旅館へ向つた。その夜池田屋では古高の同志が集合して、古高を拘禁してある會津の本陣を襲撃して古高を奪取することになり、酒を飲んで夜の更けるのを待つてゐるところであつたが、新選組では既に山崎烝と云ふのを藥種商にして入り込ませ、浮浪の刀や槍を隱さしてあつた。それがために浮浪の方では短刀や脇差で新選組に向はねばならなかつた。その夜の状景は勇がその養父周齋に送つた手簡に精しく出てゐる。「五日早朝怪敷もの一人召捕、篤と取調候處、益

圖訖右徒黨一味の者故、夫より最早時日難移、速に御守護職所司代に此旨御屆申上候處、速に御手配に相成、其夜五つ時と相觸候處、惣而御人數御繰出延引に相成移り候間、局中手數のもの斗にて、右徒黨のもの三條小橋繩手に二個屯致居候處へ、二分に別れ、夜四つ時頃打入候處、一ケ所は一人も居不申、一ケ所は多數潜伏致居り、兼而覺悟の徒黨の族故、手向戰鬪一時餘の間に御座候、打留七人、手疵爲負候者四人、召捕二人、右は局中の手の働に候』

その際勇は養子をしてゐた。『先日板倉周防守殿家來より養子貰受申候、當節柄死生の事も難計奉存候より右等の心構致候、追而委敷可申上候』。その養子は十七歳で、名を周平とつけてあつた。勇が養子に貰つたほどあつて腕はたしかであつたらしい。勇はその少年も池田屋へ伴れて往つた。『折惡敷局中病人多にて、僅僅三十人二ケ所の屯所に二手に分れ、一ケ所土方歳三を頭とし遣はし、人數多く候處其方には居合不申、下拙僅人數引連出で出口を固めさせ、打込候もの拙者沖田永倉藤堂悴周平右五人に御座候、兼而徒黨の多數を相手に火花を散して一時餘の間戰鬪に及候處、永倉新八は刀は折れ、沖田總司刀の帽子折れ、藤堂平助刀は刃切出ささらの如く、悴周平は槍を斬折られ、下拙刀は虎徹故に哉無事に御座候、土方歳三勢駈付夫より召捕申候、實に是迄度度戰候得共二合と戰候者は稀に覺候得共、今度の敵多勢とは乍申孰れも萬夫の勇士、誠に危き命を助かり申候』

短刀や脇差で敵の刀を折り、刀の帽子を折り、槍を斬折り、刀の齒をささらのやうにしたところを見ると、浮浪の方の奮鬪したことも思ひやられる。そして、新撰組では『拙者組には藤堂平助深手、永倉新八薄手、外に手疵請候者』はなかつた。

この池田屋の浮浪捕斬の前にも、新撰組で長藩の間諜を屠つたことがある。それは越後三郎、御倉伊勢武、荒木田左馬介、松井龍三郎と名乘る四人の者が新撰組に入黨して來たが、どうもその擧動が怪しいので、氣をつけてみると長藩の間諜である。勇はさつそくその四人を屠ることにして左右の者に旨を含めた。そこで永倉新八は御倉伊勢武、荒木田左馬介の二人を伴れて人を訪問し、その歸りに祇園の一力へあかつた。その時藤堂平助齋藤一の徒も御倉と荒木田を覘つて一力へ來たが、二人が用心してゐるので手をくだすことができない。そのうちに永倉御倉荒木田の三人は、酒に夜を明かして朝になつたので、隊へ歸ることになり、御倉と荒木田の二人はそれぞれ髮結を呼んで髮を結はした。隙を覘つてゐた新撰組の刺客は、髮結の股の

下から刀を出して二人の背を突いた。他の二人の間諜はもう歸つて來なかつた。

新撰組ではあまりに長藩の浮浪を捕斬するにあせつたがために、土佐藩士を傷づけ、その結果會津藩士を失つたことがある。それは池田屋の事件があつてから間もないことであつた。淸水坂下の曙と云ふ旗亭に長州人が潛伏してゐると云ふ町奉行所からの通知があつた。その時新撰組では人が足りないので會津の藩兵を借りてゐた。それは六月十日のことであつた。伍長の原田左之助が一隊を率ゐて出張した。それを見てそこにゐた一人の士が逃げやうとした。會藩の柴司と云ふ者が追つて往つて槍で突いた。するとその士は、『我が籍は土佐藩の麻田時太郎である、何の咎があつて突くか。』と云つた。それには皆が驚いて謝罪した。會藩では醫師を伴れて人をやつた。土藩では、『土佐の法として、武士道を辱めた者は、醫者にもかけないことになつて居る、さアどうなつたらう。』と云つて負傷者に會はせなかつたが、その時はもう麻田は藩命によつて自刄してゐた。會藩でもそれが知れると柴田を自殺さしたのであつた。

七九門の變

池田屋の事件が長州に聞えると長藩の有志は、もはや穏和な手段では長藩の寃を解き攘夷の目的を達することができないと云つて、國老益田右衞門、福原越後、國司信濃の三人が兵を率ゐて東上した。それは元治元年七月十九日のことであつた。益田右衞門介は八幡から山崎にかけて陣を布き、福原越後は伏見に據り、國司信濃は嵯峨に屯して京師に入らうとし、先づ福原の軍がその前夜半に行動を開始して、藤森まで往つたところで、大垣の兵に要擊せられて敗走した。新撰組は會津の兵と竹田街道の九條村にゐたが、藤森の戰が起つたので加勢に往つてみると、もう戰が終つてゐるので、砲聲の聞えてゐる堺町門へと往つた。そこには益田の軍が迫つてゐた。堺町門には會津と桑名の兵がゐた。新撰組は會桑の兵を援けて戰ふた。會津では鷹司邸に榴彈を投じて火を放つたので益田の軍は忽ち大敗した。新撰組は公卿門を守ることになつた。

國司の軍は蛤門と中立賣とに迫つたが、薩摩と會津の兵に擊破せられた。かくして長州軍は逃迸した。長州軍の中にゐた筑後の眞木和泉、土佐の千屋菊次郎、松山源藏、能勢達太郎、肥後の加屋四郎など十七人は、重圍を脫して天王山に退いた。新撰組は會桑の兵と共にそれを攻めた。十七人は遺書を作り、火を營舍に放つて自刄した。私はその天王山の十七士の屍を收めた山下某寺の僧の書いたと云ふ、十七士自刄の際の想像繪を一

原の田中青山先生の許で見たことがあるが、その繪の人物は十六人であつたから、かぞへそこなひではないかと思つて、二度も三度もかぞへなほしたことがあつた。

天王山から引揚げた新撰組は、大阪へ往つて長州の敗兵を追捕した。その年の九月になつて勇は江戸へ往つた。それは幕府で長藩の罪を鳴らして問罪の師を起さうとして躊躇してゐる際であつた。勇はそこで新撰組の隊士を募つた。

水戸の浪人で深川佐賀町に道場を開いてゐた伊東甲子太郎、その弟の鈴木三木三郎、久留米の篠原泰之進など云ふ浪人が數十人應募した。その中でも伊東は參謀の才があつたので勇は一目をおいてゐた。

禁門變後の京都は、蜚語流說が盛で、長州の浪士が各所に潜伏してゐて、燒打ちをたくらんでゐると云ふやうなことを云ひふらす者があるので、幕府では三條大橋の西詰の榜示場及びその他二十箇所に制札を建てた。

一此度長州人恐多くも自ら兵端を開き、犯禁闕不容易の騷動に相成諸人の難澁も不一方候處、殘賊も追追召捕取鎭に相成候間立去候者は安堵歸住可致候、將又妄に燒拂候抔浮說を唱候輩も有之哉に候得共、右樣の儀は決而無之候間銘銘賊徒を勸め立騷申間敷候事、

一元來長藩人名を勅旨に托し種種の手段を設け人心を惑候故、信用致居候者も之有候得共、禁闕に發砲し逆罪明白に付追討被仰付候、若信用致候者も前非を悔い改心候者は御容免可相成候間可申出候、且潜伏落人等見當候者は速に申出候はば御褒美可被下候、若隱置き他より顯はれ候はば朝敵同罪たるべき事、

この制札は將軍家茂が薨じて征長の役が終つて時まで建ててあつた。慶應二年八月比のことであつた。十津川の郷士中井庄五郎など云ふ浪人がそれを碎いて捨てた。町奉行所では新しく制札をこしらへて建てた。すると復たこれを毀つ者があつた。町奉行所ではしかたなしに復た新しくそれをこしらへたが、こしらへると又それを破る者があつた。そこで町奉行所では新撰組にその取締を依賴した。

それは翌九月十二日の月の明い晩であつた。土佐藩士藤崎吉五郎、安藤鎌次、宮川助五郎など云ふ壯士は、圓山の旗亭で酒を飮み、その勢で三條橋に往つて彼の制札を脫いて河の中へ捨てた。原田左之助が十餘人の隊員を伴れて、榜示場の前の商家の軒下に隱れてゐた。原田は銃を放つて相圖をした。土藩の壯士は忽ち新撰組の圍むところとなつた。

土藩の壯士では藤崎吉五郎が先づ亂刃の下に斃れた。その藤

緒は二十二歳であつた。宮川助五郎は身に數瘡を負ひて捕へられた。安藤鎌次は瘡を負ふて屈せず血路を開いて藩邸に歸つたが、瘡が重いので翌月自刃した。その他の壯士は鴨磧に投下して僅に免がれた。宮川は後に維新の大赦に遇うて赦されたが明治三年になつて二十六歳で病沒した。その宮川の墓は高輪泉岳寺の赤穗義士の傍にある。私はそれを大町桂月翁に教へられて見に往つたことがある。

その亂鬪に新撰組では原田左之助、橋本皆助、伊藤銀之助の三名が負傷した。

八　伊東甲子太郎の死

芹澤鴨を殺した新選組に、その後も血なまぐさい内訌が絶えなかつた。參謀の伊東甲子太郎がまた勇を離れて往つた。伊東は前年に崩御になつた孝明天皇の御陵を衛る山陵衛士になると云つて、十人ばかりの隊員を伴れて高臺寺中の月眞院と云ふのへ移つたのであつた。伊東のかうしたことは、勇のすることが豫期に反したがためであるとか、薩の西郷などが新撰組を攪亂するために桐野利秋の中村半次郎をして買收さしたとか、その他いろいろに云ふ者もあるが、要するに兩雄並び立たざるところに原因があると思ふ。

その時、それは慶應三年六月、幕府では新撰組の功勞を賞して、隊長の勇を見廻組頭格、副長の土方に見廻組肝煎格、助勤の沖田永倉原田などを見廻組格、調役の茨木司、村上清などを見廻組格並、普通の隊員を皆見廻組拘人といふことにした。その幕府の格式をもらふのを喜ばない者が十人ばかりあつた。その人人は伊東の許へ走るつもりで守護職會津侯松平肥後守の公用人小野權之丞の家へ往つて、格式辭退の書をたてまつた。小野は驚いて勇に知らした。勇は腹心の者を伴れて臨み、皆をすかして伴れ歸らうとした。歸れば勇に殺されることは判つてゐる。茨木司、佐野七五三之助、中村五郎、宮川十郎の四人は勇の詞に從ふふりをして、一室に入つて自刃した。他の六人は新撰組を脱してしまつた。

勇の神經に伊東のことがまつはりだした。勇は十一月十八日の夜、伊東を呼んで酒を饗し、彼が籠に乘つて歸るところを、油小路七條上る所に伏せてあつた腹心の者に籠越しに刺し殺さした。そして、月眞院へ人をやつて伊東が刺客のために斃されたと云はした。鈴木三木三郎、篠原泰之進、服部武雄、藤堂平助、加藤羆雄、毛内有之進などが驚いて馳けつけ、街頭にさらしてある伊東の屍を籠に收めやうとしたところで、勇の腹心の者が不意に出て來た。服部武雄、藤堂平助、毛内有之進はそこ

に斃れて、他は逃げ去つた。勇の方でも原田左之助、大石鍬次郎、岸島芳太郎などが負傷したが死人はなかつた。結城無二三は見廻組から新撰組に加入してゐて、伊東を斬つた場合に往きあはしてゐたと云つてゐる。

九　坂本龍馬の死

慶應三年十月十四日突如として將軍慶喜が政權を奉還して將軍職を辭退したことは、佐幕派の壯士を如何に悲憤慷慨せしめたことであらう。その十一月十五日の夜、裏面で政權奉還の斡旋をやつたと云はれてゐた坂本龍馬が、中岡愼太郎と共に河原町西側の酒や醬油を賣つてゐる町屋で刺客の手に斃れた。普通には坂本の刺客は勇と云ふことになつてゐるがそれは疑問である。その當時在京の土佐藩士は紀州藩の三浦安に嫌疑をかけて、襲撃して加勢に來てゐた新撰組の隊員と亂鬪したこともあつた。それは三浦が佐幕派の浮浪であるうへに、嘗て土佐藩の汽船と紀州藩の汽船が衝突した際、坂本が交渉して紀藩から罰金を取つたことがあるので、その復讎でないかと疑つたがためであつた。しかし嫌疑をもつとも深くかけてゐたのは勇であつたから、土佐藩の手で勇を拘縛した時には、谷干城が安岡亮太郎と云合ひ吟味までやつたが、勇が知らないと云ふのでどうすることもできなかつた。それが、はじめにもちよと云つたやうに、明治三十二年比になつて見廻組組頭佐佐木只三郎に見出された今井信郎が斬つたと云つて、それを本人自身の口から漏らしたので、直接それを聞かされた結城禮一郎君が甲斐新聞に書き、甲斐新聞の編輯長をしてゐた岩田鶴城と云ふ人がそれをまた京都で發行した近畿評論と云ふのへ轉載したので、問題になり、谷干城の駁論となつたものであるが、谷干城の說も今井の云ふことが事實に相違してゐるから決して今井でないと云ふだけで、さてそれが何人であるかは斷言してない。『兎に角坂本等を殺したる者は、今日に至るまで誰人なるや分明せず、近藤が直に手を下さざりしは事實の如し。蓋し新撰組原田の徒か、或は其他幕府の徒の所爲ならむ』と云つてゐる。

谷干城はその當時毛利恭助と二人で三條上る河原町小路の大森と云ふ家に宿をとつてゐて、坂本のゐた家とは近かつたので、坂本中岡が刺客に襲はれたことを聞くと、その夜すぐ一しんに馳けつけた。寺石正治君の『南國遺事』の中に收めてある『坂本中岡兩雄遭難始末』は、谷干城の談話をそのまま筆にしたものであるが、それによると坂本のゐた家は『元來坂本の宿は河原町西側の小かなる酒醬油店の二階にして、宿屋にあらで素の町屋なりき。往來より直ちに土間に立ち入れば、酒醬油の客

を置き並べ、土間より直に階子段に取りかかるといふ如き粗造なる構にて　又二階は二座敷となり、各四疊半位の廣さなりき』の家であつた　今井信郎から直接その話を聞いたと云ふ結城禮一郎君の著には、『河原町藥師の油屋といふ旅宿の二階』で斬られたと云つてゐるが、そんなことからして谷干城に反駁せられたことと思ふ。

その當時坂本は才谷梅太郎、中岡は石川清之助と稱してゐた『偖て急報のまゝ毛利と二人駈け付けしに、誰人も未だ來り居らず、坂本は即死の體にて、僕はうなり、石川は重傷を負へども猶ほ兩刀を保ち居りき。河原町には藩の御屋敷もある事とて、通知の及ぶや否や馳せ集れるもの數多にて、又白河邸の浪人宿所にも告げやれば、田中謙介(伯爵田中光顯)等も驅け付け來』て、石川を介抱しながら、『樣子を問けば、最初坂本は奥座敷の北側にあり、石川は南側にあり、互に對座して談話中なりしに、十津川の者なりとて二人名刺を通じ來る者あり。坂本の僕は出でて、是を取次ぎしに、其名刺は能く見れば名刺にあらで、唯紙片に文字とも何とも讀めぬ怪しきものを記しありければ訝しき事なりとて、石川と行燈に差向ひ、照し見居る中、卒然何物とも知れず座敷に闖入し來り、「こなくそ」といひ聲諸共に、石川を後より袈裟掛に切り付けたりき。石川は事の急なるより刀を取る間もなく、短刀のまゝにて突き戻せども深手にて協はざりき』と云つた。それから坂本のことを話して、『此時坂本は後床にある刀を取らんとし、彼方に振り向く所を、後より一刀切り付けられ、此方に見返る際、又一刀頭上に切り下げられしに、餘りの急にて刀を拔く暇なく、鞘のまゝにて受けしに、鞘ごしに削れたりき、刺客は再び拜掛けになで切りし、坂本は其時前腦を美事に半截せられ、即死なしたりき』と云つた。

刺客は斬つたうへに『亂刀にて手當次第切り、「坡うえええ」と云ひつつ出』て往つた。石川の話によれば『刺客は二人の樣子』であつたが、はつきりしたことは判らない。坂本の僕も『二階に斃れ』てをつたが、『未だ死に切れず、唯うなり居りしも樣子は固より分ら』なかつた。そして、『最初一番に斬られし者なるや否や』と云ふことも判らなかつた。今井の説によると今井と一緒に坂本を斬りに往つたのは、京都の與力桂早之助及び桑名の渡邊吉太郎の二人であつた。そして坂本の所には三人の書生がゐて、二人が逃げて一人が斬られたと云ふことになつてゐる。

田中謙介等は石川を『勵まし、長州の井上聞太は如何ぞ、彼樣の大傷を負ひ、迚も快復六ケ敷と思ひしに、彼の如く平癒せり、是式の事何かあるなど頻りに元氣を添へしも、何分深手の

事とて、翌日終に斃れた』のであつた。

刺客の詮議になつて、『抑刺客は何者なりしや、初太刀を石川に加ふる時こなくそとひひしは確かに四國訛りに似たり。されども其手係りを得るに由なければ一同唯だ無念とばかり思ひ居りしにふと其現場に於て一箇の鞘を拾ひ得たれば、余は後日毛利と共に伏見の薩邸に赴き、中村半次郎の引合せにて、新撰組の舊黨なりし伊藤甲子太郎の弟某に見せけるに、こは新撰組の一人四國松山の浪士、原田左之助の差料にあらずやと鑑定したのであつた。

坂本と中岡が刺客の手に斃れたのは、伊藤甲子太郎が勇の手に斃れる三日前であつた。坂本と親しい伊藤は、ある夜坂本に逢つて、『足下を見廻組が狙つてゐるやうだから用心するがよからう、』と注意したが、坂本は伊藤が曾て新撰組であつたと云ふところから、その忠告を聞かなかつたのでこの奇禍に罹つたと云ふ逸話がある。

九　墨染の狙撃

孝明天皇の崩御後時勢は急轉直下した。洛北岩倉村に幽閉せられてゐた岩倉具視が立案して、西郷、大久保、廣澤、品川等の薩長諸藩士が措畫した改革案は、慶應三年十二月九日になつて大號令となつてあらはれた。三百年門閥の幕府を廢して、政權を王政の古に復し、慶喜の將軍職を解き、會桑二藩の禁門の警衛を止め、長藩の罪を赦して入京を命じ、同時に三條實美以下五卿の官職を復し、議奏傳奏の官職を廢して、總裁、議定、參與の三職を置くことになつた。

京都へは藝藩の兵が先づ入り、次に長藩の大兵がのぼつて來た。薩藩の兵と土佐の兵とは會桑二藩の兵を追ふて禁門の警衛に著いた。幕府の運命ももうきはまつた。

二條城にゐた慶喜は十二日の夜になつて大阪へくだつた。慶喜を擁して薩長の賊軍を討伐すると云つてゐた會桑はじめ旗下の士もそれを見て皆大阪へくだつた。勇はその際二條城を敵の手に委してはならぬと思つたので、新撰組の隊員五十名ばかりを伴れ、若年寄永井玄蕃頭を先頭にして往つた。城中には水戸藩の兵がゐて勇を入れなかつた。勇はしかたなしに大阪へ往くことにして、伏見まで往つたところで、薩兵の影がなくて不用心であるから、永井に別れてそこに留まることになつた。

伏見には薩摩藩の屋敷があつて、伊東甲子太郎の弟の鈴木三木三郎、篠原泰之進、加納鷲雄、富山彌兵衛、阿部十郎などがゐた。皆勇に對する復讐心に燃えてゐる者ばかりであつた。彼等は勇の通行する墨染の街に隱れて銃を擬してゐた。

十二三人の隊員が伴れて勇はそこに來た。皆馬に乘つてゐた。忽ち銃丸は飛んだ。勇は右の肋を射られた。銃丸はまた隊員の石井清之進を殺し、馬丁の文吉をも殺した。勇は傷のことは何も云はず、剌客の逃げ走る方向を敎へた。新撰組では剌客の一人を殺し、一人を捕縛した。

勇の傷はかなり重傷であつた。土方などが無理にすすめて勇を大阪へやり、慶喜の侍醫松本良順の治療を受けることになつた。明治元年正月二日になつて慶喜が大兵を率ゐて上京し、三日には伏見鳥羽の戰となつたが、勇は負傷のために從軍することが出來なかつた。

伏見鳥羽の戰は四日に亘つた。新撰組では土方が勇に變つて隊員を指揮して從軍した。新撰組は伏見に向つてゐた。薩藩の兵は桃山から御香宮に陣を敷いて幕軍を砲擊した。勇の養子の周平がここで戰死した。山崎烝、井上源三郎の徒も數十人死傷した。鈴木三木三郎、篠原泰之進、荒井忠雄、富山彌兵の徒は、官軍に屬して城南宮のあたりに戰ふてゐた。橋本では飯倉新八が奮戰した。

六日の夜になつて慶喜は開陽丸に乘じて東走した。新撰組の殘存部隊八十九人は勇と共に幕艦不二山に收容せられて、これまた東上して品川へ着いた。

十　新撰組の末路

「みやさん、みやさん、お馬の先に、ちらちらするのは、なんぢやいな、あれは朝敵征伐せよとの、錦のお旗を知らないか」錦旗を奉じた官軍が東海東山の兩道からのぼつて來た。新撰組では若年寄永井玄蕃頭をとほして甲州を經略することを獻言した。

二月の中旬になつて甲陽鎭撫隊と云ふのが編成せられた。これは新撰組が中心となつたもので勇は大久保大和と稱し名を剛と改めた。その勇は若年寄格となつてゐた土方は內藤隼人と稱して寄合席となつてゐた「結城無二三」は、甲陽鎭撫隊軍監と云ふ役名を持つてゐた。

二月の末になつて、隊二百人ばかりで江戸を出發した。新撰組では勇土方の他に、沖田總司、永倉新八、原田左之助、齋藤一、尾形俊太郎、大石鍬次郎、安富才助、中村玄道、岸島芳太郞、相馬肇などがゐた。路は勇と土方の故鄕に近い多摩川べりを經た。勇と土方の故舊親戚は、沿道至る所に酒を置いて待つてゐた。

祝ひ酒のために日を遲らしたり、雪にはばまれたりして三月四日にやつと笹子を越えて、柏尾に陣を敷き、勝沼に關門を立てたが、板垣退助の率ゐた土佐藩の兵に一蹴せられてひとたま

りもなく退却した。勇は吉野村に踏みとどまつて防戰しようとしたが、その時勇が隊員に對して食言したことがあつて、それがあらはれて隊員の怒を買つたので　何人も軍令に服する者がない。隊員は吾れ先にと江戸の方へ歸つて往つた。これには勇も驚いて土方と謀り、永倉原田の二人をやつて調停さしたが、しかし隊員はもう勇に對する尊敬の念をなくしてゐるので、その威令は行はれなかつた。

江戸へ歸つた後に再び隊員と會合する約束になつてゐたが、違約して姿を見せないので、隊員はもう勇を見放して會津に走らうとした。勇は甲陽鎭撫隊の屑書に執着を持つて再度の甲州入を計畫してゐるところであつた。永倉と原田が仲間に立つて斡旋して　醫學所で隊員と會見さした。勇は死生を盟つた隊員が一朝にして己を棄て　去らうとするのが不快でたまらなかつた。『おのおのがたは　この近藤を何と思ふてをらるる、以後わしの云ふことを聞けばよし、さうでないともう何もかまはない。』と勇が云つた。隊員は沸騰した。この勇の一言によつて新撰組は瓦解してしまつた。

勇はまだ甲州大守の夢がさめなかつた。彼は土方と僅に殘つた隊員を伴れ、流山へ往つて官軍の形勢を觀望してゐた。その時東山道總督本營が板橋に進んで來た。「坂本中岡兩雄遭難始末」によると『我藩の上田楠次は軍事係となり、今云ふ傳令使か小參謀の如き者にて、長州の祖式金八郎等と下總流山を鎭撫に行きしに、彼地の一揆の跡に大久保大和剛といふ者あり、來り恭順の旨を述べ決して王師に抗するの意なし。唯他賊の侵入に備ふ旨を白ししかば、然らば官軍も敢て咎むる事なけん、但し汝は首領なれば同道して總督本營に參り直直御詫をなすべしと伴ひ來りしに、其大久保剛といふ者、いかにも近藤勇に似たりと上田の申出ありしかば、襄の伊藤甲子太郎の弟にして、河原町刺客の刀鞘を鑑定せし某が、猶幸ひ薩軍に從ひ、本營に居るを呼び出し見せしめしに、其座敷口の唐紙の側より覗ふに紛ふことなき近藤勇なれば、伊藤の弟は進み出で、勇殿御久ふといへば、近藤とは多年新撰組にて面識の事なれば、今更一言の陳辯もなく直に大小刀を取り上げ』て縛し、それから谷干城と安岡亮太郎の立合ひ吟味で河原町の刺客のことを調べたが、勇は『坂本を切りし事は知らず』と云つて答へなかつた。

四月二十五日になつて勇は板橋で斬罪に所せられ、首は京師へ送つて梟首にされた。年が三十五であつた。勇及び新撰隊を豺人のやうに恐れてゐた京洛の人が、その首を見てどう思つたであらう。土方は翌年五月函館に戰死した。勇からは一つの弟であつた。明治九年郷里の者が松平容保の篆額、大槻磐溪の文を刻んで勇と土方のために板橋に建碑した。それは殉節兩雄之碑と云ふのであつた。

拙稿を草するにあたつて參考にしたのは、松村、結城、寺石三氏の著書の他に、土佐勤王史、土佐偉人傳、七年史、明治歷史、近世紀聞、山岡鐵舟傳、霊莊等の諸書であつたが、その中でも多く材料を得たのは松村巖氏の近藤勇であつた。

苦鬪氣分と享樂氣分

德田秋聲

苦鬪と享樂

苦鬪といふと、何か身に餘る仕事を遣遂げようとする努力のやうに思へる。たとへば日本が日清戰爭から日露戰爭へかけて、歐米人の輕蔑と壓迫に反抗しようとして、國民的に熾烈な敵愾心と反撥心をもつて、遮理無理努力したやうな氣分の緊張のやうなものがそれで、その當時の日本は開闢以來の苦酸を嘗めたといつても誇張ではないだらう。これは明治大帝から下々に至るまで一樣にさうだつたので、文壇なんかも決して御多分には洩れてはゐなかつた。單に貧乏であつたといふだけではない、何かしら國民的に苦鬪氣分が鬱積したやうである。大戰後の獨逸なぞも、正にそれと同じ苦酸を嘗めつゝあるもので、行つて來た人の話なぞを聞いてみても、獨逸人が報復——必ずしも戰爭ではなしに、國民的に苦鬪しなければならないと云ふ氣分が鬱勃としてゐるといふことである。その當時日本から見に行つた代議士たちは、それらの獨逸人を憐れんださうだが、大使館にゐる人達は反つて其の笑つた代議士を嘲笑したくらゐ、獨逸人は一生懸命になつてゐるので、早晩國運が勃興するに違ひないと言つてゐた。ヒンデンブルクが輿望を負つて起つた事實に見ても、獨逸人の覺悟が判るやうに思へる。

苦鬪は率ね以上のやうな場合で、人間としては餘り幸福な時代ではないが、しかし苦鬪氣分が失せれば、人間は衰へるより外ないと思はれる。人間の生活はいつも享樂的でありたい。殊に藝術なぞは、享樂しながら創造せらるべきものであらう。人

間の生活が若し藝術的に創造されべきものなら、人間生活も享樂しながら、合理的に創造さるべきであらう。共產主義とか無政府主義とかいふやうなものも、さうした極樂淨土を憧憬するより起つた理想であらう。誰もそれを拒む理由はない。しかも唯今では寧ろ苦闘をでも享樂するより外はないやうである。日清日露戰爭時代では、まだしも蠻勇でもつて存在を明らかにすることはできたけれど、今はそれよりももつと國民生活の不安が深刻になつてゐる。

「苦闘」と「享樂」

——心理的方面と社會的方面とから觀たる——

千葉龜雄

一

現代社會の苦闘氣分と、享樂氣分を眺めるには、大様二つの觀察が要るであらう。一つは心理的である。他の一つは社會的である。

先づ第一の心理的な方面から見るならば、現代文明の奮闘氣に棲む限りの人類は、少なくとも、多くか、少なくかの程度で、苦闘に喘いで居るものだと云へるのである。すなはち現代人は、あまりに急激な文明の爛熟と、あまりに眩しい文明の光射に逢つて、ことごとく面くらつて居る。あまりに慌たいしい刺戟と、衝動の中に野放圖に晒されて居る。限りある肉體と官能を持ちながら、際限のない慾望を、その文明の中から攝取しようとするから、勢ひ神經が堪えず興奮し、生活氣分が、始終いらいらして緊張しきつて居る。そうした極端な高脈生活は、スペンサアが云つたやうに、單にアメリカばかりの話ではない。このあまりに奮闘的な、慢性緊張の生活は、世界いたるところどこにでも在る。單に人が富を追はずに、富が人を追ひ廻す資本家階級と云はず、中流階級と云はず、勞働階級と云はず、今や一切の人類は、みな血みどろになつて、こんな狂人のやうな苦闘生活を營なんで居る。この苦闘から、一寸でも目を

離したら最後、その人々はその各々の陣營で、直ぐ生存の落伍者たる外はないからである。

二

張りきつた苦悶の生活は、そこに弛緩の方式として、どうしても何等かの享樂を求めざるを得ない。けれども現代の享樂が、いかに中正であるものを疾くに突破して、どんなに、異常な、過激な刺激を含むことを條件とするか。我等はたゞそれを知ることによつて、また現代の苦悶氣分の、いかに異常で、病的であるかを知ることが出來るであらう。

私はその異常享樂の、最も著しい兆候の一つだとして、現代におけるアルコオル濫用の心理を提出するのが、こゝでは最も便利だと思ふ。

近代において、イギリスよりも、ポオランドよりも、ラシアよりも、一番强烈な飲料を用ゐるのはフランスだと云はれる。そこで一八七七年にエミイル・ゾラの「居酒屋（ラツソセア）」が出版されて、十五年間に、百五十版以上が國内で賣られたことに怪しむに足りぬであらう。そしてその頃、犯罪者及び精神病者の研究者であつた一醫師が、パリイ醫科大學々報に發表した統計によれば、フランス國民一年一人當りの酒精平均飲料が、葡萄酒一二〇リツトル、麥酒二十二リツトル、ウヰスキー三リツトル、サイダー十リツトルである。飲酒者には、婦人はもちろん、搖籃に居る赤ん坊さへも含まれてゐる。そしてフランス國内での酒精の消費量は、五十年間に二倍した。しかも人口は、三千二百五十萬から、三千五百萬、即ち二百五十萬人しきや殖えぬのである。その上、その增した分の酒精はウヰスキーであつて、十年前ウヰスキイ一人當り二リツトルのものが、十年後に三リツトルになつた。また五十年前、フランス國内には、居酒屋、もしくは酒の小賣店が二十九萬七千八百十二軒であつたものが、五十年後に三十七萬二千九百五十一軒となり、百二人に對して、一軒の居酒屋があると云ふ事實は、當時の飲酒國たるラシアにさへ見られぬ奇觀だとされた。その結果、飲酒の末、所刑に觸れたものが、フランス國內で、一年六萬五千人だと報告される。

三

また當時フランスを旅行した一文人を驚かしめたのは、飲酒者に、年齡の差別、性の差別が無かつた事である。即ち彼はそこで、一人の學童が、學校へ行く途で、革鞄の側に小さな瓶を下げて居るのを見た。で、それは何かと問いた。すると子供は

直ぐ瓶の蓋を開けて、一切れのパンと、赤葡萄酒の頸の太い瓶に、固くコルクをさしたのを見せた。後で聞くと、娘達も少年も、それが無いとみな學校へ行かない。そして學課休みには、みな瓶を開けて飲むと云ふのであつた。

なを、子供ばかりで無い。婦人に酒を飲む風習の珍らしくなくなつた事は、單にフランスばかりではない。單にわが青鞜社の女性達が、五色の酒を飲んで、當時を驚倒さした位ゐの話では無い。殊に世界の上流階級婦人にそれが常習となつた點も、その方面の研究に詳しい人々の説述する所のものである。

またパリイ勞働者の飲酒癖について、彼は説くのである。彼等は飲んだくれではあるが、決して始終、ぐでんぐでんに醉拂つて居るわけでは無い。たゞ、絶えず、酒精の刺激だけを持續しようとするのだと云う。そこに近代勞働者の苦闘がいかに深刻であるかがわかる。すなわち彼等は酒精によつて、いさゝかでもその苦闘意識を、胡摩化し、麻醉することによつて、せめては何時間かの忘我に浸らうとするのだ。その涙ぐましい切ない生活感を誰れか痛切に感受せぬものがあらう。處で當時のフランスの勞働者が、一般にどんな風に飲酒するかとなれば、それはこうだ。彼等は朝飯にはパンも何も食べずに、ウヰスキイか、若くは、俗に喉焦し、もしくは、喉こわしと呼ばれる、苦い、もしくは強烈な酒を一杯あをる。次に十二時の晝餐時に赤葡萄酒一リツトル、食後に珈琲と一緒にコニヤツク一杯、六時の夕飯にまた赤葡萄酒一リツトル、これが、先づ「しらふ」な方の勞働者の模範だと云うのである。ましてや、それ以上の酒好きとなつては、朝から好い加減傾むけて、その上、食時と食時の間に、アブサンを何杯も飲むのが普通。そこで、病院の厄介になる者が多いのだが、奇態な事にその病人達は、醫者に對して、私は決して酒類は用ゐませんと答へる。が、或る一病勞働者を研究して、彼が朝の三時から、午後三時まで、半リツトルづつの赤葡萄酒を飲んで居る事が分つた。そこで、醫者たる彼は、しきりにその害を説いたが、その患者は、赤葡萄酒は酒精ではない。無害な強壯劑だと主張して、遂に死ぬまで承認しなかつた。……と云うのだ。

四

彼は更に、パリイ上流婦人の飲酒癖について説く。そこでは、食事毎に、多量の赤葡萄酒と、コオヒとコニヤツクと、それから、元氣づけと云う譯で、必ずアブサンが飲まれる。殊に午後五時から六時の間が、アブサン時間と呼ばれて居る。かくして貴婦人達に、男性同様に、可なり酒害に苦しむのだが、そ

の時はいろいろな風雅な病名で胡摩化す。その癖彼女等は、面前で酒の話などをされると、直ぐ「下等な言葉」だとて柳眉を逆立てるが、さて人の見ない處では、消化力を助けるとか、神經を鎮めるとか、或は氣欝をはらすとか云つて、綠色なリキユウ酒だの、香ばしいベネヂクチン酒だの、等、等、等、あらゆる酒杯をゆつくりと飲みつゞける。上流階級の贅澤な婦人達に、鼻のあたまが赤かつたり、酒精中毒にかゝつたりするものの多いのはみなその結果である。

また　朝から晩まで能率々々と云ふのが口癖のようになり活動マニヤにかゝつて居るアメリカでは、アルコオル飲料一人割の消費量が、一八五〇年に、四ガロン、〇八であつたものが　一九一二年に二二、九八、一九一三年に二二、六八、一九一四年に、二十二ガロン、四九までに飛躍して居る。尤も昨今は、禁酒勵行であるから、その比例を當て篏める譯に行かぬのであるが、これが爲に、刺激的な、代用飲料を用ゐずに居るとは想像されない。またわが國の都會地において、バアが夥しい數をもつて殖えて行く。そして、そこでも強烈な酒精が、夥しく消費されて居る。

五

酒精を飲用することは、もちろん現代に始まつた譯では無いが、現代において、その消費量が素晴しい飛躍を示すのは一體何の爲であるか。それが殆んど、文明人の本能になつて居るためである。醫者は酒精が　興奮劑であると云ふ學說を否定して居るが、用ゐる人々にとつては、立派な興奮劑だと思はれて居る。また、或は麻醉劑だと云ひ、鎭靜劑だと云ふ。どれにもみな相應な根據がある。とにかく、酒精はいづれの理由からしても、高級な頭腦中樞を麻痺さすることによつて、人類の潜在意識であるところの、縛られない情緒生活と、原始的な衝動に解放されようとする要求を助けるものである。そして彼等はこれ等の、原始的機能の昂進と刺激と興奮に自分を打ちまかせて、この苦悶の現實から一寸でも救濟されようとする。なとへばこれの與へる結果が、どんなに有害であらうと、もうこれを考へる餘裕の無いほど、彼等の苦悶に追ひつめられて居る緊張はそれほど急激なのである。また、酒精の反應作用を借りて、心理上の弛緩を求めるという論理はその弛緩によつて、次に用ゐるべき精力を、清新なるものに作り直さうと云ふ意識からも來るのである。そこで、努力、苦悶、忙がしい發展、精神の集中に一生を忙殺されて居るアメリカの諸都市で、毎年二億ガロンの酒精飲料が、かつて消費された事實の說明がつくの

である。

要するに、現代文明において、最も幅廣く展かつて居る酒精の消費は、現代文明の享樂の最高位を占めるものである。これが與へ、それが含む享樂氣分は、即ち最も適切に、現代の苦闘氣分を、同時に反映して居るとも云へるのである。

六

次に、社會的に現代を横觀し、縦觀すれば、こゝには明らかに、享樂のみを享樂する特權階級と、苦闘のみを苦闘する無産階級がはつきりと分たれる。もちろん、その享樂階級とても前に述べた意味で、苦闘生活を營んで居るのではあるけれども、この苦闘は、いつも莫大な外れつこの無い獲得を賭けて居るものである故に、云はゞその苦闘も、一種の享樂的遊戲と云へる傾むきが無いでは無い。いな、それは贅澤な、慘忍な競技である。なぜならば、彼等が富を獲得する欲望は、その富をいかに利用したかと云うことよりも、より多く、それを獲得したと云う滿足においてことに享樂されるからだ。そして自分が何億の富を獲るために、いかに無數な落伍者を作つたか。いかに澤山の無産者が、彼の工場の中にあつて、それらの一家族の生命が、彼の機嫌一つで、どうにでも生殺され得るか。この滿足が、ますます彼の、富の慾望を享樂させ、その殘酷な非社會性と、非人道精神を、ますます鋭くさせる。

七

すでに、生活の苦闘さへも享樂である。彼等の生活の歯車が軋つて居る限り、その歯車の齒の下に、多くか、少なくかの人間が、絶えず刻々に轢き殺されて居る。そして彼は、その斷末魔の呻きの交響樂を聞いて、華麗な車上に微笑して居る。已に生活さへもそうした慘忍な享樂であるならば、その享樂として享樂するものが、もつと慘忍な、頽廢したものであることは止み得ない。それは、どれほど毒々しく刺激されても、なを飽くを知らぬところの刺激と衝動でなければならぬ。昔し、ロオマ王朝の末路に當り、其頽廢期に生きた帝王コンモダスは、無數の奴隷や、人間を使つて、莫大な費用でもつて、遠い國から猛獸を盛んに驅り集め、それを斬殺することに帝王の享樂を求めた。そして、彼れは、自分を、ネミアンの獅子を殺したハアキユラスにとして、自分の肖像を鑄た貨幣を命令して作らした。今日でも富國の貴族は、廣い邸園で、猛獸を銃射する娛樂に享樂して居る。

けれどもそれは怪しむに足りない。現代の金權階級が、すでにそうした原始的な、何等の精練を經ない心性を持つものであ

る限り、その現代に生み出して居る享樂機能の構成が、すべて、アメリカ式に、けばけばしく、騒々しく、野卑で、殘忍で、排他的で、性慾的で、挑發的で、また自我的で、あることは止み得ない。色彩がぎらぎらして、音樂が馬鹿々々しく大裂裟で、光射がべらぼうに贅澤だ。そしてそれが人間の神經を鎮靜させずに、逆に、衝動から衝動の渦へと捲き込んで行く。現代の享樂機關が、一つとして、さうした氣分を飽和し、內具しないものは無いのである。それによつて、より多くの群衆の官能と感覺を興奮させ、欲望を刺戟して、出來るだけこれを購買させようとする。現代の娛樂に、必らず利益宣傳の內意義を具有するのは、これがためでなければならぬ。その外、享樂階級の性慾に對する極味と研究の飛躍的微妙と精細を極めて來たことも、またその一つに數へられねばならぬ。

八

次に無產階級の苦悶氣分については、改ためて言ふものが無い。あまりに明白だからだ。特權階級の苦悶は目的の爲めの苦悶であるが、無產階級の苦悶生活は、手段の苦悶である。手段たるものゝ苦悶である。たゞ苦悶せねばならぬと云ふ意識の外に、何一つ考へられない苦悶である。救はれない苦悶である。すべての享樂とは、苦悶の緩衝機關であるところに、始めて重大な意味があるのに、彼等は、その享樂すらも惠まれない。ゾラは、ルウゴンマッカアル叢書において、さうした無產階級が、すがり所が無く墮落して行く末路を描へたが、現代ではもつと修正される。即ち人類の最多數を占める、さうした現代の苦悶生活階級は、それを運命と諦らめるにはあまりに批判的になつて來た。そこで、彼等の苦悶氣分には、もつと黑味が加はつて來た。それだけ彼等の氣分の深刻で陰暗で、それだけ底深い何ものかを中に潜めて居る。現代の苦悶氣分が、單にたゞつた苦痛の叫びでなく、何とも云へない陰慘な凶鬪氣を帶びて居るのはその爲である。そしてそれの現代享樂階級の構成する享樂氣分に對する、その二つの正面衝突が最も恐怖すべき危險を生むものであることは、どれほど警戒されてもそれで充分であるとは云へぬ。

またことに私の關心する一つは、無產階級が、性の享樂を無慘に奪はれて行く氣分の影響である。たゞし女性を享樂の對象とすると云ふよりも、むしろ性慾を享樂慰藉の對象とする欲望心理は、現代において、殊に强烈な刺戟を受けつゝあることが爭へない。たとへば、享樂階級の重大な欲望の一つは、この方面に特に益す大膽に放縱に放射されつゝある。然るに無產階

級は、經濟上の壓迫から、益す結婚が遲くなり、或は全く性機關を獲る機會を掴むことさへも次第に少なくなる。この解放されない兩性の煩悶と苦悶氣分が、どんな傾向を採るものかも、また重大な社會現象でなければならぬ。

空想家の『氣分享樂』

安成二郎

一

この春、花の咲く時分のことであつた。本郷へ行つた序でに、ふと久しく會はない知り合のA——を訪ねる氣になつて、彼が毎日自宅から仕事に出て來てゐる下宿の方へ歩いて行くと、途中で、あまり美しくは無かつたが、落着いた奧樣風の、彼の小說の愛讀者とも見られる三十前後の婦人と連れ立つて來るA——と行き會つた。Bのところへ行くのだが、君も行かないか』と言ふので、私も一緒に牛込のBを訪ねることにした。その婦人は本郷三丁目でA——にお別れをして行つたが、そのあとで、

「×××の君の小說を讀んだか、あんな女がゐるのかね』とA——に訊くと

『さつきの人がさうだ』と彼は答へた。

その小說といふのは、ある會社員か何かの細君が、病氣で醫者に通つてゐるうちに、その醫者の挑むやうな視線を受容れて、病氣がよくなつてから醫者に手紙をやつて、ある日二人でどこか郊外のあいまいな宿へ行くことを書いたものであつた。——が、之は餘談である。さういふ風な享樂の仕方も、この頃の女の道德にはあるらしいが、この文章ではあまり、そつちの方に考察を向ける氣持になつてゐない。

さて、A——と私はB——を訪問して、暫らく雜談をした後、銀座へお茶を飲みに行かうとB——が言つて、B——はあるかないかの髭にジレツトを當てたりした。私などは右の方を剃つて左も當つてゐるうちに、もう右の剃つたあとの髭が伸び初める位に忙いので、それて小說を書くひまが無いのであるが、この

髭のやうに輕妙な小説を書くB――は、髭をも苦もなく剃つて了ふと

『自動車で行かうぢやないか』といふのである。

A――もB――もまだ小説を書き初めず、飜譯などをしてゐた頃は、毎晩のやうに銀座のあるカフエに紅茶を飲みに行つて、そこの女給の誰れかに目をつけたりしたので、何年か前のさういふ享樂を之からまた始めようと、二人で相談が出來てゐて、その日は享樂復活の第一日だつたのであるが、その頃電車賃も惜しかつたのが、今では自動車で行くやうになつたのである。二人とも酒を飲まないので、自動車代は紅茶やホットレモンよりはずつと高いのである。

夕方のお濠端を自動車が快速力で駛つてゐる。お召を着たA――と大島を着たB――とが、熱心に話し合つてゐる。外から見たら、相場の話か地所の話でもしてゐると見えもするであらうが、實は二人の話題は、大阪のあるカフエの一人のウエートレスについてなのである。そして自動車の行く先は銀座のカフエなのである。――之が都會生活の享樂の一つの相である。

恰ど私はその日、勤めが夜の日だつたので、勤め先の新聞社に近い數寄屋橋で、その自動車を降りて二人に別れたのであるが、出社して見ると、夜勤の人達が皆な顏を揃へてゐて、そこには近代生活の烈しい勞働の相が展開してゐた。皆な二三十錢の貧しい食事に腹を拵へて、原稿を書く者、標題をつける者、電話をとる者、編輯をする者、校正をする者、さういふ編輯室の活動につれて、二階の工場では活字を拾ひ、組み、一階の印刷室では沸き立つた鉛を流して鉛版を作り、輪轉機に油を差し、發送室では、印刷された新聞を包裝し、トラックに積んで停車場にかけつける。さういふ風にして、夜の十二時過ぎるまでに、新しい材料によつて、何度も新聞を作り直し、最後の東京市內版が、銀座でお茶をのんで夜更けて歸つて、翌る朝、九時頃眼を覺ますA――やB――の枕元にちやんと届いてゐるのである。

が、さうして自動車でお茶を飲みに行くものにも生活の勞働がある。今は原稿料も却々高いし、細君も紅茶を飲みたがるし、小説の材料を持つて來る會社員の細君もさう澤山は無いのである。そして、人の遊んでゐる時、夢を辿つてゐる時に起きて働いてゐる新聞記者にも、それ〴〵の享樂はある。仕事のひまに一寸ラジオの追分を聞いたり、電信室では電報の切れ目を見て下手な將棋を差したりするのである。が、社長に將棋を禁ぜられて、その哀れな享樂も終りを告げたのであるが、その將棋に誘惑されて毎晩のやうに社で夜を過し、家に待つてゐる住

妻や子供を抛擲し、訪ねるべき人をも訪ねず、義理人情を缺いてゐた意志薄弱な私などは、此の上カフェが政府から禁ぜられたら、どんなに氣が樂になることかと思ふ位ゐ、私は、A——やB——が昔カフェ通ひをしてゐた頃から、今もそれが續いてゐるのである。

近頃のこと、銀座のあるカフェで、丈をきいたら五尺三寸と言つたが、すらりとした肉付の美しいウエートレスが、私が長く住んでゐた秋田の田舍の、その村で生れたといふので、よくきいて見ると、私の父母と彼女の父母が知合ひであることが分つたが、カフェの享樂には、偶々さういふ出來事もあるのである。尤も、B——が私のカフェ通ひを批評して『君はどうも精神的でね』と言つた通り、私はB——の『贈り物』のやうな事件の經驗は無いのであるが、私には私だけの享樂氣分があり、他の窺ひ知らない苦勞もあるといふものだ。

二

だが、生活の上の、新聞記者の苦闘も、カフェ通ひの享樂も、それだけをとつて見れば、石川啄木の歌に、働いた後の快き疲れ、といふ意味のがあつたと思ふが、その歌のあとに一杯の紅茶を添へた位ゐの淡いもので、それについての私の饒舌が、少し過ぎたかも知れない。

然し、一體、働かなければ食へない生活の苦闘といふものは、程度の差こそあれ、この世の中では大多數の人の味つてゐることで、言つて見れば、社會は生活の爲めに苦闘するものと、生活をエンヂョイするものとの二つの階級の上に組織されてゐるのである。賃銀奴隸のカフェの享樂などは、永久に續く生活の苦闘のために息をつくだけで、純粹の享樂とは縁の遠いものである。筋肉勞働者が、その日に得た賃銀をその日に酒にして了つて、貯金の觀念の無いのは歎かはしいなどと、內務省あたりの小役人がよく言ふけれど、當の小役人にしたところで、その月に得た賃銀をその月の酒にしてゐるので、義理にも人のことに口出しなどの出來ない世の中なのである。有らゆるサラリーマン、すべての勞働者、彼等は皆なひつくるめて、一方の生活を享樂する階級のために働いてゐる賃銀奴隸なのである。その苦闘は甚だしく消極的で、享樂と言つても、決して純粹な享樂とは言へないのである。

それでは一方の、人生を享樂するものとはどういふ人なのであらうか。平凡な見方から言へば、食ふために働かずに濟む人人の遊樂の生活がこれである。彼等には翌日の苦闘が無く、享樂は單純な享樂として、日から夜へと續いて行く。享樂のため

に費やす金は、翌日の生活に何の影響も及ぼさず、享樂はそれだけ生活を賑やかに豐かにするばかりである。實に、さういふ生活も此の世の中には有り得るのである。生活の爲めに、日夜苦しみ働くものに比べて、それは何といふ違ひであらうか。勞働者が金持を見て、一圖に、彼等を享樂生活者と考へても、無理な解釋では無いであらう。苦闘と享樂の生活——言ひ換へればブルジョアとプロレタリアの生活の對照では無いか。

然し、本當は金持は享樂の同義語では無いのも此の世の中の常態である。若しも金持は何時までも金持であれば、封建時代の大名のやうな、先づ〳〵子孫代々金持でゐるものとすれば、或は金持と享樂とはシノニムとなつたかも知れないのであろが、金は天下の廻り持の世の中では、さうは行かないのである。で、金持の享樂に不安があり、悲哀がある。そして一方、食ふために働く者には、之は覺束ない希望であるが、萬一金持になれるかも知れないといふ夢があるので、その苦闘に光明がさしたりするのである。そこで一變して享樂が消極的になり、苦闘が積極的になつたりするのである。そして今では、享樂も苦闘もあざなへる繩のやうな、甚だ曖昧なものになつて了つたのであるが、快樂を追求し、苦しみを嫌忌する人間の本能は、然し、それで引込んではゐなかつた。享樂主義といふ變なものが、金のあるなし、生活のために働く働かないに關せず、誰れにでもとり憑くことになつたのである。で、徹底的な享樂主義者といふものが、谷崎潤一郎氏の小說の主人公の程のものでも、銀座邊にゐるかどうか、少し疑問であるが、然し、誰れでも、カフエにしろ、戀愛にしろ、その場〳〵では、時によつて立派な享樂主義者となることが出來るのである。つまり、享樂主義的氣分を味ふので、紅茶を飲みに銀座へ自動車を走らすのも、酒をのんでウエートレスの視線を追つかけるのも、何れは享樂氣分なので、斯ういふ享樂主義者なら、銀座あたりに、毎晩佃煮にするほどうろついてゐて、俄か雨に濡れたり、チップをやりすぎて、歸りの電車賃に困つたりしてゐるのである。ある享樂主義者など、チップが無かつたので、電車の回數劵を五六枚引きちぎつてやつたところが、ウエートレスがサンキュー、オーライと言つたなどと——

三

近頃のこと、私は目白の女子大學にある教授を訪ねて、應接で待つてゐる間、窓に立つて校庭を眺めてゐると、學校で働きながら勉強してゐる生徒らしい、水を汲んで校舍に運んでゐる若い女が目についた。どこの學校にもさういふ生徒がゐる。女

よりも男にそれが多い。官廳や會社の給仕などは大概さうして働いて、夜學に通つてゐるのであるし、相當な職業についてゐる青年でも、別に目的を立てゝ勉强してゐる者は無數にある。學校の卒業期には、さうして勉强した生徒のことがよく新聞に出たりする。巡査をしながら繪を勉强して、展覽會に入選する者もある。

生活のための勞働の上に、さうして勉强する人々の苦闘からは、食ふためのみに追はれてゐる哀れな消極的な人生には、比べることの出來ない愉快な、積極的な明るい氣分が溢れ出てゐる。

はたらけど
はたらけど猶わが生活樂にならざり
ぢつと手を見る

啄木はかう歌つたが、その勞働は何の明るさも無い、陰惨な生活の連續である。そして其の境地に止つて、たゞもう生活のために働き、だん／＼に樂にならないばかりか、益々どん底に落ちてゆく者の苦闘氣分は――氣分などと、どうしてそんな詩的なものではないのである。富める者は益々富み、貧しい者は益々貧しくなるように、此の社會は出來てゐるのである。電車に乘るとしても、金持は回數券を買つて割安に乘り、貧乏人はさういかないやうに、すべての商賣の方法がさうなのである。そして結局治安維持法案が行はれたのであるが、それの撤廢を主張する勞働者は、生活の直接の必要のために働く上に、ある一つの目的のために團結してゐるので、彼等の苦闘も亦た優にやさしい氣分などと言ふ言葉には當て嵌らないが、働きながら繪を畫き、或は水を汲みながら英語を勉强してゐる人々と同じく、明るく積極的である。

さて私は、ウヰリアム・モリスの夢みたやうな世の中にこそ、本當の享樂があるのでは無いかと、筆を擱くに當つて空想するのである。さういふ空想をするのも貧しい生活に許された一つの享樂であるが、もし名づけるならば『氣分享樂』とでも言ふのであらうか。B――の言ひ草では無いが、私は少し精神的過ぎるのかも知れない――（一九二五・五・一〇）

享樂氣分と苦鬪氣分

長田秀雄

初夏の季節がやつてきた。見るかぎり若葉の瀬綠りの世界である。私はいつもこの季節になると、原因の分らない沈鬱に惱まされるのである。

東洋の舊い傳説は、享樂的生活を多くは罪惡と見てゐる。しかるに、人の心の底には、生命から醸し出される享樂氣分が、濃く浸み出してゐるのである。私たちの少年時代は、海外の文化の吸收に忙がしい明治時代であつたが、たゞ、徒らに歐洲文化の形式を吸收しただけであつて、まだまだ、その本質をつかんではゐなかつた。人々の生活は根柢に於ては、やはり東洋の傳統に支配されてゐたのである。

苦鬪忍從は元來東洋の傳統思想である。これに反して、あくまで人生を享樂しやうとするのが歐洲の生活の根本思想であると、私は考へてゐる。即ち、我々の育つた明治時代は、形式に於ては歐洲文化を模し得たが、生活の根本思想としては、依然として、在來の苦鬪忍從の生活氣分に支配されてゐたのである。

享樂生活は人生をそのまゝに受入れる態度の上に根ざしてゐる。苦鬪の生活は、自分の慾望を殺すところに根ざしてゐる。私たちの心の内に深かい根を張つてゐる在來の苦鬪氣分が、この初夏の魅惑的な自然の風光にさそはれて、一種の沈鬱悲哀の感情となるのではあるまいか。

享樂を欲するのは、人生の自然である。苦鬪忍從の生活は、即ち殺された生活である。然るに今や人々は、やうやく苦鬪忍從の東洋的傳統から脱して、歐洲文化の根本思想たる享樂的な生活に移らんとしてゐるのである。

大正の時代は、さう云ふ意味で、まさに日本民族の思想の上の過渡期であると、私は信じてゐるのである。

街頭綠樹の間に、耳かくしの女が、目のさめるやうな花模様の着物をきて外輪(そとわ)に歩いてゆく。眉の引き方、白粉のつけかた、すべて歐風になつてゐる。夜の銀座のカフエを出てくる洋裝の

若い男は、カルメンのプロリエードを口笛にふいてゆく——まことに風俗史上稀にみる變化ではないか。

今や世をあげて享樂の生活を憧憬してゐる。これは人生の自然に歸らうとする無意識の欲求であるとも見られる。が、然し、果して我々が、歐洲人のやうな享樂の生活を創り出す事が出來るであらうか。舊來の傳統的思想から脱し切る事が出來るであらうか。

もし、脱し切る事が出來るならば、舊來の傳統的傾向たる苦鬪忍從の思想は、東洋人に取つて虚僞の思想であつたとしきや云へない。

今から振返つて、我々の祖先の生活を考へると、まことに不思議な程暗い生活である。我々は日本歴史を讀むたびに、幽暗な過去の世界に、義理のために一生悩んだ祖先の歯を喰ひしばつた姿をまざまざと見せられる。この苦鬪忍從の生活から、歐洲人の知らない境地と云ふやうなひねくれたながらも強い精神力が出てきたのである。

苦鬪忍從の生活は、かうした長い歴史の間にあゝまでも寂びた東洋文化を生み出した。丁度月見草が日の沈むときに咲くやうに、かう云ふ傾向が、どうも東洋人の生活氣分の根本であるやうである。

奈良朝の文化は支那から輸入された。そして、それが段々國民的に同化されて、何時か日本固有の文化を創つた。歐風の享樂生活は男女の洋装となり、カフエの繁盛となり、バンガロウとなり、西洋音樂、舞踊の流行となつた。

この飜譯文化か、我々の生活に蹈みならされて、日本民族の文化となる時が、もしも來るならば、私はやはり、苦鬪忍從の根本傾向か、何等かの形で現はれるであらうと思ふ。

無窮と死へ

小川未明

「美を追ふは無窮を追ふの心なり」と、樗牛は言ひました。樗牛は、一代のロマンチシストであります。

美を慕うがために、それに憧がれるがために、享樂的と見なすのでありますが、この心の核心は、眞實そのものであることを知らなければならない。美の存せざるところに、享樂の氣分の湧く筈はないからです。

たゞその人によつて、その人の眞實さと、性質と、全的に言へば、人格に從つて、深淺があり、高尙なると、卑低なるとがありますけれど、美を感ずるところに、その追窮心の胚胎せざるはないと言つていゝのであります。

享樂的氣分、行爲、共に美の追窮に他ならないからであります。そして、人は、これによつて、生の充されざるものを充さんとし、寂寥に堪えざるものを、喜びに換へんとします。畢竟するに、人生は、つとめて幸福であらんことを欲するからです。眞に、幸福の何ものたるかは、解釋と識見とによつて、また、その人によつて異るであらうけれど、何人も、自からの生を充實なさんと考へざるものはないからであります。

はじめは、輕い心から、ちよつと言へば、趣味の程度で、自分の心を樂しましめんとしたものが、だん／＼美についての研究が深くなり、眼が高くなつて行くと、いつしか知らず、つひに、その終極をも窮めなければ、滿足がされなくなつてしまふのであります。美には、極限がないから、即ち無窮を追ふことになるのであります。

私達は、こゝまで來ると、人生の短かく、たよりなく、心細きを感ぜずにはゐられない。人間の力は、その無限の前には、いかんともすることができないからです。このことは、實にちよつとした骨董品を求めるやうな場合に於てすらしみ／＼と感ぜられることです。そして、喜びと樂しみを、それによつて得やうと欲したものが、却つて、苦痛と焦燥とが與へられることになります。また、趣味に無心であつた當時が、却つて、幸福であつたと思はれるのであります。そして、美に對して、無關心でゐられる人々の方が、現實を享樂してゐるかの如くに惱ましい眼には映るのであります。

この心は、所有しようといふことによつて、一層苦しまなければなりません。美は、限りないのにかゝはらず、自己の富には、盡くることがあるからです。所有心を去つて、たゞ追窮するといふことだけでも、美の世界は、はてしないものであります。

「美を追うは、無窮を追うの心なり」と、言つた、樗牛は、たしかにロマンチシストでありました。彼は、この心の苦しみを經驗したと思はれるからです。

眞に、彼なればこそ、

「いかに、空に、高く輝けばとて、やがては落つるべき日ぞ」と、いふものゝ美に對し、華やかさに對して、悲しみを感じ得たのでありませう。

私達は、何事に對しても、中庸を守り、半端にすますものを見ると、どうしたら、よく、さういふ態度であり得られるかと疑ふことが多いのであります。中にも、自分の趣味に對して、追窮心を持たず、半途ですまして置くものゝ如きは、もとより、その人が、詩人でなく、いたづらに、打算的で、俗人であるからと考へられるのであります。

中途、半端な、享樂氣分は、たゞその人の不眞面目と、打算的な人間であるといふことを證することより他は、何を語るものでもないものです。

享樂氣分と對立して、私達は、苦鬪氣分を考へるに、やはり、結局、一つであります。

なぜ、日常の快樂と安易とを捨て、自から苦しみを選ばれなければならぬか。生きて行く道は、いろ〳〵にあるものを、自から、困難とする道を選んで、そのために戰はなければならぬか。もし、彼等と妥協をしたなら、もつと自からの仕事にも酬いられるものをなぜ反抗しなければならぬか。思ふに、たゞ、自から眞理なりと信ずるところに殉ぜんがためです。自から正しきとなすところに處せんとする氣質に他ならないのであります。そして、たとへ、その理想や、目的は、到底眼前には、形として實現されることが、覺束ないとしても、尚ほ、未來を信じ、人生を信じて、永遠の眞理のために、すべてを犧牲となさんとするものです。

メレジコウスキイの、たしか、「神々の死」のうちにだか、「眞を見んとせば、死を見るなり」と、いふ言葉がありました。

幾多の革命家や、理想主義者等は、いづれもこの悲壯なる道を辿つたのであります。そして、最初は、研究であり、氣分であつたものが、いつしか、人、其の人の性格によつて、はてなき道を歩ましめるに至つたのであります。

思ふに、すべてが性格のいたすところであります。一片の享樂氣分ですまされるものも、また、研究的態度を超へざるものも、然らずして、惑溺し、追窮し、苦鬪して、自からの破滅に向つて急ぐものも、こゝには少なくも二つの行方があります。そして、いづれを私達は、眞に同情の眼をもつて眺めるでありませう。

みだりに、言へないのは、美を追う者、享樂に行く者が、個人主義的であり、眞理を愛して、これに殉ぜんとする者が、よ

り人生的であるからとして、前者を排し、後者を肯定せんとすることです。私達は、もしデカダンの眞理を考へるなら、單純に、からは、言へなからうと思はれるのでした。そして、この二つの氣分――心は、相反してはゐるが、人間性に、共有さるべきものであり、核心に至れば、美を愛することゝ、善を愛することゝは離れざるものがあるのであります。

美を愛するもの、善を愛するもの、共に人生的に、必然とします。そして、それが深かければ深い程、自己にとつて眞實であり、悲壯であり、破滅的であることを感ずるものです。

常に、眞實なる者にとつては、生活は、また恐怖すべき記録でありませう。

――二五・五――

苦鬪氣分と享樂氣分

―距離の短縮と時間の延長―

石井滿

現代人の生活はひどく環境の支配を受けてゐると云ふ。其の環境の支配と云ふもののなかで特段の威力を發揮してゐるものは「距離の短縮」と「時間の延長」と云ふ二つの條件だらう。いろ〳〵の飛び道具の發達した爲めに世界はますます小さくなつてゆく。言葉を換へればわれわれの住むでゐる都會はますます大きくなつてゆくのである。即ち距離が短縮された譯だ。昔は寸陰を惜むと云つた。今は秒時の差異は人を活殺する。この價打のある時(タイム)はしかも夜を日についでゆく。時間の延長に外ならない。

われわれの生活はこの微妙な時間と距離とのカラクリに依つて縱横十文字にくくり上げられてゐる。四百字詰の原稿用紙へ一字一字文字を入れてゆくのと少しも違ひない寸法で日常生活を終始し、また一生涯を始終するのである。其の微妙なカラクリの表面が苦鬪で、裏面が享樂であると云つても、また表面が享樂で裏面が苦鬪であると云つても同じことである。

「樂しみは夕顔棚の下涼み」と云ふ言葉にも苦勞と愉悅の生活の兩面は現はれてゐる。「歸來、河水笑つて刀を洗へば、血は奔湍に迸しつて、紅雪を吐く」と云ふなかにも奮鬪と滿足の二面は窺はれる。また「生前一杯の酒を樂しむ。何ぞ須ゐん死後千載の名」とか「醉うては枕す美人の膝」などと云ふと一寸現代語のようにも聞へるけれども、これらは何れもわたくしのいふ距離と時間の洗禮を受けない時代の人の言葉で、其のまゝ現代生活の苦鬪氣分にも享樂氣分にもあてはめることは出來ないのである。

わたしどもは不斷に新らしい刺戟を送られてゐる。體(かた)の働きから云へば平面的にすばらしく早い速度の經驗を受けた。其ればかりか垂直に上下する昇降機を日常の交通機關にしてゐる。發音にはPだのVだのTHだの復雜なものがある。耳から入る音や體にひゞく音は更に複雜してゐる。音響、交響、摩擦音、震動音、まさしくこれ雜音、騷音の世界だ。

「紛々たる世評」位で活きたり死んだりした昔の人は溫室のなかで育つたもやしのやうなものではないか。光はどうだ。時間の延長は所謂「日光の節約」ではない。「朝起には三文の得あり」と云ふような伊勢屋式生活者流の悶死すべき世界である。人造光線に依る日光の補充である。カーボンやタングステンではまだ足りない。紫、橙、紅の強力な光がこれでもかこれでもかと地上から空中を明るくする。更に食物は、衣服は、住宅は……。「電信電話の針金は蜘蛛の巣の如く」とわたしどもの小學時代に讀むだような大都會は、世界の三四等國でなくては見られなくなつた。これ等の線はすべて地下に伏せて、空中は電波が自在に跳梁する時代である。均一制の料金で停留場と云ふ劃(かく)一的な乘降場しかもたぬ電車がすたれて、人力車の挽き手をモーターにおきかへたような小型自働車の流行しようとする時代である。一日に數萬人の群衆を呑吐する大ビルデング流行の世のなかである。——いや都會に人が集りすぎて、都會自身が其の取扱ひをもてあましてゐる時勢である。人間が働くためにも遊ぶためにもせかせかするのは致し方がない。

×

多くの人間は一封の給料で一家眷族を養つてゆくと云ふきわどい藝當をやつてゐる。一封の給料には年俸から月俸、日給、時間給、もつと刻(き)んだのになると出來高拂なんてのがある。時間的に人を拘束せねばおかぬつもりらしい。おまけにその几帳面なカラクリは飛躍を試みやうとする人間の手足の妨害をしてゐる。貝を磨いたり、燐寸の箱を貼つたりする職業婦人から、ジアン・ダルクやナイチンゲールが出相もないように、書記や雇

耕をやつて大臣を夢みるような粗雜なおたまの持主は少くなつたようである。先方がさせないから諦めたのでなく、外にもつと適切な其の日其の日の生活に何等かの意義を見出さうとする努力が多くなつたからであると云ふ。

都會は多くの人を吸ひよせておいてまたこれをはぢき出してゐる。都心からはぢき出される大衆は辛うじて都會の外延にしがみついても生活してゆく意氣込を示してゐる。これが爲めにわれわれは歩くことまで人まかせで自分の思ふままにはならないことになつた。この時間と距離のカラクリは、しかし、だんだん進步發達しゆく。そして人々にも一生懸命でやれば他人をおひこしても發展してゆけることを教へてゐる。人まかせの人間が、あてにならない結果を收めようとして骨を折れば、其處にいたましい苦闘がはじまる譯である。現代人の焦燥と苦慮とはここからはじまる。

わたしは人の骨を折る仕事をすべて苦闘だとばかりは思はない。昔は從容として死に就いた武士もある。況や現世において勇を鼓して働くことに、快闘、健闘、善戰、快戰のない道理がない。唯如何にせん其んな場合は極めて尠いことだ。其れに反して眞に意義のない苦闘の如何に多いことよ。小學校の入學試驗からはじめて、就職の椅子の爭奪、能率をあげる工夫、競爭、宣傳、自己防衛、すべてこれ切ない苦闘其のものではないか。

×

おまけに時間と距離の關係は、縱横に交錯して人間の仕事を賽（さい）の目のように細かにきざむで仕舞つてゐる。分業が其れだ。賽の目になつたが最後、仕事其のものは面白くもをかしくもないものになり切つて仕舞ふ。槍一と筋の侍が突然木影（こかげ）からおどり出て敵の大將の首級（しるし）を頂戴するような壯絶快絶な出來事は樂にしたくもない。ここに單調な無味な苦闘が永續することになるのである。其れ故に現代人の多くの生活は閧の聲をあげるよな積極的な昂奮性のある苦闘ではなくて、ともすれば滅（めい）入つて仕舞ひ相な忍從的な苦闘である。自分のやりかゝつてゐる仕事に何等の疑問もなく無條件的に傾注し得る人は幸福である。しかし現代人の多くはこの點に疑問を持ち焦心苦慮してゐるのではあるまいか。

かうした個性のなくなつた働き手は、唯多忙しげに働くのが能である。朝から晩まで、またつぎの朝から晩まで、何度云つて見ても同じことであるが、要するに年中多忙しいのが生命である。

「お忙しい。其れは結構です。若いうちは多忙しくなくてはいけませんな。」

こんな哲學者めいたことを云ふ人間さへある。たまたま、昔の哲人が「寂寞は人を殺す」なんて紛らはしいことを云ひのこしたものだから、語呂合せのやうに多忙しくなければ人は死ぬものと思つてゐる。

またかなしいことには人間は習慣的の動物で、この無意味な多忙で馴らされると、其の多忙から離れると却つて健康を損することがある。阿片中毒者が禁煙したり、アルコール中毒者が禁酒したりすると病氣になるのと少しも變りはない。多忙中毒の使用人階級の人達が失職の際におそれるものが、收入のなくなることと、用事のなくなることとであるのは驚くべき現象ではないか。

「苦闘の快感」と云ふことは、それだから、この砂を嚙むような現代產業界においてもないことはない。

ある老實業家は毎日肉食をし、卵類を飲んで、朝早くから夜おそくまで俗事に沒頭して、其の長壽を樂しむばかりか、時としては壯者も及ばぬような道樂までして、其の多忙なる苦闘ぶりを自ら誇つて快よしとしてゐる。これらは當然のことだ。

人に使はれてゐる勞働者でも自分の仕事を熱心に仕上げて工場を出るときはサツパリするといふ。これは必らずしも在來のような忠實とか誠實とか云ふ道德觀よりする滿足と說明してすまされるものではない。其處に習慣の力がある。また其の慣習にならされた身神の受ける自己陶醉的境地でないと誰れか斷言し得やう。

若し理屈が許されるのなら、同じ苦闘をするならば人類がもつと幸福になれるような仕事の爲めに苦闘する人が多くなればとも思はれる。

×

誰れでも一つの仕事で苦しむでゐるときには、とりわけて、ほかの仕事や遊び事が面白相に考へられるものである。しかし時とすると、ほかの仕事や遊び事に對する聯想が、目前の仕事を樂しましめるようなこともある。いやだいやだと思ひながらとりかかつた試驗勉强の最中に、其れがすんで仕舞つた後の旅行の計劃のことなどを考へたりすると勉强其のものにも油が乘つて來ることなどは、しばしば經驗することとである。

其れだから、仕事がすんで仕舞へば、當時考へてゐたように旅行に出かけなくてもすむことがまた往々にしてある。其れは其の筈で、其の苦しい、多忙しい最中に考へ出されて、其の爲めに現在行つてゐた仕事を心持よく片付させて仕舞つただけで充分役目を果してゐるのであるから、「考へたり、實行したり」はしなくてもいいと云ふことになるのである。

假定と云ふものが其の通り實行されないのは、勿論其の人間の優柔不斷に基因することも多からうが一面にこんな働きがあることも看のがすことは出來ない。

×

きわどい藝當をやつてゐる者は、また當てにならない仕事に奔命してゐる者は、どうしても其の浮雲つかしい心持を忘れる必要がある。いま云つたやうに、其の仕事をしてゐる最中にこれを忘れることが出來れば、これより結構なことはないが、少くとも息抜きの意味か、晝休みの意味か、或はやがて來るべき次ぎの苦闘に取りかかる前の不愉快さ氣苦勞さを忘れてゐる爲めにも轉機轉心の必要は十分ある。其れが、も一歩進めばこの歡樂を得るためにのみ苦闘すると云ふ境地も出て來よう。

毒は毒を以て制せられる。現代人の苦闘は、主として其の苦闘を作り出す所のもので慰藉される。音は音、光は光、色は色。多忙は多忙に依つてのみよく慰藉せられる。これ現代の享樂がしかく單調で、多忙で、分業的である所以でまた享樂其のものにも滿足しきれずに、しかもそれにひきづられてゆくものが多いわけである。

もし骨の折れること、體の疲れることを以て勞働だと云ふならばあの強烈な電燈の下で行はれるダンスもめまぐるしいやうな活動寫眞を見ることも、銀ブラも、刺戟的な音樂を聞くことも、強い酒を飲むことも、甚だしきは自動車をドライヴすることもみんな立派な勞働である。其の證據には田舍の人をつれて來て、都會で働かせずに、唯其の享樂の部分だけを味はしても、忽ち神經衰弱に罹つて仕舞ふであらう。

現代人の享樂は、要するに何物かを求めようとする焦燥の心持の現はれである。多忙人の欠乏してゐるものは澤山ある。彼等は住むべき家を持たず、樂しむべき猫の額程の庭園さへ持たず、或る者は家庭を持たず、其の住む家には臺所さいないのがある。おまけに命をかけてやつてゐる仕事は自分の仕事ではない。多忙人がイライラするのは無理のない話である。其れ故に彼等の求める享樂はこの彼等の心持にピタリとあてはまるものでなければならない。同時にまた、とにかくに其の多忙生活を支へてゆける程度のものでなければならない。彼等は其れ程打算的に、聰明に育てられてゐる。其れだけに、柯公の所謂「俣差タランタラン」で飲み語る連中にも一日醉は禁物である。まして献酬に費すべき時間はない。九谷燒の杯はスタンドの前の立ち飲のコップに代つてゐる。午前十時開演のお芝居は昔話になつて仕舞つた。

×

苦悶が時間的に距離的に支配されてゐるように享樂も亦時間と距離の約束を無視する譯にはゆかない。いやもつと適切に云へば現代の享樂は時間を延長することと距離を短縮することに外ならない。

歐米の大都會を初め、日本の都會でも、其の都人士の享樂は何れも短時間で強い刺戟を受けて早く忘我郷に入ることだ。與行物の收約的な經營がはじまる。強烈な酒類が流行する。其れまでゆかないものは氣持のいいフルーツ・パアラアや、ティ・ホールや、食堂の客となつて氣分の轉換をやる。其處は現代の奇形的な寄所のない生活者と、獨身者の大衆とが不斷に顧客として活躍する場所である。其ればかりでない婦人の生活の向上は、在來のように彼女達を粗食に甘じて、忠實な留守居番としておかせなくなつて來た。男子が獨りで低唱淺酌して自ら樂むだ享樂はあらゆる意味から許されなくなつて來た。新らしい享樂は公開的な、すべての人々に共通的なところに生命がある。アメリカの、ニユーヨーカーが、ラスト・ニツケルまでも投じて惜またいチャールス音樂、挑發的な裸踊、活動寫眞、何れもこれは高い催物で　劇務を執り、大仕事をする產業軍に必要な後方部隊だ相であるが、東京にだつてないことはない。丸の內、多忙、復興。其れに對する安來節、ストトン節、活劇、バー。彼れと此れ。似てゐないとは云はれまい。

距離の方になるともつと明白である。自動車をドライヴして樂しむようなのは、今の悪い道路の日本では必らずしも實行し難いけれどもアメリカの人達が唯一の享樂とまで思つてゐるドライヴは、何んのことはない唯自動車（ミシン）を自分で運轉するか又は愛人に運轉させ、坦々たる道を快走するだけなのである。其の爲めに都會の郊外の道は何千臺、何萬臺と云ふ往復の自動車の行列が續いてゐる。

「一寸散步して來ませう。」

土曜日の午後や、日曜日には往復四五十哩のドイラヴをする。其の自動車の行列は夜の十時すぎ十一時になつてもやまらない。多くは海岸や其のほかの盛り場へ行つて、コーヒーを啜り、ダンスでもやつて夜半すぎになつて歸つて來るのである。これこそ眞に距離の短縮と時間の延長の代表的なものだ。其れから思へば十二時ごろに終電車を心配してゐる東京人なんぞまだまだ田舎者である。

×

開放的で、共通的で且つ所有觀念の忘却の爲めであるべき享樂場としてわたしは、今の東京のカツフエー氣分に慊らないのは、其の多くが行つてゐる御常連氣分である。用事のないのに

ペタペタした女がお客のテーブルに座り込んで不必要なことを喋らなければならぬやうに心得てゐる場所が、今日でもまだ相當に多いことである。

こんなのは待合氣分、料理店氣分の遺物で時代錯誤の甚だしいものだ。其れ等はよろしく茶屋から芝居へゆかなければ頭が下るもののやうに考へてゐる舊式な貴族的傳統に囚はれてゐる手合と共に葬るべきである。斯うした人種には現代的の享樂氣分は味はへない。ある若い實業家は、大名行列のように大勢の仲間をひきつれ、芝居見物に行つて、しかも芝居の時間中居眠りをしてゐた相だ。舊型の苦闘氣分にでも入れておくよりほかに仕方のない代物である。

またそんなところで食物に見榮を張つて不必要な品物まで註文したり。自分の存在を知らせるためにあたりへ聞えよがしの話をしたりするのはこれまた一種の舊型だ。其れでは自分を忘れに行くのではなくて、自分を思ひ出しにゆくのも同然である。其れならば昔の人が「我が物と思へば」と云ふ積りで土いぢりをしたり、果實のなる木の世話をしたり、盆栽の手入れをしたり。進んでは待合を根城とし、女を持物とし、一つの苦しみから他の苦しみへ深入りをするのと何等變つたことがない。これ本質的の間違ひである。

其れは田舍と都會のそうした場所を較べて見ればすぐにわかることだ。何れにしてもわざとらしくない。物にかかずらいのない心持これがせめても現代の享樂氣分の眞髓でなければならぬ。

とは云へ現代人の生活は其の根柢がぐらついてゐる。從つて苦闘にも、享樂にも眞の滿足は得られつこはない。これは一種樂極まつて哀愁生ず」と云ふような性質の不滿足でない。むしろ苦闘其のものに辛味があるように、享樂其のものにも多分の辛味があるからで、こんなのを世紀末の文明と云ふのであらう。（五月九日）

我等はずいぶん長い間、苦闘の生活をつゞけて來たやうな氣がする。何者を相手に闘つて來たのか。それをじつと考へてみる。生れて來たといふことが一つの不幸であつたなぞと考へてみても追つ付かない。自分が自分を生んだのではないから。……生と死とは全くあなたまかせにしておくよりほかはない。私はどんな苦労があらうとも、逃避の場所を生のうちに求めたい。逃げまはり逃げまはりしても、生きてゐたい。見苦しいと罵られても、更らに見苦しい人生全部の逃避はやりたくない。自殺には勇氣のいることで、臆病者に自殺は出來ないかも知らないけれど、しかし自殺は卑怯だといふ言葉を打ち消すわけに行かない。まごまごしてゐて敵に殺されても、自殺はしたくない。自殺といふことは、人間がやるだけで、他の生物にないことらしい。獅子や虎が自殺したといふ話は聞かない。猫や鼠だつて、むろん自殺はしない。共食しても生きて行かうとする。えらいではないか。

樂は苦のもと

上司小劍

一ころ、逃避者といふ言葉が流行した。資本家に挑戦した勞働者、若しくは其の勞働者を煽動した知識階級の或る者が、資本家を擁護する權力の壓迫に堪へないで、運動を中止したり、または其の同志の仲間を去つたりすると、すぐに彼は逃避者だと言はれたものだ。何んといふ淺薄な物の觀方であらう。彼の言ふ逃避もまた、一つの激しい戰ひではないか。示威運動の行列の先頭に立つて、革命歌を歌つてゐる人々の空疎な戰闘振りよりも、逃避者の方に却つて、しんけんな苦闘があるのではないか。自殺若しくは自殺に等しい無分別を演ずるのは戰ひでない。それをじつとこらへて生きてゐるのが苦闘なのだ。戰つてゐるよりは逃げまはつてゐる方が、ほんとうは苦しいのだ。

そんなことは別として、我等の苦闘の相手は何者であるか。敵は本能寺にあるのか、將た中國筋にあるのか。じつとそれを考へてみると、どうも敵といふものが、眼前に近く迫つて來てゐるわけではないといふことがわかる。共同戦線をもつてする

國際戰爭のやうに、ハッキリとした敵が、前面幾千メートルにやつて來てゐるわけではない。人生の大きな不斷の戰鬪にくらべたら、露骨に生命のやりとりする國際戰爭なんか、甘いものだ。一種の遊戲だといふ氣さへする。資本家と勞働者との戰ひだつてさうだ。わい／＼と騷ぎばかり大きくて、中味は案外空虛だ。人生のほんとうの苦鬪は、獨りだまつて坐つてゐるところの、相手の影だにみへない時にある。

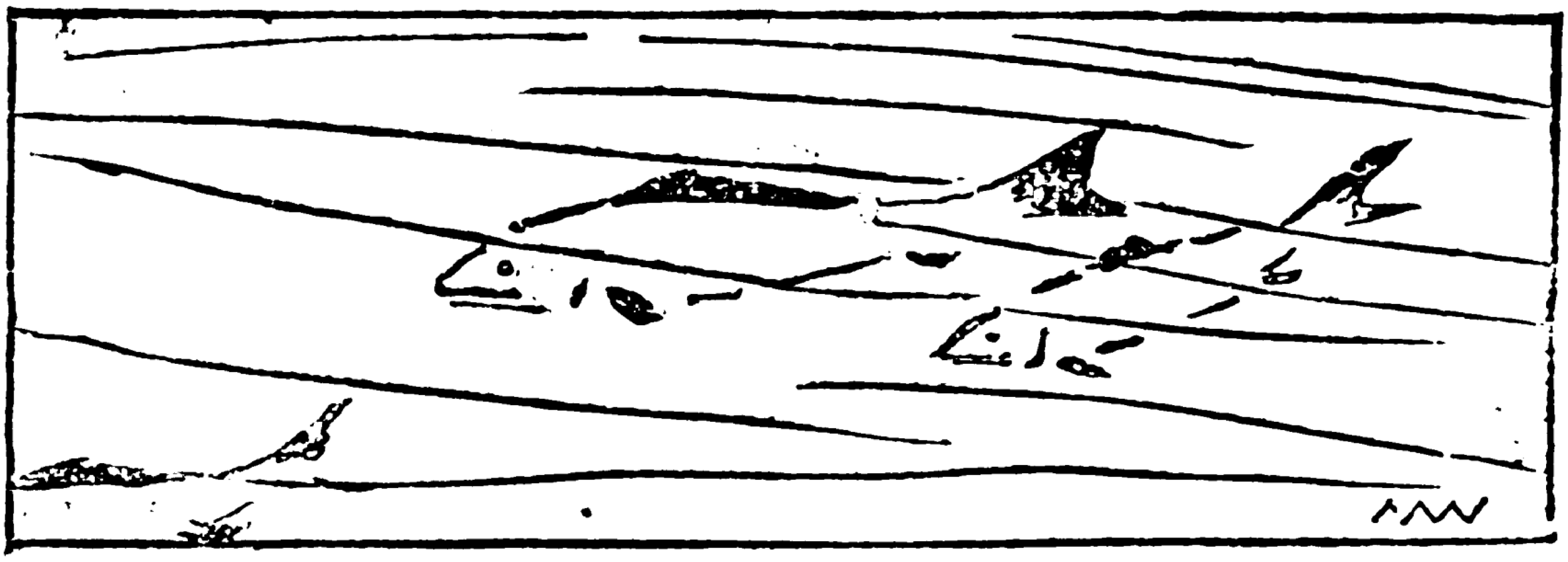
一昨年の大震火災の時、被服廠跡に集つた人々の苦悶の叫喚なんぞは、國際戰爭や勞資戰爭にくらべると、遙かにしんけんたものだつたらう。あれなんぞも敵はいづこにあるかハッキリしてゐない。眼前の敵と言へば火だ、風だ。しかし自分一人だけなら、土に潛り込んでも、溝を這つても、川へ飛び込んでも、あの火、あの風から遁れることが出來たらう。しかし自分には妻子眷族といふものがある。生活に附隨して必要な荷物といふものがある。それらが皆自分にくつ付いて、自分の行動を妨げてゐる。よしやそれ等のものがなくて、都合よく獨身のカラ身であつたとしても、自分の前後左右には自分と同じやうに、阿鼻叫喚の苦みの中に、一縷の生を繫ぎとめやうとしてゐる無數の同胞がある。それ等の人々に妨げられて、各々自分もやはりそれ等の人々の生を妨ぐる一員となつて、妨げつゝ妨げられつゝ、我れも人も共に苦み、與に死んで行つたのではないか。この苦鬪がまさしく人生の縮圖ではあるまいか。異常な場合といふことによつて、其の叙景はだいぶ露骨であるが、しかし、人生といふものが先づあんなものなのではなからうか。地球全體、世界の果てから果まで、陸上も水中も、詰まりは當時の被服廠跡を廣くしたやうなものではあるまいか。到るところに死屍累々、さうしてあとからあとから死んで行く。それが人生！

あの時の被服廠跡の慘憺たる光景について再び考へてみる。人は皆口にも筆にもすることの出來ないほど、甚だしい苦鬪をつゞけてゐる。しかし前にも言つたやうに、國際戰爭や勞資戰爭の如くハッキリとした敵といふものがあるわけではない。火と風、それは恐ろしい敵にちがひないとしても、別だん眞正面から人間を攻めやうとして燃えてゐるのでもなければ、吹いてゐるのでもない。人間の生死なんぞに無關心で、火は燃え、風は吹き荒んでゐるのだ。自分の生を妨ぐるものを敵と見るならば、あの場合、妻子眷族は皆敵だ。前後左右、甚だしきは頭上にまで集つて來て、阿鼻叫喚の苦鬪にもだえてゐる幾萬の同胞も皆敵だ。しかし、それを敵と見ることは出來ないで、最愛の妻子眷族として、愛すべき同胞として、共に苦み與に悶え死ん

でしまはなければならぬところに、人類共通の苦悶がある。人生とは即ちこれだ。要するにあの被服廠跡の慘事を、もう少し平面に押し擴げたやうな苦闘を、我等の日常は演じてゐるのだ。ハツキリとした敵のない戰ひ！それほど苦しいものがあらうか。いくら逃避しやうとしたとて、自殺を企てない限り、人生の外には出られない。進むものよりも退くものゝ方が苦しい。戰ふものよりも逃ぐるものに惱みがある。いづれか苦悶の人生ならざる。

苦悶を紛らすものは享樂である。享樂は麻醉劑だ。其の手近い例を阿片と酒とに見ることが出來る。私は『醉』と云ふものを中毒だと觀て、これを『一時的の簡易自殺』と呼びたい。苦悶に堪へないで逃避する。しかし逃避もまた一種の、或はヨリ以上の苦悶だとすれば、自殺よりほかに逃避の道がない。謂所生存の拒絶だ。しかし多くの人々は、全部的自殺が出來ないで、一部的、一時的の自殺を企てる。それが謂所『陶醉』で即ち享樂である。……といふ風に解釋してはわるいであらうか。

苦悶の果てが、身も心も疲れて酒に行き女に行く。けれども、醉に醒め、戀に醒めた後の惱みは、戰ひの苦みよりも更らにひどいのでなからうか。享樂もまた一つの苦悶であつたか。いづれにしても、我等の敵は外部にあらずして、内部にある。我等は常にこの内部の敵と闘つて苦んでゐるのだ。享樂もまたこの内部の誘惑によるのであらう。くどいがもう一度いふ被服廠跡の慘事に於ける死者の敵は、火でもなかつた。風でもなかつた。前後左右に群がつて阿鼻叫喚の焦熱地獄を演ずる同胞でもなかつた。實に死者自身の内部にあつたものが、其の最大の勁敵であつた。この敵を滅して、我等の生活を安樂にするのは、所謂『心頭を滅却すれば火もまた涼し』流の痩我慢者か聖者かのことであつて、凡夫のよくするところでない。我等は何等の生活組織の革命によつて、我等の苦闘の惱みを減じ、享樂をも、淸らかな快樂の慾求に轉ずることが出來るかも知れない。しかし、我等のもつ内部の敵はやはり、どんな社會に於いても、我等を苦めることであらう。



非流行作家の受けた侮辱

宮嶋資夫

一九二二年一月末の午後だつた。それは恐ろしい寒い冬だつた。丁度この大東京が、俄かに緯度を北の方へ移しでもしたのではないかと思はれるほど、無暗に冷たい風が吹いた。大地も樹木も屋根の瓦も、かち／＼に凍つてしまつた。日比谷公園の噴水まで、氷のために水がとまつて、空に向けて翼をひらいた赤銅の鶴の口には、白蝋でも流しかけたやうに、厚ぼつたく氷の着物が被さつて、往來は足駄の歯もとまらないやうにつる／＼に固まつてゐた。

その寒い日の午後に、須山繁雄は、D新聞社の三階の會議室の窓際に椅子をよせて、硝子越しに前のA社の屋根時計を、退屈さうにおりおりしながら、ぢつと眺め入つてゐたのである。がらんとした會議室の隅の方には、弱々しい冬の西日がわづかに一寸割り込んで、斜つかけに窓近い壁を照してゐるだけで、彼のほかには誰も人がゐなかつた。

ことはつておくが、須山繁雄は、このD社の社員でも何でもないのである。彼は

D社の前にある、A社の社員に用事があつて、毎日朝起ると同時にいら〳〵した氣持で時計を眺めて、午近くまで狹い家の中をうろ〳〵歩き廻つたり、溜息を洩したり、『えゝつ畜生つ』と怒鳴り散らして髮の毛をむしつたりして、時の進みの遲さを呪つて家の者に當り散らして、さて漸く、午飯を喰つてしまふと、

『今日こそきつと』と何か重大な事でも決行するやうな態度で家を出かける。さうしてA社の受附にやつて來て、

『左右田君は來ておいでですか』と訊ねるのだ。この五六日毎日顏を見馴れた受附は、

『左右田さんはいま議會です』と冷淡な態度で彼に答へる。それが何か、かう、自分の態度が甚だしく哀れつぽく貧乏臭くつて、それにどこかとげ〳〵してゐるために、この受附までが、彼と同じ社の人間を保護するために、嘘でもついてゐるやうに思はれて須山は先づむつとして、

『それでは平井君は』とこちらも突けんどんに訊き返す。

『平井さんはまだ見えません』

『何時頃出て來られるのですか』

『さあ今日は三時過ぎでせう』

どこまでも無愛想な、物貰いにでも對するやうな受附の佛頂面に、唾でも吐きかけたいやうな心持になりながら、彼は默つて窓口を離れると石段をかけ下りて、三階の上にある屋根時計を振り仰いだ。大きな時計の長い針は、ぢり〳〵してゐる彼などには無關心に、一時十分前を指してゐた。

その時の彼にとつて、之れから先の二時間が、どれほど長く思はれた事だらう。その日ばかりの事ではない。昨日も

一昨日も一昨々日も、いやもう一週間ばかりこの方は、落ついて本を讀む氣にもなれず、悠々と寢轉んでゐる事も出來ず、たゞわく〱と、あと一時間、二時間と云ふ風に、時間を追ひかけて暮して來た。取りわけこの二三日と云ふものは、つまらない徒勞にすぎない、下らなく時間を消費するいらだたしさに精も根も盡るようにさへ思はれた。

『彼奴は全く不埒な奴だ。僕はこれで一週間と云ふもの、家からA社へ、A社から君のとこへ、それから議會へ、議會からまたA社へと、影のような人間を追い廻して暮してゐる。もし彼が全く不誠實でこんな風に、僕に時間を浪費させるなら、彼奴は僕の一週間の生命を奪つたのだ。僕は全く、本も讀めなければ落ついて考へる事も出來ない。こんな日が長く續いたら、僕は全く氣が狂ふ』

彼はその日も、その二時間の時を氷のような風の吹く街頭をさまよつてゐるわけにも行かないし、カツフエーに入る氣にもなれないので、毎日迷惑をかける事を氣の毒に思ひながら、丁度A社と向き合つてゐる、D社にゐる水野を訪ねて

『今日もまた、二時間ばかり待たさせてくれ』

と頼んだ時、憤激した口調で云つた。

『まあ止むを得んさ、また三階で寢轉んでゝもゐるんだな』水野は彼も止むを得ないらしい顏で、苦笑しながら、三階のこの會議室に彼を案内した。そして『然しそれでも君が感心に、よく喧嘩をしてしまはないな』人氣のないだだつ廣い、會議室の隅に腰を下して、瓦斯ストーブに火をつけた時、水野はしみ〲とした口調で云つた。

『要するに、無名作家の悲哀さ』須山は苦い顏をして笑ひながら、吐き出すようにつぶやいた。『さうしてあんなに餓鬼さへなけりや何でもないとも思ふんだが』と彼はまた、自分を憐れむような、情けない顏をした。

『然し、向ふの社とはちやんと約束がしてあるのだろ』水野は念を押すように訊き直した。

[illegible]てにして僕は熱心に書いて樂みにして持つて來たんだ。金の取れると云ふ事をあてにして書いたと云ふ事が、藝術上の衝動として、正しいか正しくないか、そんな事は今云つてゐられない。が然し、僕は熱心になつて書いた。さうして持つて來てみると、肝心の僕と約束した對手は、いつも社にゐない。代りに逢つた平井と云ふのも、確實な返事を與へないのだ。來るたんびにかうして、三時間も四時間も、時としては五六時間も待たされて、その揚句が少しも要領を得なくなつて、また、明日來てくれとか云はれるので、僕もつひそれに釣られ通して毎日かうしてやつて來ゐんだ。約束はしてあるから、物がいけないとも困るとも云はないが、たゞもう少し、確實な事、たとへば五日でも十日でも經つたら來てくれといふならば、それで僕も落つくのだが、明日來れば渡せるようにしておくとか、明後日來れば必ずとか云ふものだから、さうしてこちらが現在こんなに弱つてゐるものだから、つひ本當にしてはやつて來て、こんな空虚な、いらいらした時間を毎日下らなくつぶしてゐるのだ。何と云ふ馬鹿げた事だか解りやしない。全く氣の利かない、借金取りの使みたいな有樣さ』須山はまた、この一週間ほどのつまらない、いら立しく送つて來た日を考へると、堪らなく無念になつて來て、にたりと苦笑したのであつた。

『まるで眼隱しをして野原の中を、こづき廻されてゐるような状態だ』須山は心の中でそんな風にも考へた。『何だつてこんな馬鹿々々しい目に會はすのか、彼等に何か惡い成心でもあつての事か、それとも本當に左右田がづぼらであるからなのか、それにしても、それにしても――』

それにしても全く一人の人間が、毎日何の落着も得られないで、かうして苦しんで暮してゐるのを、無關心で暮せる

ほど、平氣なづぼらがあるであらうか、彼は全く見當がつかなくなつた。

去年の暮に、須山は月末の拂ひをする金もなければ、金の入るあてのある仕事もなかつた時だつた。三人の子供を抱えた彼は、全く弱り切つた揚句、その事を友人の伊藤に打明けて仕事の事を話してみた。

『さうですか、それは本當に弱るでせう』と伊藤は少時考へてから、『それでは一つ、A紙に何か書いたらどうです。あすこにゐる左右田君は、僕もごく懇意ですから、名刺を上げますから行つて相談してみませんか』と親切に紹介をしてくれた。

須山はその名刺を持つて、すぐにA社に左右田を訪問した。さうして彼は彼の現在の狀態を率直に打明けて、

『實際何にも仕事がなくつて弱つてゐるのです。それにこの暮の拂ひも出來ないのですから何か一つすぐに書かせてくれませんか』と明けすけに賴んでみた。

『いや結構ですとも、いつでも頂戴しますからどうかお持ち下さい。いまのところ、手許にもまだ二つばかり出す筈のがありますから、掲載の時期はそれ以後になると思ひますが、稿料は原稿さへ出來上ればすぐにもお拂ひしますから、いつでも出來次第にお持ち下されば』道々考へて來たよりも、意外に若々しい左右田は、快く承諾してくれた。そして

『私の方の社の稿料は、一枚一圓と云ふ事になつて居ます。安くつてお氣の毒ですがどうかその點はあらかじめ』と附け加へた。

「えゝそれで充分です。たゞ書かせてさへ貰へば僕は助かるのです。それでは歸つて、すぐに書きはじめてみますから、出來次第持つて伺ひますが、その時にどうか何分一つお願ひします」彼は左右田の好意を感謝してA社を出た。

[illegible]

希望のある光さへも與へられな

『斷えず仕事さへしてゐれば、それだけで澤山だ。俺は決して大した贅澤を望んでゐる人間でもなければ、無理にも大それた事を考へてゐるわけでもない、たゞ自分の好きな仕事をして、それで生活さへして行ければ』と彼は歳末賣出しの赤い旗が、冷たい風にはたはたと鳴つてゐる町を、歩きながら考へてゐた。『いやこれは、恐らく自分一人の事ではない。誰でも自分の好きな仕事をして、それで生活さへしてゐられたら、それ以上の事は何も望まなくなるに違ひない。』然したゞ、好きな仕事と云ふ事が、好きな仕事――』と、そこに彼はまだ何か、彼に判らない疑問がひそんでゐるのに突き當つた。『然し』と彼はまた考へた。『兎も角も、現在のやうな世の中に、現在のやうな自分にとつては、仕事を得ると云ふ事が、何よりも自分の心を慰める。三百圓の金を惠れるより、二百圓の仕事を得た方が自分には愉快である。仕事は單なる、金ばかりの事ではない。それにはまだ、何か別な、希望と光とがひそんでゐるのだ。金は貰つて使つてしまへばそれぎりである。然し、仕事の方には、だからだれでも――』と彼は同じやうな事を幾度か愉快に心で繰り返した。そして、これから書かうと考へてゐる、小説の内容についてもまた考へてゐた。それはずつと以前から、書きたいと思つてゐた、ある一人の女の運命についてであつた。女は無學で病身で、殊に烈しいヒステリーの固疾を背負つた田舍茶屋の酌婦である。彼女の容姿は美人と云つて差支へない部類に入るものであつた。けれども一たび固疾のヒステリーが嵩じてくると、まるで狂人のやうになつてしまつた。そのヒステリーの原因も、恐らく過去の苦しかつた、悲慘な生活が彼女に與へたものかも知れなかつたが、女はその病氣のために、自分の容姿に對する誇りも、若さがもたらす勇氣も、戀愛も、立身も、何も彼もを失つてゐた。

『どうせ私のやうな人間は、まるで塵か埃みたいなものだ』いつも口癖にしてゐたその言葉が、彼女の人生觀の全體だ

つた。だから女は、自分が雇れてゐた家の中年を過ぎた主人の妾にされることも、その上店で稼がせられる事も、家つきの娘たちの、變な猜疑や侮蔑が生む虐待にも甘んじて從つてゐた。何故ならば彼女は自分自身を、塵や埃より以上のものとは認めてゐなかつたからである。

然しその村の附近にある鑛山が開かれて、店の主人が自分の店の發展や、女と自由に樂みたいやうな要求から、鑛山の傍に新しく茶屋を出させて、彼女をそこの女主人にしてしまふ。彼女はそこで一人の女房持の坑夫に戀をする。男はたゞ、金も使はずに酒が飲めたり、女が自由に出來る事だけの慾のために、女に氣休めの喜ばせを云つていつも誤魔化してゐる。女は慾ばかり張つてゐる店の主人と、自分の病氣と、新しい戀人との中に立つて樣々に苦悶する。さうして男の心をだん〳〵に探つて行く中に、男も矢張り、自分をたゞ、氣紛れな、玩具以上には取扱つてゐない心の底にぶつかつてしまふのだ。女は遂に意を決して、男を殺してしまはうと考へる。そして、愈々兇器を持つて、寢入つてゐる男を刺さうとしたその瞬間に、

『塵か埃も同じ事だ』と考へてゐる、彼女自身より更に値打のない一人の男をそこに發見する。それと同時に彼女の心の中には新しく、何か云ひ知れない力強ひあるものが蘇つて來るのである。

『人は誰でも本當に、自分の生命の底深く浸透する事が出來たとき、そのとき初めて、生命の尊貴を感ずる事が出來るのだ。本當に生命の尊貴なことを感じられない人間、そんなものはどんなに英雄に見えようと豪傑に見えようと、强者らしく振舞はうと、要するに何でもないガラクタな、見かけ倒しのものに過ぎない。だから見ろ、虛名を馳せた英雄の末路の下らなさを、偶然に與へられた地位と云ふ幻みたいなものによつて、如何に多くの人間を虐殺したり蹂躙したり、他人の命を木片のように扱つた人間が、自己の斷末魔に[illegible]つた時、どんなに醜態を示してゐるか、そんな事は本

當に、生命の根柢にふれる事だ』彼のさうした人生觀から、彼はたゞ一人の女が、無學で無知で、ノラやマグダのやうにえらくなくとも、本當に自分の命の底にひたつた時に、初めて自分の持つた力を知る事が出來、そこから新しく蘇り、さうしてそれから彼女の進む道が展けること、思想や傾向に依らなくとも、然りあるべき人間の本質と、然りあらしめた環境とを描きたかつた。

長い前から彼はその一人の女を描きたかつた。書くものはもう決つてゐる。それを如何に具體化するか、必然性を與へるかは、彼自身の深さと才能による事である。

『あれを書かう、今度こそあれを書くのだ。出來榮えはどうなるか、自分はたゞ、自分の全力を盡してやつて見るだけだ』いつでも何か書き上げてしまつた時には、初めの考への十分の一も表現されてゐない不滿から、自分の才能に對する疑ひや失望で、全く自信を失つてしまふ事が多かつたが、それでもまた新しく仕事をはじめようと思ふ時は、何かしら新しく勇氣と希望の湧いて來るので、彼はいつも救はれた。

『ともかく仕事がきまつたのだから、明日からでもすぐにかゝる。すつかり書き上げてさへしまへばぢきに金も貰へるから、さう云つてみんな斷つておいてくれないか。嘘をつくんではないのだ。仕事が濟めばすぐ拂ふからつてね。よく譯を話しておいてくれ』

須山は家に歸つてから快活な顏をして、彼の妻にさう話した。

その翌日から机に向つて熱心に仕事をはじめた。二日目か三日目かには正月が來た。酒好きな彼はいつもの年ならば、一度家を出たが最後、三日でも四日でも、友達の家から家へ飲み歩いて、全く身體の利かなくなる位まで、歸る事も忘れる事が多かつたが、その正月は神妙に家に閉ち籠つてゐた。書き出しに苦むのも彼の惡い癖だつた。三日でも四

日でも、二三枚書いては破り、書いては破つて、部屋の中をうろ〳〵歩いて、無暗にぢり〳〵昂奮して夜も寢られないようになる事もあつた。然しその難境も漸く切り拔けて、だん〳〵仕事に油が乘つて來た。

『僕は決して仕事が嫌ひな人間ではないと思ふ。仕事をはじめて、どし〳〵書いてゐられる時が、一番氣持もよければ、心も何となく安らかだ。その時だけは、ふだんのぢり〳〵した心から全く脫れる事が出來るのだから、決して怠けようとは思つてゐない』彼は仕事が終つて、夕飯の膳についた時などに、平素のずぼらを辯解するように、妻に笑つて話してゐた。

正月であつたために氣持も散り易かつたり、時々は飲み友達も遊びに來て時間をつぶしたりしたために、仕事は最初の豫定より少し遲れて、二十日頃になつて漸く全部出來上つた。その間にも臺所には拂ひの催促に來る商人や、家主の不足らしい聲が絕えなかつた。分けても如何にも催促らしい酒屋からは、主人や奉公人が代るがわる催促に來た。

『仕事さへ濟んでしまへば、何も彼も奇麗に片がつくのだ。こちらに惡意があつたり、强てづぼらにしたのでない事も、そのときになればよく判る』小さな事にまた、一々神經を痛まされるのをつまらなく思ひながら、彼はまた强て自分を鞭韃した。時には餘りにちつぽけなそれらの事を氣にし過ぎる、自分の弱さや氣字の狹さが、彼自身にも堪らなくいやに思へるような事さへあつた。

『然し』と彼はまた考へ直した。『これは小さな事であるかも知れない、然しこの小さな事の苦しみがなかつたら、或ひは改造とか革命とかを叫ぶ必要もないかも知れない。みんながこの小さな事のために苦しんでゐる。いやこの小さな事以外の苦痛さへ知らない人もあるのである。それが我々の眼前の現實だ。さうして人間の大部分はそれを超越するほどに偉大ではない。本當に偉大な事にでも、美しい事、勇壯な事、何にでもそれに燃燒した生活を持續する事の出來る者が

自ら一切の他の事を忘却したなら解らない事、現にかうして苦しんでゐる人間が居て、超越とか偉大とかの言葉の影にかくれて無關心な態度をする方が卑怯なのだ』彼は懸取りの尖つた聲に心を亂される度毎に、そんな事を考へてはまた強て机にかぢりついた。

厚く重ねた原稿紙を錐でとぢて、机の上にのせた時、思はずほつと息をついた。いつもの仕事の終つた時に起つて來る、不滿や失望や疲勞も彼の心を襲つたが、それでもどこか、爲すべき事を爲しとげた、愉悅が、そこに流れてゐた。こゝに書かれたものはまだ、全てが幼稚でキヅだらけな、缺陷の多いものかも知れない。然し、自分はともかく、自分の力一杯の事をした。これより巧みに、もつと深刻に書く人もあるかも知れない。が然し、自分でなければ書けない點もあるに違ひない、推敲、それも大切だ、けれどもかうして書くものは、その時發想した事が、その瞬間の自分にとつては最上でまた一番正直な方法だ、推敲は、平素の生活だ、推敲しなければロクなものが書けなければ、推敲したつてない物は出て來ない。彼はそんな風に諦めた。さうして『ともかく明日早速持つて行つて金にかへて、早くあの尖つた聲から免れたい。』書いてゐる中だけは創作に對する特殊の喜びが湧いてゐるが、書き上げられたものはもう商品である。今更らそれを兎や角云ふのも愚かしい話である。

その翌日も須山は朝早くから起きてゐた。そして、午頃になるのを待ち兼ねて、原稿を携へて家を出た。仕事のあとの疲勞と滿足が、彼の頭をどこかゆつたりとぼんやりさせてゐた。

『今日あの人に逢つて金が取れたら、子供の好きなものを二つ三つと、それから欲しかつた本を二三冊買つて歸らう、さうして明日からは落ついて、靜かに本でも讀んで暮したい、いや考へたい事も澤山あるし、訪ねたかつた友人もある』

極めて平凡な邪氣のない事を空想しながら、彼は電車にゆられてゐた。

A社の受付で

『左右田君はおいでゝすか』と訊ねると、

『今日は社に見えません』と云はれたとき、彼は一寸輕い失望を感じたが、然し、その位のことは有勝の事であると諦めた。受附から紙を貰つて、――約束の原稿を今日持參した。御不在で殘念であるが、何れ明後日また出直す。何分先日お話したやうな狀態だから、その節までによろしくお取計らひを願ふ――と云ふ意味の事を書いて、彼は家に歸つて行つた。屈托のない伸々とした心持になれないのが、彼には少し不滿だつたが、これはどうとも仕方のない事である。

『今日はあの人が、社にゐなかつた。明後日はいつ貰へるか判るから、催促に來たら皆にさう云つておいてくれ』彼は妻にも少し氣の毒に思ひながらさう云つた。

その日の來るのを待ち兼ねて彼はまた出かけて行つた。受附で訊くと、左右田は矢張り社にゐなかつた。

『僕は須山と云ふものですが、先日の手紙は屆けて貰へましたか知ら』

『えゝたしかに屆けました』

『それで、何か僕に返事のようなものはおいてありませんか』

『何にもありません』須山は一寸當惑した。が、さてそれ以上、どうして好いのかも判らなかつた。彼は自分の名刺の裏にまた明日來る事と、その時までにそちらの都合次第でいつ來たらいゝのかを、受附までゝも知らせておいてくれ、と書き殘して、一昨日よりも、一層つまらない氣持になつて家に歸つた。その翌日も同じ時間に彼はまた出かけて行つた。

『今日も社にをられません』受附の答は昨日と同じ調子である。

『何か僕に殘つたものはありませんか』

『ありません』彼は全く弱つてしまつた。左右田に直接會へない以上、間接に意志を通ずべき方法はとれるだけとつたのである。あとは毎日根氣よく、この受附に通つて來て、らちの明くまで同じ問答を繰り返すよりほかに手段は殘つてゐないのだ。須山は途方に暮れて、少時默つて立つて居た。段々態度が險惡になつて來た。出入商人の臺所で怒鳴る姿がちらりと彼の頭に浮んだ。――彼はまた窓口に近くよつて、

『左右田君は、此頃社には出て來られないのですか』と訊き直した。

『出ては來られます。然し、議會の方へ行くものですから、いつ社に來るかはつきりしません』それを聞くと彼は一層弱つてしまつた。議會はまだこれから半月の餘も開かれてゐる。その間、これが解決出來なければ、彼の家の生活は全く悲慘に落てしまふのだ。いやそれも、さう云ふ運命に陷つた時は、また何とか轉廻の方法も講じなければならないが、現に自分はかうして、左右田と固く約束して、書き上げさへすれば金にかはるべきものを提出してゐる。たゞ左右田が、それに對して彼の爲すべき事をしてさへくれゝば、忍ばなければならなくもよい苦痛を忍ばなくとも濟むのである。それにしても、左右田はどんな心持で、强て放擲しておくのか、彼が忙しければ忙しいで、ある日取りを決めてくれても好いのである。須山は左右田の心持を忖度する事が出來なくなつた。彼はぼんやりとまた考へてゐたが、

『左右田君がをられない中、誰か代りに文藝欄をやつてゐる人がおありですか』と訊ねてみた。

『はあ、をります、平井さんです』彼はその平井と云ふ人は知らなかつたが、

『それではその方に一寸面會を願ひたいのですが』と名刺を出した。

少時たつて須山は二階に導かれた。年の若い、どこかまだ書生書生した平井はすぐにそこに出て來て、

『僕が、平井ですが、何か用で?』とにこ〳〵しながら彼に訊ねた。眼のくり〳〵した、人の好さゝうなその態度が、須山の心を和げた。

彼は平井にこの間からのいきさつを委しく話した。そして、『森からの拂ひが、たまつてさへゐなければ、僕も落ついて返事をお待ちするのですが、何しろ實際弱り切つてるのです。それに今の家は越してから、まだ大して間もないものですから、商人がウルサクつて困つてゐる際ですから、何とか一つ至急に金の貰へるやうにしていたゞきたいと思ふのですが』初めて逢つた平井に對して、間の悪さうに彼は頼んだ。

『はゝあさうですか、あなたに原稿をお願ひしたと云ふ事は、左右田君からも聞いてゐましたし、先日一寸原稿の包みだけは拜見しましたが、何しろ、左右田君はいま議會にばかり行つてゐますし、それに肝心の原稿を持つて歸つてしまつてゐるのです。然し、今日明日の中には逢ひますから、明後日どうかお出で下さい、必ず判るやうにしておきます。左右田君が向ふに行つてゐる間は、私が、文藝欄の事はやつてをりますから』須山はそれですつかり安心した。

『それでは明後日お訪ねしますから何分よろしく』と彼は重ねて頼み込んで家に歸つた。その日の事を張合もなく妻に話したとき妻の顏は暗くなつた。毎日家に留守番をして台所口で大きな聲で催促をする商人達に、昨日も今日も同じ事を繰り返す馬鹿々々しさは彼にもよく同感された。然し彼もその商人達と同じやうな目に毎日會つてゐる。自分は決して欺かうとしてゐるのではない。たゞ一寸、事務の捗りが遅れてゐるだけである。

『こないだあんな、明後日くれば判るなんて云つたものだから、あれからいやにうるさくなつたのですよ、一體どうしたつて云ふんでせうね』妻は不平を洩すと云ふわけでもなくたゞ不審らしく云つたゞけだ。が、それは彼のいら〳〵した、押しこらへてゐる心緒を鋭くついた。

『明後日行けば判ると思つたからさう云つたんだ。普通に考へれば判つてゐるわけなのだ。それよりほかに僕には何にも云へないからな』妻にも少しの惡意もなく、彼自身にも惡意も反感もないのはよく判り切つた事でありながら、何か暗い不快な氣持が、そこに横はるのを防ぐ事は出來なかつた。

『何しろ明後日になればよく判るだろ』むかむかと腹立しくなつてくるのを、押へるでもなければ、爆發させるあてもないので、彼は默つて二階に上つてごろりと横になつてしまつた。

その明後日も彼はまた出かけて行つた。受附で訊くと平井はまだ來てゐなかつた。家の小遣すらなくなつて、漸く電車賃に僅か多い金を懐ろにして出て來た彼は、どこで時間をつぶすあてもなかつた。それでその日初めて、このD社の三階に登つて來て、窓越しに前の三階の大時計をぢつと眺めはじめたのだ。

時間が來るとそこを降りて、彼はまたA社に行つた。平井の態度は一昨日とはまるで違つてゐた。

『あれから後、どうしても左右田君に逢へないのです。あの人に逢つて話を聞かないと、どうして好いか判らないので弱つてゐます』さう云つた彼の態度には、迷惑らしい樣子があり〳〵と窺はれた。

『さうですか、それなら僕がどうにかして、左右田君に逢ひませう、議會に行つたらゐるでせうか』須山はまた、途方に暮れながら訊き返した。

『えゝ議會に行けば必ずゐます。あなたが、行つて逢つて下されば、話は早く運びますから』

『それではすぐに行つて見ませう』

寒い風が街の上を吹き渡つて、往來はから〳〵に凍てゝゐた。彼は日比谷公園を横切つて議事堂の方へやつて行つた。廣い通りには、自動車が織るように往來して、衆議院の構内にも、自動車や俥が澤山待つてゐた。こゝでは今一團

の議事に關して、また國民の運命に關して何か論じ合つてゐるのである。この邊を往來する人々も、自働車も馬車も俥も、凡てその所謂大問題に關係して何か忙しさうにしてゐるのだ。けれどもそれは現在の自分にとつて、何の關係もない事である。書き上げた小說の原稿料が取れるか、取れないか、それは餘り小つぽけな馬鹿々々しい事である。もしあの自動車の中の紳士にこんな事を話したら、

『なんだそんな下らない事』と彼は恐らく腹を抱えて笑ひ出すに違ひない。が然し、須山自身には之れが刻下の一番大切な問題である。議會で何が通過しようが、否決されようが、彼にはまた、それはどうでも好い事だ。

須山は變な皮肉を感じながら、議會の裏門から記者倶樂部の方へ入つて行つた。二階の廣い西洋間には、各社の記者が、一二脚のテーブルを並べ合つて、一杯になるほど陣取つてゐた。テーブルの上の電話は絶間なく鳴つてゐるし、ボーイは忙しさうに原稿を持つて走り廻つてゐる。隅の方で誰かゞ突つく牛鍋の匂ひと煙草の煙と、慌しい騷音が、部屋の中には一杯籠につてゐる。こゝにも國事に關する使命があつて、彼のような貧乏文士の生活苦など、云々されるような所ではないのである。彼はそれを考へると、ふとまだ若い、左右田のあのづぼらな態度が說明されるやうに思はれて、何となく肩身の狹い氣持がした。

A社の記者のゐる机は、その部屋の奧の突當りだつた。須山は通り路もないやうな、椅子と卓子の間を分けながら、やつとその机の所に行つて、

『左右田君はゐますか』とそこにゐた給仕に訊ねた。

『左右田さんはいま、憲政會の本部に行きました』給仕は何心なく彼に答へた。

『さうですか、もしこちらに見えたら、斯う云ふ者の來たと傳へて下さい』彼は名刺を置くと、[illegible]そこを出て、僅

離れた憲政會の本部に行つた。そして受附にゐた給仕に『A社の左右田君に、一寸お目にかゝりたいつて、これをどうか』と名刺を渡した。給仕はそれを受取ると、入口の階段からすぐ見える部屋の扉を押し明けて、

『左右田さん、面會』と大聲で云ひながら名刺を部屋の中に突き出した。然し次の瞬間に給仕の態度は俄かに變つて、彼は何か二つ三つ點頭くと、ぐるりとこちらに向き直つて、

『左右田さんはお留守です』と間の悪さうな強て冷たい表情をして、名刺を彼に突き返した。こちらから眺めてゐた給仕の態度で彼は何も彼もがすつかり讀めたやうに思はれた。たゞ彼にもどうしても解らないのは、どうして左右田が彼を避けなければならないのか、と云ふ事である。何か彼が誤解してゐるのか、或ひは餘り輕率に受合つてそれがために苦しんでゐるのか、或ひは俄かに何か須山に對して反感を持つような事が、起つたのか、彼にはたゞ一切が疑問である。

途方に暮れた顔つきをして、彼は日比谷公園を歩いてゐた。珍らしいほどの冷氣のために、公園の中の大地は殊にかちかちに、鑛のように凍つてゐた。池の面にも氷が厚く張りつめて、水を噴かない赤銅の鶴が、氷の着物を厚く被つて、寒さうに立つてゐる。寒い冬の午後であつたが、まだ四邊には珍らしい、氷の池を眺めに來てゐる人々の姿も見えた。子供を連れた若い夫婦は、ベンチに腰を下して何か愉快げに笑つてゐる。そんな姿を見る度に、彼の心は暗くなつた。

彼が小説を書き上げてしまつた日から、彼れこれ一週間に近い日は經つのである。それさへ書けば、すぐに金になると云ふ事が、書いてゐる中の彼の心を氣安くした。初め一二度左右田をA社に訪ねて會へなかつた時も、それは何かありふれた手違ひだらうと思つてゐた。然し今日のように、あゝして面會まで避ける事を考へると彼の心は何となく不安

にもなつて來た。得體の知れない憤激の念も起つて來た。

『一體僕はどうしたらば好いのだらう！』彼はぼんやりとそんな事を考へた。『貴樣の方で引受けて、約束したからかうして持つて來たのだ。それをいつまでもいつまでも、のんべんだらりと延しやがつて、さうして僕を輕蔑して苦しませる事が、面白いのか、それには何か理由があるのか、云へるなら云つて見ろ』原稿を引つたくつて、左右田の横面を力任せにぽかりと一つ擲りつけたら、と考へると、それは確かに堪らないほど痛快に思はれた。事實彼は、さうした感情を堪へたりこらへたりする事が出來ないために、三十才近くまで、新しい職業から職業へ、いや失職から失職へ、苦しい流浪の日をつゞけた。さうした感情をこらへてまで、忍んで行かなければならない理由が、彼にはなかつた。今だつて』と考へると、彼の感情はむら〳〵と湧き上つた。

『俺はそれで好い、それで痛快だが』それから先に、彼の眼の前で苦しがる、子供や妻の姿が浮んだ。彼の心は俄かにしよげてしぼんでしまふ。口惜しいのか馬鹿々々しいのか、眼の中が熱くなつて、涙がぢつとにじんでくる。

『意氣地のなくなつた自分が恨めしいのか、我慢をすることが、それほどに情けないのか、妻子が苦しむのを見て苦しむと云ふことも、それも結局自分の苦痛を免れたいからの事でないか』眼隱しをしてぐる〳〵廻りをさせられた子供のやうに、戸惑つてゐる彼自身を、彼は自分で嘲つた。

　須山は全くぼんやりとしてしまつてゐた。何を考へて好いのだか、どう云ふ風に態度をきめたら好いのだか、彼の眼の前に横たはつてゐる問題は、極めて小さな事でもあれば、大して悲觀すべき事でもないやうであるのだが、それだけに、それが彼の心をかうまでも、ぢり〳〵と苦しめると云ふ事が、たまらなく情けなく愚劣な事に思はれる。

　ベンチの上に腰を下して、しみつくやうな風に吹かれながら、氷に包まれた噴水の鶴の姿をぼんやりと眺めてゐた。

『ストライキをしたいにも、サボタージユをしたいにも、私はたつた一人きりであつたのである』宇野浩二の小説の主人公、それは彼の現在の境遇と極めてよく似てゐる主人公が、云つた言葉を彼はふと思ひ出して苦笑した。

『全く俺は一人きりだ。さうしておまけに、俺の小説と云ふものが、本當に俺と云ふ人間の生存權を的確に保證するだけの、絶對的な價値と力を持つてゐるものなのか』

『たとへばA社であれを拒んだとした所で、それは彼等の契約の不履行を責めるだけの事は出來るかも知れないが、さて俺は世間に對し、社會に向つて、俺はこれだけの作をした。だからそれだけの生活をさせなければならないのだ―とどんなかの手段で要求する事が、出來るだらうか』彼はそこまで考へると、恐ろしくげつそりとしてしまつた。

『はゝゝ、何を云ふのだへぼ文士め、貴樣達の小説が、一つや二つあらうがなからうが、それが俺達と何の關はりがあるのだ。つまらない泣言を並べないで、當り前に飯が食ひたければ、飯の食へるような仕事をしろ、汗水を流して働いてゐる俺達さへかうして毎日苦しんで暮してゐるのだ。それを何だ貴樣達が』どこかでそんな聲を張り上げて、彼をせゝら笑つてゐるものがあるように思はれる。全くだ、これが、もし、米とか麥とか野菜とか、或ひは反物を織つたとしたならば、俺は敢然として、社會に對して俺の生存權を主張する事が出來るのだがと彼はひよつと、そんな風にも考へてみた。『あゝ然し、それでもだ、それはたゞ投資をすると云ふ事が、許されてゐるだけだ。肥料、地代、酬はれない勞力。結果に於て現在の自分と少しも變る所はない位だ』彼の頭は朦朧として、思想は混亂しはじめた。どこへ行つたら、働きさへすれば食つて行ける、安固な確實な場所があるのか。この公園の向ふ側の宏壯な建物の前には數百臺の自動車が並んでゐる。彼等はあの建物の中で大きな聲で怒鳴つたり喚つたり、愚劣な論爭を繰り返して、さて表てに出れば、街頭を自動車で疾驅する。夜になれば待合がある。歸れば美しい妾宅がある。さうしてそれが、働いて苦しむ者の生活に

何の交渉もありはしない。

『正當な勞力に、正當に酬はれる安固な世界。自分はたゞそれが欲いのだ。木挽でも大工でも左官でもトロ押しでも、自分は何でも厭はない。人間は何もこんな下らない、役にも立たない不安にいつも襲はれなければならないと云ふ理由は寸毫もないわけだ。それがなければ人間の進歩がなくなるなどと云ふのは、餘りに人間を見くびつた話である。自分で自分を輕蔑したものゝ云ふ事だ。だが然し、それにしても、俺は俺の、この小說を書いたと云ふ事によつて、さう云ふ權利を主張する事が出來るだらうか』それまで來ると、彼は恐ろしく自分の地位が心許なくなつて來た。さうして現在の自分自身は、ストライキをしたいにも、サボタージユをしたいにも、全く一人つきりなのである』彼は自分の生活が、浮草のようにふわついた、力ないものに思はれて、げつそりとしてしまつた。

四邊はもう夕暮になつてゐた。氷のように冷たい大氣が、足の指先や頰ぺたを、錐でもさすようにちり〳〵と痛くした。ひよろ〳〵とベンチから立ち上る自分の姿が、宿無し者のように思はれた。泣き出しさうな苦笑ひが、留め度なく浮んで來る。顏面筋肉がこはばつて、引きつるような痛みを感じながら、彼はのそ〳〵と步いてゐた。

公園のそとも寒かつた。そこにも氷のような風が砂を卷いて吹いてゐる。須山は肩をすぼめて步きながら、彼の家の事を考へてゐた。臺所には商人達が、甲高い聲を出したり、いやに傲慢な態度を示して、根氣よくよせてくる、その度每に彼の妻は、同じ事を繰り返し繰り返し、氣まづい思ひをして言ひわけをしてゐるのだ。さうして彼女は、たゞ彼の歸りに望みをつないで待つてゐる。

『今日もやつぱり駄目だつた』むしやくしやした思ひをこらへながら、同じような結果を妻に語る。彼女の頭はまたそれで暗くなるのだ。明日もまた、いやな思ひをして、商人に辯解をしなければならないからだ。二人の間に氣まづい感

じが漲つて來る。馬鹿げた事には二人とも、相手に何の落度も發見する事が出來ないで怒る事だ。二人はそれを知り切つてゐるけれども、それで茫漠としたいら立しい、怒りつぽくなつた氣持からは救はれない。――何と云ふ馬鹿げた事だ――彼は思はず吐き出すようにつぶやいた。それに一番いけない事は、全く希望がなくなつてゐない事だ。蛇の生殺しのように引きづられてゐるために――彼はそれを考へると、いつそ一と思ひにぶち壞す快さをまた考へた。そして素直に家に歸つて行けない、自分の卑怯とけち臭さをせゝら笑つた。

『然し、このまゝ歸つても、今度は明日またかうして出てくる電車賃もなくなつたのだ』須山はそれで、救はれたような氣持ちになつた。そして彼はまた、家の方には反對に足を向けて、D社の方へ歩いて行つた。水野に金を借るためにである。

須山と同じように貧乏な生活をしてゐる水野は、彼の申し出を聞くと社の中を驅け廻つて、漸く十圓ほどの金を作つてくれた。

『これでやつと小遣が出來た。子供がゐると一文なしではゐられないから』須山は嬉しさうにそれを受取つた。

『まあ好いさ、ところで君は晩飯はまだだらう』と水野が訊ねた。

『晩飯どころか、午からまだ水一杯だつて飲みやしない』須山は情けない顏をして、苦笑した。

『それならどつかで一杯やらう、俺がおごるさ、そんなにくよくよしたつて仕方がないさ』

水野は强て快活らしく笑つて先に立つた。

それから彼等は二人の馴染な、山の井と云ふ小料理屋に出かけて行つて、隅の方に腰を下して酒を飲んだ。

[illegible]

『それがさ、どう云ふ考へなのか僕にも少しも判らないから困るんだ。妥協をしに困つてゐるのか、こちらを愚弄して面白がつてゐるのか、それとも何か事情が出來たのか、何にしても薩張り判らない。今日でもあんなに隱れないで、ちやんと話をしてくれゝばこちらも安心出來るのに、變に隱れたりするのは、どう云ふ量見だかまるで判らなくなつて來るんだ。實際今日は癪にさわつて、あの憲政會の本部の部屋へ、構はず入り込んで行つて怒鳴りつけてやりたくなつた。あの小說を買ふのが困るなら困るつてえば、それは一時は怒るかも知れないが、それでも僕は諦めるさ、さうして更に何か他の方法を講ずる事が出來るのだ。貧乏なんか、昨日や今日はじめて出會したわけではなし、覺悟さへきめれば、どんなにかして生きて行く事は出來るだらう。たゞ君、かうして何だか得體の知れないもので、首つ玉をつかまへて、ぐる／＼廻りをさせられてゐるようなのが、こちらには一番苦しいのだ。もうこれで最初の日からは十日近くにもなる。その間僕は君、何一つ讀む事も考へる事も出來ないで、家からA社へA社から君の社へ、それから議會へ、またA社へ、と云つた風に、たゞむしやくしやして步いてゐるだけの話だ。嚴密な意味から云つたら、左右田は僕の生命をむだに一週間以上も殺さした。或る意味での殺人だ。だから僕はあいつを擲りたくもなつてくるし、殺したつて構ふもんかとさへ考へる。が然し、まあ、またよもやに引かされてね、かうしてぐづ／＼してるんだ。意氣地がないさ、全く意氣地がなくなつたんだ。そしてそれは、結局僕が所謂流行作家でないために、こんな莫迦々々しい目にも會ふのだらうか。』

『ほゝ、えらく大きく考へるな。そんなに昂奮しないでまあ飮むさ』水野はなだめるように盃を須山にさした。

『いや、この事ばかりではないのだよ、此の頃の僕は何でも彼んでも、よもやに引かされてマゴ／＼して生きてゐるのだ。いつかスタール夫人の事を書いたものか何かを讀んだ時、お互ひの間に熱情がなくなつても、男女の關係を持續し

てゐるのは怯懦な卑むべき事だ、と云ふやうな事が書いてあつた。それなら生に對する興味が失くなつた時、生きてゐるのも怯懦と云へる。然し戀愛も君、チブス患者の熱みたいなもので、熱の高い時ばかりが眞劍なわけぢやない。表面は冷たくなつても、心に沁み込んでゐる事があるからね、生きてゐる人だつてさうぢやないか、いやだと思つた時が却つて深い愛着を感じてゐるのかも知れやしない。だから君みんなよもやに引かされて生きてゐるんだ。左右田・人位か擲れないで、野良犬みたいにマゴ〳〵歩くのさ、馬鹿げた話だ』須山は立てつゞけに喋舌りながら、手酌でぐい〳〵酒を呷つた。

『そんな事を言へば誰だつてさうぢやないか、思つた事を、何の顧慮する所もなく、びし〳〵やつて行く事が出來れば、人間に苦情はないさ』無口な水野は、思ひ出したやうにぽつりと云つた。

『それはさうだ、だが然し、僕なんか何よりもいけないのは、自分の仕事に對する自信を失つてゐる事だ、と云つて、小説を書く事が惡い事とは決して思つてゐやしない。自分にとつて、また僕のやうな性格のものにあつては、一番適した有意義な事と思つてゐる。けれども、今度のやうな事のあつた場合に、社會に對して、存在の權利を主張する力が薄いやうに思はれて仕方がないのだ。今日も考へた事だけれど、それは米を作つても、困る時には困るだらう。現に困つてゐる人が澤山ある。けれども僕がもしさうして困つたら、社會に對して要求する。要求が容れられなければ怒號するし、それから先は何でもする。尠くもそれだけの自信を持つ事が、出來るのだ。どうして勤勉な農夫を、職工を、困らせなければならないのかつてね。然し、どうして一人の作家をかうまで困らせても差支へないのか――とは僕には云へないのだ。それなら貴様はなぜ百姓にでも職工にでもならないのか、と云はれると、僕は困る。火夫や土方位はいつでも出來るか、それでは今より一層困る。―さうして之れかつて自分の仕事そのものを、之れほど無意義に思ひ切れも

しないのだ。そこに僕のヂレンマがある。分裂がやつてくるのだ。』須山は盃をやめて、コップについだ酒をぐつと呷つた。

『さう大層に考へるな。暮してさへゐられたらそれで好いのだ。どこへ行つたつて貴様の考へてゐるやうな、氣持の好い所があるものか。だから俺は、もう少し年を取つたら、白い着物を着て巡禮に出る。人生なんか考へたら息苦しくつてやり切れんさ』醉の廻つて來たらしい水野は、さう云ひ切ると仰向いて眼をつぶつた。

『簡單にきめられゝば、それも好いさ。然し性格だから仕方がない。何しろ僕なんか、文學が好きでもつてどうかして文學をやりたいと思つた時分なんか、文學で生活が出來るとは夢にも思はなかつた、藤村があれほど有名でも文士無妻論なんて唱へてゐた時分だもの。それが今日、かうして好きな文學で、ともかく生活して行かれゝば、それは自分に取つては幸福だと思つてゐる。だから素晴しく金廻りがよくなりたいとも、贅澤がしたいなどとも考へない。暮してさへ行ければ、あとはどうかして本當によいものを書きたいと思ふだけだ。が然し、それだけに今度みたいな目に會ふと、全く生活上の自信を失つてしまふのだ。文學で生活すると云ふ事が、果して妥當であるかどうか。さうして主張すべき權利があるか？　とそこで僕は行詰つてしまふのだ。』

『だから詰らん事を考へるなつて僕が云ふのだ。何にも喋舌らない奴が、代議士面して自動車を飛ばせてゐるぢやないか。そんな事を考へるひまに小說の賣れ行のよくなる方法でも考へろ、どうせこんな世の中に、生れたと云ふのが、最初からつまらない話なんだ。まあ好いから飲め』水野は身體をふら〱させて立ち上つて、彼のコップに酒をついだ。

『はゝ、二度とふたたび、地球上に生れてくるだけは眞平だ。つて云ふのは角野の口癖だ。それでも彼はあゝして生きてゐる所を見ると、充分愛着のある證據だ。生きてゐるのがいやだと云つても、本當に全部がいやになつて死ねる奴が

あるものか。たゞ、どつちか一味のかゝつた方を取るだけだ。俺なんか一度も二度も死にかけても、かうして矢張り生きてゐる。死んでしまつて、もつとほかの好い世界へ生れるより、俺は矢張りこの地球に生れて來て、地球のよくなるのを見たいと思ふ。だからこれから先きだつて、疲勞して困憊して、氣力も何もなくなつたら、また自殺をやつて見るかも知れない。然しそれはだ、生れ變つて來られるなら、もつと新らしく生々として出直して來たいと思ふからだ』

『負惜みを云ふな』と水野が怒鳴つた。

『負惜みなものか、俺は本當にさう思ふ。たゞ然し、彼奴を擲れないのが殘念だ。なあ水野』

コップ酒にひどく醉つた、須山はふら／＼と椅子から立つた。

『ふゝ、だから貴樣は苦しまぎれにそんな事を云ひ出すのだ。今夜はともかく、俺の家へやつて來い。もう一度飲み直さう。さうして明日また出直せばそれで好いのだ。問題は簡單さ、金さへ取れゝばそれで好いのだ。生の煩悶も、轉生も輪廻もくそあるものか』よろ／＼してゐる須山の腕をぎゆつと握つて、

『さあ行かうつ』と水野は怒鳴つた。煙が一杯つまつたやうに、もや／＼してゐる須山の頭にも水野の言葉は強く響いた。

『はゝ、問題は本當に簡單だ。金さへ取れゝば、それもさうだ』蒼くなつて眼の据つた須山は獨言のやうにつぶやいた。何のためにあれほどまでに苦んだり、昂奮したりして色々な議論をしたのか、生だの死だの―と、問題は本當に簡單だ。須山はその瞬間に恐ろしく自分自身が、みじめな弱々しい者に思はれて がつくりと首垂れた。『はゝ、それで俺が、毎日毎日、痩犬みたいにうろ／＼歩くのか、馬鹿げた事だ。つまらん話さ、さあ行かう』水野にもたれて、ひよろ／＼しながら、山の井の店を出た。

『いや、そればかりぢやない、これから先に何かある。何かある』往來に出てからも、須山は幾度か繰り返した。然

し、コップ酒が烈しく廻つて、朦朧としてしまつた。彼の頭には、何物も浮んでは來なかつた。凍てた町を滑り滑り、彼等はよろ〱と歩いて行つた。小さなバーに入る度に、須山は水のように酒をがぶ〱呷つた。

いふまでもなく、水野の家であくる朝眼が覺めた時に、須山は、崖から落たような憂欝な氣持になつて、あたふたと自分の家に歸つて行つた。そして昨日水野から借た金を妻の前に突き出して

『昨日も矢つ張り駄目だつた。夕方までかゝつても、どうしても逢へないのだ。家にも小遣がなくなつたから、水野にやつとこれだけ借りて來た』と昨夜泊つた非難を避けるためにあらかじめ辯解して、『それで何かね、矢つ張り昨日も矢釜しく云つて來たかい』と妻に訊ねた。

『えゝ、ほかの家はそれほどでもないのだけど、酒屋だけが亭主が來て、憎らしさうに怒鳴るんでせう、その癖もうこの五六日、用聞きには來ないのですよ。お隣りまでは來ても家へはちつとも寄らないんですもの』

『仕方がないさ、明日やる、明後日やるつて云ふからきつと怒つたんだ。然しこつちは決してうそをついてゐるわけぢやない。有の儘の話をしてゐるんだが』飲み過ぎた酒がまだ、胃袋の中に闘つてゐるようで、脂汗ばかりがじく〱と滲み出て、精も根も盡き果てたような氣怠さを彼は感じてゐたのであつたが、

『それでは今日、僕が行つてよく事情を話して來よう。』と彼は酒屋に出かけて行つて、前後の事情をよく話した。原稿とか、新聞紙とか、そんな事はどうでも好い酒屋の亭主は、

『何しろ手前の方も、問屋に拂ひを致さなければなりませんので、それで御催促申し上るわけなのですが、何卒一つ何とか御都合を願ひまして』と仲々すつぱりと呑み込めはしなかつた。

『だから僕は、毎日あゝして催促に行つてゐるのだから、餘り大きな聲で怒鳴らないやうにしてくれ給へ。こちらは決

して誠意を欠いてゐるわけではないのだから』

『いえ、それは無論さうで御座いませうが何分手前の方もその問屋に』それから先きを辛棒して聞く勇氣を彼は失つてゐた。そして、

『出來次第に持つてくるから』と彼はその店を飛び出した。——誠意よりも金が欲しいのだ。酒屋の亭主も、それから俺も、——家へ歸ると彼は默つて二階に上つて、そのまゝごろりと寢てしまつた。擦りのつかない憂鬱な想念が終日彼をさいなんだ。

『俺はやつぱり、A社から議會へ、それからD社へ、D社からA社へと、猟犬みたいに歩いてゐる方が、まだ樂だ』布團の上を轉々とごろがりながら、彼は幾度か心に叫んだ。

さうして彼は今日もまた、朝起き出すと午になるのを待ちかねて、持ち古した風呂敷みたいな、いらだゝしい氣持をかかへて家を飛び出して來たのである。

酒の氣の絶えた時は、啞のやうに默つてゐる水野の話は、すぐと絶えてしまつた。

『俺はまだ少し用があるから、君はまあゆつくり休んで行け』一昨日の晩の意氣もどこかへ消え果てゝしまつたように、水野はいやにしほれて、編輯室へ歸つて行つた。

一人きりになつてしまふと、須山はまたA社の時計にぢつと眺め入つた。彼自身はどうかして、何もかも忘れ果てゝゐる中に、時のたつのを望んではゐるのであつたが、彼の眼は意地惡く、いつの間にか時計の盤面にこびりついてしまふのだつた。

『時計の針と云ふ奴はまるでいたづらな子供みたいだ』彼はふとそんな事を考へて苦笑した。ぢつと眺めてゐる間は、太い針が釘づけにでもされたやうに、ぢつと一個所に止つてゐる。さうしてそれが、彼の心を縛りつけたやうに重くする。彼はその苦しさに堪えなくなつて、窓越しに下の町の方を眺める。自動車の走るのや人のゆきゝ、そして再び時計の盤を眺め返すと、長針は大きなくぎりを二つ三つ先きに進んでゐる。

『それにしても一體俺は、どこを眺めて、何を考へて暮してゐたら好いのだらう。ゐても立つても堪らないと云ふのはこの事だ、これは本當に一つの地獄だ、どうにもならない、時の刻みの速度を無理に早めようとしてあせつてゐる。それはたしかに愚劣な事だ。然し現在の俺自身に、これ以外の何事を考へたり、何物を眺めてゐる餘裕が與へられてゐるのだらう』全く彼にはいやが應でも、冷酷に時を刻む時計の盤を憎々しげに眺めるよりほかには、何物も許されてゐなかつた。彼は時々同じこの時間の間にも、時の刻みの早すぎるのをかこつてゐる人々の事もふと考へた。然しそれは、彼に取つては何のタシにもならなかつた。彼は眺めた。さうしてぢれた。

彼にとつては恐ろしく長い時が、それでも漸くに過ぎて行つて、約束の三時が來た。彼はほつと息をついて、椅子から立ち上ると瓦斯を消して、あたふたと、階段を走り下りた。

『平井君はもう來ましたか』A社の受附に立つて訊いたとき、

『さあ、聞いて見ます』と受附は珍らしく受話器をとつた。話の中に受附は、

『須山さんと云ふ人です』と、彼は姓名を報告した。――今度は確かに來てゐるに違ひない――彼はさう考へながら、受附の返事を待つてゐたが、受話器をがちやりとかけると受附は、改まつた顔をして向き直つて、

『まだ來てをられないのですが』と彼に答へた。

『さうですか、それではともかく、あの人が來るまで待ちませう』彼はさう云ひ捨てゝ、梯子段をすたすたと二階に上ると階段の上に立つて待ち受けた。

『二時間でも三時間でも、今日こそ解決のつかない中に歸るものか』煮え立つような血を抑へて、彼はぢつとそこに立つてゐた。編輯室と書いた扉の中へ、出入する社員達は彼の姿を不審さうに眺めて通つた。彼はその度毎に、いやな侮蔑の感じを受けた。

が然し幸ひにも、須山はそこでは、それほどに長く曝しものになる憂目を免れた。階段の手摺によりかゝつて、彼が立ちはじめてから十分ほど經つと、手に何か原稿らしい紙を持つた平井がそこへあたふたと通りかゝつた。

『平井君』と須山はすぐに聲をかけた。

『あつ』と云つて立ち留つた、平井の顏は見る見る中に赤くなつた、そしてときまぎして失つた落着を、どうにかして取り返さうとあはてゝゐる妙な姿を、須山は氣持よく眺めてゐた。

『先の出方一つでは』彼は外套の下で拳を固く握りながら、

『君はまだ來られないと云ふものだから、こゝで僕は待つてゐたのですが』と少時たつて切り出した。

『いやその今日は、會議があつて編輯室にゐなかつたものですから、失敬をしてしまつて、まあこゝでは何ですからあちらでお話を』

と平井は先きに立つて、ガランとした人氣のない部屋に彼を導いた。

『一體あれはどうなつてゐるのですか、僕はこれで、もう十日近く編輯室とこの[illegible]の間をうろついて[illegible]して

[illegible]

ます。たゞかうして、氣の利かない懸取りみたいに、毎日毎日うろ〳〵歩かされるのが、僕には一番苦痛なのですが、どうか事務的に構はず話をして頂きたいのです』須山は椅子に腰を下すとすぐに、強て冷靜な態度で云つた。

『いや、實際何ともお氣の毒です。左右田の奴にあれつきり、僕も逢へないものですからそれで弱つてゐるのです。原稿さへこちらへ屆けば、私から部長に話しても好いのですが、何しろあの男に逢へないので』平井は苦しさうにもぢもぢした。

『それでは僕が、原稿を取りに行きませうか、さうしてあなたに屆けさへしたらそれで好いのでせう。』

『さあそれが、何しろ最初の話があの人との約束ですから、あの男から出させた方が好いのですが、』須山は平井の言葉を聞くと思はずかつとなつてしまつた。

『何ですか、君の云はれる事は、それは禮儀とか順序とか云ふ事ですか』

『いや、そんなわけではないのですが、』平井は彼のたゞならない權幕に、少しあはてたようであつたが、『つまりその、僕としても、あの人を差し措いて、事をきめてしまふのが苦しいと云ふのです。それにその、あの男に變な感情を抱かせてもどうかと思ふものですから』

――今になつてそんな事が何だ――と須山は怒鳴りつけたかつたが、彼の心の底の方で何かそれを押へてゐる力強いものがあつた。彼は煮え切らないなづ痒さを耐へしながら、

『さう云ふものですかな』と皮肉らしく云つてから『ともかくもう、順序は出來るだけ盡してあると思ふのです。今の僕は左右田君の感情よりも何よりも、たゞこの事を事務的に一時も早くラチを明けて貰へればそれで好いのです。毎日

毎日から云ふ風に果しなく引きづられてゐる事が、何よりも苦しくつて、實際精も根も盡きてきて、どうでもなれと云ふ氣持にもなつて來るのです。それですから、貴下も困ると云はれるなら、僕はともかくもう一度、議會の方へ行つて見ます。それでも、どうしても、左右田君に逢へなかつたら、あの人の家へ取りに行きませう。まさか原稿を失くしたわけではないでせうな』須山の語調はだん〳〵くじけて穏かになつて來た。

『それは、そんな事はありませんよ』

『それならば、その時はあなたから、左右田君の家へあてゝ、手紙を一つ書いてお貰ひしたいのですが、それと、その時は構はず部長に話して頂きたいのですが、どうでせうか』

『さあ』と平井は少し考へてゐるようであつたが、『どうもさうするよりほかに方法はたいようです。何しろあの男と來たら社でも有名なづぼらでいつでも僕が弱らされるのです。若いわりに仕事もよくやるし、人間も決して惡くはないのですが、何しろ若いものですから』

平井はしきりと左右田の事を辯護してゐた。

『では明日もう一度議會の方へ行つて見て、逢へなくつても、明後日お訪ねする事にしませう。その時は、多少お忙しくても會つてお貰ひしたいと思ふのですが、何時頃なら社にお出でゝすか』須山は皮肉な氣持でもなんでもなく訊ねたのだが、平井は一寸ばつの惡い顏をして

『二時頃ならば必ずゐますから、どうかお構ひなく〳〵』と答へながら變な笑ひを頬に浮べた。

平井と別れてそとに出た時は、廣い町も薄暗く暮れかけて、前のD社の高い建物の中から、電燈の光が窓越しに洩れ初めた。次のように鋭い風に、疲れた彼の耳をさした。須山は少時、D社の石段の前に立つてもう一度水野を訪ねよ

うかどうしようかと迷つてゐた。然し、今日も同じく、徒勞と屈辱の中に一日を送つた事を考へると、その元氣もなくなつた。一昨日の晩の泥醉が、彼の心をしぼませたのだ。水野に逢へばまた再び、意識を失ふまで醉はなければ、ゐられなくなるだらう。——彼は諦めてそこを去つた。が然し旅愁に似た妙な寂しさが、彼の心にこびりついて離れなかつた。妻の事を考へると、早く歸らなければならないやうに思はれたが、家に歸つてからの重苦しい焦燥が、彼の足をまた山の井の方へ向けてしまつた。

『どうしました、もう話はつきましたか』彼とは可なり懇意にしてゐる、山の井の主人は須山の顏を見ると、にこ〳〵笑ひながらすぐに訊ねた。

『いやまだなので、實際弱り切つてしまつたんだ。あれが取れたら、すぐに拂ひをしますからね』須山も笑ひながら答へると、

『いや、そんな事はまあなんですがね、どうしたつて云ふんですかね、それで左右田さんは矢つ張りゐませんか』自分の店からA社にも辨當を入れてゐるので山の井の主人は、左右田の事を須山に訊ねた。

『いつ行つてもゐないつて云ふんでね、それで弱つてゐるんですよ』

『さうですかなあ、そりや不思議だ。家からは毎晩左右田さんに辨當が行くんです。今日でもきつと、もう少したつとか〻つて來ますよ。まさか他の人が喰ふんぢやないでせう』

と云つて、山の井の主人は『は〻〻』と笑つた。

『なあに、僕が毎日行つてゐる事もよく知り切つてゐるんですよ。どこの記者だつて十日も社へよりつかずにゐるなんて、そんな事のあるわけはない。だから知つてゐるには違ひないのだが、何のためにこんなに隱れたり、明日だの明後

日だのと、厭な事を言ふのだが、それが僕には判らない。そんな事を信じてやつて來るのが悪いかも知れないが、今日となつては、それを信じて毎日やつて來るよりほかに方法がないのだから』と云つて、須山も仕方なしに寂しく笑つた。

それから彼はまた隅の方に腰を下して、默つてちび／＼と酒を飲んでゐた。醉が少し廻つて來ると、彼は獨りで頭の中で、――何のために今になつて、左右田の感情を尊重するような、平井の話に應じたのか、それは明かに屈辱だ――そんな事を考へて昂奮したり、――それもこれも凡て生活のためだ、仕方がない。生活の立場を失つたら、何もかもくづれてしまふだらうから――と考へ直して悄氣ると思ふと――いやいつそ、凡てが打ち毀れてしまつたら、俺はもつと本當に、ムキに純眞に生きる事が出來るかも知れないのだ――と、様々に亂れる想念の中に浸り込んでゐたのであつた。がその時、帳場の方から、

『須山さん、須山さん』と主人の呼ぶ聲にはつと氣がついて顏をあげると、

『來てますよ矢張り、いま左右田さんから辨當の注文が來ましたもの』と彼に注意をしてくれた。

『え、來てるんですか、失敬だな。それではもう一遍行つてみようか知ら』と云つてみたが、彼はこれから出かけて行つて、もしまた不在だと云はれたら、『山の井に辨當をあつらへたのを聞いて來たのだ』と云ふ事も主人の好意に對して、悪い事のように思はれた。それと同時に、その時は、稍狂暴に近くなつてゐる、自分自身の行動を危んだ。

『では一つ、僕も電話で聞いてみませう。電話なら、どこからかけたか判りやしないから』

と、一人で辯解しながら電話をかけた。

『左右田さんですね、一寸待つて下さい。それであなたは[illegible]らしい[illegible]の[illegible]で聞かれたとき、彼は一寸[illegible]つた。

假名をしたらば、と云ふような考へが、彼の頭にふと浮んだが、その考へを纏めるひまもなく、

『僕は須山と云ふものです』と彼は答へてしまつたのだ。少時たつてから須山の受けた返事と云ふのは、

『左右田さんは今日お見えになりません』と云ふのであつた。

『馬鹿にしてやがら』と怒鳴りながら、受話器をがちやりとかけたときに、

『どうです。やつぱりゐないんですか』と山の井の主人が訊ねた。

『ゐないつて云ふんですよ、卑劣な奴だ』須山はにやりと苦笑したが、『實際あの新聞社の編輯室なんて、他人の出入を許さない所に入り込んで、留守を使つて平氣な面をしてるなんて、本當にけちな奴ですよ。自分が顔さへ見せなければ、どんなに他人の感情を苦しめても構はないと思つてゐるんだから』と云ひながら、彼はまたのつそりと、もとの卓子の方に戻つた。

――それは全く事物と當面する事を恐れてゐる、今の社會のある種の人間とよく似てゐる。彼等はどこかに隱れる所さへ持てば、どんなに卑劣な、どんなに殘忍な事でも敢てするんだ。他人が如何に惱んだり、苦んだりしてゐても、それに對する自分の感情さへも麻痺させてゐる。隱れる所さへあれば、それで一切は濟むと思つてゐる。穴の中の貉みたいだ――

彼は心で罵つてみた。然しそれは先方に、何の痛痒も與へない事を考へると、もどかしくもなつて來た。こゝの出前が辨當を持つて行く頃、あの編輯室へ默つて入つて、さつきの平井のようにどぎまぎする左右田を思ひきり面罵して、反抗したら擲りつけたら、とそれは考へただけでも胸のすく氣持がした。然し彼には行けなかつた。彼は自分の怯惰を嘲つた。煮え切らない態度に業を沸かせた。が矢張り彼には行く事が出來なかつた。ちび／＼とたつた一人で重ねてゐ

る酒は、やがて苦くなつて口にも入らなくなつたから、素面のように悄氣込んで山の井の店を出た。

眼が覺めると——今日こそきつと——と床の中で誓ふのだつた。何日と云ふ事もなく、欺かれ通して來た彼にも、明日になると不思議にまた新らしく勇氣がわいた。——昨日は俺の力がもう一息不足してゐた。いや疲れて變に感傷的になつたのが、いけないのだ。だから今日こそ——須山は强て自分を勵して床を離れた。然しそれでも、彼には午になるまで、ぢつとして本を讀む落着は得られなかつた。

『今日こそきつと、確答を得てくるよ』家を出る時にも、須山は妻にさう云つた。議會の記者倶樂部に、彼が來たのはまだ二時前であつた。彼はすぐに、二階に上つてA社の机の方を調べたが、左右田の姿は見えなかつた。

『あせるから披れるのだ』彼はそんな事も考へて見た『もつと冷靜に行動しなければ』と考へると、『俺は如何にして何とかに成功せしか』と云ふやうな文句が頭に浮んで來て、思はず獨りでぷつと笑つた。何とかと云ふかわりに、原稿料取立か、と考へると、俄かにいやな氣持になつて、急いで階段を下つてしまつた。同社の記者の控室は階下の小さい部屋であつた。須山はそこの、政治部には知合の人が多いので、その部屋にひよつと入つて行つた。

『やあ、珍らしいですな、今日は何ですか、傍聽ですか』部長は彼の顔を見ると愛想よく言葉をかけた。

『いや、そんな事なら好いんですが、原稿料が取れないで、催促に來てるのです』

『はゝあ、原稿料、どこの社ですか』

『A社です』

『あすこなら大丈夫ですよ、そんなら晩には大いに一杯やれますなと云つて、部長は』快活『にはゝあ』と笑つた。

どうしたものか　彼にはそこでは愚痴つぽい話をする事が出來なかつた、何しろもう、十日の餘も過つてゐるのです

が、社員に逢へないで困つてゐるのです。あなたはおすこの左右川と云ふ記者を御存じですか』

『さあ私は、ほかの社員はちつとも知らないですが、何なら給仕にでもよくはさせませうか』さうですなあ。』と答へてから、須山はしばらく默つてゐたが、『それではたゞ、記者席にでも、代議士の控室にでもゐるかゐないかだけ調べて見て下さいませんか、僕が、來てると云ふと、却つてどこかに隱れてしまふかも知れませんから』部長はすぐに給仕をよんで、議院の中へ見にやつた。

狹い部屋の中には、記者連が一杯に詰めてゐた。今は誰れそれの演説であるとか、今日の議案の運命とか云ふ事が、しきりに論じられてゐた。きびくくとした活氣が部屋一杯に漲つてゐる。須山は陰氣臭い自分の生活に比較して、彼等の明るい、わだかまりのない生活が羨しくも思はれた。然し彼等も社に歸つたら、と考へると いつも陰氣な顏をしてゐる水野の事が思ひ出された。

給仕は間もなく歸つて來た。そして左右川は、憲政會の代議士室にゐたと部長に報告した。

『今日は閉會の時間が遲くなるでせうか』須山は給仕の返事を聞くと、すぐに部長に訊ねてみた。

『さあ、今日は格別遲くなる事もありますまい。無闇化しい議案もないやうですから』須山はそれでまたほつと息を吐いた。三時を過ぎた頃になると、彼の剽輕な社會部の記者が、『あゝつまらん、つまらん。今日は何にも材料がなかつたわい』とつぶやきながら入つて來た。そして間もなく議場は閉會になるらしいと敎へた。

須山はそれを聞くと、すぐにまた二階に上つて行つた。議場から記者室に通ずる廊下を、給仕は慌しく馳け廻り、各社の電話は、その卓上でけたゝましく鳴り響いてゐた。原稿を書くもの、電話口に怒鳴るもの、廣い部屋の中はそれ等の物音で一杯になつてゐた。須山は階段の上の衝立のわきに身をよせて立つてゐた。A社の卓子の近くには、左右川の

姿が、見えなかつたから、廊下を通つて歸つて來るのを彼はそこで待ち受けてゐた。

『こゝでも全てのものが活躍してゐる』彼はそれを考へると、愉快らしく働く人々が、羨ましくなつて來た。

『それなのに俺は、たゞかうして、自分で自分の時間を殺して　まるで無爲に生きてゐるのだ。つかみ所のない無駄な時間を』彼はそれを考へると、またぢり〳〵した。どんな時にでも、どんな事にでも、人は少しの希望を持ち得れば、ともかくも心易さを與へられる。だから須山にとつては、仕事に從つてゐる時が、一番生々とした心持になれるやうに。

然し現在の彼はそこで、たゞ茫然と立つてゐた。十分、二十分、三十分、時はだん〳〵經つて行くが、左右田の姿は廊下の方に現れない。果して彼は、この記者室に歸るであらうか。彼の心はだん〳〵不安に暗くなつた。彼はまた少し疲れたのだ。今まで抑壓してゐた不快な感情が、一時に爆發しさうになつてくる。彼はA社の時計を眺めたやうに、また廊下の一端を見つめ初めた。多勢の記者は絶え間なくそこを通る。然し左右田の姿は見られない。絶望に近い何物かゞ彼の心をだん〳〵に狂暴にした。全ての希望が絶えた時、人の進むべき道は、全く變になるものである。

一時間近くも彼はそこでぢつと立ち盡した。その時ふと彼の眼に入つたのは、彼の近くの前の卓子を占めてゐる、M新聞の記者が二人、彼の擧動に注意しはじめた事である。何にも知らないその記者は、彼の方を眺めては、何かこそこそ話し合つた。彼にはそれがよく判つた。

『今に何か云ひ出すかも知れないぞ。然しそれも退屈しのぎになるかも知れない。俺は俺の用件でこゝに待つてゐるだけだ。何を云はれる事があるか』變に反抗的になつた須山は、强て昂然として彼等のこそ〳〵さゝやき合ふのを、氣のつかない風を示した。

二人の記者の抱いた疑念は、絶頂に達したらしかつた。一人の記者が、

『おいおい、おいおい』と階にゐる小使を大聲をあげて呼びはじめた。

『愈々何か云ひ出すな』須山もそれに對抗すべく考へた時だつた。廊下の所にすつと姿を現したのは、須山が幾度か飲み合つた事のあるD社の園部と云ふ記者だつた。園部は須山の顏を見ると

『やあ君、何しにこんな所に來てゐるんだ』

とにこ〳〵笑ひながら彼に近づいた。

『いや少し用があつて、つまり懸取りの張番さ』

須山も強て快活に笑ひながらちらりと二人の記者の方を見た。彼等は張合の抜けたように、小使を呼ぶのをやめた。

『まあ好いから下へ行つて茶でも飲まう』園部に云はれたので、彼もそのあとに從つた。

『もう少し君の來るのが遲れると、僕はあすこで訊問される所だつた。どんな結果になつたゞらうか、僕も一寸面白かつたのだが』須山は今日の用件を、園部に話してからさう云つて『はゝゝ』と笑つた。

『そんな事は馬鹿々々しい。然し左右田は、さつきたしかに議場にゐたが、どつかほかから、歸つたかも知れないぞ』

須山はこれを聞くと一洞に力が抜けた。考へて見れば、昨日平井に、議會の方に行くと云つたのを、平井は左右田に話してゐる。記者の歸り道が、たゞこゝ一方と考へてゐたのが自分の落度である。さうして今日も、またかうして徒勞の一日を送つてしまつたのだ。須山は氣抜けのしたやうに押し默つて、階段を下り切ると『ではまた、今度ゆつくり逢はう』と云つて記者室の建物のそとに出た。四時を過ぎた冬の日は、今日もまた暮れかけた。どこかの記者が俥に乘つて歸りかけてゐるのを、仲間らしいのが五六人周圍を取り卷いて、

『やあ、景氣が好いな、來年は然し貴公は、向うの表門から入るやうになるのだらう』と冷笑して愉快らしく笑つてゐ

た。どうしたものか、その笑ひ聲までが、彼は堪らなく寂しく聞へた。

議會で半日待つてゐたこと、左右田の姿さへ見ることが出來なかつたことを、翌日平井に話したとき、さすがに平井も、須山の要求を拒むことは出來なかつた。

『何をしてゐるんですかなあの先生は、社へもちつとも姿を見せないけれど、そんな事を繰り返してたら、第一自分の首が危くなるでせうに』と仔細らしく首をかしげた。——白ばつくれても駄目だぞ、山の井へ毎晩辨當を注文してる事まで、こちらはちやんと知つてゐるんだ。——須山は心の中でせゝら笑つたが、

『さうですか、それでは君も隨分お困りでせう』と如何にも困惑らしい顔を見せた。さうして彼は、漸く平井から、左右田の住所を教はつて、彼に原稿を渡して貰ふように書きつけた名刺を貰つた。その翌朝早く起きて、郊外の平井の家へ出かけて行つた。原稿は彼が初めてA社に屆けたまゝの狀態で、須山の手に戻つて來た。彼はすぐにそれをまた、平井の手許まで屆けた。

初めてA社に彼が行つた時から、それはもう半月近い日が經つてゐた。さうしてこの時漸く、具體的に一歩を進める事が出來たのである。煙のやうに得體の知れない、そこにゐるのかゐないのか、まるで見當のつかない左右田の手を離れて、ともかくも、社員として彼に逢ふ、平井がそれを受取つたのだ。

『原稿さへあれば僕が拜見して、部長にすぐに話をします』平井はいつもさう云つてゐた。その原稿は彼に屆けた。あとは平井の義務的な閱讀と、部長の判と、それにはもう一日か二日の餘裕があれば好いのである。

『雲をつかむような漠然とした、譯けの判らない焦燥から、自分も漸く免れる事が出來たのだ』須山はそれを考へてほつとした。二三日の後にまた訪れる約束をして、彼は珍らしく早く家に戻つて行つた。

『今度こそ大丈夫だよ、向ふの云ふなりになつて來たのだから、いくら何だつてもう嘘をつく事は出來ないだらう、それにしても下らない、この半月と云ふものは、家とA社と、それからD社、議會、苦しまぎれの泥醉、まるで彼等に好いように引きづり引んまわされてしまつたのだ。僕はお陰で爪の色まで變るほど身體が痩せてしまつた』と寂しく笑ひながら、それでもどこか輕い氣持で妻に話した。

『本當に隨分長くかゝつたものね、一體左右田さんと云ふ人は何だつてそんな事をしたんでせう』

『さあ、どんな考へがあるのだか、これだけ長くかゝつてこれだけ努力して、とう／＼逢ふ事が出來ないんだから、こつちにもてんで判らない、然しおかげで、一週間ばかりゆつくり休んで本でも讀んだり、どこか遊んで歩きたいと思つて居た事もみんなおぢやんだ』

A社から金を取つても、先月までの拂ひをすると、もうすぐに働かなければならない事を須山は考へた。――それにしても、俺は少し疲れてる――つまらない變な苦勞が、彼を茶々困憊させてしまつてゐた。

その晩、彼の家に速達が來た。それは珍しくも左右田からで、忙しいものだから、いつも大變失禮して申譯ない。稿料も自分が持つて伺つて、色々それまでの事情も話したいから、この次の日曜までどうか待つて貰ひたい。――と云ふ文句であつた。日曜はその翌々日だつた。彼はそれで一層安心した。もと／＼離背の怨みも報はなければ、ならないと云ふほどの問題でもないのだから、左右田に逢つて譯を聞いたら、彼が居留守を使つた事も、たゞ一場の笑話ぐらゐになつてしまふかも知れないのだ。須山の心はなごやかに綻んでゐた。

『逢つて見たら判るだらう』彼は妻にもその端書を見せて笑つてゐた。その晩彼はまたその端書を持つて、矢釜しい芝居へ出かけて行つた。

『かうして端書もよこしたのだから、一二三日中にはきつと揃ひます』と云ひわけをして歸つて來た。

須山の家には、水野に借りた小遣も、もうそろ〳〵たくなりかけてゐた。然し彼はこれが窮乏の絶頂だと信じてゐた。明日になればきつと左右田が來るだらう。それでなくとも明後日は、平井と堅く約束をした日なのである。今度こそは、如何に何でも、と考へると、彼の心は落ついた。珍しくのんびりとした心持で、彼はその翌日一日を、二階に轉がつて暮してゐた。

日曜日には、午頃から、左右田の來るのを心待に待つてゐた。彼はそれがために、散歩にさへも出なかつた。三時になつても、夕飯が終つても、左右田は遂に來なかつた。夜になると、彼の心にはまた何か、暗い影がふつと射した。『愈々金がなくなつたのだ。商人達は今度こそ、尚一層怒るだらう。酒屋ばかりでなく米屋も八百屋も。いやそれよりもその日その日の小遣錢ももうないのだ、今度は水野にももう賴めないし』いやな考へが浮んで來ると『いや、今度こそはもう大丈夫だ。いくら平井でも、もう斷る事は出來まいから』彼は強いてそれを打消して、自分の心を慰めた。

誰でも恐らくこれだけ愚弄されて、然もそれに忍從して、それから後にあれだけの堅い約束をした者は、先方が馬鹿か狂人かよく〳〵の惡人でない限り、然もそれが堂々たる新聞社の二人の記者であつた場合に、金と云ふ物は手に取らない中は、と云ふ諺も、この時だけは權威を失つても差支へないと考へても、それは大した自惚れでも、錯覺でもないのである。

須山繁雄も當り前に、たゞさう信じてゐた。だから彼は、彼の蒙つた馬鹿々々しい、眼隱しをして引きづり廻されるような、愚弄と苦痛のいやな日も、それで漸く終りを告げたのだと考へたのだ。さうして彼はその時も、その苦痛の大部分も、自分の餘裕のない偏狹な性格が生んだ結果が大部を占めてゐたのだとも考へた。だからこれに終りさへつけ

ば、左右田に抱いた變な怨も、平井が間に入つて苦んだために、彼に對して嘘を云つた事も、居留守を使つた事なども、凡て奇麗に忘れ去つて、むしろ進んでもつと親しくなれるだらう。いやさう云ふ須山自身にも、多分にづぼらな點があるのだが、たゞ彼は、彼の現在が餘り窮迫してゐるために、斯くも恐しく滑稽な悲慘な事實をこね上げたのだとも考へてゐた。

『愈々終りの日が來たのだ』彼は最初の日のやうに、水野や山の井の主人に禮をしたり、心よく一杯を傾ける樂しさを空想して家を出たのだが、そしてA社の二階で平井に逢つた瞬間まで、全ては解決したものとして、

『いやどうも、色々御心配をかけて恐縮でした』と快活に笑ひながら挨拶までしたのであつたが、平井はしばらくもじもじして、

『實はその、今日はまだお渡しするまでになつてゐないので』と云ひ出した時は、彼は愕然として本當に、足下が崩れたやうにげつそりとしてしまつた。餘りに信じ切つて樂しみを餘計に描いて來た彼は、少時だまつて平井の顏をぢつと見つめてゐた。自分の受けた失望が、心の中にだん／＼に判然と意識されて來るに從つて、彼は子供のように泣き出したい氣持になつてゐた。これから先また何日か、あの同じ苦みを繰り返さなければならないのかと云ふ豫感が、彼の心を壓迫した。そして失望の極から起る憤怒が彼の心をつき上げた。

『一體それはどう云ふわけですか』須山はその時初めて、平井に詰問する態度をとつた。

『先達て左右田からあなたの所に端書が行つたでせう』平井はまるで別な事を訊ねたので、

『えゝ來ました、昨日一日待つたんです』

ぶつきら棒に彼は答へた。

『それで、あれは實は僕が、先生に、餘り悪いから一遍あなたをお尋ねして、よく理由を話して、誤解をといておいた方が好いからと云つたので、昨日伺ふ事になつてゐたのですが、一昨日から家へも歸つて來ないのです。僕も實際間に入つて弱つてしまつてゐるのですが』

『今になつて、誤解をとくとか、僕に對して挨拶するとか、そんな事はどうでも好いぢやないですか。僕はそんな、左右田君との間の事より、端的に金がいるのです、そんな事はあとでも出來る事ですから、たゞこの事は、あたり前に、事務的に運んで頂けばそれで好いのです。先達てからも君にはさう云ふ風にお願ひしてあつたのですが』

『いやそれがです。僕が左右田に逢へさへすれば好いのですが、どうも逢へないので遅れてゐたのですが、だから今度は、あの人とあなたの間で決つた事だから、是非その、あなたに逢はせてとさう思つて、それでないと、僕の立場としても實際、弱る事が多いので』平井の云ふ事は何が何だか、しどろもどろでよく判らなかつた。恐らくそれは社員として、左右田が先輩であるために、その感情を傷けたくない心持を、どうにかして云ひ現はしたかつたものらしかつた。それにしても、彼は餘りに長々と、須山を引きづつてゐたのである。

『では何ですか、あなたはいつか、左右田君のゐない中は、あなたがすつかり取りしきつてやつてると云はれたのですが、それをやつて頂くわけにはいかないのですか、どうしても左右田君が來なければ、この話はけりがつかないと云ふのですか』須山は意地悪く追窮した。

『いやさう云ふわけではないのです。がたゞ僕としては同じ社内にゐる人間として、あの人の立場も考へなければならないので』

『君の方の友情は、それで濟むでせう。僕もそれは　これが最初の五日か六日の中の事だつたら、それを尊重する餘裕

も持てたかも知れません。然し、もう今日になつて君、實際半月近くもかうして引きまわされて、それに僕の家には、初めからお話した通り、もう一錢もないくらゐ貧乏の極點に達してゐるのです。君方の友情を滿足させるために、これから先き、また毎日、議會へ行つたり、日比谷公園をうろついたり、前のD社の三階で時計と睨めくらをしたり、そんな根氣はもう僕には全くなくなつてしまつたのです。だからもう四日待てとか、それでなければ、明日にも渡して貰へるやうに、ちやんとした返事をして貰ひたいのです」――ぐづ〳〵すれば、今日こそ許しておくものか――心の中でさう考へてゐる、須山の見幕が餘り烈しいので、平井はだん〳〵萎れて來て、頭を抱へて、

「弱つたなあ」と嘆息した。そして少時してから「それでは今夜、僕が左右田の家に行つて見ます。さうしてきつと話をきめて、明後日は必ず確かな御返事をします」と苦しさうな聲で云つた。――ふゝまた嘘をついてゐやがる。辨當の事も俺はちやんと知つてゐるんだ――その時も須山は心で唸つたが、餘り萎れた姿を見ると彼の心も少しくぢけた。極點まで追窮してしまふより、と云ふやうな功利的な餘裕も出來て、

「それでは明後日までに必ずきめておいて下さい」と云ひおいて、平井と別れてそとに出た。表てに出て冷たい風に吹かれると、彼はすぐに、一文もなくなつた家の事が思ひ出された。平井と逢つて話をしてゐる中には、何か優勝的な地歩を占めたような、得意らしさもあつたのだが、それは彼の窮乏を救ふ材料にはならなかつた。彼はまた途方に暮れた。前のD社の建物を仰いで考へても、同じような貧乏な水野に、再び借金を申し出る勇氣は湧いて來なかつた。須山は遂に意を決して、山の井の主人に頼んで、何とか相談をして見よう。遲くとも、A社の金はきつと取れるだらう。心の中で彼はまた妥協して、山の井の店に向つた。

あゝ然し、彼が、山の井の店の前まで來ると、店の前には休業の札がかゝつて、店の中は喪中のように暗く寂しくな

つてゐた。何事が起つたのか判らないが、彼はまた、はたと絶望してしまつて、すつかりいぢけてしまひながら、そつと店の戸を明けて、

『今日は』と中を覗いた。

『あゝ須山さんですか、好いとこへ來て下さつた。實はあなたに御相談をしたいと思つて使ひを上げようと思つてゐたのですが』と主人は須山の顔を見ると、喜んで彼を迎へた。薄暗い店の中には、彼の親戚や知合の人々が、五六人爐をかこんで、ひそ〳〵と話をしてゐた。

須山は店の隅に腰を下して、

『どうしたんです。何か事件でも起つたのですか』と主人に訊ねた。——事件と云ふのは山の井の店に預つてゐた、親戚の娘が馴染の客と、昨夜夜更てから、家出してしまつたのだ。あとには情死をするかも知れないような、遺書が殘してあつた。昨夜の三時頃に氣がついて、親戚を呼び、知人を集めて行方を探しはじめたのだが、皆目解らない。それで主人は須山に話をして、新聞社の人の力でも借りられるようにして貰ひたいと云ふのであつた。——それは須山にとつては、大して無闇化しい事でもなかつた。彼はそこで、友人の野本に電話をかけた。野本はすぐにその店に來た。そして、その話を聞くと、すぐに知合の有力な官吏の所に出かけて行つて、その承諾を得て、官吏個人の名前でもつて、心當りの地方の警察へ電報を打つた。須山も知合の私立探偵の所へ相談に行つた。

突然起つたその事件が、焦燥と倦怠の苦しい地獄の中に落ち込む事から須山を救つたが、彼は矢張り、小遣を借りることを云ひ出す事も出來ないで、夜更てから寒い電車に乗つて家に歸つた。その翌日も翌々日も、須山は山の井の店に來て、色々な相談を受けてゐた。そして、かねて約束してあつた時間に彼がまたA社に平井を訪ねて行つた時、

『平井さんは今日はお休みです』と受附は輕い聲で彼に云つた。山の井の事件がなかつたら、――須山は後になつてよく考へる――彼は全く、その晩か、その翌日、どんな亂暴な態度に出たかも判らなかつた。それは須山が、彼自身を慰めるために、相手方の態度に對して色々試みた、事情とか場合とか、如何なる意味でももう彼に、辯解する餘地を全く失つたからだ。――俺は散々愚弄された。然し漸くそれも忍んだ。相手にも出來るだけの餘裕を與へた。それも幾度か欺かれた。さうして最後に到達した時に、平井はまた遂にあの他人の入るを許さない、建物の中に逃げ込んで、それで安全だと考へてゐる。――どんな寒さと退屈をでも忍びさへすれば、社の前の街頭で彼等を發見する事も出來る。彼等の私宅、それも調べればすぐに判る。――明日もう一度やつて來て、それでも尚愚弄するなら――須山の怒りは頂點に達してゐた。どうでもなれと云ふ氣にもなつた。つまらない事である。然し、つまらない事の渦中に入つた限り、俺はどうしてもやつつける。彼は自分の偏執から一歩も踏出すことの出來ない苦痛に惱んでゐた。やるよりほかに、彼の行く道は發見されなかつた。

眼をつり上げて蒼くなつて、ぢり〲しながら、山の井の店に歸つて來たとき、主人は彼の顏を見ると、

『どうしました』といきなり訊ねた。彼はあらましの事を語つた。

『まあそんなに怒らないで下さい。私の方は喜んで頂かうと思つて待つてゐたのです。いゝ、おときはとう〱つかまりました。北條の警察でつかまつてゐたのです。あつちの方の海で死ぬつもりでゐたのでせう。それについてゞす。どうせこれまで御盡力を願つたのだから、もう一度あなたに願ひたいのですが、一つ誠に恐縮ですが、北條までお出でを願つて、警察から貰つて頂きたいのです。親戚の者も無論行きますが、どうせあゝした所で、歸り口をきゝつけない者ばかりですから』と云つて主人は『へゝ』と笑つた。須山は北條の近くにゐた事もある。そこの警察の人々も、彼はある事

街でよく知つてゐた。北條には友人の家もある。凡てが、彼の行くべき條件にかなつてゐた。

『さうですか。では行きません。實はあの方もまた明日行かなければならないのだが、』彼は一寸迷ひながらも、さうした事が、彼の今の苦しさをまぎらせてくれるように思はれて、さう答へた。

『いやその方は、失禮ですがお留守中の事ぐらゐお立替しておきます。それは何です。決して御遠慮下さらないで』

ある人の不幸が、ある人間の不幸を救ふ。そんな事も世の中にはあるものだ。須山は遂にそれに應じた。彼が北條に行く事を承諾して家に歸ると、山の井の使ひが來て、拂ひも少しは出來る位の金を屆けてくれた。

翌朝須山は、――一寸用事が出來て旅行をしてくること、三四日すれば――遲くも十二日にと彼は書いた。それは初めてA社に行つた時から、もう既に二十三四日の日が經つてゐた事を考へて、須山自身も驚いたのだ――歸つて來る事、それまでには必ず解決しておいてくれるように――と懇々と平井に書き送つて、彼は北條へたつて行つた。

ちりちりとしみつくように嚴しい寒さの東京から來ると、南の海に向つた北條は、暖國のように温かだつた。警察へ行くと云ふ事は殺風景な話であつたが、その内容は、艶かしい戀愛のいきさつである。蕭條とした冬枯れのような生活ばかりを送つてゐる、須山の心もそれがために和ぐ事が出來た。彼に取つては、これは何かの事件に携つてゐると云ふよりも、やはらかい物語の中の一人になつてゐるようにさへ思はれて、二十日近くに亘つてゐる。貧苦しい生活から拔け出して、ほつと輕い息をつく事が出來たのである。親戚や友人では女を渡す事が出來ないとか、父親に直接に出て來いとか、電報を打つたり、返事を待つたり、多少のこみ入つた仕事はあつたが、それでもその間は、全くひまな時が多かつた。暖い日のあたる海岸を歩いたり、宿屋の二階で悠々と寢轉んでゐる時に、彼は漸く、暢々とした氣持になれた。

「今度歸ればいくら何でも、もう一切は解決がついてゐるだらう。」受附に立つていら〳〵する事も、議會の記者室でマゴツタ事も、凍りついた噴水の縁を見て憂鬱な想ひに耽る事も、一切が終りを告げてゐるだらう。さうして自分は、あの下らない苦しさを打捨てゝ、もつと明るい、希望のある仕事に一歩を踏み出す事が出來るだらう。須山はあの變てこな盲目のようにまごついた日のことを考へると、自分の偏狹さを憐むような氣持にさへなつてゐた。

須山の豫定通り、三日計りの中に彼の依賴された任務は終つた。若く美しい娘は泣きながら、父親の手許に歸つて來た。それから先きの、その戀人達の運命は、もう彼の關はる範圍を越へてしまつてゐた。

山の井の主人から、彼の盡力に對して色々と禮を云はれた時も、彼はむしろ、明るく輕い氣持になつて歸れた事を喜んで話してゐた。

翌日平井を訪ねる時も彼の心にその明るさは消えなかつた。こちらの話も解決さへついてゐれば、――それは無論當然ついてゐる事に違ひないと彼は信じてゐた　もう今こそ笑つて話し合はう。自分の偏狹な、思ひつめてわく〳〵する態度にも、もつと反省を與へなければならない事だから――彼はそんな事を考へて、氣輕い態度でA社に行つた。恐らく誰でも、彼がさう考へたからと云つて、彼が餘りに事を信じ易いとは思ふまい。人間はそれほどにまで疑い深くは、仲々なり切れないものであるから。そして誰が、考へても、かうまでも長引いた、内容は單純で徒らにごたついたこの事件は、もう圓滿に解決して好い時期に、どうしても到達するのが、當然すぎるほどの時であつたのだから。

須山もさう信じ切つて、それだから、氣輕な氣持になる事も出來て、平井に逢ふ事が出來たのだが、平井は彼の顏を見ると、恐ろしくまごついて、まだ左右田にろく〳〵逢へないとか、逢ふには逢つたが、彼がどうもちやんと縮くゝりをしないので弱つてゐるとか、さうして自分はもうあの小說をすつかり讀んでゐて、大變結構だと思つてゐたとか、何が

何だか、彼自身にもよく判らない筋道のたゝない事を、しどろもどろの態度で須山に說明した。子供のようにくり／＼した、大きな丸い眼をぐる／＼廻して、時々は眼をふせたり顏を赤くしたり口先を尖らせたり、平井の姿は全く苦しさうなものであつた。然し、それにも增して、須山の失望は、話にも口にも出ないものがあつた。折角明るくなりかけた彼の心は、一時に穴藏の中へ落ちたように暗くなり、彼等に對しても忘れようと努めてゐた怨みは、十倍も百倍もの力をもつて、心の中に燃えて來た。それと同時に、これから先き、また幾日この苦みを續けなければならないかと云ふ恐怖が、彼の心をくしや／＼にもみひしいだ。今月の末になつても、まだこの問題の解決がつかなければ、——その間にこんな狀態で、どうして金の取れる仕事が出來るだらう——その時こそ、全く二進も三進も行かなくなる時である。風呂敷を抱へて友達から、知合から、米の一升借りでもしなければ——その時の慘めな姿がまざ／＼と、頭の中に浮んで來た。

「一體それで、これはどうなると云ふのですか」憤怒と絕望に途方に暮れた須山は、少時たつて沈んだ聲で漸くそれだけ聞き直した。

「僕も實際、あなたに面目なくつて氣の毒でどうして好いか弱つてゐるのです。ともかくこれから、御一緒に議會まで行つて見ませう。さうして今日こそ、どうしても、左右田をつかまへて解決をつけませう」それが、一體どうなるのか、平井は果してこれまで左右田と逢はなかつたか、出鱈目らしいそんな事はどうでもよかつたが、それでも須山は、氣休めと、よもやに引かされる心持から、平井と連れだつてＡ社を出たのだ。

日比谷公園の樹はまだ氷につゝまれてかち／＼になつてゐた。議會の前は自動車が輻輳して、何か內部にごた／＼が起きてゐるような氣勢である。何もかもが彼の眼には、いやな追憶を作つて蘇つて來た。今日もさうして、左右田に逢

へなかつたら』何とも知れない不吉なものが、彼の前途に待ち受けてゐるやうな予感が、しきりと彼を襲つた。

記者室には左右田はゐなかつた。給仕を探しにやつたけれど、それも何の効もなかつた。二人は記者倶楽部の前でまた、一時間餘り茫然と立つてゐた。然しとう／＼左右田には逢へなかつた。

『本當に何とも濟みませんな、明日までには、いや明後日までには、必ずお屆けするやうに晋つてしまます』平井は最後にさう云つたが、『何を云つていやがるんだ。どうでも勝手にするが好い、』須山は心で呶りながら、たゞ、『失敬』と云つて別れてしまつた。倍加してよせて來る、絶望と苦痛の中に彼は全く浸り込んでしまつてゐた。『彼等は俺の生活を、滅茶々々に打ち壞した。亂れた心持で、この壞れかゝつた生活を、立て直すだけの仕事が出來るか、月末はもうすぐだ。さうして俺は、何をする事が出來るだらう』須山はすご／＼と山の井の店に行つた。彼はまたそこで、無暗に飲んだ。彼の頭は全く亂れ切つてしまつてゐた。

然し、翌日彼が家を出る時にはもう、最後の決心を作つてゐた。『今日こそ原稿を取り返すか、解決をつけるか本當に二つに一つを撰ぶ日だ。彼等がまだ引きづるなら、斷然としてそれを拒まう、こちらに與へた、長い間の愚弄屈辱、それにはそれだけの事をする。さうして俺はまた一層、ひどい貧乏に沈むだらう。然しそれが何なのだ。力の限り鬪ふよりほかに、與へられた方法はないのである。どんなにしても、まさかに餓え死はしないだらう、死ぬなら死ぬで、それもまた止むを得ない事なのだ。誠意のない彼等の言葉を長い間信じて引きづられてゐた俺が、要するに馬鹿だつたのだ』何物を得られるあてのなくなつた、全くの絶望が却つて彼に勇氣を與へた。

須山は先きにD社に水野を訪ねて、今までのゆきたてを委しく話した。

『もういよ／＼駄目だから、今日は原稿を取り返して來ようと思ふ。その上で、俺は俺で奴等に出來るだけの事をして

やる』昂奮して彼はさう云つた。

『全くだ。そりやもう駄目だぞ、然しそれにしても、一體どうしたと云ふのかね、不誠實にも程がある。よく今まで、喧嘩せずに辛棒したな』と云つて、水野は寂しく笑つた。

『止むを得ないさ。どこへ行つたつて、屈從はつきものだ。何一つでも、命を捨てようと思はなければ、思ふ事が出來る世の中ぢやありやしない。生きてゐやうと思へば、いやな事は始終ある』須山はほつと溜息した。二人は少時默つてゐたが、

『待てよ、好い方法がある』と水野は突然云ひ出した。

『もう何にもありやしないさ』と絶望的に云ふ須山の言葉を、

『いやさうでない、もう一遍やつて見ろ、これは何だ、俺の方の主任から、向ふの編輯長に紹介を書いて貰つてやるから、それを持つて編輯長に直接に逢つて見ろ、さうして彼等がどんな事をしてゐるかよく聞いて、今日までの事もよく話して見たら好いぢやないか』水野の提案は正に有効な手段らしく須山にも思はれた。

『これも面白いな、あゝ云ふ人間は、少し上に立つものだと、いやに恐れるように出來てゐるんだから、ともかく編輯長に逢つて話を聞かせてやるだけでも、さうして君の社ではこんな事を社員がしても、差支へないかどうかと、訊くだけでも面白い。さうして話はすぐに解決がつくだらうから』須山はすぐに贊成した。

『では待つてゐろ、今主筆を呼んでくるから』水野はその部屋を出ると、すぐに主任の久保田を呼んで來てくれた。須山も懇意にしてゐたその主任に、今までの事を大略話して、紹介狀を頼み込んだ。

『いや、わけのない事です』と名刺の裏に編輯長に面會の出來るように書いてくれた。

須山はそれを持つて、勢ひよく、A社に出かけた。彼の貰つた名刺は有力に効を奏して、編輯長はすぐに應接間に出てくると、

『どう云ふ御用ですか』と彼に訊ねた。須山は去年の春に原稿の約束をした事から、今までの事を簡單に物語つて、

『どう云ふ風になつてゐるのですか、まるで見當がつかなくなつたので、あなたにお訊ねしてみようと思つて伺つた次第ですが』と云ふと、編輯長の顏には、不快な色がさつと流れた。そして、

『いやその稿料なら、もう三四日前に左右田に渡してありますが、それで只今、平井に訊いてみませう』と云ひながら扉の陰に姿を消した。自分の社内に起つた不始末が、他の社にまで洩れた事が、恐らく彼を不愉快にしたらしかつた。さうした上に立つ者の力をかりて、この事を解決に導いたと云ふ事が、須山の心をも不快にした。がそれと同時に彼はまた、何か殘忍に近い快感を味つてゐた。

編輯長の姿が消えて、ものゝ三分とたゝない中に、平井は慌しくその部屋に入つて來た。そして、

『やあ』と挨拶をすると同時に『いや、どうも、大變な事になつてしまつて、全く弱つてしまつたなあ、こんな事になるといけないと思つて、よく云つておいたんですが』と云ひかけたが、彼はまたどぎまぎして『實にね、左右田が三日許り前にちやんと受取つたのを、僕もよく知つてゐたのです。それで僕に、實は僕が受取つて左右田に渡したんですが、早くあなたの所に持つて行つて、よく今までの事を話して、渡して來た方が好いと云つて、奴さんそれを持つて歩いてゐるんですが、えゝそれは、無論使つてなんかゐやしません。それは確實です。確實ですが、全くこれは困つた事になつてしまつたな』と彼は全く、蒼ざめた顏をして、途方に暮れてしまつてゐた。

『すると昨日、議會へ行つた時は、既にあの男にあなたが渡してゐたんですな』

『それは何です、左右田をあなたのとこに行かせようと思つたものだから、あゝしてまだ逢はないなんて云つたのですが、本當にどうも、こんな事になる位なら、僕が預つておけばよかつたのだが、全くどうも困つた事だ』

額に手をあてゝ考へたり、椅子からふら〱と立ち上つたり、平井は心の落つきを全く失つてゐたようであつたが、

『いや、それではこれから僕は、早速左右田を探しに行きます。さうして、何でも彼んでも、明日の晩方までには、必ずお渡しする事にしますから、今日はどうか、もう一日だけ待つて下さい』困惑し切つた彼は、恐ろしく萎れた調子で云つた。

『さうですか、肝心の左右田君がゐなくつては、どうしても仕方のない事ですから、では、明日の夕方またお訪ねしませう。今度はまさか間違ひはないでせうな』須山は改めて念を押して平井と別れて、水野に禮を云つて家に歸つた。

渡すべき金であり、渡さなければならないものを、どうしてこれほどまでに延したのか、須山の苦んでゐる狀態は、平井を通じて知つてゐる左右田自身が、何がためにかうまでも引きづり廻さなければならなかつたのか、須山にはどうしても判らなかつた。

『今夜は愈々渡すさうだ。どうしてこんなに引つ張つたのか、それも今夜は判るだらう。然し今夜も、また變な事を云つて延すようだつたら、今度こそ僕は承知しない』翌日の夕方D社の三階で須山は水野に話してゐた。

『さうだとも。今夜は俺も一緒に行つて、同業者として話してやろう。君がこれまで苦んだ事をよく聞かせて、彼等の反省を促さう。これでももし駄目だつたら、僕が最初に喧嘩する』

水野までもも可なりに烈しく昂奮してゐた。やがて二人は揃つて平井を訪ねた。

『今度やつと、左右田君に逢へました。今夜は間違ひなくお渡しします、それで、あの人もあなたに對して、隨分御迷惑

をかけたから、一度ゆつくり飲み合つて、謝罪るところは謝罪つて、今迄の感情を奇麗に流して貰ひたいと云ふのです。今日はさつきから、向ふのある家に行つて待つてゐますから、その方へどうか一緒に行つて頂きたいのですが』平井は漸く結末のついたのを、喜ぶやうに須山に話した。

『僕、もう、その仲直りのやうな、一杯やると云ふ事は澤山です。それにかうして、水野君まで一緒に來てくれた位ですから、たゞ單純に事務として渡して貰へばそれで澤山です。今になつて、どんな話を聞いた所で、僕の苦んだのが消へるわけでもありませんから、それに今の僕は、左右田君から御馳走になる氣にもなれないのです。それにもう少し心持が落ついてからまた改めて逢つて話をした方が、好いとも思ひますから』須山はそれを一應斷つた。

『然し何しろ、本人が向ふにゐるのですから話は別として御足勞でも先方まで一緒に行つて頂かないと』平井が、しきりと云ひ張るので、須山は遂に、受取りにだけ行く事にした。そして水野には山の井で待つてゐて貰ふ事にして、そとに出た。

平井は近くのタクシーの會社に行つて、自動車に須山をのせた。單純に金を渡してくれるだけには、餘り大仰なやり方とは思つたが、須山は默つてそれに從つた。

自動車の留まつたのは、白山の裏通りの待合の前だつた。そこでも須山は變に不快な心持になりながら、平井のあとに從つて、門を潜つた。

『左右田と云ふ男が來てゐるでせう』格子を開けて平井が訊ねると、

『はあ、おいでになつていらつしやいますが、一寸お待下さつて』女中は一度奥に入つたが『何卒こちらへ』と先きに立つて案内して『あの誠にお氣の毒さまですが、こちらで一寸お待ちを願ひます』と狭い部屋に二人を入れた。それは

何でも、女中の部屋らしかつた。脱ぎちらした着物や何かゞ隅の方に散らばつてゐるのを、女中はあたふたと片附けてゐた。

『左右田君はどこにゐるかね。一寸急いで逢ひたいのだ』と女中に云つてから、『僕は此處に一寸逢つて來ますから』平井は須山に挨拶して、廊下を踏んで、奥の方の部屋へ行つた。左右田は二人の來るのを、どこかの部屋で待つてゐると云ふ話であつたのに、どこまでも縺てこに、こんがらかつて行くらしい、この家の有樣に、須山はまた呆れて一人ぽんやりとその部屋に待つてゐた。腕を組んで、何を考へるともなく座つてゐるとき、奥の方で、

『今夜はそれどこの話ぢやないんだ。用があるんだ。離せつて云ふのに、離せ、離さないか』と平井の怒鳴る聲が聞へて來た。それと同時に、どこか一つ、ぴしやりと擲つた音がすると、

『何をするんです、あゝ口惜しい、私やまだ主人にだつてぶたれた事はないんです。それを、人を、あゝ口惜しい。打つたのね、さあおぶちなさい、あなたはなんだ、いつでも私とさうさんの仲を割かう割かうとしてるんだ。何の恨みでそんな事をするの、この前だつて、紅葉さんでもあんな事をして、また今夜』と、きい／＼した女の涙聲が聞へて來た。ばた／＼と云ふ足音、組打ちを始めたような物音がそれにつゞいた。

『離せつて云ふんだ馬鹿、今夜は眞面目な用があつて、左右田に逢ひに來てゐるんだ。それを貴樣が飛び出して來やがつて、向ふには、ほかの用事のある人が待つてゐるんだ。みつともないから離せつて云ふのに』その烈しい物音を聞きつけて、女中もそこへ驅けつけて來たらしかつた。女はまだ泣きながら、

『わたしや殺されたつて構やしない、えゝえゝ私がみんな惡いんです。だから私が』と何かわめいてゐたが、平井は稍く激されたらしく、『馬鹿にしてやがる、本當に、馬鹿な女にあつちや叶はない』と顔色を蒼くして、唇をわな／＼顫へは

げながら、その部屋に戻つて來た。女の顏でもこすりつけたあとであらう。彼の黒い外套の胸の所には、白粉のあとがべた／＼と眞白に殘つてゐた。

『どうしたつて云ふんです』すつかり呆氣に取られた須山は、きよと／＼しながら平井に訊ねた。

『いやどうも、全く、失敬ばかりしました。馬鹿な女にあつてはかないませんよ、あの女は、何でも僕が邪魔をすると許り思つてゐるんですからな』と云つたが『はゝ、そんな事はどうでも好いんですが、左右田の奴も左右田の奴です。人を待つてゐると云つといて、今つから醉つぱらつて女と一緒に寢てゐるんです。だから僕が、そつと起しに行つたら、あの女が怒つて僕に喰つてかゝつて來るんでせう、餘り癪にさわるから一つ横面を擲つたら、わい／＼泣き出してあの始末なんです。本當にどうも、どこまでも變になつちやつて、全くいや』と平井は如何にも間の惡さうな顏をした。

『大變な所へ來たもんですな。それでは僕は左右田君に逢はなくつても好いですから、用事だけ濟まして下さい。水野もあゝして待つてゐるのですし』須山はどうかして一時も早くこの變な雰圍氣から免れたいと思つてゐた。こちらはそれどころの話ではない。苦んで苦んで、苦しみ拔いた揚句に、こんな馬鹿氣た所に――と考へると、彼は一層むしやくしやした。

『いやそんな事はありませんよ。今僕が左右田を呼んで來ます。さうしなければ何のためにこゝへ來たのだか』と平井はまた立ち上つて奥へ行つた。

『お前さんは本當に困るよ。お酒をのむと、ちつとも判らなくなるのだからね。この前だつて散々しくじりをして、やつとまた家へ來られるようになつたんぢやないか。それでもまだ懲りないなら、今度こそ止めてしまふから』

女中らしい聲で女を叱るのが聞へて來た。

『えゝえゝ、私が惡いんだ。私が馬鹿だからあんな人に打たれるんだ』女の泣き聲がそれに續く。須山はたゞ呆れなが**らそれ等の聲を聞いてゐた。――あれだけ苦んだ結果がこの狀態か――彼は獨りで苦笑した。**

八反のドテラを着て、醉つて寢てゐたらしい顏をした左右田が、平井につれられて、やがて彼の前に來た。左右田は須山の顏を見ると、いきなり兩手を疊について、

『少時でした。どうもこの度は、何とも誠に失禮して、申譯のない次第です』と額を疊につけて謝罪した。縫なわざとらしさが、須山の氣持を一層惡くした。いつまでも下げてゐるその頭を、力任せに、足蹴にしたい慾望を、彼はぢつと堪へながら、

『いや、お陰で隨分長く苦しんだのです。一體君はどう云ふ理由で、僕をあゝ云ふ風にいつまでも、引きづり引ん廻してゐたんですか、何かさういふ事をしなければゐられないわけがあつたんですか』と膝をつめよせた。

『そんな事はちつともないのです。たゞどうも、僕がづぼらだつたので、本當に失禮して』左右田は面目なげにうつ向いた。

『それだけにしては、餘り深刻すぎるぢやないですか、僕はこれで、もうかれこれ一月近く何も出來ないでまごまごしてしまつたのです。僕もづぼらだが、いくらづぼらだと云つたつて』と云ひかけた時、ばたばたと足音がして、女がその部屋に飛び込んで來た。女の顏は蒼ざめて、その眼はまるたにすつてゐた。左右田のそばにぺたりと坐ると、

『ねえさうさん、私本當に口惜しいわ、だつて私は何にも知りやしない、それをあんた、私つて云ふとひいさんは、何か水を差すような事ばかりするんですもの、そりや私が惡いのだから私は、今日も家でさんざ叱られたんだけど、樣にないわ、住替へでも何でもするから、ねえ、さうさん』と抑揚もなくなつた。病的な口調でぺらぺら喋舌ると、左右田の

膝に顔をふせて、またわつと泣き出した。

左右田は右の手で頭をかゝへてぢつと首垂れた。それは、極りが悪いと云ふよりも、どこかその色男振りを誇るように須山には見られた。

『馬鹿つ、またこんな所に來やがつて、今夜は俺達は、遊びに來てゐるんぢやないのだ。今用があるからこゝで話をしてゐるのに、そんな話はあとでしろ、あつちへ行け、あつちへ行けつて云ふのに』平井は堪りかねて女をこづいた。

『何をするんですよ、ねえあなた、おや初めまして失禮』とひつつるように女は笑つて、『私は一生懸命にさうさんを大事にしてるんですよ。それをこのひいさんが、邪魔ばつかりするんですもの、私はこれでも本當にこれでも、どんな、苦勞してるか判らないのに』と今度は須山に話しかけた。彼はもう、今まで怒つてゐた氣持も何も彼も、一時にくづれて眞面目に話をする勇氣もなくなつた。

『君、何とかして下さい。僕はたゞ、用事さへすめば、もうこゝで酒なんか飲みたくもなし、早く歸つて水野にも、山の井にも安心させたいのですから、どうか早くして下さい』と彼は平井に向つて云つた。

『さうですとも、本當にさうです。君、小切手はどこにあるのだ。それを早く出し給へ、僕は須山君とさきに歸るから。さうして明日でも來てよく話さう。こんな馬鹿な女の所で、話も何も出來やしない。早く出せよ』

と平井が云つたので、左右田は漸く、頭を抱へてゐた手を離して、顏をあげた。そして『いやどうも、本當に面目ない次第で』と云ふと立ち上つて、『おい、一寸來てくれ』と平井を呼んで奥の方の部屋へ行つた。女はそこに泣きくづれてゐた。そこへまた、女中が來て、『本當にお前さんには困つたねえ、一體今夜の事はどうするの』須山などはまるで眼中にないやうに女をせめた。

『住替へでも何でもします。私が惡いんです、明日ちやんと家からおわびにきつと來ますよ』と女はまたしく〳〵と泣いてゐた。平井と左右田は、何を相談してゐるのか、仲々その部屋に出て來なかつた。須山は山の井で待つてゐる、水野の事を考へるとぢり〳〵焦れた。眼の前で行はれてる、變な喜劇も、彼の興味を引かなかつた。

『おい姐さん、僕は歸りを急ぐから、平井君に早くしてくれ給へつて、呼んで來てくれたいか』彼はとう〳〵堪りかねて、そこにゐる女中に催促した。

『はい、あなたには本當にお氣の毒さまでございましたね、飛んだ所にお出でになつて』と『ほゝ』と笑ひながら、女に小言を云つてゐた女中は立ち上つて奧の方へ出て行くと、泣きくづれてゐた女も急いで立つてそれに續いた。

間もなく廊下の方から足音が聞へて來た。そして、襖のそばまで來るとばたりと止つて、

『駄目だつて云ふんだ。駄目だ。そんな事が今になつて覩めるか、下らない事は云はないで、向ふへ行つて引つ込んでろ』と平井の叱ぶ聲が聞へた。

『後生だからよう、ひいさん、決して間違ひはあり杢せん。私が、住替へをしても年期を増しても、きつとちやんとしますから、後生だからねえひいさん』と泣きながら哀訴する女の聲がそれに續いた。

『駄目だ、駄目だ、あゝいかん、須山君』と平井が呼ぶので、須山ががらりと襖を開けると、平井が小切手らしい紙を持つた、兩手を高く差し上げて、背伸びをして取られまいともがく腕に、女は熱心にしがみついてゐた。

『須山君早くこれを取つて下さい』と手先きをぴく〳〵動したので、須山はその紙を受取ると、素早く懐ろに入れてしまつた。

『あゝ、あなた、本當に後生一生のお願ひですから、これで明後日まで私に貸して下さい。きつと本當に一切迷惑はかけま

せんから』女は須山の方に向き直つて手を合せた。

「そんな事を云つてもこれは駄目だよ、僕は君達とは關係がないし、それにこれを受取るまでにもう一と月近くも苦しんだのだ。さうして、今夜もよそで、友達が心配して待つてゐるんだ、そんな事は出來ないから、諦めてあつちへ行き給へ』須山は冷たく云ひ放つた。

『本當にあなた、お願ひだから助けて下さい、ねえお願ひですから』女は彼の前に幾度も幾度も頭を下げて頼んだが、須山はそれを見向かうともしなかつた。――もつと苦しんでゐる者が俺の周圍には澤山ゐる――そんな事には氣の弱い彼も、平氣で冷然としてゐられた。

『何をしてゐるのお前さん、知らない方にまでそんな事をして。風が惡いつたらありやしない』來合せた女中に叱られて、女はまた男の部屋に連れられて行つてしまつた。

「それで好いのだらうと思ひます、どうか一寸改めて見て下さい』女の姿が見えなくなると平井は須山に向つて云つた。

『いや、色々どうもご苦勞さまでした』と云ひながら、須山は懐ろにした、小切手を取り出して開いて見ると、それは彼が貰ふ豫定になつてゐた金額より、六十圓ほど多くなつてゐた。須山ははつと思ひながらよく調べると、日附はもう五日ほど前のものであつたが、受取人の名前はちやんと須山繁雄殿と指名がしてあつた。

『それで好いのでせう。一圓八圓の割合にしてありますから』と平井がそれを説明した。その瞬間に、彼は今まで苦しんで來た、凡ての事がはつきりと、説明されたように理解した。

『あゝさうですか』と云ひながら、平井の顔をぢつと見ると、平井は間の惡さうに顔を伏せて、

『その銀行はなんです。日本橋のそばの角にあります。それで明日あなたが、その裏に表面の金額正に受取候也、とか

う書いて』と彼は名刺を出してその裏に線を引いて、『それから月日と住所と、あなたの名前と、』とまた二本線を引いて『その下に判を押すのです』と丸を書いて、須山の手にそれを渡した。須山は苦笑しながら、それを受取ると、大事さうに蟇口の中におさめて

『では行きませうか、水野も待つてゐますから、山の井へ行つて一緒にご飯でも喰べてお別れしませう。左右田君にはまた逢ふ機會もあるでせうから』と先きに立つた。

『僕はどうも、もうこれで』と平井は氣の進まない顔をしたが、

『まあ好いでせう、兎も角あそこまで』と執念く須山が誘つたので、とう／＼一緒に電車に乘つた。

山の井に歸つてから、少しばかり酒を飲むと、平井は

『僕にまた明日、左右田の方へも早く行つてやらなければならないから失敬します』と云つて先に歸つて行つてしまつた。

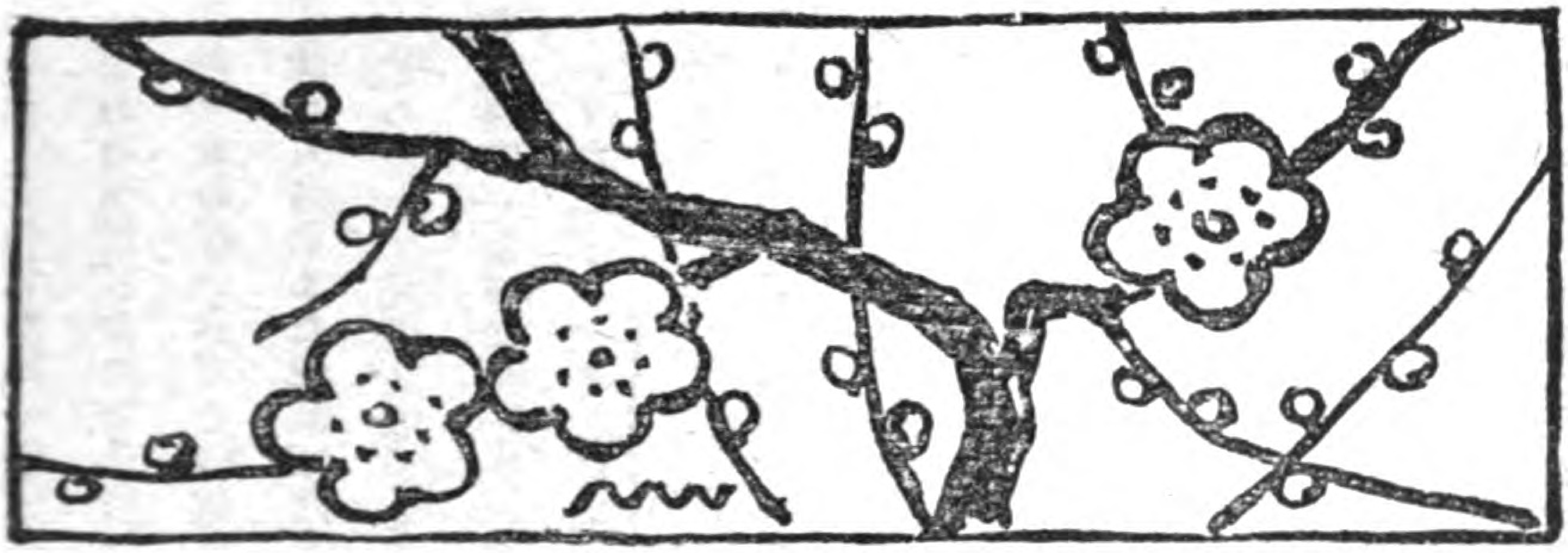
『何のために、かうも長い間苦しんだのか、漸く事情が解つたよ』と須山は水野と山の井の主人の前に小切手を出して見せた『これは約束より六十圓多いのだ。あの男がこれだけの金を蹴出さうとしたために、僕は一と月近くもかうして苦んだ。見給へ、身體まで惡くなつたと見えて、爪の色までこんなになつた』須山は手先を突き出した。爪は暗紫色になつて根本の方は少し凸凹にさへなつてゐた。

『これからこれさ。』と彼は蟇口から平井の書いた名刺を出した。『今時の人間で、三十を越した者が、小切手の受取り方位知らない奴があるだらうか。これは平井のテレ隱しの證據なんだ。僕は記念のために取つておく』と云つて、彼は

『ふゝん』と笑つたが、

『ねえ君、あの男の一晩の遊興は、これだけの犧牲を必要とするのだらうか、考へると馬鹿々々しくて堪らない』

『そんな事はどこにでも行はれてゐるんだ。君はつまり、その縮圖をやつたのさ』と云つて、水野は『はゝゝ』と笑つたが、『まあ好いさ、その代り左右田は今夜、その待合で虐待されて弱つてゐるだらう。うまく金が出來なければ明日も明後日も苦しまなければならないのだ。それで腹癒せの足しにするさ』と愉快らしく笑いつゞけた。



ランプ明るく

宇野千代

（一）

土間の敷居のところで、若い母はランプの掃除をして居るらしく、後向きにまるくうづくまつて、お婆さんのやうだ。

母は立つた。カチ、カチとほやが鳴つた。五分芯の灯がぼうつとともり、朧氣な障子の棧に大きな形が浮いた。

三千代は裏木戸まで來かかつて、父の家に何事もなかつた事を感じた。母は庭を廻つて父の部屋へランプを持つて行つた。

この家の明りが遅いのはきまつた事だのに、遠くから見ると灯のないのは不吉な感じがした。自分の眼が町の祭の明るさに欺かれて居たのだらうか。三千代は、椽側から父の居間へ上つた。

父は寢て居た。呼んでも蒲團が動かなかつた。三千代の見知らない紅葉の模樣の

ある新しい蒲團を着て居るのと、蒲團から少しも父の顔が見えないのとで、勝手違ひな感じがした。

「お父さん、」

と、また呼んだ。

蒲團の端が少し動いた。三千代は何か待ちうける氣で身構へをした。

そのとき、父は蒲團から顔を出した。三千代を見ると、一言も言はずに又蒲團の中へ顔を隠した。その顔には、三千代の豫期した激情がなく、今まで父に見た事のない平和な無感動があつた。

「お父さん、三千代は吉村から戻りました。もう、行かないでも好いですか。」

父は何とも言はなかつた。

ままごとのやうな嫁入りではあつたけれども、行つて十八日しか經たないのに、誰にも斷らずに戻つて來たのだ。父は三千代が戻つて來ると知つて居たやうに、椽側から上つて來た三千代を見て、つい、お使ひから戻つて來たときの三千代にするやうに、沈默つて、三千代を見た。ああ、あの顔だ。「戻つて來たのか。」と言ふ顔だ。

三千代は、父の様子から或る感動をうけた。そして、父が自分を待ち、自分の戻るのを知つて居たのだと信じた。

台所へ行くと、母と小さい子供たちとが、音も立てず暗いランプの下の低い食台で、夕飯を喰べて居た。

三千代が、箒の掛けてある柱のところまで來たとき、けはひを感じて母が、それから子供たちが顔を上げた。

「お母（かか）！」

「如何したのか、いつ戻つたのか、」

吉村のランプに比べて、何と言ふ暗い事であらう。ほやに縞めのやうなよこすじがはいつて居る。そして、そのほや

が欠けて居て、そこから風がはいり、じじと鳴る。吉村のも、吉村のだけでなく町のどの店にともつて居たランプでも、ほやは掃除がよく屆いて、透きとほつて明るかつた。

いま、ほやのよこすじを見て居ると、三千代の眼が尖つた。

父は、三千代がずつと子供のときから、又、病氣になつてからは尚更、母が、家を綺麗にとり片附け、ランプのほやを透きとほるやうに拭き、などするを叱つた。

「吟味るな！」

と叫んだ。

人前を繕ふな、と言ふ意味だつた。その言葉を三千代は幾度聞いたらう。父の聲は怒りに慄へ、母の顔は怯れと疑ひで曇つた。父が間違つて居る、三千代はさう思つた。ランプのほやを透きとほらせるのが、如何して吟味る事なのであらう。

だが、母は父の云ふ通りにした。ランプは煤のために黒くなり光が遮られるまで放つてあつて、それから初めて、母は土間の敷居のところにしやがんで、丸めた新聞紙をほやの中に入れ、くるつ、くるつ、と二度くらゐ指を廻す。と、黒い煤の上に白いよこすじが現はれ、灯をつけると、よこすじの間から光りが洩れるのだ。

母はそのランプを父の居間へ持つて行つた。父はじろりと見た。母の顔は、いつもランプを綺麗になり過ぎたか如何か案じて居るやうだつた。

いま、吉村のうちから戻つて、台所のランプのよこすじを見ると三千代の心は落付いた。そのよこすじは父と母との爭ひを示さず、自分のうちの懐しさを思はせたのだ。

「如何して戻つたのか」

と母は訊いた。

三千代は、さう訊かれたとき、この母に訴へる事が一杯にあると思つて居たのに、その思つて居た事は凡て母に話す事の出來ない事許りなのに氣附いた。

三千代は、泣くとも笑ふとも附かない一種の表情をした。答へたくないとき、すねたときにする、母にだけ解る表情を。

「誰かにさう言ふてお戻りたか、」

母は心配さうに、また訊いた。三千代は、伯母に斷つて來たのだと嘘を吐いた。

「今夜はお祭りで……」

と、母は障子のしまつて居る高窓を見上げた。と、子供たちもそれについて同じ事をした。

母も子供たちもお祭りなのを知つて居る。障子のしまつて居る窓から、そのお祭りを見たがつて居る。——三千代は、祭りと言ふのに、鮨も煮〆めも載つて居ない食臺を見たとき、自分が母や子供たちの見えないところで、まるで違つた生活をしてゐる間、この家では、前と少しも變らない生活が續いたのだと云ふ事を深く感じた。

すると、小さい子供たちのものを言はない唇は、三千代がこの家のそとで生活した事を咎めるやうに見え、置き去りにされたものの恨みを含んで居るやうに見えた。

三千代はそのとき、自分の許嫁に對するふみにじられた愛情を思ひ浮べ、この子供たちや母に對して、償ひのない不實を行つたやうな氣がした。

（二）

飯が濟んで、子供たちが寢靜まつたとき、母は、三千代の居ない間に起つた父に就いての異樣な出來事を話した。

父が佛さまになつた、（その通りな言葉で母は言つた。）と言ふのであつた。

佛さま？佛さまと言ふのは、これまでの殘忍酷薄な父を鬼と言ふほどでなくともそれに近い感じで呼び、今、ふいに、恰も奇蹟のやうに信仰をはじめたと言ふ父を佛さまと言ふのであらうか。

三千代は、佛さまと言ふ言葉を聞いた瞬間に、何か不吉な感じが自分のあたまを掠めたのを感じた。そのために、前哀しげな母の表情の中に、いつか、ま近かに父の死を豫想して居るやうな暗示を受けたのであつた。

町外れに、貧しい大師堂があつて、西國八十八ケ所を眞似、近在を遍路する人々のために、かただけの供へがしてあつた。堂守りは四十位の肥つた女で、良人らしい男はなく、十くらゐになる男の子と二人で暮して居た。誰も身の上を知るものはなかつた。加持、祈禱、占ひをし、誰云ふとなく巫子のやうな扱ひを受けるやうになり、何か、人間の女でない印象を人々に與へた。そして、貧しかつた大師堂は新しく立派になり、その繁榮につれて堂の側らに別に建てらた女の家も擴がつた。

三千代は、その肥つた女が自分のうちの垣根にそうて毎日通るのを見て、よく知つて居た。光つた絹の被布を着て提袋を提げ、この田舍ではあまり見かけない眞つ白な足袋を穿いて、顔には作り笑ひの影が消えない。

三千代はその女が可厭だつた。不確かな、言ひやうのをない不信を感じさせるのであつた。今、父が、この可厭な女の手からその額に佛のお水を頂いたり、お籤りをきいたりするのかと思ふと、さう決心した父の氣持が遠く近く伸び縮

みして感じられるのであつた。父の病氣が餘り長かつたのだ。

然し、あの會體の知れない堂守りの女を信じる父、それは三千代の想像に浮んで來なかつた。それは父ではなかつた。父の魂は長い病氣に疲れ、自分の體をぬけてどこかへ行つたのだ。そして、魂のない父の體が、あの肥つた女の手からお水を頂く。——三千代には堪え難い光景だつた。

さうだ、父が先刻三千代を見たあの眼は「戻つたか、」と言ふ眼ではなく、魂のぬけた、お水を頂いた許りの父の眼だつたのだ。或ひは又、仰臥して死を見詰め乍ら、今までの生活に或る計算をして居る虚ろな眼であつたのかも知れないのだ。

さう思つた瞬間に、母が同じ事を言つた。

「今さき、お父さんが、母や子供たちを枕もとへ呼んで、——」

父が皆を呼び、これまでの父を許して與れるやうに、と言つたと言ふのであつた。母は、言ひかけて眼を閉じた。と閉ぢた眼から涙がぼろぼろ流れた。

三千代は、直ぐ眼を伏せた。そして、可哀さうな可哀さうなお父さん、と心の中で呼んだ。

翌る朝、上田老人が吉村の使ひになつて來た。

三千代は、臺所の扉の蔭に隱れて、そこから、老人の半分見える寒さうな肩を見た。と、上田の妻の、黑く染めた齒を出して笑ふ顏が浮んで消えた。笑ふ、笑ふ、三千代は、その上田の妻の顏に並んで三つも四つも同じ顏を見た。自分をしいたげる、その氣持だけが三千代を樂にさせた。

老人は直ぐ歸つた。門さきで、老人との立ち話しを濟ませて來た母に、三千代は自分の氣持を隱さず、

「如何だつたのですか、」

と、自分から訊いた。

吉村では、昨夜三千代の姿が見えなくなつたとき、伯母が、三千代は自分のうちへ往んだのだらう、と、直ぐその事を言ひ當てたと言ふ事を聞いて、三千代は胸を衝かれた。伯母は、三千代がさうする事を待ち、自分の待つ氣持ちが三千代を支配したのを感じたのだ。今、上田老人を使ひによこしたのは、ただほんの禮儀のためと、自分の想像を確かめるためとに過ぎない。――

何にも知らない母は三千代のために腹を立てて、世辭にももう一度戻る氣はないか訊いて見るものだ、と言ふやうな事を言つた。

三千代は打ちのめされた氣持の中に、何か罰せられる自分を感じた。その感じは、三千代に、自分をどこからか彈き戻された人間として感じさせた。

さう言ふ考へはどこまでもついて行つた。今まで、この暗い家の中だけにしか生活して居なかつたころの自分と比べて、何と言ふ違ひであらう。さうだ、彈き戻された人間、不用な人間！

或る時、三千代は、小鳥の餌を買ひに、或る老婆ひとりの商ひ店へ使ひに行つた。

すると、その老婆は、餌を計つて新聞の包に入れ、それを三千代の手に渡すとき、いつもは決して見せなかつたうす笑ひを浮べて三千代の顏を見た。

三千代は、片足土間の敷居をうしろ向きに跨いて、袋を取ると直ぐそこから離れる用意をした。そのとき、老婆が言

つた。

「三千代さま、（さま、と呼ぶのは三千代を尊敬してではない。三千代の父の怒れものなのが町の通りものになつて、人々は災難よけの積りで三千代のうちの者の聽くところでだけ、さう呼ぶのだと言ふ事を三千代は知つてゐた。）あんたは、お嫁入りなされたさうな、の、」

そして、この話し好きな老婆は、三千代が丸髷を結つてお婿を並んで歩くところを見たものがある、と言ふ話しをした。

三千代はぼうと赧くたつた。生れてから、こんな汚い、（汚いと言ふより外の言ひ方はなかつた。三千代は、ぼんやり男と女との事を感じて居た。彈き出されたた不用な人間に、丸髷、お婿と言ふ言葉は少しの夢も運んでは來ないのだ。只、恥しめる役にだけ立つ）、お世辭が自分のために言はれる、こんなときの自分を想像した事はなかつた。

だが——この老婆は三千代をからかふために言つたのではなかつた。噂のたねに乏しい町の女たちが氣紛れに拵へ出したであらう話しを傳へただけだつたが、三千代には、さう思へなかつた。

小鳥の餌は袋からこぼれた。三千代は誰にも打ち明けられない氣持を抱いてうちへ歸つた。

その時から、三千代は町中の人が皆、自分のことを笑ふつて居るやうな氣がした。學校へ行くのも、何となく氣がひけた。

（三）

直きに噂は沈み、三千代の嫁入りから戻つた事を誰も言はなくなつた。青村からも、何とも言つて來なかつた。

三千代は靜まつた感じの中をそうつと步いた。それは、埃自身の重みで土の上に靜まつて居るが、何か搔き立てるものがあると直ぐ舞ひ上る、そんな感じがしたのだ。——だが、三千代が感じて居るほど、町の人たちは、その事を面白がりはしなかつた。噂は片もなく消えた。三千代の胸に十八日だけの記憶をとどめて、——

夜が明ける日が暮れる、その事も父の指一つで如何かなるのかと思はれたほど、この家の中での父は、父の存在一つが光つて、あとのものは文字通り父に使はれる家具、さう云ふかたちだつたのに、今は、その父が佛さまになつたのだ。

每朝、醫者の代りに肥つた堂守りの女が父の枕もとに呼ばれた。

「お寒うございます、お寒うございます。」

と、その女は優しい笑顏を作つて母や子供たちにまで挨拶した。だが、門さきから玄關を通り、一室二室過ぎ、父の枕もとへ行くまでその女の眞つ白い足袋を穿いた足は、誰にも聞えない聲で、

「お通り、お通り！お通り！」

と言つて居るやうに見えた。三千代にはその聲が聞えた。

その女が坐ると、肥えふとつたその肩が、父の痩せた肩をおほひ、女の張りのある讀經の聲は、ものを言はない父を呪つて居るやうに聞えた。

今、父の着てゐる紅葉の模樣のある新しい蒲團は、その女が買はせたのだと言ふ事を母が話した、その蒲團の蔭から、父の白い頭が見えた。長い讀經の間、父の白い頭はうなだれて、いつどこから生れたのか或る力に支へられて、じ

つと動かずに居る父を見て居ると、三千代は、その堂守りの女を理由もなく自分ひとり、狐か魔法遣ひのやうに思つて居る事が、その女の祈つてゐる佛から罰をうけるであらうと思ふ瞬間があつた。

だが、その感じは、醒めた瞬間に欺かれた感じを深くするのに役立つた。女は歸るとき、母のさし出す紙包みを黒い提げ袋に入れて、

「有難うございます。有り難うございます。」

と繰り返した。

父は終日、口を利かなかつた。誰に對しても要求を持たなくなり、病氣の苦痛も訴へなかつた。顔は、日に當らない筍のやうに黄色く、蒲團の上へ起き上る元氣もなくなつた。

何と言ふ情けない佛さまであらう。

三千代は、父がもう一度あの堂守りの女を裏切つて呉れる事をどんなに希つたか知れなかつた。もう一度裏になつて呉れる事さへ希つた。

夜、眠つて居て三千代は幾度も眼が醒めた。父が呼んで居る、そんな氣がするのだ。――もとは、夜になると母と三千代を替る替る呼んで、肩を撫で足を擦らせた。一時間、二時間、三千代は、父が肩を撫で足を擦らせる事が、堪え難い苦痛のため許りでなく、病氣で眠れない自分の道連れになる事を強いて居る、さう言ふ感じを受けることがあつた。

誰か足を擦つて居る間、父は眠つて居る風を裝ひ、少し手を緩めると、直ぐ眼をみひらいて、

「おい、」

と、はつきりした聲で言つた。

その聲は尖つて意地惡く聽えた。殺せはしないぞ、と言つて居る風に聽えた。三千代はそのとき、父が早く死ぬことを希つた。そして、この強いられた病苦の道作れから逃れる事を希つた。——然し今は父は誰も呼ばない。呼ばないのに母も三千代も、父から呼ばれたやうな感じで眼を醒ますのだ。

首をあげて父の方を見ると、父はそれを氣附いたやうに、そのときまで大きく見開いて天井を見詰めて居たであらう眼を、氣附かれないやうにそうつと閉ぢる。そのとき、三千代は父の病苦をそのまま、自分のものとして感じるやうな、言ひやうのない心苦しさにおそはれた。

そして、父の發病から二年の間のながさを思つた。——初め、町の醫者は胃癌だと言つたのであつた。父は直ぐ、死を觀念したやうに見えた。

或日、廣島から小鳥を買ひに來た商人の話しで、廣島の縣病院に居ると言ふ名高い博士に見て貰ふ氣になり、そこに入院した。

そこでは、十二指腸蟲だと言つた。父は、もう一度生きる望みを持つて、看病に三千代を呼んだ。

幾日おきかに、食鹽注射を行つた。父は、注射のために桝のやうに膨らんだ足を、兩手で押へてじつと眼を閉ぢた。痛みを堪えやうとする父の眼から、涙がぼろぼろ滾れる。

だが、百日の上になつても父はよくなりさうにも見えなかつた。博士は、病院へ來たのが少し遅過ぎたと言つた。もう少し早く來たら雜作なく治つたらうにと言つた。そのとき、父は大きな聲で何か言ひ抗つた。

次の日の回診のとき、博士は父の臍の下を指して、あれはあなたが食べたのか、と言つた。

父は、一寸そこへ眼を遣つて、嘲笑するやうに又挑むやうに相手を見た。

「如何も、貴方は氣が立つて居て不可ん、」

と博士が言つた。

寢臺の下には、博士からとめられて居た不消化物の喰ひ荒された膳があつた。三千代は使ひに出て居て、父がいつ如何してそれを調へたのか知らなかつた。

その日、父は荷物を纏めてうちへ歸へつたのであつた。——

三千代はその父を思ひ出した。曲りくねつて自分に戻つて來る、愚かな復讐のためにだけ費されたやうに見える父の意地つ張りも、今はその體とともに病みさらぼひ、かたもなく消えた。

三千代は、父が一日も早く快くなるやうに祈り乍ら、心の中では、決して再び治る事はないであらうと信じた。

斯うして、父が佛さまになつたことのために、皆は少しも仕合せにはならず、この暗いランプの灯つた家は、なほさら不幸の中へ沈んだ。

（四）

或る寒い朝であつた。

丁度父の病室と壁一重の背中あはせに、小鳥の飼ひ場が、日に向いて並べてあつた。母は、その前の地べたに莚を敷き、小さい子供達を坐らせて、自分は小鳥の春の巣ごもりに備へるために、シヤツポのやうなかたちの巣を藁で綴つて居た。

裸になつた葡萄棚の影は莚の上に落ち、小鳥は止まずに鳴いた。

若い母の作つた緒はぼろの中に包まれ、三千代はそれを十枚づつ數へて、紐で縛つた。

そのとき、家のおもての方で、鈍い、獣の呻るやうな聲が聞えた。

そのころは、一寸したもの音でも直ぐ、父ではないかと言ふ心配に驚かされる事が多かつた。二人は確めるやうに顔を見合せた。

この町には、夫婦でもの貰ひに歩いて居る氣のふれた乞食が居た。三千代は直ぐその乞食の事を思ひ浮べた。この寒さで、うちの前の板戸のところに行き倒れて呻つて居るかも知れないと思つた。

「行つて見るか、」

母は相談するやうに言つて、立ち上つた。三千代も續いた。

二人は台所の土間を通つて、土間つづきに玄關へ出て板戸の外を見たが、そこには何にも居なかつた。安心して、ひよいと體を引かうとすると、引いた足もとから一間とは離れない玄關の踏み台に、父が、べつたりと尻を据ゑて坐つて居るのだつた。ひよいとそれを見た瞬間、二人はぎよつとした。父が、そこに居ようとは思ひかけない事だつた。

だが、父の様子は落ついて居た。何か、下駄をさぐる拍子に足を辷らしたと言ふ風に見えた。

三千代は直ぐ、何でもなかつたのだと思つた。父は病氣にならない前にもリュウマチで足が利かない事があつたから、よく、これと同じことがあつた。三千代は何の不思議もなく、父はどこかへ出掛ける積りなのだらうと言ふ事を信じた。そして、父を助けるためにその方へ寄らうとした。あとで三千代は、そのときの自分が如何してさう思つたのか信じられなかつた。父は、もう死ぬのを待つ許りなのに、その父が玄關まで自分の力だけで出て來る、これは考へも及ば

ない事なのだ。）明るい外光に馴らされた三千代の眼には、父の表情が少しも見えなかつた。

「危い！」

と母が叫んだ。

三千代は、その聲に彈かれて體をひいた。父の手に何か光るものがあつた。それは、台所の水がめの上にさしてあつた出刄なのだ。父はおどすやうに、その手を大きく振つて、何か呟いた。

三千代の心を、何か寒いものが走つた。父は氣が違つたのだ！——だが、この父を氣違ひにして扱ふのは悲しかつた。今、氣違ひにして扱へば父はほんたうの氣違ひになる、そう言ふ考が稲妻のやうに三千代のあたまを貫いた。

三千代は泣くやうな笑顔を作つて、父の方へ近附かうとした。

「あなた、危いのですよ。それは危いのですよ。」

母は遠くに立つて、子供をあやすやうに言つた。

父の表情は、今氣違ひになる自分を感じてそれを惧れ、誰れかの手に逃れようとして居る風に見えた。が、三千代が近附かうとすると、その表情は消え、今に氣違ひになるぞと言ふものゝ、挑むやうに三千代の顔を見た。そして、屁揶ひをするやうに、出刄を持つた手を大きく振り乍ら、少しづつ、いざつて前へ出た。

三千代の足は、父の視線に縛られたまゝ、父が出ると同じやうに後へひいた。

父は敷居のところまで來た。と、敷居に片手をかけて這ふやうな格好になり、一種悽惨な冷かさをこめた顔をして、

「寄ると殺すぞ！」

と言つた。

はつきりした聲だつた。それはずつと病氣になる前の、狂暴な父の聲だつた。

父は、氣が違つて、もう一度死から蘇つたのだらうか。眼に見えない力に支へられ、父は腰を立てた。そして、敷居を跨いだ。

父の姿は、往來の日の中に晒された。

（五）

馬を曳いた馬子や、子供や薪賣りや、見て居る間にぐるりと人だかりがした。

「何、何、」

と言ふ聲がした。

人々の表情は痛ましげな假面を冠り、直きに起るであらう何事かを待ちうけて居た。この、町中での暴れ者が長い病氣のため氣がへんになつて、往來で庖丁を振り廻して居る、さう言ふ意地惡るな興味を隱さうともしなかつた。

父は、血走つた、けれどもどこか虚ろな感じのする、あの、氣狂ひの眼で見廻した。そして、何か喚しかけて來るものに應じるやうに、

「殺すぞ！」

と叫んだ。

さうした光景の中に父を見る事は、どんなに悲しく情けないか知れなかつた。三千代は見物人の眼から父をかばふやうにしやがみ、

「お父さん、うちの中へ這入りませう。お父さん、」

と言つた。

三千代は、先刻から知つて居たのだ。父の着物の裾と土の上に投げ出された木ぎれのやうな足とに、寝床の中で洩らしたであらう汚物がねつとりこびり附いて居るのを。知つて居乍ら、さう認めるのが辛かつた。自分が知らぬ顔をすれば人々も氣附かないであらうと言ふ氣がした。

だが、日は眞直ぐに父の上から落ち、寝間着の裸かつた胸も腹も、丁度醤油の表面に浮ぶ黴のやうな皺で縮まつて居るのまで、はつきり見えた。

「お父さん、うちの中へ這入りませう。お父さん、」

さうしたとき正氣の人間がするやうに、父は、故意に三千代の眼を避けた。ちつとも聞えやしないよ、三千代。貴様は、こんな風になつたお父さんが、何にもしないで引つ込めると思ふかい？――と、さうへんに落付いた聲で言つて居るやうに見えた。

では、父は何をしに往來へ出て來たのだらうか。自分の命を斷つためではない、誰かを殺すためにか。

三千代ははつとして眼を擧げた。往來の向ひ側に木賃宿をして居る家があつた。その二階の格子窓の中から、宿の親爺の顔が見えた。笑つて居るのか憐れんで居るのか、格子窓の中は暗くてこちらからは見えなかつた。

父は、あの親爺を殺す積りなのか。だが、それは餘り昔の事ではないか。五年、六年、或はもつと前か知れなかつた。二人は自分自分の持ち馬を町の祭の競馬場へ送つて、その勝敗から、もの凄い口論をした事があつた。そのときから、三間の國道を挾んで二つの家は表の戸を閉さし、口を利かなくなつた。それから長い間經つた。今は、昔お互の家が爭

ひをしたと言ふ事も忘れ勝ちになつたほど、兩家の敵意を含んだ沈黙は習慣になつて居た。――だが、父はあの親爺を殺す氣ではない。

そのとき　格子窓がまへよりもう少し大きく開いて　中から若い泊り客が往來の方へ顏を出して　下に立つてゐた誰かに何か言つて笑つた　――つい　今　親爺だと思つたのは　あの若い男だつたのだらうか　さうではない、親爺がさきへ見て、

「面白いから一寸覗いてごらんなさい、前の肺病野郎が氣が可笑しくなつたやうです。」

と　さう言ひ乍ら　客と入れ替つたのであらうか　――

三千代は、眼の前にはつきり父を見て居乍ら　ほんの一瞬間、自分の氣持がよそへ逃げたのを感じた。だが、父はほんたうに氣狂ひになつたのだらうか。

そこへ、誰かの知らせを受けて堂守りの女が遣つて來た。

「旦那さん、そんなところに坐つて居ては不可ません　さあ、お起ちませい。起てますか、起てますか。」

女は落付いてさう言ひ乍ら　父の肩に手を掛けた　そして　うしろに立つておろ／＼して居る母を　へんに固い聲で呼んだ。

「ご寮人さん　一寸お手を貸して、」

その聲には　いつも使ひ馴れて居る人間を呼ぶやうな馴々しい響きがあつた　母はすなほに

「はい、」

と答へた。

誰がこの女を呼びに行つたらう。三千代がぼんやりさう考へたときに、父は顔をあげた。そして、女の子のある竹の方へ、ゆつくり首を廻した。

女狐！よく、今まで欺いたな、

――三千代は、父の代りにさう言つて居る自分を感じた。すると、父の乾き上つた瞳は、同じ事を言ふやうにじろりと女の顔を見上げた。

お大師さまは、もう駄目さ、――三千代は、父の代りにさう言ふ言葉を探した。と、父の薄い唇が、少し歪んで笑ふやうに見えた。三千代はそれを待つて居た。父が、この肥つた女を裏切る。それを待つて居たのだ。

だが、父は笑つたのではなかつた。歪んだ唇はそのまま、べそを搔き、過ちを見付けられた子供のやうに大人しくなつた。

父の手から刃物は落ちた。そして、父の體は擔ぎ上げられ、奥の寢床へ寢かされた。總て、張りのある讀經の聲が、騒ぎが靜まり、何事も起らなかつた事を知らせるやうに、往來まで聽えて來た。

（六）

あのときも、父の病室と壁一重のところに居たのだつたのに、三千代たちのところへはことと言ふもの音も聞えては來なかつた。井戸端で水を汲み、臺所で煮物をして居る間に、父は何を思ひ附くかも知れない、さ、言ふ心配から、三千代と母とは父が疲れて寢靜まつた隙を見て、病室の唐紙の桟を、（その唐紙には中頃に、細格の硝子がはまつて居つて、長い間はり替へる事もなかつたので、細い骨が褐になつて居た。）細紐で固く縛つていた。

父は直ぐ、それを氣附いた。

「已れ！唐紙を縛つたな！その四疊半へ戸主を監禁したな！」

と、きれぎれに怒鳴る聲が、三千代たちのところまで聽えて來た。もう立ち上る氣力もなく、蒲團の上に腹這ひになつて、落ち凹んでなほ大きく見える眼を見開き、僅かにその聲にある限りの威嚇をこめて叫んで居る父の姿は、見るよりもはつきり頭に浮んだ。

父は氣がへんになつたのだ。だから、今父の側へ行つて如何慰めやうもないのだ。さう思つて、じつとそれを聞き流すのには、長い時間がかかつた。

三千代はその聲を聽くと、手に持つて居るものを落した。實際、父を監禁した自分を感じ、言ひようのない罪の感じさへうけた。

戸主を監禁したな！父は氣違ひにならない前、好んでさう言ふ言葉を弄した。今、氣が違つても、戸主と言ふ言葉に自分を盛る事を忘れない。戸主、何と言ふ悲しいこけおどしであらう。

三千代は、父の部屋が靜まつて居る隙に、その前を通らなくては行けない厠へ起つて行つた。そのとき、見まいと思ひ乍らちらとその方を見た。

唐紙の枠を縛つた紐が、縛つたときより三寸くらゐ伸びて、だらりと桟の上に下つて居る。はめ障子の紙はぼろぼろになつて、ひ弱な骨だけれども父にはそれをひしぐ力はないのか、一本も折れては居ない。そして素通しに、紅葉の模様のある新しい蒲團の裾が見える。ついこの間、誰も呼ばないで寢て居た頃の父と少しも違はないやうだつた。

三千代は長い間かかつて用を足し乍ら、父の事を考へた。父はほんたうに氣違ひになつたのであらうか。またさう思

ひ初めたのであらう。——自分か、いや、母がさう話した。父の姉にあたる老婆が一人、長い間裸のまま座敷牢に繋がれて、夜になると自分ひとりの口三味線で唄を唄ふのが居る。今も生きて居る。多分父の血筋の中にそんなものがあるのだらう。さう話した。だが、自分は今までそんな老婆の話しをきいた事はなかつたのに。——

行くときには靜かに寢て居たと思つた父が、歸りしなには障子の棧に顔を押しつけて、部屋の外を見て居ることがあつた。三千代は、父が自分の歸りを見張つて居て、ふいに跳りかかつて來るのではあるまいかと言ふ恐怖に驅られた。障子が縛つてある事、父は病みほうけて起つことも出來ない事、さう言ふ事實は少しも三千代の恐怖を緩めはしなかつた。三千代はそのとき、自分が父を押し込めたやうな感じを抱き、父もさう信じて居るやうな氣がした。

けれども、父は跳びかかつては來なかつた。何時ものやうに怒鳴りもしなかつた。初めて見る珍しいところのやうに、住み荒した自分の家を見廻して居た。彼の眼は、自分の娘を見ても少しも變らなかつた。

父のその樣子は、もう幾月もそう言ふ境遇に馴れて居るやうに見えた。三千代は何となくほつと息を吐き、微かに自分のこころが緩むのを感じた。實際、父がこんなになつてから、長い日が經つたやうな氣がした。

すると、その障子の棧の中に居るのが自分で、その外に立つて平氣でそれを見過ごして行くのが父のやうな、もやもやした感じが、三千代のこころを冒した。さうだつた。障子の棧の外には珍しいものが澤山あつた。三千代はそこから外へ出る事は出來なかつた。この家の表の板戸は、父が外出するときの外、開く事はなかつたのだ。

昔も閉つて居るその板戸には、丸い、お月さまくらゐの穴がえぐつてあつて、そこから、燕の夫婦が餌をふくんでは這入つて來た。うちの玄關の天井に何時の間にか巣喰つて居たこの燕を、父は、自分の妻や子供の事よりも氣に掛けて居たのだらうか。いや、父はどの人間も憎んで居たけれども、人間のやうにものを言はない、こんな小さい生き物まで

惜みはしなかつたのだらう。

雨が降るのかお天氣なのか、三千代は母の枕元の丸い穴から伸び上つて、そつと往來を見た。穴の中から見るものは、どんなに珍しく面白かつたか。

だが、この事はずつと古くから、馴れつこになつた事であつた。若い母も三千代も、その丸い穴が何のためにあるのか、如何してこの枕元は晝間も閉ぢてあるのか、誰がさうする事を強いたのか、そんな凡ての事は思ひ出しもしなかつた。それは初めからさうであつたやうに、何の不思議も感じさせなかつた。――――いま、この四疊半の障子の棧から覗いて居る父の、きよとんとした顏は、三千代にこれだけの事を考へさせた。

すると、むかし父が持つて居た凡ての權力が單なる威嚇に過ぎなくて、今はその威嚇もこはれた玩具のやうに役に立たなくなり、こんな風に障子の棧から覗いて居る父は、生れたての赤ん坊のやうに何の力も持つては居ない、さう言ふ考へが少しの不自然さもなく三千代のこころに湧いて來た。

それは、信じられないほど滑稽な感じであつた。赤ん坊、大きな赤ん坊、赤ん坊、さう思ひ乍ら裏で仕事をして居る母のところへ戻つて行かうとするとき、三千代は、自分が父に對して初めて抱いたこの不思議な感じ、――――それは快い復讐の感じに似て居た。――――に吃驚した。自分は、父がそんなになつた事を喜んで居るのだらうか。――――と思ひなしか、裏の葡萄の棚の下で、風に吹かれ乍ら洗濯物を乾して居る若い母の後姿が、そんなになつた父、自分たちと何の交渉も持たなくなつた父を、少しも悲しんでは居ないやうに、生々と、丁度この若い母の若さだけに生々と伸び上つて居るやうに見え、その下の地べたに坐つて居る子供たちまで、唄を唄ふやうに體を動かし乍ら小石を數へて居た。それは、この暗い家では許されない平和さに感じられた。

だが、――さう思つたのはただ母の後姿だけであつた。母は振り返つた。

と、強い日のせいか、母の顔はうす暗く、風になぶられた後れ毛が、その顔のまはりをぐるぐる踊つた。

「お父さんは靜かだつたか、」

母は低い聲をして訊いた。

（七）

けれども、三千代の感じは誤つては居なかつた。この家に居る誰も、父の、こはれて役に立たなくなつた神經を、ちぐはぐに動かすやうな事を避けたいと念じ乍ら、ふと、解放せられた囚人のやうに感じる瞬間があつた。

二三日した或る朝、母は座敷を掃いて居た。

母は、父が寢て居るやうなのを見屆けてそれを初めたのに、ふと、帚を持つ手を止めて耳をすました。三千代は、母が自分と同じ事を怖れて居ると思つた。だが、父の部屋はいつまでも靜かだつた。

母は、表の板戸を開けた。日が流れ込んだ。敷台の板には白い埃が浮き、欄に吊した鳥籠からは糸のやうに繋がつた煤が垂れ、玄關の柱には白い蜘の巣が流れて居た。もう長い間、この家は牛小屋のやうに打ち捨ててあつたのだから。

母はときどき、ほう、と言ひ乍ら眉を顰めた。それが、どことなく樂しさうに見えるであらう自分を咎めて居るやうに聞えるのだ。ほう、――母は埃を透かし乍らさう言つた。

然し、思つて居たことは直ぐ起つた。父は寢ては居なかつた。母が掃除し終つたころ、父の聲がその部屋の中から聽

えた。

「吟味るなよ、おてい！」

母は直ぐ答へた。

「はい、——ほんの一寸、片附けただけなのです。」

母は土間に下りて板戸を閉ざした。

一寸の間、幕を引いたやうに暗くなつた。暗い中に、また父の聲がした。

「俺が死んで、それから吟味い！生きてをる中は吟味るなよ。」

父の聲は靜かでしつかりして居た。父がまだ、その壞れない神經とともに、絶えない意地惡さを持つて居たころ、幾度となく聽き馴れた聲だつた。そして、その聲は擴がつて、この家の空氣をもう一度二十ケ月まへに引き戻すやうに見えた。

實際、父は氣が逆つては居なかつた。恐らく、一時的な精神錯亂であつたらうとさへ思へないほど、けろりとして居た。若い母も三千代も、然し何となくそれを知つてゐたのだ。そして、さうなつた時の父に備へるために、一つの態度と言葉とをいつでも用意して居たのだ。

だから、母は直ぐに答へた。はい、——ほんの一寸、片附けただけなのです。

少しの作つたところもない聲だつた。そして、疑ひのない足取りで、土間へ下り板戸を閉ざした。まるで、二十ケ月まへの父と母ではないか！

三千代は、念じるやうな眼をして唐紙の紙を見た。どうぞ、父がこれを見ないやうに。——

幼かつた三千代にはよく解らなかつた。吟味ると言ふその言葉を父よりほかの誰も言ひはしたかつた。四十過ぎになるまで、放蕩な浮浪人のやうになつて暮したと言ふ父が、どこかの遠い國で拾ひ上げた他愛もない言葉かも知れないのに、今は何と言ふ意地悪さを運んで來る事であらう。そして、父の唇から幾度も繰り返されて居るうちに、今は誰もその意味を感じるやうになつた。

この言葉を聴くごとに、不可思議な鮮かさで三千代の心に浮んで來るのは、若い母が髪を結つて貰つて居るところだつた。今はもう、そんな事は夢にもない。ずつとずつと十年もまへの事だ。三千代の實母が死んで、直ぐそのあとへ來たこの母は、そのとき十六だつた。四十過ぎの男に十六の妻、そのころの使ひ男が母のことを、長い間「お嬢さま、お嬢さま」と呼んで居たと言ふ事を、今でも母は、お伽噺しを話すやうに話して聴かす事がある。――その若い母が鏡の前に坐つて居る。白い前垂れをした片眼の小母さんが、長い髪の束を梳かし乍ら静かなお愛想を言つて居る。三千代は少し離れたところに坐つて、まじまじと、母の白い横顔と美しい髪と障子の桟に日が一杯あたつてゐるのとを見て居る。――

然し、これはこの家の中にあつた事だらうか。三千代はいつでも自分の記憶を疑ふ。今でも、學校の行き歸りに、あのときと同じやうに白い前垂れをした片眼の小母さんが、どこか、よその家へ髪結ひに行くのであらう、少し前こごみになつて町を歩いて居るのに逢ふ事がある。だが、小母さんは三千代を知らない、知つて居ても笑ひも世事についと行き過ぎて了ふのだ。

さうだ、母は決して髪を結つて貰ひはしなかつたのだ。牛の糞のやうに、自分の手でくるくると丸めて居た。着物は、父のを直して着て居るので暗いところで後向きになつて居ると、父か母か分らない。やがて、その着物が母の年齢をお

し曲げ、その顔を着物に合ふやうにした。母は二十六か八か、そして、その首縞の着物がどんなに似つかはしい事か。もう、長い間、生れたときから着て居る着物のやうに。――

その間に、父は幾度となく「吟味るなよ、」と言つた。それを言ふとき、父の聲は嘲りを含み顔は意地悪さで歪んだ。そして、その聲につれて母の髪は蓬のやうに、着物はほころび袖口から裂れた襦袢が出た。

父はまだ言ふのを止めない。――それは、お洒落をするな、人前を繕ふなと言ふただそれだけの言葉なのに、三千代は、これ以上意地悪な言葉を聽いた事がない。

三千代は、それから、ずつと長じてこの事を思ひ出すとき、父がその若い妻に對して嫉妬したのだとは決して思はなかつた。嫉妬するかたちを借りて、ただ妻の若さを責め、自分と同じやうに老いる事を強ひ、そして、その同じ暴君的な氣持ちを押して、妻のこころに起つた反應を確かめるために、妻の髪容ち、なり振りから、後には、ランプのほやを明るくする事、家の掃除をする事、凡そ他人の眼に快く映るであらう何事に對しても、吟味るなと言ふのであつた。

自分は直ぐ死ぬ、貴様は自分が死んだあとまだ長い長い間生きて自分の知らない生活をするだらう、さう言ふ、妻に對して無意識のうちに働く父の畏怖が、三千代の胸を傷け乍ら浸みた。――三千代はその父を憎み、そして愛した。

今、母の使ふ箒の音が、父を呼び醒ました。父は氣狂ひの中を抜けてもう一度蘇つた。

一時間ののち、三千代は、呼ばれて父の部屋へ行つた。

硬い白髪の頭をそのまま、父は振り向かなかつた。枕のそばに一通の手紙があつた。

「その郵便を町の局まで行つて出して來い。急ぐのだから、たばこ屋の前の郵便うけでは駄目だ。」

と言つた。

父は何時これを書いたのか、さう言ふ間にも三千代を亂さなかつた。そしてその手紙を町の局の赤いポストに落したとき、ぱあん、と底に響く音が聞え、ひらりと白い腹を見せて落ちついた封書の面の白さがはつきり見えた。そのとき、三千代のあたまの中で、その白い手紙が糸になつて、どこか見えない世界の方へすべり込んで行つた。來い、來い、何か來い。――

父はもう、三ケ月も手紙を書きはしなかつたのだ。

（八）

一週間ののち、父の手紙の糸に曳かれて、一人の男が三千代の家の客になつた。

色の白い、細い男であつた。朱檀の茶盆と同じ花臺とを父に、赤や紫の緒をすげた麻裏草履を子供たちに土産に持つて來た。

茶盆と花臺は二三日父の枕許に置かれ、軈て箪笥の上の古い鳥籠と一緒に積み上げられ、その上に白い埃が積るまでその男はゐた。

穗介と言ふ名であつた。父は「ホウ！」と呼んだ。男は、部屋から部屋へ歩き、どこか、父の枕元でないところに自分の坐るところを探さうとして居るやうに見えた。

父はその男を眼で追ひ、絶えず、

「ホウ！」

と呼んだ。

男のところに、二日おきに大坂に殘して來たその妻から手紙が來た。彼の妻は一週間とは經たない中に子供を生んだらうと言ふ事を彼は低い聲で話した。

子供たちは台所で、自分自分の手に麻裏草履を穿かせて疊の上を這ひ廻つた。少しも音がしなかつた。」

穗介は何を待つて居るのであらう。――けれども、誰もそれを考へるものはなかつた。

或る日、二三人の仲買が來て、三千代の家に續いた二軒の借家を契約して行つた。

穗介が父の代りに仲買に立ち合つて居る間、父は大きな聲を出して何か言つた。取引が濟んで父の手に金が渡された時、父は、亢奮してその金で顏をおほうた。

「貴樣ら、俺が死んでも樂をせうと思ふな！借家は無くなつて了ふたぞ、家賃はもう上らぬぞ、」

父の聲は、穗介と母の胸を潛つて三千代の胸まで貫いた。父の、犬の骨のやうに細い首が青い蒲團の衿の中で顫へた。――父は、自分のおちる地獄を見たのだ。そして、その地獄から這ひ上らうとはしないで、生き殘るものを自分と一緒に引き摺り込まうとした。

實際、その企らみのためだけに、父はその命の殘りの蠟燭を使ひ果すやうに見えた。落ちくぼんでなほ大きく見えるその眼が、動かずに天井を見詰めて居るとき、床摺れの出來た父の背なかは、蒲團の下に隱した金の高さを確かめてでも居るやうに思へた。

父はうつ伏せになつて、きれぎれの遺書を書き、遠い近い忘れられた親類の人々を呼んだ。そして、自分の手で蒲團

の下をまさぐり、その金を與へた。

金を貰つた人々は、父の病室から椽側へ下り裏木戸を潜つた。その木戸が、人々のうしろでぱたりと閉ぢたとき、人人はその背中で歩き出したやうに急いで自分自分の家へ歸つて行つた。

三千代と若い母とは、それらの後向きになつて歸つて行く人々を見送つた。三千代も母も、父のその金を欲しがつては居ないこと、父の死んだのち、その日から自分の働きで暮しを立てるやうになつたとしても、少しも苦しくはないこと、そのことで、生き殘る者たちに苦しみを與へようとして居る父を、三千代たちがどんなにどんなに悲しく思つて居るかと言ふことを、如何したら父に知らせる事が出來よう。――

人々は次々に來た。最後に、昔父が遊んだと言ふ料亭の太つた女將が、同じ遊び友達の馬喰ふを連れて來た。

そうして、二百圓の金が殘つたとき、父は穗介を呼んで、

「貴樣に二百圓遣るぞ！これで直ぐ歸れ、俺が死んだとき、貴樣は來る事はいらん！」

と言つた。

この男は立つたり坐つたりした。優しい男であつたから、歸るとき母にその事を話した。――穗介は父の姉の子で、今は、大坂で麻裏草履の小さい卸し屋をやつて居るのであつた。――子供たちは、穗介の草履を誰も足に穿かなかつた。

誰でも、相手が少しも持つて居ない惡意を容易く引き出す事が出來るのだ。父が、貴樣ら、俺が死んで樂をせうと思ふな！と叫ぶとき、三千代と若い母とは、自分たちが父の死を待つて居たことを――それは夢にもない感じだつたのに、――感じた。そして、その感じはゴム鐵砲のやうに、もう一度父のこころに跳ね返り、そして、そのこころを打

ちのめした。

穣介が歸つたあとで、父は蒲團の上に腹這ひになり、半紙に賣り家の札を書いた。三千代と若い母とは、その前に坐つて居た。これと同じことが何處の世界にあらう。父は何の力で、その筆を握り紙を押へて居る事であらう。――氷のやうな冷たさが三人を釘づけにした。三千代は、こんな事がもう幾度も幾度もあつたと言ふ感じをうけた。

父の書いた賣り家の札は、みなの住んで居る家に貼られた。おもては晝でも閉ざしてあり、もの音もなかつたので、若しこの町の人でなくよその村の人たちが通つたなら、ほんたうにそのままの賣り家と思つた事であらう。――

午後三時ごろ、節の穴から細い棒になつて這入る日ざしが、玄關の障子をすつと撫でて消えた。おお、賣り家になつたぞ！なつたぞ！三千代は、前の木賃宿の親爺の眼が、その日ざしと一緒にこの穴から覗くのを感じた。その心地を誰が知らう。

父は大きな聲で、三千三百圓、三千三百圓と言つた。俺は、三千三百圓を人に遣つて了ふぞ、貴樣らには一厘も殘さぬぞと言つた。

その夜、父は死んだ。

（九）

父が死んだとき、母の里から、母の母、死んだ父よりも少し若い祖母がこの家へ來た。祖母は娘の婿を好いて居なかつたし、父は姑を嫌つて居たので、父の生きて居る間中、祖母はこの家に來た事がなかつたのだつた。

――おちこの敷居が開いた。おお、誰かが札を剝がして居る。少しも知らないままにあつた頃、額のうすい皮が

んと張て艶々して居るお婆さん、三千代はその祖母を初めて見た。そして、何か、膨らんだもの、のんびりしたもの樂しいものが、その後から運ばれて來るやうな、そんな人間の一人を、不思議な感じで見た。

父の屍室に、祖母は所在なく坐つて居た。そして、子供のやうな眼を上げて、黒いよこすじのあるランプを見上げた。

「まあ、何と言ふ暗いランプ、」

と言つた。

そして、自分で立つて、そのがつしりした手でほやを外し、椽側にしやがんでそれを磨いた。

軈て、透きとほるランプの光りが、あかあかと灯れた。ランプは明るく、父は死んだ。

翌朝、お通夜の人々が眠つて居る間に、三千代はひとり父の枕許へ來た。

高窓は白く、カナリヤの聲が聽えるのに、氣狂ひのやうな色の灯をしたランプが消えないで、ふと見ると、そのランプの灯が父の永い眠りを邪魔するやうに、父の硬い白髪は昨日より五分も伸び、針金のやうに立つて居た。

誰にも告げる事が出來なかつた。（完）

――一九二五、二、一六――

バクチ（博奕）

悦田喜和雄



1

私は十だつた。

　夕方私が歸つて來た時祖母は弟を脊負つて爐の傍に坐つてゐた。私は爐の傍に坐つて、爐の框に足を上げ、祖母の顏を見たが祖母は何にも云はなかつた。――怒つてゐるのかな？と思つて、なほ念を入れて見た。そして、

『かゝ（母）何處へ行つた？』と訊て見た。

『……』祖母は默つてゐた。

　母が這入つて來た。

『毎日〳〵ドバクチばかりうちやがつてコバテ（子供）に何食はすんな、何程働たつてきりがない。』母はかう怒鳴つた。そして又出て行つた。母と祖母とが喧嘩したな！と思つた。

『とゝ（父）何處へ行つた？』私は祖母が何にも云はないのでも一度訊てみた。

『………』祖母はやはり默つてゐた。

『よう！何處へ行つたんぜ？』私は又かう云つて、祖母の脊負つてゐる時夫を揺ぶつた。眠つてゐた時夫は泣き出した。

『せつかく眠つてゐたのに起しやがつた！』祖母はかう私を怒つて、立しなに私の頭を一つこついた。私は泣た。さう痛くはなかつたが、泣かずにはゐられなかつた。

祖母は私の泣てゐるのを知らぬ顔で脊の時夫をあやした。

『何のことた泣たりして！』母がかう怒鳴つて、恐い顔して爐の傍へ上つて來た。私は逃げようと思つたがもう遅かつた。母の手が來たので首を縮めると母は私をつきこかした。そして私のお尻をしきりにつめつた。私は痛くて泣きわめいた。

『まだ泣くか、こら／＼！』母は私が泣けば泣くほどよけいとつめつた。

『もうえゝわいな、親がバクチ打つのをこの子をいぢめたつて何になるぜ！もうえゝわへ！』祖母はかう云つた。私は祖母が私の方をもつて呉れたと思ふと一層泣けた。

『をゝ、なう、とゝ（父）が悪いんじや、とゝ（父）がバクチばつかり打て働かんのつてかゝ（母）は腹をたてゝ怒るんじや、なう！泣くな、泣くな！』私が奥の間の口へ行つて泣てゐると祖母が來てかう云つて私を爐の傍までつれて行つて呉れた。

「泣くな、泣くな！しやんとせへ！」祖母はかう云つて私の傍へ坐つた。

『お正月がもうそこへ來とんのにドバクチばかり打やがつてだうして年取る心算だらう。他家の人は行眼を丸して働きよるのに！恥かしくもないことか！』母は又かう怒鳴つた。

『しようのない奴じや！』祖母も誰に云ふともなく云つた。

『しようないつてお前が怒らずに誰が怒るぜ、お前の子でないかへ！お前がちつと云ふて聞かせたらえゝんじや！』

『何程云ふたつて云ふたつて、びきのつらへ水じやもんだうなるぜ、』

『行つて居る處がわかつてをるものなら巡査に云ふて行つてやるんじやけんど、ほんまに腹のたつ！』母はかう怒鳴ながら米を搗きだした。

母が搗物を済せてから夜飯を食つたが父は歸らなかつた。

2

『この節期の日に、ドバクチ打やがつてよいなりたれじや！家の者は何食ふて行くと思ふとんだらう？』翌晩も父は歸らないので母はかう怒鳴つた。

――かう云ふてゐる間にも父がどつさりお金を持つて歸つて來ればよいが？……私はいつかこの前に一度あつた時のやうに、父がお金を澤山持つて歸つて、祖母や母にもわけてやり、私にも五十錢を一つ呉れた時のやうなことが今のやうな時にも一度あればよいのに、と心で祈つた。

『そんなに怒つてばつかり居らいでも、神様にお燈明でも上げて、勝つて來るやうに祈つてやらんせ！』祖母はかう云つた。

『そんなことしたつて何のクソになるぜ！』

母は又かう怒鳴つた。そして、土間で搗物をする用意にコトコト音をさせてゐた。

『神様にお燈明上げたらとゝ(父)は勝つて來るかいの?』私は今の祖母の云つたことから、神様へお燈明をたげたら、きつと父が勝つて歸るやうな氣がしだしてから云つた。

『……』祖母は時夫が泣きかけたからか、立つて體を搖つて時夫をあやした。

『燈明上げたらとゝ(父)は勝つて來るけ?』私は祖母が『オヽ』と云つたら自分で燈明を上げやうと思つて又云つた。

『オヽ〳〵!』と祖母は云つた。

『お燈明上げたろ!』私は祖母がよそごとのやうに云つたので、何だか不安なやうな氣がしてから云つて祖母の顏を見た。

『……』祖母は私の顏を見てゐるのになぜか默つてゐた。

行燈に油をついで、その行燈から神棚の燈明かはらけに油をうつし、それに灯をうつして燈明を上げるのは祖母がよくやるので私はよく知つてゐた。

行燈はいつも私と祖母とが寢る間の奥の方の神棚の下にあることも知つてゐた。

私は立つて行燈を取に行つた。暗くて恐いので其間の入口の障子を開くだけ開けた。それでもまだ奥の方は暗かつた。しかし、行燈のある處はわかつて居り、行燈は白いので薄く見えてゐた。

奥の方の暗い處に何か恐いものが隱れてゐさうな氣がするので、足に力を入れて、トン〳〵足音を高くさせて行燈の傍へ行つた。行燈の傍へ行つて立つと足音が消えて了つて怖くなつた。

『ばゞあ!(祖母)』と私は大きな聲で云つた。

『なんなら？』祖母は返事をしたが私は聞かなかつたので黙つてゐた。

行燈は戸がないので背を摑んで持つのに工合はよかつたが私より背が高いので後から抱てやつと持てた。

『やつとさく／＼！』私は怖くて行燈を抱てから云つて歩た。行燈の臺の箱がコツコツ足にあたつて痛いので、明るい處へ來て休んで、下の方を握つて立たうとすると行燈がかたむいて、中の油かわらけが飛び出して了つて、入口の閾にあたつて大きな音がした。

『だうしたんなそれは？』祖母が爐の方でから云つた。

——こりや怒られる！と思ふと私は怖かつた。そこらあたり處々かわらけの油が飛び出して光つてゐるのを見ると胸がドキ／＼した。

——かわらけは壞れはしなかつたか知らん？と思つて見てゐると祖母が來た。

『それがどうなりや、どんなにしよつたんなまア！』と祖母は小聲で云つた。

『………』私は默つてゐた。

『怒られるぞこりや！』祖母はやはり小聲で云つてかわらけを拾つて行燈に入れて呉れた。かわらけが壞れてゐなかつたので私はホツとした。そしてぼんやりして、祖母が袂から手拭のやうなものを出して光つてゐる油を拭つてゐるのを見てゐた。それから祖母は油德利や燈心を持つて來て、行燈にうまく灯をつけて呉れた。

私はすぐ油の飛んだ跡を見た。しかし、綺麗にもと通りなつてゐたので安心した。

祖母が神棚から下ろすかわらけを取ついだりして手傳つた。祖母は燈明を二つ上げるとよして了つて、」

『もうこれでえゝ！』と云つた。

私は神棚の下に坐つて手を拍つた。

『何て云ふて拜んだらえゝんぜ？』私は傍に立つて神棚の方を見て、手を合せてゐる祖母にかう云つた。

祖母は默つてゐた。

『とゝ（父）がバクチに勝つて來るやうに！』私は手を合せてかう云つた。しかし、まだ外にもつとよい云ひ方があるやうな氣がした。――とゝ（父）がバクチに勝つてお金をうんと持つて歸りますやうに！私は又心でかう云つてゐたやはりそれよりまだよい云ひ方を祖母は知つてゐるやうな氣がした。

『なんて云ふたらえゝんぜ？』私は又祖母にせがんだ。

『をゝ、もうえゝは、もうえゝは！』祖母はかう云つて行燈の灯を消して、行燈をいつも置く方へ持つて行つた

『とゝ（父）がバクチに勝つて來ますやうに！』私は又かう云つて手を拍つてから立つて祖母と一緒にそこを出た。

私は爐の間へ行つて坐つた。そしてすぐいつものやうに爐の框に兩足を上げてあぶつた。すぐ傍へ祖母も坐つた。

母はトン／＼搗物をしてゐた。

私は父が勝つて歸ればよいがと父のことばかり考へてゐた。今にもお金をどつさり持つて歸るやうな氣もしたり、又敗けてしまつてコツソリといつ歸つたか音もしないやうに歸ることも思つた。そして、母に怒られて默つてゐる父を考へたりした。

――勝つて歸ればよいが、敗けて來るかも知れない、母と喧嘩する……

『バヾ（祖母）神樣に燈明上げたのつてとゝ（父）勝つて來るかいの？』私は淋びしいやうな氣になつてから訊た。

『……』祖母は默つてゐた。

『え、?バヽ(祖母)勝つて來るけ?』私は泣きたくなつて祖母の膝をたゝひて顏を覗た。

『オ、〱!』祖母はどうでもよいと云つたやうな顏をしてよそを見て云つた。私は一層泣きたくなつた。爐の中にたてゝある火箸をとつて、爐の框をたゝいた。壞れるほどたゝきたくなつたのでしきりにたゝいた。

『何しよんなそれは!』祖母はかう云つて私の手を掴んで火箸を取らうとした。

『いやん、いやん!』私はかう云つて左の手に持ちかえた。

祖母は脊の時夫が泣き出したのですぐ手を引て時夫をあやした。

私は泣きたいやうで泣けないので又たゝきだした。

『何しよんそれは、』祖母がかう云つたかと思ふと急に大きな手が來て私の持つた火箸をひつたくつて行つた。

私は手が痛かつたので大きな聲を出して泣た。

『阿呆、泣味噌!』祖母は私を怒つて時夫をあやした。

少しすると私は泣けなくなつて眠くなつて來た。

『飯たべんけ!』私はかう云つて祖母に凭れて行つた。

『待つとれ、かゝ(母)が搗物が濟んだら食べるんじや!』今度は祖母はやさしく云つた。

私は祖母の膝に頭を依せて眼をつむつてゐた。と母が怒鳴つたやうなのが聞えて來た。私は頭を上げた。眠つてゐたので眼が十分開けられなかつたが父が來て坐つたのを見た。

『この節期の日にドバクチばかり打つて、よその人はどんなに働いて居るぞ!』母がかう怒鳴つたのがはつきり聞えた。父の顏は怒つて見えた。しかし、だん〱私の眼がよく見えるやうになると、父は怒つてゐるやうでもなかつた。

淋びしさうに俯向てゐた。――父が怒らなければよいが、と思つた。父と母が喧嘩することを思ふと怖かつた。

『ド阿呆つてあるもんじや、お前が遊んでばつかりゐて、誰が働て持を養ふぜ、阿呆らしい！年貢米も納めにやたらんし、お金も儲けて肥料代やその外の拂ひもせにやならんのに！』母は又怒鳴つた。――もう怒らなくてもよいのに、と私は思つた。

母は搗物をしながら何かブツ〳〵云つてゐたがはつきり聞えなかつた。父が聞かねばよいがと私は思つた。

しばらくして。

『飯たべたか？』と父は云つた。

『……』祖母は默つてゐた。私も私に云つたやうでなかつたから默つてゐた。

『飯たべたのか常松？』今度は私に訊た。

私は頭を振つて見せた。

『さき食つたろか、腹が減つてたまらぬ！』父はかう云つた。

『待つとれ、遊びよつてさき食はひでも！』祖母はかう父を怒りつけた。

『今朝まんじゆ十ほど食つたきりで何にも食はぬのじや！』父はかう云つて立つて戸棚の方へ行つた。

父が飯櫃を持つて爐の傍へ來ようとする處へ丁度搗物を濟せた母が來た。

『なんのことぞへそれは、遊びよつて飯が食えるかいた、食べいでえゝ、食はさぬ食はさぬ！』母はかう怒鳴つた。

『そんなに云ふな、俺腹が減つてたまらぬのじや！』父はニヤ〳〵笑ひながら云つた。

『いや〳〵、食はさぬ〳〵、遊んでばつかり居て飯が食えるかへ！ちつと食はずにゐたら思ひ知るんじや！』母は又怒

鳴つた。そして、父の持つてゐる飯櫃を取らうとして父の方へ手を出して行つた。

『ナニ！俺に食はせない物なら！』かう云つた父の眼は光つた。私は慄えた。

父は飯櫃をそこへ投つけた。そして、母を蹴飛した。母はよろめいて行つてすぐ後の柱にあたつた。飯櫃は爐の框にあたつてさかしまにふさつた。

『罰あたりが食ひつぶし奴！』母は涙を流がしてかう云つた。

父は血相かえて何處かへ行つて了つた。

『何のことしやがるんなこれは、家つぶり奴が！』祖母も泣きながらかう云つた。私は怖ろしかつた。どんなになるのかと思つた。

『もう働かぬ〳〵、明日から寢てばつかりゐたる！』母は聲を出して泣て了つた。

『しやうのない罰あたりじや！』祖母は又かう云つた。

私も何だか悲しくなつて來た。聲は出さなかつたが涙が止めどもなく流れ出た。

『どれ、時夫もらふはへ！』母は祖母の後へ來て立つたまゝかう云つた。祖母は坐つたまゝ脊負つた帶を解た。母は祖母に脊負はれてゐる時夫をひごのまゝとつて奥と云つてゐる母の寢間へ這入つた。

『罰あたりつてしようのない奴じや！』祖母はかう云つて立つて行つてさかしまになつてゐたお櫃を取上げた。

お櫃の形に丸くなつた飯は爐の中に殘つた。

『こりや洗ふて雜炊にでもせにや食えぬ！』祖母はかう云つて爐の中の飯をお櫃の中にすくひこんだ。そして、新しいしやくしを持つて來て、大黒柱の傍の洋燈の下で何かしだした。

私は眠むくなつて、爐の框へ足を上げたまゝ、ごろりと仰向に寢た、しかし、寢て見ると眠れなかつた。腕を枕にして横寢になつて洋燈の下でお櫃の中をいぢつてゐる祖母を見てゐた。

『飯食べんかへ、一杯づゝ位ならこのまゝでも食べられさうなわェ！食べんかへ！』祖母はかう云つた。

母は返事をしなかつた。私は默つて、爐の框へ上げた足を揺ぶつて眼より高いその足の動くのを見てゐた。

『明の朝雑炊にでも炊きなほさないかん、食べんかへ、食べんかへ！』祖母は爐の傍に來てかう云つた。

『……』母は返事をしなかつた。

私は起きた。

『とゝ(父)の罰あたりがなう、常松は大きくなつたら偉い者になれよ、とゝ(父)の眞似するなよ！』祖母は私が起きると、私の顔をキロキロ見てから云つた。

『……』私は返事はしなかつた。うんと腹が減つてゐたので飯を一杯でも食ひたいと思つたがなんとなくそれが云へなかつた。

祖母は戸棚から膳箱を出した。私と祖母とは同じ膳箱であつた。

祖母は私の茶碗に飯を盛つて、其上へたくあんを二片置てその上から茶をかけて私の方へ出して與れた。私は默つて祖母の出して與れた茶碗をとつて、たくあんをかみながら飯をザブ／＼かき込んだ。そして食つて了ふと又出した。

祖母は又前の通りにして與れた。一口食つたらへんな臭ひがした。二口目はのどを越かねた。灰の臭と麥の冷飯の臭がこんがらがつて口の中は變な臭で一杯だつた。

『もういや！』私はかう云つて箸と一緒に飯の入つた茶碗を祖母の方へ出した。

『どうしたんな？』祖母はかう云つて、私の出した箸と茶碗を取つて茶碗の飯を見て見た。そして、ザブ〳〵かき込んで了つた。

私はそこへごろりと寢た。そして祖母の口のもぐ〳〵動くのを見てゐた。

ふと私は誰かに頭を毆かれたやうな氣がして眠つてゐたことを知つた。

『常松、常松、小便して來て寢んか！』と祖母が云つた。そして、私を抱くやうにして起して呉れた。

私は祖母の後について戸外へ出た。そして祖母をそこへ立たせておいて戸口の小便處へ小便をした。寒いのですぐ家の中へ走りこんだ。そして寢間へ行つた。と私の寢床の傍に床をとつて誰か寢てゐた。それは父らしかつたので安心して朝ぬけ出したまゝの寢床へもぐりこんだ。寒いので小さくなつた。早く祖母が來ればよいのに、と思つて待つてゐた。

『かゝ（母）よ、飯たべんせよ、一杯や二杯は食べられぬことないわへ。』と祖母が云つてゐた。それが布團の中へもぐりこんでゐるので私には遠い處で云つてゐるやうに聞えて來た。

『常松よ　飯たべたか？』父がかう云つた。それも小さい聲で聞えて來た。

『………』私は默つてゐた。なぜか返事をするのがいやだつた。

『早眠入つたのか、子供と云ふて！』父がかう云つたのも聞えた。

やがて祖母が寢床の中へ這入つて來た。足に觸る祖母の着物は濡れてゐるやうに冷たかつた。

祖母は默つて私の着物の皺になつてまくれ上つてゐるのを足の方へ延して呉れたり枕をしかへて呉れたりした。そして、私の方へお尻向けになつた。

『今夜は寒むいぞよ！』父が祖母に云ふやうに云つた。

『……』祖母は返事をしなかつた。

『今夜は隨分寒い！』父は又云つた。

『……』祖母はやはり默つてゐた。

私は皆からのけ者にせられた父が可哀相に思つた。なぜ祖母は返事をしないのか知ら？ 早眠入つて了つたのか知ら？ と思つて祖母の腰のあたりを踏んでみた。祖母の手は私の足を摑んだ。そして私の足を延すやうにした。

『あゝ！ 寒むい〳〵、こりや寒むくて眠られぬ あゝ〳〵！』父は又から一人ごとのやうに云つた。

私は父に何か云つてやりたかつたがなぜか云へなかつた。祖母が何か云つてやるとよいと思つたが祖母も默つてゐた。

父は眠られぬらしかつた。折々寢返をしてゐた。私もなぜか眠れなかつた。

3

ふと氣がつくと頭もとの障子が明るくなつてゐた。爐がどん〳〵燃てゐるらしかつた。爐の方の明るい障子がチロチロ慄へてゐた。――母は駄賃擔に行くのだな、と私は思つた。――起きて行つて爐であたるか？と思つたがまだ祖母も寢てゐるので又布團の中へ頭をひつこめた。

二度目に―私が眼を醒した時は祖母はゐなかつた。布團の中から頭を出すとあたりは明るかつた。父も起きて行つてゐなかつた。――起きよう？と思つたが寒むいので又頭をひつこめた。

『常松よ、起きて來いよ、飯たべんか！』と祖母が呼んだ。

『エヽ！』私は頭を出して返事をした。しかし寒むかつたので又頭をひつこめた。

――一飛びに飛び出してやらう、と思つて布團の中で兎のやうな形にお尻立をした。

『早よう起きて來い、一緒に食べんか！』祖母は又云つた。

私は頭の傍へ兩手を置て手と足に同時に力を入れて兎のやうに飛び出した。

爐の傍へ行くと私はすぐ坐つて爐の框へ足を上げた。

『小便して來んのか、早よ走つて行つて小便して、ついでに顏も洗ふて來い、毎日顏も洗はずに學校へ行くんじや！』

と祖母は私が坐るとすぐ顏をしかめて云つた。

私は祖母から云はれなくても小便がしたくて身體を搖ぶつてゐた。しかし寒いので爐の傍を離れるのはいやだつた。少しすると父が這入つて來て私の前に坐つた。

『寒むになつたもんじや！』父はかう云つて手をあぶつた。

『阿呆が遊んでドバクチばかり打つて、まだおまけ腹を立たりして、ちつと食はずに居たら思ひ知るんじや！』祖母は父を睨んで云つた。私は父が又怒るかと思ふと怖かつた。しかし父は怒りはしなかつた。

祖母は鍋の雜炊を大きな皿に盛つて父の方へ出した。

私は立つて小便に出た。

4

爐へ飯櫃を投げ込んでから父はバクチにも出て行かなかつた。年貢米の用意だと云つて俵を編だり、繩をなつたりしてゐた。

――もうバクチをやめたのかな？と私は思つた。やめたとなると嬉しいやうで、又可哀相に思つた

しかし、五六日たつた夕方私が歸ると又母が怒鳴つてゐた。――――又か！と思つていや／＼私は家に這入つた。

『去年も肥料代に拂ふのに置てあつたのを盗み出してみな負けて了つて困つたのに、又こりずに盗んで行きやがつた。この二十五日までに拂はにやならんのに！』私が怖々爐の傍へ行くと母はかう怒鳴つて戸棚を探してゐた。

祖母はいつものやうに時夫を背負つて坐つてゐた。

『子供じやなし、ちつと考へもありさうなもんじや！』母は又かう怒鳴つた。

私は去年のこの頃のことを思ひ出した。母が『それは年貢に親方（地主）へ納めにやならん米じや！』つて云つて泣てゐたことや、肥料問屋の人だと云ふ頭の禿た男と若い女の人が米の入つた俵を二人でかついで行つてゐる後から、母が泣きながら追つかけて何か云つてゐたことを思ひ出した。

『何程働たつて働きがいがない、今年こそやかましいこと云はれぬうちに肥料代を拂ふと思ふて、毎朝他の仕事の邪魔にならないやうに駄賃擔に行つて拾圓あまり溜めてゐたのに！』母はかう云つて涙を拭つた。私も悲しくなつて來た。

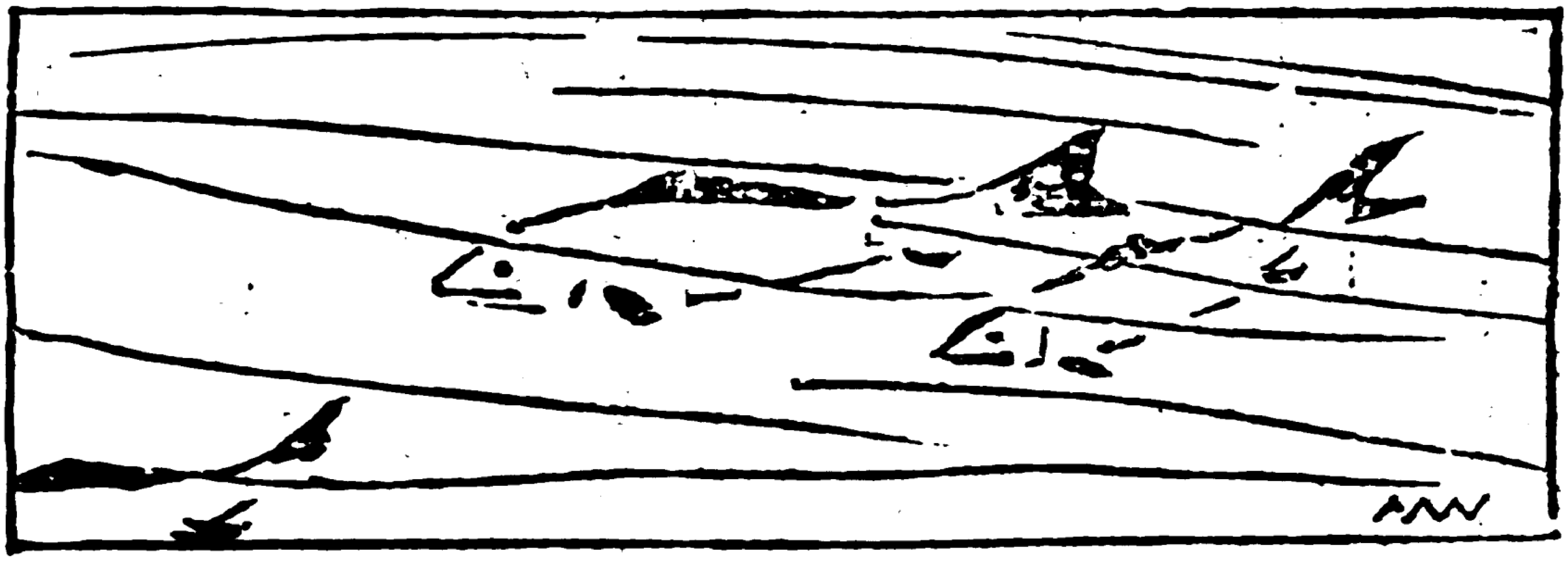
――だらうぞとゝ（父）がバクチに勝つて來るやうに！と私は心の内で祈つた。

『又あの肥料問屋のチヤビンに怒鳴ちらされて米をとられるんじや、むごい目にあわされる！』と云つて母は聲を出して泣き出した。

縁談窶（續篇）　里見弴

筆者努力して稿を續けたれど本號締切までに完結に至らざるため、已むなく七月號紙上にて全部發表することとせり。此旨讀者の御諒恕を乞ふ

（編者誌す）



寂しければ

——第五話——

久保田万太郎

一

佐原で干鰯問屋をしてゐる義理の仲の兄が危篤といふ電話で、伯父は、急にそつちへ行くことになりました。——四五日はかへれないものと見て、いろ〳〵打合せて貰くこともあり　とも〳〵わたしも兩國まで送つて行きました。——生憎一時何分といふ銚子行の出たあとで、つぎの、二時十五分の成田行の出るまで、ざつと一時間、停車場の二階の西洋料理屋で茶を飲んで待ちました。

毎日、伯父と、一つうちで顔は合せてゐるものゝ、兩方が出がちで、伯父の留守にゐるときにはわたしがゐず、わたしのゐるときには伯父がゐず。——ついしてさういふかたちになるきゝ、三十分とめつたに、二人つきりで話すといふことがありません。——茶を飲みながら話す。——さういふことは、ですから、行きがかりとはいへ年代記にのせてもいゝことで……

『何時間で行けます　佐原まで？』

一わたり用談のすんだあとでわたしはいひました。

『成田まで二時間。——あとざつと二時間だ。』

伯父は「國華」に火をつけながらこたへました。

『と、三時、四時、五時。——日一杯ですね。』

『だが、成田の乗換で一時間。——悪くするともつと待たされる。——向うへ着くのはどうしたつて六時すぎだ。』

『直行でないと、なるほどさういふ不都合があるんですね？』

『さうなんだ。』

伯父はうなづいて

『が、どのみちもう間に合やアしないんだ。』

『でも、まだ、危篤といふんですから……』

『今朝うつた電報の危篤だ。——いけないにもうきまつてゐる。』

『…………』

『年に不足はない。——だからあきらめはつく……』

『と……？』

『六十九。——俺より五つうへだ。』

『ごくの丈夫の方のやうに聞いてゐましたが……？』

『丈夫だつた。――若いときからこれといふ病煩ひをしたことがなかつた。』

『…………』

『それに臆病なほどの養生家で、酒は飲ます、烟草は喫ます。――朝は夏冬ともに四時に起きて、夜は、十時といふと、どんなことがあつても寢る。――たまに東京へ出て來たときでもそのとほりやつてゐた。』

ふと、伯父は、寂しくわらつて

『だから、よく、お前のやうに年をとつてさう體を粗末にしたら仕樣がない。――好き勝手なことをしてゐたらいのちを短くする。――自分はそれでいゝだらうが、それでは、あとに殘るものが可哀想だ。――酒をやめろ、悪いことはいはないから酒をやめろ。――きまりで俺にいつも意見した。』

『…………』

『だが、兄貴、いまさらやめたところでいまゝでの罪ほろぼしが出來るわけでもない。――どうせ俺のはうがさきへ死ぬんだ。――だから、まア、あとは何分たのむ、いゝやうにやつてくれ。――いはれると、俺は、いつもわらつてさういつた。――と、苦い顔をしていつもそれつきり默つた。――その顔が眼さきにまだ殘つてゐる……』

『一たい、どこが悪くつて今度……?』

『そいつが分らないんだ。――たゞ十日ばかりまへ珍しくよこした無沙汰のはがきに、どうしたのか今年はいつにも覺えのない風邪をひいて弱つてゐる。幾らきかない氣でもやつぱり年だ。――さういつたことが書いてあつた。――酷く弱い音をふくとわらつたんだが、大きにその風邪でもこじらしたんぢやアないかと思つてゐる。』

『平生病みつけない人は、やつぱり、幾分無理をするでせうから……』

『だからよ……』

伯父はまたうなづいて

『それがあるから……』

『…………』

『だが、意見をした奴がされた奴よりさきへ死ぬ。――こんな分らねえ奴はないが、さだまる約束とすればそれも、まア、仕方がない。』

『それは、もう……』

『が、お前のまへだが……』

伯父はかまはずわたしの顔をみて

『俺が最後まで。――兄弟のだれよりあとまで殘らうとは思はなかつたよ。』

しみ〴〵さう嘆息するやうに伯父はいひました。

だれよりとさういふなかにはわたしの親どものことも入つてゐます。――親どもの亡つたとき。――來年がちやうど十三年になりますが。――誰よりも一番力を落したのはこの伯父でした。

間もなく時間が來て階下へ下りました。――が、いつ來ても、この停車場、これでも東京の、都會の停車場かと思はれるくらゐ、寂しく、古風に、ちま〳〵としてゐます。――待合室の感じにも、構内の光景にも、お客の身裝にも、新橋や上野（東京驛はいふまでもありません）の停車場にみられるやうな、あかるい、陽氣な、思ひ上つたものは樂にしたくもみられません。――駒を下げた伯父のあとから、ガランとした、うそのやうにしづかな改札口をわたしも出ま

した。

氣がつくと、先刻まで、何のこともなく濃くうるんでゐた日のいろに、ぼやけた、心細いかげがいつかさしてゐました。

『何だか可笑しな天氣になりました。』

伯父の乘つた列車のそとに立つてわたしはいひました。――車室は、勿論、がら空きでした。

『惡くすると今夜ぐらゐふるかも知れない。』

窓から、伯父は、空のはうへ眼をやりました。

『さア、この鹽梅だと……』

『ふるなら降つたはうがいゝ。――天氣のあんまりつゞくのは好くない……』

『いつでしたかしら、このまへ降つたのは？』

『もうよつぽどになる……』

伯父のさういふ途端、發車の信號が鳴りはじめました。

『たのむよ、ちやア……』

『えゝ。』

わたしはこたへて、

『ちやア、まア、行つてゐらつしやいまし……』

曇りかけた空の下をしづかに列車は動き出しました。わたしはそれを見送つて立ちました。　ぢきに、　わたし

は、長いプラットフオームをもと來たはうへ下りました。

停車場を出て石炭殼を敷いたみちを河岸のはうへあるきました。――もう一度店へかへるには少しチクです。――といつてうちへかへるのには早すぎる。――わたしのやうな性來のものは、どうもときぐ〳〵、さういふ中途半端な、白けた、さびしい心もちに理由もなく落込むのでこまります。――何でもないことに、つまり、惡くふんぎりのつかないのがいけないのだと思ひますが……

「さうだ、久しぶりに蒸汽へのつてやれ……」

河岸へ出たところで、ふと思ひついて、發電所の横の細い露路を入りました。

「吾妻橋。」

さういつて、うす暗い、切符賣場の窓口へわたしはこまかい金を出しました。――蟀谷に即効紙を貼つた四十がらみの内儀さんが、行火のうへに講談本を擴げたなり、無愛想に切符と釣錢をよこしました。

以前のとほりです。――十年まへ十五年まへのまゝの古い光景です。

棧橋の下の、暗い、寒い色をしづめた水の隈。――洋服にコール天の鼻緒の板草履を穿いた、これも以前ながらの恰好の切符きりの爺さんが、ブリキの落しの火鉢のそばで鉈豆のきせるに刻みをつめながら、大きな鞄をわきに引きつけたインバネスの男と所在なさゝうに話してゐる外には、發着所の、水を撒いたうへにわづか殘つた靑容のかげがどこからかふかく落ちてゐるだけ、乘客らしいものはわたしの外どこにも見えませんでした。

「此奴はいけたい。――出たばかりか……」

その出たばかりが永代行ならいゝが、でないと、十分と十五分はこれは待たされる。――が、まア、急ぐ旅でないか

らいゝ。――落附いてわたしはこしかけに腰を下しました。――空がさはつて日の目が全く消えた河の上。――向河岸は、遠く、冷めたく、といふよりも、懶く、冴えないさまに澱んでゐます。――たま〳〵、そこを、手のとゞくほどのところを、兩國のはうへ達磨ぶねが一つしづかに下つて行きました。――そのうへに、浦一とちやうど同じくらゐの子供の親たちと一しよに何の不足もなささうに乘つてゐるのがふと私の眼にとまりました。――そのふな脚の曳く水の尾が、しみ〴〵短日の心細さをみせて、鈍く、未練に、消え〴〵にいつまでも痕を殘しました。

『よこあみ。――横網あがり……』

切符きりの爺さんは、立つて、無精つたらしく怒鳴りました。

着いたのは、都合よく、吾妻ばし行でした。――鼻緒屋の職人らしい大きな包みを背負つた男と、結び髮の、體でも惡くしてうちへかへつてゐるといつたかたちの藝妓らしい若い女と、そのつれとみえる五十恰好の、人のいたつて好さうなとしよりと、學校がへりの、鞄をかけ草履ぶくろを下げた男の子と、さうしたお客の、でも四五人、つゞいてばら〳〵に下りたあとへわたしは乘りました。

乘つて、さて、どこへ腰をかけたものかと一わたりなかをみ廻しました。天鵞絨のすり切れたこしかけはどこでも好きに空いてゐました。――出端のいゝところと思つて手近に腰を下ろし、みるともなくまへをみると、一つ置いたさきのこしかけに、み覺えのある肩つきの人が、窓から餘念なく水のうへをながめてゐました。――紛れなくそれは五秋さんでした。

『寺西さん……』

いつか、あの、根岸で逢つたときとは反對に、今日はわたしのはうから聲をかけました。

『…………？』

けゞんらしく五秋さんはふり返りました。——が、顔を見ると、

『あゝ、これは……』

愛想よくすぐに笑つて

『不思議なところでこれはお目にかゝります。』

うしろで、そのとき、切符きりの爺さんと話してゐたインバネスの男が、鞄をあけて、口上をいひながらお約束の古雑誌をうりはじめました。——わたしは五秋さんのそばに席をうつしました。

『どちらへおいでゝ…………？』

わたしのはうからいふはずの臺詞を、五秋さんに先を越されました。

『一寸兩國まで……』

わたしはこたへました。

『伯父が、急に佐原までまゐりましたので……』

『あゝ、お見送りに？』

『へえ。』

『あゝそれで……』

五秋さんに得心の行つたやうに

『それでこゝから……？』

『久しく、この、蒸汽といふ奴に乘りませんので……』

わたしは笑つて

『どちらのおかへりでございます、あなたは？』

『へえ、わたくしはちよつと深川まで……』

『深川？』

『へえ。』

と、いつたかと思ふと急に

『それよりも、いつぞやは、途中で大へんに失禮いたしました。』

五秋さんはいんぎんにあたまを下げました。

『いゝえ、こちらこそ……』

わたしも釣りこまれて

『その後、一度、お目にかゝつたのを機會に、御無沙汰のおわびながら小梅まで出ようと存じながら、つい……』

『かへりまして、あの日……』

かぶせて五秋さんは

『お目にかゝつたことを、師匠に、逐一申し聞けました。――喜びますまいことか、師匠……』

『…………』

『はじめは、師匠のことでございます、何をいつてゐるかぐらゐでほんたうにいたしてくれませんでした。――が、全

くの、カケ値のないお話といふことが分ると、今度は、どこにいまおいでだ、何をしておいでだ、どんな御様子だ。――それからそれ師匠のはうから根掘り葉掘り。――いまおいでのおところをうかゞひ損つたことで、そんなことでどうする、氣のきかないにもほどがある。――すつかりあとで失敗りました。』

『いゝえ、此方にいたすと……』

わたしは引取つて、

『あの日、久しぶりに、宗匠のことをいろ〲うかゞつて、さすがにわたくし昔が懷しくなりました。――で、いま申したとほり、お目にかゝつたのを機會にそのうちおたづねしてみたい。――ふつと、さう、ありやうは思ひつきましたので……』

『おついでもおありでございますまいが、もしあの邊にお越しでございましたら、一度どうぞ、お立寄下さいまし。――と、さう申上げたら　少し落附いたらそのうち必ず行く。――雨紅さんはさう被仰つた。――如才なく、わたくし、師匠にそれは申しました。』

五秋さんはわらつて

『と、かへつてそれが仇になりました。――よけいに師匠の癇をたかぶらせました。――なぜ、もつとはつきり、來ていたゞくやうにしなかつた。――無理にもおつれ申さなかつた。――お前だけお目にかゝればそれでいゝのか……』

『…………』

『愚痴でございます。――師匠の愚痴でございます。』

『で、いかゞです。喘息のはうは？』

『有難うございます。——仕合と、まだ、今年はそれほどにきざしてまゐりません。——と申して、決して安心はいたせませんが……』

『とめどなく、毎日、ふつてばかりゐると思へば、今度はまた、天氣ばかりつゞく。——わるく片(かた)つ方(ぽう)づけます。——いゝ陽氣とは申せません。』

『さうでございます。——何だか、また、さう申せばしぐれてまゐつたやうでございますが……』

五秋さんは窓の外をみて

『これで今度ふるとなりましたら、めつきりまた、お寒くなりませう。』

『それはもう必ず……』

とも〳〵わたしも水のうへに眼をやりました。——汐は上げてゐました。ふくれた波の末に高等工業の裏の水門のさむ〳〵と冬ざれてゐるのが遠くみえました。……

『——五冊揃ひまして二十錢。——しかし船内は大勉强。——特別お添へものといたしまして今日は……』

インバネスは車輪に一人で饒舌(しゃべ)りました。——が、乘合(のりあひ)は、どこを風がふくといふさまをよそを向いてだれも相手になりませんでした。

『おつひでもございましたら、などとはもう申しません。』

五秋さんは話をもとにもどしました。

『改めてわたくしからお願ひいたします。——お手すきのをり、いつでも結構でございます。一度師匠のところをおた

づね下さいませんでせうか?』

『いえ、さう被仰られると……』

わたしはわらつて

『うかゞはないといふのは、こちらのそも〴〵の勝手すぎ、わがまゝすぎ。――さう被仰られると何と御返事いたしていゝか分りません。』

『いえ、それは……』

『それには、また、うかゞひそびれて閾も實は高くなつてをります。』

『飛んだこと……』

遮ぎるやうに五秋さんはいひました。

『今日お目にかゝつたといふのは、わたくしにいたすと勿怪のもう幸ひで。――實は、わたくし、一度茅場町のお店のはうへそれをお願ひに出ようとさへ思つたのでございます。』

『おそれ入ります。』

戯談にしてわたしのわらふのを

『いえ、全く……』

五秋さんはまがほで

『御迷惑と存じて、それはしかし、さし控へましたが……』

『…………』

『お縋りいたします。――ほんたうに、わたくし、おすがりいたします。』

飽くまで五秋さんは熱心に

『重ねて、また、かうしてお目にかゝれたのを御縁のあるものと存じて、わたくし、御無理を申し上げます。――師匠の、あの、いまの寂しい料簡を思ひやつて頂ける方はあなたを措いて外にございません。』

『…………』

『いつぞやもくどく申し上げました。――拈華さんの話さへ出來てをりますれば、師匠も、また、あゝは弱らなかつたらうと存じます。』

『…………』

『このごろは何をよんでも、めつきりそれに張りがなくなりました。』

『拈華さんですが……』

わたしはふつといひました。

『ひよんなところで、わたくし、拈華さんのことをこのごろ耳に入れました。』

『…………？』

五秋さんは乘出すやうに

『それはどちらで……？』

そのとき汽船は厩橋に着きました。――商賣にならなかつたインバネスは、そんなことはもう忘れつこだ。――さういつた風に、首を下げて、平氣で下りて行きました。――つゞいて、どや／＼と、四五人の客が下りて行きました。

……すぐ、また船は發着所を離れました。

『どちらで、しかし……?』

もう一度五秋さんはいひました。

『仲見世の裏にしがらきといふ腰かけの料理屋がございます。』

『しがらき?』

『御存じですか?』

『いゝえ……』

『ごくのさつかけない店ですが、氣の置けないのと、一寸した、筋のとほつたものを喰べさせるのとで、界隈の、きまつた顔の客が始終寄合をつけてをります。——わたくし、古い馴染で、をり／＼油をうりにまゐります。』

『へえ。』

『拈華さん、このごろそこへおみえになります。』

『と?』

五秋さんはさきをくぐつて

『あなた、お逢ひで……?』

『いゝえ、それが。——かけ違つて、まだ、一度もお目にかゝりません。』

『…………』

『生憎、いつも、拈華さんのみえたあとへ／＼とまはる順になりましてね。——昨日みえた、一昨日みえたといふとこ

ろへばかり行合せます。』

『どこにいまおいでか御存じでございませうか？』

『拈華さんでございますか？』

『へえ。』

『割下水のはうにおいでのやうに聞きました。』

『割下水？――あの、本所の……？』

『さうのやうに……』

『割下水と申せば、まア、本所にきまつてをりますが……』

五秋さんはさびしく笑つて

『さうでございますか。――ちつともそれは。――そんな近間においでとは夢にも存じませんでした。』

『以前は……？』

『大阪からかへつてみえて、しばらく、芝のはうにおいでゝした。――それつきりお消息がなくなりました。』

『…………』

『で、何でございますか、お宅のはうとは……？』

『まるで往来をなさらないらしい塩梅です。』

『と、やはり……』

『まア……』

『仲の町の方と、では……?』

『勿論、それは御一緒です。』

『枯華さんのお身になれば、しかし……』

五秋さんはいつそ歎息するやうに

『それに越すお仕合はないわけですが……』

『……と、誰しもさう考へます。』

わたしはいひました。

『天上の榮華。——わたくしにいたしてもさう考へました。』

『…………』

『しかし、御當人になると、よそめには分らない御苦勞がいろ〳〵そこにおありのやうです。』

『それは、まア、無理をしておいでになれば御不自由も……』

『いえ、さういつた御話でなく……』

『…………?』

背へないやうに五秋さんはわたしのほうをみました。

『失禮ですか、寺西さん……』

ふつとさう思ひついたまゝ

『どちらへかお廻りで入らしやいますか、これから?』

わたしはいひました。

『いえ、眞つ直に宅へかへります。』

『お急ぎで入らつしやいますか？』

『いえ、格別……』

『でしたら、いかがです？——一時間ほどわたくしにお附合下さいませんか？』

『…………』

『折角、また、かうしてお目にかゝつたのを、このまゝお分れいたすのも殘惜しいやうに思ひます。——もう少しお話もうかゞひたいと思ひます。』

『へえ。』

『お手間はとらせません。——ほんたうの一時間ほど……』

『しかし……』

『うまくまゐれば拮蘖さんにお逢はせいたすことが出來るかも知れません。——何だか、わたくし、さういふ表裏になるやうな氣もいたします。』

わたしはわらつて

『御迷惑でせうが、寺西さん。——御承知下さいませんか？』

……茶花はちやうど駒形のあたりにさしかゝつてゐました。——こたへ／＼したあたりの暗い空氣のなかに河岸の駒形堂の白い壁のいろが遠くほのかに沈んでゐました。

……瓊の家との喧嘩の一條から、兼治と、東京の果から果を酒浸しにあるいたこと。――その後腐れがいつまでも尾を曳いて、うちを外に、豊島屋さんさへみ兼ねるほどの「御亂行」に拈華さんの目を重ねてゐること。――要は仲の町の人のために拈華さんがどんなに苦しんでゐるかといふことを、みち〳〵五秋さんにわたしは手短に話しました。――五秋さんは、わたしに耳をあづけながら、しづかに目をふせてあるきました。

わたしはさういひました。

『どこまでも自分を紛らさうとなさる。――それは分ります。――それはわたくしにも分ります。』

『ことに、育ちのいゝ、生一本な拈華さんのやうな方にすれば、これ……』

『…………』

五秋さんは默つてうなづきました。

『が、しかし……』

わたしは言葉をつゞけて

『それを裏返すと、さうまで相手の方をうたがつていゝものか？――話はそこへ落ちると思ひます。』

『…………』

『なぜ、もつと、いたはる。――相手の方を、まア、信じ切る。――さういつた折合をおつけになれないでせう？』

『さア、そこでございます。』

急に五秋さんはいひました。

『こんなことを申上げていゝかと存じますが……』

『いえ……』
『ありやうは、わたくし。——わたくしにその折合がつかなくなつたのでございます。』
『…………』
『梢華さんに、わたくし、御同情いたします。』
『…………』
『年甲斐もなくおはづかしいわけですが。——わたくしのは同胞仲でございます。』
『…………』
『わたくしに弟が一人ございます。——やくざで何年にも家へよりつきませんでしたのが、三月ほどまへ、どう思つたかふらりとかへつてまゐりました。』
『…………』
『どうせろくなことぢやアあるまい。——よければかへつて來るはずがない。——さう思つてをりますと、案の定、來て十日とたゝないうちに煩ひつきました。——どつと床につきました。』
『それは、また……』
『いえ、長い間亂暴に體をつかつたむくひで仕方ないんでございます。——まア、しかし、お醫者の丹精で、だん／＼快いほうに向きました。——この分ならもち直すかも知れないといふところまで漕ぎつけました。』
『…………』
『と、ある日、わたくしの留守でございましたが、何かの用掛をどこからかとりにまゐつたんださうでございます。——生憎、家内のところに細かい金がなかつたもので、岩さん、すまないけれど、五十錢あつたら貸してくれないか。——

と、まア、何の氣なしにいふと、病人、五十錢はおいて、嫂さん、十錢もわたしは持つてゐない。——狼狽てた風でさういつたさうでございます。』

『…………』

『とんだことをいつた。——うつかりしたことをいつて病人によけいな肩身の狭い思ひをさせた。——さう思つて、なアにいゝんですよ、此方のをくづせばあるんだから。——まじくなつてそれはすみました。——莫迦な奴で、家内は、どうしてあんなことをいつたらう、さうでなくつても神經の強くなつてゐるところへ、あんなことをいつて、もしや體に障りはしないか。——すつかりもう氣に病んでしまひました。』

『…………』

『と、また、二三日たつて、今度は病人のはうから、嫂さんお願ひがあるんだが聞いてもらへるだらうか。——やつぱり、そのときも、わたくしは宅にをりませんでした。——どんなことか知らないが遠慮なくいつたはうがいゝ。——家内がさう申すと、嫂さんにも、今度は大へん世話になつたけれど、自分ではもう助らないものと思つてゐる。——死んで行くのに無駄なこつたとは思ふけれど、ないと何としても心細い、すまないけれど一圓でも二圓でもいゝから貸してくれないか。——同じことならそれを持つて死にたい。——さう申すんださうでございます。』

『…………』

『そんな氣の弱いことをいふものがあるもんぢアない。——だん／＼快くなつて來てゐるのにそんなことをいふつてことはない。——だけど、小遣ひがなくつて不自由だといふなら、あなたの分としてこゝへ少しだけれど置いておく。——病人に逆つてもと、家内が、なにがしか出して病人にわたしました。——有難い、これで安心が出來る。——病人、涙

を溢してよろこんださうでございます。』

『…………』

『快いとみえても、實はやつぱり快くなかつたものとみえまして、それから一週間ほどでとう〳〵亡りました。』

『お亡りになつた？』

『へえ。』

『それは飛んだ……』

『いえ、まア、それは……』

五秋さんは遮ぎるやうに

『聞いていたゞきたいのはこれからでございます。』

『…………』

『亡つてから床を片附けました。――と、床の下から、札だの銀貨だの取交ぜ、三百圓あまり入つた胴卷が出てまゐりました。』

『…………』

ふと、わたしは、打たれたやうに感じました。

『同胞で。――血肉を分けた同胞でそれでございます。』

五秋さんは暗然としていひました。

『それ以來、わたくし、人のこゝろといふものが分つたと申しますか、分らなくなつたと申しますか……？』

わたしのまへには仲見世のいそがしい人通りがありました。――しらん〳〵とゆめのやうに……（十四年九月）

最新刊

東京女子高等師範學校講師 松平友子女史著

家事經濟學
家庭生活の經濟學的研究

◎上巻出來◎
四六判六百七十頁
クロース製美装函入
定價金四圓
書留送料金廿二錢
（下巻近刊）

本邦に於ける

家事經濟學嚆矢の書也

女子教育の任に有る者は勿論家庭の經濟生活を掌る婦人の必讀書である。又新時代の女學生が主要科目として研究せねばならぬ指導書である。

我々の經濟生活を合理的ならしむることは小にしては一家の爲め、大にしては我國全體の爲め極めて大切であるとは云ふまでもない。本書は消費經濟を掌つて居る婦人として家庭の經濟的幸福を増進せんが爲めには是非とも知つて置かねばならぬ經濟上の知識を女學生たりとも通讀すれば能く會得することの出來る程に通俗的に表明されたものである、最新の學說を基礎として始終理論と實際問題との接觸を保ち眞に活ける家庭生活の解釋を與ふると共に又良き指導書たらんと試みたるものである。

目次概要

發行所 東京市本郷區眞砂町十五 文書堂 振替 東京六二二〇二番 名古屋一〇五〇四番

央公論大賣捌所

[illegible]	[illegible]
同　神田區通神保町	上田屋
同　京橋區銀座三丁目	東海堂
同　京橋區元數寄屋町	北隆館
同　本郷區春木町	盛春堂
大阪市北區梅田町	盛文館
同　北區東梅田町	立盛社
京都市七條停車場前	共盛社
同　新町通七條南入	大盛社
名古屋市富澤町	中京堂
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

◎定價　金八拾錢郵稅金貳錢五厘（海外郵稅貳拾八錢）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金四圓八拾錢	金六圓四拾八錢
十二冊	金九圓六拾錢	金拾貳圓九拾六錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號增刊號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、卽ち一ケ年通計十七册分の割合なれは一ケ年分御注文の方は內國は金拾壹圓六拾錢外國は金拾八圓參拾六錢の割となれども頁數の都合にて變更することあるべし。

廣告取次所

博報堂　萬年社　告天社
正路喜社　豐國通信社　日本廣告社
信賴社　金蘭社　一星社

一誌代郵稅　は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし

一振替貯金　口座番號は東京三四番　長野三二〇五番なり

一郵券代用　は謝絕す　但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるるを拒まず

一代金引替　小包の取扱は一切謝絕す

一集金郵便　御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし但集金郵便の申込を受くるも現金受領書にあらざれは雜誌發送せず

一金二圓以上五圓迄　金七錢
一金拾圓迄　金八錢
（集金委托料及送料共）

一中央公論及婦人公論　代金取纏め御拂込みの場合には各誌割當にて金額御指定を乞ふ

一受領證請求　は必す返信料を要す

大正十四年五月廿三日印刷納本　（禁轉載）
大正十四年六月一日發行

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木鳥三

發行所　東京市丸ノ內ビルヂング七階七百七十六區　中央公論社
電話　長丸ノ內三〇二一（當分不通）　牛込五〇八九
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍

CHUO KORON (*The Central Review*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.



東京小石川研精社印刷